

# 鹿兒島県史料

名越時敏史料五



## 解題

一

今年度は、昨年度に続き、名越篤烈の「続常不止集」二之卷から三之卷之内八迄を『名越時敏史料五』として刊行する。ただし、「二之卷」は欠巻であり、現在のところ所在不明である。

今年刊行する「続常不止集」の巻は、名越篤烈が書写したものの類聚であり、それまでに書写した史料を項目毎に整理したものである。「二之巻歌之部」には弘化三年丙午九月中、「三之巻之内八」には弘化四年丁未七月とあることから類聚した時期が判明する。篤烈はこの時二七歳から二八歳であり、物頭役を勤めていた。

類聚の項目は、二之巻が和歌論と和歌、三之巻は「諸仰渡」である（項目は目次参照）。

この期の「諸仰渡」は、『鹿兒島県史料 旧記雑録追録』・『鹿兒島県史料 薩摩藩法令史料集』・『鹿兒島県史料 島津齊宣公史料』・『鹿兒島県史料 斉彬公史料』・『要用集』・『薩藩政要録』などにも収録され、本史料集とも重複する法令もあるが、他史料集に収録されていない法令も多くある。

この類聚が編まれる弘化三―四年は、琉球および薩摩近海への度重なる外国船の来航、すなわち外圧に備え薩摩藩が防備体勢を固めている時期である。薩摩藩は外圧に対応し異国方手当を変更した。そのため軍役方を新設し、家格に応じた軍役負担を可能にすべく軍役高改正（給知高改正）を実施している。同時進行しているこの件についても「三之巻子」に採録しているが、弘化三年、島津齊彬の国元への帰国以降の薩摩領内での具体的行動を記し、また、諸士の分地などについても他史料集では採録されていないものを採録しており、名越の関心の深さが窺える。

さらに注目したいのは、薩摩藩の御家老座を初めとする諸座および組役所に本来あった行政史料を、名越が、単に知

的興味からではなく、自分が行政実務に当たったときの参考にしようとする目的から収集していることである。薩摩藩の行政史料が残存していない現在、名越が書写したこれらの史料は貴重である。ただ、類聚ではあるが編年されていないため利用し難いことは残念である。しかし、選択した史料により、名越がどのような史料を重視し、どのような事柄に興味を持っていたかも窺うことができるのであり、名越の人物研究にも役立つであろう。

ここでは、縁組願い出手続きと風俗改めの項目を取り上げることにより本史料集の持つ重要性を指摘し、さらに興味ある話題を紹介することにより解題に代える。

なお、校正に当たっては原本を重視したことは昨年と同様である。

## 二

最初に「三之巻之内二」にある「縁組并違変之事」を取り上げる。

採録されている史料は別表1に示した。同内容を取り扱っている『鹿児島県史料 薩摩藩法令史料集三』を右に併記した。○印は同文であることを示し、番号は史料番号である。

この史料は、縁組にあたって、願書を提出する場合の手続き規定である。この基本は1にあるが、年次を欠いている。「縁組并違変之事」の採録された史料は、明示された年次で見ると、限り正徳五年から延享五年までのものである。この間には閏八月はないので、閏八月のある直近の年次を探すと、宝永七年である。したがって、1の史料を宝永七年と推定することが可能ならば、基本的な縁組願い出の手続きが固まった時期は宝永→正徳期、すなわち薩摩藩が幕藩体制下の藩としての体裁を整えることに熱心であった吉貴期である。以後は実務的取扱についての法令が散発的に出されている。

ここでは注目すべき事項の一つについて述べる。それは離別についてである。

3では、幼稚の者の婚姻契約は無用であると記した後で、「且又頃日女房致離別候者多々有之候、不宜候間、向後左様

無之様右之心得を以寄々申通可然候」と、離別の多さを指摘し、それを戒めている。

また、享保九年十二月令には次のようにある。

一 諸人妻を致離別候儀、軽々敷無之様ニと先年被仰渡、不縁ニ付離別不仕候而不叶時節ハ双方親類中申談、縁中難  
遂訳を互ニ申談、其上ニ而離別申出筈ニ被仰渡置候、然処頃日離別願申出候者多く有之不宜候、自今離別之願申  
出候ハ、委ク可遂吟味候条、軽々敷不申出様ニ可相心得候、此旨可致通達候、(15)

離別を防ぐために、離別理由などの吟味を委しくし、軽々しく願ひ出ないよう通達している。さらに、安永二年十二月には次のようにある。

一 諸人縁与ノ儀ハ親兄弟ハ勿論親類中熟談ノ上、婚儀相整事候へハ可成程離縁不致筈候、然トモ無扨訳合ニ依テハ  
左モ可有之儀候へトモ、間ニハ若キ者取違、物数寄ノ様相聞へ、不埒ノ至候旨 御沙汰ノ趣有之候、離縁ノ儀ニ  
付テハ先年モ被仰渡置候付、此已後尚又左様成儀無之様人々相心得、縁中相遂候様専親類トモ申談置、兼テ教諭  
可相加候、此旨不洩様通達可致候、(14)

若者の中には縁組を軽々しく考え、簡単に離別する者もいたのであり、これも離別が多い理由ともなっていた。  
では、離別はどのような状況で起こっているのだろうか。「三之卷之内八」養子の項に離別の一面を窺わせる法令がある。

正徳三年七月、御免により縁組をした者が離縁する場合は、双方の親類が相談し、双方より願書を提出するとした後に、次のようにある。

右、養子又者縁与之儀者、傍輩之子を内約相究置、願之通ニ屹被仰付縁を結罷在事候処、御当地之儀諸国之格式相  
替、養子違変又者女房離別之願申出候者多々有之候、屹奉願為被仰付置事候処、軽々敷其恐をも不存、又者互ニ不  
義之至ニ相聞得旁以風俗不宜候、

他国とは違い女房離別の者が多いとし、その理由を互いの不義にあり、風俗が宜しくないとしている。さらに、同年八月十八日付、九月廿一日通達には次のようにある。

一 養父并養子よりハ可及違変子細茂無之候得共、智養子之妻氣任之仕形有之、何様ニ異見を加候而茂不致承引、夫故夫婦之縁難遂、養子違変之筋罷成候者も可有之候、乍其上氣任之申分差通候ハ、縦血筋断絶候共右女隠居致させ、養子之儀者致相続候様ニ可有之候、

智養子の妻の氣任が離別の危機をもたらしているものであり、法令の事例として取り上げなければならない程、このようなことが生じていたと考えられる。薩摩の女性の一面を窺わせるものである。

### 三

容貌・言語・風俗の改めの法令は、島津重豪期以降頻発される。別表2は「三之卷之内四」にある関係する法令の一覧であり、右にその他の史料集にある関係分を併記した。

重豪登場前でも、「常々之行跡衣服・刀・脇差等持之儀、已前より段々被仰渡趣有之、不目立様ニと被仰付事ニ候」(享保二年正月十二日、三之卷之内七)や「夜行・辻歌之儀ハ兼而御禁止被仰渡置事候条、弥以可相守候、且又頃日人家来其外末々之者共茂致夜行候由相聞得候、猥致徘徊間敷候」(延享二年十二月朔日、同)とあり、また、薩摩藩では身分格式に対する差別意識が薄く、上位者への籠礼が問題となっていた。

重豪が、組士および若者(二才)の言語・容貌・行跡などの改めを行ったことは他の史料集による研究でも周知するところであるが、一覽に見るように濃密な頻度で出される「仰渡」・「達」を見ると、いかにこれに力を入れていたかが分かるとともに、それまで定着していた「国風」を九州一統または全国に通用する行儀などに替えることがいかに困難であったかが知られるのである。一覽以降でも、「比日郷士・与力又者足輕共之内、間二者尊卑之弁薄、籠礼ニ而罷通候

者茂有之由、甚不都合至候」(弘化二年三月廿日、三之卷子)や「年若之面々学文武芸一涯致出精、徒徘徊等不致風俗正敷もの者夫々品能可被召仕(略)且無益之参会不致様之儀者兼々 仰出之趣茂有之」(弘化三年二月七日、同)とあることに、改めの「仰出」などは繰り返されていた。

ここでは、他史料集では知られない事柄について紹介する。

(1) 風俗悪化の原因 2には、組頭を召し出し、風俗について次のように直に仰せ出された、とある。

御領国中士農工商各其品々ニより風俗之趣意者相替事候得共、惣而手前之職分を不相守、内利方ニのミさとく、外(栄耀力)覚耀を第一ニいたし候者多候、近年之風俗おのつから不宜方ニ成行体候、此儀甚如何敷被 思召上御事候間、御

領国中諸外城末々婦人女子之たくひ迄も、頭人・主人より 御賢慮之趣を相含、得と奉承知候様可申渡候、畢竟身之分限を忘、栄耀を專ニいたし候処より人々困窮ニも及び、万端ニ付悪事も致到来候条、此儀を忘却不仕、誠厚思召難有奉承知、此已後屹と其誼相立候様心掛、女共又者事之心を不弁体之者へ者親兄弟・夫・親類より委令教訓候様可申渡候、

風俗の悪化の土台には、内には利方のみ走る意識、外には栄耀を第一とすることがあるとし、外城末々婦人女子に至るまで風俗改めを徹底することを命じた。まさに武士のみならず、領内一丸となる意識改革が意図されていたのである。

(2) 言語・容貌の改め 言語・容貌の改めについては度々達せられているが、安永二年六月付で次のように達せられた。

一御城下武士・町方男女共ニ容貌・言語之儀ニ付而者段々 御沙汰之趣毎度被 仰渡事候得共、御城下武士・町共ニ未相直者も有之、就中女并諸外城之儀ハ猶以不相直由候間、急度相改候様稠敷可申渡候、(78)

解題 容貌・言語の改めは、武士のみならず町方も同列に求められていたが、女や外城ではそれが進まなかった。これに統

き、女の髪型について、「御城下武士・町方之女者勿論、諸外城迄も髪之風上方又ハ他国杯之風ニ相改、百姓之女者他国百姓之風俗ニ結び候様可致候、男之儀も未髪方不相直筋相見得候間、猶又改候様可致候」と、武士身分の女は勿論、町在の女も上方・他国同様の髪型に変えるよう命じており、全領に渡り他領並みにすることが求められた。

これについては、さらに25に次のようにある。

一言語・容貌之儀付而者先年已来度々 仰出之趣有之、其涯者言語相直候者も有之候処、到頃日一向御国言葉相用候方成立如何二候、畢竟御国之風俗江戸向ハ勿論、他所へ相懸候而茂通弁等宜様二との厚 思召を以毎度被仰出御事候処、其勤弁も無之、当分之振合ニ而ハ 仰出之旨を籠略ニ奉存候様有之、旁以不埒相聞得候、此上万一茂被及 御沙汰候而者迷惑可相成候条、以来不限男女急度言語相改候様心懸、末々之者迄茂忘却不仕様支配頭、主人より厳敷可申付候、容貌之儀も猶又相嗜、若面々異様之鬢形等一切不致様、親又ハ身近キ者共よりも異々可申聞候(略)第一於御役所向言語相直候廉屹相見得可心掛候、左候得者自然と御領國中江相流、一統相直候積ニ候、右ニ付而者夫々見聞申付置事候条、不相用者も候ハ、不依誰人可及沙汰候、

容貌は「仰出」などが出された直後は改まる様子も見えるが、年月がたつと元に戻ることの繰り返しであったことは別表2に見るとおりである。また、言語を国言葉から他領へも通用するように改めることはさらに難しかったことも見てとれる。

右の史料でも、言語も「仰出」の直後は直ったように見える者もいるが、時が経てば元の木阿弥であったとしている。したがって言葉改めは、男女に限らず末々の者まで全領での国言葉排斥を行い、言葉を改めることが意図されていた。また、役所で言葉が改まれば必ずから下も改まり、全領で言葉が改まると、役所勤めの武士の率先垂範を求めた。そのため役所内でも、通常の付き合いの中でも、国言葉使用の場合はい互いに遠慮なく注意し合うことを命じているのである。さらに国言葉からの改めを効果的に実現するため、外からの締め付けとして、見聞役・目付などによる取締もおこなっ

た。

(3) 風儀の乱れ・情弱 島津重豪が安永二年繁栄方を新設して「都化」政策を進め、薩摩藩士の無骨な行儀作法・言葉遣いを改めさせることにより、全国に通用する武士となすとの意図で始まった政策も、意図とは反して弊害をもたらしたことについては、風儀の乱れ、武士の情弱化として先行研究でも明らかにされている。『伯爵山本権兵衛伝』の「酒池肉林」の状態に陥った、との記述は極端ではあるが、男女関係が乱れ、それが年若の者にまで広がってきたことは事実である。そのことを示す史料として42を次に示す。

一頃日年若男不謂不埒之仕形有之候、右体之儀者不凶之事二而も無之、前以見聞之振合も可有之候得共、身近親類者、専親類共其心得可致事候、御国之儀者古国之事候得者風俗茂格別可有之処、別而如何被 思召上候段、此節御沙汰之趣も有之候間、向後親兄弟・親類共大形之儀無之様随分諸事可心掛候、

年若の男の不埒を放置し、見逃しているのを戒め、親兄弟・親類の指導を求めている。この不埒については、42を受けて出された40に、「年若キ男女不謂不埒之仕形有之」とあり、男女の不埒＝風儀の乱れであることが分かる。安永五年十月令に基づき、身近之親類共が日頃気をつけ猥りがましきことがないよう家内取締を行うべきところ、放置したため「放埒増長いたし難差置次第成立、其身者勿論、親共迄も到而迷惑筋相成」というのである。そのため「向後情弱之仕形等一切無之様人々相慎、家内取締方專可心掛候、以来右体之聞得も候ハ、親兄弟とも迄も屹と御咎目可被仰付候」と、家内取締と守らない者の処罰を申し渡した。

しかし、この申渡では男女の不埒は余り減らなかつた。これをさらに徹底するため、同年四月、41が次のように仰せ出された。

一頃日男女情弱之体多々相聞得、甚以如何被 思召上候、身分之軽重二よらす武家之儀ハ猶以平日手堅ク取締、

万事二心を配り候ハ、おのつから不意之儀無之筈候所、畢竟夫々大形二相心得、男女之分隔薄所より露顕之上当惑ニおよひ身上之破却ニも相成候、惣体御国中士之風儀正しからず候付、先年以来度々被仰渡趣も有之候処、前件之間得御政道ニも相掛、他所之批判到而御氣毒被思召上候、依之右式之儀者素り、不宜風聞於有之者無用捨相札可申出候、左候ハ、御吟味之上家内者勿論、親類たりとも依分者御咎目可被仰付候条、不致忘却、已来屹と相守候様稠敷可申渡置旨被仰出候、

「男女懦弱之体多々相聞得」とあるように、男女間の乱れは減っていない。このようなことは急に始まるのではなく、前以て注意しておれば防げるにもかかわらず、放置していたため、男女の分け隔たりが薄いところから事が露顕し窮地に陥ると指摘し、以降厳しく糺し、咎を申しつけると、厳罰主義で臨むことを達している。

(4) 若者指導 別表2に見るように、若者の夜行・辻立・徘徊・無益の参会など禁止令は繰り返し出されているが、一向に改められなかった。

若者の指導は組頭・小組頭の責任であるが、直接の指導は小組頭が重要な役割を果たすことになっている。小組頭と共同して若者指導に当たったのが教訓人である。教訓人については今まで知られてはいるが、詳細については明らかではなかった。

教訓人は小組中の者から人柄により人選され、組中の若者を彼是教える役割である。それは、「教訓方二付申談等茂相濟、式夜相立講習等相催、序ニ何歟申教等も致筈候条、右都而之仕向并経書講習いたし候郷中者、講釈人名元をも可申出旨、向々教訓人へ被申渡候様与頭江可申渡候」(52)とあるように、教訓のみではなく経書講習等も行つた小組もあった。安永七年三月の申渡にも次のようにある。

一 風俗等相直候様度々 仰渡之趣有之、与中年若之者共為可致得心教訓人申付、不合点之者ハ幾度も申教等いたし候様との趣申渡、夫々郷中分を以教訓人被申付置、其涯者都而折々出会申教等も為致候得共、頃日其儀茂相止候

趣二相聞得候、畢竟年若之者事之弁薄、適難有 思召之程通兼候儀茂有之候故を以前件申渡も為有之事候処、到当分緩せ之趣二而者甚不可然候、此節取締方分而 仰渡之趣有之候二付而者、風俗等猶以宜成立万端行届候様無之候而者旁以如何之至候条、已来者其涯之様教訓人受持之於郷中式夜等相立、年若之者共相集仰出等之旨趣取違無之様心得為仕、其外何篇存付之儀ハ無遠慮申候儀共諸事無手拔様可被致吟味候、右二付何そ集会之当二相成候儀無之候而者、若輩者共二者却而及退屈儀も可有之候間、軍書又ハ耳近キ經書之講習等相催、其席何歟と申聞候ハ、教訓之意味も能相達候様可成立哉、教訓人共へも被逐吟味、何分申談之趣可被申出候、(61)

すなわち、教訓人は若者を納得させ、合点のいかない者には幾度も教え諭す役であるが、それも一時中断する事態になった。しかし取締を徹底するため、教訓人は受持の郷中で式夜を立て、教訓すると共に、軍書・經書の講習を行うことにより、教訓の意味もよく理解できるとして、その方策の吟味を教訓人が行うよう組頭へ命じた。

また、「何方組又者咄中間杯と名付、方限を立相交候儀も風儀別而不宜候、左様成所より外方限之者者朋輩之様二も不存、途中二而不凶行逢候砌、直二無礼法外之儀も致到来、不謂意趣を含、終二者及口論喧嘩之張本二も成立事之由候条、右体之儀急度相止候様小与頭并教訓人共よりも専可申聞事候間、随分気を付居、乍其上風儀不相直候ハ、吟味之上分而申渡次第可有之候間、其訳可申出候」(46)と、方限を立て仲間を組むことは風儀の悪くなる基であるとして小組頭・教訓人より指導させた。若者の参会を含め集団をなすことは藩の忌避するところであった。すなわち、郷中教育は藩の方針に反するものであったのである。

天明二年七月(85)には、「若面々仰渡之旨を相守、頃日静謐」となったが、それは「小与頭中・教訓人共二も折角教訓方出精之趣相聞得心掛宜候」と、小組頭・教訓人の出精があったからであるとしている。しかし、このような賞賛も一時的なものであった。以後も若者の夜行・辻立などの不行跡は止まらなかったことは、それ以降もこれらを禁ずる達しなどを見るとき明らかである。

(1)「士成商人」禁止令 『鹿兒島県史料 齊彬公史料第二卷』(『齊彬公史料』と略記)五〇四の「士商ノ名分ヲ正サレシ事実」には、島津齊彬が「名分不正ハ政務第一之大害」であるとして、安政四年九月、それまで行われていた献金などによる商人身分から武士身分への引き上げ(士成商人)を禁止名分を正した、としており、「士成商人」禁止は齊彬の時に初めて行われたと理解されてきた。しかし、「三之巻子」弘化二年十月八日付豊後(島津久宝)の通達には次のようにある。

一 御時節柄を汲受金子差上、又々以前御貸上等之金子等差上切いたし、奇特成心入付、是迄家格并身分昇進等御取  
 扱被仰付候儀も有之候得共、以来無取差上金等申出候而茂願不取揚、尤、差上金等之御取取二而者家格・身分昇  
 進等屹と被仰付間敷候旨被仰出候条、此旨向々へ不洩様可致通達候、

『齊彬公史料』にあるような禁止についての儒学的理由は記されないが、明確に「士成商人」の否定であり、斉興藩主の時にこの方針が採られていたのである。『齊彬公史料』史料の編者である市来四郎は、天明の末から天保の末頃までは藩財政が疲弊し、そのため献金による武士身分への昇進が行われていた、としている。この記述を素直に読めば、天保末以降は藩財政の好転により身分の引き上げはなくなったとも読み取れるのであるが、右史料は弘化二年からこれを行わないとの藩方針を明確にしたものである。とするならば、安政四年令はどのような意味を持つのか再考する必要がある。(2)放尿禁止令 現在、城についてのイメージは、天守閣を中心にした無機質の建物群である。しかし、当時、言うまでもなく、藩王家族の生活の場であり、藩庁として大勢の人々が勤務する場であったのである。そこに勤める者の中には不心得者も当然いたのである。「三之巻之内五」には、明和七年四月二日「大御目付衆被仰候」として次のようにある。

一 御城内又者供屋之内杯、小用所ニ而無之場所江致小用候者も有之由候、猥ニ小用不致様可相心得候、

禁止令が出されることから推測すれば、この行為を無視することができない状況があったのである。城と放尿、実に

人間くさい場所であったのである。

(3) 変死者の跡職願い手続き 「三之卷之内八」に宝暦四年七月付で次のようにある。

一 三番与永吉惣兵衛遺言書相調置致変死、跡職之願申出候節、遺言書ニ親類共致次書差出候付、早晚之通与頭奥書  
二 而願人江相渡、月番御用人江差出置候処ニ、将監殿より右次第願出候付而者宜有之候哉、又者変死之儀ニ候得  
共、遺言書有之候而も親類共前ニ差控置、親類ども願書物迄ニ而差出筋可然哉、此段屹致沙汰儀ニ而ハ無之候得  
共、何分致吟味可申出旨御用人相良弥一兵衛御取次口達ニ而喜入主馬致承知候、組頭中寄合申談候者向後致変死  
候者、遺言書調置候而も右ニ無構親類ども願書物迄ニ而可然と弥一兵衛へ主馬より口達ニ而申出置候、左候而、  
惣兵衛跡職願者申下ケ、遺言書差控親類共願書物迄ニ而差出候付、与頭奥書ニ而願人江相渡候、以後為見合記置  
候事、

永吉惣兵衛は、宝暦治水の第一次応急工事中の宝暦四年四月十四日割腹し、桑名海蔵寺への埋葬に際し「腰物ニ而致怪我相果候」との一札があることにより知られる人物である。

右史料では、跡職の願い出に際し、遺言書に親類の次書を付けて組頭へ差し出し、それに組頭が奥書をしてから月番御用人へ差し出したと、跡職願いの手続きを記している。しかし、遺言書が付けられていることが問題となり組頭中の協議に取扱は差し戻された。協議の結果は、跡職願いには遺言書は付けず親類の願書物に組頭の奥書をつける様式で済むことになった。

遺言書のある変死者の跡職願いが出された場合、組頭はどのような取扱をするかが定まったのであり、そのきっかけを提起した人物として永吉惣兵衛は藩史料に留められることになったのである。

(安藤 保)

- 3099 (正徳5年10月23日)
- 3100 (正徳5年10月23日)
- 3101 (正徳5年10月)
  
- 3102 (享保17年正月28日)
  - 3103 側廻の者, 外城衆中の娘との縁組無用(享保2年12月)
  - 3104 父なき家督の者の縁組直願い出許可(天明5年4月)
  - 3105 縁組願書は男方支配方へ出す(享保12年12月)
  - 3106 縁組・離別願い出規定(延享2年4月)
  - 3107 若者の離別について教諭(安永2年12月)
- 3108 (享保9年12月)
  
- 3109 足軽・中間・小者などの娘の縁組, 貴間に達するか否かによる差別規定(正徳3年11月)
- 3110 縁組願い出無用の格式の者の願い出の具体例(文化8年9月)

別表 1 縁組并違変之事(続常不止集 三之卷之内二)

---

- 1 諸家格の縁組願い出の手続(閏8月6日)
- 2 親・悴の勤先の違う場合の縁組願い提出の手続(享保2年8月26日)
- 3 幼稚の者の縁組契約は無用, 離別の多さを注意(10月12日)
- 4 月次御札の役の者の内々の縁組禁止(正徳5年10月23日)
- 5 200石以上の者の縁組願い出規定(正徳5年10月23日)
- 6 初めての御目見のない者の縁組願い出は取り上げず(正徳5年10月晦日)
- 7 200石以上の家内に居る者の縁組願い出(正徳6年2月13日)
- 8 御隠居様方勤の人の縁組願い出規定(享保9年正月)
- 9 縁組・離別の願い出資格(享保17年正月28日)
- 10
- 11
- 12
- 13
- 14
- 15 離別の多さについて教諭(享保9年12月)
- 16 縁組願立の有無は格式による(田原喜藤次妹の事例)(延享元年9月)
- 17 大身分・納殿役以上以外の役人・無役200石以上士の縁組願いは不用(延享5年2月)
- 18 延岡牢人娘の城下士・外城衆中への縁組願い出の有無は格式による(延享2年4月28日)
- 19
- 20

## その他の史料集

---

- 追録 6-817 御役人軽重の差別薄き風俗を諫める(明和8年11月)
- 追録 6-818 役の高下の分かちを守り籠札を諫める(明和8年11月)
- 追録 6-852 (明和9年正月)
- 
- 追録 6-1125 (安永2年11月)

別表2 容貌・言語・風俗(続常不止集 三之巻之内四)

- 1 仰出を受け若者の風俗(礼儀作法・風体・行跡)に付き組頭教諭(11月)
- 2 求利・栄耀を第一とする風俗に対し外城末々婦女子等までへの家老教諭(11月)
- 3
- 4
- 5 言語・容貌見苦しくなきよう家老連名口達(正月)
- 6 容貌の改まりと言語の直りに一層の努力を命ずる家老達(5月)
- 7 風俗改善の詮は見えぬ、末々男女までも遵守することを命ず(11月)
- 8 繁栄方設置以降の風俗の惰弱につき改善令、無益の参会禁止令(11月)
- 9 繁栄方・聖堂設置の趣旨を取り違えざるよう組士への仰出の趣旨徹底(12月)
- 10 若者へ申し教える教訓人には家老座・大目付座の筆者は除外(2月)
- 11 若者の口論など悪行の取締のため組頭限りの取り計らい方を命ず(4月)
- 12 小組頭・教訓人の人選と組頭宅での交流による風俗改善を指示の口達(安永9年7月)
- 13 組中取締につき組頭心得の簡条申し渡し(安永9年10月)
- 14 藩主婦城際につき言語の改めの詮が見えるよう努力を命ず(安永2年4月)
- 15 言語・行跡・髪形改めの徹底を命ず(4月)
- 16 言語の改め不徹底につき兼ねての交わりでも直すよう申し渡す(12月)
- 17 容貌の改善の兆しはあるが、言語の改めの弁えなしのため、国言葉使用者の他所勤めは禁止(安永3年10月)
- 18 国言葉使用者への奉行・頭人よりの申し聞かせと相互の注意の仕合を命ず(7月)
- 19 言語の改めの詮が見えないため、徹底の口達(安永4年7月23日)
- 20 容貌は少々改善するが言語は未だ直らず、心掛け薄き者の処罰について再令(安永4年8月)
- 21 言語について安永3年令の再令、若者の多人数の夜行・辻立などの禁止、浮説の禁止(4月)
- 22 言語の改めにつき安永3年令の確認と、改めない者の名前を御目付・御徒目付・横目よりの届出を命ず(安永5年8月)
- 23 国言葉を使用の者へは互いに遠慮なく申し聞かすことを命ず(4月)
- 24 容貌・言語・風俗改めの不徹底、および籠礼の者あり、鬢形・行跡の見分けにより組頭は役の罷免・再任を実施(安永6年7月)
- 25 言語改めにつき、男女に限らず、末々までも直すよう厳達および若者の鬢形につき厳達(安永7年10月)

○ 追録 6-643 (明和 7 年正月)

○ 追録 6-644 (明和 7 年正月)

追録 6-1279 足軽・家来・下人・町人の士への籠礼禁止, 若者の籠忽の働き(討果)を諫める仰渡(安永 4 年 7 月)

追録 6-1549 足軽, 士に対し籠礼を禁ず, 士・足軽の差別の明確化(安永 7 年 5 月)

解 題

- 26 言語改めにつき、役所内での言葉に注意、および容貌についての注意(5月)
- 27 組中の不行跡を戒め、喧嘩口論を禁じ、張本人は凡下となすことを命ず(正月)
- 28 無礼法外を働き、「仰出」などを破る者は厳科に処すことを外城・私領幼若の者へも申し渡す(明和7年正月)
- 29 喧嘩による殺害の始末、文武励みなどの法遵守、若者の行跡などにつき小組頭への組頭指示(正月)
- 30 仰渡の徹底のため、小組頭などより小組中へ委敷申し聞かし、組頭宅へは目付が詰める(明和7年正月)
- 31 諸士の町家への猥の徘徊を禁じる(安永3年2月)
- 32 若者の異様の鬢形・郷中党・夜行・辻立・無作法を禁じる(安永4年7月)
- 33 一時直っていた異体・徒の徘徊が再発のため組頭へ取締を命ず(安永4年7月)
- 34
- 35
- 36 若者の歌うたい・夜行・辻立の禁止を親兄弟・親類へ小組頭などより申し聞かせ、用いない者の名を申出る(4月)
- 37 組中の取締について見聞役へも申し聞かせているので一層の心掛けを命ず(安永7年3月)
- 38 若者の風俗は仰渡の本意を失わず指導し、聞き入れない者は処罰する(安永7年閏7月)
- 39 徒の群集破魔投げ・物詣りなどを含め若者の群集を厳禁(安永8年正月)
- 40 年若き男女関係の乱れによる懦弱なきよう家内取締方を命じ、違反者は家内共処罰(安永8年2月)
- 41 男女懦弱の者多し、聞き入れない者は家内・親類までも訳により科に処す(安永8年4月)
- 42 年若き男女関係の乱れ是正につき親兄弟・親類共の指導を命ず(安永5年10月)
- 43 無益の参会禁止令(安永4年11月)
- 44 無筋の風説流布の者は厳罰に処す(安永4年7月)
- 45 組中取締のため特に若者へ小組頭・教訓人よりの懇ろの教諭を命ず(安永8年正月)
- 46 組中風俗につき大目付口達(夜行・辻立・徘徊、方限禁止)(3月)
- 47 若者の鬢形・容貌・夜行・辻立・徘徊につき親兄弟・親類・小組頭などの指導を求める(2月)
- 48 組中異変の申出方につき、小組頭の怠慢を咎める(安永8年2月)
- 49 学文・武芸出精の者の上申令(安永7年)に基づき出精者・日頃の心掛け宜しき者の上申を命ず(安永9年6月)



解 題

- 50 組中若者の徒の徘徊・集会禁止令を親・親類共より指導することを求める(安永7年6月)
- 51 勤め向きを理由とする教訓人の忌避は取り上げず(安永7年5月)
- 52 教訓人の人選につき組頭へ申し渡し(安永7年6月)
- 53 組中若者共漸々静謐の状況につき、相談役・小組頭・教訓人の出精を褒める(安永7年閏7月)
- 54 組中静謐の件は貴聞に達しているので、静謐の継続のため取締の厳格を求める(安永7年閏7月)
- 55 組中締方につき小組頭などの行うべき事項(3月4日)
- 56 言語改めは不徹底につき、家老中までも改めるよう通達(安永2年12月7日)
- 57 組中取締の偏重により懦弱に陥らないよう注意を喚起、および聖堂・稽古場設置の趣旨を重んずべし(正月)
- 58 組中風俗が改まらないのは仰渡の趣旨を熟知しないためであるとして組頭・小組頭を諫める(安永7年正月24日)
- 59 小組頭をもって組中の聞合をする場合も穏便にするよう組頭へ指示(安永7年4月)
- 60 徘徊禁止、および聞合についての組頭への指示(安永7年3月)
- 61 教訓人による指導中断の状況につき組頭へ達し(安永7年3月)
- 62 厳重に守られる仰渡も時間が過ぎれば弛緩するので、その対策を指示(安永7年2月)
- 63 仰渡の下へ貫徹させるための対策および言語改めのため平日の交わりでも国言葉を互いに注意し合う(安永2年正月)
- 64 組中の若者の容貌が改まらないため、組頭の見分を徹底し、守らない者は処罰(安永2年9月)
- 65 風俗立ち直りのため家老・用人・近習役の者の率先垂範を求める(安永5年8月)
- 66 言語・容貌改め、若者の夜行・辻立・徘徊につき小組頭などの取締出精を求める(安永6年7月)
- 67 組中若者、異様の為体・辻立・徘徊等による多人数集會を小組頭・教訓人により指導させる(安永8年5月)
- 68 無筋の風説流布を禁じ、守らない者の処罰を命ず(安永5年8月)
- 69 無益の参會に類する事柄を禁止(安永7年正月)
- 70 無筋の風説流布禁止弛みにつき再令(安永8年4月)
- 71 年若の者多人数の夜行・辻立・辻歌、髪型・行跡など異様の者へ取締につき申渡(安永9年6月)

○ 追録 6-1256 (安永 4 年 4 月 13 日)

○ 追録 6-1076 (安永 2 年 7 月)

○ 追録 6-2032 (同文ではないが同内容, 文意は取りやすい) (天明 4 年正月 8 日)

追録 7-981 仲間の夜会による会談・武術稽古の停止令 (文化 6 年正月)

追録 7-1132 夜行・辻立・夜会など停止令 (文化 8 年 3 月)

追録 7-1133 風俗についての仰出の遵守 (文化 8 年 4 月)

追録 7-1134 風俗仰出の遵守, 風俗を立ち直すよう若者へ父兄より教育 (文化 8 年 5 月)

島津齊宣・斉興公史料 250 諸士の容貌・言語・風俗等につき重豪公諭達の件 (文化 12 年 3 月)

解 題

- 72 若者の夜行・辻立・多人数による物詣り・船遊びなど禁止を教諭するよう親兄弟・親類へ  
小組頭等より指導(天明2年2月)
- 73 足軽の風儀につき、士に紛らわしき振合を禁止(安永8年6月)
- 74 女子の髪型につき通達(安永4年4月)
- 75 士・足軽・町家の服装(羽織)規定(安永2年6月)
- 76 士・足軽・町家の服装(羽織)規定(安永3年4月28日)
- 77 落書につき申渡(安永2年7月)
- 78 城下士・町方男女の容貌・言語改まらず、特に女・外城では著しい(安永2年6月)
- 79 疱瘡踊りの禁止および同心以下寺門前者の士に対する籠礼につき厳達(天明2年2月)
- 80 言語・容貌改めるべき仰出(天明3年10月)
- 81 役々高下尊卑の差別の明確化および若者の夜行・辻立・徘徊・喧嘩口論につき仰渡(天明  
3年11月5日)
- 82 仰渡徹底のため小組頭中熟談して叮嚀に組中若者共へ教諭すべし(安永7年6月)
- 83 組中への仰出につき組頭の不行届を諫め、組中の取締の厳を求める(安永6年7月)
- 84 組中若者の静謐を賞し、教訓人の申聞かせを守り維持するよう申し渡す(天明2年7月)
- 85 組中若者共静謐に付き、小組頭・教訓人の精勤を賞す(天明2年7月)
- 86 若者の喧嘩・夜行・辻立の再発、および容貌・言語についての申渡(天明4年正月)
- 87 風俗・言語の改めにつき毎月の首尾を掛の御小納戸・御供目付への報告を命ず(9月)
- 88 国言葉一覧
- 89 薩摩の言葉癖、申ス申サスの訂正申渡し(天明6年2月)
- 90 容貌・言語改めに詮の見えるようにとの申渡(3月)
- 91 心易き者同士でも上下の差を付け礼儀を守るべし(天明5年6月)
- 92
- 93
- 94
- 95
- 96



## 例言

一本書は、東京大学史料編纂所所蔵「続常不止集」(弘化三年九月〜弘化四年七月)を底本とし、『鹿児島県史料名越時敏史料五』として刊行するものである。

一本書の目次は、「続常不止集」目録をもとに、作成した。

一本文書の掲載順は、原則として底本に従った。

一収載した文章を他の文書や写本などによって補充または校合する場合は、次のようにした。

ア 校合史料からの補充箇所は▽△で示した。

但し、原本史料「続常不止集」で補正した場合は、特に表記しなかった。

なお、本文中に挿入される図版については、原本史料「続常不止集」の方を優先した。

イ 補充や校合に使用した典拠史料の名称は以下の通りである。

(原本史料) 旧記雑録(旧記雑録・続編島津氏世録正統系図)ともに東京大学史料編纂所所蔵)

「続常不止集」(東京大学史料編纂所所蔵)

「元服御目見等之事 全」(鹿児島大学附属図書館所蔵)

「要文集」(東京大学史料編纂所所蔵)

(刊本史料) 旧記雑録前編(『鹿児島県史料 旧記雑録前編』一〜二)

旧記雑録後編(『鹿児島県史料 旧記雑録後編』一〜六)

旧記雑録追録(『鹿児島県史料 旧記雑録追録』一〜八)

「古今和歌集」(『新日本古典文学大系5』)

「古今和歌集」(『新編日本古典文学全集11』)

「亜槐集」(『群書類従 第十四輯』)

三国名勝図会 (『三国名勝図会 第一卷』)

島津家歴代制度 (『鹿兒島県史料 薩摩藩法令史料集』一～五)

薩藩例規雜集 (『鹿兒島県史料 薩摩藩法令史料集』六)

島津齊宣齊興公史料 (『鹿兒島県史料 島津齊宣齊興公史料』)

「伊地知季安日記秘要 一」(『鹿兒島県史料 伊地知季安著作史料集』八)

御触書寛保集成 (『御触書寛保集成』)

御触書宝暦集成 (『御触書宝暦集成』)

御触書天明集成 (『御触書天明集成』)

一 刊行にあたって本文の体裁をおおよそ次のように統一した。

ア 字体は、一部を除き原則として常用漢字を用いた。

イ 「続常不止集」中の謄写部分については、適切な位置で字配り・行替えを行い、体裁を整えた。

平出・擡頭・闕字・割書および但書などは、原本史料「続常不止集」・底本の体裁に従い、闕字は一字分あけとした。

本書の差出年月日・差出所・宛所の位置などは、適宜改行・字配りを行い、体裁を整えた。

ウ 仮名は、原本史料「続常不止集」・底本の体裁に従った。変体仮名は仮名に改めたが、江・而・之・者・茂はそのまま用いた。

- エ 文書・記事などの本文中には、適宜に読点「、」や並列点「・」を付した。
- オ 原注は、原本史料「続常不止集」・底本の体裁に従って示したが、新たに付した注記は、（ ）で囲み原注と区別し、文意の通じない箇所や文字は、（ママ）・（〇〇カ）などとした。
- カ ルビは、原本史料「続常不止集」もしくは校合史料にあるもののみを付した。
- キ 朱書は、（朱書）と注を付して朱書部分を「」で囲んだ。
- ク 文字の不明や欠失は、その箇所を□で囲んだ。
- ケ 「名越時敏史料五」では、底本で使用された用字の表記を次のように統一した。  
嶋津↓島津
- コ 方言と思われるものは、原本忠実とした。



# 鹿兒島県史料 名越時敏史料五 目次

## 続常不止集二之巻

古今集序文香細のたちはなさける御書法之写……………一

斉彬公御詠……………五

飛鳥井家集拔書……………五

倭論語拔書……………一二

日野資枝卿御詠……………一三

龍伯公御詠……………五八

小森一山上京之節覚書……………五八

## 続常不止集三之巻子

弘化元年仰出……………六五

## 続常不止集三之巻之内一

縁組并違変之事……………一三

養ひ子二付被仰渡候事……………一七

御暇願之事并家中致奉公候類之事……………一八

高持成并高上り高屋敷分地之事……………一三六

何そ二付御断申出候儀二付被仰渡候事……………一四七

寺入人并御咎等之事……………一四九

## 続常不止集三之巻之内三

諸唱并文字被相替候事……………一六二

島渡海并田舎行夫仕等之儀且又町中宿者勤方之儀二付

被仰渡候事……………一九一

## 続常不止集三之巻之内四

容貌言語風俗并組中取締之儀二付被仰渡候事……………一九三

## 続常不止集三之巻之内五

弓鉄炮賭勝負之事……………二二三

諸法度之事……………二三六

公儀仰渡之事……………二四八

御用迦之品申請被仰付候儀并売買方賃錢定之事……………二五五

## 続常不止集三之巻之内六

進上物之事……………二六七

上使御巡見并御目付様御越之事……………二七八

流鏑馬射手并頭殿之儀二付被仰渡候事……………二八三

犬之儀二付被仰渡候事……………二八七

次

目

越前家和泉家相統二付被仰渡候事 ..... 二八八

支度并供廻り之事 ..... 二九二

名替願二付被仰渡候事 ..... 三一七

**統常不止集三之卷之内七**

諸法度之事 ..... 三二〇

**統常不止集三之卷之内八**

元服并御目見等之事 ..... 三七八

隱居家督繼目養子并嫡子成之事 ..... 三九〇

跡職并別立等之事 ..... 四一一

（表紙）



続常不止集二之巻

倭文并  
歌の部

続常不止集 二之巻目録

一古今集序文香細のたちはなさける御書法之写

一斉彬公御詠

△ 飛鳥井家集拔書 飛鳥井權大納言雅親卿家集也

一倭論語拔書

一日野資枝卿御詠

右者大野清右衛門殿より借用ニ而写

一龍伯公御詠

中院通茂卿

一小森一山上京之節覚書

右者大野清右衛門殿より借用にて写

続常不止集 二之巻歌之部

弘化三年丙午九月中

古今和歌集序

紀貫之

やまとうたは、ひとのこゝろをたねとして、よろつ  
のこの葉とそなれりける、世の中にあるひと、こ  
とわさしけきものなれハ、こゝろにおもふことを見  
るものきくものにつけていひ出せるなり、花になく

うくひす、水にすむかはつのごゑをきけハ、いきとしいけるものいつれか歌をよまさりける、ちからをもいれすしてあめつちをうこかし、めに見えぬおに神をもあはれとおもハせ、をとこ女のなかをもやはらけ、たけきもの、ふのこゝろをもなくさむるハ歌なり、このうた、あめつちのひらけはしまりけるときよりいてきにけり、しかあれとも、世につたハることハ、久かたのあめにしてハしたてるひめにはしまり、あらかねのつちにしてハすさのをのみことよりそおこりける、ちはやふる神代にハ歌のもしもさたまらず、すなほにしてことのこゝろわかたかりけらし、人の代となりて、すさのをのみことよりそみそもしあまりひともしハよみける、かくてそ花をめて、鳥をうらやみ、かすミをあはれみ、つゆをかなしむこゝろ、ことはおほくさまくになりける、とほき所もいてたつあしもとよりはしまりて年月をわたり、たかき山もふもとのちりひちよりなりて、あまくもたなひくまでおひのほれることくに、この歌もかくのことくなるへし、なにはつこのうたハみか

どのおほんはしめなり、あさかやまのこのの葉ハうねめたハふれよりよみて、このふたうたハ歌の父母のやうにてそ、てならふひとのはしめにもしける、そもく歌のさまむつなり、からのうたにもかくそあるへき、そのむくさのひとつにハそへうた、ふたつにはかそへうた、みつにハなすらへ歌、よつめハたとへうた、いつ、にハた、ことうた、むつにはいはひうた、いまのよの中いろにつき、ひとのこゝろはなになりけるより、あたなるうた、はかなきことのみいてくれハ、いろこのミのいへにうもれ木の、人しれぬことゝなりて、まめなるところには、花す、きほにいたすへき事にもあらずなりたり、そのはしめをおもへは、かゝるへくなんあらぬ、いにしへの代々のみかと、はるの花のあした、秋の月の夜ことにさむらふひとくをめして、ことにつけつ、歌をたてまつらしめたまふ、あるハ花をそふとてたよりなきところにまとひ、ある八月をおもふとてしるへなきやみにたとれるこゝろくを見たまひて、さかしおろかなりとしろしめしけん、しかある

のミにあらず、さゝれ石にたとへ、つくハ山にかけ  
てきみをねかひ、よろこひ身にすぎ、たのしみこゝ  
ろにあまり、ふしのけふりによそへて人をこひ、松  
むしのねに友をしのひ、高砂、すみの江のまつも、  
あひおいのやうにおほへ、をとこ山のむかしをおも  
ひいて、をミなへしのひと、きをくねるにも、う  
たをいひてそなくさめける、また春のあしたに花の  
ちるを見、秋のゆふくれに木の葉のおつるをき、  
あるはとしことにかゝみのかけにみゆる雪となミと  
をなけき、草の露、水のあわを見て我身をおとろき、  
あるハきのふハさかえおこりて時をうしなひ、世に  
わひしたしかりしもうとくなり、あるハ松山の浪を  
かけ、野中の水をくみ、秋はきのした葉をなかめ、  
あかつきのしきのはねかきをかそへ、あるハくれた  
けのうきふしをひとにいひ、よしの川をひきて世の  
中をうらみきつるに、今ハふしのやまもけふりた、  
すなり、なからはしもつくるなりときく人ハ、う  
たにのミそこゝろをなくさめける、いにしへよりか  
くつたはるうちにも、ならの御時よりそひろまりに

ける、かのおほん世や歌のこゝろをしろしめしたり  
けん、かのおほんときに、おほきみつのくらみ柿本  
人麻呂なん歌のひしりなりける、これハ君もひとも  
身をあハせたりといふなるへし、秋のゆふへ、たつ  
田川になる、もみちをハ、みかとおほんめには  
にしきと見たまひ、春のあした、よしのやまのさく  
らハ、人まろかこゝろにハ雲かとのミなんおほへけ  
る、また山部の赤人といふひとありけり、歌にあや  
しくたへなりけり、人麻呂ハ赤人かかみにたゝむ事  
かたく、赤人ハ人まろかしもにたゝんことかたくな  
んありける、この人々をおきてまたすぐれたるひと  
も、くれたけの代々にきこえ、かたいとのよりく  
にたえずそありける、これよりさきの歌をあつめて  
なん、万葉集となつつけられたりける、こゝにいにし  
へのことをも歌のこゝろをもしれる人、わつかにひ  
とりふたりなりき、しかあれと、これかれえたると  
ころえぬ所、たかひになんある、かの御時よりこの  
かた、としはもゝとせあまり、世ハとつきになん  
りにける、いにしへのことをも歌をもしれる人、よ

むひとおほからず、いまこの事をいふに、つかさく  
らゐたかき人をハたすきやうなれハいれず、そのほ  
かに、ちかきよにその名きこえたる人ハ、すなはち  
僧正遍照ハうたのさまハえたれとも、まことすくな  
し、たとへハゑにかける女を見ていたつらにこゝろ  
をうこかすかことし、在原業平ハそのこゝろあまり  
て、ことはたらず、しほめる花のいろな<sup>〔古今和歌集より補〕</sup>くて、句  
ひ残れるがごとし。文屋康秀は、言葉は巧みにて、  
その様身に負はず。言はば、商人の、良き衣着たら  
むがごとし。宇治山の僧喜撰は、言葉微かにして、  
始め、終り、確かならず。言はば、秋の月を見るに、  
暁の雲に、遭へるがごとし。詠める歌、多く聞えぬ  
ば、かれこれを通して、良く知らず。小野小町は、  
古の衣通姫の流<sup>いにしへそとほりひめ</sup>なり、あハれなるやうにてつよか  
らず、いは、よき女のなやめるところあるに、たり、  
つよからぬハ女のうたなれハなるへし、大友黒主ハ  
そのさまいやし、いは、たき、おへるやま人の、花  
のかげにやすめるかことし、このほかのひとく、  
その名きこゆる野へにおふるかつらのはひひろこり、

はやしにしけきこの葉のことくにおほかれと、歌と  
のミおもひて、そのさましらぬなるへし、かゝるに、  
今すへらきのあめのしたしろしめす事、よつとき、  
ここのかへりになんなりぬる、あまねきおほんうつ  
くしみのなミ、やしまのほかまでなかれ、ひろきお  
ほんめくみのかけ、つくは山のふもとよりもしけく  
おはしまして、よろつのまつりことをきこしめすい  
とま、もろくの<sup>（みカ）</sup>ことをすてたまはぬあまりに、い  
にしへのことをもわすれし、ふりにし事をもおこし  
たまふとて、いまでも見そなはし、後の世にもつたハ  
れとて、延喜五年四月十八日に、大内記きのともの  
り、御書所のあつかり紀貫之、さきのかひのさうく  
わんおほし<sup>（みカ）</sup>かふちの躬恒、右衛門府生にふの忠岑ら  
におほせられて、万葉集にいらぬふるき歌、みつか  
らのをもたてまつらしめたまひてなん、それかなか  
にも、うめをかきすよりはしめて、ほと、きすを  
き、もみちををり、雪を見るにいたるまで、また  
つるかめにつけて君をおもひ、ひとをいはいはひ、秋  
はき、夏草を見てつまをこひ、あふさか山にいたり

てたむけをいのり、あるハ春夏秋冬にもいらぬくさ  
くゝの歌をなんえらはせたまひける、すへて千うた  
はたまき、名つけて古今和歌集といふ、かくこのた  
ひあつめえらハれて、山したみつのたえす、はまの  
まさこのかすおほくつもりぬれハ、いまハあすか川  
の瀬になるうらみもきこえす、さゝれいしのいはほ  
となるよろこひのミそあるへき、それまろ（くカ）らこと  
は、春の花のほひすくなくして、むなしき名の  
ミ、秋の夜のなかきをかこてれハ、ひとのみみにお  
そり、かつハ歌のこゝろにはちおもへと、たなひく  
雲のたちる、なし（く脱カ）かのおきふしハ、貫之らかこの世  
におなしくうまれて、この事るときにあへるをなん  
よろこひぬる、人麻呂なくなりたれと、歌のこと  
と、まれるかな、たとひとさうつり、ことさり、た  
のしみかなしミゆきかふとも、このうたのもしある  
をや、あをやきのいとたえす、松の葉のちりうせず  
して、まさきのかつらなかくつたハリ、とりのあと  
ひさしくと、まれらは、歌のさまをもしり、ことの  
こゝろをえたらんひとハ、おほそらの月を見るかこ

とくに、いにしへをあふきて、いまをこひさらめか  
も、

○齊彬公御詠

民ハ国の本といえるを

民なくハ誰をか秋を養ハん

やしのふ人をつくしつるかな

○飛鳥井家集抜書

早春風

春ハた、名にのミ立てきのふけふ

霞むともなくさゆる山風

鶯

一花もまた咲やらぬ梅か枝に

よはミな春とき鳴うくひす

谷残雪

かつきへてのこれる雪のふかさこそ

あらはれ初る谷の埋木

余寒

谷川にとけし氷ハ又とちて

降出にけり春のはつ雪

梅薫袖

いくたひか匂ひを袖にはこふらん

花に行かふ梅のした風

雨中梅

あかす猶袖につゝまむ春雨に

梅かゝおつる軒の玉水

江州柏木に住侍し時、つれくなる春の比その

あたり見めぐりけるに、梅の匂ひけれハよミ侍

し、

竹あめる垣ほのうちの賤のやも

猶よにしらぬ梅かゝそする

春駒

いさミある世の名ハたちて春駒の

野原にあるゝけしきをそ見る

待花

こゝろあてにおもふ月日を大かたの

契りになして花そまたるゝ

ある所に梅・桜・柳など枝をかはして、庭の木

立も艶に侍るに、かの梅か香を桜の花に匂はせ

てと侍ることをおもひて、

おなしえにさかぬはかりそ梅かゝも

桜もまじる青柳の糸

三井寺金堂の花只一樹さかりなるをミて、暮行

ほとに人々別れける時、

いさゝらはくるゝ一樹の陰しめて

その暁の花までもミむ

仁和寺神殿のほとりの花を見て、暮行ほとに宿

にうへし桜のかつうつろふもおしくて立帰るに、

とひ捨てかへらぬものかやま桜

宿にうつろふ花なかりせは

惜花といふ事を

身をわすれ家路もしらてなとか思ふ

かひなかるへき花の行衛を

花浪

山風に岩こす音をひゝかせて

こけのうへ行花のしら浪

夏部

残花在何

散ぬとていてし太山の道かへて

春にをくる、花やとはまし

さかぬまもいたつらにこし山桜

青葉の雲にまたまよふ哉

残花

ミち野へに散をくれたる花のえを

たかためおらて誰のこしけん

郭公

一声ハ夢にまきれてほと、きす

とをさかるをそさたかにぞ聞

こ、ろしてまちかくきなけ時鳥

老のねさめハ猶たとるなり

いかなれハ猶したふらん時鳥

七十年き、しこそそのふるこゑ

夜郭公

郭公鳴一声のミしか夜に

たかり迄かとはんとすらん

馬上聞郭公

いたるへき雲井ならねと郭公

駒ひきむけてしたふ声哉

旅宿郭公

草枕まつかりそめのうた、ねも

やかてねられぬ郭公哉

早苗

うへわたす山田のさなへ影見えて

す、しくすめる水の色哉

文安五年十月十三日畠山修理太夫人道の障子に、  
(家脱カ)

四月に早苗うへわたしたるかた書たる所に、

うらわかみなひく早苗にはるくと

音なき風の見えて涼しき

水鶏

やすらひに出つ、月を松の戸に

水鶏ハたれを驚かすらん

夢をこそ驚しけれ柴の戸を

明よとととふ水鶏ならめや

住吉社に読て奉りし歌の中に水辺の蛭を、

池水のいひ出かたき思ひとや

身をのミこかすほたるなるらん

蓮

散もおしはちすの糸にぬきとめよ

池のうき葉の露のしら玉

秋部

萩

真萩原なひくにつけてあたりなる

草の袂の錦とそミる

萩盛

秋風になひきしまゝに露散て

花のミおもる庭の萩原

萩露

萩か花たゝ白砂に見し露も

こゝろの色か花に移りぬ

今朝見れハ庭の真萩の露そおもき

野分にあらぬ秋風も哉

野亭萩露

真萩ちる野への夕露身にシミて

かり庵さむき秋風そ吹

槿

夜もすからつゆにむもれてねくれたれの

花の朝貌あかぬ色かな

戸外槿

松の戸のときはのかけハしはし猶

朝日かくれにのこる朝貌

稲妻

さゝかにのくものふるまひあらはれて

軒のしのふにかよふ稲妻

野分

おしかふすあとたにつらき秋萩の

にしきおしなミ野分たちぬる

冬部

初冬

外山時雨(より晚カ)となりて冬そくる

秋にわかれし嶺の横雲

初冬嵐

はけしくそむへ山風も成にける

秋の草木ハ色も残らて

朝霜

見し秋の千種ハのこる色なくて

霜の花咲野への朝風

水初結

岩間もる音たえ初て遣水の

こほるを夜半の枕にそ聞

やり水の音かれ初て氷る夜ハ

浅茅か露も霜と置らし

水

かけたのむひのくま川の朝氷

駒打渡す音のさやけさ

文安五年十月十八日、内裏月次百首御読歌の中

におなし心を、

塩風に浪もやたかくなるミかた

声打よするゆふ千鳥かな

美濃国へくたり侍し時、伊吹山をミれハ雲たち

かくし見えす侍しか、漸晴行まゝに雪いとしろ

く見えけれハ読侍し、

雪けともしらぬ伊吹の峯の雲

晴てそ積る程を見せける

雪の朝東山殿へ詠進し侍りし、

軒ちかき山いかならん我宿の

せはき庭にもまつのしら雪

御返し

さそな雪庭の松にも積るらん

軒はの山ハうつもれにけり

野外雪

冬かれの色ものこらすやたの野の

あさちか雪のあさからぬ比

閑中雪

なをさりに雪こそうつめ苔深ミ

いつもとはれぬ庭と見えしを

深雪

ねやさむミうつもれふして聞は又

籬の竹も雪折の声

庭の山ハ雪にむもれて遣水の

なかれを聞も谷深き音

雪埋松

ふるまゝに峯の松原枝たれて

木の本さえも見えぬ雪哉

日にそへてミとりも見えず松をたに

しる人もなき高砂の雪

歳暮

山川にかへらぬ水ハ氷れとも

月日なかるゝとしのくれかな

恋部

忍恋

もれなはとさすかにおもふ玉章ハ

言葉のこしてやるもうらめし

忍久恋

我思ふ人たにしらハせめてたゝ

こゝろにこめてとしハふるとも

寄蛭恋

明行は人めおもはぬおもひかな

うらやましきハ夜半の夏虫

寄夢恋

つらくのミみえつる夢のおもかけを

身の契りにそ思ひあはする

祈恋

あひ見ての後ハ神をもわすれしと

契りをふかく結ふしめ縄

契恋

たのめしにいつの人まはしらねとも

くるとあくとをいそくはかなさ

待恋

しのふそといひて契りし言の葉を

ふくるにつけて頼む夜半哉

さよ更てとかむる犬の一声も

人まつかたにきくそ嬉しき

寄車恋

待わひぬしのふくるまのくるまたに

なをやるかたもなきこゝちして

初逢恋

新枕かはす一夜を千夜までと

言葉のこらす契りつるかな

俄逢恋

風の間に思ひもかけすむすひにき

のきはの萩の露の契りハ

顕恋

やすく世にもれにけるかな君にわれ

しらせかねつる思ひなりしを

絶（恋脱カ）

はかなしやおもひたえても程ふるや

た、になかめぬ夕暮の空

寄硯恋

よはの床はらハぬのミかかきたえて

す、りもちりのつもりぬる哉

占恋

すゑつゐにあふよしもかなとふうらの

まさきのかつらななき契りを

雑部

浦松

明わたる浪をかさしの玉くしけ

二見の松のあかぬいろかな

岸竹

ねくらとふ鳥ハ声して川風も

ふかぬになひく岸の呉竹

山家

うき事をきかぬも君の恵そよ

たか山なれハ身をかくすらん

のかれきてすむとおもふないつかたも

わか大君の君の山里

山家鳥

名もしらす見さりし鳥ハ近く馴て

うき名（世カ）に遠きミやまへの庵

谷梯

となりなき谷の下庵とふ人の

跡やミ見ゆる苔のかけはし

閑居苔深（庭カ）

松風のちり払ふ音（はカ）に静にて

日毎にあつき庭の苔かな

幽径苔

山深ミ岩ほつたひのかよひ路を

こけのむすまでとふ人もなし

夕樵歌

くれけりな嶺にハをの、音たて、

苔の木かくれうたふやま

王照君<sup>(昭カ)</sup>

ミやこ出しかたミなるへきまゆすミも

きえて悲しき旅の空かな

侍従大納言実隆卿もとよりしなの桜のかへり花

の枝にさして、

待つけん人のミかたき宿なれや

としまれなる花ハ咲けり

返し

めつらしき言葉そへて待ミめや

とりに稀なる花しさかすは

定家卿のか、れたる色紙を年比持たりしを、こ

との故ありて僧宗祇につかはすとて、つゝ、ミ紙

に書付侍りし、

さまざまにあはれとをミよ今の世に

のこる言葉の花鳥の跡

三条右府公<sup>敦</sup> 五十首歌よミてミせられ侍りしに

返すとて、おくに書付侍りし、

よしあしをわくことかたし和歌の浦の

道に名をかる年ハふれとも

返事

内大臣

和歌の浦のもくつをてらすしるへ哉

かゝる言葉の玉の光りは

寄花述懐

いかにみるこゝろとたにもしらぬ身に

あやしやあかぬ花の色哉

○倭論語拔書

清和天皇九代源三位頼政卿女也、<sup>(姫カ)</sup>歌人にて十三

経を能講せし女なり、

宜秋門院丹後曰、皆人のうまればすなほなるものな

れとも、そのならひによりて善人悪人となれり、し

かれは父ハ子にをしへ、子ハ又善にふれて、かりに

も悪人にましはるへからず、さるもの、歌に、

うへて見よ花のそたゝぬ里もなし

心からこそ身はいやしけれ

よき人にむつひて悪しき事ありし

麻アサの中なるゑもき見るにも

○日野資枝卿御詠

山早春

こすの外に春くる方の山見えて

朝日くもらぬ宿の、とけさ

早春水

春の来て氷なかる、山河の

あさ瀬のとかに霞むしら浪

々々霞

長閑なる空に今朝より色みせて

霞そ春に立そおくれぬ

初春祝

恵ありてこと葉の花のとしにそふ

さかへ待見む宿の初春

初春祝

君か代の春の初かせ日にそえて

恵になひく四方の民草

色増る松陰なれてとしのほに

尽ぬ恵を仰く初はる

初春雪

神垣の千世のはしめに春の色を

こめて降そふ春の白雪

初春風

けふに明て吹はしむるも長閑なる

風をや春のさそひ来ぬらん

初春

百敷の庭に春しる諸人の

袖をつらねて君仰くなり

初春の恵にそはん千世の色を

枝もさかへて松のこの葉

きのふけふ春を都の四方にある

山のはうすく霞そめつ、

迎春祝言

賑へと世をおもふ君か恵あれば

なへて春しる四方の国民

霞知春

立ぬひて今朝よりうすく春のきる

霞の衣時そたかへぬ

貴賤迎春

君か先いはふる春を恵しく

四方に待へて民そたのしむ

神と君守る恵ミのかしこきに

宮もわらやも春にあひつゝ

都立春

あけそむる光りのときき日の本の

春を都の空よりそ見る

元日

あたらしき年に色そふことの葉の

恵うれしきやとのはつ春

くる春の恵しられて陰たかく

色そふやとの春のことは

としく松のことの葉色そひて

いや栄ゆく宿の初春

初春祝

幾千世の色そひけりな長閑なる

春のはしめの松のことの葉

民におほふ君か袖より吹そめて

恵あまねき四方の春かせ

立かへり八雲の道にくる春の

色見え初て霞む神垣

霞

出る日の霞ミ初けり春にあけて

今朝あらたまのとしの光りに

立出て見れはいつくものとなる

霞のほかにやまの端そなき

ことの葉の手向重ん春の色を

ふかき霞にこむるけふかな

松梅の色香春しる神垣の

長閑さそへてかすむこのころ

立そめて四方の霞に今朝よりハ

あまねき春の光りをそしる

霞立都のふしに東路の

あさからぬ恵しられて仰見る

宮ゐに幾重立かすミかな

袖はえて誰もきたの、春霞

日に立なるる神の広前

千世の坂やすくこゆき色<sup>へ</sup>見せて

まつ長閑にも霞む山のは

日に増る恵をかくと神垣の

朝な〜にたつかすミ哉

あさからすかすミにけりな如月も

やかて北野々神の広前

から人の貢そなふる船あまた

みなとのとにかにかすむ朝輝

末遠く長閑き春のやま口に

今朝嶺や霞そむらん

花鳥の色香ハよしやおそくとも

野山の霞立さらすらん

春のきて広き恵を神垣のは

内外隔ぬ霞にそしる

千世の春の色をこめけり神垣の

一夜の松のいく重霞て

千世の春もこむる霞に薩摩かた

さそのとかなるミるめなるらん

河霞

氷とく岩ねの浪におくれしと

かすミもたてる今朝の山河

江上霞

梅かほる難波入江の浪の花も

今を春へとかすむ朝輝

霞添山色

ことふきを君か契りて春ことに

南の山のかすミそひつ、

朝霞

春のくるかたとて今朝八日の陰を

仰く東のやまそかすめる

朝な〜とくる氷に水無せ河

ありて行瀬のかすむ春風

大井川氷なかれて小倉山

今朝より春に霞ミそめけり

海辺霞

見るめかるのとけささそな薩摩かた

興の小島の霞あしたは

子日

古のためしを引て子日する

御幸を野への小松にや待

霞隔遠樹

とをく見る野山の木のめ春霞

今いく日ありて花もへたてん

連峯霞

棹姫の袖をあまたにかけてほす

霞の衣幾重なるらむ

若菜契追年

としのはに摘をいはひて父母の

老もわかなのわかへつゝ見ん

そのふるを君か待見てとしの葉に

千世の齢を摘若菜かな

若菜

幾千世と契れハもとの道とめて

けふ此野へに若菜をそつむ

野若菜

めつらしくみとりそふの、春雨に

ぬれつゝけふハ若菜をそつむ

寄若菜祝言

諸人の千世の春

(ママ)

若菜知時

君かため千世摘春のすさひそと

わかなやしりて野へにもゆらん

沢若菜

雪氷今朝ハのこらす摘はやす

袖を沢辺の水の深せに

いつしかと氷残らてもへ渡る

みとりも沢の若菜をそ摘

鶯

いく返り宿の鶯待聞けと

のとかなる音のとしにそひつゝ、

心さへをのれ高きにうつるなよ

古巢をおもへ谷のうくひす

盛りなる花をとひきて木つたへハ

声の匂ひもまさるうくひす

梅間鶯

文このむ宿とや春は鶯の

梅に木つたふ声そふりせぬ

梅近聞鶯

今年より千とせも聞と軒近き

梅に木つたふ鶯やなく

鶯出谷

かしこきもともなひ出て百敷に

啼音よろこふ谷のうくひす

鶯馴

ことの葉の花に鳴音の数そひて

いく春なる、宿のうくひす

窓ちかく雪のうちより梅咲て

鶯はやくなる、はるかな

雪中鶯

風寒ミ雪にましりて散梅を

木伝ひおしむ鶯やなく

やま寒ミ雪をへたて、聞声も

はや長閑なる谷のうくひす

霞中聞鶯

うくひすの声ふりせぬハ千世の春も

その、かすみにもとそ聞

野鶯

尋こし若菜をよそに鶯の

声もてはやす春日の、はら

朝鶯

野へ近き宮ゐは神の朝な〜

めて、やきかむ鶯の声

竹鶯

呉竹になるれはをのか声の色も

いく世かはらぬ宿のうくひす

花中々

いく返りみその、花に木伝ひて

声も盛りの春のうくひす

柳

そめいたす糸に心をひかれつ、

くる人絶ぬ青柳のかけ

なかき日も糸に心やひかさされて

くる人たえぬ青柳のかけ

老せぬも春にしられて棹姫の

柳の髪そ白き筋なし

遠柳

夕けふりたてると見しハ遠きの、

行手になひく柳なりけり

柳靡風

春風の吹ハなひきて争ハぬ

柳ハ枝の折るへくもなし

柳風

春風の  
(ママ)

水辺柳

河清ミ庭の玉も、数見えて

瀬々に影見るきしの青柳

若草

みとりなる野への草ねに幾秋の

花をこめてかもえ渡るらん

よせ返り磯なを洗ふ浪まより

芦もつのくむ難波江の春

二葉なる松生そひて若草の

青む垣ねハ千世も待見ん

恵しること葉のたねに若草の

ふりせぬ色を契るいくはる

もえ出る色におもへハ花咲ん

末はるかなる野への若草

恵しる春に分きて珍敷

若草やまのみとりをそ見る

春の色のいたるもしるく野へ山へ

なへて草葉のもゆる此比

色そふもむへ如月の廿日余り

いつかはな見むもりのした草

いつしかと水草そ青む求きて

摘しわかかなをあらふ沢辺に

神のます杜ハ恵ミのふかくして

またきみとりにもゆる若草

恵有とあふくやしむる宿ことに

春しり初てもゆる小草ハ

春草

浅からぬ色をみかきに世の春の

かしこき恵くさもしるらん

草漸青

世の春のおほふ恵に数ならぬ

垣ねの草も色そそひゆく

氷解

水上の滝も音して山河の

こほりをなかつせゝのはるかせ

残雪

此春はむ月のミかはけぬか上に

雪も重ねて残るさむけさ

垣ね残雪

残ける春たにふかき山里の

垣ねの雪に冬をこそおもへ

梅

梅といへハいつくの花も我君か

かさしになして世を祝つゝ

春越えて梅咲やとはいく千里

かほる詞のはなも待見ん

梅盛

花有と木のもとことに立よらは

梅さかりなる野へやたとらむ

梅風

心有すさひしられて蟹のすむ

いそやの梅のかほるはるかせ

栽梅

たらちねの千世のかさしとことしより

うへて花待宿の梅か枝

梅香薰袖

鶯の爰に啼よりから衣

梅から移すふかさをそしる

夕梅

雨はれてかすむ立枝の風かほる

梅をみその、暮そのとけき

堇

摘はやす跡より咲て堇草

はなそ尽せぬ野への中道

春月

山もとの霞をよるも水無瀬河

ありて行瀬の月を更ぬる

春月幽

もりかぬる木の間みかきて春夜は

月影うすきまつ陰の宿

ほのかなる月によひく天つかせ

雲の通路霞をそしる

春雨

国広くうるほふ春の恵の有て

あを人草や雨をあふかん

君か代の春に十日の雨ふれハ

草木もなへて恵をそしる

春曙

梅か、も鶯の音も杜ふかく

霞む北の、春のあけ(灰カ)

世にしらぬ長閑き光り洞のうちに

こめていく重か霞明灰

浦春曙

鳥かくれ行ふねそれと見えそめて

かすむあかしの浦の明灰

雲雀落

夕ひハリかすめる野へに落きても

馴し芝生の床やたとらぬ

野雲雀

朝またきなれも心や春の日の

影さへ野へにひはり鳴らん

霞中帰雁

はかせにもはらひやあらぬはるくと

帰るさかすむ春の雁かね

春駒

千里ゆく心やこめて霞野の

遠近わかすある、若駒

野遊

すみれ摘かたえの花も霞野の

行手に遊ぶ袖つとひつ、

桜

千世こめて咲ける箱やの山桜

静けき陰を春ことに見ん

いと桜

いく千世の春にもかゝれ糸桜

あかすや君も盛めつらむ

花

咲しよりなれゆく花よめつらしき

色香もとしにそふ心地して

かそへきて五十の春の家桜

ちとせも見よと花や老せぬ

浅からぬ恵をかくと神垣の

花に色そふ露や見すらん

をのか音に人をさそひて鶯も

北野の杜の花に馴ぬる

神祭るけふハ桜に色香なき

こと葉の花もそへて手向ん

生初て花はいつより長閑なる

弥生を時と契り置らん

色なしとさそいとふらん庭桜

めつること葉の花をそへなは

うつし植し吉野の花の種なれハ

たくひあらしの山桜かな

八重咲も一重につきてけふ幾日

みきりの花そ盛り久しき

咲そめし時より常に吉野山

ふりせぬ花の陰そ木高き

陰ならふ老木わか木の花盛り

いく世みきり春（の脱力）にさかへん

桜花咲てミかきに春しれは

梅ならぬ香も神や愛らん

時つ風枝をならさて神もさそ

とふに叶ふ盛なるらん

初花

なへて先花そいそかぬ君に先

みはしの桜咲初るころ

恵あるミはしハ露も浅からて

外よりはやき木々の初はな

待花

いつしかと都の柳色そへハ

こきませて見む花そまたる、  
移しうへて身のさかへをも待花の

さくはいつくとむかふ神垣

栽花

ことの葉のたねにとこふる家桜

去年に咲そふ花さかりかな

花盛聞

陰とへハ木高くなりて家桜

尽せすかほれ世々のはるかせ

みよしの、盛りもかくやあらし山

桜にうつむミねのしら雲

ミ吉野の色も隔し花盛

雲とみその、春のあしたハ

名所花

浪の色にまかふとなせの花盛

見しより広き滝そかすめる

花盛り雲とまかひてみよしの、

桜ハ世々のはるに名高き

花色

棹姫の袖を千種に染るとや

かすむ野山の花は咲らん

鶯もよろこぶ宿の春にあへハ

うれしき色をはれやミすらん

たをやめハふり行春も色かへす

としく時歎咲て花や色めく

花未飽

春いく世誰か飽へきおしなへて

木々を桜の花になすとも

咲しよりなれよと花ハおもハぬを

飽ときいつと木陰しめつ、

寄花祝

陰高きさくららの下の人おほミ

増る色香になる、いく千世

禁中花

盛りなるみはしの花に風吹ハ

外衛もる身の袖も匂ハん

社頭花

八雲立その面影も花に今

みかきの春を神や愛らん

庭々

杜ふかく千もとの花に残りしを

かこふ一木の庭桜かも

古寺々

鐘の音もかすめる花にへたゝりて

夕のとけき嶺のふる寺

花目

吹おろす風の匂ひに分いらん

高ねの花の盛りをそしれ

花下

駒をつなき車をとめて諸人の

遊ふ野山の花のした陰

花根

八木種ほとこし植し中に此

花も根さして四方に咲らん

花主

ふりせずよ宿に咲らん春幾世

愛るあるしを花も思ひて

祝花

桜咲野山のゆき、かさし折

花に心の色もミえぬる

月前花

月花の心もしりて霞夜の

影に盛りを誰かめつらむ

交花

けふ幾日見まくほしさに陰とひて

なる、を花のいとひもやせん

遠山花

分きつる外山の花の咲そへハ

尾上の雲も桜なるらし

湖花

塩ならぬ海へも春ハさ、浪に

影うかふ花のミるめをそかる

花契多春

千世八千世契れ砌の桜花

物おもひなき春のかさしに

惜花

陰なる、盛り久しき花なれば

幾度花の散もおしまん

落花

ふく風に心かろくもさそはれて

化なる花の名にや立らむ

翫桃花

散り残る桜あれとも桃をけふ

花かつらにて遊ぶ諸ひと

躑躅

一枝の盛りをおしむ山守も

岩ねのつゝし折はゆるさん

雨後苗代

春雨のはる、田面に爰かしこ

はやしめはへて祭る苗代

苗代

山陰も春ハのとけきかせ見えて

しめ縄なひく小田の苗代

夕苗代

賤かけふかこふと見えし苗代の

しめ縄かすむ小田のゆふくれ

河款冬

吉野河桜なかる、春を今

きしねにとめて咲るやまふき

夕蛙

雨はる、小田の夕の静けさに

水の蛙やあまた鳴らん

藤

末葉までさかへて花に咲春の

恵うれしき北の藤なミ

松藤

花盛万代みよと千世しむる

松をこえてや藤の咲らん

滝下紫藤

しら糸を半ハ染てむらさきの

藤咲かゝる滝つ岩かね

藤花春久

ことの葉の手向のたねに藤の花

千とせの春にかけて咲らん

藤花久薫

咲まさること葉の花もかほり合て

藤の盛りそ庭に久しき

卯月藤

神祭る卯月をかけてかも河や

行瀬に匂ふきしの藤浪

杜頭藤

宮作りあらたまる春のかすか山

鳥井の藤の花も色こき

残春

暮行を啼てと、むる鶯の

残るも春の日数とそ聞

春天象

いつしかと雪そ残らて天つ風

長閑になりぬ雲の通路

春地浅

もえいつる草葉も水もみとりにて

野沢にミつる春の色かな

春田

一年の仕業も春にかへす田の

たのミをかけて賤や祈らん

春木

梅柳春知るそのに日数へて

桃も桜も咲そふを見ん

家々翫春

恵しるそのほとくのたのしミを

宮もわらやも春そ豊けき

池水浪静

千世もかく浪静にてすむ池の

心を洞の春にこそしれ

松色春久

春をしるみとりもそひてことしより

千とせに根さす松のことの葉

春祝言

民におほふ君か袖より吹そめて

恵あまねき四方のはる風

江山春興留

梅かほる難波入江の朝朗

浪まにかすむ興つ島やま

松竹梅絵

生初て久しき宿の松竹に

咲ましる梅も千世契る陰

梅月絵

春の夜をあかしとそおもふ色残る

月も常なる梅の立枝に

春生人意中

君も臣もまたき心の長閑けさに

むへやす国の春そたのしき

加賀美三四郎私宅の初花進上詠あり御返し

ことの葉の露までそへて見せはやと

手折を愛る初桜はな

首夏

百敷の夏のはしめにみき給ふ

折にあふきを取て涼しも

首夏風

夏来ぬと涼しき風の色みえて

朝露なからなひくくれ竹

々々新樹

卯月来てはやくも山ハ嶺麓

わか葉に夏のかげをミせつゝ

々々藤

陰あふく花のしなひの夏かけて

なか／＼し日もあかぬ藤かな

夏あさき砌にふかく見し藤の色

色をさなから残す藤なミ

山新樹

夏山の陰とをからて若葉さす

緑を軒にむかふすゝしさ

新樹露

緑そふ木々の若葉に露見えて

すゝしき陰をいそく庭かな

々々風

かせもけふ吹きてすゝしめつらしく

砌の木々のしける若葉に

立花もやかて匂ん若葉そふ

御階の桜風になひけハ

新樹

やま本の霞ハはれて水無瀬河

木々の若葉の陰そうかへる

残花

残れる八片枝となりぬ外の藤

後にさくらの一本二木も

郭公

かしこきハのこらぬやまの郭公

なれも世にいて、声絶すなく

神祭る卯月来ぬとや郭公

杜の梢にゆふかけてなく

夏来ぬと都にいて、声絶す

なげやめくりの山ほと、きす

音に聞もしのひくくの妻こひハ

さそな卯月のやまほと、きす

遠からぬやまよりいて、ほと、きす

神に初音や聞えあくらん

五月雨はちかくなりてもふりいて、

鳴ぬ雲路のやまほと、きす

やまふかく尋て聞ハほと、きす

声も若葉の木々にこもれる

ことしより卯月を、のか時として

里なれ初よやまほと、きす

ときぬと空にしりてやほと、きす

五月ハしけく鳴音なるらん

おしミこし初音もらせよほと、きす

をのか五月のちかき雲路に

里なる、はしめや告てほと、きす

五月にちかきけふの一声

待郭公

初音より稀になるまで世にたえす

待をならひのやまほと、きす

初郭公

山守も聞ハふるさしう月きて

日をへぬ嶺になくほと、きす

世にハ待初音ハおしむほと、きす

心くらへに卯月過らし

宿とひて千とせに千度時鳥

もらす初音を聞ハもらさし

夕待郭公

とはてうき山ほと、きす人ならハ

まちし夕の数を告まし

杜郭公

五月こハ葉数よりけにほと、きす

しけくや啼ともりの下陰

神や先初音聞らん時鳥

すむてふやまのちかきもりには

若葉そふ杜を聞きてをのか音も

茂き五月のやまほと、きす

里々々

声またん里をハかれす行返り

卯月よりとへやまほと、きす

ほと、きす尋も入らて太山なる

里の子や先初音聞らん

尋々々

もらすやと尋て聞ハほと、きす

鳴ぬ岡へにやまかせそ吹

樵路々々

鳴方を見てやすらへハ柴人の

道さまたけのやまほと、きす

郭公遙

夕月夜もりの木の間の時鳥

をのか鳴音も遙なる声

暁郭公

ほと、きす翅も見らて横雲の

わかる、ミねを出るひとこゑ

郭公繁

若葉さす梢をとひてをのか音も

しけき五月のやまほと、きす

郭公類

遠近の里とふ声の隙なきハ

山に残らぬほと、きすかも

郭公遅

待人ハこゝろをつくとほと、きす

初音をそきを世語りしにて

葵

みあれ野にとれと尽せぬ葵草

神代に誰か種をまきけん

珠簾々

みあれ野の朝露なからかけわたす

こすの葵の色そす、しき

露なからかくや光りも玉たれの

こすの葵の色そす、しき

杜卯花

若葉さす木深きもりの下陰に

一村しらく咲る卯のはな

愛杜丹（牡カ）

もてはやすぬしもとしくとめるけふ

花ハ心のふかミくさかな

恋橘薫風

さかへ行陰をみハしの立はなハ

風吹度にふかくかほれる

月前恋橘

古を月もしのひて立花の

匂ふ軒端に影やもりくる

早苗

たのミ得て賤かかりつむ稲も見ん

みどりの早苗つゝく千町に

千町田に植わたしても深みどり

なをいくむらの残るなはしろ

五月雨

神垣の梅のミハはや色付し

後たにはれぬもりの五月雨

きのふけふふらても雲ハかさなりて

はや五月雨の空にミすらん

しら浪ハいつミしまゝそ山川の

瀬々もふちせく五月雨比

軒にみるあやめ立花ぬれつゝも

雫かほりて五月雨のころ

はれ間ありてはや残なく植わたす

早苗色そふ小田の五月雨

神垣にたえず歩をはこふより

けふ笠つゝく杜の五月雨

つれくとおもへハいつの五月より

雨ふりくらす日をかさぬらん

きのふけふふるには風のそひなから

はらふともなき五月雨の雲

としことに五月の日守降くらす

雨を時しる空とおもはん

けふ幾日ふらても雲のたゝよひて

五月の雨の空ハしるしも

滝五月雨

五月雨に水笠増りて河つらの

瀬々のるせきも浪のした草

河五月雨

晴間な降音そへて五月雨の

雲より落る峯の滝つせ

菖蒲

刈あけてあやめしく夜の手枕に

もとの沢の夢やミるらん

連嶺照射

すむ岩に心を引て梓弓

いつく嶺もともしさをらん

庭夏草

しけり行砌りの草に交りても

そのたねしるきなてしこの花

夏草露

風はらふ露もすゝしき草垣に

咲て色わくさゆりなてしこ

なてしこの咲そふませにゆふ貌の

ひかりもミかく露そすゝしき

野螢

草しけミ暮てハいとゝたとる野の

ミちのしるへととふ螢かな

ほたる

すゝしきおなし河辺を行返り

愛る螢の影そすゝしき

鳥螢

暮てこく船のしるへと川島の

水のなかれにほたるとふかけ

曙水鶏

たゝきつる天の戸はやく明灰(仄カ)の

くひなハそれと翅をそ見る

夏夕月

水無瀬山しけき若葉の夕露に

はや影やとす月そす、しき

夏月涼

せく水にひかりそはる、中河の

す、しき（空白）月もとひきて

瀬鶴川

篝さす船そ数そふ鶴飼人

あゆのうき瀬をおのかせにして

納涼

す、ミとるはしるに秋の一声を

千とせも聞ん宿の松風

松梅のしける杜の下す、ミ

花にいとひしかせもまたれて

帰るさの宿のあつさをおもハれて

夜深き浪にす、む河面

朝露のひるまも草に風みえて

ゆく／＼涼し杜のした道

あふき見る雲ちより吹天つ風

乙女の袖もす、しくやとふ

風かよふ砌りにしけき松竹の

陰八千年の夏もす、まん

あつき日の影のうちなる天つかせ

いかに吹てか涼しかるらん

影やとす袂す、しく成はて、

風と月とにはしる更ぬる

山本を夕立過て水無瀬川

水増る瀬のかせそす、しき

あつき日もわする、風の涼しさに

はしるかちなる水無月の比

しらゆふの柳になひく風みえて

朝夕す、し神の広前

日影さす石はふミても河原行

衣手涼し浪のゆふかせ

よひ／＼のはしるす、しく影はれて

袂になる、月のしたかせ

たとりこし河辺す、しく小夜更て

帰る家路の風も夏なき

立よりてみとりの影に幾かへり

結ふもす、しまつのした水

杜納涼

夕風の涼しさ愛てやすらへハ

月も木の間を杜のした道

水辺納涼

石はしる滝つ岩ねに松風も

そひてす、しき太山へのおく

納涼風

夏としもしらぬ箱やのす、しさや

またきに秋をこめて吹らん

松高き北野々杜ハす、しくも

かせに一声の秋をこそきけ

御祓

あすハはや秋立浪の御祓河

風す、しくもなひく大ぬさ

夏懐旧

あわれその垣ねの露と消し世の

さそなてしこを思ひ置けん

夏田

おそくとく植し早苗の色そひぬ

五月の半過る田つらは

てる日にも水田かはりてわせおくて

しけるみとりを水無月の比

夏田家

庵さす岡への早苗秋をまつ

みとり涼しくわたる朝かせ

夏祝

神の園いく千世こめて水無月の

ミゆきをたくす仰く諸人

夏日

風払ふもりにハ蒼も夏の日の

ひかりくもらてミかく玉垣

夏庭

露やしきて更るはしるのあや庭

あやしき迄に涼しかるらむ

夏風

吹ぬまハあつさ覚ゆる夏衣

風になれ行初めなるらし

夏花

なてしこの盛り過行山賤の

垣ねやつさてかゝるゆふかほ

夏鳥

夕立のはるゝ河へにぬれてほす

身の毛すゝしく立るしら鷲

五月

雨はるゝ雲間もりきてあつき日の

影に五月の末そしらるゝ

夏山家

松陰のいつミを門の板井にて

夏山しむる庵そすゝしき

夏枕

更て猶園あつき夜ハ風かよふ

はしみなからに枕とらまし

朝蟬

杜ふかく蟬の羽におく朝露を

ミるはかりなる声そすゝしき

秋

山早秋

きのふけふ秋風しるく住山の

松も身にしむ音をそへつゝ

早涼至

秋きぬとはや庭草の打なひき

村雨そゝく夕すゝしも

早秋露

天河秋立浪のしら露玉敷や

今朝は野山の露とおくらむ

七夕

なかしとも世にハおもはぬ初秋の

一夜を星のなと契りけん

七夕契

なかれての世々に絶しな天河

なミに契らぬ星の逢せハ

織女期秋

昔より逢夜を契る秋なから

心に秋をほしハしらしな

萩

朝な夕な絶せずそよく風の音も

秋深くなる庭の萩原

近萩

秋風の吹そめしより軒近く

なれて幾日の萩の音つれ

江辺眺萩

影はれし月ハ入江の暁に

音さやかなる萩のうハかせ

閑萩

とはれねハ人にまかふもおとろかぬ

砌しつけき萩のうハかせ

軒萩

音たてぬむくらも軒になひ合て

故郷さひし萩の上かせ

萩

もみちにも立や増らん真萩原

さかりの花のたゝむ錦ハ

盛なる花を分きて見るか内に

鹿の音そひぬ野への萩原

立よれば盛りと見るも咲残る

花こそ交れ庭のはき原

閑居萩

鹿や今朝通ひ初けん秋萩の

はなふミしたく野へのひと筋

萩半綻

一本のま萩はおなし庭ながら

さけるさかざる花をこそ見れ

薄似袖

おなし野の千種かほれは焼物に

まかふ尾花か袖の秋かせ

岡薄

庵さすおかへに立る花すゝき

ねての朝けの袖かとそミる

径薄

あけ巻の袖かと見えて花すゝき

一本立る岡こしの道

沢女郎花

女郎花行かたしらぬ思ひ有て

うき沢水に影やミゆらん

虫

初秋の草村ことに啼初る

虫や夜をへて声しきるらん

蜚

すむ影や霜とまかひて蜚

更るあさちの月に鳴らん

原虫

露のミかむしの啼音も数そひて

浅茅に余る小の、しの原

夜虫

浅茅生の露のやとりに影おそき

月をよひく松虫のなく

虫声隠

君か経ん千世松虫や露しけき

芝の砌に余る声々

深夜虫

更て聞啼音はたれも身ひとつに

なかき夜侘るきりくすかも

初雁

めつらしく今朝さそはる、雁かねに

秋風寒き雲路をそしる

雁初来

秋風にたなひく雲の衣をや

うらめつらしく雁の来ぬらん

月前雁

千代すまん高ねの月に幾秋を

契りて渡る雁のひとつら

草花

うへたつる数も千種の花咲て

みかきに秋の錦をそしく

草花露

盛なる花野になへて結ひつ、

秋ハいろくの露を見せけり

野露

庭草の花そしほる、岩ほをも

吹あけつへき今朝の野分に

川霧

霧ハはや立わたりけり朝朝

船路いつことむかふ川瀬に

古渡霧

霧ハはや立わたりけり角田河

日もくれぬとて急く船路に

夕霧

暮ぬるといふ河渡る霧立て

ふちせ分ねハたとる河長

霧間野花

盛なる花野をさらす立そへハ

色の千種に見ゆる秋さり

鹿声遥

明かたのやま風しハしたゆむまハ

また遠さかる棹鹿の声

岡鹿

葛かつらくる夜もしらぬ妻恋に

岡への鹿や声恨らむ

夜鹿

よひ過て近つくこゑハ尾上なる

鹿や外山に妻を呼らん

柚鹿

うき妻に昨日もこそといとはれて

柚山かくれ鹿や鳴らむ

月

万代も絶す仕んしるへにと

月やすむらん関の藤河

海山のいかなる秋にくらふとも

かくて都の月やまさらむ

名に高き最中ちかすと十日余り

今夜の月の影や晴ぬる

いく秋か今夜かハらすとるぬさに

月の光りやそへて手向ん

豊なることしの秋をうれしとや

いなはの露の月もおもハん

よひく／＼にさやけさそハん葉月とて

先ミる月の影そ晴ぬる

明らけき月に幾夜かみかきても

玉八交らぬことの葉の露

あきらけき神垣なれハ心有て

月も世に似ぬ影やしくらん

しらゆふのなひくも木々に数見えて

月静なる杜の神垣

明らけきひかりもそひて玉くしけ

二夜名におふ葉月長月

日の本の秋はひかりと月よ見の

神や久かたの空に澄らん

山月

あらし吹尾上にみるハいかならん

外山の月もくもそへたてん

月出山

やまの端をいつれはしはしやすらハて

松よりうへにはる、月影

いつるよりくもらぬ空に更てそふ

さやけささそとミねの月かけ

暮そひてたとる山路のしるへとや

こゆへき山を出る月かけ

池月

雁もはや芦間に鳴て長月の

すむ影さむく更る池水

田家月

(ママ)

野外月

暮そへハ草ハミながら露故に

月影みかくむさし野の秋

閑居月

夜よしとや見わたす野への草の庵ハ

月影共にすむや静き

月契秋

契置し初もしらぬ久方の

月さやかなる秋は尽せし

対月恋友

夜よしとて告ぬもほとは遙なる

月に幾度友をこひつゝ

月前眺望

伏見山月にこえきて見わたせハ

影のうちなる宇治の河浪

橋月

いつとなく夜わたる月も光りそふ

秋やたとらぬ鵲のはし

海辺月

暮るよりたくひハ浪の月に行

ミるめハさそな須磨の浦舟

月前管弦

たのしみハむへ長月の夜もすから

こと笛の音も月に澄つ、

野外月

更てそふ影もさこそとくる、夜の

月にやすらふ野への道芝

望月

一年のよひくゝてらす月も此

秋の最中に増す影やなき

九月十三夜

名もしるく愛し最中を長月に

忘れぬ月や今宵晴ぬる

毎夜明月

月ハけに秋を時そと天の戸の

明る間遅きよなくそすむ

擣衣

や、寒き杜の秋風小夜更て

里遠からす衣うつ声

秋白露

すへらきの広き恵ミを秋の田の

いなはの露に民もしるらし

紅葉

おくふかく分るやま路に見渡せは

限りしられす染るもみちは

うつし植て今年を千世の初しほと

宮ゐの秋に愛るもみち葉

秋ことにおなしもみちの名にしおふ

立田小倉のやまを分見ん

秋もはや末野の、原の櫛紅葉

染ます色は冬にこそ見ぬ

初紅葉

初しくれ遅き外山の杜に今

色つく木々ハ露やそむらん

山々々

小倉山しくればはしめてもみち葉と

共に祠の色やそふらし

林葉漸黄

置露もしけき林の片枝より

はや初しほをいそくもみち葉

紅葉遍

うすくこき山のもみちの陰とひて

色々に置露そしりぬる

庭紅葉

露深き野山の木々の色こさハ

さそな庭たに染るもみちは

紅葉深

野へ山へかせ静なる秋にあへハ

ちらて色こき木々のもみちは

岸紅葉

山川の水清くして影見るも

うかふにまかふきしのもみちは

渡紅葉

渡し舟はやこきわたせ川面の

きしねのもみち色暮ぬまに

杜紅葉

小草まで色付ぬるハ見つゝ行

もみちの露やもりの下道

滝紅葉

石はしる滝つ岩ねを隔れば

折らてそよそに嶺のもみちは

蔦懸松

千世の秋に蔦もねさすと洞の松

梢や染てかゝるもみちは

有明月

あしたまつ袖とふ影の秋更て

身にシミけりな有明の月

秋望

霧はるゝ北野の杜になかわれハ

もみち染けり西の山のは

秋雲

秋かせにふもとハ晴て水無せ山

夕ゐる雲の色そ身にしむ

秋野

秋ことにふりせぬ声もをく露も

千世の数見る野への松虫

秋にミる恵の露の浅からて

北野の千種花そ色こき

日をへすや鹿も啼らん秋かせの

吹そめしより真萩さくのハ

ま萩にハをくれて咲る菊も見ん

花野の秋そ日数久しき

秋衣

よそに打音聞園も小夜衣

重ねまほしき寒さをそしる

立田山紅葉の絵御讃

うつし絵の立田の山のもみちはを

あかすそ愛るいく千世の秋

杜初冬

ちり残るもみちに吹も音がへて

冬立杜の風そ烈しき

時雨

冬きてハ夕ゐるとしもあらし吹

山たちはなれ雲そしくる、

朝時雨

いくむらか朝ゐる雲と見るか内に

やまかせ寒くしくれてそゆく

朝朗はれしと見れハ出る日の

影さす峯に雲そしくる、

峯高くはる、朝日の影のうちに

麓の庵をとふ時雨哉

落葉

冬きぬと烈しさそひて吹まゝに

木の葉ちりかふ今朝の山風

庭落葉

庭広ミ真砂を染て此比ハ

いく重もみちの積るいろこさ

窓々々

山窓をおし明かたの山風に

乱る、木のはいろそわかれぬ

氷

一本の松風寒ミさ、浪も

こほりはしむるしかのから崎

吹わたるひらのやまかせさえくくって

今朝より氷るしかの浦浪

としことの冬に契りを結び置て

いつくの水も氷初らし

枯わたる水草も霜に風寒て

今朝より氷る池のさ、浪

竹に今朝寒さやこめて山近き

（空百）  
□掛樋の水そむらむ

寒草纒

爰かしこ残ると見るも枯生にて

みとりすくなき庭の冬草

池寒声

氷しく汀に立る枯声の

葉分寒けき池の朝かせ

江寒声

氷しく入江を寒ミ爰かしこ

枯立あしにわたる朝かせ

寒松

霜はらふあらし烈しく吹落て

ゆく袖寒し野への松原

寒松緑

色深くをく霜さむし時雨にハ

終にもみちぬ松の緑も

霰

取笠もくたくはかりに玉あられ

野風もそひて音ぞ烈しき

よる浪の玉にまかりて興つ風

絶す吹まく霰松はら

竹霜

音たてし夜の間の風ハしつまりて

今朝霜しろき窓の呉竹

朝霜

山里ハ寒き日ことの朝霜に

いやかたまれる庭の真砂地

冬月

はる、夜ハ更て寒も真砂地の

氷れる霜をみかく月影

木の間より見る影寒く風の音も

高角山の月そ更ぬる

すさまじき冬の夜なりと向かずハ<sup>(は脱カ)</sup>

心あさくや月にミゆらん

千鳥

夕なきハなれも心の行かたに

友よひつる、浦千とりかも

渡千鳥

うき妻の行衛もしらて由良の戸を

渡る千鳥の声やおしまん

泊千鳥

とまりする舟に一夜の友千鳥

明なは浪の立やわかれん

水鳥

一むらの錦をそへて紅葉はの

なかる、池にうかふおし鴨

庭残菊

今よりハ更に色なき砌とて

心ある菊や残るひとむら

此ころの朝夕霜にかれす猶

残るまかきの菊そえならぬ

雪

千世の色やいつれ増ると松竹の

みとりを深き雪にミスらん

としをつむ光りもあらハ学身を

終にてらさん窓のしら雪

太山にハ消るときなく降そひて

千世の色有松のしら雪

初雪

ちる雪を見すは霜にやまかふらん

た、一重なる今朝の初雪

松上雪

吹はらふかせも音せて雪いく重

つもるまゝなる庭のまつか枝

深雪

ふみ分しきのふの道も今朝のまに

又ふりかくす雪のやま陰

杜雪

神のます杜とて木々の枝ことに

空よりかくる雪のしらゆふ

深雪

はらひあらぬむくら蓬に降そひて

雪のミ志のへそわかれぬ

渡雪

袖はらふ旅人見えて明る夜の

さのゝわたりの雪そさやけき

雪朝遠樹

雲ハ今朝はれ行遠の山松に

木高さそへてつもるしら雪

林間雪

千世の色を幾重かこめて軒近き

竹の林につもるしら雪

常盤木雪

時雨にはもみちぬ松も色かへて

雪にあらかふ常盤木そなき

雪中友

冬河や雪ふる浪に棹さして

今朝やま陰の友を問まし

向埋火

むかふより袖あたゝかに更ゆけハ

霜夜もしらぬ園の埋火

峯炭竈

嶺高き煙をやまのしるへにて

炭うる翁かへるやまミち

神楽

榊葉にをく霜寒ミ小夜神楽

更てもかれぬ本末の声

鷹狩

かくろへる鳥もや有と夕かりに

またふミ立る道の芝くさ

冬夜難明

園寒き風にいく度夢さめて

霜のまくらあかしかねつ、  
夜敷

家々歳暮

ほと／＼におしめとしはしやすはて

宮もわらやも年ぞ暮行

歳暮松

くる春を松たてわたししめ引ハ

誰里分ぬとしのくれ哉

初恋

見るからに人にくからす思ふこそ

恋を身にしろはしめなりけれ

あさからすけふより人を思ひ河

なかれて末にあふせあらなん

忍恋

いはてた、見まくほしさになれゆかハ

しのお思ひも世にやミゆらん

月日経て人もゆるさぬ契あれと

思ふか中はなをしのひつ、

とふまての色に出ぬるうき思ひ

いかさまにして忍び果へき

忍待々

うしや人影こそ見せね月待と

いふもいく夜の槇の戸口に

聞々

世に似すとかたるにつけて心あての

面影をはや忘れぬもうき

聞声々

契なく簾隔る中そうき

琴笛の音に聞かよひても

見々

おもふその人と見るより立そへハ

うしや扇をさしかくしぬる

忘々

たのめをく宵たにとはて明にしや

かく忘らる、初なるらん

契りしにかはる心やたねとして

忘る、草も中に生けん

人ハかく忘れしそうき末遠く

契を憑む中の月日に

待恋

こぬ人を待宵更ぬかならずと

いひしハかはる契ならねと

契々

うきふしの名残も今ハなよ竹の

夜ことに末をたのむことの葉

尋々

里の犬とかむるもうしいもか住

やとりいつくと幾夜たとるを

顕々

人しれぬ契も今はあちきなく

世にあらはるゝ中そくるしき

恨顕々

恨やる中の玉章世にちりて

あらはれし名ハいか、つ、まん

恨

うきふしを告ても人ハさもこそと

聞ぬいらへに恨ミそひつゝ、

数つもる末いかならん契りしに

かはる恨のひとつふたつも

別恋

今朝もうきわかれに残ることの葉を

いつし逢夜にかりり尽さん

人しれす見送るかたにかへり見て

行もとまるもうき別かな

惜別恋

見送りて名残尽ねハしハしたに

伴ひ行んしのゝめの道

恋河

あさからすけふより人を思ひ川

なかれて末におふ瀬あらなん

増恋

あはぬ間もおふ夜も増るうき中の

思ひハいつを限成らん

恋書

色ふかくことの葉おほく書やらハ

あたにや人の水くきの跡

夜恋

あひミてのよるこそ増れ思ひ跡の

身にしらさりし恋の心ハ

不逢帰恋

立帰る道たとくしかならずと

思ふ今夜も逢ぬつらさに

秋恋

袖の露ひるまもしらす秋の夜の

ななき思ひをかこつ名残に

寄草恋

あふことハしらぬ恋路のあやめ草

引に増りてぬる、袖かな

寄夢恋

思ひねの心つからにおふと見し

夢の名残を忘れぬもうき

々山々

うしや今ふしのねならぬ恋の山

思ひの煙た、ぬまそなき

々花々

うき身をハこてふになして露のまま

見るかかさしの花に馴はや

々席々

契ありていつか枕をならへまし

うき独ね床のむしろに

々枕々

松をこそうつし絵にせめ末遠く

千世もと契る中の枕ハ

雑

浦鶴

和歌の浦や千とせを松の陰しめて

なれも久しく住る友鶴

海眺望

唐土のさかひいつこと見たすも

末遥なる興つしら浪

浪た、ぬ田子のうら風末はれて

ふしのね遠く三穂の松原

眺望

うへわたす早苗に水のさハリなき

淀川かけて向ふ千町田

浦松

千年ふる陰におもへハ住吉の

浦とて松やねさし初けん

遠村煙

吹はらふ山風見えて一むらの

夕けのけふり立そつゝかぬ

山家

おくふかく何かもとめん世はなれて

すめハ外山の庵も静けき

世のうさハ我身ひとつと思ひ入

太山の庵もとなり有けり

庵めくる水も心の清けれハ

あるしをさそと思ふやま陰

誰すミてなかめ捨にし跡ならん

軒端朽ぬる太山への庵

かくれ家をしむる心のおくも見す

あさくや人の山に入らん

身にそへる浮世ならねハめつらしき

住家を山にもとめてもミン

大内の名におふやまも陰しむる

庵は都に遠き静けき

山家杉

やまふかく又こそ入らめとはかりに

はやいくとせか杉の下庵

松

ことの葉のつきせぬ世とていつくにも

さかふる松の陰もミえけり

山村

一村のやま里なから嶺をしめ

谷に結ひて庵そつゝかぬ

暁

けふもとく仕ん道にたとらしと

おもひつゝけてあしたをそまつ

夕鐘

なす業におこたりし身をけふも又

入相のかねや驚すらん

樵夫

朝なゆふななるれハおもき薪とも

おもはて嶺やこゆる山人

暮林鳥宿

あしたよりおなしねくらを契てや

くる、はやしに帰るむら鳥

寄弓祝

末遠くためしにひかん梓弓

今ハ袋にをさまれる世を

寄国祝

四方の民あふくや君の恵にて

六十あまりの国やすき世を

述懐

何事も心おそきを歎身ハ

いと、及ぬことの葉のミち

暁述懐

暁に起いて、こそ誰も身の

一日の業をやすくすならめ

懐旧

隔なきひしりの御代と古を

思ふに今も仰く諸人

当国十二景

高隈朝霞

立ま（よカ）かふ雲よりうへに高隈の

嶺ほの（カカ）とうすむ朝戸出

桜島春月

浪かすむ月のミ春の桜島

よをへて花に影もめてまし

荒田蛙声

すき返す後も聞かまし水草生る

あら田の暮に蛙なくこゑ

燃崎夕立

もえ崎の名はそれなからあつからぬ

風も吹出て過る夕立

境河千鳥

さかひ川みちくる塩にさそハれて

浦の千鳥もせ、やとふらん

開聞暮雪

名にいへと空にそひへしひらき、の

高ねのミ雪くれそいそかん

洲崎浮鷗

爰かしこかもめそうかふ興つ風

なきたる朝の洲崎遙に

隣村夕照

くれちかくにきハひけりな夕付日

照らすとなりの村の往来ハ

青屋晴嵐

松高き青屋の里の夕嵐

梢に見えてはる、雲きり

松原晩鐘

松原未はる（の脱カ）と寺みえて

木の間にひ、く入相のかね

軽砂漁火

浪洗ふ興のしらすは色くれて

ほのめき初るあまのいさり火

遠帆連波

真帆引ていそくに舟ハ思ふかたの（千九）

かせにいつこの添（みなとカ）いてけん

五節句天明三年

正月七日

青馬のいさむ影見る春にあひて

老もわか葉をのへにこそつめ

三月三日

花の名のも、の齡を幾春か

柳の糸のくりかへしつ、

五月五日

かりそふる蓬ヨモギも千世の根さしありて

軒のあやめの色を争ふ

七月七日

玉の緒のたえぬにつけて影みかく

星のおふ夜を仰く幾秋

九月九日

花盛ふりせぬ秋も長月の

けふ待えたる宿のしら菊

牛滝のもみちを紙にすり付て御讃を乞

ゆかはそと心を引や牛滝の

山路の秋を移す紅葉に

仁和寺宮より糸桜の枝を給りければ

手にとりてくりかへし見る糸桜

かゝる恵をたえず仰かん

土佐国府旧跡の碑文清二位著述其裏に書へき歌  
ありし世にやとりしところ末遠く

つたへん為と残す石文

天明六年八月廿七日、高祖父瑞巖院(日野弘資)前西相の百

回御忌にめぐりきぬ、此卿は

後水尾院・(明正院カ)照明院・後光明院・後西院・靈元院

五代の聖朝に仕へ奉りて数年、武家伝奏を勤仕

あり、歌道を崇敬して後水尾院より古今集の御

伝受を成下されたり、在世書集られたる秘書と

も家に残りて亀鑑となる、仰くにも高き御功業

也、御跡をしのふけふしも、嫡孫資愛禁中の児

に仰を蒙りぬ、かゝるも御守とかしこまりおも

ふに、庭の萩盛なるを見て、

も、とせの跡とふけふに咲や此

小萩も露の恵ミとそ思ふ

さてく不思議めて度事一首尤至極二候、

菅谷又四郎願吉野の桜立田の楓を以作し干瀉硯

名も高き花ももみちもこきませ

浦のひかたの春秋にミン

勢州津の本徳寺所持の釜を三穂と名付て

絶す立富士の煙を契にて

木陰常なる三穂の浦松

関東御門弟松若菜を紙に包て献す

おくりこし松も若菜もこき交て

手にとる千世の縁をそ思ふ

有川貞澄の六十の賀して同月廿八日有川次郎八

願

薩摩かた年ふる松ハ六十より

いく度老の浪をかくらん

八十の賀丹州湯浅五郎父

老ぬるをいはふ八十に九十

も、とせちとせかそへあくらし

六十の賀佐藤金庵

かそへこし六十かさねても、とせに

廿あまりの寿も経ん

江戸青山監物百五十年忌追善

百とせに五十かさねて遠かる

昔を今も水くきの跡

月杜鵑の絵

見る影になれもさやけき声そへて

月のあたりを行郭公

御門弟妻木平十郎関東の花を進上歌をそふ御返

歌

残（浅カ）からぬ心の色のそひぬれは

都に來ても匂ふ花の枝

大黒御讚

此神のとめるをあふき忘らぬ

わさこそ家の宝なるらめ

惠美須御讚

祈るより心を引て釣りの糸の

なかくも神の守る行末

播磨国赤穂住人田淵政武松の皮にて作たる香合

をもたり、此香合は明和の初春陰と名付て、あ

りとしもしらぬ宿の松ハとく栄ふる春の陰やミ

すらんとよみて、ある人に贈りしを乞とりて、

新作の茶室春齋の歌をかくと書付よと望しかは、

求に随りぬ、

春の陰さかへを見せて幾千世と

松に契りも結ふ庵かな

青隈河の埋木に作りし文台銘

朽せねはことはの花に青にかく

あふくま河のせゝの埋木

麦亀の絵

時來ぬと麦ハ穂にいつる小山田に

猶尾を引て亀そたのしむ

千町田絵

千町田の早苗のみとりかわらねハ

いつも豊けきとしそしらるゝ

桜御所車絵

咲初し時よりいつも花の本に

心や引てよする小くるま

牡丹鶴

いくとせか松かけしむる妹とせの

鶴ハひなさへあまた添ぬる

末松山の松、宮城野の萩の枝の筆を参らすとて、  
贈るそよこのひな筆フデハ名所の

松と小萩と見ぬ君かため

重村上

末松山の松、宮城野の萩をつかにせし筆を給ひ  
けるを謝す、

資枝

ことの葉の花咲筆よ名に高き

松も小萩も見ること、ちして

長崎通護京都在番の秋、高雄山に分て楓葉を拾  
ひ、元紙にすりて故郷に送りやりて、うるはし

き紙なれば筆をとりぬ、

秋に名の高雄のもみち拾ひきて

すりたる紙も色そこかる、

別紙に

見せはやとおくる心の色そへハ

ふかき高雄の山のもみち葉

松駒絵

栄へ行千世まつ陰に放ちかふ

駒打むれていつもはなれす

松影千年瑞

此宿のあるしの齡千とせそと

あらはす庭の松や木高き

霞

千世の春もこむる霞に薩摩かた

さそのとかなるミるめかるらん

秋野

武士の分ならず野のくつハむし

鈴むしのねもそへて鳴らん

月

雲はる、さつまの海の沖遠く

もろこしかけて月や澄らん

水

豊なるとしハいつくもあつ水

結ふを民の見るやたのしき

雪

国とめるさつまに積る豊年の

雪も幾度老ハ見るらん

寿老人星絵

南なる雲ををしめてとことハに

ひかりくもらぬ星そ久しき

大溪上人饞別御会

春旅

朝霞立わかれてハ故郷の

春を隔るおふ坂のやま

夏旅

あつき日のかけそふ程を松陰に

しはし立よる旅の衣手

秋旅

夜比経て霜もむすはん草枕

や、秋寒き露のかりねに

冬々

故郷を思ひねにせし旅枕

寒さを侘て夢もむすはず

朝々

旅衣たちいつる宿の朝なく

遠さかり行都をやおもふ

夕々

夕まくれとまりいそけハつかれきて

道をたともうき旅のそら

旅衣

立出て心隔な旅衣

さして東のミちとをくとも

々友

旅衣おなし道にと行つれて

心隔ぬ友そしたしき

々宿

かりの世に結ふかりねの旅枕

日に法の師はうき事そなき

々祝

東路やこゆへき関の神垣に

やすき往来を祈ることの葉

已上本妙寺日如所持也、

玉

皆人の心のうちにみかく此

資補

資補

阿利丸

玉こそくちぬ世のたからなれ

立春暁

いとはやも暁かけてくる春を

八声の鳥や告わたるらん

橋霞

浪たてる松の梢もはるくと

霞わたれる天のはし立

春雪

さえかへりあらし烈しき此朝け

庭に打ちるはるのあは雪

若木梅

移しうへし若木の梅のことしより

春しりそむる香こそえならぬ

路柳

よりて見る人こそたらぬ道のへに

えならすなひく青柳の糸

磯春草

浪かすむ磯へのとかにもえわたる

草葉や春の緑そふらん

故郷花

故郷の春を忘れず花ハ猶

あれし軒端に匂ふ一本

夕蛙

水遠くかすむ田面の夕くれに

所をえてや蛙なくらん

折款冬

あかす猶手折袂に夕露も

こほれて匂ふやま吹の花

岡藤

春ふかく咲る岡への藤の花

往来の人もあかすとやミる

暮春水

吉野河花ハなかれて行水の

せきもと、めぬ春をしそ思ふ

新樹

散り残る花さへ今ハ夏山の

木々の若葉そみとり添ゆく

待郭公

待侘る心もしらて時鳥

初音つれなくおしむ此比

聞々々

関守のね覚とふとや時鳥

啼音夜ふかきおふ坂の山

菖蒲

ふきわたす緑す、しく露ちりて

軒端のあやめ匂ふ朝風

五月雨

山河の水音そひて今幾日

をやミなくふるさミたれの比

夏草滋

分ゆかん道もいつことたとるまで

茂りあひぬる野への夏草

沢蛭

とふほたるあさ沢水に浅からぬ

をのか思ひやもえてミすらん

夏月

夏の夜は霜にまかひて澄月の

影もす、しき庭のま砂地

山夕立

一通りはる、を待て分のほる

山路に又もきほふゆふ立

江萩

浪ならて声そへけりな住の江の

松吹かせにそよく萩原

崎萩

舟よせてあかすそ愛るけふ爰に

見そめか崎の萩の盛りを

蘭薫風

きて見よと風もやかほる蘭

日も夕くれの野への行手に

園虫

夢さめて哀にもあるか秋寒き

園の戸ちかく虫の鳴声

谷鹿

行返り妻こふ鹿や谷陰の

ふかき思ひに侘て鳴らん

月出山

嶺高ミ待いつる影に山松の

かすさへ見ゆる月のさやけさ

泊月

浪はるゝ影もあかしの泊ふね

うきね忘れて月を社見れ

岸紅葉

河岸に枝さしおほふもみち葉の

陰や行せの浪を染らん

初冬風

野分たつ秋にも増る山風ハ

今朝より冬の初とやふく

池寒芦

霜はらふ音も寒けし村芦の

冬かれわたる池の朝かせ

湖水

吹おろすひら山かせの音寒く

この比こほるしかのから崎

浜千鳥

隔てゆく妻やうらミて興つ浪

たかしの浜に千鳥なくらん

竹雪

降そひてなひくと見れば起かへり

折へくもあらぬ雪のなよ竹

島雪

降も猶つもらぬ浪に爰かしこ

浮へる雪や興の島々

歳暮松

くれて行としハ日数もあらし吹

松や色そふ春いそくらむ

春恋

千に摘ていつれの春か恋草の

わか葉の露の契かくへき

音になくもそれとハしらし妻こふる

野へのきゝすを身のたくひにて

末なかく色よかはるな咲藤の

花にもかけて憑む契りハ

夏恋

あかなくに憑む契りハ夏衣

たち隔ゆく中そつれなき

よひ／＼にくゆる蚊遣の煙りにも

立増りぬる思ひとハしれ

秋々

色替る中共しらて浅茅生の

露の契りハ何にかけ、む

哀とは聞かしの虫に身をなして

思ふあたりの露になく共

うき契りくれゆく中の秋風に

身ハまくす葉の恨そひぬる

冬恋

思へ人落る泪もこぼる夜ハ

うき独りねのさむさそふ身を

寄木恋

我門に杉た、すともとへよ人

心のまつをしるへにそして

々筆々

思ひ余る心をかくと告やるも

つたなき筆ハかきえぬそうき

名所山

たくひなや裾野ハ日影さしなから

空につもれる雪のふしのね

々々里

雲かゝる外山のあらし音そひて

時雨催す秋しの、さと

々々原

くれふかミ分る浅茅か末葉まで

露置あまる小野の篠原

暁旅

草枕また夜深きに起出で

鳥の八声をゆく／＼そきく

朝々

朝露のとく起いて、行野への

霧にそしめる旅の衣手

夕々

やとりとる里たに見えず旅衣

日もゆふくれの道いそく也

夜々

松の火のてらすを道のしるへにて

よるも越ゆく山そ遙けき

旅夏

草枕つかれやすめてぬる夏も

分し野山を見るかくるしき

独述懐

かくはかり人並ならぬおろかさ

た、身ひとつに歎く明暮

(義久)  
龍伯公御詠歌

初当英国退治の時、風浪安平を守護せしめ給

ひし諏訪大明神の御霊前法樂したてまつるも

の也、

夕涼ミさ山おろしにさそはれて

つなきし船の出るみなと江

○中院通茂卿

○小森一山上京之節覚書

宝永五年

六月四日辰の刻に上京進上の物と、のへて、巳の刻に御殿に伺公す、小川隼人殿被出向、今日者御出あらふと存ましたに、依 御用参 内被成、八ツ時に迎まいれと被申付ました、直に御待被成ましやうもさハリハ御座りませぬ、又何方へもこさりまして、八ツ時に御出被成ましやうも御心次第といはれしかハ、さらハ外へ参ましてその比参上仕ましやうと申て、御所の御裏方に高田茂太夫の小屋に行て奉待る、進上の物ハ隼人殿被取入し、扱此春御上せ被成ました一巻、御自分上洛の事を被聞まして夜前御点すみました、此節も御詠草御持参かと被申る、御目見の次手にハ恐多く存ますると申せハ、いやくるしかるまし、拙者前より御目に懸ましやう、直に御指南を被為聞ましてこそ御稽古に成ましやう、ちよつと御書被成、後程御懐中被成ませハとす、め被申しかハ、高田氏の硯かりて船中にての歌の内五首書る、奥に記之、八ツの時計鳴るを聞て参る、隼人殿被出、御客こさりまする、こなたへとて、御式台の御勝手

の間に呼入らる、追付御立被成ましやう、些御待被成ませいとひて、内へ被入る、たはこ盆出つ、暫くありて御客御立、やかて隼人殿被出、こちへといひて、御式台の次の間に被呼入、当春の御詠御点被成ましたと被申わたさる、謹て頂戴披き拜見し懐中す、先刻も粗申ました、先年蓮光院にて乍不似合御門弟の願申上、愚詠奉備 御覽度毎御取成を以て御点頂戴仕、誠二恐入難有仕合、偏二御かけてござりますると、くハしく其礼を申す、御進上の品披露いたしましたにも、品々被懸御意忝存ますとの一礼被申、さてさきに申ました御詠草ハといはれしかハ、懐より出し、これは此度船中にて仕ました、宜く御取成頼ますと申て渡す、やかて 御前へ被召出御目見仕隼人殿披露、 御ゑほうし・御かりきぬ・御指貫をめして上段ことき御座におわします、先刻も此方へのよし参内いたしてと 御意なざる御受申上、さて隼人殿に向て年来愚詠奉備 上覧御点被遊被成下、当春差上りましたも、夜前御点被遊頂戴仕難有次第二奉存ますと御礼申上る、何かに取紛延引したに、

其方上洛しやと聞て夜前点をした御意なり、忝次第に奉存ますと隼人殿に申時に御意被遊ハ、其方の国元などより見にこした歌に、よいもありまたあしきもあるハ、ふるき歌の詞をよく合点せさるゆへしや、其方も奉公の際に三代集をみや、その内にかてんゆかぬもあらふ、それハ季吟かしたる抄すへてハミねと、大概よい古今ハ子細あるものしや、抄もあまたあれとも、とれかよいともいはれぬ、後撰拾遺ハ季吟か抄をミヤ、また草庵集、これハ板行にもおほい、これをミヤ、此書ともを見て古き詞を合点して、題にのそんてうかふ趣向を其心の古き詞を以てのへやれ、又類題といふ書がある、これハさま／＼の題の歌がある、それをも見て其題の古き歌の詞をよく合点しや、就中恋の歌か誰かやるのにも、まにあふもあれと、わろいかおほい、それハ恋の次第かあるをしらぬゆへしや、まつ初めの恋といふ題は、初めて心頭にふつとうかひ出る思ひの事しや、夫をいろ／＼の心にいひたかへるによりて、まにあはぬ見恋ハみすもあらず、ミもせぬ人の恋しくハあやなくけふや

詠めくらさんとよめる歌か見恋の心しや、みすもあらすといふハみぬでもないといふ事しや、みもせぬハみたでもないといふ事しや、ミぬでもない、みたでもないといひて、畢竟ミた事しや、さやうの人の恋しくハあやなくけふや詠めくらさんといふ事しや、あやなくハ無益しや、けふや詠めくらさんとよめる、是か見る恋の心しや、それハ車の下簾より女の顔のほのかにとあれハ見もせぬとあれとほのかに見た事しや、又聞恋はその人をまたみすして人伝にきいた事しや、忍恋ハしのふハ堪忍しや、涙などの落るを堪忍し隠す事しや、又名の立ん事をもかくすを忍恋とハいふ、待恋ハわかおもふ人のとふを待事、逢恋ハおもふ人にあふた事、別恋ハあひミて暁にわかる、事、後朝(恋脱カ)ハわかれて後の朝の事、逢不会恋ハ前廉逢て其後にあかぬ(はカ)といふ事しや、旧恋といふ題がある、心ハ逢てあハさるの題と同じ事しや、むかしあひミて後にあはぬ事しや、絶恋ハ中の絶たこと、恨恋ハ向の人をうらむる心しや、ケ様に次第のあるをしらいてよむゆへ、まにあはぬ歌かおほひ、是を

よふかてんしてよめやれ、又寄恋といふ物かむつかしい、それハたとへハ寄雲の題にて、よむにハ雲の縁を以て惣縁を調へるかよい、よせ物のかたはかりによめるハわるい、左様ニ其物の縁を以て惣縁を調へて恋の心ハいか様にもいひたいやうによむ、是にハ恋の次第ハない、其方ハ今ほと逗留かと御意被遊、明後日伏見罷立ますと申上る、かやうに直にいひおしへるやうに書付にハ達候、かたい事かある読方の書といひて色々あれと用に立物ハないと、御意也、其時隼人殿に向て初てケ様成儀を承知仕ました、御意被遊趣一々感心仕、難有仕合に奉存ます、恋の題の次第御座ります事を承知仕驚入ました、田舎にてハ左様の儀を承りませう様も御座りませぬゆへ参会仕、読ましてもとれかのか達しましたやら達ませぬやらわかりませぬハ、た、口にまかせ申たる迄てこさります、仰の趣を以て今日はしめて存知ました事のミに御座ります、逗留も今少はかりの儀にて、誠に残念に御座りますと申上る、樺山助太郎上せた歌もいまた見もせぬ、助太郎ハ数寄であるそう

など被 仰、御意の通りにござります、先祖に歌

を読ましたか御座ります、祖父も仕ました、助太

郎若年よりいまた断絶なふ仕まして、以の外数寄ま

して御座ります、毎々参会仕ますと申上る、さ

てハと 御意也、時に隼人殿船中の歌を御前へ持参、

此たひ船中にて被読ました歌で御座りますと披露し

て差上らる、御取一篇 御覧、是ハ皆よそ<sup>(脱カ)</sup>うな硯と

被 仰、御小姓衆持参墨を御贈あそはしなから数篇

御覧、高く御吟しなと被遊也、其一巻の歌、

此たひ東の旅に立、二日はかり陸をきて船に

乗けるに、

きのふまで露にかた敷旅の袖

波の まくらの波にいか、しほれん

肥後国天草島より肥前の松島にわたれる所をち

くわ灘と申伝る、此時唐船さあひて、ともにわ

たりけるに、

見も馴ぬ唐土船を友船に

わたる舟路ぞ行衛しられぬ

おほつかなうきたる風にまかせ行  
舟のとまりハ誰かしらなみ  
五月半安芸国いひ桶の添の沖を過るに、往昔か  
の添に舟を留て郭公を聞侍る事を思ひ出て、  
とまりしてむかしハき、つ時鳥  
今ゆく舟のほのかにもなけ  
淡路の瀬戸にてみなきるしほに向ひて通ける時、  
淡路島瀬戸吹かせを追手にて  
しほさかのほる舟もなつます  
さて御意あそはさる、ハ、此露にかた敷といひてハ  
聞えぬ、露をかた敷といへは聞ゆる、又枕の波も聞  
えぬ、旅泊にハ舟にかちといふものがある、それを  
枕にするをかち枕といふかことく、波の枕とハいひ  
ならハした枕の波とハいはれまいそうしやに依て、  
露をかた敷といひ、波の枕となをした、又いか、と  
ハ心かたかふたいか、といひてハ、しほる、といは  
ねハならぬそうしやに依て、又やしほれんといへハ、  
其方か趣向の通りに聞ゆると被 仰也、誠に心肝に  
とる様にて、御尤至極に奉存しかハ、隼人殿に向

て先にも申上ましてござりまする、初てケ様なるわ  
かりを奉承知、御尤至極に奉存ますと申上る、然ハ  
御筆をとられ、御直しの御詞をあそはし、つけ御点  
をかける、夫より次々に一篇つ、たかく御吟し被  
成、御点をあそはして、淡路島せと吹風を追手にて  
と猶たからかに御吟し被遊、此分ハよいしほさかの  
ほるといへる詞聞、ならハぬ上の句の心ならハみる  
かうちにも過行、心なとにいほふるを船もなつま  
すといへるか聞えぬ、なつむとハ浅瀬などに行とま  
りて舟のうこかぬをいふ、瀬戸ふくかせを追手にし  
てあらハなつますといふにも及ぬ事しやと被 仰、  
是又御尤に奉存ますと申上る、私の存しましたハ川  
舟のみほさかのほるとよみましたか御座りますと覚  
ました、その心を以てしほのなかれきたるに向ての  
ほりまする舟ゆへ、なつますと仕ましたと申上しか  
ハ、其方かいやるやうに、みほさかのほると読んた  
かある、それならハいはれまい物でもない、されと  
しほさかのほるにてハまた聞えぬと 御意にて、数  
篇御吟し被成御沈思也、や、ありて其時ハ夕塩てあ

つたか、朝夕かと御尋也、夕塩てござりましたと申  
上る、淡路の瀬戸ハ明石の瀬戸の事のと被 仰、そ  
の通りに御座りますと申上る、又御工夫也、 御意  
あそはさる、は其方よミやつた句をおほふ、されと  
かういひてハ其方かおもやつた心ハ聞ゆると被 仰、  
夕塩にさかのほる舟ハ追手吹

風こそたのミ波のかよひ路

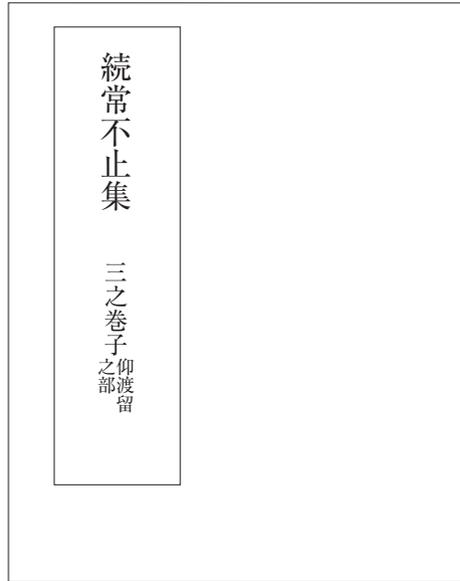
と御吟し被遊る、御意の通りに追手の風を以て、其  
時舟ハ通りましてござりまする、御尤の儀に奉存ま  
すと申上る、しかれとも又 御工夫也、や、久しそ  
のあいたふと心に浮ひ思ふは、凡下の我等として公  
卿の御前ちかう罷居、 御直に 御意をも奉承知、  
乍恐御直に御受申上る事ハ、此道によらすハいかて  
難叶事也、されと我等式の歌をかほとまて 御心に  
かけられての御沈思還て御罰をもちかふるへきと、  
恐多奉存、依之隼人殿に向てさきの御直し奉感心ま  
した、私等の歌をかほと 御心頭に御かけ被遊恐入  
まして御座りますと申上る、隼人殿よりまつさしを  
かれて以後に被遣ました、かよう御座りませうと被

申上しかハ、私を 御覧あつて、いにたいかと  
 御意被遊る、いや左様でハこさりませぬ、私式の歌  
 をもかほとまて 御心頭に御かけあそはし、誠に恐  
 多奉存ます、其上 御前にも程久しう罷居まするも  
 憚多く奉存ますると申上る、さらハまちやと 御意  
 也、そこへ茶をと被仰、御小姓衆御茶被持来、二ふ  
 く被下之、や、ありてかういへハ、其方かよミやつ  
 た句を去すしてよけれども、第一二かとうもいはれ  
 ぬ、夕塩にさかのほる舟ハなつむともなし此夕し  
 ほにといへハ、第二の句に、何として夕塩にとつ、  
 かねハならぬ、此趣向ハむつかしい、追手にてとい  
 へは舟のはやく過行心しやに、下になつますといへ  
 る事かあれば、それに相応する様にハいひつ、けに  
 くい物、始めのて聞えてハあれと其方かよミやつた  
 句を、いて聞える様にといふ事しや、此様に一二句  
 に成て、下によい様にかつ、けにくい物しや、是ハ  
 誰上にもある事しや、それに依て隙取など 御意被  
 成、やかてこれてよいと被 仰、追手ふく風待ミて  
 ハと御吟し被遊御治定也、さありて墨を御摺御なを

しあそはされ、是ハそこ／＼さりて見にくからうと  
 被 仰、これをくたさる、隼人との取て被渡、謹て  
 頂戴し、誠に難有仕合とかふ申上ませう様も御座り  
 ませぬ、可然様に御礼被仰上被下ませいと申て、御  
 暇被下ませいと隼人殿に申時に、御ちやうし・かわ  
 らけを御小姓衆被持出、御前へ御かわらけ被召上  
 頂戴す、隼人殿御看被下ると申されしかハ、いそぎ  
 立て御側ちかく参り頂、さけの魚のかす漬也、御か  
 はらけとりて引しざる時、これへ／＼と御意被遊、  
 隼人殿に向て 御盃頂戴仕るさへ、至極難有次第に  
 奉存ます、其段ハ御断に奉存ますと再三申す、さら  
 ハ拙者に被下ませいと被申ゆへ、遣之、しかれハ  
 御前へ持参 御取上被遊、少被召上御ちやうしおさ  
 まる、則御暇の御礼仕罷立時、又もと 御意被遊、  
 謹て御礼仕り退出す、使者の間にて隼人殿に御引廻  
 を以首尾好御目見仕、御指南を直に奉承知 御盃  
 頂戴、私の盃をも 御取上げあそはさる、段恐人、  
 還て御罰を蒙りませう、御心得を以御礼宜く被仰上  
 被下ませい、偏に御自分の御引廻てこさりますると

申せしかハ、御信仰通しましたと見得ますると挨拶  
なり、御式台まで送出られ一礼、互に終て退出仕也、  
今日八ツ時少過より七ツ時半過まで御前へ罷在て、  
いま罷帰る道すからかたしけなさを思ふ、外に無他  
事たけたの道にて暮果夜に入て伏見に帰り着ぬ、事  
の次第わすれぬ間にとて、灯前に筆をとりてありつ  
る様、いたく心にしミておほえける事をこそわすれ  
ねハかくしるし付し、其外いみな跡もなし、さては  
又かしこけにしらぬ歌詞に書をかは、実をうしなひ  
つへけれハとありのまゝに平話に記也、

〔表紙〕



続常不止集 三之卷子

弘化三年丙午九月中

名越篤烈

弘化元年仰出

一琉球産物方

右之唐物方引弘被仰付候所、御吟味之訳有之、別段

右之通被召建候、左候而、筑地御茶屋内江御座被召

建候条、此旨向々江茂致通達、奥掛・御勝手方へも

可相達候、以上、

日置（島津久風）

和泉

黒木（島津久宝）

主計

（朱書）弘化元

辰正月十日

（調所広郷）  
笑左衛門

続常不止集

三之卷子  
仰渡留

之部

一御記録奉行江先年薩藩名勝志取調方被仰付置候所、

追々相濟候段届申出候付、再撰方引弘、於御記録所

致清書候様被仰付候条、此旨御記録奉行へ申渡、可

承向々江茂可申渡候、

十二月

石見

一去ル亥年より唐物御商法、公辺御差支之廉有之、

御差留被仰渡候所、琉球之儀者和漢通商之利潤を以

立行来候国柄故、度々御願被仰立被下候得共御取揚

無之候、依之此節唐物方引弘被仰付候、此旨可承向

へ可申渡候、

(朱書)「弘化元」

辰正月

(調所広郷)  
笑左衛門

(久徳)  
島津登殿

右者、多年致精勤年齢八十余才罷成、極老之御取訖  
を以紅裏小袖被成御免候、以来勝手次第可致着用候、  
且又壯健之事二者候得共老体之事候付、御先立并月  
番方相勤候儀御憐愍を以被成御有免候、諸掛并平日  
御用之儀者は迄之通相勤候様被仰付候条、此旨向々  
へ可致通達候、

(朱書)「弘化元辰」  
正月

(島津久宝)  
主計

一御楼門開御修補二付、明後廿三日より北御門可致通  
融、

一右同断二付、御門外小路諸人通融差留候、万一非常  
之儀有之通融無之候而難叶節者、時宜次第可差留候、  
右之通、表方へ致通達、奥掛・御勝手方へも可相

(朱書)「弘化元」  
辰二月廿一日

(猪飼尚敏)  
央

一御側詰

一御役料高五百石

一御側役兼務

(久徳)  
碓山将曹

右者、別段厚 思召之御訖被為

在、右之通被 仰付、御役料高被下置候、

右之通、去七日於大坂御殿 御直二被

仰付候段申来候、此旨表方へ通達いたし、奥掛・

御勝手方へも可相達候、

(朱書)「弘化元」  
三月

主計

一諸人盆祭二付、身分不相当結構成灯炉等取建相備候  
儀不相成段申渡置趣も有之候所、近来紗張等二而結  
構成灯炉相備、又ハ墓所へ苦葺等いたし、酒食取は  
やし候儀も有之哉二相聞得、別而如何之至二候、右  
二付而者見分をも掛置候条、万一違背之者も候ハ、  
屹と可及沙汰候、此旨向々へ可致通達候、

(朱書)「弘化元辰」  
七月

主計

一年頭初・隱居・家督其外祝事等之儀ニ付、此度御吟

味之上別紙通被仰付候間、一統難有奉承知聊忘脚致

間敷候、就而者最早別段申渡ニ不及事候得共、是迄

上中下共上巳・端午又ハ婚姻等取組候節、分限不相

応之取仕立、或者右祝等之節、料理向其外菓子類ニ

至り別而結構過言語道断之次第候、又者七月十四

日・十五日諸所墓所へ酒食取はやし、甚不埒之儀ニ

候、灯炉・香花手向候儀者其道茂可有之候得共、右

通酒食取はやし候事ハ以来屹と差留候、万々一心得

違之者茂候ハ、不差置可被及御取扱、右之通、

向々江不洩様可申渡候、

(朱書)弘化元

九月

(島津久宝)

主計

(島津久浮)

石見

(菱刈隆親)

安房

(猪飼尚敏)

央

右之別紙者数ヶ条之仰出、其比之日記ニ留置候間、

今爰二略ス、

一御楼門開御修甫付、御門外小路諸人通融差留置候得

共、明三日八ツ後より通融之筈候、此旨表方へ致通

達、奥掛・御勝手方へ可相達候、

(朱書)弘化元辰  
九月

安房

一御楼門開御修甫相濟候付、明九日より通融之筈候、

此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へ茂可相達候、

(朱書)弘化元辰  
十月八日

央

一当七月中長崎表江阿蘭陀国使節軍船壹艘渡来書簡差

上候、右大意者外国通商相願候儀を申立候迄ニ而、

外別条なき事ニ候、世上ニおひてハ彼是雜説茂可有

之哉候間、心得罷在候向々江無急度可被咄置候事、

右之通、從

公儀被仰渡候段申来候条、向々へ可申渡候、

(朱書)弘化元  
十一月

央

一大目付江

御本丸御普請ニ付、先達而願之通上納金被

仰付候得共、近年諸国作柄不宜、西丸炎上之節上納

金御手伝被

仰付、其外御普請・御修復等ニ而御手伝御用数度、

且公役繁々被

仰付候折柄之儀ニ付、此度者格別之思召を以願濟之

通ニ者上納ニ不及、壹万石付五百兩之割合を以上納

被仰付候、尤、今般願之通上納金被仰付候面々茂、

右同様之

思召ニ付、願高之通ニ者上納ニ不及、壹万石ニ付而

五百兩之割合を以上納被

仰付候、右之通被

仰出候付而者、銘々文道武備之心掛、手当共是迄よ

り今一際厚く引立候様ニとの 御沙汰ニ候、納方之

儀者何茂三ヶ年ニ割合上納候様可被致候、尤、最前

願濟之節、年限之儀相達候向茂可為同前候、

右之通、万石以上上納金願濟之面々并其外へも不

洩様可被達候、

(朱書)弘化元年  
十一月

別紙之通従

公義被仰渡候条、以下略、

右之頭二十万兩御上納金之筈也、此仰渡ニ而壹

万兩ニ不及、

十二月二日

御家老座印

一礼讓之儀ニ付而者、先年来追々仰渡之趣茂有之取違

者無之筈候得共、比日郷士・与力又者足輕共之内、

間ニ者尊卑之弁薄、儀礼ニ而罷通候者茂有之由、甚

不都合至候、第一頭役共申聞様不行屈所より連々等

閑之向ニ成立、別而大形之至候、以来屹と相守、右

体不敬之儀共一切無之様可申聞旨向々支配頭へ可申

渡旨、頼母殿より致承知候事、

但、承知之名前別冊ニ可被記置候、

(朱書)弘化二  
巳三月廿日

御目付

一鬼頭灯炉

但、七寸角以下輕可相調候、且平角灯炉相調候儀

者勝手次第、

右、直触以上、

一平角灯炉

但、しへあり、

島津豊後殿（久志）

右、諸士以上、

右者、元祖以来相用來候家名二候所、

一四角灯炉

御近代被遊御用候得共、此節別段之以

但、しへなし、

思召御返被下候付、名替之願被申出、願之通改名被

右、郷士以上、

仰付候条、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へも

右者、盆祭付墓所等江相備候灯炉結構二取仕立候茂  
有之間、外見を飾り候風俗別而不可然事二候、灯炉

可相達候、  
六月（朱書）弘化二巳

（猪飼尚敏）  
央

手向候儀者志迄之儀付、以来右之通被相定候条、金

銀箔類并紗絹、或手組候色紙類を以張調候儀、又者

絹物すかし等決而致間敷候、質素・節儉之儀付而者、

先達而細々被

一御城内供婦之節、家来者半股立、中間以下致供候姿

仰出候趣茂有之、申渡置通二而、右準折角手輕相調

二而、下馬先迄も可致往来事候所、比日

候様可致候、右二付而者見聞をも掛置候付、乍此上

無之様主人より稠敷可被申付候、万一右体之者見当

不守之者ハ屹と可及迷惑候、此旨向々へ不洩様致通

候ハ、御門番并立番より主人名元承届、御目付へ

達、諸郷・私領へも可申渡候、

受候ハ、不敬之儀無之様是又可被申付候、

（朱書）弘化二巳  
五月

（麥刈隆親）  
安房

一町人其外下人類、寺門前者之内長腰差を帶、且又日

（調所広郷）  
笑左衛門

傘相用身分不成合之為体二而、士以上江対し候而茂

致麁礼、剩凡下之者共齒付下駄を履致徘徊候者茂段々

有之由相聞得不届之至候、且又雪駄等二至迄革緒付

主計殿事

相用候儀者屹と差留候条、聊取違無之様可申渡候、

右者、先年以來嚴敷仰渡之趣茂有之候得共、程過  
候得者緩せ相成、別而如何之至候、右二付而者為

取締横目廻勤申付置候付、右体之者見当候ハ、名

前承届、帯居候脇差取揚申付、尤、不敬之者二就

者御咎目可申付候条、支配頭并主人より稠敷可被

申聞旨、向々へ不洩様可申渡候、

(朱書) 弘化二巳  
六月

大目付

(朱書貼紙)「外飛一通」  
一華倉御茶屋

右者、中村御茶屋地面御手元御製薬方江被差出候付、

右引替二吉野村之内華倉末川久馬抱地并同所東郷半

七榎場等御用地相成、礮御茶屋引統一円二而右之通

御造立被仰付候条、可承向々江可申渡候、

(朱書) 弘化二巳  
七月十七日

(鳥津久武)  
壹岐

(齊興)  
一太守様御寿像、此節千眼寺

(重豪)  
大信院様御影

御相殿江被遊

御安置候、左候而、来月六日

御遷座御供養被 仰付候条、寺社奉行へ申渡、可承

向江茂可申渡候、

(朱書) 弘化二巳  
八月

(調所広郷)  
笑左衛門

一少将様御付女中妊娠之所、先月廿八日曉高輪於鶴之

渡

御男子様御誕生、別而御実正被遊御座、

御名

寛之助様と被進、御七夜御祝迄茂被為濟候段御到来

候、左候而、

思召被為 在、先御内分之御取計被

仰出、鳥津之御称号并此後文字被相用候、追而御届

被為濟候節より松平之御称号、此後文字可被相用旨

被 仰出候条、此旨御内々被奉承知候様、月次御札

罷出候面々江可申渡事、

別紙之通被仰渡候間、此段致通達候条、承知之名

前銘々以引札可被申出候、以上、

(朱書) 弘化二巳  
巳八月七日

(久寿)  
倉山作太夫

一御時節柄を汲受金子差上、又々以前御貸上等之金子等差上切いたし、奇特成心入付、是迄家格并身分昇進等御取訳被仰付候儀も有之候得共、以来無訳差上金等申出候而茂願不取揚、尤、差上金等之御取訳二而者家格・身分昇進等屹と被仰付間敷候旨被仰出候条、此旨向々へ不洩様可致通達候、

(朱書)弘化二  
十月八日  
(鳥津久宝) 豊後

一致煎焼間敷と之儀者先年来申渡趣茂有之候所、比日居屋敷又ハ人家近辺ニ而猥ニ致煎焼候者茂有之段相聞得、甚以不勘弁之至、依風並者如何様之儀敷可致到来茂難計不可然事候条、向後右様之儀一切無之様与中・支配中江不洩様可被申渡旨可申渡候、

(朱書)弘化二  
十月十四日  
大目付

一稻荷川并甲突川之儀、元来川幅狭く、殊近年川床高相成、洪水毎御城下江水溢、其外田地砂入、洗剥亦者洗崩候場所、其節々御普請も有之御損失相掛候二付、甲突川之儀此節別段之御吟味を以川筋于寄地取

除、亦者川面ニ差障候田畑者勿論、諸人居屋敷迄茂欠方之上川浚被仰付、莫太之御入費ニも相及儀ながら、往年太切成田畑其外水難被相省候様と之御趣意、且川頭より川面崩掛等之場所乱杭・しからみ等之御普請、年々太粧成御入価ニも相及当時柄不容易事二候、然者田地溝筋等江為魚取差趣間敷等之段者兼而申渡之趣茂有之、川筋逆茂同様之儀二候所、右等太粧成御入価ニ被及候儀茂不弁、年若之面々亦者末々之者川筋江為魚取差趣、すくひ網亦者棒類を以適丈夫二仕調有之候乱杭・しからみ等を突乱し、亦者井手関等取荒候段相聞得、別而如何至極之事二候条、以来川筋田地等江為魚取差趣候儀屹と不相成候、右二付而者見聞を茂掛置候付、乍此上不守之者者屹と可及迷惑候、此旨親兄弟より屹と申聞、家来末々江者支配頭・主人等より稠敷可申渡候、

右之通、表方へ致通達、奥掛・御勝手方江茂可相  
達候、  
(朱書)弘化二  
十月  
豊後

笑左衛門

一千眼寺

(朱書)「弘化二巳」  
十一月

安房

護国殿江諸人拜礼勝手次第被仰付、依之拜礼之節者無刀ニ而、諸士以上者本陣、右以下者御縁類ニ而拜

礼被仰付候条、此旨向々江可致通達候、

十一月

(朱書)「弘化二」  
(菱刈隆親)  
安房

一此度上町大火ニ付、以来茅葺相調候儀者屹と差留候、乍然雨露を凌候迄ニ茅・苔之類ニ而此涯之仮木屋相調候儀者不苦候条、此旨可申渡旨町奉行へ申渡、可承向へも可申渡候、

右、此以前逆茂茅葺者一切無之候、

十一月

安房

一此節出火ニ付、台子之間より芍葉之間縁類ニ相掛御座被召建候付、今八ツ星より檜垣之間ニ而星合有之候様い十院平格より承候間、此段致通達候、以上、

(朱書)「弘化二巳」  
十一月廿三日

御目付

右者、上町出火之事也、向築地、新築地迄残る、武士屋敷壺ヶ所茂不焼、

一秋葉秘法火除之御札守壺通ツ、

右者、別段之訳を以奥御看経勤慶連院江御祈禱被仰付、支配下家部每家督之者江申受度、願之面々江者頂戴被仰付候付、上下致着用者者致改服、其以下者常服ニ而慶連院宅へ罷越、御札申受候様不洩様可被取計事、

但、慶連院大門口弁天社別当ニ而、同所近方へ

致居住候、

右者、致頂戴拙宅者氏神社内相納置候、

一此節出火ニ付、材木類其外諸色高料ニ売出候儀、又者大工日用等賃錢逆茂平日相替、余計相請候儀決而致間敷候、万一心得違右様之聞得茂候ハ、屹と可及沙汰候付而者見聞を茂掛置候間、聊取違無之様支配頭・主人等より早々申付可有之旨、向々へ可申渡候、

一御領國中風俗等之儀二付而者、先年以来追々被  
出、猶一昨年茂細々被

仰出趣有之、且質素・節儉等之儀者人々掛心頭御奉  
公方致精勤、年若之面々者学文武芸等分而無油断可  
心掛段者先達而申渡置通候所、  
御発駕前日、我々共

御前江被 召出、

御留主中取締向者 勿論、年若之面々学文武芸一涯  
致出精、徒徘徊等不致風俗正敷もの者夫々品能可被  
召仕、就中家柄之面々者重御役を茂可相勤身柄之事  
候得共、平日之謹慎等猶更可心掛、且無益之参会不  
致様之儀者兼々 仰出之趣茂有之、此節猶亦分而  
御沙汰奉承知候間、人々取違之儀共無之咎候得共、

若哉相弛候様とも有之候而者申沢茂無之儀候間、第  
一質素・節儉を心掛、

仰出之御趣意不相戻様深奉汲受、聊無忘却屹と可相

守候、此旨向々江不洩様可致通達候、

(朱書)弘化三年  
二月七日

(鳥津久宝)  
豊後

一御用差支服忌・穢等被成御免候者者、御寺方御参詣  
御供其外勤方二付、何茂致遠慮込合無之候条、以来  
左様可相心得段被

仰出候、此旨可承向へ可申渡候、  
(朱書)弘化三年  
正月  
(鳥津久武)  
壹岐

一上已雛飾之儀極々致手輕、存慮次二者全取止候而  
も不苦、勿論蓬餅之外菓子類相調候儀令停止候等之  
趣者度々委細申渡之旨茂有之候所、問二者結構之人  
形或ハ手組候鞠類を飾、至而無益之儀有之哉二相聞  
得、別而如何之至二候、質素・節儉之儀者分而 仰  
出之趣有之申渡置通二候間、弥以御趣意深奉汲受、  
一切無益之儀有之間敷候、右二付而者見聞せ茂掛置  
候付、乍此上不守之者者屹と可及迷惑候、此旨向々  
へ不洩様致通達候、諸郷・私領江茂可申渡候、

(朱書)弘化三年  
二月

豊後

壹岐

一御紋所二似寄候紋所付候者者致遠慮候様、先年以来

被仰渡置候所、御紋似寄候紋所抔付候もの間二者有之、家付由緒有之付来候者ハ格別、其外訳無之自身物数寄など二而付候事者可致無用候、

一 刀之拵抔二御紋所付候道具、当時致所持候者茂可有之候、兼而御紋付拝領被仰付候振合之者ハ可申出次第御免可被仰付候、右外先祖致拝領用來候者者不苦候、

一 御庶流方并御一門方より御紋付不致拝領者江御紋付之衣類上下被遣候節者、目立候様取直シ可着用旨先年被仰渡置候、依訳御紋付其儘二而相用候者者其趣可得御差図候、家中之儀茂右二準候様主人可相心得候、

右之通、於江戸被 仰出置候、左候而、由緒を以付来候紋所致改方恰好を替、御紋二似寄候様染調致着用人茂有之、紛敷相見得候条、前方之通取直相用候様可相心得候、

右之通、安永之度被 仰出置候所、年を経自然と緩せ相成候哉、此頃二いたり御紋所二似寄候紋所付居候人段々有之哉二相聞得心得違之事候

条、向後者弥以安永之度申渡之通可相守候、此

旨向々へ不洩様可致通達候、

(朱書)弘化三年三月

(鳥津全丞)豊後(鳥津入武)壹岐

一 役杖

但、黒革袋紐付

右、公辺

御目見仕候向々、御領国中以來為持候儀被成御免候旨 御沙汰被為 在候段申来候条、向々江可致通達候、

(朱書)弘化三年五月

壹岐

御参府・御下国等之節

御行列乗者勿論、其外乗物并台輪・駕籠等二而罷通候面々、駕籠屋根木綿類二而致日覆来候得共、右者相止、以來呉座日覆二而裏桐油付二いたし、兩用二出来候様、且間道中之面々も可為同断旨 御沙汰被為 在候段申来候条、此旨可承向々江可申渡候、

(朱書)弘化三年  
五月

壹岐

一此度乗物并台輪・駕籠日覆等之儀、奥・表へ者被仰渡候得共、江戸・御国許共大奥并諸家女中向々儀者可為是迄之通旨

御沙汰被為 在候段申来候条、此旨可承向々江可申

渡候、

(朱書)弘化三年  
五月

壹岐

御城代

御家老

御側詰

若年寄

大目付

右者、年頭其外重立候節者乗物相用、平常出勤等二者台輪・駕籠相用候様被 仰渡置候得共、以来出勤も乗物相用可申候、左候而、是迄屋根木綿類二而日覆相用來候得共、右者相止、以後日覆なし二而相用候様被仰付候、

但、旅行等之節者吳座日覆用之儀者可致勝手次第候、

右之通、御沙汰被為 在候段申来候条、此旨可

承向へ可申渡候、

(朱書)弘化三年  
五月

壹岐

(齊興実母)

宝鏡院様御卒去二付、

(齊興)

太守様御忌内也、

一当年諏方神事二付、在町踊之儀、

太守様御忌内之御事候付、道太鼓不打行列二而差越、

頭屋計可為踊候、此旨可承向へ可申渡候、

(朱書)弘化三年  
午六月十一日

壹岐

一來ル十五日、祇園山踊被召延日限之儀、追而被仰渡

筈候間、此旨申達候、以上、

(朱書)弘化三年  
六月十一日

島津権五郎

(久包)  
宮之原主計

一少将様御儀、此節琉球国江異国船渡来付、依御願御

(齊彬)  
国元江之御暇御給、去ル六日被遊

御發駕・御下向之筈候旨、此旨奉承知、御手当向

等之儀共御先例を以早々取納申上候様、向々江可申

渡候、

但、御道中御宿割等之儀も追々申来候上、追而可

申渡候、

(朱書)弘化三年  
六月

(島津久宝)  
豊後

(朱書)弘化三年  
六月

(島津久武)  
壱岐

一 東海道伊勢路日数拾四日

一 伏見

御逗留中壹日

一 中国路日数拾三日

一 九州路日数拾三日

但、御渡海込

右者、此節

少将様御下向二付、右之通御通行御休泊別紙之通被

仰付候段申来候条、諸事先例を以御手当等之儀者可

承向々江可申渡候、

(朱書)弘化三年  
六月

壱岐

友野市助

松元半助

田中猪三太

右へ付足輕式人

国分八郎

一

右、此節

少将様(齊彬)御下向御供被仰付候旨申来候、此旨表方へ

致通達、奥掛・御勝手方江茂可相達候、

(朱書)弘化三年  
六月十六日

豊後

(久淳)  
島津石見殿

右者、当月琉球へ異国船来着二付而者、不容易儀二

付、異国船掛を茂為被仰付置事候故、為念早々罷下

り、琉球表之儀者勿論、他方海岸防禦之御手当迄茂

厳重行届候様可取計旨被 仰付候段、江戸より申来

候条、可承向々江可申渡候、

異国船掛茂為

絵師

唐通事頭取

名島清左衛門

唐本通事

山田伝右衛門

東郷弥十郎

横山安之丞

横目

新納助次郎

右へ付足輕式人

右者、兎ケ水沖江異国舟相見得、西之方へ乗行候間、

坊泊へ今日急二而被差越候条、諸事如例可申渡候旨

御差図二而候、以上、

(朱書)弘化三年

午六月廿三日

伊勢雅楽

(貞章)

一

右、島津之御称号御判物を以拝領被

碓山将曹殿

仰付候、

島津将曹殿

右者、師久公御二男之御筋目為差立家柄、別而重

キ御支族之御事候付、厚

思召之御訊被為 在、以来嫡々迄 島津之御称号拜

領被 仰付候、就而者御称号之儀不輕御事候得共、

先祖代戦功等茂有之、殊二其身品々 御用立候御取

訊を以右之通被 仰付候、左候而、二男以下碓山之

家号相名乗候様被 仰付候、右之通、

少将様御名代二而、先月廿九日於江戸被仰付候段申

来候条、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へ茂可

致通達候、

(朱書)弘化三年

六月

壹岐

一 御家老

一 加判同役同前

一 御役料高千石

一 御側詰兼務

碓山将曹

右之通、少将様御名代二而被 仰付、

御役料高被下置、席順島津石見殿次罷在候様被 仰

付候、

右同人

右者、御家老御役被 仰付候得共、朝之内御用部屋

へ罷通、御前御用相勤、夫より御家老方へ出席、月

番繰廻承候様被仰付候、左候而、御勝手方并大目付方御用をも承、其外諸掛是迄之通被 仰付候、

右之通、先月廿九日於江戸被 仰付候段申来候条、

此旨表方へも致通達、奥掛・御勝手方江茂可相達

候、

(朱書)弘化三

六月

(島津久武)  
老岐

一琉球国江異国舟渡来付、依御願先月廿八日以 上使

戸田山城守様  
(忠温)

少将様御国許へ之御暇御給、御先格之通被遊御拝領、

從 右大将様茂以 上使松平(乘坐)和泉守様被遊 御拝領

物、去ル朔日 御登城御礼被仰上候処、琉球表之儀

万端被為入御念候様御懇之被為蒙

上意 御馬被遊御拝領候段御到来候、依之御一門

方・諸大身分・月次之御礼罷出候面々、明後廿八日

四ツ時登 城、少将様江御祝儀於席々謁御家老可

被申上候、

但、(齊興)太守様江御祝儀被申上候儀者、御忌明之上追

而可申渡候、御前様其外様へも有来通追而申、急

便御祝儀被申上候、御女中方之儀茂同断可被申上候、

一少将様御国許江御暇之為御礼、去ル朔日

太守様・少将様御登

城被遊、御礼済御居残被遊候様御老中阿部伊勢守様

より御達之由二而、大御目付深谷遠江守様より被申

上、御目付三宅市右衛門殿西湖之間御縁頬御杉戸涯

江被申上、御鎖口より若御年寄遠藤但馬様御案内、

御座之間江

(家應)公方様出御、御両殿様御一同

御目見、格段厚御懇之

被為蒙 上意、御直御請被仰上、被遊

御出座、左候而、黒鷲之御杉戸涯江御老中様方

御出席、

御両殿様御一同御礼被仰上、直

御退城之段御到来候、右通、

少将様御儀初而御座之間

御目見、格段厚 御懇之被為蒙

上意候付、御一門方并諸大身分其外月次

御礼罷出候面々、明廿八日四ツ時登

城、席々謁二而御祝儀可被申上候、

但、太守様へ御祝儀之儀者御忌明之上追而可申渡候、左候而、御中途并京都・江戸御前様其外様江

茂有来通、明後廿九日中急便御祝儀被申上、御女中方之儀茂同断可被申上候、

一諸士并諸与与力同日四ツ時登

城、御帳二相付御祝儀可申上候、御当地之寺院

着座有之候分者、同日四ツ時登

城、謁御家老 御祝儀可申上候、其外之寺社家

者寺社奉行於宅御祝儀可申上候、

一在番之琉球人同日九時登

城、謁奏者番御祝儀可申上候、

右之通、

少将様江御祝儀被申上候様、向々江可致通達候、

但、太守様へ御祝儀之儀者、御忌明之上追而

可申渡候、

(朱書)「弘化三年」  
六月

壹岐

一少将様御出之節、往来之者共行形二慎可罷在候、且

又町内者店先占方并喰違等出来二不及、平日通二而

过々商売逆茂同様相心得候様御沙汰被為在候条、難

有 御趣意之程奉承知候様、可承向々江不洩様可申

渡事、

(朱書)「弘化三年」  
午八月廿二日

壹岐

一少将様御事、山川表其外海岸防禦之場所被遊

御巡見咎候、左候而、諸御手当向之儀者輿計被仰付

候条、向々江可申渡候、

但、御比合之儀者追而可申渡候、

御巡見御帰掛指宿二月田江暫可被遊

(通九)  
御逗留儀茂

可有之候、

(朱書)「弘化三」  
八月廿八日

(島津久徳)  
将曹

一乘馬并仕牛馬等高料二致売買間敷と之趣ハ、去ル卯

年分而申渡置通候所、今以高料二壳渡候者茂有之哉

二相聞得不可然事候条、以来馬柄等至極宜候共、金

拾兩限二而可致壳買候、左候而、馬料外肴料抔と名

付、別段金子取遣候者も有之候由、是以屹と差留候、  
此上なから万一心得違之者於有之者、糺方之上双方  
共相当答可申付候、且又御用 馬御買上直成之儀者  
相究置候得共、依馬柄者御用馬之分者、御定直成よ  
り高料御買入被仰付儀茂可有之候、此旨向々江不洩  
様致通達、諸郷・私領江茂可申渡候、

(朱書)弘化三年

八月

(島津久武)

壹岐

(島津久浮)

石見

(島津久徳)

将曹

一 質素・節儉ニ有之候様と之趣者度々被仰出、就中四  
ヶ年跡辰年衣食等之事ヶ条立を以被仰渡趣有之、難  
有 御趣意之事候ニ付、身柄高下之無差別可取守事  
候処、程過候得者兎角汲受薄人も有之哉ニ相聞得、  
第一御小姓与以上之婦人仰渡涯、一旦者 御趣意取  
受候様ニも有之候処、到頃日何となく不相応の衣類  
等相用候様成立向も有之哉ニ相聞得、内心ニ者仰渡  
通取守度人茂世上一統ニ真実質素を好候風俗ニ不相  
成候所より仰渡之旨ニこそ可恥を、反而世の外見ニ

恥、動ハ華美之習俗ニ辰安段以外之事候条、向後

者辰年之服制取違無之様父兄等より毎々屹と可申聞  
候、勿論何そ慶事等ニ付饗応沙汰之儀も、右辰年ヶ

条立を以申渡有之候通、聊取違有之間敷候、右之趣  
厚汲受、此以後取守可申候、兼而見聞をも被掛置候

間、若や取違之向々有之候ハ、迷惑ニも可及候間、  
能々万事可相嗜候、此旨向々へ不洩様可致通達候、

弘化(朱書)三年

二月

壹岐

石見

将曹

(齊彬)

一 少将様益御機嫌能御旅行、去ル十三日大里被遊御渡

船候付、来ル廿五日被遊 御光着筈候段申来候間、

御手当等之儀猶又無聞違様向々江可申渡候、

弘化三年丙午

七月

壹岐

少将様御光着当日之御次第御手当、水上坂之下筋違

橋、西田町、弓削次郎太角より池田彦八前通、島津

中務屋敷掛、鎌田刑部前通、新上橋川原通、柿下寺

(正純)

(本力)

より二階堂(行整)主計屋敷掛、千石馬場、聖堂前、二之丸  
矢来御門、桜之間、御中門御入、

一 御一門方并種子鳥彈(久珍)正殿・鳥津和泉(久風)、大目付以上芙蓉之間、奥向之面々桜之間江相詰、御先立鳥津石見、御休息所江御入、

以下略、

一 質素・節儉之儀付而者、是迄每度仰出之趣有之、分而取締向申渡置、其上見聞之役々をも多人數掛置、無手拔取締為致事候処、今以末々二至り候而者間々不守之者有之、何分旧習二返易、甚以不埒之至二候、就中女共二至り候而ハ難有 御趣意之程汲受薄向も有之哉二相聞得不可然事二候、右者、親子兄弟又者親類等より手堅可致取締事候、既二  
少將様御下向茂被為 在候付、一統一涯可相慎候、乍此上不束之儀共有之、万一御沙汰も被為在候時宜合共候而者、可掛置候御役々不行届勿論、不守之者等閑二相心得候筋別而不容易事候条、右体之者ハ屹

と可及迷惑候、依之追々被仰出置候通堅相守、少連も弛立候儀無之様一統懸心頭、末々之者ハ主人等より厳敷可申渡候、此旨向々江不洩様可致通達候、

(朱書)弘化三年  
七月廿二日

壹岐

一 少將様今日午刻可被遊

御光着旨被 仰出置候得共、 御行掛之御事候二付少々者 御遅速茂可有之旨申来候条、可承向々江可申渡事、

壹岐殿より被相渡候書付之写、  
(朱書)弘化三年  
七月廿五日  
取次 (貞章)  
伊勢雅楽

一 少將様

明廿九日四ツ時御供揃、五本御道具・御着服・染御帷子・御半袴二而、桜之間、御中門、北御門御出、御下向脇二付、浄光明寺・福昌寺・恵灯院江御参詣、御出口之通被遊御帰殿、御供触等之儀可承向も可申渡候、

以下略、

(朱書)弘化三年  
七月廿八日

(榊山久成)  
伊織

一少將様明六日千眼寺江

御參詣二付、住持へ 御目見、略、

一少將様明後廿日四ツ時御供揃、五本御道具二而桜之

間、御中門、北御門御出、  
(齊彬実母)賢章院様御正忌日付、

福昌寺 御廟所御靈屋江御參詣、略不写、

島津将曹殿  
(久徳)

右者、此節

少將様山川表其外海岸防禦之場所被遊 御巡見候付、

御用有之御付通被仰付候条、向々江可申渡候、

一少將様御儀、来春

(齊豊)太守様御下国之上被遊 御參府旨被仰出候段御到来

候、依之御一門方并諸大身分其外月次御礼罷出候面々、

明後十五日四ツ時登城、

御而殿様江御祝儀於席々謁御家老可被申上候、

以下略、  
(朱書)弘化三年  
九月十三日

将曹

少將様明後十六日、天氣次第六ツ時御供揃、壹本御

道具二而桜之間、御中門、矢来御門御出、二之丸下

枳形、千石馬場土持叶之丞角より谷山街道、榊山主

殿屋敷掛二而

御行列相開、谷山中之塩屋辺迄

御乗廻二而、同所 御休所江被為 入御出道之通榊

山主殿前より御行列相立、御出口之通御歸殿之苦、

御先扨横目勤方、其外諸事御手当不洩様可被申渡候、

但、歩御供面々者股引・半天・大野羽織・丸羽織

勝手次第、

(朱書)弘化三年  
午九月十四日

御側役  
名越彦太夫

一少將様此節山川表其外御巡見

御歸掛、指宿二月田江被遊

(遠方)御逗留候旨被仰出候条、可承向々江可申渡候、

(朱書)弘化三年  
十月

将曹

一少将様此節就 御巡見、今一日山川江被遊御逗留候

段申来候、此旨可承向江可申渡候、  
(朱書)弘化三年 (島津久武)

十月廿日

壹岐

一少将様明五日指宿御立、谷山地頭仮屋

御一宿二而、明後六日御帰殿之筈候条、此旨御役人

限り詰衆江可致通達候、

(朱書)弘化三年  
十一月四日

壹岐

一昨二日四ツ時分、指宿二月田御茶屋御焼失付、

少将様同所添御本亭江御迦、於御機嫌者御差障不被

遊御座候段申来候、依之御一門方并諸大身分其外月

次御礼罷出候面々、今日登 城於席々謁御家老、

少将様江伺御機嫌可申上候、

一諸士・諸組与力今日登 城、御帳二相付同断可申上

候、

以下略不写、寺院着座之門首・琉人も伺

御機嫌申上候、

一明廿五日

少将様四時御供揃壹本御道具二而、桜之間、御中門、

矢来御門

御出、演武館 御成御門より被為

入犬追物被遊

御視、御出口之通 御帰殿之筈候条、以下略、

(朱書)弘化三年  
十一月廿四日

(時助)  
種子島六郎

一少将様明十六日九ツ時御供揃壹本御道具二而、桜之

間、御中門、北御門御出、吉野橋、北郷哲五郎角よ

り島津安芸殿裏門前、大竜寺裏門通、妙顕寺前、黒

葛原橋、清水馬場、諏訪社前鳥越より磯御茶屋江被

為入 御滞在之筈候、此旨御役人様并詰衆江可致通

達候、

(朱書)弘化三年  
十一月十五日

安芸殿裏通之辺当分市之真中二候、御構無之、

一少将様明後廿日四ツ時御供揃五本

御道具、御着服御熨斗目・御半袴被為 召、桜之

間、御中門、北御門御出、歳暮ニ付浄光明寺・福昌寺・惠灯院江 御参詣、

御出口之通被遊 御帰殿筈候条、以下略ス、

(朱書)弘化三年十二月  
(榊山久成)伊織

一少将様明廿日四時 (齊彬)賢章院様御忌日ニ付、福昌寺御

廟所御靈屋江御参詣、

一少将様来月十五日儀御茶屋

御発駕、新道筋永安橋、境橋、柳町通、吉野橋、御

厩角、北御門、桜之間、御中門より被為入、

御寄合被為濟、桜之間、御中門、矢来御門より御立、

一御行列御先備等者 御本丸江相揃置、儀御茶屋より

御本丸迄之御行列者御馬駛より、御駕籠廻り御跡乘

之儀者儀より不残御供ニ而、御供目付以下<sup>不知</sup>方御跡

乘手廻道具者

御本丸江相残置候様被仰付候条、此旨可承向江可申

渡候、

但、御立御刻限之儀者追而可申渡候、  
(朱書)弘化四年二月  
(鳥津久徳)将曹

御着城当日之次第

島津和泉・御家老・若年寄・大目付・当番頭・月番

御用人虎之間庭上江罷出、

一少将様御対面所御縁頼江御出迎、

一御一門方御対面所御縁頼江被相詰、

一種子島弾正殿 御対面所御縁頼江御一門方部屋栖之

次被相詰、

一月番御家老・若年寄・大目付・奥向之面々御対面所

江相詰、月番之当番頭・奏者番・御用人席々江相詰、

御先立

島津将曹、

一御書院江 御着座、

御一門方

同嫡子方

右一同

御目見御祝儀被申上之御家老御取合、御意御取合有

而被退座、

種子島彈正殿

右御一門方・同嫡子方

御目見御祝儀相濟候、引続被罷出

御目見御祝儀被申上、奏者番披露有而退座、

御家老

若年寄

大目付

右一列一同

御目見畢而御入、

一於虎之間御近習通之人数御通掛 御目見、

以上、

(齊興)  
太守様来ル八日被遊

御着城筈候付、御一門方初、以下略、

弘化四丁未年

一少将様明八日礮御茶屋江五ツ半時御供揃壹本御道具

二而新道筋筑地中通、新橋、島津讚岐殿角より北御

門、桜之間、御中門より被為入、御出口之通 御

帰館之筈候条、御先払横目勤方、其外御手当等不洩

様可被申渡候、

弘化四  
未三月七日

名越彦太夫

太守様

一明十一日四ツ時御供揃壹本御道具二而桜之間、御中

門、北御門御出、島津讚岐殿より新橋、筑地中通新

道筋、礮御茶屋汐汲御門より花倉御茶屋江被為

入御見分濟、汐汲御門御出、礮御茶屋錫御門より被

為入、御出口之通

御帰館之筈候条、御先払横目勤方、其外御手当等不

洩様可被申渡候、以上、

(朱書)弘化四  
未三月十日

(行健)  
二階堂志津馬

当分礮御茶屋へ者 少将様被為入候、

一少将様明十四日九時礮御茶屋御供揃壹本御道具二而

御出、新道筋筑地中通、新橋、島津讚岐殿角より北

御門 御入、桜之間、御中門より被為入、御出口

之通被遊 御帰殿筈候条、御先払横目勤方、其外御

手当等不洩様、略、

一少將様明後十五日儀御茶屋六ツ半時御供揃ニ而 御

出、 御殿江被為 入、御式被為濟

御本丸四ツ時被遊 御発駕筈候条、此旨可承向江可

申渡候、

弘化四丁未  
三月十三日

(島津久徳)  
将曹

一雨天之節諸士重御役之人江行逢候砌、重御役之方草

履踏居候ハ、木履を抜可致式対候、(体力)若其儀難相調

時宜も候ハ、致挨拶罷通候様ニと之趣共安永・寛

政之度追々申渡相成居候処、到当分候而者緩せ相成

於

御城内重御役之方草履、諸土木履をはき、其儘ニ而

致式対候面々有之不都合之事候条、向後急度心得違

之儀有之間敷候、且又晴天ニ御城内ハ勿論、御城外

迎茂下駄相用間敷との儀も度々申渡有之候処、是以

于今不相止、畢竟不心掛之事ニ候、

御城内者猶以人々其勘弁も可有之訳ニ候間、是又此

已後心得違有間敷候、

一足輕・御口之者・御小人等之者鐘為持候御役場江行

逢候節者、急度致式礼可罷通、其以下之者共者右御

役場江行逢候節者、折敷致蹲踞居候様、頭人・主人

より急度可被申渡候、

右之通、向々江不洩様可申渡候、

(朱書)弘化四未  
三月廿二日

(島津久徳)  
志岐

(島津久浮)  
石見

(調所広郷)  
笑左衛門

御家老 (久平)  
末川久馬殿

右、

御名代 島津讚岐殿ニ而被仰付、加判同役同前、御

役料高千石被下置、席順島津将曹殿次罷在候様被

仰付候、

右同人

右者、此涯大目付方江も致心添、琉球産物方之儀者

大目付場ニ而掛被

仰付候、

右之通、表方へ致通達、奥掛・御勝手方江茂可相

達候、

(朱書)弘化四未  
三月廿六日

笑左衛門

家老中江

一家来并上下町人又者寺門前者等為給仕脇々江差越候儀、拾貳三才を限り、其外者不相成段申渡も有之候得共、已来者拾貳三才以下之者迄も都而為給仕差越候儀、屹と不相成候条、町奉行其外主人等より可申渡旨向々江可申渡候、

(朱書)弘化四未  
四月

笑左衛門

鳥津豊後殿  
(久玉)

右、

御留主詰被仰付置候得共、御内用之儀有之候付被成御免、代鳥津将曹殿江御留主詰被仰付候付、出府之上致交代、御用向次渡且被仰付置候御用向等仕廻次第致出立候様被

手方へも可相達候、  
(朱書)弘化四未  
五月

久馬

御付候旨申来候条、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝

不依大身小身、幼年より我儘に生立候得者、盛長之後国家之用ニ難相立、別而氣之毒之至候条、貴賤者得と其旨を相考無油断出精尤之儀ニ候、

一 一門并名代を茂相勤候家格之向者屹と立候身分二而、專国中之見当ニ相成事候条、第一身持を慎、国法り嚴に懦弱之風儀無之様相心得、文武之芸者勿論、万端礼儀正敷威儀を不失様心掛候儀專要ニ候、

一 大身分之儀ハ家柄二応古来より世録を茂為取置候付而者、夫々役威を相勤、国恩を不報候而不叶事候処、少年之砌より何之教茂無之、無学不才ニ生立、盛長随ひ或兇暴或輕薄之為体成行、家格之勤難申付者茂過半有之、国家之費残念之至候条、其旨を致得心夙夜可相勤候、

一 小番以下士分(朱書)者共歟之者身分二応、夫々之役場江可召仕候処、是又至而不才ニ有之、書キ統等不自由ニ而者(説カ)

相当之役儀茂難申付事候間、分限随ひ諸芸を相嗜、往々用立候様相心得、何篇律儀を相守、夜行・辻立等之類相止、風俗宜士風茂相立候様可心懸候、

一 無益之集会堅停止段者追々申聞候通り、猶又緩せ之儀無之様稠敷可申渡候、

一 衣服并祝事等之儀、分限二応し夫々相極置候通可相心得候、

右条々、大小身共若輩之生立柄等、第

一 從御先代様分而被仰出為置事候得共、何分親兄弟共汲受薄所より兎角風俗立直兼別而残多事候条、其旨を深汲受、家訓正敷朝夕其示教不怠様相心得可令教諭、勿論依生質才不才可有之事候得共、折角導候得者身分相応二者可生立事候、尤、世上礼讓を本とし、怠惰之風儀無之、往々用立候様無油断致教訓、屹と士風立直候様申渡、且無益之集会・祝事・衣服

等之儀、是又屹と相守候様可被申渡候、

一 依(不脱カ)大身小身、幼年より我儘に生立、御国家之御用二

難相立、且御一門方并御名代を茂被相勤候家格之向者、專御国中之見当二相成事候条、第一身出(持カ)を慎、

情弱之風儀無之、文武之芸者勿論、礼義正敷威儀を不取失様大身分之儀者夫々御役職相勤、御国恩を不奉報候而不相叶事候処、或兪暴或輕薄之為体二成行、

家格之勤難被仰付者茂有之、尤、士分之者者至而不才二有之、書キ統等不自由二而者相当之役儀難被仰付事候間、諸芸を相嗜、屹と士風相立、往々御用立候様可心掛、尤、無益之集会又者衣服并祝事等之儀、夫々被相極候通、猶又緩せ之儀無之様可相守之、

右候間、若輩之生立柄等何分親兄弟共被仰出之趣汲受薄、兎角風俗立直兼、右旁之儀共別而残多被思召上候条、其旨を汲受、家訓正敷朝夕之示教不怠様、第一世上之交礼讓を本として怠惰之風儀無之、屹と士風立直候様との趣共御別紙之通、御筆を以被仰出、誠二以奉恐入難有御趣意御事候条、一統謹而可奉承知候、右二付而者、仰出之通大小身二不限、幼年より之生立柄不宜、自然と怠惰之風儀押移、夫々相当之御役職茂難被仰付と之御事共、大切成御国家之御用等閑二相心得候、御厚恩忘却之筋二相当、近比歎息之至無申訳次第二候、此節之、御趣意是迄度々被、仰出候得共、一切其詮無之、尚又被仰出之趣誠二奉恐入事候条、人々実意二深奉汲受、昼夜尽精心、往々一簾之御奉公相勤候儀肝要二候、就中年

若之者共生立柄二付而者、親兄弟共教諭行届候者随分御用立候者も可有之処、我儘二召置候儀甚以不可然事候条、向後家訓正敷朝夕教諭有之、数代蒙御厚恩居候儀者勿論之事二而、一度被 仰出候儀ハ誠実二相守、御恩を可奉報候処、万端等閑二而、別而如何至極之事二候、此節

仰出之儀ハ大小身共生立柄不宜処より前文通御用立兼、別而御氣之毒被 思召上、無御扱被 仰出候御趣意奉恐察実二難有事候条、人々深奉汲受、吃と忘却有之間敷候、勿論質素・節儉・衣服沙汰・祝事等之儀者、去辰年分而細々被 仰出之趣茂有之候処、今二驕奢之風俗不相止、間二者不勘弁之向茂有之哉二相聞得、別而不埒之至二候間、向後前条被 仰出之趣屹と可相守候、且又諸稽古事等業合而已二抱候而者、不時 御覽等被 仰出候節及混雜事候間、兼而式向等迄茂心掛、行儀正敷、且師家定之刻限通相揃、万事心掛出精可有之候、

右之通奉承知候様無格へ申渡、諸組与力、諸郷・

私領可被申渡旨向々へ可申渡候、  
(朱書) 弘化四末  
四月  
(鳥津久武)  
志岐

(鳥津久浮)  
石見  
(末川久平)  
久馬  
(調所伝郷)  
笑左衛門

一郷士以下家来末々之者共謹慎沙汰之儀、此節 御沙汰之趣被為在、其段者先達而申渡置通候条、人々厚奉汲受、向後屹と身分を慎、不埒体之儀共無之様可相嗜候、

一郷士・与力之儀ハ夫々知行等被下置、応分限役職をも申付事候付、無学文盲二而ハ御用向弁兼事候間、年若之者共折角出精候様可令教示、且又異国船御手当二付而ハ、兼而被定置御作法も有之事候二付、武芸之嗜も無之候而者請持備場へ幾万人出張候而も其詮も有之間敷候条、兼而心掛肝要候、

一世上驕奢之風俗二効不顧身分茂分限不相応之体、或ハ不埒之聞得も有之、旁不可然事候条、屹と身分を慎礼讓を守、律儀可相嗜候、

一家来又者百姓・町人・寺門前者共之儀、夫々稼穡・

家業一涯相勵出精、不埒之儀共曾而無之様可相守候、  
一郷士以下家来・町人・寺門前者共二いたり、服制等

之儀ハ辰年委曲申渡、其後追々申渡之儀も有之候得  
共、問二者心得違之者も有之、御禁制之品相用、或

手組候模様物等所持いたし居候者も有之、辺鄙等二  
一而者相用候様相聞得、第一

御趣意振れ不届至極候条、向後心得違無之様可相守、  
若不守之者於有之者見聞をも掛置候付、見当次第差  
留屹と可及取扱候、

一御当地居住之郷士并諸組与力・足輕・御小人等之内、  
容貌不宜、且又辻歌を謡ひ、或ハ尊卑之弁薄籠礼二  
而罷通候者も有之由、甚不埒之至二候条、式礼等之  
儀二付而も分而申渡候趣も有之候処、不埒之者も有  
之哉二相聞得不可然事候条、夫々応格式身分を慎、  
右体之儀共曾而有之間敷候、

一大身分以上之家来共容貌不宜、籠礼之者茂段々相見  
得、右体之儀無之様と之趣度々為申渡置事二而、兼  
而主人等より稠敷申付者有之筈候得共、問二者等閑

之向茂有之哉、右通之者相見得居不可然事候条、分  
而稠敷被申聞置候、此上不都合之儀も候者主人可為  
越度候、

一諸人抱家来・下人体之者を初、町人・寺門前者共、  
士以上二対シ籠礼いたす間敷と之儀ハ追々申渡事候  
得共、不敬之者茂有之哉二相聞得不届至極候条、右  
体之儀無之様猶又稠敷可申付候、

一百姓其外馬牽行候者共、通路之弁もなく猥二小路へ  
馬を牽掛往還之障相成候儀段々有之、就中鎧為持候  
以上之御役人等江行逢候節ハ馬之口を留、順路江片  
寄平伏可致、勿論諸士以上と見請候ハ、是又相慎  
罷通候様と之趣度々申渡事候得共、不守之者も有之  
不届至極候条、屹と相守候様可申付候、

一右外振壳体之者共者勿論、荷物をかつき往来之者共  
都而前文同様相心得、屹と不敬之儀共無之様稠敷可  
申付候、

右之通、向後心得違無之様頭人・主人等より分而  
稠敷可申聞候、右二付而者見分を茂掛置候付、乍  
此上違背之者於有之、急度可及沙汰候、此旨支配

頭・主人并私領江茂不洩様可申渡候、  
（朱書）弘化四末  
五月

（島津久武）  
壹岐

（島津久浮）  
石見

（末川久平）  
久馬

（調所広郷）  
笑左衛門

笑左衛門

（齊彬）  
少将様御機嫌能先月十日被遊御参府之旨御到来候、

依之御一門方并諸大身、其外月次御礼面々今日登城、

御両殿様へ御祝儀於席々謁可被申上候、

（朱書）弘化四末  
六月九日

壹岐

騎射

右者、

故中将様以 思召被召建、諸士江稽古方被仰付置、

御隠居後御讓相成、稽古方同様被仰付置候得共、一

往御引取被仰付候条御門人中江申渡、可承向へも可

申渡候、

（朱書）弘化四  
六月

笑左衛門

此節大風付、材木其外諸式高料二売出候儀、又者大  
工日備賃錢等、平日二相替余計相請取候儀致間敷候、  
万一心得違候者於有之者屹と可及取扱候、右付而者  
見聞をも掛置候条、聊取違無之様主人等より嚴敷被  
申付候様向々江可申渡候、  
（朱書）弘化四末  
六月

壹岐

一 海岸防禦掛

（久基）  
島津豊後殿

右者、海岸防禦之儀、從 公義度々被仰渡趣有之候、

兼而御手当向為被仰渡事候得共、猶又嚴重不被行届

候而者御響二も相抱事候間、右之通掛被仰付候条、

異国船掛申談、万端無手拔取計候様被仰付候、

右同人

右者、御勝手方掛被仰付置候得共、此節海岸防禦掛

被仰付候付者、御勝手方江致出席候而者御手当向取

扱可行届兼候付、御勝手方掛之儀ハ被成御免候、

調所笑左衛門殿

右者、朝之内 御前御用相勤、夫より御家老方へ出

席、以後御勝手方江致出席候様被仰付置候得共、

御前御用者は迄之通二而、混と御勝手方江出席御用承候様被、仰付候、

右之通、向々江可致通達候、  
弘化四年丁未  
六月 (島津久武)  
志岐

一 野村彦兵衛

右者、荻野流炮術致伝授居候付、此節異国船御手当江被掛置候条、猶又致出精、弟子を茂取立候様被仰

付候条申渡、可承向へも可申渡候、  
(朱書)「弘化四丁未」  
八月 (島津久澄)  
石見

一 御府内其外諸所小路悪敷場所段々有之候付、溝筋砂揚、溝縁取繕、小路中高キ様ニとの儀共、道奉行より相達候ハ、無遅滞取計、向後無間断取始抹行届候様可致、右二付而者別段

御沙汰之趣も被為在、且御目付を茂被掛置候付、急度等閑之儀有之間敷と之趣者、去ル辰年分而申渡置通二候処、間二者屋敷掛小路取始抹不行届、溝筋砂揚等者勿論、溝縁取繕不致、又者四壁廻り生垣等生

茂り第一見分不宜、依時宜者小路之障ニも相成事候所、旁不頓着之向茂有之候段相聞得如何之至二候、右通、分而

御沙汰被為在候御事故、急度

御趣意通不取計候而不叶儀候所、其弁茂等閑ニ相心得候所より右次第別而不埒之至二候、御目付を茂被

掛置、道奉行下目付兼而行廻、見分不宜場所者時々可相達候条、随下知無遅滞取計、向後急度取始抹行

届候様可取計候、乍此上等閑之向も候ハ、屹と可及御沙汰候、此旨向々江不洩様可致通達候、  
(朱書)「弘化四丁未」  
八月 (島津久澄)  
豊後

一 異国方御手当之儀者以前より被定置候得共、段々不連続之儀も有之、急速之出張等調兼、勿論天保之度公義御触渡之通、蛮異之諸国者専大炮等相用候付、

和漢戦鬪之向と者相変、殊更当时之御手当者古来より之御国風ニ相背候廉も有之、旁以思召二不被為叶候付、多年被遊 御工夫  
(貴久) 大中様・ (義久) 貫明様・ (義弘) 松齡様

御時代之御軍法を基本ニ相立、其外和漢之作法用捨

斟酌いたし、一家之流儀等ニ不相泥、何れも宜ニ隨

取調、外国防禦之御手当致全備候様可致取扱、左候

者猶又

御直可被遊御差図旨被 仰出候、

弘化四年丁未

十月

一 御軍役方御手当向之儀付、別紙之通被仰出候付、謹

而奉承知候様御役人限詰衆へ申渡写取候様可申渡候、

（朱書）弘化四

十月

（調所広郷）

笑左衛門

一 此節御軍役方被相建候得共、異国船掛之儀ハ是迄之

通可相心得旨申渡、可承向へも可申渡候、

（朱書）弘化四丁未

十月

笑左衛門

一 御軍役方

御名代

重富

（久光）

島津山城殿

加治木

忠長

島津内匠殿

右者、近年御領内并長崎其外江每度異国船来着付、

從

公辺援兵等可被 仰出茂可有之段被仰渡候付而者、

不時出張被仰付儀も可有之候付、右之通被 仰付候、

左候而、此節 思召之訊有之、御軍役方被召建御

役々被掛置、御手当向取調被仰付候間、御用之節々

出席御用被承届候様被

仰付候、

一 御軍役方

副御名代

島津豊後殿

右者、近年御領内并長崎其外へ每度異国船来着付、

從公辺不時出張被仰渡儀も可有之候付、右之通被

仰付候、左候而、

御名代出張之節差副可被差出候、乍然兼而御城代被

仰付置候付、

御留守之節者別段之事ニ候、此節思召之訊有之御軍

役方被召建候付、御手当向之儀調所笑左衛門申談致

吟味候様被仰付候、

一 御軍役方

惣奉行

調所笑(広郷)左衛門殿

右者、此節

思召之詔有之、右之通被 仰付候、左候而、御軍役

方被召建候付而者、

御趣意之旨細々被仰付置候通、

御先代様方

御家流二基取調、勿論御手当向之儀專致主宰、万端

不行届之儀無之、屹と御規定相立候様可致取扱候、

且

御出馬御供又者

御名代等出張之節ハ可被差出候、

右之通、御名代島津讚岐殿より被 仰付候条、

表方へ致通達、奥掛・御勝手方へも可相達候、

十月朔日

一 御軍役方

惣頭取

海老原宗之丞(清熙)

右之通被 仰付候、左候而、此節御軍役方被召建候

付取調者勿論、御手当向之儀都而致差引、右江相抱

候御用者向々より申出候儀も何篇致吟味、時々可奉

伺候、且

御出馬御供又者御名代等被差出候節ハ可被召付旨以

思召被仰付候、此旨向々江可申渡候、

十月朔日

笑左衛門

一 御軍役方

御取次

右者、此節 思召之詔被為

在、御軍役方被召建

二階堂志津馬(行健)

御直被遊 御差込候付、右之通被

仰付候、左候而、御軍役方へも時々致出席御用取扱

何篇達

御聴候様被 仰付候旨名代へ申渡候、此旨向々江可

申渡候、

十月朔日

笑左衛門

芸道を以被召出候家筋之者御用見合相成候間、小

番・新番・御小姓与并諸組与力之儀、向々支配頭よ

り組中・支配中江申渡、何年何月芸道を以被召出候  
訊、又者芸道家筋ニ無之訊、切支丹差出候振合を以  
銘々差出致取揃、来ル廿九日限可被差出候、尤、郷  
士之儀ハ地頭より同前取揃、来ル廿九日限可被差出  
候、此旨向々支配頭等江可申渡候、

（朱書）弘化四丁未

十月

笑左衛門

御軍役方御座之儀、鷲之間・次之間江明後十七日よ  
り被召建候条、掛之面々江申渡、可承向へも可申渡  
候、

弘化四年丁未

十月十五日

笑左衛門

二階堂主計（行経）

川上東馬（久封）

右、御軍役方掛被 仰付候条、向々江可申渡候、

（朱書）弘化四未

十月十七日

笑左衛門

一来ル廿八日於吉野

御流儀大炮調練御家老見分有之筈候、右へ付而ハ、

諸士其外未々迄茂為見物吉野へ差越儀堅不相成候条、  
此旨向々江不洩様早々可申渡候、

（朱書）弘化四

十月

（島津久宝）

豊後

（調所広郷）

笑左衛門

一頼朝公六百五拾年御法会、来ル十一日より十三日迄  
日数三日、花尾山於

御社頭御執行有之候間、御法会中殺生令停止候、且  
又火用心之儀猶以入念候様、表方御役人・与中・支  
配中江可被申渡者也、

（朱書）弘化四未

十一月六日

御家老座

一諸士之内無録之面々多候処、猶又小番・新番者分地

（録カ）

之沙汰も無之別立願出、御小姓与之儀ハ纔高五石以

上致分地、同断願出候者者其通被仰付候旨被

仰出置候処、其内二者無録故格式相当之儀難取統、

本家江引取又者致零落、終二者下賤之産業をもいた

し、当日を凌兼候様成立候向多、第一右休之処より

士風相衰、別而不可然事二被 思召上候、依之寄合並以上并小番・新番・御小姓与二男以下別立之者ハ持高之内五拾石以上、与力之儀ハ五石以上致付属候者ハ是迄之通別立被仰付、分地無之別立者勿論、往々買地等之約束ニ而願申出者ハ一切御免被仰付間敷候、左候而、郷士より所高持越、御小姓与養子願出候者も、五拾石以上持越候者迄御免可被仰付候、但、五拾石以上分地願申出候者ハ、自ら本家江茂五拾石以上残置可願出候、

右之通、以来被究置候旨被

(朱書)弘化四未  
十月

(調所広郷)  
笑、左衛門

一 諸御役人并書役・小役人輕キ者迄も年功を申立、類例を以規候様相心得、転役・昇進等之儀向々より申出、其御取訊被仰付候茂有之候得共、向後勤方一篇之年功迄ニ而ハ容易ニ御取揚無之、格別御用立勤功有之者ハ別段之事ニ候、

一 諸御役人其外以前より定数被究置候所、追々過上之

御役場而已ニ而、近来ハ猶更多人數及過上候付、過上之御役場より下之御役場ニ而も欠跡等之節ハ差繰可被仰付候、且又依御役場御用差支候而も可成丈ケ定人數ニ而繰合可致精勤、書役・小役人等も追々助役等之嵩申出候儀有之候付、同断繰合致精勤、嵩等者向後屹と不被召入候条、是迄過上之向者定数通、則減少之儀迷惑ニも可有之候得共、此涯成丈繰合可致減少候、今般分而仰出之趣も有之候ニ付、諸向深汲請早出等ニ而可致精勤候、尤、難勤歎応御用向者長詰等いたし、夜入灯等相入候而者念遣も有之候ニ付、御用向不苦分者宅江持帰り取調、御用向速々相弁、不及遲滞様致精勤候儀肝要ニ候、

一 諸御役人之内長々病氣ニ而罷在兎角出勤難叶向者、御役御断可申出儀当然候所、長病ニ而引入候者も百日日間を合置、数百日引入候向も有之哉ニ相聞得、別而不束之事ニ候条、向後右体之者同役中等より茂氣を付、屹と同断申出候様可取計候、書役・小役人等者奉行・頭人等氣を付同断可取計候、

右者、文化・文政之度、其後も追々被仰出置候趣

も有之候所、近来年功を申立、転役・昇進等之儀、  
内意申出者茂有之哉ニ相聞得、又者別而多人数相  
嵩候御役場も有之、取扱不束之処より右次第二付  
而者屹と御沙汰も可被遊御事候得共、過去之儀ハ  
被遊

御宥免不被為及御沙汰候間、向後ハ屹と前条之ケ  
条ニ基キ、心得違之儀無之様可致取扱、尤、向々  
奉行・頭人等へも申渡置候様被仰出候、

右之通、去年八月被仰出、細々申渡置、人々奉  
承知候通ニ而聊忘却有之間敷事候所、間ニ者勤  
ハ四ツ八ツニ限候事ニ相心得、人数減少等之儀  
汲受薄向茂有之哉ニ相心得、又者転役・昇進等  
之儀不勘弁内意申出候向も有之、第一

仰出之御趣意ニも相戻り、別而不可然事ニ付、  
此節尚又

御内沙汰之趣も被為 在、誠ニ以奉恐入候次第  
ニ付、依之向後前被  
仰出之趣厚奉汲受、聊取違有之間敷候、此旨  
向々江不洩様可致通達候、

（朱書）弘化四末  
十月

（島津久宝）

豊後

（島津久武）

志岐

（島津久浮）

石見

（末川久平）

久馬

（調所伝藏）

笑左衛門

御家老

若御年寄

大御目付

御側御用人

御側役

右宅江

一 親類又者無拋縁者

一 諸細工人

一 諸師匠家

右外之人ハ、内用向相頼候者計可致出入候、尤、内  
用向相頼置候名前之儀ハ御側御用人江相付可差出候、  
一 御役付御礼事等其外玄喚迄相見廻候儀ハ有来候通、  
一 依訳面会之儀申込候人有之候ハ、朝出勤前応御役

格、書院等其外表向之席々ニ而一通可致出会候、尤、御役付贈物等者可致受用事二候、

一御用ニ付参候人者、前条之振合ニ而可致対談候、

奥勤人数

右宅江

一親類又者無扱縁者

一諸細工人

一諸師匠家

右外之人数内用向相頼候者計可致出入候、尤、右名  
前之儀ハ御側御用人江相付可差出候、

一無扱不致面会候而不叶儀有之候ハ、勤之服ニ而表  
向座ニ而可致面会候、

右之通被相定候条、表勤・奥勤一切相交間敷候、稽  
古事等茂日并時を替可申出候、万一致出入輩於有之  
者、双方屹と可及迷惑候、此以前より度々被仰渡事  
候処、頃日大形之聞得有之候付、此節分而被相定候  
条、其旨屹と可相守、縦令是迄為致出入人茂候共、

此節相改双方共相断致出入間敷候、尤、御近習通込  
茂御用之外出入いたし間敷候旨被仰渡候条、謹而奉

承知、屹と相詮相立候様可相守候、此旨表方江致通  
達、奥掛・御勝手方へ者写を以可相達候、

天明三卯

十月

左中

喜入福

主馬

大進

仲

主膳

一御家老以下奥向勤之人宅江御近習通之人込も出入不  
通、

一御家老以下奥向勤之人宅江御近習通之人込も出入不  
通、

一御家老以下奥向勤之人宅江御近習通之人込も出入不  
通、

一嫡子末子部屋栖ニ而同家内罷居候面々所江表方之面々  
出入之儀是迄之通不苦候得共、右席ニ右之御役々勤

之親兄弟対面之儀堅不相成候、

一大御目付以上并奥勤之人江公私之用向ニ而參、致用談候儀ハ不苦候得共、用事相濟滯座いたし候儀者會而不相成候間、用向相仕廻次第直可罷帰候、

右者、大御目付以上并御御用人・御側役・奥勤人数宅江出入之儀、先達而被仰出趣有之申渡置候付、右之通相心得候様被仰付候条、此旨屹と相守候様表方江致通達候、奥掛・御勝手方江者写を以可相達候、

天明三卯

主馬

十月

仲

奥勤之面々江致出入候儀ハ従前々被相禁、殊ニ去ル卯年被相定置候所、兎角品を付、入交繁多と成立候、畢竟心底不相弁所より右通有之筋と相見得候、第一被定置候儀不相守不埒之至候、依之向後祖父母・親子兄弟・伯叔母（父伯叔脱力）・聿嫁舅姑・嫡家末家・師匠者出入、従弟・甥姪者手前へ呼候儀不苦候、其外為親類縁者共出入被差留候、若無拋儀茂候ハ、可願出、且内用向相頼出入不致候而不叶面々者は又可願出、尤、医

院・社家之儀ハ御定之外ニ候、

一御役ニ付御礼廻勤、其外依御役柄依訳面会之儀者被定置候通、書院其外表向座敷ニ而可致対面候、内証向等ニ而面会ハ決而致間敷候、御近習通連も御用之外者入交間敷候、

一大御目付以上宅へ差越候儀、御役場付而者格別、其外者被定置候通可相心得候、

右之通相心得、向後用向之儀者手寄を以可通候、然共何そニ付不寄候而不叶節者、其節ニ限可申出、且差越候訳合ニ而入交茂致候ハ、追而届可申出旨被

仰出候条、以来之儀猶無忘却屹と可相守候、此旨表方江致通達、奥掛・御勝手方江者写を以可相達候、

天明五巳

六月

（島津久金） 伊賀  
（喜入久福） 安房  
（島津久起） 近江  
（島津久健） 仲

(宮之原通直)  
主膳

奥向出入猶又被相定候ニ付而者、大目付以上江者御礼廻勤者勿論、御役柄ニ付而者自分尋問等表向差越候儀ハ可有之事ニ候、面会等申込候者、朝出勤前可差越候、

一御側御用人・御側役江御礼廻勤者勿論、勤柄も候間、自分尋問等表向差越候儀ハ有来通ニ候、是以面会之儀者朝出勤前可差越候、

一右外奥勤江表方之面々より御礼事ニ相掛候儀ハ可差越事候得共、自分尋問ニ者表向一通たり共差越候儀ハ有之間敷候、尤、奥向之面々より表方へ者御礼事之外ハ是又自分差越間敷候、右之通被仰出候条、不洩様可致通達候、

天明五巳

十月

(島津久金)  
伊賀

奥・表出入被差留候人数者、書通込も致間敷候、御礼事ニ相掛候儀ハ有来通可相心得候、

一御役柄勤柄ニ付、御礼事并自分尋問ニ差掛候分ハ御礼事ハ勿論、安否尋等表向一通之儀ハ書通茂可致候、

是以内用向等有之、自身事相掛候儀者一切書通間敷候、

右之通被

仰出候条、不洩様可致通達候、

天明五巳

六月

伊賀

今度奥・表出入被相定候ニ付而者、江戸表於長屋<sup>(薩</sup>  
<sup>摩藩法令史料集より補</sup>  
祖父・親子兄弟・伯叔父・智舅ノ外△同宿致間敷候、尤、右外願出ニ而茂御免被仰付間敷旨被仰出候条、此旨不洩様可致通達候、

天明五巳

六月

伊賀

面会之儀、朝出勤前と被仰出事候得共、八ツ後又者夕方ニ而も其向々申込候趣面会可致事、一御側役抔面会之節茂其向ニ心上下又者袴ニ而茂致着、

表向之座敷ニ而可致面会事候、大目付以上者猶以其  
通有之筈付、御内沙汰も有之候、

一 從弟、甥姪之分ハ召呼候儀不苦候、右ニ付而ハ從弟・  
甥之妻被召呼候而茂不苦、姪之夫者不相成筋ニ付、  
何分男之方ニ相付候趣ニ候、尤、伯叔父母茂同前之  
筋ニ候、

天明五巳

六月

口達之覚

此節奥向之外へ諸人出入之儀、分而被

仰出候付、内用相頼候人可成丈被建置候人数ニ而為

相濟候様、格別差支も候ハ、大目付以上者兩三人、

強而三四人位、御側御用人以来、奥下敷向者兩人、強而兩

三人位ニ而可有之、乍然随分少人数之方江可相心得

候旨

御内沙汰有之候条、内用向被相頼候人柄之儀ハ申出

候様内々可申聞候、

一 聾方之父母兄弟

一 嫁之方之兄弟

一 他家者(ヲカ)為繼候子之父母并其家内罷在候兄弟

一 姉妹聾并其舅

右、時々届置可致出入候、

一 家内ニ罷在候兄弟之子養子參候ハ、養家之父母兄  
弟等(下脱カ)実家之父兄等者可致出入事、

一同断兄弟之娘を他ニ遣候、夫舅同断可相心得候、

一 姪之夫者不相成、甥之妻ハ不苦候、都而婦人ハ夫ニ

相付、夫者妻ニ相付候而其通可相心得候、  
(不脱カ) (間カ)

一 妻之兄弟并妻之家元江罷在候甥姪者召呼候儀不苦候、

右者、奥向之面々其外出入之儀先達而被相定、猶

又右之通相心得候様御沙汰之趣申来候条可致通達

候、

天明五巳

七月

(島津久起)  
近江

一大目付以上奥向之面々江出入等之儀、天明之度被究

置、其後茂被

仰出置候得共、程過候得ハ兎角緩せ相成、不守之向  
ニ被聞召通候、畢竟御家老中取扱、等閑之処より一  
統も自然と弁薄(マ)茂通兼、別而不埒之至候条、御規定  
ニ基キ堅相守、猥ニ致出入間敷旨申渡候様、此旨分  
而

御沙汰被為在、誠ニ以奉恐入次第二候、依之一統  
御趣意之程深汲受、天明之度御規定通聊取違無之様  
堅可相守候、乍此上違背之向者屹と可及迷惑候、此  
旨向々江不洩様可致通達候、

十月

(島津久宝)

豊俊

(島津久武)

志岐

(島津久浮)

石見

(末川久平)

久馬

(調所広郷)

笑左衛門

一諸士知行高之儀者往古より先祖勲勞又者家筋・勤場  
之高下ニ依夫々被下置、夫々高頭ニ応し 公務者勿

論、非常之備迄も分限を以可致置事故、

(貴心)  
大中様より

(綱貴)  
大玄院様迄

御代々様分而被 仰出置、其上享保十三年御規模帳  
を以高上・高持成等之儀屹と被仰渡置、其後追々御  
規格被居置候処、至当分持高名実行違、別而致混雜  
居候段被聞召上候、全体御高之儀者治乱共御国役之  
根本ニ而諸士知行高も同様之事故、売買等猥ニ取計  
候儀屹と御禁止之事故所、太切之知行高自己之物之  
様差心得、先祖之勲功等を以被下置候家柄之面々猥  
ニ致付属、格式相当之勤方被仰付候而も無滞相勤候  
儀も調兼、平常質素・節儉之心得無之、内証之驕ニ  
所帶致衰微、其身之恥辱者勿論、先祖之功勞も空敷  
相成、其外小身迎も右ニ準、驕奢之振舞有之候所よ  
り伝来之知行高売払候時宜ニも成立、別而不埒之至、  
勿論高上り・高持成等之儀、家筋・勤場之訳を以被  
成御免事候所、豪富之者共御格迦内々過当ニ知行高  
買取居候哉ニ相聞得、分限も不顧甚以心得違之儀ニ  
候、右ニ付而ハ夫々御法通御取扱可被仰付儀候得共、  
此節迄者別段之以 思召不被為及 御沙汰、旧来之  
御規定ニ被復候段被

仰出候、依之取扱向之儀左之通被仰付候、

一 高直不相濟筭之者、借銀返弁又者利私之方抔二内々

二 而所務相受取候儀、且高上御免無之筭之者内々二

而高相求置、別人名前二而召置、所務請取候儀堅御

禁止之時候処、前文通當時余人之名前高令支配、所

務請取候者有之哉二候間、右体之者来申三月限、速

二有体二高直願出、又者脇方江致付属度者者其通二

而限月内屹と高直可願出候、万一限月相過候而も、

高直等不願出者者屹と可被及御沙汰候、

一 内々二而買取置、未名前不相直高并借銀返弁之(旧記 雜録より補)△方

二相請取致取納候高有之面々者、高員数并郷△村門

名者勿論、抱地高之訳委細二相記、一帳を以(旧記雜 録より補)△来申

二月限高奉行所江可申出候、右届書相糺候上△相違

之筋可有之者御取揚可被仰付、疎略之儀有之候ハ、

可及迷惑候間、双方引合入念可申出候、

一 自分持高并買取置候高、内々二而脇方へ名前相頼置

候茂有之候哉二相聞得、御法違之時候付前条同断届

可申出候、

一 取込拝借滞納有之人、高売払候儀又者高相求候儀不

相成御法二候得共、此節限者取込拝借滞納有之人二

而も高直被成御免候、乍然取込拝借等返上方付而者、

右高之内より追而御吟味次第上納被仰付候儀も可有

之候、

一 跡職不相究、又者幼少二而勤方無之者茂高直不被仰

付御法候得共、是又此節限高直可被成御免候、

一 高売渡置高直不願出、高主・証拠人共二死去等之者

者、当分存生之者之売渡証文無之候而者高直御免不

被仰付御規二候所、右之内二者琉球島方渡海之者も

可有之、往返日込二も可相成事候付、別段之御吟味

を以高売渡置、所務米高買主方江致取納候儀無相違

候ハ、此節限ハ慥成親類兩人之売渡証文(旧記雜録 より補)△御法之

証拠人相立願出候ハ、高直御免△可被仰付候、夫共

当人江掛合不致候而不相成証も候ハ、其訳合願出

候ハ、何分可申渡候、

一 江戸・京・大坂・長崎詰之者、高直二付掛合不致候

而不相叶茂候ハ、親類等より致掛合、左候而、其

段委細高奉行所へ可申出候、其上高奉行より御趣法

掛御側御用人江申出候ハ、江戸詰同役又者両御留

主居等江掛合、速々返答有之候様取計、是非限月中  
二相片付候様可取計候、

(末川久平)  
久馬  
(調所広郷)  
笑左衛門

一 鹿兒島高諸郷江遣候儀、且諸郷高鹿兒島江買入候儀  
御制禁之儀候処、抱地高等諸郷江内々ニ而壳渡置、  
諸郷抱地高内々鹿兒島江買入、又者現高諸郷江致返  
納候も有之哉二付、本々之通差返候歟、又者高可相  
直人江致付属候歟、両様之間取計、来申三月限屹と  
高直等前文同様可願出候、郷士其外身分違之者江借  
銀返弁之方杯ニ持高・抱地高等遣候儀者有間敷儀候  
得共、若左様之儀於有之者、糺方之上無用捨取揚可  
申付候、

右者、別段御寛宥之 御沙汰を以  
右之通被仰付候条、人々難有  
御趣意之程厚奉汲受、来申三月限高直等可願出候、  
乍此上若等閑之者ハ屹と可及迷惑候、此旨向々江不  
洩様致通達、諸郷等へも可申渡候、

(朱書)弘化四丁未  
十一月十六日  
(島津久宝)  
豊後  
(島津久武)  
志岐  
(島津久浮)  
石見

一 給地高御改正治定之上、持高之分限ニ応し御軍賦被  
相定筈候付、不容易手数ニ而年数ニも相抱賦二候、  
然者御改正中被定置候御作法通高上り等不被仰付  
面々、御改正之儀者暫時之儀と相心得、高名前相頼  
置、追而自己名前ニ可相立との含ニ而、其間高名前  
預り置候儀を申談候者も有之哉ニ相聞得、其通ニ而  
ハ矢張付高同前之儀ハ勿論御軍賦ニ差支、別而不都  
合之至候、右体之者ハ夫々糺方之上、付高同様高御  
取揚之上双方共屹と可及迷惑候、此旨向々江不洩様  
可致通達候、  
(朱書)弘化四丁未  
十二月  
豊後  
笑左衛門

一 給地高御改正二付而ハ追々被仰渡置候通夫々御格も  
有之儀二候所、凡下之者共持高并抱地高等内々買取  
(旧記雜録下り補)  
居候哉ニも相聞得、右体之者者此内被 仰渡置候通、

夫々糺方之上二而御取揚可被仰付候、凡下者より高  
買取<sup>(相力)</sup>候者ハ勿論、仮令直対不買入手越之買入候共  
御取揚可被仰付候条、高主旁之儀共入念買入方不致  
候而ハ可及迷惑、若又大形ニ相心得買入居候者有之  
候者本主江相返、其届高奉行江可被申出候、此旨  
向々江不洩様早々可致通達候、

(朱書)弘化四丁未

十二月七日

豊後

笑左衛門

一御当国之儀、諸士株不相応給地高相少、其上近年高  
上等之儀御格式相弛ミ、富家之面々過当買円、当時  
之形勢ニ而ハ諸士追々及疲労、御軍役等相動候丈無  
之候付、厚以思召此節御改正被仰付候儀、畢竟右高  
諸士中江行渡り、往々延立候様ニとの御趣意ニ候間、  
大身之面々者兼而高地をも被下置、右様厚御趣意之  
程おのつから汲受有之候筈候得共、此涯万一散高買  
円之儀共有之候而ハ御趣意ニ相戻り、殊ニ大身之  
面々ハ諸士之目当ニも可相成儀候所、此節給地高下  
直相成候様幸ニ買入方有之候而ハ風儀も相掛、達

御聴候節不都合ニ相成候而ハ不可然事候間、限月内  
ハ仮令高上り等被成御免候向茂買入方勘弁可有之候、

(朱書)弘化四丁未

十一月

豊後

笑左衛門

一諸士給地高之儀ハ御軍役之根本ニ候間、当分富家之  
面々兼併いたし候而ハ諸士追年致疲労、御軍役も勤  
兼候所より、此節厚

御思召を以御改正被仰渡儀、不容易大切之御取扱候  
処、

御趣意汲受薄面々間ニ者是迄之通内々ニ而名前脇方  
江相頼置所存之者有之哉ニ相聞得、別而不埒之至ニ  
候、乍此上右体之者有之哉ニ相聞得、<sup>衍</sup>別而不埒之至  
ニ候、乍此上右体之者ハ夫々聞合之上右高取揚、急  
度可及御取扱候、且又御法迦買取置候高も永代買治  
候高、色々致疑惑片付埒明兼候哉ニ相聞得、旁不埒  
之至ニ候、支配頭より引受高奉行方江引合、支配中  
之面々篤と申論、先達而被仰渡置候通来月限成行届<sup>(一脱)</sup>

申出候様可被取計候、万一支配中之内不正之手筋有之候歟、又者来三月相過迄不片付者も有之候ハ、高取揚、其身者勿論支配頭可為越度候、此旨向々江不洩様早々可致通達候、

(朱書)弘化四丁未

十二月

(島津久宝)

豊後

(調所広郷)

笑左衛門

是迄屹と立候御役相勤又ハ地頭職被下置候者ハ、持高千石より内ニ高上り被成御免候得共、此節別段之御吟味之訳有之、給地高御改正中者五百石を限高上御免可被成候、

一祖父・曾祖父代屹と立候御役相勤候者又者地頭職被下置候者之子孫、小番相勤来候者ハ五百石成、小番迄(未カ)を勤来候者四百九拾九石余迄之高上被成御免候得共、前条同断御改正中者三百石を限高上可被成御免候、

一新番相勤候者ハ三百石成被成御免候得共、前条同断御改正中ハ弍百石を限高上可被成御免候、

一御小姓与之儀ハ弍百石成被成御免候得とも、前条同

断御改正中者百五十石(マ)を限高直(上カ)可被成御免候、右者、今般厚以 思召給地高御改正被

仰出候付、致治定迄ハ右之通被仰付候、左候而、持来候者ハ有来通二候、尤、家筋俗生等二応し差別被仰付候儀ハ是迄之通候条、此旨向々江不洩様早々可致通達候、

(朱書)弘化四丁未

十二月

豊後

笑左衛門

此節給地高御改正二付、段々被仰渡趣有之候所、御法迦買円置候面々、本高主又者高上等可相済向江高代銀年府入付之取与ニ而讓渡之致内約候者共有之由相聞得、其通二而ハ限月被定置候趣ニも相背、全体此節ハ現ニ相片付、給地高引渡、一統御軍役無滞相勤候様と之御事ニ而、格別成御趣意汲受薄筋ニ相当、別而如何之次第二付、是迄高之本意不相弁、御法迦之致買円候儀も御寛宥之以思召不被為及御沙汰候而者難有奉承知、屹と心得違之取計等致問敷事候所、今以種々手筋取企甚不埒之至二候、若乍此上内蜜之

申訳を以表通背御法之廉無之者ハ一往高可相濟候得共、追而内々取与之次第、又ハ取納先等微細取調相成筈候間、紛敷致引結等候者、其高無用捨御取揚被仰付双方共可及迷惑候、且不能存慮儀有之節ハ、其訳高奉行江申出可得差図候、此旨向々江不洩様早々可致通達候、

(朱書)弘化四未

十一月

豊後

笑左衛門

口達之覚

此節諸人持高付高之儀ニ付而ハ、追々分而被仰渡趣有之、各承知之通ニ候、然所当分高直成至極下落之向ニも相聞得候所、其上ニも致下落候を相待、又者過当之高直ニ売払候含ニ而右同様見合居候所存之者も有之哉ニ相聞得、格別成知行高商売物之様相心得候而ハ風儀ニも相抱、別而不可然事候付、時宜相当之直成を以早々売買相片付候様、支配中へ不洩様無屹と申渡候様致承知候事、

一知行高余人江売渡置又ハ付高請合置候面々、速ニ名

前替相談も決着之不致返答、又ハ高直証文・名寄帳等不引渡向茂有之哉ニ相聞得候、高直之儀御限月茂被定置候所、別而不勘弁之至候条、右様之取計有之段聞得之向茂候ハ、屹と可被及御沙汰旨、豊後殿・笑左衛門殿より御口達を以被仰渡候間、聊心得違有之間敷事、

(旧記雜録より補)

一此節給地高御改正被仰渡、人々奉承知通ニ候、右ニ

付而者当分余人より名寄帳相受取、所務米不相請取者又者余人名寄帳無故致格護置候者有之候ハ、其訳相記、名寄帳相添、来正月限屹と御勘定所江差出候様、向々江不洩様早々可致通達候、

十二月

豊後

笑左衛門

一給地高御改正付、旧冬より当春ニ相成高出入余多候間、去秋出米総迄ハ本高主方へ相円総書江何某被売渡候段相記、総可相遂、勿論買主より茂本高主江引合無滞可相遂候、此旨向々江不洩様可致通達候、

(朱書)弘化五甲

正月

豊後

笑左衛門

一 寺社方并御廐・宗門方江高差上、拝借銀被仰付置候  
面々、此節拝借返上不相調向、余人高相求候儀ハ自  
由ケ間敷筋合ニ候得共、小身者ニ而拝借銀返上ハ不

相叶候逆茂、纒計之高相求度者も可有之、右体之者  
御改正中現地五拾石以下之者ニ候者、高相求候儀可  
被成御免候、右以上之者不成御免候、且又是迄取納

仕来高直之儀者別段之事ニ候、此旨向々江不洩様可  
致通達候、

〔朱書〕弘化四未  
十二月

〔島津久宝〕  
豊後  
〔調所広郷〕  
笑左衛門

一 現地被下置候一所持式拾壹家之面々、余人名前高永  
代買取置年々取納被致来候高たり共、此節ハ高直不  
被成御免候、乍然現地式千石以下之向者永代被買取  
置候高者、式千石限りハ高直可被成御免候、現一所  
持之儀ハ家来等へも夫々配当被申付置、夫丈ケハ郷  
高同前之訳ニ付右通可被仰付候、

一 余人より付高受合居、自分名前直居候高たり共、自  
高二被致候儀ハ一切不相成候、且又自分名前之高一  
且余人江被壳渡置候株茂、現高式千石以上ニ而候ハ、  
被受返候儀遠慮可有之候、式千石以下之向ハ、式千  
石限りハ被受返候儀可被成御免候、

但、式千石以上之向も一所高余人江被壳渡置候株  
ハ、自分名前之外、高を以繰替いたし度向ハ可被  
願出候、

一 現地被下置候一所持より寄合並迄、右之面々余人名  
前高永代被買取置、年々取納被致来候高たりとも、  
此節ハ高直不被成御免候、乍然現地千石以下之向ハ

永代被買取置候高ハ、千石限りハ高直御免可被成候、  
一人より付高受合居、自分名前二直居候高たりとも、  
自分高二被致候儀不相成候、且又自分名前之高一旦

余人江被壳渡置候株も、現高千石以上ニ候ハ、被受  
返候儀遠慮可有之候、千石以下之向ハ千石限りハ被  
受返候儀御免可被成候、

右者、此節給地高御改正中右之通被仰付候条、此旨  
向々江不洩様早々可致通達候、

但、御改正中散高被買入候儀ハ先達而申渡通二候、  
(朱書)弘化五戊申嘉永元戊申  
申正月九日  
豊後

笑左衛門

御巡見、垂水より  
御乗船、桜島へも

御渡海被遊、

御帰殿之筈候付、諸事奥計被仰付、

御手当左之通、

一 諸人出来総之儀、去ル丑年以來嚴重申渡趣も有之候  
間、等閑二相心得候儀者無之筈候所、限日差掛候而  
も総不相遂、高奉行より度々受催促候上、乍漸総相  
遂候習俗不埒至極之事候、以来者高奉行より催促者

一 御巡見付御一門方・種子島彈正殿御女中方・島津又  
左衛門一列・大目付以上奥向等伺御機嫌并不及進上  
物、近郷寺院江役々等も同断、

有之間敷候条、精々差急限日不差掛内可相遂候、勿  
論限月相過候者、御法(高脱)通御取揚可被仰付候条、追々

一 御通路筋之諸所地頭・領主并郷士年寄・組頭・役人  
等不及進上物、伺御機嫌迄可申上候、

被仰渡置候御趣意厚奉汲受、聊等閑有之間敷、此旨  
向々江不洩様致通達候、

一 御休泊之所迄も同断二而、差引人之儀茂不及差越、  
御供之御用部屋書役より可致差引候、地頭代之儀も

(朱書)弘化五  
正月

豊後

笑左衛門

御供之御側役江可被仰付候、

来春三本御道具二而、向瀉為

一 御通路筋危所又者至而  
御見障之場所者格別、其外之処者随分費無之様道作

御巡見蒲生

可致、取繕方ハ尤

御差入二而、加治木筋福山、志布志、肝付表、小

御巡見二事寄、自分失脚二而取計候場所も取調二取

根占諸所

拵候歟、宿二入用之器物類も新規二不相調候而可相

濟品も出錢又者出来を以

相調候儀共有之候而ハ如何之至ニ候間、一切右式之儀共無之様屹と取計、所有物之内借物等ニ而可也ニ致用弁、折角費用不相掛様何篇氣を付可取計候、

一御通路筋々諸郷夫仕等折角不相重、所中迷惑不相成様万端取計候様被仰候、

御光越先之儀何れニも每物太粧成立事候間、御供之面々御用ニ付人夫入用、又者調物等有之節ハ御用部屋江申出取計候様被仰候間、余時夫仕等不相重様万事氣を付可申候、

一御行列廻其外諸向入用人馬并御供中人馬御吟味之訳有之、此節ハ奥計御雇揚ニ而人馬通シ被仰付被相渡候間、諸郷寄人馬ニ不及候、

一御休泊之郷々ニ而ハ、差掛入用之人馬も可有之候付、右之郷々江用心馬五疋・用心夫三拾人ツ、可致用意置候、尤、最寄郷より差立候儀者其郷受持掛郡奉行引受被仰付候、

一御通路筋郷々境目より、所横目兩人ツ、羽織・股引ニ而御先払可相勤候、無役郷士之儀も組頭相付、同

断之服合ニ而御先江御供可相勤候、私領之儀ハ前郷押通可相勤候、

但、丸羽織・野羽織勝手次第、

一御通路筋々諸所役々并辻堅郷士等麻上下ニ而相勤、御逗留中者役々羽織袴ニ而可相勤候、御通路筋

御休御小休之諸所迄

御座之間江所有合一種ツ、可致御棚飾置候、左候而、御側役以上江一汁三菜、士以上江一汁一菜、其以下江者束飯・染物類可差出候、

御立場等之儀茂依遠近所賄差出候様被仰付筈候付、追而場所付を以可申渡候間、其郷々ニ而御側役以上江湯漬、士以上江煮染類相付、其以下者束飯・香之物添ニ而可差出候、

一御休御小休之所食座奥向一席、士以上一席、与力一席、御小人・足輕・御口之者・一身以上一席、又者家来・下人一席、銘々席分張紙を以記置候様地頭并領主江申渡、受持掛郡奉行へも可申渡候、

一御休泊之諸所御入御立之節ハ、詰居候郷士年寄・組頭・役人等麻上下ニ而御門外江可罷出候、

但、御門内布砂、其外

御通路筋籠并町内可致立砂候、

一於郷々里数半里内外山坂難渋之上り立等者吞湯湧置、

丹荷ニ水汲置、茶碗十計・柄杓五六本相添差出候様、

一御泊之所ニ而ハ惣御供廻都而上下押込、忝人ニ錢式

百文ツ、之旅込ニ而被差返、代払之儀者別段本銀取

払を以大払ニ被仰付候間、宿々野菜・薪等入付ニ不

及候、左候而、上沓汁二菜、下沓汁沓菜ニ而可差出

候、

一於諸所酒・焼酎・取肴等差出候儀一切不相成候、

一御休泊并御逗留之諸所表裏門共所郷土、私領ニ而者

家来番両三人ツ、昼夜不明様繰廻可相勤候、御手道

具持も忝人ツ、操廻可相勤候、

一諸所御飯屋近辺者勿論火用心第一之事候間、無油斷

火触打廻分而可入念候、左候而、火消人数之儀も先々

之以振合可備置候、

一御巡見之諸所人々折角相慎、聊心得違之儀共有之間

敷、就中軽キ者共江者前以吃と可被申付候、

一御逗留之諸所御膳所御用肴・野菜・炭・薪・御茶道

部屋入用之分ハ寄物ニ而差出候儀、受持郡奉行引受

被仰付候、油之儀者御徒目付方ニ而御買入を以被相

渡候付、郷々者其手当可致置候、

但、寄物等之取払郡見廻・庄屋方より相勤、御徒

目付可致見分証印候、

一御休泊并御立場之諸所草履・草鞋等差出候儀、受持

郡奉行へ引受被仰付候、

但、御駕籠之者草鞋ハ大振ニ入念可調出候、

一御膳所御用米之儀ハ、於諸所時々御徒目付方ニ而致

御買入、御代払之儀も御徒目付方より相払候様被仰

付候、

一諸向御用蠟燭之儀ハ、御徒目付預ニ而持越向入用申

出候、御用部屋免許之張紙見届相渡候様被仰付候、

一御用钱請取方之儀ハ、御徒目付差掛請取、引替ニ而

手当相成候向より相請取持越候様被仰付候、

一御徒目付方金錢出入之儀者、

御巡見相濟候上致差引、御用部屋江申出候様被仰付

候、

一一身以下并家来・下人等、所役々并宿主等江対し權

〔朱書〕弘化四  
未十二月

伊木七郎（常識）右衛門

柄等敷、家来自儘之儀共無之慙慙ニ致会釈、御用之外徒徘徊不致様、頭人・主人より手堅可被申付置候、尤、田畠踏荒候体之儀ハ一切無之様、頭人・主人より訳而稠敷可被申付候、

一耕作之儀者時節第一之事候間、

御巡見先迎も不及遠慮可致農業候、御通掛之節ハ蹲踞罷在、不敬之儀共無之様可申渡候、

一宿札之儀、大目付以上中奉書豎二ツ切、御側役以上横四ツ切、御納戸奉行・御小納戸頭取小奉書横四ツ切、十人賦より六人賦迄中奉書横六ツ切、五人賦より御小姓与迄小奉書六ツ切、其以下割下ケ宿札相認可差出候、

一御供廻郷土宿之儀ハ水夫入付、百姓宿者可成丈宿水夫二而相済候様可取計候、

右之通被仰付候、尤、雨御時節柄之儀候間、万端御手当之方ニ取計候様被仰付候付、向々其心得を以每物綿蜜致吟味、御費筋之儀共無之様可取計候、右外相洩候儀ハ、於向々先々之振合を以無手拔様可被申渡旨御差図ニ而候、以上、

〔表紙〕



統常不止集

三之卷之内二

統常不止集

仰渡留之部  
三之卷丑

統常不止集 三之卷丑

弘化三年丙午九月中

〔以下六行、二は全て朱書〕  
〔四〕縁組并違変之事

〔五〕養ひ子二付被仰渡候事

〔六〕御暇願之事并家中致奉公候類之事

〔七〕高持成并高上り高屋敷分地之事

〔八〕何そ二付御断申出候儀二付被仰渡候事

〔九〕寺入人并御咎目等之事

付、御赦免之節之事

〔朱書〕  
〔四〕縁組并違変之事

縁組之次第

一 御一門・壹所持并壹所持之格・与頭・番頭・与頭列

以上御家老直触格迄者、無役二而茂月番御家老へ双

方より願可申出候、

但、聲之方父無之者者近き親類より願可申、舅へ

も同断、

一 右格之人二而も御役相勤候者者、其御役之頭々江相

付願可申出候、

一 御家老直申渡之御役并地頭持者、月番御家老島津備

前殿支配者備前殿江相付願可申出候、御小姓之儀ハ比志鳥隼人・名越右膳江相付願可申出候、

一 聳ニ成候者無役ニ而も親右之御役相勤候ハ、親御役之頭江相付可申出候、

一 御家老直申渡候外之役人又者無役ニ而も、持高式百石以上之者者と頭へ相付可申出候、

一 縁組之儀、一方江申出不及者ニ而茂一方申出格之者

ニ候ハ、双方より可申出候、支配違ニ而も其頭々江願書可差出候、御家老方ニ而双方之願書取揃可申上候、

一 願申上縁与仕候者致離別候ハ、其段頭々江可申出候、

右之通、向後相心得候様ニと被 仰出候間、此旨

与中江可被申渡者也、

閏八月六日

御家老座印

〔行間朱書〕  
一写

一 親御側方へ相勤、悴表方へ勤候者縁与之願申出候節ハ、前以親支配頭御側へ親より御届申出置、其後表方へ願書親より可差出候、

一 親表方へ相勤、悴御側へ相勤候者悴縁与之儀願出候節、悴支配頭御側方へ右願書物親より可差出候、

一 不限御側・表右準可申出候、

一 娘縁与之儀申出候節ハ、悴縁与申出候次第二者相替、早晚親支配頭へ願書物可差出候、

右者、縁与願其外何角ニ付願申出次第先年段々被仰渡置候得共、末々ニ而者取違有之、向後右之通

相心得、間違無之様ニ可被致沙汰旨与頭江可申渡候、以上、

但、右朱書之趣、御側方へ被仰渡候間、此通相心得可申候、

享保二酉八月廿六日

右朱書之通、樺山権左衛門御取次ニ而將監殿〔鳥津久吉〕より被仰渡候事、

一 縁組之儀急度願申出候人又者願申出ニ不及人、幼稚〔稚カ〕之内より内々ニ而契約いたし置候者有之候、縁組早ク取組候儀不入事ニ候、且又頃日女房致離別候者多々有之候、不宜候間、向後左様無之様右之心得を

以寄々申通可然候、以上、

十月十二日

者式百石以上、其頭々へ可願出候、以上、

〔朱書〕正徳五末  
十月十三日

一月次御礼罷出候御役人縁組仕候節者、持高有無二無

構申出筈二候処、願を茂不申出、内々二而縁与仕候

人も有之由、此段者心得違二而候間、向後月次御礼

罷出候御役人者不及申、其家内之者迄も縁組仕候節

者支配頭へ相付願可申出候、尤、縁与願申出候儀二

付而者先年被 仰出趣有之、寅閏八月申渡置候得共、

其内末々二而取違之儀茂有之候故、此節別紙之通

又々申渡事候間可得其意候、右外之儀者先年申渡置

候通別二相替儀無之候間左様相心得、自今已後取違

不仕様二与中江可被申渡置者也、

〔朱書〕正徳五末  
十月廿三日

御家老座印

与頭

縁組之次第

一月次之御礼罷出御役人者其頭々〔脱カ〕常二願事致候格式可

致候、無役二而も寄合並以上者高之不依多少、其外〔下カ〕

一縁与之願致候者、初而之 御目見茂不致者ハ願候而

茂取揚申間敷候、

右之通可承置旨与頭へ可申渡候、以上、

〔朱書〕正徳五末  
十月晦日

一縁与願之儀二付而者兼而御格式被定置候、高式百石

以上之人之家内二罷居候而茂縁組之願申上候節者達

貴聞筈二候間、右御格式二向後可被相心得候、以上、

右之通、宮之原〔重行〕甚太夫御取次二而鳥津藤次郎致承

知候事、

〔朱書〕正徳六申  
二月十三日

組頭江

一御隱居様御方相勤候人縁与願申出候節、一方者願不

申出格式之人者願申出不及、御隱居様御方勤之人よ

り申出候迄二而御免被成筈二候、尤、双方より申出

格式之人者勿論申出筈先頭被相究候条此旨被承置、

此已後右体之願申出候節、右格式を以時々相調間違

無之様可被致候、

一表方之儀者此内之通可被相心得候、

右可申渡候、以上、

(朱書)享保九辰  
正月

(島津久当)  
将監

渡置候、然処頃日離別願申出候者多く有之不宜候、

自今離別之願申出候ハ、委ク可遂吟味候条、軽々敷

不申出様ニ可相心得候、此旨可致通達候、以上、

十二月

大藏

右之通被仰渡候間致通達候、以上、

(朱書)享保九辰  
十二月四日

(貞伴)  
讀良善助

一縁与離別之儀、最早不相立取組候者茂、以後願相立

候格成候ハ、願可相立候、且又最初願相立取組居候

者、以後願不相立格ニ罷成候ハ、願立不及候、

右之通被仰付候間、表方へ致通達、御勝手方・御

側方へも例之通可被致通達旨可相達候、

正月廿八日

大藏

右之通被仰渡候間可致通達候、以上、

(朱書)享保十七子  
正月廿八日

(稀盛)  
木脇賀左衛門

一諸人妻を致離別候儀、軽々敷無之様ニと先年被仰渡、

不縁ニ付離別不仕候而不叶時節ハ双方親類中申談、

縁中難遂訳を互ニ申談、其上ニ而離別申出筈ニ被仰

（朱書）延享元子  
九月

（願姓久留）  
内膳

右之通、子九月廿日木村四郎左衛門取次二而島津  
求馬致承知候事、

一御一門より寄合并御役人者納殿役人以上縁与願有来  
通、右外之御役人并無役式百石以上向後縁与願申出  
不及候条、此旨表方へ致通達、御側方・御勝手方へ

者写を以可相達候、

（朱書）延享五辰  
二月

（島津久甫）  
左衛門

右之通、三崎平太御取次二而、延享五年辰二月十  
四日島津要人致承知候事、

写

蒲生地頭江

延岡牢人

佐々木太郎次郎

右娘 御城下士并外城衆中江縁与仕候儀御免被下度  
旨申出趣有之、願之通被成御免候、左候而、太郎次  
郎事、往々 御城下士・外城衆中江互之縁組御免被

仰付置候条、時々願申出二不及候、併縁与之願申出  
候格式之人江取組候節者御法之通可申出候、

（朱書）延享二五（朱書）  
右可申渡旨申渡、首尾係へも如例可申渡候、

四月「廿八日」

内膳

（行間朱書）（盛庸）  
「本文戸田伝五郎御取次二而北郷権八致承知候事、」

（朱書）  
「五」養ひ子之事

一与中より養ひ子願之儀先例も無之候付、組頭継書二  
而可差出哉、又者養子願同前之筋二茂可致哉之旨、  
新納五郎右衛門より西彦太郎御取次二而得御差図候  
处、主殿殿より同人御取次を以被仰渡候者、養子願  
同前之筋二可致旨被仰渡候、尤、支配分之儀ハ有来  
通有之候様ニと致承知候事、

一安藤甚左衛門亡養父安藤金左衛門妹を鎌田次郎兵衛  
養ひ娘ニ仕度旨申出趣有之遂披露候处、主殿殿より  
西彦太郎御取次を以左之通被仰渡、尤、屹と被仰渡  
儀二而者無之由義岡左平太致承知候、

一 養ひ娘之儀、何ぞ訳由緒等有之人江願之通被仰付儀も可有之事ニ候得者、与頭より由緒等願人江得と相尋候上、右由緒之儀繼書相記可被申候、尤、訳由緒茂無之人願申出候節茂、与頭前より右願書被相返二者及間敷候、訳由緒之儀何ぞ無之由承届、此上者何分ニも御差図次第可申渡由次書ニ而被申出可然候、

元文二年巳八月九日

一 養ひ子を仕候者向後願可申出候、当時養ひ子を仕置候者ハ其首尾申出候様可仕候、尤、士之外申出ニ不及候、此旨与中へ可被申渡者也、

(朱書)「元文元辰」

十月七日

御家老座印

六与  
与頭

(朱書)  
「一六」御暇願之事并家中致奉公候類之事

一 輕キ鹿兒島士并外城衆中其外不依何者譜代之家来ニあらさるものハ一節抱候而召仕候儀有之候処、其者

永代之家来ニ而者無之と存候心底有之候付、抱主より申付候儀を不相守致氣儘候者多々有之由候、一朝一夕とても致隨身候得者、主従之儀者不遁事候間、勿論抱主より申付候儀堅固相守、惣而主従之礼儀を不乱、譜代之家来同前可相勤事、

一家中致奉公候士者何れも不幸ニ付而之儀候得ハ、諸事勉方雜人二者相替堅固可相勤と社はけミ可申事候処、其儀を不存、元ハ士ニ而永代之家来ニ而者無之と申事のミを心底ニ挟罷在、却而氣儘をいたし抱主より申付候儀をも致大形、刺主人之致供御供先坏ニ而之下知を茂不相守者有之由不届至極候事、  
一 鹿兒島士・外城衆中外之抱者共之儀も永代之家来ニ而無之と存候心底故、右同断致氣儘候由不届至極候事、

一 右通之者、抱主ニ対シあたをなし候者有之候、同前類中之者迄茂重科可被仰付候事、

一 一朝一夕ニ而茂致隨身扶助を受候者ハ勿論、扶助を不請一旦為見馴致隨身者逆茂隨身之致契約候上者、主従之礼義可乱道理無之、尤、惣而之儀家来之格式

不致候而不叶筈候処、其旨を不存致氣儘を主従之礼義を乱し、不謂不礼之働なといたすものあらは、抱主より永代之家来同前可申付候、無扨儀二付打捨候者逆茂御掛無之事、

右之趣可觸置旨此節被仰付候条、末々之者までも不洩様時々可申聞置候、尤、地頭所并一所持之面々者地頭所并一所持之地へも可被申渡置候、ケ様之儀一旦觸渡候而茂末々致忘却候得者無詮事候間、向後者召抱候節之手形に右之趣相調候様可申渡候、以上、

〔朱書〕享保五  
子七月

一御当地士身上為持家来分二而致奉公罷居候者ハ、旅二召連候儀外城衆中家来分二而致奉公罷居候者同前之儀候間、組所へ暇申出候迄之首尾二而可差免候、此儀二付而者紛敷儀無之様入念相しらへ候様二と被仰出候間、与頭中可被得其意候、以上、

閏八月

〔行間朱書〕  
〔一〕本文四月廿日島津弥市郎江島津八郎左衛門より差出

置候事、

写

一御番不相勤与之士又ハ部屋栖家内罷居候士湯治其外差越候御暇之儀、与頭承届被差免候儀ハ本文之通可相心得候、湯治御暇之儀二付而ハ享保九辰年被仰渡置、就中享五年子三月・同十八年丑十二月委細被仰渡置候得共、右仰渡之趣を以猶又此度致通達趣有之候条、湯治御暇申出候者ハ右仰渡之口を以委ク遂吟味、差当り湯治不差越候而不叶者迄を差免候様二与頭中可被相心得候、湯治外御暇之儀ハ有来通可被相心得候、

右、与頭へ可申渡候、以上、

五月

〔島津久家  
本〕

一右朱書之通、享保廿一辰五月三日島津弥一郎御取次を以詰合与頭島津八郎左衛門致承知候、

一俄二江戸・上方詰又者御使者等其外他所へ被差越候節、家来不得抱候付悴并親類内自分召列度由、

一老体又者人茂存候程之持病有之者、旅中為介抱悴又

者身近キ親類自分ニ召列度由、

一差当り稽古事ニ付而自分ニ悖召列度由、

右三行之願申出候節者、吟味之上無拋儀候ハ、御免可被成候、右之外ニも其詮相立候申分ハ格別ニ候、為物馴迄ニ自分ニ召列度旨申出候共、向後御免無之筈候、以上、

十二月

右之通、与頭衆被得其意、御暇之願申出候節、吟味之上以繼書可被申出由御差図ニ而候、尤、七組被相廻、右紙面之写可相返納候、以上、

(朱書)「宝永六丑」  
十二月廿六日

相良權太夫

御家老組

六組

一諸人御暇之願申出候節、此程幾日より先キ幾日程何様之訊ニ而御暇被下度旨願申出候、左様ニ願出候儀者不宜候間、向後者御暇於被下者御暇被仰付候日より幾日之御暇被下度由願出候筋宜候条、各得其意置候様ニと帶刀殿被仰付候、以上、

(朱書)「正徳二辰」  
三月十八日

相良權太夫

一外城衆中、御雇足輕并御春屋人足ニ罷成候者、且又身体致逼迫、一往為渡世年季之暇ニ而御当地へ致中宿、下々之仕業ニ而罷在候者、又者家中寺社家江以前より致奉公罷在候共江於地頭所急度可申聞候、勿論向後右体之者地頭より暇出候節、所囑共より可申聞覚、

一右体之者年季明キ在所へ罷帰候節、其者何そ子細も無之、首尾好者者勿論、以前之通衆中ニ可被仰付候、若年季之内無所行者ハ、其身計衆中被召放家内ニ可被召入置候、家督・部屋栖共ニ其者之親子兄弟ニ無御構名跡者可被相立候、尤、屹及御沙汰候科之者成行之儀者、応其科御法之通被仰付事候、

一右年季之内難召仕不所行ニ付而在所へ相返シ候歟、又者其者より主人を替候ハ、法様之通ニ致置、不所行之段者、最前之抱主より地頭へ内々ニ而可申達置候人も存候程之不所行者身ニ相知事ニ候得共、主人方ニ而其者内々之不所行者不相知事ニ候故、不隱置

「地頭へ申達候様ニと申渡置候、

但、地頭方へ不所行之届承候ハ、其趣内意ニ而  
大御目付へ可申達置候、

一為渡世諸売買願又者右下輩之致家職候者者、衆中  
之姿曾而仕間敷候、尤、其身并妻子共へ士ニ御免之  
衣服等用間敷候、当時之家職居住之所ニ応シ其所候  
様ニ仕可罷在候、何ぞ出入等ニ付而も応其姿候而可  
被仰付候、

右之通、此節より申付候間、向後可得其意旨与中

へ可被申渡者也、

（朱書）正徳三巳

九月廿八日

御家老座印

与頭

写

一外城へ親子兄弟・祖父・舅有之者より見参又者病氣  
見舞之御暇申出儀候ハ、見参迄二者滞留日数三日  
五日往来之日数をも込、遠近次第日数を限御暇遣可  
申候、看病ニ付差越候儀ハ日数之極病氣之様子次第  
可有之候事、

付、差越儀候ハ、忌中日数之内願次第御暇遣可申

候、併御用有之者之儀ハ同役・同番中御人少ニ付  
而茂忌御免之訳可有之候間、暇不遣節茂可有之候、

（朱書）正徳三巳

三月

写

一組方之勤方不被仰付置、且又申分ニより御番御免被  
仰付候中、何ぞニ付田舎へ差越度由ニ而御暇申出候  
節ハ、与頭承届御暇差免候筋ニ可致旨、申八月十八  
日内記殿より樺山権左衛門を以被仰渡、島津又七承  
知仕候事、

八月

一湯治御暇之願申出候節ハ、此跡右書物之儀ハ与頭見  
届与所へ召置、御暇願之趣書付差出来候所ニ、子三  
月廿一日将監殿より高橋七郎右衛門御取次を以被仰  
渡候者、御暇願之儀ハ軽キ者ニ而も被達  
貴聞事候間、右暇願之書物ニ与頭致継書、尤、御医  
師証文相添差出候様ニと被仰渡、祢寝仙十郎致承知

候ニ付此段留置候事、

一病氣ニ付湯治御暇申出候者之儀、差当り湯治不仕候而不叶病氣之者迄御暇被下筈ニ、先年段々被仰渡置趣有之候処ニ頃日湯治願之者多有之候、尤、湯治不致候而不叶病氣故申出ニ而可有之候得共、ケ様之儀間々有之候得者心得違もいたし候而者

思召ニ不叶候間、自今湯治願申出候者有之候ハ、差当り候病氣之外取揚間敷候、平日御座向相勤候者并御番杯乍勤居湯治御暇申出候者有之候ハ、委可遂吟味候条、別而差当り湯治之養生不致候而不叶者願出候様可相心得旨可致通達候、以上、

十二月

大藏

右之通被仰渡候間致通達候、以上、

(朱書)享保九辰

十二月四日

讚良善助

一外城へ中宿仕居候者、親祖父又者先祖代ニ御暇申上其身代ニ御暇不申上、且又長々之儀ニ而親祖父先祖代ニ御暇申上中宿仕居候儀不相知者も有之候、就夫右体之者段々御断申出御咎日被仰付候付、外ニ茂

多々右体之者可有之と申談、与中相糺五拾人余ニ及

右体之者有之候、依之田舎人之儀ニ付委細被仰渡候趣茂有之候哉と相糺候得共見当り不申候、今ニ左様之仰渡無之儀ニ而候哉と相考申候、就夫私共申談候者先年跡職之儀ニ付段々被仰渡趣有之、跡職之儀ハ格別之訳ニ候得共、其已前致延引候者共へ者御咎目も無之、御格被相定御触流有之候、已後延引之者共

へ者段々御咎日被仰付者御座候、左候得ハ、此節別紙之通申渡御暇之願申出させ、其已後御暇之儀大形いたし候者へ御咎日被仰度儀と存申候、何れ之筋ニ茂別紙之趣者此節申渡置候様ニ被仰付度存申候間、此段得御内意申候、為御見合別紙書付相添差出申候、以上、

以上、

(朱書)享保十巳

四月廿六日

与頭

(行間朱書) 一本文并左之調書、以上三通讚良善助御取次ニ而伊十

院十藏より差出置候事、

巳四月廿六日

写

与頭江

一 与中諸士之内親祖父又ハ先祖代ニ御暇申出外城へ致

中宿居候者、其子孫之代ニ御暇不申出、且又長々之

儀ニ而親先祖代御暇申出中宿仕居候儀不相知者も有

之、右体之者段々御断申出御咎目被仰付候、右之外

ニも可有之哉と与中ニ相糺候処ニ、右同前之者五拾

余人ニ及候、依之段々吟味候而被申出候、弥被申談

候通別紙式通之趣此節被申渡御暇之願為申出、此以

後御暇不申出致大形候者ハ御咎被仰付筋ニ可被相心

得候、

右可申渡候、以上、

五月

（島津久豪）  
本

右之通、已五月十六日杢殿より讚良善助取次を以

い十院十藏致承知、与中へ申渡候事、

但、御暇等之儀ニ付而ハ三番組享保十年巳四月

日帳座有之、

一 身体致逼迫田舎人之願申出候者、御番之儀者田舎よ

り掛而相勤候筋ニ願書ニ者向後取揚間敷候、身上及

逼迫御奉公も難勤ニ付而田舎人一筋を以御暇申出候

者ハ御免可被成候、

一 所事差廻一節御暇之願申出候ハ、御暇内勝手能キ

御奉公も御座候ハ、被仰付度旨申出候而も一向受付

中間敷候、向後御暇内之者へ者御奉公不被仰付候、

無抛訳も有之、其節願申出候ハ、時宜次第可有之候、

右之通、先年組頭中へ被仰渡置候、此節与中江申

渡度存申候、以上、

（朱書）「享保十巳」  
四月廿六日

六与  
与頭

一 親祖父又者先祖代ニ田舎人之御暇申出其身代ニ御暇

不申出、外城へ中宿仕居候者有之候ハ、御暇之願可

申出候、且又親祖父先祖代ニ御暇申上中宿仕居候儀

不相知者ハ、其趣を以此節御暇之願可申出候、

一 田舎へ中宿仕居候者継目・家督被仰付、又者御暇年

数筈合候節ハ、時々御暇之願申出、御免之上中宿可

仕候、尤、初而田舎入仕候者ハ、此内之通御暇之願

申出、御免之上田舎入可仕候、

右之通、与中ニ此節申渡置候様ニ被仰付度候、以

上、

(朱書)「享保十巳」

四月廿六日

六組  
与頭

写

一此跡御暇申出候節、一七日・三七日と申出候得共、

日数幾日と申出候様申渡置、当時ハ七日・十四日・

廿一日と大方申出、依事者五日・十日之御暇茂願出

事二候、湯治御暇等ハ一廻り・二廻り之考二而、右

日数之通可願出儀二候得共、湯治之外看病又者普請

御暇其外何そ二付御暇申出候節も、右日数外ハ願不

申儀と存違之儀茂可有之候、向後者大体御暇之日数

を考幾日二而可相済と存候ハ、其日数を願可申出

候、必七日・十四日・廿一日二御暇日数限候と不存

様二可相心得候、此旨可致通達候、以上、

八月

(榊山久初)  
主計

右之通被仰渡候間、支配有之面々支配下江茂可被

申渡旨御差図二而候、以上、

(朱書)「享保十巳」  
八月十五日

島津右平太

一湯治御暇願申出候節者、御医師之証文を以申出候様

二先比申渡置候、然共病氣二付勤難成節ハ、療治頼

候医師証文を指出候者も有之候条、向後者致療治候

医師之証文ニ御医師之次書を以可被申出候、此旨与

中・支配中へも可致通達候、以上、

右、大藏殿より表方・御支配中・御勝手方・御下

屋敷御方へ者御通達二而御座候、左候而、御勝手

方・御下屋敷御方之儀ハ右両御座より御支配中へ

通達可被仰渡候、此旨申達候様二と被仰候、以上、

七月廿八日

町田八右衛門  
取次

右之通被仰渡候、向後御番其外勤方二付而者御医

師証文又者脇医師致療治候ハ、御医師次書を以

差出候様与中二可申渡旨種子島平馬承、六組与頭

へ申達候事、

一部屋栖又者御番等不相勤者湯治杯差越候砌茂、此内

之通与頭承届暇可差免候、尤、鉄炮杯致持参徒之所

へ不致徘徊候様委親共へ申聞暇可差免候、且又親類

為見舞田舎杯へ差越候節も同前可相心得候、右之趣、

諏訪仲右衛門御取次二而主計殿より被仰渡、右衛門

致承知候事、

（朱書）享保十三申

三月十八日

一高岡・穆佐・綾・倉岡江与之士私用ニ付差越候節者、

日数相究御暇申出、免許之上町奉行所通手形を以罷

越事候、自然於參先病氣又者無抛子細有之御暇日数

ニ難罷帰候ハ、病氣者所医師証文、無抛子細有之

節者所役人証文を以早速右之次第当人より鹿兒島へ

申越候様可致候、左候而、右体之節ハ時々被得差図

候ハ、何分ニも可申渡候条、其趣次第通手形之儀者

御用人証文を以町奉行所へ申渡、町奉行より通手形

相直候様ニ可致候、右之段向後大形無之様ニ相心得、

右体御暇申出関外江罷越候者へ時々申渡候様可被致

候、

右之通申渡、御用人町奉行へ茂右首尾方有之候節

ハ無間違相心得候様ニ可被申渡候、以上、

（朱書）享保十六亥  
十二月

（島津久豪）  
杓

右之通、亥十二月五日島津右平太御取次ニ而詰合

与頭川上縫殿致承知候事、

一山本仙太夫事、日数三拾日湯治御暇被下置、差越致

湯治候処致相応快方ニ候故、今少シ湯治仕候ハ、全

快可仕候間、又々日数式拾日御暇申次之願彼地より

申越候趣ニ而、親類共より右之段願申出候処、右式

之願自由ケ間敷事候間難取揚候条、書物被差返候旨

鎌田源左衛門御取次ニ而被仰渡、島津八郎左衛門致

承知候付、向後為見合記置候事、

（朱書）享保二十一辰  
四月八日

一何ぞニ付御暇申上、何方ニても差越罷帰候節御礼申

出候砌、御暇日数より内ニ罷帰御礼申出候節者、残

日数差上候と迄相記御礼申出来候得共、向後何日よ

り差越、何日ニ罷帰、残日数何日差上御礼申出候様

ニ可被相心得旨戸田平次御取次口達を以被仰渡、島

（朱書）享保廿二  
津八郎左衛門致承知候事、

四月十二日

写

一諸人湯治參候者多有之、先年被仰渡候通病氣之節者

薬を用ひ、痛有之者ハ針灸いたし、夫ニ而兎角不致快気不致(ママ)、究而湯治ニ而無之候得者不致快気候と吟味を究候者之外証文出シ申間敷候、少々痛有之候を申立慰ニ參候者多有之由、先年御医師共へ被仰渡候処、大形相心得候と相見得候、以後湯治願多有之候ハ、御医師共之不吟味可成旨被仰出候、

右之趣ハ、先年已来及兩度申渡置候処、近年者湯治御暇之願申出候者多、右之段御医師共忘脚之体候故、弥以右之趣相守、湯治御暇之儀ハ病体能々致吟味証文出、大形無之様可相心得旨、此節又々御医師江申渡候条可得其意候旨表方へ致通達、御側方・御勝手方へ者写を以可相達候、以上、

五月

(島津久家  
李)

右之通被仰渡候間致通達候、以上、  
(朱書)享保二十一辰  
五月四日  
島津弥市郎

一 船路之所へ日帰りニ參候節者御暇不及申出候、御番人外何ぞ勤方無之者有来通ニ可被相心得候、此段各

小与中へ可被致通達候、以上、

右之通、島津弥市郎取次ニ而、伊勢兵部(貞起)より御尋申入候処ニ、玄蕃殿江御尋被申上候得者、弥其通可有之事之由御沙汰致承知候、此段為見合記置候、

以上、  
(朱書)享保廿二  
五月廿五日

御家老組

組頭

一 無役之一所持・一所持格・寄合・寄合並湯治其外田舎へ被差越候御暇之儀、当分御格式之通被致来候得共、向後湯治御暇者勿論、田舎江被差越候御暇都而書物を以願被申出、御免之上可被差越候、

一 右之嫡子二男三男其外甥・伯父杯之内家内ニ罷在候人、湯治其外田舎江被差越候御暇右同斷、

右、御暇此節御格式被相定候間、向後右之通被相心得、与中へ茂可被申渡置候、以上、

五月

右之通、享保廿一辰五月廿五日島津弥市郎取次ニ

而被仰渡伊勢兵部致承知、則日与頭中江致通達候、

御番頭・中間者御家老組より被仰渡由候、

〔行間朱書〕本行家内之人と有之候得ハ、隱居之人迄も御暇之儀

ハ同前ニ可有御座哉之旨、同日同人取次ニ而同人より御尋申出候処、隱居之儀ハ不及御暇之由被仰渡、

同人致承知候事、

一本文之通遂披露候処、蒲地休右衛門儀、病身ニ而悴

蒲地越右衛門へ代番之願申出、願之通為被仰付置者之儀ニ候得者、無高・無屋敷又者部屋栖ニ而御番不

相勤者同前之事候故、与頭被承届何分ニ茂暇之儀被申渡可然候、尤、後年右体之人御暇申出候節も右ニ

可被準旨主計殿より大藏殿・主殿殿被仰談候上、右之通与頭川上縫殿江被仰渡候、後日為見合記置候事、

右之通、西彦太郎取次ニ而被仰渡、川上縫殿致承

知候事、

〔朱書〕元文三年  
二月六日

〔行間朱書〕本文ニ有之候ハ蒲生休右衛門御暇之儀ニ而、後年右

体之人申出候節も右ニ可被準旨、西彦太郎御取次ニ

而川上縫殿致承知候事、

一与頭・御番頭之内何そニ付終日御暇申出候節ハ、前

以御暇申上、日限相知有之候ハ、御暇之儀而三日前ニ申出候様ニと卯七月廿日大藏殿より鳥津弥市郎御

取次ニ而鳥津求馬致承知候事、

三月廿六日

〔行間朱書〕一本文終日御暇願ニ付、元文二年巳三月廿六日鳥津弥

市郎より祢寝孫左衛門承候者、与頭・御番頭何そニ付終日御暇申出候節ハ、十日計も前以可申上候、終

日御暇之儀ハ被相窺事候間、日限為相知節者右通申上候様、弥市郎より相知らせ置候様ニと被仰渡候由

致承知候事、

写

一御番不相勤与之士又者部屋栖家内罷居候者、湯治并

田舎へ之御暇与所へ願申出、与頭承届御暇被差免事候得共、未御目見不仕者ハ向後願申出不及候、若

輩ニ而も御目見仕候者ハ部屋栖又者家内ニ而罷居、

与頭江

御番不相勤者も湯治并田舎へ之御暇時々与所へ申出、  
与頭承届御暇可被差免候、此旨組中へも可被申渡候、

右可申渡候、以上、

(朱書)元文二巳

八月

(鳥津久貫)

主殿

一 中馬甚右衛門

右親中馬宝城院事無調法之儀有之、川内高城信興寺  
へ寺入被仰付置候所、大切成病氣差起候間、早々差  
越養生可仕旨信興寺より飛脚を以申越候由二而、右  
甚右衛門より、宝城院事最早七拾余才二罷成老病別  
而念遣存申候、当分御咎内二而御座候得共、私差越  
養生仕成合申儀御座候ハ、日数三拾日御暇被下度  
旨小与頭継書を以申出趣有之候付、段々吟味之上与  
頭輿書を以申出候処二、(鳥津久貫)大藏殿より中野駒右衛門御  
取次を以、親病二付御暇之願申出為差当儀二候故、  
願之通日数三拾日御暇被下候旨被仰渡、北郷四郎致

承知候事、

(朱書)元文三年

五月九日

一御番人修甫・普請仕御暇之願申出候節ハ、日数十五  
日より多く申出候ハ、書物相直させ可然旨諷訪仲右  
衛門より太郎右衛門承之候事、

但、十五日二普請不相調節者、何ケ度も暇申次候  
様二可有之候事、

一士并人家来其外之者、医道又者何ぞ二付為稽古江戸・  
京・大坂・長崎へ被遣置候者共、去ル辰年被呼帰、  
又者其内年限相究被遣置候者も有之候、依之向後左  
之通被仰付候、

一右体稽古方二付而他所へ御暇被下罷越候者ハ、御暇  
内御家中被召放可被遣候、右通御家中被召放被遣事  
候得者、於他所何様之儀仕出候而茂此御方より御計  
(不力)可被仰付候、

一御暇中之儀、薩摩牢人など、申筈候得ハ、他所之人  
江挨拶等も 此御方御家中之者など、ハ曾而不申筈  
候、

一稽古中銀子等何様之手廻り有之候而茂訴訟申出候而  
も御取揚無之候、

右者、自分为稽古御暇申出、他所へ罷越候節者右

之格を以被遣候間、御暇申出稽古ニ罷越候者右之趣を以御暇願出候様可申渡置候、

三月

織部

（朱書）  
（寛保元年西力）  
本文寛文三酉三月被仰渡候

一士并人家来其外之者、医道又者何そニ付為稽古江戸・

京・大坂・長崎へ罷越候者、稽古中御家中御暇被下

切ニ而罷越候節書物案文、

一私事、此節為何稽古何方へ何ヶ年御暇被下切ニ而罷

越申候、右通御家中御暇被下候付而者、於先方 此

御方御家中之者ニ而稽古方ニ罷越候など、曾而申間

敷候、

一右通御家中被召放罷出申候ニ付而者、何様之儀仕出

申候而茂少茂御厄害申上間敷候、

一御暇中銀子等差支何様手廻りニ罷成候而茂、御家中

為被召放事候故、訴訟等曾而申上間敷候、

一御免年数筈合候ハ、則罷帰候様可仕候、若又稽古方

未熟ニ有之、今少罷居申度候ハ、前以申上、御差図

次第可仕候、何様之訳も不申上弁々と他所へ罷居申

間敷候、

一御暇中随分律儀仕、稽古方精進出可申候、

右者、此節為何稽古何方へ何ヶ年御暇申上罷越申

候付而者、御家中被召放罷出候付、書物仕差上置

申候、以上、

年号月日

何之何某印

一 何之何某

右、此節何方何為稽古何ヶ年御家中御暇被下候付、

御暇中者御家中被召放候付、於他所何様之儀仕出申

候而茂、 此御方より御計不被仰付者候間、其通可

被相心得候、

一御暇中差廻り候儀共有之、訴訟申出候而も御取揚無

之筈候、

一稽古中御家中召放被遣候得共、年数筈合候節ハ本之

通立帰事候得者、手札等相除ニ不及候、

一通手形之儀者向々より可申渡候、

右者、士并人家来其外之者、医道又者何そニ付為

稽古自分ニ江戸・京・大坂・長崎などへ罷越候節、

御暇中御家中被召放被遣候付、右之通被仰付被差  
越候間、此旨帳面記置、江戸・京・大坂・長崎へ  
も申越、首尾懸へ茂可申渡置候、尤、稽古ニ被遣  
候者有之候節者、時々此旨申越候様可致候、

三月

(北条時守  
織部)

写

与頭江

一御暇願之儀ニ付而、与頭方へ以前より被仰渡置たる  
格式可有之候間、相糺不残書写可被差出候、

但、年号月日迄可被相記候、

右可申渡候、以上、

(朱書)享保廿一辰(朱書)  
四月十一日

(島津久豪  
左)

一諸人湯治參候者多有之候、先年茂被仰渡候通病氣之  
節者葉を用ひ、痛有之者者針灸杯をいたし、夫ニ而  
も兎角不致快気候と吟味を究候者之外証文出シ申間  
敷候、少々痛有之候を申立慰ニ參候者多有之由候、  
先年御医師共へ被仰渡候処、大形相心得候と相見得、

湯治願多有之候ハ、御医師共之不吟味可成之旨被  
仰出候間、御医師共江可申渡候、向後湯治御暇之願  
者達

貴聞答候条、湯治証文不吟味いたし差出候ハ、御医  
師共不調法可罷成候、

右之通、享保五子二月被仰渡置、御医師共忘脚者  
不致答候得共、間有之事情故此節又々被仰渡事候  
条承知仕、湯治御暇申出候者病体能々致吟味証文  
出候様可被申渡旨、御側方・大御目付へ可相達候、  
以上、

十二月

中務

一諸人湯治參候者多有之候、先年茂被仰渡候通病氣有  
之候節ハ葉を用ひ、痛有之者ハ針灸杯をいたし、夫  
ニ而も兎角不致快気、極而湯治ニ而無之人者不致快  
気候と吟味を極候者之外証文出シ申間敷候、少々痛  
有之候を申立慰ニ參候者多有之由候、先年御医師共  
へ被仰渡候処、大形ニ相心得候と相見得候、以後湯  
治願多有之候ハ、御医師共之不吟味可成旨被 仰

出候、

右之通、御医師へ申渡、湯治之儀者為養生參候儀候故、鉄炮などを持參候而遊山之体いたし候儀不

宜事候条、此已後湯治江罷越候者養生一篇ニ可仕候、尤、鉄炮持參仕間敷候、此旨表方支配之御役

人江不洩様申渡、尤、与中へ右之段被致通達候様

与頭江可申渡候、以上、

（朱書）享保五子

二月廿三日

取次（貞伴）  
讚良善助

一与中之者御奉公ニ付田舎へ差越居其者病氣有之、親

類之内より為看病差越度旨御暇願申出候節ハ、何様

之病氣之段書物内ニ書記、以後共可差出旨宝曆二申

九月廿八日典膳殿より口達ニ而島津主水致承知候事、

（行間朱書）

一与中之者共田舎御奉公被仰付差越居病氣有之、親子

兄弟・親類之内快氣致候迄之間看病御暇被下差越居、

三四日も相過不罷帰候ハ、与頭より氣を付未快氣

不致候哉之旨可承届旨、延享二年丑三月晦北郷助太

夫取次ニ而島津主水致承知、為見合記置也、

宝曆二申九月廿八日

一番与鯨島寿悦母西田御屋敷へ相勤居候処、痛有之

湯治へ被遣筈候間、子共之内相付差遣候様御沙汰有之候由ニ而、右寿悦相付差越度暇之願申出候、寿悦

事、何そ勤方無之候付、与頭手前より暇差免筈候処、致継書北郷助太夫取次ニ而差出候、以後無役之儀氣

相付候付申下ケ度由、右同人取次ニ而島津主殿より

申出候処、主計殿より奥女中江相付差越候付而者、

無役ニ而も勤方有之者同前致継書差出候方可然旨、

延享四年卯三月十七日右同人口達取次ニ而被仰渡同

人致承知、向後無役ニ而も右通奥女中江相付差越候

節ハ、勤方有之人同前致首尾筈候事、

（朱書）延享四

卯三月

（辨山久初）

一主計殿より平田次郎兵衛取次口達ニ而新納五郎右衛

門致承知者、何そ勤方無之者関外へ罷越候暇之儀申

出候節、書物并与頭次書ニ関外江罷出候と書調儀有

之候、口達杯ニ而者関外杯と申儀も可有之候得共、

向後者御番所外江罷越候と書調候筋可然旨致承知、

為見合記置也、

(朱書)寛保二  
戌九月五日

(行間朱書)

「本文与頭直披露無之内被仰渡候と相見得候、当時継

書二不及、与頭直披露二而候、」

一諸座寄筆者之儀者湯治御暇・看病御暇願出候節従前々

御免不被仰付候得共、此節より定役同前御暇被下候、

此段屹と被仰渡儀二而者無之候得共、寄々可致通達

旨新納次郎兵衛殿より致承知候間、此段申達候、以

上、

(朱書)延享五

辰三月五日

御目付

右之通、延享五年辰三月五日筆者井上仲右衛門致

承知候事、

一宝曆二年申六月二番三番寄筆者松山善兵衛・脇田勘

右衛門親病氣二付而、看病御暇申出被下候付罷出候

迄之内、右兩人跡寄筆者被仰付度旨申出候処、段々

御糺方有之相調申出候得共、寄筆者・跡筆者者向後

不被仰付旨、申六月十五日相良弥一兵衛御取次二而

島津主水致承知、後年為見合記置也、

(行間朱書)

「本文寄筆者申出候儀ハ差免、跡筆者之儀ハ此内之

通、」

一湯治御暇願療治之御医師証文相添申出、左候而、右

御医師召寄病体承届候上二而御暇被下來候得共、向

後右御医師召寄病体承届不及御暇被下筈被 仰渡候

間、左様相心得首尾可致旨、延享五年辰正月十七日

新納次郎(久品)兵衛御取次口達二而島津市太郎致承知候故、

後日為見合記置候事、

(朱書)延享五

辰正月十七日

一鎌田左衛門嫡子鎌田市之助事、兼而唐船方警固番

被仰付置候処痛有之、湯治御暇之願申出候、部屋栖

者右勤方被仰付置、湯治御暇等申出候節首尾何様致

来候先例不見当候二付、異国方御用人蒲生十郎左衛

門(小松清彦)へ衾寝孫左衛門より致内談候処、警固番之儀者最

初者御家老衆より被仰付置候得共、月番又ハ不時之

勤方等ハ御用人より見合を以助番等申付事候間、湯

治御暇等者与頭より差免差越候、往来之首尾其身よ

り異国方御用人江申出置可相濟事候旨申談、其通首  
尾申付候事、

（朱書）寛保四  
子正月十四日

一諸士より湯治御暇願申出候節ハ、月番御家老衆江頭

披露いたし、左候而、若御年寄衆江願書物可差出旨、

今日將監殿より畠山数馬致承知記置者也、

（朱書）宝曆三  
西三月八日

一伊東茂兵衛弟伊東武右衛門此節江戸詰被仰付罷越候

付、右茂兵衛嫡子伊東伝左衛門家来分ニ而江戸詰中

召列度願申出、尤、右ニ付而ハ於江戸御奉公方願申

出間敷旨申出、願之通御暇被下候旨被仰渡候付、此

段江戸詰御用人方へ致問合候様北郷助太夫より鎌田

小藤次致承知候付、向後為見合記置也、

（朱書）寛延二  
九月三日

（行間朱書）  
写

御家老衆へ只今迄頭遂披露、若御年寄御方へ差出来

候諸書付、此已後頭披露之筋ニ而其儀不及若御年寄

へ可差出候、尤、書留等之儀跡々より仕来之通可致

置候、此旨可承御役々へ可申渡候、

十二月  
（小松道春）  
帶刀

右之通、明和四亥十二月七日

一与中宿御暇ニ而罷居候惣名書、御免之年鑑迄相記

可申出旨、大御目付衆より被仰渡趣有之、与中相札

六与壹通にして宝曆七年丑十一月朔日隼人殿江島津

直衛より差出候処、以後御暇年数筈合又者御暇差出

候者有之候節者、時々大御目付衆御方へ首尾可申出

旨直衛致承知候間、以後右通相心得致首尾候、尤、

此已後御暇申上候者茂同前首尾申答候、此旨為見合

記置也、

（朱書）宝曆七  
但、御暇申次候者茂申出答候、

六与  
丑十二月朔日  
与頭

一何そニ付御暇申上御番所外へ罷越候而も往来之首尾

申出ニ不及候、御暇同前之事情間首尾不及候、右ニ

付而者、辰七月山口伴内穆佐締方横目役ニ而差越居

病氣有之、為看病三番与三原半兵衛依願御暇被下差  
越候節、往來首尾不申出与頭迄承置候、以後共右通  
可相心得候事、

辰十二月

一 猿渡仲右衛門より日数三拾五日湯治御暇之願申出候、  
仲右衛門事、当分小普請ニ被仰付置候ニ付而者何そ  
勤方無之者ニ候、勤方無之者へ者与頭前暇差免申事  
候得共、小普請為被仰付者之儀ニ候得者、私共より  
暇差免候儀も難致候間、書物差出可申出哉、何分ニ

茂御差図次第存申候、以上、

(朱書)寛延四未

四月四日

一番  
与頭

一 一番与武元十兵衛根占与下代役ニ而差越居候処、二  
男武元八太郎事、若輩者故跡ニ召置候而者念遣ニ有  
之候間、十兵衛詰中御暇被成下度旨願申候ニ付、北  
郷権五郎承届、勤方無之者候故暇差免候、左候而、  
書付を以御勝手方へ差出申候処、右式暇被差免候節  
者御勝手方へ与頭より不及首尾御藏屋敷へ差越事ニ

候得者、代官方へ相付申出候様ニ時々可相達候、已  
後右通申渡候様ニと織部殿より口達島津助之承致承  
知候間、為見合記置也、

辰九月六日

一 坂元彦右衛門去ル亥年より拾ケ年田舎入御暇之願申  
出願之通被仰付置、当年迄筈合御礼申出候付別紙之  
通首尾申出候処、持高等致所持候者者年数筈合候付、  
御番相勤者又者不相勤者書加申出候様為被仰付置由  
致承知候付、帳内等見合候得共右仰渡之趣見当不申  
候、此跡より御暇年数筈合御礼申上候儀迄を首尾申  
出来候故、先例之通為申出事候、然者向後右式之儀  
者持高等致所持候ニ付而者、御番相勤筈又者高・屋  
敷無之者者其訳首尾書之内ニ書加申出候様可被仰付  
哉、此段得御差図候、以上、

十二月十九日

四番  
与頭

(行間本書)  
一 本文得御差図候処、高・屋敷有無之訳申出ニ不及、  
御番相勤者之訳者書加へ申出候様ニと元文五申十二  
月廿日被仰渡、

一御城下土之内為稽古方一往御家中御暇申上御当地致

出立候面々、詰合之御留主居方江御用人より問合有

来候得共、向後与頭より向々御留主居へ問合書相認、

直二其身へ相渡候様被相改候、尤、右体御暇被下候

得者、出立前日当座へ首尾申出候様時々申聞答候、

右二付而者、宝曆十四申六月藤馬殿より新納次郎四

郎御取次口達二而、島津十太右衛門致承知候趣五番

与日帳詳也、

但、家来分二而江戸へ召列度御暇之願申出候面々

も、以来出立前日首尾申出候様時々申聞候筋、是

又申談置候、為見合記置也、  
〔朱書〕宝曆十四〕  
申六月七日

一御番人之内田舎へ御暇之願申出、与頭前より暇差免

候先例相札可申出旨被仰渡趣承知仕、左二申出候、

御番人 岩元仲兵衛  
小与頭 種子島宇平次

右者、親類共宝曆七年丑二月廿五日遠方寺入申付候

処、召列差越度御暇之願申出、八ッ後急成事故与頭

前より暇差免、翌廿六日主計殿江其首尾申出候、  
〔二階堂行日〕

小与頭 市後崎甚助

右、前条同断之儀二付去未七月廿六日与頭前より暇

差免、其首尾〔島津久亮〕圖書殿へ申出候、

右之通、先例御座候間此段申出候、以上、

〔朱書〕明和元〕 月番 与頭  
申十月廿三日

〔本文二付而八二番与明和元年申十月廿三日日帳之場

江委細有之、〕

五代孫次郎弟 五代助右衛門

右孫次郎儀、礮御方勤二而候処二湯治へ差越候付、

右助右衛門召速度旨礮御方へ申出候処、島津登より

与所へ首尾申出可然旨申達候由二而、寛保元酉十一

月廿一日右之趣を以首尾申出候付、島津八郎左衛門

承届、助右衛門儀ハ孫次郎為介抱相付差越迄二而、

其身より湯治御暇申出差越二而ハ無之候間、与頭承

置候間、名代調所武右衛門へ申達候、以後為見合記

〔七〕高持成并高上り高屋敷分地之事〔朱書〕

一初而高持成又者高上り願申出候節、此程者何某より高請取申筈御座候間、初而高持并高上り御免被仰付度旨願為出事候、然共御免無之内右通出儀如何ニ候間、向後高何程何左衛門より借銀返弁方相濟度由申候、又者高相弘度旨申候、於御免者右高相求申度候条、初而高持成・高上り之儀御免被下度趣願候様ニ可被申付候、

右之通、与頭中江申渡候間、此旨高奉行承置候様ニ可申渡候、以上、

十一月

右之趣、急度触流ニ者不及候、与頭中被得其意、右体之願申出候節沙汰可被致旨内記殿御差圖ニ而候、以上、

十一月三日

谷山角太夫〔忠親〕

一其身より願ニ而外城養子いたし候者ハ、其養子代ニ者高五拾石ニ者被仰付間敷候、悴代ニ者五拾石以上

茂可被仰付候、座付士より表方士之養子ニ罷成候者も右同断、

一右体之者三四代過候ハ、百石成御免可被成候、座付士より表方士之養子ニ罷成候者も右同断、

一右ニケ条之通御定候得共、其身之功又者無隠手柄杯致候者者其身代ニも鹿兒島代々士同前御法ニ可被仰付候条、諸奉行等ニも右体之者見合可申候、

一依願外城養子ニ被仰付候者、御太刀進上又者小番相勤候家筋致相統候而も、其家之格式被相下御法ニ候得共、御見合を以養子ニ被仰付候者ハ向後其家之格式之通可被仰付候、

一外城衆中無隠手柄杯いたし鹿兒島士ニ被仰付候者、且又 思召を以被召出候歟、又者芸能ニ付而被召出候者之儀ハ、常体依願外城養子被仰付候者ト者訊も相替候条、向後右体之者高上り其外諸事鹿兒島代々士格ニ可被仰付候、座付士も右同断、

一外城養子ニ而も小番被召入候ハ、三百石成り御免可被成候、且又御赦免ハ小番相勤候筋目之養子ニ罷成、小番相勤候ハ、是又三百石成御免可被成候、

一座付士其座へ相勤候内三拾石二者被仰付間敷候、

一外城より養子ニ罷成候者座付士座を放御奉公仕候者

ハ、三四代相過候ハ、百石成御免可被成候、三四代

之内ニ而も諸奉行之格、無役ニ而も御馬廻又者小番

御免被成候者百石成御免可被成候、

一外城養子又者座付士より表方士之養子罷成候者ハ五

拾以上ニ者不被仰付筈候得共、只今迄持来候者ハ其

通ニ候、座付士座を不離者三拾石二者不被仰付事候

得共、只今迄持来候者も右之程より上之高ニ候ハ、

其<sup>(高脱力)</sup>上上りハ被仰付間敷候、

一右之通、高上り之儀被相定候得共、或者病者或者御

奉公難勤体之者へ者高上り願申出候而も御免有之間

敷候、<sup>(薩摩藩法令史料集下り補)</sup>向後初テ高持ノ願申出候テモ御免有之間敷

候、△小普請被入置候者又者幼少御奉公難勤体之者

へハ高上り御免不被成御格式ニ候、然共弱迄ニ而當<sup>(身脱力)</sup>

時御奉公不相勤、尤、田舎人不申出相応ニ御奉公被

仰付候得者相勤筈之者も可有之由、左様成者ハ定病

人とハ訳も相替候ニ付高上り御免可被成候、向後其

意を以高直調可仕候、小普請ニ被入置候者又者為差

知病者ニ而御奉公難勤体者、其外幼少・田舎人御暇

等申出候者者高上り御免不被成候、以上、

<sup>(朱書)享保三戊</sup>七月廿七日

<sup>(種子島久基)</sup>彈正

高奉行へ

一諸人より高何程分地仕度旨申出願通被差免、且又御

役料高被仰付候節、其外右類之儀引付出之、有来通

高帳仕付候刻、何某高何程増減有之候間、与帳調方

へ被仰渡旨月番御用人江可申出候、

御用人江

一右之通、高奉行より申出候ハ、与帳調方へ以証文

可申渡候、

与頭江

右之通申渡置候間、御用人より証文出之候ハ、無

延引与帳仕付可有之候、右之外引付ニ不及、有来通

御用人証文を以申渡候、高直之儀、此中之通与帳ニ

仕付、惣而高帳と与帳之高付無相違様可被致置候、

右之通可申渡候、以上、

<sup>(朱書)享保四亥</sup>六月

右之通、亥六月廿七日讚良善助御取次を以被仰渡、  
平田新左衛門致承知候事、

一分地高并御役料高被仰付候節其外右類之儀、御引付  
二而高帳ニ仕付、高増減有之候節ハ与帳調方へ被仰  
渡度旨月番御用人江可申出由先比被仰渡候付、左ニ  
御尋申上候、

一御檢地門割有之諸人、本高之通御支配高御引付を以  
被仰渡事ニ御座候得共、高増減者無之候得者申出ニ  
者不及ニ而者御座有間敷哉、

一諸人仕明高之儀ハ、御竿入候節御証文ニ而被仰渡事  
ニ御座候、其節仕明高帳載置、本高帳ニ者押札ニ而  
記置申事ニ御座候、此增高之儀者如何可仕候哉、

「(行間朱書)一此ケ条与帳調方へ高奉行より直ニ問合、与帳ニ可被  
記置候、」

一支有之不相直高所務迄を請取候人、且又所務遣候人  
双方より申出候節、高帳ニ押札ニ而記置申事ニ御座  
候、此高之儀ハ如何可仕候哉、

「(行間朱書)一右同断、」

一四月より八月迄高直ニ付而者御証文ニ而被仰渡事ニ  
御座候、此増減高之儀如何可仕候哉、

「(行間朱書)一右同断、」  
一御役料高被下候節者御引付を以被仰渡事ニ御座候、  
然共御役御免之節、御証文ニ而高被召揚事ニ御座候  
へハ、此減少高之儀者如何可仕候哉、

一御買入高并上地高之儀者、御証文ニ而減少被仰渡事  
ニ御座候、此高之儀ハ如何可仕候哉、右体之高増減  
者何様ニ可被仰付哉奉得御差函候、以上、

「(行間朱書)一右同断、」

八月六日

肥後平右衛門

川上瀬兵衛

吉留郷左衛門

「(行間朱書)一右、去ル亥六月分地高・御役料高之儀ニ付被仰渡置  
候趣有之候処、右之ケ条同様可仕候哉御尋申上候由  
被申出候付、朱書之通高奉行より直ニ与帳調方へ問  
合、帳面ニ可記置旨被仰渡候、分地高・御役料高増  
減之儀高奉行より月番御用人江申出、証文を以与帳  
調方へ可申渡旨被仰渡置候得共、是又向後高奉行よ

調方へ可申渡旨被仰渡置候得共、是又向後高奉行よ

り直与帳調方へ問合、高帳ハ与帳へ高付無相違様可  
被致置旨御差図ニ而候、以上、

亥八月八日

讚良善助

与頭

与帳調方

高奉行」

写

一 高上り之儀、幼少之者へ者御免被成間敷候旨被定置  
候、然共左之通被定置候、

一 寄合並以上之儀者、其身幼少ニ而も問ニ者人数等差  
出候御用をも被仰付、御見合を以被召仕儀も候得者、

幼少ニ而も高上り可被仰付候、

一 右より以下之者、幼少ニ而も勉方有之者へ者有来通  
高上り御免被成、勉方無之者ハ都而拾五才より高上

り御免被仰付、拾四才迄ハ高上り御免被仰付間敷候、

右之通、与頭へ通達可致候、以上、

（朱書「元文元辰」  
十二月

（島津久貫  
主殿

一 諸士借銀方請取候高又者買地・分地等ニ付而高直之

儀、其時々可申出候間、月限之定不及証文受取置、

五通拾通積候節段々相調、年中幾仕切ニも可得差図

候、且又御加増・新地仕明高等之儀御家老任引付可

致沙汰事、

一 外城衆中高之出入、年中押通之筋ニ而ハ八朔高帳差

出候支有之候故、毎年正月より六月迄之間高直申付

置候間、七月より十二月迄者高直請付間敷候事、

一 外城と外城・鹿兒島と外城、高之出入可為停止事、

一 寺社家へ被付置候高之外、借銀方へ相受取高直之儀

申出候而茂、寺社家へ者御免不被成候間、取次仕間

敷候事、

一 借銀返済方受取候高又者高相求候節、百石より千石

迄之間段々百石之涯ニ而其人より願申出、於御免許

者高直之儀可有取次事、

一 親相果高主ニ被仰付候人、継目御礼不相濟候而茂高

可相直候、乍然初而之 御目見不相濟者も可有之候

間、左様成者ハ継目之御礼不被仰付内者高相直間敷

候事、

一 高直証文其年之証文ニ而可有披露、若無摺前年之証文を以申出人、直月番之御家老へ可申出事、

一 借銀方ニ高相渡候人又ハ高亮扨候人高直証文出置、

其後何ぞ出入之儀於有之者其訊申出、高可相直候、

不依公私入与等有之、以後高直証文差出候共取次有

間敷候、雖然入組等前之日付証文紛無之候ハ、可有

披露事、

一 諸士ニ男三男不別立人、借銀方へ高相受取又者高相

求、高直之儀申出候共取次有間敷候、

一 高直証文親子兄弟証摺相立儀可為停止事、

一 諸士持高借銀返済方又者売高ニ相渡高直り御免被成、

高帳面之首尾迄も相濟候以後者、其年中ニ而ハ又々

自分方ニ高相求、高直り之願申出候ハ、可有取次事、

一 万石成御免之儀、別而之訊無之候ハ、御免被成間敷

候、当分万石以上之面々高上り之人有之候共御免被

成間敷候事、

一 一所持・一所持格・寄合・寄合並其外御家老直触

面々、持高百石千石ニ及候節々、前以高上り之願申

出不及高直可申渡事、

一 万石以上ニ高上り御免無之人も私領并持切名之仕明  
高者格別候間、向後右之增高ハ持留ニ可相加候事、

但、諸士持留高位増等之增高茂右ニ可準事、

一 寄合並之格ニ而無之者ハ千石者御免被成間敷候、只

今通持来候者格別ニ候、持来候者も千石以上ニ而候

ハ、其上之高上り御免被成間敷候事、

一 御家老直触之外、当時屹と立候御役被仰付置又者地

頭職被仰付置候者、持高千石より内之高上り御免可

被成候、右体之者持高より上九拾石余百石之内之高

上り者、御法之通高奉行調へ申出候者高直可申付候、

百石之節を越候節ハ願之上奉伺御免可有之候事、

但、右体之者御役御免ニ而も首尾能御免之者ハ、

持高六百石以上千石より内之高ニ而候ハ、持高

より上九拾石余百石より内高上り、其身代二者御

免可被成候、且又隠居以後悴代罷成、又者首尾悪

敷御役御免之者、右六百石より上之高より上少ニ

而も高上り御免可被成候、

一 祖父・曾祖父代よりも屹立候御役相勤候者、且又地

頭職をも被仰付候者之子孫、小番勤来候者ハ百石成

(五脱之)

御免可被成候、（薩摩藩法令史料集下より補）  
▽小番マテヲ勤来候者ハ五百石成御免不被成、△四百九拾九石余迄之高上り御免可被成候事、

但、百石之節を越候涯々ニ而願出候節奉伺御免可有之候、

一 三百石成者代々士筋ニ而も近代御歩格（行脱カ）之勤迄も仕、

其身茂右通候ハ、御免被成間敷候、乍然江戸詰杯二道中鎗持せ候程之勤仕候者ハ御免被成儀も可有之候、道中鎗持せ候者ニ而も御歩行格之者ニ而鎗持せ候共右体之者江者御免被成間敷、代々士筋目ニ而大番相勤候者者式百石成御免可被成候事、

百石之節を越候涯々ニ而願出候節ハ奉伺御免可有之候、

一 初而高持之願申出候者ハ吟味之上御免可被成事、

一 外城養子ハ其身之代ニ者高五拾石ハ被仰付間敷候、

俸代ニ者五拾石以上九拾九石余迄之高上り御免可被仰付候、座付士者三拾石ニ者被仰付間敷候、右之通ニ候得共御奉公之品ニより候而者格別ニ候、只今迄持来候者者其通ニ候、只今迄持来候者も右之程より

上之高ニ而候ハ、其上之高上りハ被仰付間敷候、座付士座を離士之養子成候者、高上者外城養子之格式可為同断事、

但、五拾石成之節ニ而者奉伺御免可有之候、

一 外城より養子ニ罷成候者三四代過候ハ、百石成御免可被成候、座付士座を離御奉公仕候者、三四石相過（代カ）百石成之願申出候ハ、御免可被成候、三四代之内ニ而茂諸奉行之格無役ニ而も御馬廻又者一代小番御免被成候者者百石成御免可被成候事、

但、百石成之儀ハ伺之上御免可有之候、

一 外城養子ニ而も代々小番ニ被召入候ハ、三百石成御免可被成候、且又座付士小番相勤候筋目之養子ニ罷成小番相勤候ハ、是又三百石成御免可被成候事、

但、百石之涯々ニ而奉伺御免可被成候事、

（薩摩藩法令史料集下より補）  
▽一 外城ヨリ鹿兒島士養子罷成候者、向後ノ儀、外城ヨ

リ持高致所持、直ニ其高持出候者マテヲ御免可被仰付候、無高ニテモ無抛血筋又ハ為差立訊有之、願ノ依趣ハ被仰付儀モ可有之、  
右之通、向後被仰付候条、表方へ致通達、御側方・

御勝手方へハ写ヲ以可相達候、以上、

但、諸外城役人共へハ、地頭並月番御用人ヨリ可  
申渡候、

元文二年巳五月

(鳥津久實)  
主殿  
△

一外城衆中文武之芸能を以鹿兒島士ニ被仰付候者者、  
依願外城養子被仰付候者と者訳も相替候条、向後右  
体之者高上り諸事鹿兒島代々士格可被仰付候、座付  
士も右同断、

一外城衆中家職之芸能を以鹿兒島士被仰付候者高上り  
之儀、諸事外城養子之格式ニ可為同断、乍然月次御  
目見仕候程之御役相勤候歟、又者中通ニ茂被仰付候  
程之者者百石成御免可被成候、座付士茂右同断、  
一病氣有之為養生座敷之内取拵召置候者、持高之内借  
銀返済方ニ相渡候歟又者相払候節者、無拋親類兩人  
之証文ニ御法之通証抛人相立、高直願申出候者御免  
可被成候事、

一鹿兒島士并外城衆中高上り御格式段々被定置候得共、  
小普請ニ被召入候者又者幼少又者病者ニ而御奉公難

勤体之者、御当地・外城共向後高上り之願申出候共、  
只今迄所持仕候高より上二者少ニ而茂增高御免被成  
間敷候、勿論初而持高之願申出候而も御免有之間敷  
候、身弱キ迄ニ而當時御奉公者不相勤候得共、相応  
之御奉公被仰付候得者相勤答之者茂可有之候、左様  
成者ハ定病人と者訳も相勤候付、高上り御免可被成  
候条、其意を以高直之しらへ可仕候、田舎人之御暇  
申出候者又者御暇内之者二者高上御免被成間敷候事、  
但、或老体或身弱有之御免難勤代番差立候者、又  
者嫡子何ぞ御奉公相勤候者へ者高上り御免可被成  
候、

一鹿兒島士借銀返済方ニ知行高請取又者買取候者共高  
直り之儀申出候節、高主拜借取込之銀米等有之ハ高  
相直間敷候、然共返上方之引当相成候程之残高又者  
居屋敷致所持之者ハ、高奉行しらへ申出候上高直可  
申渡候、引当致置候高・屋敷相払候節者、高請取候  
者より返上方引受候ハ、其旨前以支配頭江相付申  
出、差図之上可相払候事、

一 高直御格式致相応候高可相直筈之諸士ニ而も、内々

ニ而借銀返濟方ニ高請取置、又者為利払所務請取候  
人者、其旨双方より高奉行へ申出置候上所務請取可  
申事、

付、高直不相濟筈候者ハ、借銀弁方又ハ利払之方  
たりといふとも内々ニ而所務請取候儀不罷成候、

尤、高上御免無之筈之者内々ニ而高求置所務受取  
候儀曾而仕間敷候、

一 御役人・小役人明細帳ニ載置候程之者高直之願申出

候節ハ、其段双方より支配頭江可申出候、或高主幼  
（或脱カ）薩摩藩法令史料集より補  
少無撫▽子細有之、高直差支候者ハ、是又支有之高

△不相直候故、所務迄を受取候、又者相渡候通右同  
断支配頭へ可申出候、銘々首尾申出候時高奉行江高

直之願又者差支候訳可申出旨可申渡候条、其趣高奉  
行承届、高直之儀者御法之通相しらへ申出高直相濟

候節、明細帳仕付之首尾当人支配頭へ申出、且又支  
有之高之儀ハ其段承届候上、是又書付を以当人支配

頭へ可申出候、右書付を以明細帳之仕付可有之候、  
尤、右式高直之支有之、所務迄を受取候段者於高奉

行座帳面ニ記置、紛敷無之様ニ可致置候事、

一 無役之者高相求候節無扱訳有之、高直申出候儀難成  
者ハ、其子細を高奉行へ申出候上ニ而所務請取可申  
候事、

但、内々ニ而高相求、別人名付之高所務仕候儀堅  
令禁止候、

一 外城衆中高直之儀地頭へ相付申出、地頭より高奉行

江可相達候、其節高奉行より諸事高直之格式を以相  
しらへ、被定置候高頭之内ニ而候ハ、高直相究、高

奉行より直ニ地頭へ可相達候、百石五拾石之節ニ及  
候高上り之節者、地頭より月番御用人江差申出脱カ之上高

直之儀ハ高奉行へ可申出候事、  
但、取込拝借有之候者高直之儀ハ、鹿兒島士高直

之格式可為同断、且又取込拝借之引当ニ致置候高  
相払候節ハ、高受取候者より返上方引受候ハ、其

趣を以地頭へ相付申出、地頭より月番御用人江申  
出、御免之上可相払候、

一 外城衆中初而高持・分地等之儀も、地頭より御格式

を以相しらへ、高奉行座へ可申出之、其上高奉行より御格式之旨を以相究、地頭へ可相達候事、

一外城衆中之儀、惣而百石以上二者高上御免被成間敷候、以前より衆中筋目二而三四代差立候勤来候者之

子孫ハ、百石迄ハ高上り御免可被成候、代々衆中筋

目二而も所衆並迄之御奉公相勤候者ハ五拾石以上九

拾九石余之高上り御免被成、百石之高上り者御免被

成間敷候、祖父・曾祖父代御赦免者之子孫、当時衆

並二勤居候者ハ五拾石迄之高上り御免被成、其上之

高上りハ御免被成間敷候、已前より百石以上之高持

来罷居候者ハ御構無之候、当分持高百石以上二而其

上之高上り願出候共御免被成間敷候事、

右規模、此節相改候条堅固可相守之、若後年相替

儀有之節ハ御勝手方へ可得差図者也、

享保十三年申十二月十五日

右之通、申年被相究高奉行所へ被仰渡、与方無之

候付、元文三年五月為見合記置也、

写

一大身分之格ニ而壹万石以下之人者九千弍三百石迄高

上り御免可被成候間、九千石ニ不及内者百石(千石脱カ)ニ及候

節ハ前以高上り之願申出不及高直可申渡候、九千石

ニ及候節ハ御法之通可申出候、

一所持者七千石、一所持格者五千石、寄合ハ三千石、

寄合並者弍千石迄高上り御免可被成候間、右定之高

二不及内者百石千石及候節々、前以高上り之願申出

不及高直可申渡候、右定之高ニ及候節者御法之通願

可申出候、

但、何千石と限り御免之事候得共、高直り之節(二カ)

少々余計有之差支儀も候ハ、御定之高を越(候共脱カ)百石

之内者御免之内ニ相加高可相直候、

一右定之通高上り候儀為差立故有之候ハ、格別候間

願可申出候、左候ハ、其節之勤方人ニより御加増思

召を以、高上り御免可被成儀も可有之候、何ぞ故も

無之願迄ニ而者御免被成間敷候、

一寄合並ニ而無之者者、千石以上二者高上り御免無之

候得共、寺社奉行・御勘定奉行・与頭・御番頭被

仰付候者御役之内者、勤方人ニより御加増之

思召を以、千石迄之高上り御免可被成儀ハ品ニより可有之候間、無扨訊有之候ハ、願可申出候、尤、千石より内者百石之節々前以高上り之願申出不及高直可申渡候、

但、千石迄高上り御免被成人有之、高直り候節余計有之、差支儀も候ハ、千石を越候而も百石之内ハ御免之内ニ相加高可相直候、

一右定より上り候高当時持来候者格別ニ候、持来候者も其上之高上りハ願迄ニ而ハ御免被成間敷候、勤方人ニより御免可被成儀も可有之候間、無扨訊有之候ハ、願可申出候、私領并持切名仕明高者格別候間定之高上り候共、前以願申出不及候、右之增高ハ持高二可相加候、

右之通、此節被相定候間、寄合並以上之人江可致通達候、以上、

（朱書）享保廿一辰

二月

（島津久家）

右之通、享保廿一年辰二月廿八日戸田平次御取次を以被仰渡候、

一寄合並以上之衆高上り之限去辰四月被究置、其限よ

り上者高上り御免不被成筈候、然共私領并持切名之仕明高ハ格別ニ候間、定之上高上り候共前以願ニ不及、右之增高者持高二相加筈ニ被仰渡置候、然処ニ

取込拝借有之候人者高上り不罷成事候得共、仕明地之儀者今迄御免被仰付置候分者高上御免被成、已後新規ニ者仕明地御免被成間敷旨先頃被仰渡候得共、

一所一名持切之所仕明地之儀取込拝借有無ニ付而何様ニ可被仰付と之儀分ケ而相見得不申候、一所一名持切之地仕明高ハ、高上り之限りも無御構御定ニ候得者、取込拝借有之候而も無御構御免被成筋ニも可有御座哉奉得御差図候、以上、

（朱書）元文二

巴九月朔日

高奉行

今井六右衛門

市来新左衛門  
土持平右衛門

一諸士高相求高直申出候者、拝借取込等有之候而も高直御免被成候得共、向後拝借取込等有之、皆返上不相済内者高直御免被成間敷候、此外之儀ハ有来御法

之通被仰付置候、

右之通、此節被相定候間可致惣通達候、以上、

(朱書)享保廿卯  
九月

(編覽)  
四郎太夫

右之通、市来次郎左衛門御取次二而卯九月十五日

被仰渡、喜入主膳致承知候事、

写

一 拝借取込等有之人、皆返上無之内者高直御免被仰付

間數候旨先年被仰渡置候得共、拝借有之人ハ持高之

多少ニ応年府等之上納迄ニ而返上方相重儀も無之、

數拾ヶ年ニ相掛差支へ相成儀共有之候、依之向後拝

借取込有之人高相求候儀、拝借取込之応員數其高之

所務皆同差上候歟、依願之訊半方差上候儀、又者無

抛依訊而者其内ニ而も被究置候返上之外々相重差上

候儀ハ格別ニ候故、時々吟味之上高直御免被成へく

候間、右体之願可致人ハ勝手次第可有之候、

一 諸外城衆中拝借取込又者延米飢拝借米等有之者も同

前候間、依願之訊高直并持留高御免可被成候、

右之通被仰付候条、可承面々江不洩様ニ可申渡候、

(朱書)明和四亥  
十二月

(菱刈実詮)  
藤馬  
(川田国福)  
伊織

右之通、亥十二月三日小林中太兵衛御取次、御勝

手方御用人座通達を以被仰渡、小松仙十郎致承知

候事、

写 案文

口上覚

一 私何事、此節初而高持成之願申上候、願之通御免於

被下者持高之内何程差分ケ申度御座候間、此等之趣

御申上可被下儀奉頼候、

月日

何野何左衛門印

写 案文

一 私事、別立之願申出候処、願之通被仰付難有奉存候、

依之親持高之内何程差分ケ度由申候間、初而高持成

御免被仰付被下度奉存候、此等之趣被仰上可被下儀

奉頼候、以上、

月日

小与連名

右之通、享保十四年十二月被仰渡候、

一本行之通候得共、分地之願高差分ケ候方計与頭より  
申渡有之候筋先年主計殿より被仰渡置候付、向後其  
通首尾いたす筈候、委細御用人座へ有之候由、

〔行間朱書〕  
「本文之ケ条不相知候、

一 本文之通致首尾来候処、三番与小倉長左衛門并六番  
与白石弥左衛門より弟共江高差分之願二付、寛延三  
午三月廿一日典礼殿より願之通被仰渡候二付、段々  
帳番相糺候上二而与頭より申渡、其首尾御用人より  
御家老へ被申出候処、御用人より直ニ申渡候筋二頃  
日御格被相替候旨口達ニ而御用人川上瀬兵衛致承知、  
右之趣同人より三番与頭頼娃内膳へも被申達候二付、  
右長左衛門・弥左衛門へ申渡、取返ニ而御用人より  
直申渡有之候、

右二付内々承合候処、御家老座御首尾之儀者延享  
四卯年より右之通首尾被相替候由、

一 里村藤太夫大島代官相勤罷登御勘定不相濟内百石高  
上り之願申出候付、右平太殿より戸田平次取次ニ而

被仰渡候者、右体御勘定内高上り之願申出候先例可

有之哉之旨喜入主膳致承知候、右通御勘定方不相濟  
候而も高上り御免被仰付御格之者ニ而候得者致次書  
差出事二候、然共御勘定方ハ何様之引負歟有之事も  
不相知候付、御勘定相仕廻高上り申出方可然と申談、  
右之趣を以書物申下候、以後御勘定相遂候勤等仕候  
者ハ高上り初而高持成之願申出候節時々承届筈候事、

〔朱書〕  
「寛保三年亥八月」

〔朱書〕  
「八」何そ二付御断申出候儀二付被仰渡候事

一 何そ二付而御断申出置候人、何分ニも不被仰付内其  
身二付訴訟事申出儀有之候共、自今以後取揚間敷旨  
被 仰出候間奉得其意、向後取次被致間敷候、以上、

巳五月六日

右之通、宮之原甚太夫御取次ニ而被仰渡、祢寝仙  
十郎致承知候事、

一与所筆者相勤居候内勤方ニ付不念之儀有之御断申出候節、此内者勤之内ニ而候得者相勤候与ニ相付申出、御用人取次を以差出、勤方相仕舞候以後ニ而候得ハ、自分之与ニ相付申出、直披露ニ而候得共、向後勤方相仕廻候已後ニ而も、御用人取次を以差出候様ニ空殿より戸田伝五郎御取次を以喜入主馬致承知、後年為見合記置也、

但、大重喜八四番組筆者相勤居候処不念之儀有之、勤方相仕廻候已後ニ而候故、自分之与ニ三番与江相付御断申出披露有之候処、本行之通被仰渡候、

四月

一与所筆者何ぞ勤方ニ付不念之儀有之御断申出候節、書物御用人取次を以差出事候処、以前者と頭致次書候茂有之、又者次書なしに差出候茂有之不相弁候、依之向後次書なしに差出筋ニ詰合与頭中申談、其旨月番御用人戸田伝五郎へ茂達置候事、

但、相勤居候内右通ニ而候、

戊四月十三日

鎌田隼人

一与中之面々江与頭より禁足申付候節、親并跡書物差出置候者相果候ハ、身近キ親類より御断申出方可然旨詰合与頭中申談候、尤、小与頭之儀茂跡書物ニ印形不致置候共、禁足申付候節、御当地江罷居候ハ、都而御断申出答候、仮令致印形置候而も禁足申付候御他行候ハ、御断申出ニ不及、且又丸額之者へ禁足申付候節も小与頭御断申出答是又申談候、已後為見合記置候事、

(朱書ニ宝曆八寅六月)

一与之士何ぞニ付御断申出候節、与頭不念ニ付御断申出候砌、与頭御断書物御用人取次を以差出、組之士御断書物ハ直披露いたし来候得共、右之通与頭ニも御断申出候節ハ、向後与之士御断書物も御用人取次ニ而可差出旨、空殿より御口達戸田伝五郎御取次を以喜入主馬致承知候、後年為見合記置候事、

但、四番与二階堂十郎兵衛跡職延書物之内ニ不念有之、親類二階堂五郎太夫・左近允嘉太夫御断申出候、右ニ付而ハ与頭并筆者迄も御断申出候処、

御吟味之上本行之通被仰渡候、与頭二者不及御断、

与之士御断者此内之通直披露之筈候、

〔朱書〕〔宝曆七戊〕

四月十九日

〔行間朱書〕

「本文与之士御断書物二者次書又ハ添書二而差出筈候事、」

一寛延三午四月九日梅田八十郎・徳田長左衛門・弓削

甚之丞・大野喜助致喧嘩相果候、若キ面々夜行・辻

立等二付而兼而被仰渡置趣有之候付、其段ハ与頭前

より時々稠敷申渡置事二候、然共右面々不凶致喧嘩

意趣之訳不相知相果候、然者親并親類共申付様大形

之筋不相見得候二付、与頭中申談一番与頭鎌田十太

郎より主殿殿江御内意を以得御差図候処、同人より

口達を以十太郎致承知候者、本文之筋二而者御断申

出二不及候旨被仰渡候、且又去ル寅六月伊東喜三左

衛門・妹尾八郎次・園田喜左衛門・種子田伝右衛門

致喧嘩相果候、右者共兼而夜行之聞得も有之、其上

礫を茂打候処より事起り候付、親并親類共より御断

申出候処二御咎目を茂被仰付候、以後右式之類迄御

断申出させ候筋二申談候、以後為見合記置候事、

未四月

〔行間朱書〕

「一本文二付未三月十一日夜六番与折田武兵衛・折田八

左衛門・時任良右衛門致喧嘩相果候、意趣も不相知

候得共、八左衛門致自害相果候二付、親類より申出

候二付主冷殿江新納四郎より遂披露候得共、意趣之

訳不相知候二付而ハ同様之事故、以後相弁御断不申

出筋二是又同人より口達を以致承知候事、」

〔朱書〕「九」寺入人并御咎目等之事

付、御赦免之節之事

一与頭・御番頭・御家老与直触之人寺入被仰付候節ハ、

御取次御用人迄使僧を以抱置候首尾可申出旨、大藏

殿より中神与五左衛門御取次二而被 仰出、入来院

主馬致承知候事、

〔朱書〕〔享保九辰〕

六月四日

一 寺人并閉門等被仰付候者御赦免之節、役儀有之者ハ本之通御役被仰付候旨被仰渡候、然ハ御咎目内御役御免之事候得者、御役料・御切米共ニ御咎目之内者不被下筈候、逼塞・遠慮等之儀ハ御赦免之節如本々御役相勤候様ニと申渡不及候得共、尤、逼塞・遠慮之内御役料・御切米無御構候間、此旨可承置旨惣通達可致候、以上、

七月二日

大藏

右之通被仰渡候間、地頭所并私領へも可被申渡置候、尤、支配有之面々者支配下へも可被申通置旨御差図ニ而候、以上、

申七月二日

中神与五左衛門

右之通、与五左衛門御取次ニ而被仰渡、平田新左衛門致承知候事、

一 鹿兒島士寺入・逼塞・親類預ケ・遠慮被仰付御赦免之者ハ、自身福昌寺へ致參上何様被申付置候所、此節御恩赦ニ而赦免被仰付難有奉存候、為御礼參上仕候由可申達候、

但、女人又ハ幼雅<sup>(推カ)</sup>之者ハ親類共より右同断、一 外城衆中右同断其所地頭支配下之者ハ其頭人、家类等ハ其主人召列福昌寺江致參上、前条之通御礼可申達候、

但、諸奉行より以下之者自身召列可罷出候、何ぞ支有之人者相応之名代召列可罷出候、右以上ハ中抑・用頼・与力扨ニ而可相達候、用頼・与力等無之人者、右格之人を頼候而召列可然候、尤、町人・百姓・下人類之者ハ福昌寺<sup>(門カ)</sup>本文之外迄召列、御礼申達候人計式台へ者可罷出候、

一 被客死遠流被仰付候者、或ハ当時遠流被仰付置此節御赦免被仰付候者、或出籠被仰付候者共之主人・支配頭等福昌寺江致參上、御礼之次第前条之格ニ被準候、

一 遠流者島々より罷登候節ハ、士ハ福昌寺へ罷出御礼可申達候、口上前条右同断、

卯八月十三日

右之通、山田新助御取次ニ而種子島太郎左衛門致承知候事、

一御恩赦ニ而御赦免被仰付候者又者右家内之者者、大

御目付以上之御宅へ者参上仕御礼可申上候、女人・

幼雅之者ハ、名代参上仕御礼申上可然旨鎌田源左衛

門より御沙汰承候間、右体之者有之節者時々筆者共

より右之趣相知せ候筋申付置候事、

但、銘々<sup>々</sup>与頭宅へも参候様ニ筆者共より相知せ候

様ニと申聞候、

（朱書）元文元辰  
九月廿九日

右之通被仰渡、伊勢兵部致承知候事、

一出寺逼塞・遠流人赦免之節其外与頭宅ニ而見分有之

候節、御目付席詰致来候得共、向後御目付席詰ニ不

及候旨、享保十五戌十月十六日諏訪仲右衛門取次ニ

而北郷四郎致承知候事、

（行間朱書）  
「元文五申三月二日より初而本文之通相改也、」

一与中之諸士遠流・寺入・逼塞・遠慮・親類御預都而

御咎目被仰付置候者、御恩赦ニ而赦免被仰付候節ハ、

支配頭より早速御礼申出答ニ候事、

写

加世田弥市郎

右、先月廿日谷山へ用事有之小船ニ而参候処、俄ニ

上り風ニ而大始良之内ニ流付、本船致破損、同廿四

日便船ニ而為罷帰由候、然者他所へ罷越候ニ付而ハ

御暇をも可申出候処ニ無其儀、剩廿二日之儀御番日

ニ而候所、其考をも不致右通之仕形不心掛之至候、

右両条ニ付而当所之寺入、

但、先年鮫島武右衛門御暇不申出日戻り之考ニ而

伊集院へ罷越候所、故障有之日数迄<sup>カヌ</sup>を込候ニ付而

御断申出趣有之、武右衛門事、五日之遠慮被仰付

候例有之由与頭より申出候得共、弥市郎事、御暇

不申出、其上御番日之考不致罷越候儀不心掛之仕

形、右両条ニ付而当所之寺入被仰付候、

十月廿二日

口上覚

一私親中馬宝城院事川内高城信興寺へ去巳十一月より

寺入被仰付置候、然処ニ右信興寺より昨八日飛脚を

以被申越候者宝城院事、別而大切成差起候間、早々

島津内藏

差越養生可仕旨被申越候、最早七拾余才ニ罷成老病

〔行間朱書〕  
一本文之通申出候処、左之通被仰渡候、

念遣存申候間、日数三拾日御暇被下度奉願候、左様

写

御座候ハ、御蔭を以養生仕度存申候、乍然宝城院

一本文親病氣ニ付御暇之願申出候、為差当儀ニ候故、

事、当分御咎目内ニ而御座候付、私差越養生方仕儀

願之通日数三拾日御暇被下候条可申渡候、以上、

成合申儀ニ御座候ハ、奉願候通御暇被下度奉存候、

午五月

大藏一

此等之趣を以被仰上可被下儀奉頼候、以上、

午五月九日

中馬甚右衛門

小与頭衆中

書留有之候事、

右之通、小与頭繼書を以申出候ニ付、右ニ留置候

一元文三午五月六番与中馬甚右衛門より申出候者、親

与帳前書之趣を以左之通与頭次書を以申出候事、

中馬宝城院此程無調法之儀有之、高城信興寺江寺入

右之通、御暇之願申出趣承届候、宝城院事、寺入為

被仰付置候処、此節大病差起候付右甚右衛門差越養

被仰付者之儀御座候得ハ、親類縁者蒙御勘気候者へ

生仕度旨、同五月九日御暇之願申出、右ニ付而八御

致見廻等儀不罷成御格式ニ相見得申候間、先例も可

咎目者へ親類見廻候儀不罷成御格式ニ与帳前書相見

有之哉と段々相糺申候得共見当り不申候、然共親大

得候得共、為差当親病氣之儀ニ付与頭繼書委細之趣

切成病氣之由申越、看病御暇之儀を申出事候得者、

を書付申出候処、為差当儀ニ付願之通御暇被下差越

平生見廻と者訳も相替申候付、願之通ニも御暇可被

候、然処彼方甚右衛門より宿元親類共江申越候ハ、

下哉、乍然何分ニも御差図次第可申渡候、以上、

病体半身不叶有之、寺内殊更田舎之儀ニ而養生方存

午五月十日

六番与頭  
北郷作左衛門

儘ニ不罷成候間、寺入内之儀ニ者候得共、宿元へ罷

婦養生仕度由親類共申出趣有之候、御咎目内之儀ニ

付先例見合候処、藤井幸左衛門繼目ニ付親類赤塚源

太左衛門へ中途之寺入被仰付置候処、持病之痛差起

り、寺入内之儀ニ者候得共致婦宅養生仕、快罷成候

節ハ早速寺江差越其首尾可申出旨、療治之医師証文

ニ御医師繼証文を以親類左近允与太夫より申出、痛

之段者無別条事候間申出之通被仰付、尤、快罷成寺

へ差越候ハ、其段申出候様可被仰渡候、右先例を以

左之通被仰付候願書ニ与頭繼書ニ委申出候処左之通

被仰付候、

但、高城信興寺より福昌寺へ申越書付并所医師証

文相添差出候、

写

本文宝城院事病氣大切有之、寺内ニ而者養生方差支

候付、快罷成候迄之内宿元ニ而養生仕候儀御免被仰

付被下度旨段々申出趣有之、願之通於私宅養生御免

被成候条得快氣候ハ、早速其首尾申出候様ニ可申

渡候、以上、

五月

大藏

右一卷ニ付、元文三年五月廿三日日帳委有之候事、

一赤塚源太左衛門事、藤井幸左衛門跡目願延引儀ニ付

中途之寺入申渡置候、然処ニ兼而痔之痛有之、中途

より痛続差起り難儀之体有之候付、寺入内之儀ニ者

候得共、婦宅御免被下候ハ、養生仕、快罷成候節ハ

早速寺江差越其首尾可申出旨致療治候、医師証文ニ

御医師次証文を以親類左近允与太夫より申出、痛之

段ハ無別条事候間、申出之通差免候条可申渡候、尤、

快罷成寺へ差越候ハ、其段申出候様ニ是又可申渡候、

（朱書）享保五子  
三月

（鳥津久当）  
将監

一

赤塚源太左衛門

右者、先頃寺入中痔病差発り候付、為養生婦宅御免

被下度候、快氣次第早速寺へ差越其首尾可申上旨願

書願之通被仰付候、源太左衛門儀少快罷成候付、昨

晚永吉梅天寺江罷越候段親類与太夫申出披露将監殿

被聞召置候事、

午五月廿三日

樺山権左衛門

右二付、親類共より願申出候書留等与方へ不相見得、右之趣御用人座帳留見合書記置候事、

一 一番与崎山覚左衛門事、無調法之儀有之、享保五年十二月平佐梁月寺へ寺入被仰付置候処二、翌年丑二月乱気差起候二付、親類共より宿元へ列婦養生仕度旨願申出、願之通御免被成候例も有之候、右次第之儀ハ一番与日帳享保六年丑二月七日之場へ委細留有之、以後見合ニも可相成候間、為見合此段記置候事、

一 宮下庄左衛門

野崎次右衛門

右者宮下五郎左衛門事、宝永元年致病死候処二、悴善五郎事者幼雅稚方ニ有之、頃日致成長跡職之儀善五郎より致沙汰候得者、親類共より可申上旨書付五郎左衛門相果候御善五郎母江相渡置候、然所右母其節大病差起長々相煩、其已後致失念于今格護仕置候、右二付而者親類共より氣を付申答候処二、多年延引仕

候儀大形之儀迷惑仕候、何分ニも御断申上度旨段々申出趣有之候、跡職之儀ハ太切之儀候所、悴者幼雅有之、母者大病相煩、殊ニ女更存付も無之筈ニ而專親類共より氣を付可申処二、多年を経延引いたし候儀、畢竟親類共大形至極ニ候、依之近所之寺入可被申付候、善五郎江咎目被申付ニハ不及候、

此旨与頭江可申渡候、

但、先例寺入申付候趣与頭被申出候得共、右段々之次第ニ而親類別而大形之至候故、近所之寺入三七日可被申付候、此段も与頭江可相達置候、

三月

将監

一 一番与児玉助市遠流被仰付置候得共、此節御赦免被成候、悴正右衛門事ハ逼塞、妻事者親類御預ニ被仰付置候処二、親助市御赦免二付而兩人共ニ御構無之由被仰渡、正右衛門事ハ与頭宅江召寄御目付席詰ニ而見分仕、月代申渡、当人翌日御城江罷出与頭迄御礼申出、其首尾与頭より御用人迄申出退出仕らせ候、

為見合書載候、

二月十四日

一 寺人之御咎目自今被相止、此跡寺入相当之御咎目ハ  
逼塞、諸事寺入輕重ニ準シ候様被仰付候、赦免之節  
月代見届候儀共ハ有来通ニ候、

右之通、御役人限承知候様致通達、御側方・御勝

手方へも写を以可相達候、

(朱書)「寛保二戊」(朱書)  
八月「晦日」

(榊山久初)  
主計

右之通、戌八月晦日蒲生十郎左衛門取次ニ而鳥津

八郎左衛門致承知、中間致通達候事、

(行間朱書)「一本文ニ付同日主計殿より蒲生十郎左衛門取次口達ニ

而鳥津八郎左衛門致承知候ハ、当分寺入并逼塞被仰  
付至候者赦免之節、月代見届等之首尾御当地地頭  
所・私領共ニ此内之通相心得、向後逼塞被仰付赦免  
之節ハ地頭・領主方へ被仰渡答候、若差支之儀も候  
ハ、何分ニも御沙汰可有之旨被仰渡候ニ付、為心  
得又々中間致通達候事、

一 本文之通被仰渡置候得共、遠方寺入之儀以前之通被

仰付候旨、寛延三年六月廿六日主殿殿より其趣奥へ  
記置候事、」

一 与頭入来院主馬より被申出候者、森新右衛門事、隱  
居ニ而罷在候処ニ、養子森善兵衛依科新右衛門江遠  
慮被仰付置、今日赦免之段被仰渡候、然者隱居之者  
ニ而も右体之節ハ御格之通与頭宅ニ而見届、左候而、

御城江罷出大御目付被為逢儀ニ而可有御座候哉、隱

居ハ右式之節ハ先例見当り不申候、何様可有之哉之

旨御尋被申出主計殿江申上候処、(鳥津久卷) (鳥津久賢)大藏殿・中務殿被

仰渡、隱居之者候得者与頭宅ニ而御格之通被見届候

迄ニ而、大御目付被為逢候ニ者不及候、向後右之通

被相定候間、右体之者有之節ハ此節之例ニ可被相心

得候、右之段御家老座ニも被書留置候間、与頭方へ

も可被記置と諏訪仲右衛門取次ニ而主馬致承知候、

(朱書)「享保十三甲」

十二月八日

一 依科隱居・部屋栖之者へ御咎目等被仰付置、右御咎

目御赦免被仰付候節者、隱居之者ハ与頭致見分右之

首尾迄を御用人申出筈候、

遠方寺入科錢

一三年 貳貫文

一親族御当りニ付逼塞・遠慮被仰付置赦免之節、与頭

一貳年 壹貫八百文

見届月代差免ニ不及旨讀良善助取次ニ而戊正月被仰

但、銀ニして壹枚

渡候事、

一壹年 壹貫六百文

中途寺入科錢

一禁足赦免被仰付候節大御目付衆被為逢候訳不相知候

一六ヶ月 壹貫貳百文

付、寅十月十七日島津求馬より中野駒右衛門御取次

一三ヶ月 壹貫文

ニ而大御目付衆被為逢候旨求馬致承知、後年為見合

一四拾五日 八百文

記置候事、

近所寺入科錢

但、与頭より禁足申渡候節ハ大御目付衆被為逢不

一四拾日 六百文

及候、委細五番組享保十六年亥日帳ニ記置也、

一三拾五日 五百文

一三拾日 四百文

一大御目付衆より御咎目被仰付候者赦免被仰渡候節ハ、

当所寺入科錢

与頭致見分月代差免、左候而、与所迄翌日罷出、右

一貳拾日 三百文

之御礼首尾月番御目付を以大御目付衆御方江申出候

一七日 貳百文

迄ニ而相濟候段、月番御目付西左太郎より延享四年

逼塞并遠慮

卯二月十五日衾寝孫左衛門致承知、後年右之首尾可

一貳拾日 一十五日 一七日

相心得候事、

一五日 一三日

但、科之不究内之逼塞・遠慮、又ハ親之科ニ付通塞・遠慮被仰付候者ハ日数不相定候、

十二月

一  
与頭六与

右者、与所より家来末々之者、無調法之儀有之科錢申付候節、此跡寺入申付候儀も有之候得共、向後寺入不申付、寺入之引当科錢可申付候、為其科錢見当之書付壱通相渡候、左候而、右科錢別銀方江上納致筈候間左様被相心得、已後科錢被申者有之節者、物奉行方へ向合致上納候様可被申付候、物奉行方へ茂其段申渡置候、

右之通心得被居候様可申渡候、以上、

十二月

将監

右之通、讚良善助御取次ニ而被仰渡、祢寢仙十郎

致承知候事、

一寛保二戌八月より寺入御咎目被相止候得共、遠方寺

入御咎目者已前之通被建置候、

右之通、御役人限承置候様ニ申渡、御側方・御勝手方江者写を以可相達候、

六月

主殿

右之通被仰渡候間致通達候、以上、  
〔朱書〕寛延三年六月廿六日  
川上瀬兵衛

右之通、午六月廿七日三番与頭樺山七郎致承知候事、

一筆者・小役人御役座勤方ニ付而無調法有之御咎目之節者奉行・頭人江申渡、赦免見届も可為奉行・頭人候、身ニ付而者御咎目家内之者右同断之節者与頭へ申渡、赦免見届も可為与頭候条、可承面々江可申聞旨主計殿御差図ニ而候、以上、  
〔朱書〕寛延元辰十月廿六日  
取次〔美登〕 菱刈孫兵衛

右之通被仰渡、彈正致承知候事、

〔行間朱書〕本行ニ付而難決訊有之、寛延元辰十月十一日北郷権

八より御用人江相付致相談候所、御役座勤方ニ付而不調法有之御咎目并赦免見届有之砌ハ、御断申出候

御役座之奉行・頭人より申渡有之筋ニ相決候、身ニ

付而候御咎目并家内之者右同断之節ハ本行之通ニ候、  
已後為見合記置也、

一 禁足赦免之儀、日数筈合候翌日赦免申渡、御精進日  
相当り候節者当日赦免申渡来事ニ候、然共向後御精  
進日相当り日数筈合候節ハ、大御目付衆御方江御沙  
汰申出候上ニ而赦免申渡候様ニと、宝曆七年丑四月  
八日伊織殿より畠山数馬致承知候事、  
(朱書)〔宝曆七〕

丑四月八日

一 御役人帳ニ被召載置候面々、何ぞニ付御断申出候節、  
御咎目申渡候次第左之通、  
一 御役人ニ付御断申出候節ハ、与方ニ無構始終之首尾  
御用人方より申渡、

一家又者其身ニ付無調法、其外家内并下人等之儀ニ付  
御断之節者、与方へ相付御咎目并赦免申渡御用人方、  
一 悴又者親類共喧嘩口論等敷儀ニ付与へ相掛候御断之  
節ハ、与ニ付御咎目并赦免之節与頭より申渡、見分  
之儀者御家老衆御見分、

右者、御役人御断之儀ニ付首尾之次第御用人座ニ  
而相糺候処、跡々不相弁ニ付与所ニ而仕来候次第  
申出候様新納次郎兵衛より致承知、御用人座并与  
所銘々之首尾之次第を以此節より右之通相糺置可  
然旨次郎兵衛申談三段究置候、此段為見合記置者  
也、

(朱書)〔延享五辰〕

二月三日

祢寝孫左衛門

一 御役人逼塞赦免之節、御家老衆御宅江參候様親類召  
寄与頭より申渡、左候而、御家老衆御宅ニ而御用人  
奏者ニ而御家老衆被為逢、直ニ罷帰月代すり、翌日  
御屋形江御礼罷出候、

右之通、中野駒右衛門より被相尋候付書上候、後  
年為見合記置也、

(朱書)〔寛保元酉〕

四月十四日

(行間朱書)  
「本文御役人赦免之節御家老衆被為逢候翌日

御屋形へ御礼罷出候節、直御用人方へ御礼申出筈之  
由、

宝曆二申六月四日

一 三番与新納次郎五郎嫡子新納市右衛門・竹之下善右

衛門嫡子竹之下伊左衛門依訳前髪有之候内遠流被仰

付置、此節御赦免被仰付罷登り候付、御礼罷候節者

本之体ニ為致罷出候様ニ可為仕哉、何様為致可申哉

之旨、延享五年辰六月廿日鳥津左近より主計殿江御

尋申出候処、御恩赦共二年長候而罷登候者者、丸額

前髪有之候而も与頭致見分直前髪取可差免旨御沙汰

有之左近致承知候、然者向後与頭宅ニ而致見分候節、

直差免翌日御礼罷出候筋首尾可致候、尤、大御目付

衆被為逢筈候、此旨為見合記置也、

（朱書）延享五辰

六月廿五日

（行間朱書）

一 本文ニ付寛延二年巳九月四日主計殿へ六番与頭島山

數馬より得御差図候間、六番与伊東九郎二郎事、角

入之内私遠流被仰付置候此節罷登候間、依訳遠流被

仰付候者同前、都而直ニ前髪取与頭前より申渡候様

數馬同人より致承知事、」

一 三番与山口五按遠慮赦免被仰付候処、盲目ニ而候故

樺山左京より將監殿江月代見分且又御礼等之儀ハ何

様可致哉之旨得御差図候処、長病人同前首尾可致旨

致承知候事、

（朱書）宝曆三酉

四月十八日

一 六番与須田伝弥事、御家老組所筆者相勤居身ニ付不

念之儀有之、六番組へ相付御断申出趣有之候処、逼

塞被仰付、右赦免ニ而も与頭より長髪致見分候節、伝

弥勤方之儀何ぞ御構無之候間本之通相勤候様可申渡

旨被仰渡候、向後何方筆者ニ而も右体之節ハ致見分

候、与頭より勤方之儀迄も無御構段可申渡旨、宝曆

十二年午十一月九日図書殿より口達取次、迫水善左

衛門を以種子島左門致承知候事、

（朱書）宝曆十二年十一月五日

一 与中之面々江与頭より禁足申付候節、親并跡書物

差出置候者相果候ハ、身近キ親類より御断申出方

可然旨詰合与頭中申談候、尤、小与頭之儀も跡書物

ニ印形不致置候とも、禁足申付候節御当地へ罷居候

ハ、都而御断申出等候、仮令致印形置候而も禁足申

付候砌、他行候ハ、御断申出ニ不及、且又丸額之者

へ禁足申付候節、茂小与頭御断申出、答是又申談候、已

後為見合記置也、

(朱書)宝曆八寅  
六月

一行跡不宜徒致徘徊候者、共与頭前より徘徊被差留候者

共有之候節、大御目付方江被申出候上、右之通被申

渡も有之、又ハ与頭中申談迄二而被申渡も有之候、

右体之節者大御目付へ被申出候上被申渡方可然旨、

式部殿より織部殿江御沙汰被申出候間、右之趣与頭

方へ相達置候様仲承之、与頭島津助之丞・畠山数馬

へ相達置候事、

(朱書)明和二酉  
三月廿三日

右之通、明和四年亥九月八日大御目付新納波門殿(久世)

より又々新納五郎右衛門致承知候事、

一表坊主類首尾不宜役儀被差免、何ぞ御科目被仰付候

者赦免之節月代すり方跡々不相弁候、依之向後右通

就勤方致剃髮居候者役儀被差免候得者、おのつから

俗体之者候間、還俗成者願申出二不及、直二俗体月

代すり候様可被申渡名替之儀迄を早速願申出候様被

致首尾、其外右類之節被得差凶候儀も候ハ、当座江

可被申出候、

(朱書)明和四亥(朱書)  
九月廿八日

大御目付

右之通、島津大進殿より畠山数馬致承知候事、(久世)

(一五一頁文書「一御恩赦二而」に同じ、本文略)

一田布施中宿御廐付士家村覚之進事、逼塞赦免被仰付

候処、長病者故長髪見分如何有之候哉、先例等見合

候様(小松清香)式部殿より川田彦七御取次を以被仰渡相糺候得

共、不見当其段申出候処、長髪見分之儀ハ加世田駒

払差越居候横目吉田権左衛門へ被仰付候旨、宝曆十

四年申四月廿四日式部殿より右同人御取次を以被仰

渡島津右膳致承知、大御目付御方へ茂申出候、向後

為見合記置候、同年三月廿六日二番与日帳之場二有

之、

一御兵具所付士二而いまた

御目見不相濟者二而も御恩赦等被仰付候節者、与頭

より於御番頭座申渡有之候事、

但、午十一月六日御兵具所付士中馬三七御恩赦被

仰付候節、鳥津主水より申渡有之候事、

科目等申付候様、明和五年子二月小林仲太兵衛口達  
御取次を以鳥津求馬致承知候事、

一与中之士役儀相勤候者、与二付而不調法之儀有之与  
頭より科目申付候節ハ、其支配頭へ問合、差支無之  
時節申付候由、御勝手方より向井十郎太夫御取次を  
以被仰渡、中間中へも此段致通達置候様二と承候間  
致通達候、以上、

（朱書）正徳四年

八月二日

新納左京

伊集院織部

六番

御与頭衆

一五番与伊東市藏事、徒徘徊之間得有之、外方徘徊差  
留候処、市藏事代官取寄筆者相勤居候付、代官より  
御勝手方へ相付右之段申出候、然処藤馬殿より、御  
勝手方支配之座々江相勤候人江右体之儀与頭前より  
申付候節者、御勝手方御家老衆江首尾申出候上二而



続常不止集 仰渡留之部 三之卷寅

続常不止集 三之卷寅

弘化三年丙午

七之部

名越篤烈

一 諸唱并文字被相替候事

付、御張留始末書付認様并願書等(帳九)ニ御張紙ニ而被仰

渡候一件且又御用触奉之字相用候儀被仰渡候事

一 島渡海并田舎行夫仕等之儀且又町中宿者勤方之儀ニ付

被仰渡候事

諸唱并文字等被相替候事

付、御張留始末書付認様并願書等御張り紙ニ

而被仰渡候一件且又御用触奉之字相用候儀被

仰渡候事

一 江戸御路地口之事

御庭口御中門

一 江戸・御国元御路地見舞詰所之事

御庭方

一 御路地見舞之事

御庭方御鳥預

一 御庭方・御鳥方主取之事

御庭方・御鳥方頭取

右之通、此節唱并改名被仰付候旨被

仰出候段申来候、此旨可承面々江可申渡候、

三月

主馬

奥付士之事

御広敷付士

奥付足輕之事

御広敷付足輕

右之通被相改候条、可承面々江可申渡候、

安永八亥  
四月

(二階堂行具)  
主計

若御年寄

誓詞係

諸御礼事係

諸士出仕事係

御連歌係

御番帳係

右、若御年寄首尾

尾畔方之事  
尾畔係

御庭係

御勘気者係

御書院方支配

御勤気者係

御書院方之事

御御用人

御勘気者方之事

御納戸方之事

御納戸方係

公義御内証方之事

公義御内証方係

御厩方之事  
御馬係

御鷹方之事  
御鷹係

御鳥方之事  
御鳥係

公義御用人數改方之事  
公義御用人數改係

御勤気者方之事

御書院方之事

御勘気者方之事

御書院方之事

御勤気者方之事

御書院方之事

御勘気者方之事

御書院方之事

御勘気者方之事

御書院方之事

御勘気者方之事

御納戸方之事

御納戸方係

公義御内証方之事

公義御内証方係

御家老

御記録方係

福昌寺方之事

南泉院方之事

南泉院係

公義流人方之事

公義流人係

今和泉家引之事

今和泉家係

但、差引有之向八三家共同断、

御近習役

川上頼母

尾畔方之事

尾畔係

御勘気者方之事

御書院方之事

御勘気者方之事

御書院方之事

御勘気者方之事

御書院方之事

御勘気者方之事

御書院方之事

御勘気者方之事

御書院方之事

御勘気者方之事

御納戸方之事

御納戸方係

公義御内証方之事

公義御内証方係

右、外御鷹係・御近習役同断、

御用人

一 公義御用人公義御用人數改方之事改係

一 小普請銀改係小普請銀方之事

一 南泉院係南泉院方之事

一 御馬係御馬方之事

一 鉄炮改係鉄炮改方之事

一 異国方係異国方之事

一 宗門改係宗門方取次之事

御勝手方御用人  
小笠原郷左衛門

一 道之島係道之島方之事

横山権右衛門

一 琉球方係琉球方之事

御目付

一 御裁許方係御裁許方加役之事

郡奉行

一 櫓方係櫓方之事

右之通唱被相改候旨於江戸被

仰出候段申来候条、帳面等可相直候、此旨表方へ

致通達、御側方・御勝手方へ者写を以可相達候、

四月  
安永八亥

帶刀(小松清香)  
仲(島津久健)

一 御茶道頭御役名御同朋頭と被相改候間、此旨可承御  
役々江可致通達候、  
明和八卯  
十月  
(權山久智)  
左京

芝御屋敷  
一 上御屋敷  
田町御屋敷  
一 田町下御屋敷

一 田町下御屋敷

但、上御屋敷隣片桐石見守様御屋敷御相對替相濟、

此御方御屋敷相成候二付、右之通唱候様被仰付候、

右之通相唱候様被仰出候間、已下毎之通略、

四月  
安永二巳  
(喜久福)  
主馬

一 日置ヒラキ

右、へきと書出為被置儀も有之筈候間、以後公辺

へ申出候節ハ近年日置と唱候段可申出候、

右之通表方へ、已下毎之通二而略ス、

十二月  
安永二巳  
(島津金)  
左中

一 芝并桜田御屋敷之儀

公辺向二而者桜田御屋敷を上御屋敷、芝御屋敷者御

一 芝并桜田御屋敷之儀

公辺向二而者桜田御屋敷を上御屋敷、芝御屋敷者御

一 芝并桜田御屋敷之儀

公辺向二而者桜田御屋敷を上御屋敷、芝御屋敷者御

居屋敷と相唱、御内輪ニ而者都而去巳年被仰渡置候

通唱候様被仰付候、

右之通表方へ、已下略、

安永三年  
五月

左中

一小倉筋之事

一出水筋 大口筋

一東目筋之事

一高岡筋

右之通向後唱、書付等ニも可仕旨被

仰出候、

右之通表方へ、已下略ス、

安永二巳  
四月

仲

一小倉筋之事

一出水筋 大口筋

一東目筋

一高岡筋

右之通向後唱、書付等ニも可仕旨被 仰出候、其

段者別立而申渡候、右ニ付而者何そニ付 公辺其

外へ被書出候儀候ハ、右唱ニ而者難成儀も可有

之事候間、九州筋・日州筋杯と其節々吟味次第可

相記候、此旨可承御役々江可申渡候、

安永二巳  
四月

仲

一山からし之事、已来山差と唱候様被仰付候条、此旨

与中・支配中・諸外城・私領江不洩様可申渡候、

安永八亥  
五月

仲

御側之事

奥

御奥之事

大奥

御近習役之事

御側役

御側御小姓之事

奥御小姓

奥御小姓之事

一 大奥御小姓

安永九子  
七月

(島津久起)  
大進

一 御側医師之事

奥御医師

一 御側御茶道之事

奥御茶道

一 奥御医師之事

御広敷御医師

一 与力之事

用達

一 右、用達於他所相唱候節者付人用達、

諸座付士之事

何方付  
与力

一 外城衆中之事

郷士

一 足輕之事

同心

一 右之通唱并御役名等被相替候旨被

仰出候段申来候条、唱又者帳面等可相直候、此旨表

方へ、已下毎之通二而略ス、

一 御側廻之儀、向後奥向又者奥勤と相唱、諸書付等二

も可相認旨被 仰出候、

右之通申来候条、此旨表方へ、已下毎之通二而略、

安永十丑  
二月

大進

一 御書院小役人之事

御書院小頭

一 右之通役名被相替候条此旨申渡、可承面々江も可申

渡候、

安永十丑  
四月

(伊勢貞起)  
兵部

一 奥方之事

奥係

一 大奥方之事

大奥係

一 右之通唱被相替候旨被 仰出候条、諸書付等二も相

認、御側方と有之候名目者都而可相除候、右之通表

方へ、已下略ス、

天明元丑

閏五月

大進

一 御近習番所書役之事

御側役所書役

右之通、此節役名被相替候条、此旨可致通達候、

天明元丑

六月

大進

口達之覚

一 太守様御方勤之女中、御休息御方と片書認来候得共、

此已後相除、片書無之候ハ、御休息御方と可相心得

候、

一夜番之儀、泊番と唱(相認脱カ)二も泊番又ハ泊杯と可相心得候、

右之通被仰付候旨申来候、

右之通、丑九月朔日御用人座通達ニ而島津十太右

衛門御取次を以被仰渡、喜入善之助致承知候事、

一 表御書院本四之間之所

表御書院三之間

一 当分御取付之間

溜之間

一 御取付之間脇新座

御取付之間

一 当分溜之間

大溜

右者、此節江戸御座御栖居替又者新御座出来ニ付、

右之通唱候様被仰出候条、此旨表方江致通達、已

下略ス、

天明元丑

十月

(島津久健)  
仲

一 御子様方・御女中様方へ被召付置候面々、何方様

御方とは迄認来候得共、以来 何方様御付と被仰出

候条、此旨表方へ、已下略ス、

天明元丑

十二月

仲

一 長崎御付人之儀、長崎又者於他所聞役と相唱、書付

等二も相認、御内輪ニ而者は迄之通被仰付候旨申来

候間、此旨可承面々江茂可申渡候、

天明二寅  
正月

(島津久健)  
仲

一 御本丸御鷹部屋之事

山下御鷹部屋

右之通唱被相改、御鷹匠頭を初其外役名等御本丸

と有之候所ハ山下と被相替候旨申来候条、此旨致

通達候、

天明二寅  
六月

(二階堂行且)  
主計

一 御婦館之事

御婦殿

右之通、江戸・御国元共相唱、諸書付等ニも可認旨

被仰出候段申来候条、此旨表方へ、已下略、

天明二寅  
九月

(喜入久福)  
主馬

一 与方相談役之事

組方取次

右之通被相替候条、此旨可承面々へ可致通達候、

天明二寅  
十一月

主計

一 此節新御作事御殿之事

東御殿

一 東御門之事

御広敷御門

一 南御門之事

銅御門

一 本御切手御門之事

東御門

右之通相唱候様被 仰出候旨申来候条、奥係・御

勝手方へ者写を以可相達候、

十二月

仲

一 御役職分之内何係と認来候得共、此掛之字可相用旨

被 仰出候段申来候条、諸書付等ニも其通可相認候、

此旨表方へ致通達、奥掛、已下略ス、

天明三年卯  
正月

主馬

一 上之間拾五帖・二之間拾五帖敷之御座

御書院

一右次拾四帖敷之御座

御小書院

一右次拾帖敷之御座

御勝手之間

一右六帖敷之御座

表御客之間

一右拾五帖敷之御座

御客間溜

一七帖半

表御小姓番所

一奥御鈴之間

御鈴之間

一御使者之間向上之間拾帖・二之間拾帖敷之御座

（薩摩藩法令史料集より補）  
▽御取付之間△

右之通、東御殿御座廻可相唱旨被

仰出候段申来候、此旨表方へ致通達、奥係・御勝

手方江者、已下略、

正月

主馬

一御記録方之事

御記録方掛

一御納戸<sup>（方カ）</sup>之事

御納戸

掛之役々者御納戸掛と相

唱、支配下有来通、

一琉球方之事

琉球掛

一異国方之事

異国船掛

御兵具所へ相掛候御役々并役々、御兵具掛と相

唱、支配下者有来通、

一御書院方掛之事

御書院方<sup>カク</sup>

一御能方<sup>ホウ</sup>

支配頭<sup>（并カ）</sup>へ相掛候御役々者

御能掛と相唱、惣人数者

御能方と唱可申候、

一公義御内証方之事<sup>（掛脱カ）</sup>

公義御内証御勤向掛

一出仕方之事

一聖堂方之事

諸御礼掛

聖堂掛

一御裁許方之事

一御廐

御裁許掛

支配頭并掛之御役々又者

役々、御厩掛と唱可申候、

支配下者有来通、

一唐船方之事

一寺社方取次

一御小者之事  
御小人  
一御手廻人足之事

一御徒目付役之事  
御小人目付

唐船改

一御勘定方小頭

一御法事方之事

御法事掛

一御趣法方ノ事（薩摩藩法令史料集「より補」）

右之通以来被相替候旨被  
旨可承面々へも可申渡候、  
天明三卯  
五月

仲

御趣法掛

役所者御趣法方と相唱、惣人数者御趣法掛と相唱

一御役料米六石ツ、被下置候御馬乗之事

可申候、

御召馬乗

一御作事方之事

一御馬乗定稽古之事

御作事方

御馬乗見習

右之通被相替候条、猶又諸向右ニ可準旨被

一御馬乗稽古寄之事

仰出候段申来候条、唱又者帳面等可相直候、此旨

御馬乗稽古

表方へ致通達、以下略、

一中間之事

天明三卯  
二月

（島津久健）  
仲

御口之者

一御厩肝煎之事

一御借馬口取人足之事

御口之者（頭脱カ）

一御納戸肝煎之事

中間

御口之者（頭脱カ）

御小人頭

右之通被相替、役料米四石四斗被下置候御馬乗之

儀者当分之通御馬乗と可相唱旨被

仰出候段申来候条、此旨可承面々へも可申渡候、

五月

仲

道方掛

兵具掛

一城山見廻之事

御城山見廻

鹿倉山見廻

一御立山見廻之事

御留山見廻

礮山見廻

一噺役之事

一組頭役之事

郷士年寄

組頭

一溝見廻之事

一神事見廻之事

一横目役之事

一山横目之事

用水掛

神事掛 鉄炮場見廻り

横目

山方掛横目

弓場見廻り

一野廻り役之事

一郡見廻役之事

一御兵具藏見廻之事

一高帳方之事

野廻り

郡見廻

御兵具藏掛

高帳掛

一竹木見廻役之事

一山見廻之事

一口事聞役之事

一六組主取之事

竹木見廻り

山方見廻り

口事方

六組頭取 浦締方カマ

一相談役談合役共

一普請見廻役之事

一津口番役之事

一寺役人之事

相談役

普請方見廻

津口番

寺用聞

一地頭仮屋守役之事

一櫛楮見廻役之事

一支配方之事

一組中取之事

地頭仮屋守

櫛楮掛

模合差引

組方中取

一駒見廻役之事

一牧司役之事

一諸所物主役之事

一浦主取役之事

駒掛

御牧預

何方勤番番カ

浦主取

一道見廻之事

一兵具見廻り之事

一船大工主取役之事

一主取石切之事

船大工主取

石切主取

耕作主取

用水掛下役

一木挽主取役之事

一主取桶結之事

一下山見廻之事

一下櫛見廻之事

木挽主取

桶結主取

山見廻下役

櫛楮見廻り下役

一主取染物役之事

一鍛冶主取役之事

右ハ、諸外城郷士并百姓等之役名并唱右之通被相

染物主取

鍛冶主取

替、其外者は迄之通ニ而被差置候旨被 仰出候段

一毛付博勞役之事

一衆中触之事

申来候条、表方へ、已下略ス、

博勞役

触役

天明三卯  
二月

(喜入久福)  
主馬

一唐船通事之事

一御番所有之諸所御番所在番

唐通事

役之事

(島津久健)  
仲

御番所勤番

一小川内定番物主之事

定番

一御前向へ差出候書付文字大ク不敬之方有之候間、向

一出水御番所改人之事

御番所改役

後小ク奇麗ニ可相認候、諸御役向書付之儀も右ニ可

一高岡粗木在番之事

粗木定番

置候、願書等不見苦様可書認旨被 仰出候条、此旨

表方へ、已下略ス、

安永十丑  
四月

(小松清香)  
帶刀

一右諸所郷士役名功才之事

名主

一御前へ差出候書付文字大ク不敬之方候間、向後少ク

一作与頭之事

一水守之事

寄麗ニ相認候様被 仰出、其段申渡置候処、到頃日

寄麗相認龐相無之様可申付旨、猶又此節御沙汰之趣有之候条、此旨取違無之様表方へ、已下略ス、

天明元五  
十一月

主馬

一御前向へ差出候書付文字大ク不敬之方有之候間、向後寄麗相認、御役所書付之儀茂右二準シ候様被

仰出、去年四月申渡置、其後茂 御沙汰之趣有之候付其段申渡置候所、諸御役所向書付今以不相直、又々 御沙汰之趣有之候間、先達而被

仰出置候通屹と相守、諸書付文字甚細見苦敷無之様相認、諸座々より御家老座其外御役席江差出候書付并願書等其外猶以不見苦敷様可相認、此旨表方へ、已下略、

天明二黄  
二月

（二階堂行且）  
主計

口達之覚

一御前へ差出候書付文字大ク無之、書面茂不見苦敷様可相認との趣先達而度々申渡通候処、今以不相直も有之候間、猶又随分氣を付認候様可相心得候、且又

文字等も人柄又者御役之高下差別有之事候所、右様之差別無之儀も有之候間、屹相改

御前迄も通候書付者勿論、御家老中へ差出程之書付辻茂随分入念相認、向之依人体者、御之文字相用候節も高下之差別を以認候様可相心得候、御之文字相用候場所其通無之書付も有之候間、左様之所迄も氣を付候様可致候、島津但馬守殿者勿論、島津山城守殿被申出候儀二付諸御役人しらへ書付等夫々御格式相当之文面可相認事二候、右二不限

御前へ差上候書面等不宜候ハ、幾度も相下認替候様可申付候、先達而も度々 御沙汰之趣申渡通候処、今以不行届儀も有之如何二付猶又 御沙汰も有之候間、前件之趣を以得と致勘弁、不都合之文言等無之様屹と可相改候、

四月

右之通、於江戸申渡有之候段申来候間、御当地二而も右之趣を以可成程吟味を尽、不都合之儀共無之様表方へ、已下略、

天明二  
六月

主馬

一 御前へ差出候書付又ハ御家老中迄差出候書付、文字

大ク無之書面も不見苦様可相認旨 御沙汰之趣有之、

先達而度々申渡通候処、今以大ふり之文字も有之

仰出之趣不取受不相通方候旨、又々

御沙汰有之候段申来候、御家老中へ差出候書付等文

字大ふりニ而不宜書面茂間二者相見得候、右書付之

内二者達 貴聞儀も有之候間、都而龜抹之書面無之

様随分入念小ふりニ可相認候、此旨表方へ、已下略、

天明三卯  
正月

(喜久福)  
主馬

略、

天明三卯

八月

左中

一 御前江差出候書付又者問合書等茂文字小ク寄麗ニ相

見得候様ニとの仰出、細事略ス、

天明三卯  
五月

左中

一 御側役所之事

御用部屋

右之通被相替候旨被 仰出候段申来候条、唱又者

諸書付等ニも其通可相認候、此旨表方へ、已下略、

天明二寅  
十月

(島津久健)  
仲

一 御褒美事又者何そニ付御家老を始書役其以下逆茂依

事一紙ニ相認候儀有之、大御目付以上者格別之御役

柄ニ候得者別紙ニ相認、其以下者是迄之通可有之旨

御沙汰之趣有之候間、向後諸書付右之心得を以可相

認旨、可承面々江可申渡候、

天明三卯  
八月

(島津久金)  
左中

一 御側衆

一 御高家衆

一 伏見御奉行衆

一 駿府御奉行衆  
(城代カ)

一 御留主居年寄衆

一 大御番頭衆

一 交代寄合衆

一 郷士之儀、外城郷士と書付等ニ相認候儀も有之候得

共、外城之儀相除郷士と相認候様被仰付候条、已下

右御役外之御旗本衆方、江戸・御国元共御内輪ニ

而御前へ申上候節者書付・口達共ニ殿文字ニ而申

上、諸帳面并御家中二而互之唱茂右同断可相心得候、

右之通被 仰出候段申来候条、此旨可承面々江

可申渡候、

安永三年九月

左中

一鷹野支度之儀、已来野装束と相唱候様被 仰付候条、

此旨御鷹係へ申渡、其外可承御役々へも可申渡候、

天明元丑五月

（島津久起）大進

御近習通 御留主居付役

一諸御役所筆者之事 一奥横目之事

書役 御広敷横目

一御歩行之事 一御門抑番之事

中小姓 上番

一奥大番之事 一御庭方御鳥預り之事

御広敷大番 御庭方御鳥預り

一御行器役事 一御広敷番之事

御膳配役 御広敷御玄喚上番

一当分御広敷へ相詰候足輕之事

御広敷御玄喚中番

一御供走番之事 一走番之事

御供使足輕 仕足輕

一掃除番之事

下番

一御納戸方納殿之事 一納殿役所之事

御広敷 御広敷役所

一糺明奉行所之事

御裁許方

一納殿役人之事 一御馬方之事

御広敷頭 御馬預り

一中通御目付之事 一糺明方加役之事

御供目付 御裁許方加役

一納殿役之事 一宗門改方之事

御広敷番 宗門改役

一唐船方受込之事 一御書院役人之事

唐船方 御書院方預り

一中通之事 一留主居付之事

右之通御役名被相改、其外唱役名等被相替候旨被  
仰出候段申来候条、唱又者帳面等可相直候、此旨  
表方へ致通達、已下略、

五月

帶刀

一 御廟所

但、御廟所之事を 御靈屋とは迄相唱候事茂有之  
候得共、已来書付等ニも右之通相認候様被

仰付候、

一 御靈屋

但、御寺客殿等之内ニ而無之、別ニ 御一方様ニ  
而茂御幾方様ニ而も御位牌御安置之所者、右之通  
相唱候様被仰付候、

一 御位牌殿

但、御一方様ニ而も 御幾方様ニ而茂御寺客殿等  
之内ニ御安置之御座者、右之通相唱候様被仰付候、

右之通、江戸・御国元共ニ、已下略ス、  
安永八亥  
正月

(小松清香)  
帶刀

一夜番之儀、泊番と相認、唱ニも泊番又者泊杯と可相  
心得候、

右、天明元丑九月被仰出、

一 御旗本衆方へ殿文之儀、

(字脱カ)

先達而申渡置候、向後此方

文字相用候様、

九月

左中

御普請方之事  
一 御作事方

カダ

右之通、御役名并唱被相替候旨、

十月

主馬

一 御家作其外小屋作等を初、右体造作之儀御作事と可

相唱候、

一道・橋・石垣・土手・川普請等を始、右体之儀ハ御  
普請と可相唱候、

右之通、已下略ス、  
天明三卯  
十月

主馬

一 表境鳴子之口之事

奥口

一 御草履取部屋之事（口脱カ）

御近習口

右之通被相替、已下略ス、

天明三卯  
十月

（島津久健）  
仲

一 御記録方見習御記録方稽古之事

一 御右筆見習御右筆稽古之事

右之通唱被相替候旨、已下略、

天明三卯  
十月

（島津久起）  
大進

一 御領内在方之儀を前々より名と唱来候得共、以来者

在と唱、書付等二も相認候様被仰付候条、此旨不洩

様可致通達候、

天明三卯  
十一月

主馬

仲

一 行屋橋行屋下橋

一 蛭子橋蛭子下橋

一 孝行橋本孝行橋

一 潮見橋芝口小路下橋

右之通相替候様、

安永五申  
七月

主馬

一 北郷七郎左衛門前通小路虎屋馬場と相唱申候得共、

向後一切致間敷候、已下略ス、

安永四未  
三月

仲

一 枅形御門

一 新橋御門

一 吉野橋御門

一 西田橋口御門

一 韃鞞冬々御門（韃カ）

右者、此節御門并番所被相建候二付、向後右之通

相唱候様、已下略ス、

三月

仲

写

不調法之儀有之候而差出候書物、御差図次第御断申  
上度旨相認来候得共、以来ハ何分茂差控候儀奉伺候  
と可申候、尤、是迄御断と申儀差控唱被相替候間、  
其通可相心得候、

一 御断等申出候節、依事何分申渡迄之間相慎罷在候様

二と申渡来候儀有之候、是者差控罷在候様二と可申

渡事、

右之通、向後被仰付候旨、

天明五巳  
二月 (島津久起)  
近江

写

一 持留地又者持留屋敷之儀、以来抱屋敷と可相唱候、

家来・家番等不召置田畠迄之地面者持留高と唱来候

得共、是又抱地と相改、仕向之儀共当分之通二而、

向後左之通被相定候、

一 抱屋敷之儀、持高之不依多少、寄合並以上者式ヶ所、

其外者壹ヶ所被定置候、持来候分者其通二被差置候、

一 持屋敷之儀、御一門を始御役柄又者依人体御定之外

無扱願之訳も候ハ、其節之吟味次第可被仰付候、

一 新規抱屋敷二囲等いたし候節者願可申出候、御鷹場

等之支於有之者敷敷等二而召置候筋可被仰付候、

一 居屋敷不致所持抱屋敷二其身居住之人者、依願之訳

者御定之外一ヶ所御免可被仰付候、

一 抱地之儀者は迄之通御物へ不差障場所者御免可被仰

付候、囲者一切不相成候、竹木植込候儀も見分之上

可差免候、乍然鹿兎島近在者勿論、諸外城二而も

御拳場・御鷹捉飼場等之儀者、御鳥見廻見分之上不

差支候ハ、筋々二願出、其節之吟味次第可被仰付候、

一 郷士之儀者都而 御城下士同前之振合被仰付候、

右之通被仰付候条、此旨表方へ、已下略ス、

天明四辰  
正月 (島津久起)  
大進

(島津久起)  
仲

写

一 川割所之事  
川越方

使同心之事カダ  
触番

右之通、被相替候旨、已下略、

天明四辰  
三月 仲

写

一 磯・尾畔・武御屋敷、五本松御屋敷、御飯屋等之儀、

御茶屋と可相唱旨、

天明四辰  
三月

大進

写  
琉球飯屋之事  
一 琉球館

但、是迄飯屋内杯と申来候儀者館内と可相唱候、  
一 琉球館聞役

右之通唱并役名被相替候旨、  
天明四辰  
三月  
大進

写

一 以前より外城と唱来候得共、郷と可相唱候、近外城・  
近名杯と唱来候儀者、近郷・近村又者近在と相唱、  
尤、諸書付等二も可相認候、

右之通被仰付候段、已下略、  
天明四辰  
四月  
大進  
（島津久起）  
（二階堂行且）

主計

写

大奥  
一 御書院只今之通  
大奥與御書院之事  
一 御客間上之間

同所次之間之事  
一 同二之間  
御末上之間之事  
一 御三之間

右次之間之事  
一 御広敷座

右之通、爰許御座唱被相替候旨、已下略、  
天明四辰  
五月  
大進

写

一 飼方檢者横目之事

飼方見廻

右之通、以来役名被相替、横目之儀者此内之通被  
仰付置候旨被 仰出候段申来候条、已下略、  
天明四辰  
五月  
大進

写

一 是迄 御城下土と相唱来候得共、以来者大番と相唱、  
書付等二も相認候様被仰付候条、此旨可承面々へ可

申渡候、  
天明四辰  
六月

仲

写

一 礖・武御屋敷、五本松御屋敷、御仮屋守之事

御茶屋番

但、同心下番有之候処者下番と相唱、人足召仕候所ハ小仕又者掃除番と依其向聞宜様可相唱候、右之通唱被相替旨申来候条、向々江可致通達候、

写

一 伊佐郡佐志之文字、佐司と相認候も有之候得共、以前より 公辺ニも佐志之文字被用來候間、帳面等其通相直、以來無間違様可記置候、已下略ス、

天明四辰  
八月

(二階堂行具)  
主計

写

一 御中剃・御元服之事、以來御家御伝来之御元服之御式と唱、書付等ニも相認候様被 仰出候段申来候条、此旨可承御役々江可申渡候、

天明四辰  
十一月

(島津久健)  
仲

写

一 唐学見習之事

唐学掛

右之通唱被相替候段被 仰出候旨、已下略ス、  
天明四辰  
十一月

写

一 御本殿之事、御内輪ニ而者

イチ、  
一 御殿と以來相唱候様被 仰出候段申来候条、已下略、

天明四辰  
十一月

仲

写

一 秦吉了之間之事

台子之間

右之通唱被相替候旨、已下略ス、  
天明五巳  
正月

仲

御書院方之事  
一 御数寄屋

御書院方領之事  
一 御数寄屋頭

右之通被相改候条、準右候而御書院方役々(何力)と唱来

候分、御数寄役（屋河力）と相改可申旨被

仰出候段申来候条、已下略、  
天明五巳

正月

仲

近江殿より被仰渡候御書付之写

一 御領内勤方等二付諸郷へ差越候節、行キと唱来候得共、何方へ差越又者相越と相唱、何事茂行キと申儀者可相除候、此旨向々江可致通達候、

天明五巳  
十二月

写

一 公辺へ 御嫡子様又者 御隠居様

御居宅と被仰出置候 御屋地之所、以来御内輪二而

者二丸と相唱候様被仰付候、

一 妙心院様御存生之内被成御座地面を山下御屋敷と申

（繼豊御室、宗信実母）  
来候得共、山下之名目被相除、右地面者二丸一囲二

被仰付候、左候而、当分山下御鷹部屋被建置候辺迄

を山下と相唱候様被仰付候、

二丸御門之事

一 矢来御門

南口御門之事

一 御台所御門

御下屋敷御門之事

一 二丸御門

右同裏御門之事

一 南御門

御勘定所門之事

一 御役所御門

随神門脇御中門之事

一 花園御門

右之通相唱候様被仰付候、尤、公辺へ御書出等有

之候節ハ、前々絵図面之通被仰付候旨被仰出候段申

来候、已下略、

天明五巳  
二月

（島津久起）  
近江

写

一 又三郎様と 御名奉称来候得共、

若殿様と可奉称候、後年 御任官被為在候節ハ其御

官を可奉称候、尤、諸事書付等ニも其通可相認旨被  
仰出候段申来候、

天明五巳  
二月

(島津久起)  
近江

一 鳩之間之事

伺公之間

右之通被相替候旨被 仰出候段申来候条、此旨可

致通達候、

天明五巳  
二月

近江

写

一 何ぞ御用向取扱又者申出候節、不依何篇無差別首尾  
と申来候、御用向取扱被仰付候ハ、掛と可申、左程  
ニも難申少事之節ハ、取扱又者首尾杯と可申事ニ候、  
着出立或御用向之首尾中首尾杯と申来候、是等ハ届  
杯ニ而夫々相分り候様可有之候、文言ニ而何事も弁  
別致事候間、惣体

公辺之御書付等之振合を以氣を付、文言相分候様可  
心掛、此旨奉行・頭人より氣を付書役中江も申聞置

候様可致旨 御沙汰有之候段申来候条、此旨可承面々  
江可申渡候、

天明五巳  
四月

近江

写

御前御用者御家老連名、其外者一名、

一大奉書切紙、上包状封紙

御側役以上  
無役之寄合以上江 御用人等より

一中奉書切紙、上包

引札 御受之儀者是迄之振合可相心得候、

美濃紙又者下紙

御留主居以下御役人限  
無役之寄合並江(紙力) 御用人より

一中奉書切封

諸士へ御用人等より触書

一 杉原切紙等ニ而上包下紙等

右者、御役替又者重立候御用付着服麻上下ニ而罷  
出候様、是迄御側役以上者切紙、其已下者触書ニ  
而申渡来候得共、以来切紙等差出候節者右之通相

改、御役人以上者不及着服沙汰相認、尤、取仕立

認様別紙之通於御役席御目付直達之儀者是迄之通

可相心得候、尤、外御役々より向々江申越候儀共

右二可準旨被

仰出候段申来候間、無間違可致首尾旨可承御役々

江申渡、其外不洩様可申渡候、

天明五巳  
二月

近江

月日

何之誰

何之誰

何之誰

何之誰

何之誰

何かし殿

御側役以上  
無役之寄合以上江

御用人より

何之誰

御家老直達之分

何之誰

何かし殿

何かし殿

御用之儀候間、明何日何時可被罷出旨何殿依御差図

御用之儀候間、明何日何時可被罷出候、以上、

申達候、以上、

月日

何之誰

月日

何之誰

——殿

何かし殿

御留主居以下御役人限  
無役寄合並江

御用人等より

御前御用御家老直達

何之誰

何之誰

何かし殿

何かし殿

何之誰

御用之儀候間、明何日何時可被罷出候旨何殿依御差

御用之儀候間、明何日何時可被罷出候、

図申達候、以上、

月日

諸士江御用人等より

觸書 御請之節星を掛来候得共、如  
此奉之字可相認候

奉

何かし

何かし

何かし

右御用候間、麻袴着用ニ而可罷出候、以上、

天明五巳  
月日

何之誰

(一七九頁文書「一是迄 御城」に同じ、本文略)

写

一 御城下士之儀、以来大番と唱、書付等も致候様被

仰出候段先達而申渡置候趣有之候、右二付而者

御城下士と唱、書付等いたし候儀ニ限右通被仰付儀

二 候間、惣名何そ二付諸士亦者小番・新番・大番と

唱、書付等相認候儀者是迄之通可相心得候、此旨可

承面々江、已下略、

九月

仲

一 御寺方

御参詣之節 御仏詣と相認来候得共、以来ハ御参詣

と可相認旨被仰出、已下略、

天明五巳  
正月

(島津久健)  
仲

近江殿より被仰渡候御書付之写

一 御領内勤方等二付諸郷へ差越候節旅込賃と申儀、向

後者旅扶持、御鷹方ニ而者野扶持と唱候様向々へ可

致通達候、

十二月

写

一 死苦之儀、以来穢多と相唱、書付等二も其通可相認

候、慶賀之儀ハ是迄之通相心得候様、已下略、

天明四辰  
七月

(島津久健)  
大進

一 奥口之事

鳴子之口

右之通相唱候様被仰付候間、可承面々へ、已下略  
ス、

六月

伊賀

写

御錢入夫とは迄唱来候得共、以来者於江戸者御国人  
足、御国ニ而者御春屋人足と相唱、書付等ニも其  
通相認候様可承面々へ可申渡候、

五月

安房

写

江戸表御敷台ニ而致御取次候新番・御馬廻共御取次  
番と一統可相唱候、内分ケニ而相唱候節者有来候旨  
被 仰出候段申来候条、可承、已下略、

天明五巳  
六月

(島津久金)  
伊賀

写

御心付高之事

一御合力高

一御合力銀

同銀之事

支度料銀之事

一御心付銀

一御宿方御手当銀

御宿方料之事

右之通唱被相替候旨被

仰出候段申来候条、可承面々へ可申渡候、

天明五巳  
六月

伊賀

写

一御裁許方掛之事

一御裁許掛之事

御裁許掛

御裁許方カダ

但、御役名

但、御役所唱

右之通以来相唱候様、

天明五巳  
六月

伊賀

写

一御兵具所者役所之名ニ而候処、何篇無差別御兵具所  
と申来候、向後役所者御兵具所、右ニ相掛候分者御  
兵具方カダ相心得候様此節申来候条、可承面々へ可申渡

候、

天明五巳  
七月

(島津久起)  
近江

近江殿より被仰渡候御書付之写

一定書役又者定檢者など、相唱、書付等も認来候向茂有之候得共、以来者定之字相除、何方書役・檢者と可認候、定・寄又者寄役等之儀是迄之通可相心得候、此旨不洩様、  
(ママ)

天明五巳  
十一月

伊賀殿より被仰渡候御書付之写

一御用通達等之諸書付都而奉之字相用候得共、一通り之儀者有来通之星又者棒点など不同二相用、其身之奉行・頭人等之書付或者重キ向より之書付、其外屹と御請ニも及候程之場ニ奉之字可相用候、此旨可致

通達候、

天明五巳  
正月

一両御殿共御鈴之口之事、奥口と可相唱旨被

仰出候段申来候条、此旨可承、已下略、

天明六午  
正月

(島津久金)  
伊賀

一皆勤之儀者是迄無懈怠と申来候得共、向後皆勤と可申旨 御沙汰之段申来候条、御目付より無屹寄々致通達候様可申渡候、

天明六午  
三月

(島津久施)  
仲

一樋之間之事

竹之間

右之通被相改、竹之絵御額被相掛筈候条、此旨可

致通達候、

天明六午  
四月

伊賀

寄合以上之惣名

一大身分

但、家格夫々相分ケ候節ハ是迄之通、尤、是迄一所持之内大身分と申来候分ハ夫々家名を以相唱可

申候、

組頭之事 御番頭之事

一 小姓与番頭 一 当番頭

御広敷頭之事 御供御目付之事

一 御広敷御用人 一 御供目付

御広敷番之事 代官所之事

一 御広敷番之頭 一 御代官所

代官之事 大奥御小姓之事

一 御代官 一 御小姓

大番之事 六組小組頭之事

一 御小姓与 一 組頭

与方取次之事 郷士之事

一 進達掛 一 大番

但、身分ハおのつから郷

士ニ而、家格之唱大番ニ

而候、

(宮之原通直)  
主膳

天明六年  
七月

写

一支配下之一身者以下其外輕者、勤方等之儀申付候節、

御家老へ得差図候付何被仰付候と申来候得共、其頭

より取計之儀故御家老へ得差図、其頭手前ニ而申付

候儀者何々申付と可相認候、御家老差図有之候分ハ

何某殿へ得御差図申付と申振合ニ可相認候、將又支

配下外迎も可相準候、諸給分等之儀も何々為取之候

と可相認候、為士以上其支配頭手前ニ而相濟程之輕

事共等ハ申付と可相認候、

右之通諸向相心得、申渡之書付等も其頭より相認候

而頭名前ニ而可申渡候、且又士以上江申渡事御家老

より申渡候書付等相下ケ候ハ、其紙面通書写、見返

シニ何々之写杯と目安相認候而可相渡候、

天明五巳  
八月 (喜久福)  
安房

一 遠流之事 一 梟首之事

遠島 獄門

右之通相唱、諸書付等ニも相認候様、已下略、

天明五巳  
十一月

一 御刀鍛冶主取 一 御研師主取

一 御刀鍛冶主取 一 御研師主取

一 御矢師主取

一 御鉄炮台師主取

一 御絵師主取

一 御船藏

右之通、御之字相用候様可申候、

一 諸向寄役之儀、向後者無役より寄候者助と可申候、

本役を持候而他役ニ差寄候を寄と可申候、依之警助

役ニ而候得者書役助、或者重書役(助脱之)、寄役ニ而候ハ、

寄書役抔と夫々ニ応聞得宜様相認可申候、

一定書役を書役と呼候様二との事、略、

七月 主膳

一 御納戸・御兵具方・御船手・御広敷・御厩与力同心・

御鷹方・御鳥見・御作事方・物奉行所・御細工所・

御数寄屋・御台所・御春屋其外諸座付之者共、公私

二付見廻先へ差置候名札并玄喚帳相付候節、何方付

与力同心之訳片書ニ可相記候、役名又者身分惣名ニ

而何方付と相分候向者、譬者御小人頭・御小人目付・

御口之者与力同心・餌蒔同(心脱力)・綱差同心・御鷹匠何某(同心脱力)

と相記、其外者可右準旨去ル辰正月申渡有之候処、

当分逆茂片書不相記候茂有之由候付、向後右之趣屹

相守片書可相記候、

大御番支配人足之事

小間使

同刀差人足之事

小間使頭

右之通被相改候旨、

天明六年 九月

伊賀(島津久金)

一 御広敷大番之事

御広敷番

右之通被相改候、

九月 伊賀

一 聖堂掛之儀、御国之学校所ニ候処未名目無之、是迄

惣名を聖堂と唱来候得共、造士館と可相唱候、

一 諸稽古場之儀、演武館と可相唱候、

（聖堂脱力）  
一諸稽古場御差分銀之事、府字料と可相唱候、

右之通被仰付候条、此旨御小姓与番頭・聖堂奉行

江申渡、可承向々へ可申渡候、

九月 安房

一大御番頭之事

大番頭

右之通被相替候条、已下略、

十月 安房

一先年林次之文字被相定候、是ハ御用向ニ相用候節之

儀ニ候、然ルを自分事ニも押並候者公私之無差別心

得違之儀ニ候、仮令者此段相用候、

御二男様・御女中様方ニ而も、窺 御機嫌等之自分

事ニ而候ハ、其向々振合ニ応シ林文字以上をも可相

認事ニ候、

一互之取替ニも支配頭又者右同前敷格別重キ向江者心

入次第応、夫々林以上之文字随分相用可申事ニ候、

一御家老等より格別軽キ向へ直書遣候節者、書法者無

之共手前欠名字等之儀共向々心得ニ而相用可申事ニ

候、其外迎茂右準、夫々之心得可有之、無役迎茂家

柄之向々右ニ応、夫々心得可有之事ニ候、

右之通屹と被 仰出儀ニ而者無之候得共、右通可

相心得旨、已下略、

天明六年 閏十月

（宮之原通也）  
主膳

一踊之内栄之湯と唱来候得共、向後栄之尾温泉と相唱、

書付等ニも其通可相認候、此旨可承向々へ可申渡候、

天明七年 二月

鹿兒島郷坂元村之内

福ヶ迫之事

福ヶ<sup>サ</sup>迫

但、右<sup>サ</sup>之字相用サコと可唱候、尤、福ヶ迫

諏訪之儀もおのつから同断、

右之通唱又者文字被相替候条、此旨向々へ可申渡

候、

六月 勘解由

一

神農堂守之事

朝鮮通事之事

同見習之事

神農堂預り

朝鮮本通事

朝鮮稽古通事

右之通唱相替り候、左候而、医学院ニ相掛候節者

医学院共可申候、

右之通唱被相替候条、已下略、  
天明七未  
八月  
和泉

右可申渡候、

天明七未  
六月

(市田教国)  
勘解由

一口達之覚諸人より願出候書付ニ御張り紙ニ而被仰渡

候節、其儘願書御張り紙共ニ願人江相渡候様被仰渡

候得共、向後願書ニ不限諸向より差出候書付ニ御張

紙ニ而被仰渡候節者、都而願書同前之仕向ニ相心得、

御張紙共相渡候様安房殿より御口達を以被仰渡候、

天明六午  
十二月九日

右、御役名ニ御の文字用來候得共不及其儀事候間、

諸書付等も右之心得を以可相認候、

天明七未  
七月

(島津久那)  
和泉

一何方中宿と認來候得共、以來者何方居住と可相認候、

此旨可承向々江可申渡候、

天明七未  
七月

勘解由

一去ル卯年何某方へ其外方と認候儀ハ、不依何篇可成

程不認様ニ可相心得旨 御沙汰之趣有之、尤、不相

用候而通兼候儀者其通可有之事候得共、随分氣を付、

已下略、  
天明七未  
十一月  
御目付

唐通事之事

同見習之事

唐本通事

唐稽古通事

一

御牧預り之事

牧司モウシ

駒掛り之事

駒見廻り

右之通唱被相替候条、已下略、

七月

求馬

一何そニ付諸御役々江しらへ事等申渡候節、本文之趣意を不残書認、其末ニ其座差支之有無相記候向ニ大方者有之候、本文之意肝要之所迄を相記、惣体しらへニ不書載候而も可相濟事ニ候、右通之しらべ座々ニ而同向ニいたし候故、同事ながらも兎角一通りハ諸向ニ而見通事候得者甚面働ニも相成候、差支之有無迄相記候得ハ御用相濟事ニ候、細字ニ而紙卷式枚位有之、本書ニしらへ之紙面行立等間遠ニ而本字茂無勘弁相認候付事長相成、取扱之向ニ而不用之事手間取、御用之滞ニも相成事候条、向々ニ而右之振合ニ基キしらへ事等不手間取埒明候様可心得候、此旨可承御役々等も可申渡候、

寛政二戊  
九月

右膳名越恒應

一何そニ付小路を馬場と唱、或相記候も有之候、以来

者小路又者何通りなど、可申候、尤、高見馬場・千石馬場杯と唱来候者地名ニ候故右体之事可有之事候間、取違無之様可致通達候事、

別紙之通勘解由殿より被 仰渡候間、已下略、

寛政元酉  
八月九日

御目付

烏渡海并田舎行并夫仕等之儀且又町中宿者勤方之儀ニ付被仰渡候事、

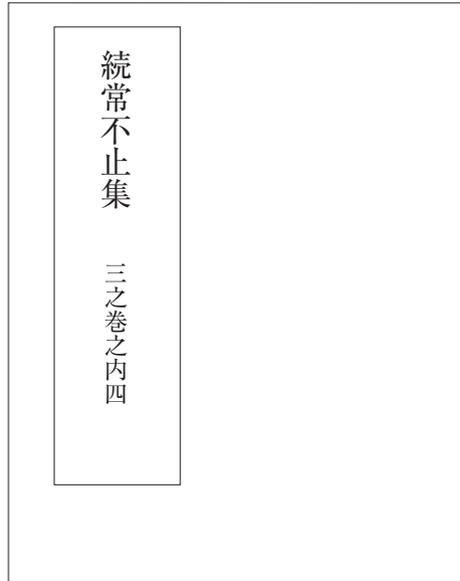
付、鑓印之儀ニ付被仰渡候事、

一近年夫仕并諸出錢米相重候故諸百姓共至而相勞、依所御高格護茂難成体ニ成立、段々救をも申付、今通ニ而者先キく可及御難題儀者為差見得儀候条、此節夫仕等之儀左ニ申付候、

一御奉公ニ付御国行キ之節、駕籠乗候儀者従前々御規を以被定置、其外奉行・頭人常行之節、人夫繰替之儀郡方迄申出、駕籠乗候儀者其身勝手次第第二而、右

外江者馬繰替之儀願申出候節、時々証文を以申付来候処、近年諸檢者等迄も大形者御奉公ニ付行キ之節駕籠ニ而致往来、縦表立而繰替等之儀願不申出候而も、自分雇ニ而御法之賃錢相払罷通者茂段々有之由候得共、御法之賃錢ニ而者百姓共益成儀有之間敷哉、其上依外城助夫・助馬逆茂定式之様相考、三人賦之者老罷通候砌茂過分之人馬差出事之由相聞得、今通ニ而者百姓共手透を不得、往々猶以作職方大形成立可致困窮儀候間、向後奉行・頭人田舎行之節者、有来御法之人馬繰替を以駕籠乗候儀勝手次第可有之候、其外御役人已下駕籠乗候儀堅止申付候、雖然老人又者兼而持病者等ニ而馬上難成人者医師証文を以申出、尤、頭役有之者其頭役より医師証文相添申出候ハ、時々委吟味之上可差免候、容易ニ者申付間敷事候条、右之趣御規帳ニも張紙を以可仕付置候、

（表紙）



続常不止集 仰渡留之部 三之卷卯

続常不止集

弘化三年丙午 三之卷卯

三之部

名越篤烈

一容貌・言語・風俗并組中取締之儀ニ付被仰渡候事

付、大番頭座以下書役被召入候節与頭へ相違与方支無之旨承届候上ニ而可申出旨被仰渡候事

容貌・言語・風俗并与中取締之事

付、大番頭座以下書役被召入候節与頭へ相違与方支無之旨承届候上ニ而可申出旨被仰渡候事

一与中之面々、風俗不宜ニ付而八段々被仰渡事候得共、

其詮も無之候付、此節組頭・御番頭不殘

御前江被 召出 御直ニ 御意之趣奉承知、寔以恐

入難有奉存候、右仰出之趣直ニ申渡通候得者、此節

よりかたく風俗不相改候而ハ 思召ニ不相叶候、就

中若者共行跡ニ付而者先達而も被仰渡、兼而与頭よ

り茂申渡事候得共、其身共ハ勿論、親兄弟ニ至仰出

之趣を不相守、心々ニ生立候故ニ候哉、稽古方等無

情之者も有之、或者稽古方ハ一通心掛候而も、礼儀

作法を疎略ニいたし異様之為体ニ而別而無行儀之者

十一月

組頭

194

も候故、左様之者盛長致候而もおのつから我儘而已  
ニ而、万端無穿鑿之所より却而行跡心掛も宜者を謗  
候体ニ候故、自然と風俗をミたり候方ニ成行、甚以  
如何敷儀ニ候、此節被 仰出候趣者格別之御事候間、  
老若共謹而承知仕、乍恐 御賢慮之程奉得心屹可相  
改候、右之通ニ候得者、仰渡を不相用異様之行跡ニ  
而無礼無辭儀を働人之異見をも拒候者、又者稽古方  
等一向不心掛ニ而理非を不弃体之者、御奉公筋も不  
宜筈候へハ士之本意ニも背、且右体之子共教訓をも  
不相加我儘ニ生立を以、親兄弟共茂都而仰渡を疎意  
ニ奉存候筋候条、右式之者ハ可被及御沙汰候間、此  
儀を能々致勘弁、無取違かたく可相守候、

右之通、与中之面々致承知、此節被

仰出候趣を以尚又以後共無油断朝暮親兄弟共より  
可致教訓候、此上なから若行跡不相直候歎不宜聞  
得之者ハ、小与頭其外より氣を付申出、勿論行儀  
心掛も宜者者是又申出候様申渡置候条、此段も可  
致承知置候、

一 此節風俗之儀ニ付組頭中被

召出、分而 御直被 仰出候趣者、御領國中士農工  
商各其品々ニより風俗之趣意者相替事候得共、惣而  
手前之職分を不相守、内利方ニのミさどく、外覺（宋羅カ）  
を第一ニいたし候者多候、近年之風俗おのつから不  
宜方ニ成行体候、此儀甚如何敷被

思召上御事候間、御領國中諸外城末々婦人女子之た  
くひ迄も、頭人・主人より

御賢慮之趣を相含、得と奉承知候様可申渡候、畢竟  
身之分限を忘、榮耀を専ニいたし候処より人々困窮  
ニも及び、万端ニ付悪事も致到来候条、此儀を忘却  
不仕、誠厚

思召難有奉承知、此已後屹と其詮相立候様心掛、女  
共又者事之心を不弃体之者へ者親兄弟・夫・親類よ  
り委令教訓候様可申渡候、

十一月

左中

左京

伊織

口達之覺

一御領国辺鄙之儀候得ハ言語甚不宜、容貌茂見苦敷体候故、他所之見聞も如何敷、畢竟御国之面目も相掛候儀付、於

御上茂御氣之毒被 思召上候、急ニ上方向ニ者可難改候得共、九州一統之風儀大概相並候程之言語行跡ニハ可相成事之旨、兼々御沙汰之趣御家老中奉承知、御尤至極奉存候、依之向後人々此旨を弁、様体・詞つかひ等相嗜之、他国人江応答ニ付而も批判無之様常々可心掛候、尤、衣服之儀者被仰渡置候趣候条、自他国之差別之外分限を過候儀者可為無用候、

右之通、組頭中得と承知有之、銘々宅へ組中之面々小与分ニ而小人数ツ、被呼出書付読聞之、猶又書面之旨趣を以口達を茂相添得心いたし候様被申聞、家来・下人江者主人より具ニ可申聞旨可被申渡候、

正月

左中

左京

帶刀

伊織

齋宮

一容貌・言語之儀付当正月被仰渡趣有之候処、容貌之儀者漸々相直方候得共、間ニ者目立候為体之者も有之候、就中言語之儀いまた仰渡之詮も不相見得候、依之此已後御用向并平日之交ニも江戸向言語ニ相直し、御国之言一不相用、尤、容貌之儀も相改候様被仰出候、右之通此節於江戸被 仰出候条、与中之面々与頭宅江呼出書付読聞之、仰出之趣承知仕、屹と相改候様申渡、家来・下人江ハ主人より具ニ可申聞段も可被申渡候、

五月

右京

主馬

帶刀

伊織

一御領国中之面々、風俗ニ付而者段々被仰渡事候得共、其詮も不相見得甚不宜候、依之屹風俗相直様此節分而被仰付候、

右之通被 仰出候間、末々男女迄も此旨奉承知堅相守、人々風俗可相改候、就中輕キ者共へ者程々応し、頭役・主人よりも無油断具ニ申聞、風俗相直様様支配有之面々、諸外城・私領へも不洩様可申渡候、

十一月

左中

左京

伊織

一当夏以来繁栄方ニ付芝居或諸所へ茶屋等相立、他国男女ニ不限入込候儀共免許候処、頃日ニ至上下之風俗懦弱相成、役者・茶屋女抔招呼、或町家江茂致徘徊輩多、甚乱かはしき由相聞得候、繁栄之筋申渡候儀ハ、下々近年及困窮売買等も相少、夫故町家も段々相衰不相応之見分ニ候故、下々救之為ニ繁栄方相立、往々生計ニも相成、家宅等も相応取立候様ニ

と存候付右之免許候処、畢竟取違候哉、却而諸士情弱に流れ、酒宴遊興を好事之様ニ相覺得、就中年若之者共者專其風儀成立候由相聞得候、城下士共忠孝を心掛、今日之事々を恭謹之、風儀忘脚不致様先年（仰之）已来より段々言語・容貌之儀迄も申付、此度ニいたり尚又士風を興起いたし候様ニと存、聖堂をも建置諸稽古等無懈怠申付候処、其詮ハ却而無之、日々情弱ニ相成候儀不屈候、聖堂創立繁栄方申付候儀者前文之通意趣格別ニ候得者、諸人其儀を弁へ、夫々之職分を相守、上下之差別猶以嚴重ニ可有之候処、右通成立候儀甚残多候、右ニ付而者家老中專氣可付之処、右件之儀共一事も不申聞、大形成儀不可然候、家老職之儀者政務を託置大役ニ候間、皆々心魂を碎平生ニも国家之儀も不忘様こそ可有之所、差当たる儀さへ氣不相付、甚以大役之詮も無之候間、右之分合を能々承置、是より職分ニも相叶、政事ニ付而者何事も不差置申聞候様可致候、且又無益之参会等者前々より令停止候処、是又連々ゆるかせに相成、間二者役目之内ニも不相応之聞得も有之不可然候、重

〔役之儀ハ、平生之慎無之候而者末々締ニも不相成筈

候条、能々可有心得候事、尚又下々締之儀共致判断、

いつれの筋可申聞候、左候而、自是第一武士の風儀

も質朴ニ相直、二般二者繁栄之儀も弥無懈可申付候、

十一月

家老中江

一此節我々共

〔御前へ被 召出、御家老職之儀者、御政務を被託置

大役之儀候得者專可氣付之処、旁不行届重役之詮無

之旨段々 御直蒙御呵、猶又別紙御書付を以被 仰

出、御堅慮之趣可申上様無之致迷惑候、右ニ付而

者 御咎目をも可被仰付之処、 御呵之一筋難有仕

合ニ候、最初聖堂御創立繁栄方相建候儀共都而格段

成

思召候処、取違候趣甚奉恐入候、向後屹と不相改候

而不叶儀面々謹而奉承知、毛頭無疎様堅可相守之、

此上不宜聞も候ハ、可及沙汰候、

右之通組中之面々、組頭宅へ呼出御書付読聞之、

〔仰出之趣具ニ可被申渡候、

十二月

左中

主馬

伊織

斎宮

一御領国風俗之儀ニ付先年以来段々被 仰出趣有之、

与中年若之者共彼是為申教、夫々小組中より人柄見

合教訓人被申付候様申渡置、御家老座・大御目付座

筆者之内ニも教訓人被申付置候得共、右筆者勤之儀、

專御政務ニ相掛り候儀を取扱申付候勤向故、依御用

之品ニ差支ニ相成儀も有之候間、教訓人被差免已来

共被申付間敷候、

二月

帯刀

一与中取締之儀ニ付而者、先達而より段々分而被

仰出趣有之、其以後連々風俗相直り候方相見得、其

段者達 貴聞、猶以来之儀可相嗜趣申渡置候所、至

頃日間々若キ面々及口論候聞得も有之、甚以不可然候、就中 御留主中取締等之儀被 仰出置趣も有之、  
到而 御心配被遊御事候二付、万一緩せ之筋も候而  
者と頭中二も手拔二相成、別而如何之事情条、随分  
申談、緩せ之儀曾而無之様猶又稠敷被申渡、依吟味  
之趣者兼而申教等之次第も可有之候間、其所者得と  
可被加勘弁儀候、当三月左中殿より被申渡置候趣も  
有之、与中之儀何れ請持之事情得ハ直不被取計候間、  
不叶儀与頭見込を以相当被申付置、得と吟味之上被  
申出置儀茂可有之候、乍然依事者不被得差図候而不  
叶儀者有来通可有之候、右体之儀ハ兼而被申談、前  
広可被得差図置儀と被存付趣ハ可被申出候、其外少  
事之儀ハ以前之通組頭前二而取計可相濟儀二候、前  
件之趣者小組頭并教訓人江も取違無之様可被申付置  
候、取締并風俗之儀二付而ハ去々年来段々被達置  
候趣も有之候付、此以後繁々致沙汰間敷候条、与頭  
中越度無之様随分心掛可被相勤候、

#### 四月

右之通、月与頭島津主鈴・新納四郎於台子之間大

進殿より御口達二而致承知、覚書付被相渡候事、

#### 口達之覚

一組中取締之儀、段々申渡も有之、去ル酉年与頭中よ  
り委曲吟味被申出趣有之、一組之内をも小与分を以  
被致支配事候得ハ、何角吟味も可相届儀候、尤、小  
組頭・教訓人など兼而人柄見合被申付置、間へハ与  
頭宅江も相招、小組中取締之次第又者申教等儀迄も  
直二被承届、得と及吟味、申聞等も有之候ハ、善  
悪も分明二相成、自風俗も宜可成行事情間、右体之  
儀者夫々与頭見込も可有之候条、兼而心得之趣銘々  
より書付を以可被申出候、

安永九子  
七月

組中取締之儀付与頭中兼而心得之趣被申出候付、  
左之通申渡候、

一 小与頭・教訓人等見合を以定而被究置、夫々宅江召  
呼教訓之次第且小与頭中平日之心得等承届、善悪之  
沙汰又者差図等可致候、左候而、教訓人之儀、是迄

ハ最寄を以為申渡置由候得者、其小与中二而無之候而ハ引受候儀薄方候者、受持之与中より随分人柄二而も取締宜方可被申渡候、

一 不依老若申渡候趣違背之族者無之筈候得共、万一無故催等いたし候者も有之候ハ、右式之儀曾而無之様申渡、其上心得違之者ハ相糺可申出候、

一 与中之者共御咎目被申付候節ハ、輕キ儀共二有来通可有之候、講堂出席并諸稽古場江時々差越致見分候様被仰付置候付而ハ、随分氣を付諸芸鍛鍊等之程可被致見分候、各面々学文武芸致出精行跡宜者ハ招呼、与頭より褒美申聞、其首尾可被申出候、勿論分而出精之者、又者芸之功有之候歟、兼而行跡等之勝候者、其外御用立候芸能之者も候ハ、得と吟味之上可被申出候、左候ハ、応身分被仰付様可有之儀候、

一 髪方見分之節、同心人之儀見分人同様之年背二而申渡事不詮立節ハ、翌日又其涯親兄弟・身近キ親類之内招呼委細可被申渡候、其上不相用候ハ、是又可被申出候、左候ハ、吟味次第御咎目をも可申付候、

一角入・前髪等見分之節、異体之者有之候ハ、度々可

被致見分候、差而異様二も無之者、又下見等無間も被致再見候儀も有之趣二相聞得候、右体之儀ハ吟味可有之事候、

右之通、組頭中可被相心得候、尤、重立候儀ハ大御番頭江被申談可被致首尾候、其外先達而委曲申渡之趣を以可被致教示候、

安永九子  
十月

（島津大起）  
大進

一言語之儀、先達而段々被 仰出趣有之候付而者 人々忘却者不致筈候得共、

御着城涯猶以屹相改、其詮相見得候様可致候、ケ様之折目相過候得ハ涯立候期も無之事情間、稠敷可申渡旨 御沙汰二而、右之通御中途より申来候言語之儀二付而ハ度々被及 御沙汰二も不輕事候所、左様之勘弁薄、違背之筋候而ハ甚以如何敷候条、屹相改、其詮相見得候様可相守候、

右之通、表方へ致通達、御側方・御勝手方江者写を以可相達候、

安永二巳  
四月

（島津大進）  
左中

(喜入久福)  
主馬

以可相達候、

四月

左中

一言語・行跡・髮形等之儀、度々被

主馬

仰出之趣候所、(其力)甚詮不相見得、言語之儀二付而者近

仲

キ頃茂 御沙汰之趣申渡通候間、右之旨趣猶以支

配々より諸外城衆中・百姓・町人迄も不洩様屹と相

改候様可申渡候、

一言語相改候様被 仰出趣段々為申渡事候得共、今以

不相直 御氣之毒被 思召上候旨、此節分而御沙汰

但、出水より伊集院迄者於御中途申渡相濟候間、

之趣承知仕、畢竟我々不心掛之筋大形之所より末々

申渡不及候、

迄不行届、度々被及 御沙汰甚以奉恐人事候故、屹

一 鹿兒島之儀、前条之趣付度々被

掛心頭、兼而之交二も不致忘却、一涯其詮相見得候

仰出、御家老中よりも分而申渡趣有之候得共、御役

様御役々江も申聞候条、人々堅固可相守候、

人又ハ筆者・小役人其外言語杯も不相直も有之由相

右之通、与中・支配中・諸外城・私領江可申渡候、

聞得不可然候条、此已後屹相改候様可致候、

十二月

左中

右之通、此節又々 御沙汰之趣有之候付、言語・

容貌等屹相改候様、此涯其詮相見得候様当人ハ勿

一 容貌之儀、頃日二者大半相直方二候得共、間二者目

論、支配頭より時々可申聞候、度々被仰出事候処、

立候行跡之者も有之、就中於江戸之御外間二も相掛

此涯其詮不相立者ハ可及 御沙汰候条、致出精詮

儀二候得者、各掛心頭可相直之処、無其儀不可然候、

立候様可致候、

依之又々 御沙汰之趣有之候条、猶又一涯其詮相立

右之通、表方へ致通達、側方・御勝手方へハ写を

候様可心掛候、

一言語之儀、先年より段々被 仰出趣有之、嚴敷為申渡置事候処、頃日ニ至り而ハ其弁無之、連々不相用方ニ成行候、畢竟江戸向他所之御成合宜、公私共通弁宜様と厚

思召を以為被 仰出御事候得共如何取違候哉、不届之至候、右ニ付而ハ見聞可申付置候条、此上仰渡之旨を籠略ニ存、物語之端ニも致誹儀輩者屹礼方被仰付、勿論此已後申渡を不相守已前之通国言葉相用候者、吟味之上他所之勤方ハ被仰付間敷候、

右之通、江戸より申来候、先達而も度々被及 御沙汰不輕御事候間、随分其詮相立候様堅可相守候、右之通、表方へ致通達、御側方・御勝手方江ハ写を以可相達候、

十月

帯刀

仲

一御当国之儀、辺鄙ニ而言語・容貌至而不宜、他国人出会等之節至り而も不都合有之、就中言語之儀、間二者通兼候儀共可有之と別而 御氣之毒被 思召上、

常々申馴候ハ、万事宜、且者其身共之恥辱ニも可相成事候故、彼是難有 思召を以先達而段々被仰渡候趣有之、申渡置候通候容貌者少々相直候者も有之候得共、言語儀未其詮無之、却而大形之至別而如何候、数年来為申馴事ニ而急ニ難相直筈候得共、前件之通難有

思召之儀候得ハ分相守、常体ニ成候ハ、漸々他所言葉可相直事候、右ニ付而者重役中ニも兎角不申馴事故不相届儀も有之候間、御座ニ而ハ勿論、家内ニ而も無隔随分掛心頭相守候筋申談候条、右之趣を以御役人を初其外末々迄も一涯心掛可相守候、左候而、御国言葉用候者へ者奉行・頭人より時々申聞、尤、誰人ニ而も互不差置、無遠慮相直候様可申聞候、右通之振合候者おのつから可相直事候間、右之趣末々迄も得と承知仕、一統可心掛候、乍此上心掛薄者者先達而申渡置候通御沙汰ニも可及候条、堅可相守候、右之通、表方へ致通達、御側方・御手方江者写を以可相達候、

七月

主馬

帶刀

市正

仲

一 御口達之覺

言語ニ付而先達而段々被仰渡趣も有之、頃日ニ者随分相直相用筈候処、今以其詮も不相見得、畢竟仰渡之趣不相通筋ニ而 思召通ニも不相叶甚以如何ニ候、此度之儀者重役よりも分而被相改筈ニ被仰談候旨、末々ニ到屹と相改候様、仲殿より猶又御口達を以致承知候間可被得其意候、以上、

安永西末

七月廿三日

鎌田典膳 (政為)

右之通、鎌田典膳御取次を以被仰渡、北郷權五郎

致承知候事、

一 容貌・言語之儀ニ付而者毎度被

仰渡趣有之、容貌者少々直候者も有之候得共、言語之儀未相直候付、随分心掛可相改候、乍其上心掛薄者者 御沙汰ニも可及旨此間委曲申渡置候所、猶又

右之趣分而申渡候様 御沙汰有之候、此旨承知仕、

先達而申渡候趣猶又無忘却可相守候、

右之通、表方へ致通達、側方・御勝手方へハ写を

以可相達候、

安永西末

八月

(喜入久福)

主馬

(小松清香)

帶刀

(山岡久澄)

市正

(赤松則正)

造酒

一 容貌・言語之儀付而者先年已來被 仰出趣段々申渡

通候、就中言葉之儀ハ江戸向他所之御成合、公私共

通弁宜様ニと厚 思召を以被

仰出御事候間、人々互相厲可相守候、此上ニ而も仰

渡之旨籠略存不相守、物語之端ニも致非儀御国言葉

相用候者者、御吟味之上他国勤被仰付間敷旨、去ル

午年以來申渡候処、頃日緩せ相成不可然候条、随分

心掛致得心、其詮相立候様堅可相守候、此上なから

不相用者者、去ル午十月中申渡置候通御目付・御徒目

付より時々氣を付可申出旨、向々江可申渡候、

一組中若者共、多人數列立徒夜行・辻立等いたし候処より喧嘩口論等不相止、先年已來分而被

仰出趣有之、殊ニ 御直ニ与頭江

御意之趣も候故、其涯之様無之、連々致忘却候筋ニ而、至頃日夜行・辻立又者辻歌なとうたひ致徘徊者も有之由相聞得不可然候、元より為士之子右体之風儀者有之間敷事候所、如何取違ひ候哉、畢竟稽古事等之心掛も無之、徒ニ罷在候所より斯之通ニ候間、互之礼儀者勿論、学文武芸相厲尋常可相交候、左候得者自恥辱受候儀も無之、自然と風儀も正敷可相成候間、親兄弟・親類又ハ八年長候者共より時々可申聞候、且又末々之者たりとも理不尽相果候ハ、屹と御咎目可被仰付候、右ニ付而ハ専与頭請持之事候間、右之旨趣を以遂吟味、折角相制候様可被致、其上ニ而も平生制様大形之趣も候ハ、可為越度候、稠敷制候上なから不相用候ハ、屹と曲事可被仰付候間、名前可被申出候、

一御留主中之儀者随分相嗜、却而堅固可有之処、每物緩せ相成候様被 聞召上、左も有之間敷と如何被

思召上、何れにも被 仰出置候筋合心得違候故歟、末々ニ而ハ取違之儀も有之由候間、被仰付置候趣不致忘却心掛相守候様可致候、

一無形茂浮説色々申触候由相聞得、御政道之妨ニも相成、別而不届ニ候、以後無筋浮説等不申触様可有之候、右ニ付而ハ御目付・横目江申渡置趣候間、右体之者ハ屹糺方之上可被行切腹死罪ニ茂旨、先達而申渡置通ニ而聊忘却者不致咎候得共、御留主中之儀猶以御政務等相障候儀共見、無故浮説會而申触無之様人々可相嗜候、自然右体之儀申触候ハ、実否相糺候上及

御沙汰、其身者勿論、親類迄も迷惑可相成候条、此旨承知仕、末々之者共へ茂時々可申聞候、

右之通、表方へ致通達、御側方・御勝手方へ者写を以可相達候、

四月

主馬

帯刀

市正

一容貌・言語之儀度々被

仰出、容貌者到頃日少々者不目立候方相見得候、言語之儀付而者他国人出会等節通兼候儀共可有之旨、別而御氣之毒被 思召上、常々申馴候ハ、他所へ之御成合且公私共通弁宜筈と彼是厚

思召を以被 仰出御事候処、仰渡之旨を籠略存、物語之端ニも致<sup>(講之)</sup>徘徊申渡を不相用ものハ他国之勤方被 仰付間敷旨、去々年分而被仰渡置、当

御発駕前 御沙汰之趣有之、ケ条書を以申渡旨趣有之候処、今以言語不相直者有之由相聞得、甚以不可然候、程過候得者自然と大形可成行候間、急度可相改候、万一御国言葉用候者ハ相直候様奉行・頭人者勿論、其外互不差置、何ケ度も申聞、朋友中者不及申、召仕之者も相改、内外無差別不断可心掛候、此旨不相用者ハ先達而被

仰出置候通可被仰付候条、到其節後悔致間敷候、右二付而者先達而御目付・御徒目付・横目江申渡置候通、不相用者名前猶又不差置申出候様、時々氣を付可申出旨向々より可被申渡候、

右之通、御家老与并支配中江申渡、組中之面々与頭宅へ招呼読聞之、諸外城・私領へ不洩様可申渡

候、

安永五甲  
八月

八月

(島津久金)

左中

(喜入久福)

主馬

(小松清春)

帶刀

一言語之儀二付而ハ先年より段々被

仰出趣有之、每度申渡置候通候条、猶以随分心掛可相守候、勿論誰人ニ而も御国言葉相用候ハ、可相直旨、互ニ無遠慮申聞候様可致候、

右之通、表方へ致通達、御側方・御勝手方へハ写を以可相達候、

四月

左中

帶刀

一容貌・言語・風俗等之儀二付而ハ、先年以来度々被仰渡候得共、与中今以不相直者茂有之、且又途中ニ而組頭へ行合候節、籠礼ニ而罷通候者有之由相聞得

候、勤方有之者ハ奉行・頭人迄を支配頭と存違、右通之者茂候哉、礼儀正敷高下をわかち諸士末々迄茂鹿礼無之様段々被仰渡置、就中与中之面々者勤方之無差別組頭支配之事候処、兼而風俗も不宜、与頭より申渡候儀も不得心之筋二而、鬢形・行跡等二至今以不相直、異様之者も有之甚不可然候、依之時々与頭見分之上不相守筆者・小役人者奉行・頭人江問合有之勤方差免、勤方無之者ハ外方徘徊差留置、左候而、鬢形・行跡等相直候ハ、勤方差免候者者与頭最前相勤居候場所へ致問合、代有之候節本之通勤方申付、勤方無之者ハ徘徊可被差免候、尤、此已後寺社奉行所以下筆者・小役人召入候節、人柄都而与頭江相しらへ之上可被申付候、

右之通、与頭并奉行・頭人江不洩様可申渡候、  
安永六酉  
七月  
左中

一言語・容貌之儀付而者先年已来度々 仰出之趣有之、其涯者言語相直候者も有之候処、到頃日一向御国言葉相用候方成立如何二候、畢竟御国之風俗江戸向ハ

勿論、他所へ相懸候而茂通弁等宜様二との厚思召を以毎度被 仰出御事候処、其勘弁も無之、当分之振合二而ハ 仰出之旨を鹿略二奉存候様有之、旁以不埒相聞得候、此上万一茂被及

御沙汰候而者迷惑可相成候条、以来不限男女急度言語相改候様心懸、末々之者迄茂忘却不仕様支配頭・主人より嚴敷可申付候、容貌之儀も猶又相嗜、若面々異様之鬢形等一切不致様、親又ハ身近キ者共よりも呉々可申聞候、何篇付程過候得共取守薄方相成候間、其通無之様二者当春も申渡通故、聊以心得違無之、此節者人々一涯相厲、第一於御役所向言語相直候廉吃相見得可心掛候、左候得者自然と御領国中江相流、一統相直候積二候、右二付而者夫々見聞申付置事候条、不相用者も候ハ、不依誰人可及沙汰候、右之趣向々江致通達、書役・小役人へ者奉行・頭人より吃と申聞、与中之面々者猶又与頭宅江人別召出申渡之、支配下并家来末々之者迄茂支配頭・主人より可申付旨申渡、外城之儀も右二準可被申渡旨地頭・月番御用人江可申渡候、

安永七戊  
十月

(小松清香)  
帶刀

(山岡久澄)

市正

(島津久健)

仲

(二階堂行且)

主計

仲

一言語・容貌之儀、厚 思召を以毎度被

仰出御事候処、容貌者漸々相直方候得共、言語之儀  
今以不相直候条、

思召之旨を猶以人々得と汲得忘却不仕、就中御役所  
向之儀專相用、内外共二通弁宜様可心掛候、且容貌  
之儀茂弥相嗜、若キ面々異様之鬢形等一切不致様、  
是又親兄弟又者身近者共より可致教訓候、右二付而  
ハ先達而委曲申渡置候通候条、一涯其詮相立候様可  
致候、

右之通、書役・小役江者奉行・頭人より屹と申聞、  
与中之面々者<sub>二</sub>与頭宅<sub>二</sub>而申渡、支配下并家来末々  
之者江者頭人・主人より時々申付、外城之儀も準  
右可申渡候、此旨面々江可致通達候、

五月

帶刀

一与中之者共行跡不相直候二付、当在国ニも段々申渡  
趣茂候得共、其詮も可相立候処、却而頃日者度々喧  
嘩いたし候者も有之由相聞得不可然候、喧嘩口論禁  
制之儀者 公義御法令ニも相見得、且又短慮之働い  
たし理不尽ニ事を破候者ハ、加成敗所帯を可没収旨  
每朔之条目ニも載置候、左候得者親兄弟共より兼而  
稠敷可申付候処、若氣之至リニ而誠ニ無益ニ死傷致  
候者及数多甚不便候、畢竟若輩之者故傍輩を打果、  
切腹さへいたし候得者事相済と心得候所より軽々敷  
及喧嘩事候、第一者国恩を以蒙生育候得共、(遂力) 専忠勤  
を心掛、第二者父母之受大恩人となり候得者、夫々  
孝養を以可相報事候、左候得者自分之身ニ而我儘ニ  
働候儀曾而不罷成筋候、ケ様之分を不弁致喧嘩候者  
者委遂吟味、無礼法外を働喧嘩之張本ニ為相決者ハ、  
誠ニ不忠不孝之罪人と可申条、(旧記雜録下り補) 其身者凡下ニ申付、  
△ 相果候死体可為取捨候、親兄弟共之儀も吟味之上  
大形之依軽重屹咎目申付、其外高下之無差別右準取

計、依事ハ所帯をも可没取候、縦末々之者を打果候  
といふとも、依理不尽之訳者応右吟味之上是又屹咎  
目可申付候、此通申渡候上無礼法外之事共申懸、其  
偏難差置事候共成丈致堪忍、則筋々可言上候、左候  
ハ、彼者へ者相当之咎目申付、尤、神妙ニ取計候者  
江者屹褒美可申付候、

右之通、領國中江屹と申渡、其外締ニも可成細々  
之儀共ハ家老中申談可取計候、

正月

一此節 御前へ左京・帯刀被 召出 御直ニ屹と被  
仰出候趣御書付之通候、御憐愍を以御沙汰有之御事  
候条、謹而可奉承知候、此上なから万一無礼法外を  
働、手前之短慮故理不尽二事を破、其身被処嚴科、  
親兄弟迄蒙御勘氣儀者不忠不孝之至り候条、此旨若  
キ者共常々心にかへ罷在、聊忘却仕間敷候、御書  
付之趣未弁幼若之者へ者親共より可申教候、

明和七寅  
正月

（島津久金）  
左中  
（榊山久智）  
左京

（喜入久福）  
主馬  
（小松清香）  
帯刀  
（川田國福）  
伊織

別紙之通被 仰出候条、謹而承知仕候様御書付并  
添書之趣支配中・諸外城・私領江可被申渡旨、地  
頭・領主・支配頭江可申渡候、

明和七寅  
正月

左京  
帯刀

一与中之者共致喧嘩相手を打果候節者、近辺之横目江  
申越、親類共ニも差添、意趣之次第承届候上、切腹  
可為致候、若無其儀切腹致させ候ハ、親類共越度  
可相成旨前々被仰渡候得共、頃日大形之趣ニ候、此  
節分而被

仰出候上者致喧嘩候者無之筈候得共、万一取違候者  
も有之、致喧嘩候ハ、右仰渡之通を可相守候、  
一与中之者共学文武芸無油断相厲、礼儀作法宜、行跡  
相嗜候様にとの儀者毎度被仰渡候得共、書付之弘メ  
ハいつも同様之儀と取違候茂可有之候、今度も段々

被 仰渡趣ニ付而者猶以実其心懸無之不叶事候間、  
随分其旨を可相守候、

一 若者共向々交ニ而其郷中外之者ハ中途行合候節茂或

謗雜言等申掛、又ハ衆道之儀共ハ二才中之腕立之様  
ニ心得違、法外之儀トハ不存候哉、過半右式之儀ニ  
而及喧嘩ニも、無体若輩ものを打果候儀共有之候趣

相聞得、甚以不可然候間、平日親兄弟・親類より不  
差置毎度可申聞候、右付而ハ小与頭へ者分而申渡置

候訳も候間、見聞之趣時々申出候様申渡置候、

一 与中之内二者年長ケ候而も手前之非儀を以神妙ニ相

見得候者を謗、却而生立悪敷者へ不宜儀を致催促候  
儀も可有之候、是又諸人之妨別而不宜者候条、右体

之者於有之者不差置、早々申出候様小与頭へ申渡置  
候、

一 学文武芸其外稽古事等心懸、平日礼義正敷万事律儀  
之者者是又申出候様小与頭へ申渡置候、

右之通申渡置候条、随分堅固相守不致忘却可相慎  
候、

正月

組頭

一 此節被 仰出候趣与頭宅ニ而与中之人数一同可申渡

候、左候而、小与分を以小与頭且又無役之内両三人  
茂人柄見合、与頭より仰出之趣を猶又口達ニ而具ニ

申含、其者共より同小与中之人数江委申聞、若者共  
へも可申教候、右ニ付与頭宅へ者御目付可相詰候、

一 此節之 仰出并添書之趣、

御在府・ 御在国共度々小与分ニ而小人数ツ、召出  
可被相弘候、其節々御目付へ可被相通候、

一 御側廻小坊主迄之人数ハ与頭より右之申渡ニ不及候、  
以後共何ぞ付与頭并小与頭宅ニ而同ニ申渡候節ハ

右通被相除筈候条、其通可被相心得候、其外御側支  
配人数ハ有来通候、

但、書付ニ而通達等之儀ハ有来通可有之候、

右之通、与頭江申渡、御側御用人・御目付へも可

申渡候、

正月

（權山久曾）  
左京  
（小松清春）  
帯刀

一 頃日諸士之内取違、町家へみたりに致徘徊輩も有之

由相聞得不可然候間、先達而段々被仰出候趣無忘却可相守之候、此段不洩様可致通達候、

安永三年  
二月

（島津久金）  
左中

一 与中若者共風俗二付前々より異様之鬢形を好、郷中党を立、徒夜行・辻立等いたし、平日之交（丈七）二も無作法之事而已多、（丈七） 僂忽之働を以却而氣伏之様二心得、

朋輩同士或口論或及刃傷候儀多々有之、誠年若之者共何之無弁右体非命二而致死傷候儀不便被 思召上、

色々被凝 御堅慮先年稠敷被 仰出趣有之、其涯徒之徘徊為体も相直候様有之候処、到頃日忘却いたし候哉、漸々以前之風儀二相成候者も有之段相聞得、甚以不屈候、何れ無故夜行・辻立等致候所より無筋口論等も致到来事候間、先年仰出之趣を以親兄弟又者親類共より稠敷申聞、乍其上不相用者ハ屹可及御沙汰候、右二付而者与中之事故与頭專氣を付時々制様も可有之所、無其儀大形之至被 思召上候、此已後申渡之詮不相立候ハ、可為越度候条、其旨能々相心得嚴蜜可申渡候、

右之通、表方へ致通達、御側方・御勝手方江者写を以可相達候、

安永四末  
七月

（喜入久福）  
主馬

（小松連香）  
帶刀

（山岡久澄）  
市正

（島津久健）  
仲

一 別紙申渡候通先年厚キ 組頭江

思召を以為被 仰出趣有之、其涯異体并徒徘徊暫者相直候様有之候処、到頃日漸々以前之風儀相移候儀、畢竟為組頭大形二被居候所より右体二候、何れ組之儀者請持之事候得者、兼而氣を付小組頭へ申渡、聞合等をも致し少二而も其風相非候時分、無遲滞申渡等有之候得者相直り候茂最安第一被勞 御堅慮候儀無之、且役職も可相立事候処、無其儀差置候儀、心懸薄相聞得不可然候条、何分申談屹其詮立候様可被申渡候、此已後自然不相直候ハ、御沙汰二も可被及候間、其通相心得随分被致忘却間敷候、

右可申渡候、

安永四末  
七月

主馬

帶刀

市正

仲

右式通、未七月廿七日鎌田典膳御取次を以被仰渡、

島津内膳致承知候事、

一与中若者共風俗等之儀ニ付而者先年已來被

仰出、去年も御沙汰之趣有之、分而申渡置候処、

其砌ハ風俗も相直候様有之候処、到頃日歌杯うたひ

徒ニ夜行・辻立等いたし候者も有之段相聞得、甚以

不可然候条、猶又仰出之趣を以親兄弟・親類共江

小与頭又ハ被係置候面々より稠敷申聞、乍其上不相

用者者申出候様可被申渡候、

右之趣を以稠敷被申渡、以來之儀も猶又無緩せ

時々可被申渡旨可申渡候、

四月

帶刀

一与中取締等之儀付而者仰出之趣有之、万端無慮略

相守候様先達而段々申渡通候、右ニ付而者夫々見聞

役中江申聞置趣茂候条、猶又相嗜候様与中・支配中

へ如何可申渡候、

安永七戌  
三月

島津久健  
仲

一与中若キ面々、徒之徘徊・風俗等之儀ニ付而者先達

而段々申渡置候、懦弱筋之風俗到而相嗜筈候得共、

万一本意を取失ひ風俗取乱相迷候而者別而如何ニ候

間、親又ハ身近キ親類共より緩せ無之様兼而可氣付

候、此以後右体不宜聞得之者も候ハ、屹と糺方之

上被仰付様も可有之候、

右之趣、与中・支配中へ不洩様可申渡候、

安永七戌  
閏七月

小松重春  
帶刀

一組中若面々、徒之群集破魔投等不致様堅申渡、末々

之者共迄辺鄙迎も無故相集候儀、又者物詣等一切停

止申付候条、支配頭・主人より嚴敷可申付候、

右之通、御家老与并組頭其外へも可申渡候、

右之通、帶刀殿より比志島要人御取次を以喜入善  
之助致承知候事、

安永八亥  
正月

一年若キ男女不謂不埒之仕形有之、畢竟身近キ親類共  
之大形故、已來取締二付

御沙汰之趣去ル申申渡置候通候処、頃日段々情弱  
成致方之人有之、別而如何ニ候、右申渡之趣も有之  
候而ハ、身近親類共兼而氣を付、乱ケ間敷儀共無之  
様家内取締も可致事候処、無其儀旁以不行届大形之  
至候、右式之儀ハ前以之見聞も有之筈候故、随分無  
難之取計可有之事候を、右体大形之所より放埒増長  
いたし難差置次第成立、其身者勿論、親共迄も到而  
迷惑筋相成、且者他所之聞得も不宜、甚以不可然候  
条、向後情弱之仕形等一切無之様人々相慎、家内取  
締方專可心掛候、以來右体之聞得も候ハ、親兄弟と  
も迄も屹と御咎目可被仰付候、右之趣、御家老与并  
六組其外支配有之面々江不洩様可申渡候、

安永八亥  
二月

（小松清春）  
帶刀

（山岡久澄）  
市正  
（島津久健）  
仲

（二階堂行且）  
主計

一頃日男女情弱之体多々相聞得、甚以如何被

思召上候、身分之輕重ニよらす武家之儀ハ猶以平日  
手堅ク取締、万事二心を配り候ハ、おのつから不意  
之儀無之筈候所、畢竟夫々大形ニ相心得、男女之分  
隔薄所より露顕之上当惑ニおよひ身上之破却ニも相  
成候、惣体御國中士之風儀正しからず候付、先年以  
来度々被仰渡趣も有之候処、前件之聞得御政道ニも  
相掛、他所之批判到而、御氣毒被思召上候、依之右  
式之儀者素り、不宜風聞於有之者無用捨相糺可申出  
候、左候ハ、御吟味之上家内者勿論、親類たりとも  
依分者御咎目可被仰付候条、不致忘却、已來屹と相  
守候様稠敷可申渡置旨被仰出候、

四月

右之通、於江戸被 仰出候条、可奉承知候、右二  
付而者先年 御沙汰之趣有之、猶又当二月家内取

締等之儀共委曲申渡通候処、段々惰弱体之儀有之  
段被 聞召通甚

御氣之毒被 思召上候、尤、風俗等之儀二付而者  
先年以來度々仰出之趣も有之候処、又候前件之通  
被 仰出御事候条、聊忘却不仕、家内取締方等第  
一嚴重有之候様可致心配候、乍此上大形之聞得も  
候ハ、詮儀之上其家内勿論、親類迄も可及迷惑  
候間、此旨堅可相守候、

右之通、与中之面々者於組頭宅申渡、諸外城之  
儀ハ嘸・与頭招呼申渡、私領并支配下家来末々  
者共江者頭・主人より可被申渡旨、向々江不洩  
様可致通達候、

安永八亥  
五月

(小松清香)  
帶刀  
(島津久健)  
仲

一頃日年若男不謂不埒之仕形有之候、右体之儀者不図  
之事二而も無之、前以見聞之振合も可有之候得共、  
身近親類共者勿論取計次第可有之候処、無其儀、  
甚以大形之至候、喧嘩・風俗等之儀者分而被 仰出

意趣も有之候付而者、專親類共其心得可致事候、御  
国之儀者古国之事候得者風俗茂格別可有之処、別而  
如何被 思召上候段、此節 御沙汰之趣も有之候間、  
向後親兄弟・親類共大形之儀無之様随分諸事可心掛  
候、

右之通、表方へ致通達、御側方・御勝手方へ者写  
を以可相達候、  
安永五申  
十月

(喜入久福)  
主馬

一無益之参会不致と之儀者折節申渡有之候得共、今以  
御役入又者何そ二付参会不相止由相聞得如何之事候  
間、堅無用二被仰付候条、此旨表方へ致通達、御側  
方・御勝手方江者写を以可相達候、

安永四未  
十一月

主馬

一頃日色々無筋風説申触候者有之由相聞得候、不詮立  
儀二者候得共、御政道を妨風俗を乱候端二相成其各  
不輕候、御領国之儀者数代御厚恩之者共二候得者、  
平生大切二奉存、仮初二も右体之儀曾而無之筈候処、

却而誹謗ケ間敷風説等申触候儀、畢竟其者之心底不

忠と申外無之、甚以不屈候、依之為札方此節御目付、

横目被仰付置、風説聞立次第嚴敷遂詮儀、名元相知

候ハ、少も不被加御不便、切腹又者死罪可被仰付候

条無相違奉承知、到其時及後悔間敷候、尤、輕儀速

も無故風説申触候儀一切令停止候、此旨与中・支配

中・諸外城・私領へ不洩様可申渡候、

安永四末  
七月

喜入久福  
主馬

小松清香  
帶刀

川田国福  
伊織

山岡久澄  
市正

島津久健  
仲

一与中御取締之儀二付 仰出之趣有之、去春以来段々

申渡置通二而、若キ面々専右之御旨趣を相守、猶又

静謐之方相聞得一段二候、此上聊も心得違ハ無之筈

候得共、人々無忘却 仰出通嚴格可相嗜旨、小与頭・

教訓人中より懇二可申聞候、

右之通可被申渡旨与頭へ可申渡候、

安永八亥  
正月

帶刀

一与中風俗之儀二付先年以来段々仰出之趣茂有之、至

極被勞 御心、猶又 御留主中取締之儀迄も分而被

仰出置候間、此節より取締方之次第、

口達之覚

一士之氣節を厲、学文武芸致出精、風儀正敷生立候者

者、銘々名書を以可申出置候、仮二も懦弱之風儀二

生立、不宜聞得之者於有之者不差置、是又名書を以

可申出候、

一若輩者共夜行・辻立等徒之徘徊會而不致筈候得共、

何ぞ稽古方二付而指南人方江差越候時分、列を待合

候由二而堂社又者路次・門頭二待居候者も有之候由、

是以無行儀之至、殊二徒徘徊之者二相紛候間、左様

無之様可申聞候、

一何方組又者咄中間抔と名付、方限を立相交候儀も風

儀別而不宜候、左様成所より外方限之者者朋輩之様

二も不存、途中二而不凶行逢候砌、直二無礼法外之

儀も致到来、不謂意趣を含、終二者及口論喧嘩之張

本二も成立事之由候条、右体之儀急度相止候様小与頭并教訓人共よりも專可申聞事候間、随分氣を付居、乍其上風儀不相直候ハ、吟味之上分而申渡次第茂可有之候間、其訳可申出候、

一 組中へ段々被仰渡候旨趣、間二者不得心二而不相守、却而不宜致催促等候者も候ハ、見立聞立誰人之上たりとも急度名書を以可申出候、自然親兄弟・親類之身分を慮、名元書出候儀差控候儀共有之候而者、当役之詮も不相立候付、屹と其詮相立候様可心掛候、万一右不得心之者共、故を以風儀不相直方二相聞得候而ハ、行跡宜生立候者共迷惑之事二而、取締不行届方可相成候条、諸事細蜜氣を付夜白行廻、右外心得二も可相成儀ハ早々可申出候、万一不締之儀脇より致露頭候ハ、係置候詮無之、依訳者越度二も可相成候間、随分心掛可相勤候、

三月

大御目付

一

与頭江

与中風俗等之儀二付而者段々分而被仰出候趣有之、

毎度申渡通候処、頃日間二者若キ面々異様之鬢形・容貌別而不宜、又者夜行・辻立徒二致徘徊候間得茂有之、甚以不可然候、畢竟親兄弟・親類共申付様大形二候条、右体之儀一切無之万端相嗜、尤、学問武芸諸稽古方随分致出精候様、若キ者共并親兄弟・親類共へ得と可被申聞候、乍其上不相用者於有之者、糺方之上屹申付様も可有之候条、其段可被申出候、右之通可被申渡候、右二付而者小与頭并被掛置候面々兼而不行届筋二相見得候条、随分心掛、緩二不相成様二是又稠敷可被申渡旨可申渡候、

二月

仲

一 与中異変等之儀、少年迎も早々可申出旨先比申渡置趣も有之候付、夫々受持之小与頭共可氣を付之処、頃日異変筋之儀段々有之候を何分も不申出、甚以大形之至候、畢竟事之不破内候得者取扱之致様も有之候条、以来猶又遂吟味、右体之儀者未事立内早々可申出旨、急度被申渡置候様与頭へ可申渡候、

安永八亥  
二月

小松連香  
帯刀

一 学文武芸勝而出精之者ハ可被申出旨、去々年申渡有之通候間、猶又無懈怠出精いたし平日之心掛等も宜者者被仰付様可有之儀候条、兼而見聞之趣を以夫々師範家其外へも被相札名前可被申出候、

安永九子  
六月

（島津久起）  
大進

一 与中若キ面々、徒之徘徊仕間敷趣者兼而仰出茂有之、度々申渡置通故聊忘却者不致筈候得共、頭殿引越二付而者頭屋辺所々入込之場ニも候条、猶以徒不相集様親又ハ身近キ親類共より嚴敷可申付候、

右之通可被申渡旨組頭へ可申渡候、

安永七戌  
六月

帯刀

一 与中教訓人申付置候内定勤有之面々、間ニ者勤向ニ付段々差支之趣申出、教訓人被差免候筋申出候も有之、甚以不可然候、郷中静謐之儀者教訓人申渡無之候而も人々自申談等も可致事候処、却而与方勤向を避候筋相聞得、其通ニ而ハ何篇熟談も不相調筈ニ而、第一仰出通ニも不相叶到而心得違候条、以来右体申

立等を以教訓人被差免候様被申出候共、差当候支之外ハ一向ニ被取揚間敷候、尤、右之趣者教訓人共へも屹と可被申置候、

右、与頭へ可申渡候、  
安永七戌  
五月

帯刀

一 郷中分を以教訓人申付、年若之者へ夫々申教等いたし候様先達申渡置通ニ而、頃日ニ者教訓方ニ付申談等茂相濟、式夜相立講習等相催、序ニ何歟申教等も致筈候条、右都而之仕向并経書講習いたし候郷中者、講釈人名元をも可申出旨、向々教訓人へ被申渡候様与頭江可申渡候、

安永七戌  
六月

帯刀

一 組中御取締ニ付段々 仰出之趣有之、与頭中ニも一

涯氣を付取締方行届候様、先達而より申渡置通候処、到頃日与中若面々 仰出之旨を相守、漸々静謐之方ニ成立候段ニ候、畢竟取締方吟味を懸被申渡候故を

以右次第到而取扱方宜候、勿論以来之儀ハ猶以嚴重  
二最通候様可被致候、就右相談役・小与頭中二も万  
端之儀細蜜氣を付、教訓人共二も諸事丁寧教訓方出  
精いたし候段相聞得、旁心掛宜候、

右、一組より壱人ツ、召出申渡之、相談役其外へ

も右之趣を以可被申渡旨をも可申渡候、

安永七戊

閏七月

(小松清香)  
帯刀

一組中御取締向 仰出之趣有之、頃日静謐之方成立神

妙之旨先日申渡通二而、右之段ハ於江戸達 貴聞候

条、此上万一茂違変等有之候而者江戸江申上候詮茂

無之、甚恐入候次第候間、右之趣差心得、猶又以来

取締之嚴格有之候様被致首尾、与中江茂可被申渡候、

安永七戊

閏七月

帯刀

一小与頭中江茂時々差廻与方締方致候様兼而申渡候事、

一角入・前髪取御免被仰付候人数、以後見分之上宜者

者相詰候小与頭を以当分之通堅固為相守候様申渡、

不宜者者為直候而致再見候事、

一学文武芸等出精仕候者者氣を付申渡置候事、

一仰出等之儀茂小与頭中より小与頭江時々申聞候様兼  
而申渡置候事、

一角入より式拾四五才迄之人数茂間々容貌致見分候事、

一神事其外何そ二付多人数相集候節者小与頭為締方差

遣、不時二多人数相集候刻者其節々小与頭締方申渡

差遣候事、

一鳥吹・破魔投等之儀二付而者小与中江締方兼而申渡

置候事、

一御場内者就中近辺迄も徒二致徘徊自然鳥杯二相障候

者見聞仕候ハ、則申出候様申渡置候事、

一与中不行跡之者承付候ハ、早速申出候様小与頭中

江兼而申渡置候事、

一言語・容貌等之儀、是又小与中江相直候様時々致催

促候様可申渡旨兼而小組頭中へ申渡候事、

一礮御植付桜定締并二月中旬方より花之時分迄締方と

して与中より人柄見合締方申付差出候事、

一火花等有之候時分茂諸所へ小与頭締方致候様申渡差

遣候事、

一 礮辺其外諸所へ与中若面々涼として差越候付、多人  
数不相集様締方申渡置候事、

一 諸所鉄炮場へ稽古外矢先争と名付、多人数不相集様  
兼而人差を以定締申渡置候事、

一 小与頭中より与中惣見聞之次第毎月月末首尾申出置  
候事、

右之通、締方申渡置候付、此段申出候、以上、

三月四日 月番 与頭

一言語之儀ニ付而者此跡より度々被仰渡事候処、差而

其詮も無之候、右付而者折々

御沙汰之趣有之候付、御家老中ニも吃被相改候旨御

用人中致承知候付、猶又此涯吃相改候様寄々致通達

候、

安永二巳

十二月七日

村橋左膳

(村史)

佐久間九十九

一 組中之者共取締之儀ハ兼而吃と申付置事候得共、留

主中者諸人取守之心掛薄相成候哉、彼是異変之儀茂

致到来、甚以致痛心事候間、此節者一涯氣を付与頭

へ申渡、一切不締之廉無之様可取計候、若者共故言

語・容貌惣而每物致勘弁龜忽之儀共無之様ニと計一

向ニ申渡候分ニ而者取違惰弱之方ニ成行、士之風儀

却而氣節薄可相成候間、申渡等之儀も随分申談、相

当ニ手厚可遂吟味候事、

一 聖堂并諸稽古場相建置候付而者、一向稽古之者茂無

之候而者創立之趣意無ニなり、他国より之見聞も如

何ニ候間、是又氣を付学文武芸等致出精候様申付、

留主中両三度茂家老中相下り可致見分候事、

一 鷹方之儀、掛之側用人・近習役共へ取締其外万端可

入念旨時々役々江茂申渡候様申付置候得共、鷹場内

ニ而間ニ者鳥取候者も有之候様相聞得、甚不屈之至

候条、一涯心掛堅固ニ有之候様取締可致候事、

一家老中を初諸役人・筆者・小役人迄、出勤刻限不遲

様時々氣を付可及沙汰候事、

右之通、御前へ被 召出

御直承知仕候条、仰出之趣吃と相守候様表方江

致通達、御側方・御勝手方へ者写を以可相達候、

正月

帶刀

組頭江  
六与

組中風俗等之儀二付而者、度々被

仰出趣有之候得共、組中不相直者も有之、畢竟組頭

支配之儀を存違ひ候者も有之候処より申渡候儀も不

得心之筋候故、左様無之様ニとの趣去年段々申渡有

之候ニ付而者万端逐吟味、小与頭中へも無油断様細々

被仰渡、聊疎之儀者無之筈ニ候得共、此度

御前江拙者被 召出 御直段々承知仕趣有之、別段

申渡通候条、先達而被仰出置候趣取違無之学文武芸

等致出精、口論ケ間敷儀共一切無之律儀相嗜、容貌・

言語等之儀も随分心掛、屹と其詮相立候様組頭中猶

又細蜜逐吟味、手拔無之様時々小与中江茂可被申渡

候、尤、吟味之趣被得差図候儀共者拙者方へ可被申

出候、

安永七戌  
正月廿四日

小松清香  
帶刀

六与  
与頭江

組中之儀付小与頭を以聞合等被申付候節茂諸事穩便

いたし、手広不相成様兩人計茂見合を以可被申付候、

左候而、小与頭名元拙者方へ被申出候上ニ而聞合被

申付、不致出勤節者月番方へ申出可被致首尾候、

安永七戌  
四月

帶刀

一組中之面々聞得之趣有之、与頭前より此間徘徊等被

差留候儀も有之由候得共、此節

仰出付取締方到而及吟味事候故心得ニも相成候間、

向後者右体之儀迄も頭ニ而帶刀殿方へ被申出申渡候

様可被致首尾候、尤、徘徊を被留候儀ハ不軽事候条、

同席中申談之上ニ而可被申出候、且又組中之儀ニ付

小組頭を以聞合被申付候節者諸事穩便いたし、手

広不相成様兩人計茂見合を以可被申付候、左候而、

小与頭名元帶刀殿方江被申出候上ニ而聞合被申付、

出勤無之節者月番方へ申出可被致首尾旨先達而申渡

有之候得共、向後此已前之通相心得、大形無之様可

被致首尾旨与頭へ可申渡候、

安永七戌  
三月

島津久健  
仲

一 風俗等相直候様度々 仰渡之趣有之、与中年若之者

共為可致得心教訓人申付、不合点之者ハ幾度も申教

等いたし候様との趣申渡、夫々郷中分を以教訓人被

申付置、其涯者都而折々出会申教等も為致候得共、

頃日其儀茂相止候趣ニ相間得候、畢竟年若之者者事

之弁薄、適難有 思召之程通兼候儀茂有之候故を以

前件申渡も為有之事候処、到当分緩せ之趣ニ而者甚

不可然候、此節取締方分而 仰渡之趣有之候ニ付而

者、風俗等猶以宜成立万端行届候様無之候而者旁以

如何之至候条、已来者其涯之様教訓人受持之於郷中

式夜等相立、年若之者共相集仰出等之旨趣取違無之

様心得為仕、其外何篇存付之儀ハ無遠慮申教候儀共

諸事無手拔様可被致吟味候、右ニ付何ぞ集会之当ニ

相成候儀無之候而者、若輩者共二者却而及退届儀も

可有之候間、軍書又ハ耳近キ經書之講習等相催、其

席何歟と申間候ハ、教訓之意味も能相達候様可成立

哉、教訓人共へも被遂吟味、何分申談之趣可被申出

候、

右之通、組頭へ可申渡候、

安永七戌  
三月

帶刀

口達之覚

一間別等敷儀共有之、座敷内取拵入置候面々、間二者

不締之儀も有之、其通ニ而者以来何様之儀歟致到来

候茂難計、別而大形之筋ニ候間、此節小与頭差遣、

夫々締為致見分何分可被申出旨与頭江申渡、外城・

私領之儀、右ニ準首尾可被申出旨地頭・領主江可申

渡候、

右之通、安永七戌七月廿一日帶刀殿より高橋縫殿

御取次を以諏訪舍人致承知候事、

一 何そニ付屹と 仰出之趣組中へ申渡有之、其涯者都

而嚴重有之候得共、程過候得ハ取守薄方ニ候処より

右次第之儀も可有之哉、依之已来右体仰出之趣者組

頭宅へ人別召出申渡之、猶又於小与頭宅小与中之面々

江為写取、若年之者共江者親又ハ身近キ親類共より

繁々読聞之、 仰出之趣何篇取違無之様可心掛旨申

渡候ハ、 仰出之趣嚴密ニ下江相通り、諸人取守

りも一涯心掛候様相成筈候条、向後其通可被致首尾

候、尤、此節 仰出之儀も右之趣を以首尾可有之候、

安永七戌  
二月

(小松清者)  
帯刀

### 口達之覚

一此度仰出ニ付組中取締等之儀、先達而より段々申渡趣有之候処、申渡之趣意通兼候儀も有之候、右ニ付而者平日御用向取扱之次第組頭中申談等ニも不及被致首尾候振合ニ者無之候哉、其通ニ而者不宜候、仰出等之旨趣下江通兼候趣ニ付而者度々

御沙汰も有之候付、一涯厳重行届候様無之候而者其詮も無之事候処、前件之趣ニ而者手広組中之儀猶以届兼候儀者案中ニ候、向後ハ組頭中申談、仰出又者申渡之趣意頭ニ而得と判断いたし、治定難致儀者幾度も得差図申渡等有之候様可被致首尾候、其上ニ而各受持之組下江取締等之申渡様ハ何分茂見込次第可有之儀ニ候、就中しらへ方等之儀者熟談も無之候而者吟味筋不行届積ニ候条、右之趣共猶又取違無之様可被相心得候、

一言語之儀、先達而被 仰出趣有之候ニ付而者、其涯

人々心掛候様有之候処、到頃日其儀薄相成候由於江戸 御沙汰之趣承知仕候、畢竟我々大形之所より

末々迄も不行届迷惑至極恐人事候、依之此已後正道ニ相守、平日之交ニも御国ニことハ相用候者有之候ハ、

互ニ相咎目、一涯屹相改候様可致候、此上又々 御沙汰有之候而者到其節御断之申上様無之候条、人々堅可相守候、

右之通、表方致通達、御側方・御勝手方江者写を

以可相達候、

安永二巳  
正月

(樺山久智)  
左京

(喜入久福)  
主馬

(島津久雄)  
仲

一容貌相直候様との儀、度々被 仰出人々専心掛可相直之処、如何心得違候哉、与中若面々其詮不相見得者茂有之、与頭よりも兼而被申聞事候得共、其弁も無之、甚以不可然、屹詮相見得候様無之候而不叶事候条、猶又与頭中時々見分之上幾度も被申聞、乍其

上不相用者者遂吟味被申出候ハ、屹可及沙汰旨、主馬殿より承達候趣も有之候、右通今以容貌等不相直者も有之、別而如何之事候間、一涯容貌相改、其詮相見得候様与、中江可被申渡候、

安永二巳  
九月

（伊勢貞矩）  
兵部

一去年御発駕前江戸 御留主中之儀者時々之風儀も難被 聞召候間、兼而之風俗嚴重相守、無益之儀不取企毎年相慎候様被 仰出置候処、稀二者何角付飲食を企候間得も有之、今度 御出府之上及 御沙汰甚以不屈候、屹糺方之上御呵も可有之候得共、是迄者被加 御憐愍可被遊 御宥恕との御事偏難有思召候、就中当詰之儀者 御留主詰より相続、殊到而嚴重御俚約二付而者少年迺も費之儀無之、日々之身持一涯相嗜御奉公相弁候様可、心掛候、御家老を初御用人・御近習役之儀者人々軌範相成事候間、専守其旨相嗜候ハ、おのつから風俗相直積候条、心得を以可申渡旨被 仰出候、

右之通被 仰出候付、当詰之面々江申渡有之段申

来候、今度嚴重御俚約二付御趣法被相替、御身辺御朝夕迄一切御物数寄不被遊、御在合を以可被相済との趣先達而被 仰出、

御手自至而 御辛苦被遊候上者、当

御留主中之儀何れも其弁可有之事候得共、無故参会等者勿論、少年迺も費之儀不致咎候得共、猶又致勸弁専御為筋宜様二人々心掛、万事可相慎候、此上万一緩せ之儀共有之候而者御断之申上様も無之候条、随分可相守候、

右之通、表方へ致通達、御側方・御勝手方江者

写を以可相達候、

安永五申  
八月

（島津金金）  
左中

（喜入久福）  
主馬  
（小松重春）  
帯刀

一言語・容貌之儀付而者、先年以来段々被

仰出毎度申渡通二而、当四月茂猶又申渡置候、右二付而者言語・容貌共頃日少々者相直候方相聞得候得共、端々至末々間二者不相直者も有之由甚以不可然

候、仰出之趣聊忘却者不致筈候得共、畢竟心掛薄

所より直兼候、右二付而者度々及御沙汰事候条、

屹と相改候様互二申合可相心得候、且容貌付而者行

跡專之儀候条、(衣カ) 圍服之善惡二よらす夫々分限二応し

綿服・籠服たりとも行跡見苦敷無之様随分可相心掛

候、若者共徒二夜行・辻立等致間敷旨従前々稠敷被

仰渡、猶又近年分而被、仰出趣有之、頃日は又相直

方二候得共、于今端々二而者徒二致徘徊者も間二者

有之由、右体之儀者親兄弟并親類共より得と可致教

訓之処無其儀、且又小与頭・目付役候者も緩せ之様

相見得甚以不可然候、為役目一度被、仰出又者申渡

候儀を暫不及沙汰候得ハ、夫成之様心得違者有之間

敷儀二候、此節より涯立一等風俗正敷相直候様支配

頭并被懸置候役々申談、時々氣を付誰人之上たりと

も不差置申聞、其上不相用輩於有之(者脱カ)無用捨可申出候、

此旨屹と可申渡候、

右之通不洩様可致通達候、

右二付而者支配有之面々就中氣を付、支配下江者

聞旨分而申渡候、

(島津久能)  
左中

(喜入久福)  
主馬

(小松傳香)  
帶刀

(山岡久澄)  
市正

(島津久能)  
仲

一 与中若面々、頃日異様之為体二而辻立又者徒之徘徊

等いたし、或者頭取歌為聞多人數相集候段相聞得候

旨、縮之儀別立而申渡通候条、先達而申渡置候通、

猶又小与頭・教訓人共時々被差廻、自然右体之者も

候ハ、不差置申聞、若不相用者於有之者可申出候、

尤、頭取諷為聞女子共相集候茂有之由相聞得、猶以

如何之至候条、右式之者も候ハ、引取候様可申聞旨

可被申渡候、

(安永八亥)  
五月

帶刀

一 去年色々無筋風説申触候聞得有之不詮立儀二者候得

共、御政道を妨風俗を乱候端二も相成候、御領

国之儀数代

御厚恩之者候得ハ平日大切奉存、仮初二も右体之儀曾而無之筈候処、却而誹謗ケ間敷申触候儀、畢竟其者之心底不忠ト申外無之不屈付、遂詮儀相知候ハ、不被加 御不便切腹又者死罪可被仰付候条、於其節後悔致間敷旨其砌被仰渡置、当 御兎駕前申渡趣有之候付、右体之儀者一切無之筈候得共、猶又此節於江戸 御沙汰之趣有之候段申来候、程過候得共自然末々之者迄も取違候而者別而如何候条、随分可相慎候、此已後万一右体之者も候ハ、其身ハ勿論、親類迄も迷惑可相成候条、此旨承知仕、末々之者共迄も時々可申聞候、

安永五申  
八月

左中

主馬

帶刀

一無益之参会等者勿論、少事逆茂費之儀無之御奉公方専心掛候様先達而細々被仰渡置候、頃日間々参会等相催、諸稽古方其外何ぞ付多人数不相催候而も相濟

候節茂相集候儀有之由不可然候、且又遠乘致候節茂

多人数相催、尤、弓・鉄炮賭勝負、又者与中若面々多人数列立物詣等も不致筈候得共、猶以取違無之様可相慎候、何れ多人数相集候処より何そ二付無故儀も致到来候条、人々心掛右体之儀無之様可相守候、

右之通、先達而被仰出申渡置候得共、猶以取違無

之様可相守旨不洩様可致通達候、

正月

安永七戌

小松清香

帶刀

山岡久澄

市正

島津久健

仲

赤松則正

造酒

一無筋風説等色々申触候儀付

仰出之趣有之、先年已来度々申渡通二而忘却者不致筈候得共、程過候得者自然取違、右式之儀共申触候而者甚不可然、其身者勿論、親類迄茂去ル申年申渡候通至而及迷惑候条、猶以右之旨を相守、無故浮説等一切不申触様人々堅可相慎候、尤、末々之者共へ者支配頭・主人より時々敷敷可申付候、此旨与中・

支配中・諸外城・私領江不洩可申渡候、

安永八亥

四月

(小松清香)

帶刀

(島津久健)

仲

(二階堂行且)

主計

一頃日間二者年若之者共多人數立夜行・辻立又者辻歌を謡、月代・行跡等異様之者茂相見得、其上礫等を打候聞得之趣有之候、右二付而者先年已来段々被仰出候趣有之、組中之面々專其旨を相守、聊以忘却不致咎候間、右仕形全士之業と者不相見候、足輕又者家来以下之者共士二相紛候仕形茂有之由、以前二者士之内右体之儀為有之事候得者、当分輕キ者共取違右式之儀茂可有之哉、右二付而茂去年申渡之趣有之候処甚以不届二候、以来若士二相紛不宜仕形之者茂有之慥二見届候ハ、名前承届早速可申出候、左候ハ、屹申付様可有之候、右通輕者共士二相紛候所より諸士蒙疑候而者到而致迷惑咎候条、人々一涯其旨を相含、就中嗜文武士道遂穿鑿、專 仰出之旨を相守、仮二茂右体之儀無之朋輩中以礼讓相交風俗茂

宜士之差別屹と相立、往々御用立御奉公相勤候様可心掛候、徒之致徘徊候所より不図争論到来、依事ハ及刃傷候儀も有之、第一奉背 思召、親兄弟江茂掛難儀、其身も依仕形者士をも被召離旁以其罪不少候、此節 御留主中取締之儀蒙 仰候、畢竟御譜代之諸士不益之儀より事起、家名等及破滅候儀不便被 思召上、兼而被煩 御心候段莫大之御恩難奉謝候処、万一年若之面々右之御趣意無弁其詮無之候而者別而如何二候条、親兄弟共二も難有奉承知、聊以無緩疎様嚴敷可申教之、此上仰出之旨を不相守法外之儀も有之候ハ、誠御仕置之妨二相成不忠之筋候間、不被加御憐愍屹と御咎目可被仰付候、尤、親兄弟共二も依訳者迷惑可相成候条、是又可申聞置候、且足輕以下前件不届之仕形等曾而不仕様、支配下家来共へも嚴敷可申付候、

右之通、組中之面々者与頭宅へ人別召出申渡之、

支配頭・主人江も不洩様可申渡候、

安永九子

六月

(島津久健)

大進

一 組頭（江脱カ）

与中風俗等之儀二付而者近年分而段々被

仰出趣有之、其後猶又每度申渡通候処、頃日間々徒

夜行致辻立、又者物詣・船遊等多人数相催歌杯謡候

儀も有之由相聞得、畢竟右体之所より口論之基二も

成立、第一仰出之趣忘却仕候筋二而甚以不可然、親

兄弟共申付様大形故右次第候条、一切右式之儀無之、

專学文武芸諸稽古心懸万端律儀相嗜候様、年若キ者

共并親兄弟・親類共へ小与頭又者被係置候面々より

得と可申聞候、乍其上不相用者於有之而者可申出旨

可被申渡候、

右之趣屹と被申渡、被係置候面々之儀ハ一涯心掛

罷居、以來猶又緩せ無之様可被申渡旨可申渡候、

天明二年  
二月

主計

一 足輕共風儀不宜、頃日涼杯と相見得若者共方々江相

集、且惣体士二紛敷振合之儀共有之段相聞得不届之

至候、畢竟右体之儀共有之候処より口論等之端二も

相成候条、一切右式之儀無之様厳敷可申付候、自然

取違此已後右体之儀も候ハ、屹と可及御沙汰候条、  
此旨申渡候様物頭へ可申渡候、

但、支配下有之面々江者右之趣を以支配下之者共

へ兼而相慎候様可申聞旨可申渡候、

安永八冬  
六月 （小松道香）  
帯刀

一 茶せん髪いたし候後家多相見得候得共、茶筌髪之儀

ハ到而重キ事二而、公辺向官位有之人後室外難相

成御格式二候、右体之儀不存所より只今迄ハ致来候

得共、以來者御女子方并御一門家之後室迄茶せん髪

被致候儀者格別二候、其外一節無用申付候間、二折

へし折勝手次第致候様被仰付候旨江戸より申来候、

此段表方へ致通達、御側方・御勝手方へ者写を以可

相達候、

安永西末  
四月

仲

一 士并足輕・町家之者相調候者ハ羽織致着用、尤、羽

織不致儀も可有之候得共、先專相用候様可致候、町

家之儀者先達而申渡有之候得共、未致着用者多有之

由候、袴迄二而者見苦敷候間、袴致着候節も不致着節茂羽織相用、袴致着候節者分而羽織可相用候、四季共致着候様被仰付候、

右之通不洩様可致通達候、

六月

(島津久金)  
左中

右之通被仰渡候間、不洩様可被申渡候、左候而、家来其外二も羽織持合候而可致着程之者ハ、四季共ニ致着用候様被仰付候、此段致通達候、

安永二巳

六月六日

小松相馬

一士并足輕・町家之者、羽織專相用候様可致旨去巳年被仰渡置趣も有之候処、到頃日間二者羽織着不致も有之候、右通 思召を以為被仰出置事候間、可成程羽織可致着候、中二も御留主之儀候得者万一緩せ之儀被 聞召上候而ハ如何之至候間、猶又右之趣寄々可申渡旨左中殿より被仰渡候間致通達候、

但、支配有之面々者支配中へも可被申渡候、

安永三年

四月廿八日

(実興)  
菱刈孫兵衛

一頃日諸所へ不謂致落書等由相聞得候、江戸表之儀ハ群集之場所故尊貴之批判致落書も有之由候得共、御領国之儀ハ下々迄も御譜代筋之者共二而、專御上を大切奉存筈候得共、姓名を隠し不埒成落書等者仕間敷候処、其弁も無之別而不届之至候、此已後作名等二而路道ニ捨置候者有之候ハ、御詮儀之上屹と其咎可被仰付候、此旨組中・支配中・諸外城・私領江不洩様可申渡候、

安永二巳

七月

左中

一御城下武士・町方男女共ニ容貌・言語之儀ニ付而者段々 御沙汰之趣毎度被 仰渡事候得共、御城下武士・町共ニ未相直者も有之、就中女并諸外城之儀ハ猶以不相直由候間、急度相改候様稠敷可申渡候、且又女之髪之上つくりと申ニ結ひ候者過半有之候、右つくりハ一切無用被仰付候間、御城下武士・町方之女者勿論、諸外城迄も髪之風上方又ハ他国杯之風ニ相改、百姓之女者他国百姓之風俗ニ結ひ候様可致候、男之儀も未髪方不相直筋相見得候間、猶又改候

様可致候、

一御城下武士・町并諸外城女、当分相用候帯幅せまく見苦敷候間、老共ニ相応ニ相見得候幅広之帯用候様可致候、則より幅広之帯用候儀不相調者茂可有之候間、右通之者ハ漸々右之心得を以幅広之帯ニ改候様可致候、

右之通、何々略、

安永二巳六月

左中

一先年瘡瘡踊と名付異様之致支度、太鼓・三味線ニ而小路を致往来堂宮諸所へ踊候付而差留置候趣有之候付、右体之儀ハ無之筈候得共、自然取違候者も有之候而者如何之事候条、猶又右通之儀無之様可被申渡候、

一同心・御中間・御小者其外家来・下人・町人・寺門前者共、辻歌を謡且御役人并諸士江对籠礼仕間敷との趣者先年以来段々申渡有之事候処、頃日緩せ相成、辻歌又者籠礼之者茂有之由相聞得甚不届候条、一切右式不埒之儀無之屹と相慎、御役人者勿論其外夫々

之格式ニ応懃ニ可致式礼候、此旨違背之者於有之者可為曲事候条、兼而役々氣を付可申出候、

右之趣、支配頭・主人より一涯敷敷可申付候、組

中・支配中へ不洩様可申渡候、

天明二寅

二月

喜入久倫

主馬

二階堂行且

主計

一天明三卯年十月言語・容貌可相直旨被仰出候、

一右、同年同月就中言語之儀公私共相守相用候様被仰

渡、

一御領國中御役々高下尊卑之差別不明白、与中之若者共夜行・辻立徒徘徊ニ而喧嘩口論等ニ及候儀共古来より之風俗甚以不可然候付、先年已来 思召を以段々被仰渡趣有之候得共、到今立直廉無之、右体之儀被仰渡候節申渡候迄ニ而程過候得者、奉行・頭人を初其心掛無之、夫限ニ而差置候処より畢竟緩せ成立、既二元之風俗ニ打返候、表向ニ而被 仰出候趣其詮不相立候付、屹及 御沙汰候ハ、迷惑仕候者も可有之候付、最早表向ニ而ハ不被 仰出、誠厚

思召を以段々被遊 御工夫 思召之程旁私江被仰付候二付、御意之趣を請御役々江委敷相伝、従是是

非 思召通ニ漸々風俗立直候様被 思召上候、此上

者御役々随分致出精、五年拾年之間下知相加候ハ、兎角立可申と之思召ニ而候、書面迄ニ而何れ通兼候故、思召之儀共万事詳ニ相通候様私へ請込被 仰

付候間、取締之旨趣連々書付相伺候様、且見聞之儀

共善悪共 御沙汰可申上旨 御直ニ蒙

御意候、右ニ付来 御參勤御供御免被

仰付、御用程大概相片付候ハ、相伺候上

御跡より出府仕候様被 仰付候間、近々彼是向々江

御掛合可申儀可有之候、以上、

天明三卯  
十一月五日

右之通、卯十一月五日於梅之間毛利覚右衛門より

与頭島津小平太・御番頭北郷権五郎江相達候事、

一 与頭江

教訓之儀ハ、組中年若之面々 仰出等之旨趣委敷得  
心不仕者も可有之儀ニ候故、小組中より時々申渡候

儀二者候得共、猶又万端不取違様申教等仕候様ニと

厚 思召を以為被仰付置儀ニ而、右勤向等ニ付而者

委曲申渡通候条、小与頭中江随分致熟談、諸事叮嚀

ニ可令教訓候、夫故小組頭之内ニも教訓方兼務置事候、勿論兼務無之小与頭連も何篇存寄候儀者無用捨

教訓人江可申達候、

右之通、小与頭・教訓人へ可被申渡旨可申渡候、

安永七戊  
六月 (小松重春)  
帶刀

一 口達之覚

組中之儀付而者先年以来段々被

仰出趣も有之、諸事專相守氣を付組中へ差図茂可有

之処、不行届筋相聞得候付先年組頭中被 召出、

御直ニ御呵も有之候処、其後程過候得者兎角届兼候

趣も有之候由相聞得、甚不可然候、右ニ付而者又々

御呵茂可有之御模様ニも候間、随分与頭中に懸心頭

諸事被

仰出置候通組中相守緩せ無之様申談涯立可被心掛候、  
此旨分而与頭中江可申渡候、

安永六酉  
七月

（島津久金）  
左中

（喜入久福）  
主馬

（小松清香）  
帶刀

（山岡久澄）  
市正

（島津久健）  
仲

与頭江

一組中御取締之儀付而者近年分而被

仰出趣有之、其後段々申渡置候通候処、若面々仰渡

之旨を相守、頃日静謐之方成立神妙之至候、已来猶

以緩疎無之最通候様万事相嗜、学文武芸諸稽古方折

角心掛、教訓人共申聞候儀をも無疎略可相用、尤、

親兄弟共よりも取違無之様可申聞候、

右之趣、小与頭宅江若面々并親兄弟共人別召呼申

聞候様可被申渡候旨可申渡候、

天明二寅  
七月

（二階堂行具）  
主計

一  
与頭江

組中御取締之儀、分而被

仰出趣有之、其後段々申渡通候所、若面々仰渡之旨

を相守、頃日静謐之方成立違変等も無之一段候、畢

竟吟味行届被申渡候故右次第取扱宜候、右付小与頭

中・教訓人共二も折角教訓方出精之趣相聞得心掛宜

候条、以来猶以嚴重最通候様取締可有之候、

右之通申渡、小組中教訓人共へ右之趣を以可被申

渡旨をも可申渡候、

天明二寅  
七月

主計

写

御領國中風俗之儀二付而者

（吉世） 浄国院様御代より被 仰出置候趣も有之、至御当代

猶又委被 仰出、就中先年与頭中江御直二 御意之

趣有之、其涯人々心掛申渡茂相届候様有之候処、頃

日喧嘩又者夜行・辻立等之儀茂已前二可相返筋相見

得候、畢竟頭一通申渡候迄二而者届兼候条、日夜心

を尽し每度申教候ハ、万端可相直事二候、容貌之儀

二付而者惣而新敷結構成を相用候様二との儀二而者

無之候、龜服二而も分限相応いたし、言語茂御国風

之なまり候言葉を直候ハ、九州一統之言葉二者可相成事候、右様之

思召被為在御事候処、却而御物数寄之様存違之者も有之候而者不可然候、他所之者見聞も宜敷様二と被思召上、且者御外聞二も相懸事候間、得と奉汲得、毎々不及 御沙汰様可相守候、且又尊卑差別之儀、

何れ頭役より相分り末々ニ流候様無之候而不叶事候、下役之者へ者懇意ニさへ申候得者宜とのミ厭過候、而者、却心安馴染役職も薄、夫故申渡事も仮初迄ニ相成振合ニ候、参会之節上下をも致着候様有之候ハ、屹と相見得威光も有之、支配上下之差別も相立筈候、乍然役職之威光を以毎事之取計無理ニ有之候而ハ甚不宜候間、屹と役職之相立候様可有之候、去年

御下国之節、御道中筋從

公義御声を被懸於他所茂甚奉敬事ニ候、御領国之面々者右様無之候、而もおのつから恭敬可仕儀候処、其弁も差而無之、右式之儀兼而申渡も届兼候所より或奉参会候節もうろたへ、御辞儀申上候儀も只一通り致蹲踞候迄ニ而、右式他所之振合を以 御威光ニも相

掛事候間、一涯不奉敬候而不叶事候処、下々ニ而者余り重過候御取立、又者何事茂律頗成儀を被遊御好候様抔取違候而者別而如何ニ候、当分之時勢も有之專御仕置ニも相掛儀故、其儘ニ而難被捨置被為煩御心思御事候、兎角右通之儀日夜致心配候ハ、自然と立直筈候、是迄 仰出等之御旨趣御役々へも全体之存慮大形故末々迄通兼

御氣之毒被 思召上候、右之趣、能々奉汲得無間斷申教等いたし、何れにも思召通ニ立直最通候様可致候、

右者、此節風俗之儀ニ付而分而奉承知趣有之、右通申渡候条難有奉承知、屹相守候様御役人中并御家老与へも申渡、支配下家来末々迄も毎々委申聞、其詮相立候様諸外城江茂可申渡候、尤、与頭中へ

者別段申渡置候、

天明四辰

正月

(島津久健)

大進

仲

写

御領國中風俗之儀、先年以來被

仰出置趣有之、容貌・言語等之儀も段々分而被

仰出置、就中於江戸者為限人数ニ而專容貌・言語等

者心頭ニ掛相直、他所之見聞宜敷様可心掛之處、左

様之詮不相立様被 思召上、兎角書面ニ而者届兼候

付、御小納戸之内又者御供御目付之内をも被掛置、

風俗・言語等之儀見聞次第不差置存寄候儀可申達旨

被仰付、其趣意取違無之早速相改最通候様申渡、御

家老中江茂被 仰出候趣有之、頭人・主人よりも稠

敷申渡、尤、諸向ニ而夫々受込之人数相分、其内よ

り毎月善悪之首尾右掛之御小納戸・御供御目付江首

尾申出候様被仰付候段申来候、於御当地も先達而御

役々之内へ掛被仰付置候付、右面々前件之次第を以

猶又何篇心掛、見聞次第不差置夫々可申聞候、尤、

於爰許も右之振合を以存寄候儀者致吟味可申出候、

右之通、御取締方掛被仰付候面々江可申渡候、

九月

近江

主計

一ギヤル 一ゴロリト 一ヒヤツト 一ヲヂヤリ

一シヤモナイ 一ハラカク 一サツクヲウ 一セ、コウ

一ガル 一ケンニヨモナイ 一スツヘリ

右、於江戸申渡有之候、

言葉之留り

一申ス申サス

口達之覚

容貌・言語等之儀、先年以來段々被仰渡趣諸御役所

頭人之内御取締掛をも為被仰付置事候、然処此節於

江戸掛役々より得御差図、別紙之通文字ニも不相当

なまり言葉之申癖不相用様向々申達有之由候間、

於此表も猶又他国ニ品相替通し兼候言葉相除キ、殊

ニ対談等申述候詞之末ニ申ス申サヌ之言癖より、品

悪敷言葉もおのつから申続候間、言葉之終り又者言

葉統之内ニも同様之意味ニ相用候所ハ、右申ス申サ

ヌ之言葉一切不相用様可被致候、尤、別紙書載候詞

ニ準シ候御国なまり之言葉数多候故、向々ニ而吟味

有之被相用間敷候、且又入魂相交候得者互ニ下輩之

詞を以致対談等儀間々有之、風俗不宜候間、右様之

儀無之様可被相心得候、言語之儀今以間二者守薄、

一統立直候趣二不相見候故、専於江戸申出候旨趣相

込メ御家老衆江得御差図候趣有之候処、我々より此

旨相達候様被仰渡候付申達候、勿論御役所向風俗等

之儀茂仰渡之趣を以同席中被申談、其外書役支配下

江も猶又時々可被相達候、

天明六年

御取締掛

二月

御目付

写

御領國中御取締之儀分而

御沙汰之趣有之、猶又此節於江戸茂段々

御直ニ奉承知候趣有之候、右一件ニ付而ハ先達而委

ク申渡有之、人々相心掛筈候得共、弥以無油断相守

り、風俗等ニ至り立直容貌・言語之儀ども最通屹其

詮相見得候様、猶万端可心掛候、

右之通不洩様致通達、掛御役々江も可申渡候、

三月

主計

写

御国元并江戸御屋敷内無益ニ打寄候儀有之間敷と之

儀者度々被

仰出事候得共、何れにも一統立直兼候、就中相応御

役をも相勤候身分并家柄之面々者猶以其通可相慎事

候、其上全体之風儀心安者同士ハ礼儀之品薄有之所

より自然と等級之詮難相分、無差別様ニ相見得不可

然事ニ被 思召上候、殊二年若之者者往々御役をも

可相勤事ニ候得者、第一行儀正敷風儀能相直立候様

父兄等専心掛、向後無用之外行屹可差留候、

一差立候御役人坏之内ニも嘶ふりなと等不図立寄候儀

共有之由、左様之儀八年輩と申対御役候ニ而も有之

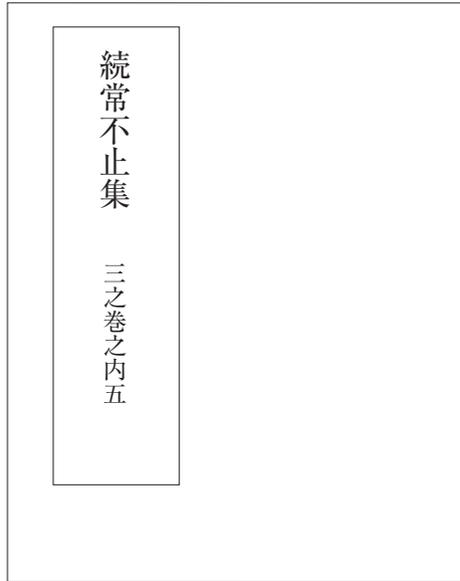
間敷儀ニ而、其父兄等ニも相懸候旨御沙汰ニ候、

天明五年

六月

(島津久金)  
伊賀

（表紙）



続常不止集 三之卷

辰

仰出留

続常不止集 三之卷辰

弘化三年丙午十一月写

明和六丑正月より寛政三亥十二月迄

仰渡之写

目錄

一弓・鉄炮賭勝負之事

一諸法度之事

一公義仰渡之事

一御用迦之品申請被仰付候儀并売買方賃銭定之事

付、諸色直段定并旅人出入之事

一御儉約并凶年ニ付被仰渡候事  
（以下四行、本文なし）

付、重出米・出銀之儀共衣服之儀ニ付被仰渡候事

一御巡見并地頭初入部且町奉行巡見等之儀ニ付被仰渡候

事

弓・鉄炮賭勝負之事

一弓・鉄炮稽古ニ賭勝負を企候儀共有之由被

聞召上、甚以如何之儀ニ候、右通ニ而者稽古之本意

ヲ背、自然と風俗茂不宜方ニ成行不可然事候条、向  
後賭勝負無用ニ可仕候、勿論稽古方專相心掛致出精、  
実儀を不取失様被 思召上候、

右之通、御家老・若御年寄・大御目付被召出、

御賢慮を以 御直難有為被

仰出御事候間、謹而奉承知、屹相守弓・鉄炮賭勝負  
一切不仕、於稽古方者無油断可致出精候、其外右式  
之儀無之様かたく可相嗜候、此旨支配中・諸外城・  
私領・末々迄も奉承知候様、地頭・領主・支配頭へ  
如例可申渡候、

明和六丑  
十月

(島津久金)

左中

(榊山久智)

左右京

(川田国福)

伊織

一去ル丑年被 仰出趣有之、弓・鉄炮賭勝負仕間敷候、  
其外右式之儀一切不仕様堅相守、稽古之儀者專致出  
精、実儀を不取失候様可心懸旨被仰渡置候、程過候  
得ハ取違候者有之候而ハ不可然候条、此節又々被仰  
渡候間、此旨を相守、自今賭勝負一切不仕、稽古之

儀無油断致出精候様、与中・支配中・諸外城・私領  
へ可被申渡候、

右可申渡候、

安永三年午

九月

(伊勢貞矩)

兵部

一弓・鉄炮稽古賭勝負を企候儀付、去ル丑年被

仰出候趣有之、其段委曲申渡置候処、連々緩せ之方  
相聞得、矢先争など、唱、頃日多人数相催候儀有之  
由候、厚 思召を以被 仰出置候付而者堅可相守候  
処、無其儀別而如何之至候条、向後右体之儀曾而致  
間敷候、乍此上心得違之者有之候ハ、屹と可及沙汰  
候、尤、稽古二付而者無油断可出精候、

右之通、表方へ致通達、御側方・御勝手方へ者写  
を以可相達候、

但、外城之儀ハ地頭・領主・月番御用人より可

申渡候、

安永六年酉

四月

(島津久金)

左中

(小松清春)

帯刀

一弓・鉄炮稽古ニ賭勝負を企候儀共有之候由被

聞召上、甚以如何之儀候、右通ニ而者稽古之本意ヲ

背、自然と風俗も不宜方成行不可然事候条、向後賭

勝負無用可仕候、勿論稽古方之儀者専相心掛致出精、

実儀を不取失様被

思召上候旨、去ル丑年被 仰出候付、不依何事右式

之儀堅可相嗜旨申渡置候処、頃日賭勝負を企候者有

之段相聞得不可然候条、右趣屹と相守、稽古方者無

油断可致出精候、

安永五申

四月

小松清香

帶刀

山岡久澄

市正

一弓・鉄炮稽古ニ賭勝負を企候儀ニ付先年

仰出之趣有之、委曲申渡置候得共連々緩せ之方相成、

矢先争など、唱多人数相催候儀有之由候ニ付、去ル

酉年猶又申渡趣有之候処、到頃日鉄炮場江多人数相

集、夜中迄相掛候儀も有之、且風除土手に登り或者

猥ニ踏通、其上無作法之為体ニ而見物等致候者有之

由相聞得候、稽古之儀候得者、右式之儀者無之筈候

処如何之至候条、向後小与頭并射場締之者共時々差

廻、右通猥ケ間敷儀も候ハ、不差置申聞、万一不相

用者於有之者可申出旨申渡置候間、以来右体之儀共

一切無之様堅可相守候、勿論稽古方ニ付而ハ猶以無

油断一涯致出精、無作法之体無之様可心掛候、

安永八亥

五月

小松清香

帶刀

島津久健

仲

一頃日於鉄炮場多人数相集、郷中を分ケ、又者上下ニ

相掛矢先を争候聞得有之候、右通多人数相集処より

及口論等候儀有之候付、段々分而被仰渡趣も有之候

処、右体之儀不可然候条、一切左様成儀無之様可被

申渡候、勿論稽古方之儀ニ付而者、先達而被仰渡置

候通無油断可致出精候、是又可被申渡候、

右可申渡候、

安永六酉

四月

大御目付

一 組頭江

弓・鉄炮稽古ニ賭勝負を企候儀ニ付先年

仰出之趣有之、委曲申渡置候得共連々緩せ相成候故、

去ル酉年猶以申渡趣有之候処、頃日ニいたり鉄炮場

江多人數相集り、夜中迄相懸候儀も有之、且風除土

手ニ登り或猥踏通、其上無作法之為体ニ而見物等い

たす者も有之由相聞得候、稽古場之儀ニ候得者右式

之儀無之筈候処、甚如何之至候条、以来右体之儀共

一切無之様堅可相守旨別達而申渡通候、依之小与頭

并射場締之者共時々差廻、右式猥ケ間敷儀共有之候

ハ、不差置申聞、万一不相用者於有之者申出候様可

被申渡置旨可申渡候、

五月

帶刀

一 於鉄炮場頃日十箇争杯と申候而多人數相集、勝負等

敷儀有之由相聞得不可然候、賭勝負之儀ニ付而者先

年被 仰出置、先達而も申渡置趣有之候間、稽古鉄

炮之外右式之儀一切無之様堅可相守候、

右之通不洩様可致通達候、

安永八亥  
六月

(小松清香)  
帶刀

諸法度之事

一 口達覚

小路ニ而馬致稽古候者有之由、諸武芸為手練稽古所

被建置候処、猥ニ小路ニ而致稽古乗候様成立候而ハ、

適厚 思召を以稽古場被建置候詮も薄相成事候条、

假令手前之稽古ニ而無之候而も不差支節者可成程稽

古場ニ而可致乗方候、此旨人々取違無之様寄々可申

通候、

右之通、(島津久念)左中殿より御口達を以致承知候間致通達

候、

安永三年  
正月十七日

(美興)  
菱刈孫兵衛

一 辻歌停止之儀者度々申渡も有之、与中之面々者其旨

を相守候方ニ候得共、外城衆中之内御当地地江稼等

ニ罷越居候者、又ハ足輕・家来以下之者共

御城下を茂不憚、其外途中ニ而乱ケ間敷謡候者而已

有之候由甚以不届候条、向後右体之儀共一切無之様

厳敷可申付候、

一頃日途中二而貝を吹候者多々有之段相聞得、山伏共  
法式二付而ハ是迄致来之通可有之事候処、右次第往  
還をも不憚甚取違之至候、依之以来途中二而貝吹候  
儀一切停止申付候条、稽古貝速茂自宅又者人家迦二  
而吹候様可致候、

右之趣可被申渡旨寺社奉行・組頭其外支配有之面々

江茂可申渡候、

安永七亥

閏七月

帯刀

一三月節句雛飾、殊之外賑々敷取立候も有之段相聞得、  
就中町家之者共翌日台披と号、洲崎辺杯二多人数相  
催歌踊等取企候由、御時節柄甚以費筋之儀不可然候  
条、以来夫々応分限台飾迄茂祝迄輕取立候様可相心  
得候、勿論台披等二出張候儀一切停止申付候条、此  
旨向々江不洩様可申渡候、

安永八亥

二月

帯刀

一鳥吹并弩弓射候儀、木破魔・金鑰等抛候儀二付而者、  
以前より段々稠敷被仰渡置趣有之候処、比日弩弓・

鳥吹持行、又者金鑰抛候者有之由相聞得不可然候間、  
右体之儀一切不致様屹と被申渡、右二付而者見当次  
第稠敷差留、不聞得者ハ名前承届申出候様、此節分  
而横目へも申渡候間、此旨可被申渡置候、

安永四

閏十二月

主計（隠業行目）

一死牛馬犬猫海川江不相捨、土中二埋候様二先年申渡  
有之候処、頃日海川江捨候も有之候由相聞得候条、  
右体之儀一切不致、土中江ふかく埋候様与中・支配  
中江申渡、内場・海辺・川筋之諸所へも不洩様可申  
渡候、

安永八亥

九月

主馬（喜久福）

一御下屋敷屏并聖堂方諸役座外廻石垣二白土を以引目  
相付候儀多々有之、折節其沙汰申渡事候得共、幼輩  
之下人類仕形と相見得、右体之儀不相止不可然候条、  
向後徒成儀共不致様与中・支配中江稠敷可被申渡候、

天明二寅

十月

左源太（名越相馬）

一 多人數相集相撲取候儀ニ付而者、先年以來申渡趣有之候処、頃日諸所へ集相撲企候儀相聞得、畢竟多人數相集候所より口論之基ニも成立甚不可然候条、向後右体之儀曾而無之様稠敷申渡、此上不相用者有之候ハ、兼而役々氣を付可申出候、

天明二寅  
二月

(喜入久福)  
主馬

一 礮天神辺より祇園迄之間江有之候散石、頃日致聊爾者有之由相聞得不可然候条、右体聊爾無之様支配頭・主人より屹と可被申付候、右ニ付而者与頭・町奉行より締方可被申渡置候、

天明二寅  
八月

(二階堂行旦)  
主計

一 近名又者外城より馬を牽鹿兒島へ差越候節者、脇差差候格式之者たりといふとも都而無刀ニ而可差越候、常式脇差不差者者勿論之事候旨、先年申渡置趣有之候処、頃日馬牽候者脇差を差、或者通路之考も無之繋置往還之妨ニ相成、或者致大酒法外之体ニ而致徘徊不可然候、就中末々之者身分不相応之脇差をさし

候者茂有之由相聞得不屈候、向後右体之儀無之様屹

可申渡候、

明和七寅  
五月

(小松清香)  
帶刀  
(川田國福)  
伊織

一 護摩所内より岩崎之方へ忍通候者も有之段相聞得、甚以不形之仕形、畢竟長日番之大形之至候条、向後右体之儀共一切無之様、就中召仕之者共へ嚴敷申付置、万一外々より忍通候者も候ハ、早々名元申出候様可被申渡置旨大乘院へ申渡、岩崎居住之面々江も猶又氣を付候様可申渡候、

安永七戌  
四月

帶刀

一 湯治へ差越候人、鉄炮持越候儀御停止被仰渡置候処、頃日間二者鉄炮持越駈等致候聞得も有之候、湯治之儀者為養生方差越事候得者、右式之儀不致咎候処別而不宜事ニ候、此已後自然右体之者も於有之者可及

沙汰候、

安永三年  
正月

(島津久健)  
仲

一 鷄合之儀者前々より御禁止之事候処、頃日若キ面々

專右体之聞得有之如何ニ候、畢竟勝負より事起争論

之基ニも相成、就中劔付鷄合候儀者怪我致候儀案中

ニ而別而不可然事候条、以来右体取違之儀一切不致

様急度申渡、親・身近キ親類共より猶又稠敷可申聞

旨可申渡候、

安永七戌

七月

帶刀

仲

一 尾畔山之上御茶屋近辺山内者勿論、境堀涯柴竹類連

茂一切不伐取様末々之者共江主人より稠敷申付、又

者支配下江不洩様可被申渡旨可申渡候、

四月

大御目付

一 町中江致中宿居候者共鏝入脇差一切不相用、都而以

前之通平町人同前相心得、長耆尺迄之合口帶候様申

渡候条、右之趣屹と相守候様、猶又支配頭・主人よ

り嚴敷可申付候、

但、町家之職不致者有来通可相心得候、

安永八亥  
六月

帶刀

口達覚

一 上者礮并韃鞮冬々頭

一 下者伊敷妙谷寺辺・水上・武・三尾崎・郡元限

右方限より人家近辺之場所へ者、明松灯又者火繩

二 火を付候而致徘徊候儀無之筈候処、下塩屋村辺

人家近辺へ明松灯シ致徘徊候者有之由相聞得火用

心不宜候、何れ下々之者共之仕方と相見得候、以

後左様之儀無之様主計殿より被仰候間、此段致通

達候、

安永四未

十月廿二日

御目付

一 兼而召列候家来・下人、髪すぼ杯を以結び、又者繩

帶などいたし粗暴成体之者不召列様可申渡候、

安永三年

正月

鳥津久金  
左中

一 近年屋久島諸木拔売等多、段々縮方をも被仰渡候得

共、今以聊爾不相止候付、以後右体聊爾之者御答

目重ク、依仕形者斬罪可被仰付候、左候而、諸木致聊爾候者を致訴人候者於有之者御褒美被仰付、縦同類二而も致訴人候ハ、御吟味之上其科を可被差免候、

明和六丑  
二月

大御目付

一御下屋敷前空地之内、致往来候者も有之候由相聞得不可然候、一切空地之内不致通路様、家来・下人共へ稠敷可申付候、

一御城内又者供屋之内杯、小用所二而無之場所江致小用候者も有之由候、猥二小用不致様可相心得候、

右之通、大御目付衆被仰候間、略ス、

明和七寅  
四月二日

御目付

一頃日ときと名付相集鉦・太鼓杯打ならし、間二者近名杯より鉦・太鼓持来者も有之由相聞得不可然候、とき之儀二付而被仰渡置趣も有之候処、右次第如何之事候条、右体之儀無之様屹可被申渡候、

明和六丑  
九月

大御目付

一鹿兒島近名究竟実成候程之櫨木、皮剥廻候故枯木相成、且近年植付候壹丈余之櫨木枝を伐、松之梢を結付置、其外苗木植付之困之柱・竹輪を取捨候も有之、右仕方若輩者共鳥取、又者末々之者共薪取等二参候節之仕業と相見得候、櫨木之儀者前々より御物入を以仕立方有之儀候処、右通之仕方不可然事候条、向後右体之儀一切無之様親兄弟共より申聞、家来末々之者へ者主人より稠敷可申付旨、与中・支配中へ不洩様可被申渡者也、

明和七寅  
十月十七日

御家老座印

一百姓共大勢子共有之候得共、(者方)出生之子を産所二而直殺候国柄茂有之段相聞得不仁之至候、以来右体之儀無之様従

公義被仰渡置候、子共出生ハ御國中繁榮之儀、鄉村之余勢相成事候、御領國中右体之儀有之間敷候得共、万一心得違候而者甚以不仁之至候条、右仰渡之趣屹と可相守候、右之通 思召を以難有被 仰出候付而者、末々二至取違之儀者曾而無之筈候得共、出生之

子を窃（拵力）二流産又者血荒等之筋二取扱候者有之候ハ、  
糺方之上屹（拵力）と其科可被仰付候条、此旨表方江致通達、  
御側方・御勝手方へ者写を以可相達候、

明和八卯  
二月

喜入久福  
主馬  
（小松清香）  
帶刀

一諸商売物之内枘目又者斤目等を以売出候品者定法も  
有之儀候得者、商人共其外量之通可売出事候処、先  
比も鹿兒島三町油屋共之内枘二聊爾之仕形有之、当  
人者勿論、町役之者迄も夫々咎目申付候、此已後自  
然右体之聞得も候ハ、糺方之上屹可及沙汰候、

明和八卯  
六月十七日

御家老印

一出生之子を産所二而直殺候国柄も有之候段相聞得、  
右体之儀無之様從 公義被仰渡、御領國中其通之儀  
者有之間敷候得共、万一心得違候而ハ不仁之至候条、  
右仰渡之趣屹可相守旨被  
仰出、自然出生之子を窃（荒脱カ）二流産・血等之筋取拵候者  
有之候ハ、糺方之上屹其科可被仰付旨、去卯年致

通達置候間、人々其心得有之筈候得共、猶又此節稠  
敷 御沙汰之趣有之候間、弥無忘却堅可相守候、此  
段表方へ致通達、御側方・御勝手方へ者写を以可相  
達候、

安永二巳  
十二月

島津久金  
左中

一御料天草へ商々之外療治等二付差越間敷旨、先達而  
外城分を以申渡置候得共、向後御領内一統商売方迎  
茂天草表へ差越候儀一切差留候、万一罷越候者有之  
候ハ、相糺、屹其咎可申付候、

安永五申  
五月

帶刀

主馬

一鹿兒島諸外城堂社之儀、樂書并繪馬はき取候儀共禁  
制之事候、就中依場所從已前  
御寄進之繪馬等も有之候付、龐末之儀一切無之筈候  
得共、此節も諸所へ繪馬 御寄進有之候間、猶又樂  
書・きす付等曾而致間敷候、若心得違之者も有之候  
ハ、屹と可及沙汰候、

安永九子  
四月

(喜入久福)  
主馬  
(小松清香)  
帶刀

一桜島其外諸所二而橙・蜜柑を以枳実枳壺取拵充弘候  
聞得有之、似菓種之儀者

公義御制禁付、前々より被仰渡趣も有之候処、別而  
之不屈之仕形故、去ル申年委曲申渡之趣有之候而者、  
右体之儀一切無之筈候得共、今以聞得之趣も有之不  
可然候、右二付而者締方をも申付置候条、御菓園係  
り廻勤之節氣を付、疑敷儀も候ハ、屹可申出候、尤、  
所役よりも随分氣を付、緩之儀無之様稠敷可申渡候、

安永九子  
六月

主馬  
帶刀

一博奕御法度之儀者諸人存之前候処、頃日諸所二而取  
企、勝負之依振合者段々大分之掛口二も成立、打負  
候者者外二才覚之手便も無之、無是非盜之存念差発  
諸所へ忍入、又者土蔵等相破候者も有之、基与風取  
企軽キ事より右体如何成儀も致到来、誠軽キ者共よ

り万事無弁処より大罪をも仕出不便之至候条、已来  
尚以御法度之儀相守、博奕等取企候儀一切無之様屹  
可被申渡旨、地頭・領主・月番御用人江申渡、支配  
有之面々江茂可申渡候、

天明三卯  
四月

(名越巨馬)  
左源太

一頃日瘡瘡相時華候付踊等相企候聞得有之、先達而横  
目を以示方申渡置候得共、端々二而者多人数相企、  
異様成支度等二而諸所致徘徊候段相聞得、別而如何  
之次第二候、病瘡之儀ハ過半者子共相煩事候得者、  
喰事等進候ため家内二而之儀者左も可有之儀候得共、  
昼夜無差別男女入交り無憚致徘徊候仕形甚以不可然  
候間、右体之儀共曾而無之様向々江可致通達候、依  
願心社頭など二而踊候儀ハ差免置候得共、是以取違  
之基相成候間、以後之儀者差留候条、是又可被申渡  
候、

天明四辰  
二月

大御目付

写

諸所往還筋掃除丁場村々引受之杭拔取、又者疵付候儀茂有之由相聞得不可然候条、向後右体之儀一切致間敷候、若聊爾之者有之候ハ、可及沙汰候、此旨不洩様可申渡候、

五月

主計

一 諸所へ不謂致落書候由相聞得、御領国之儀者、末々二至迄御譜代筋之者共姓名を隠不埒成落書等ハいたすましき儀候旨、去ル巳年委曲申渡趣茂有之候処、

頃日亦々諸所へ右体之儀とも有之候由相聞得候、前文之通申渡置候弁も無之、右仕形第一 御上を不奉憚心底、別而不屈之至候、此上落書等仕候者有之候ハ、御詮儀之上屹と其科可被仰付候条、此旨与中・

支配中其外不洩様寄々可致通達候、

天明六年

六月

伊賀

喜入久福

安房

一下新築地江御作事方木屋場被相建候間、右場所近辺二而致華火候儀一切差留候条、此旨組中并支配有之

面々江申渡、尤、近辺火用心入念候様町奉行江分而可申渡候、

七月

大御目付

一 唐物他国商売御法度之段者每度稠敷被仰渡事二而、大形之儀者無之筈候得共、商人共自然取違互之利潤二まよひ御法度相背におひてハ、甚以不屈之至可被行厳科候条、右之趣頭人并支配人より稠敷可申付候、尤、

御当国へ入来候旅人江者宿々問屋におひて右之趣申聞、万一唐物買取二おひてハ、国法之通可申付由時々可申聞置候、且又唐物致拔商売候者承付於致訴人者、吟味之上其品をとらせ、御國中商売可令免許候、

但、旅人江申聞候趣者、委敷無之候而ハ難取受者も可有之候間、唐物拔商売之儀二付而ハ第一 公義御法度之儀二而、每度右体之者共取締等之儀稠敷被 仰付事候条、自然唐物纒込も蜜々買取候儀有之候ハ、売渡候者ハ勿論、買取候者も国法を

以取扱有之筈二候、琉物迎も売元より慥成証文等

無之候へハ、依訊ハ買取候品取揚ニも可相成事候

間、随分右之趣致得心候様可申聞候、

天明六年  
七月

大御目付

一向御船手之儀、御召船者勿論、多艘之御船被圍置、  
大切成諸御道具等も有之候二付、無用之人御囲内江  
立人間敷旨制札をも被立置候処、問ニ者取違、魚取  
或者遊山等敷体之者御船江近辺火繩・明松等持行キ  
候儀も有之由相聞得、甚以如何之儀ニ候、御船家之  
儀者過半苦困故、猥ニ火繩・明松類取散自然之儀ニ  
も及候而ハ不可然事候間、御船江近辺徒之徘徊屹と  
令停止候、就中貴賤ニよらず子共又者家来・下人輕  
キ者共之儀者右式之儀并薄事候故、右之趣心得違無  
之様委細可申聞候、右ニ付而者横目并御船方掛役々  
江取締をも申付置候二付、此上万一右体之儀共有之  
候ハ、誰人ニても名元無用捨可申出事候条、聊取  
違無之屹と相守候様、早々和中・支配中江不洩様可  
致通達候、

天明七未  
二月

（喜入八福）  
安房

一花火之儀、第一火用心を致勘弁、人家迎ニ而可仕旨  
先年以来段々申渡通候処、此頃屋久島藏近辺ニ而花  
火いたし候段相聞得不可然事候条、向後右式之場所、  
其外人家近所ニ而者一切致間敷候、此旨支配中江可  
被申渡旨可申渡候、

天明七未  
七月

（赤松期方）  
造酒

一角力取企多人数相集候付而者、御法度之趣先年以来  
段々被仰渡置候処、如何取違候哉、頃日於諸所角力  
取企候間得有之不可然候、右様之所より多人数及群  
集、問ニ者口論ケ間敷儀も致到来候条、屹と相止候  
様可被申渡旨、支配有之向々江可申渡候、右ニ付而  
者横目中江茂取締之儀申渡置候間、支配頭ニも其心  
得を以一涯稠敷取締被申渡、乍此上聞得之趣茂有之  
候ハ、近郷并在方者其所庄屋・名主、抱地者其支  
配人越度可相成候条、屹と此旨可相守旨被申渡候様  
可申渡候、以上、

寛政元西  
十二月

（喜入入量）  
右衛門

一 若背者共鳥吹射候事并破魔抛候儀ニ付而者從前々御

法度之趣段々被仰渡置候処、程過自然相ゆるミ候向

ニ成行候而者不可然候、殊ニ当分者 御下国御ニ茂

候条、一涯相慎候様尚又親兄弟・親類共より稠敷申

付候様可被申渡旨、支配有之向々江不洩様可申渡候、

寛政二戊  
正月

右衛門

一 鹿兒島中諸人飼犬之内兼而人江障候聞得有之候ハ、

一 承付次第不依誰人其段御目付役所へ可申出候、左候

ハ、飼主召出入念掛置候様可申渡候、尤、犬主より

遠郷江差遣為飼置度旨申出候ハ、勝手次第可申付候、

病犬之儀も承付候者より前条同断御目付役所江可申

出候、左候ハ、猶又入念掛置不取逃様可申付候、若

捕方不及手節者其段申出次第是迄之通取方申付、飼

主江相渡格護方無大形様可申付候、

但、病犬自分格護難成、願之上雜犬同様取計候儀

者其通可有之候、

一 飼主無之雜犬前条同断之節、人江障候迄之犬者随分

不痛様相捕御春屋江飼置、便次第遠郷へ差遣入念飼

置候様可申渡候、病犬之儀者御春屋江別段囲江入置、

鎖ニ而掛不取逃様可申渡候、先年以来耆尺已上之犬

無御免飼置候儀不相成事ニ候、

右者、鹿兒島中之儀者毎度

御出等も有之事ニ而、本文之通之犬大形ニいたし

置候而者不可然事候条、飼主共兼而氣を付、少ニ

而も心遣之見及有之候ハ、則掛置可申旨諸向江

寄々致通達、以來御目付中右之取扱ニ相心得、其

外之儀ともハ是迄之通可申渡候、

但、御鷹場最寄之儀者是又是迄之通可相心得候、

寛政三亥  
正月

大目付

一 鹿兒島近在并御鷹場有之、諸郷鳥取候儀御停止之段

者先年以来度々稠敷被仰渡置、取違之儀者無之筈候

得共、程過候得者大形ニ成行候故、去年年も申渡

も有之通候処、間二者心得違之儀茂有之趣相聞得不

可然候、自然此上取違之者も候ハ、糺方之上屹と御

咎目可被仰付候条、其節二いたり致後悔間敷候、勿論御鷹掛之面々者猶以可相嗜儀候間、聊茂取違無之様与中・支配中・諸郷江不洩様可致通達候、

天明七年未  
十一月

(島津久昶)  
求馬

一 演武館御囲其外諸所石垣等二輕石類を以絵形きしり付候者有之、下々之仕業と相見得別而不届二候、就中演武館之儀者格別成御囲候処、甚以不埒之いたし方二付而者屹と御糺方をも可被仰付候得共、此節迄者右之御沙汰二者不及候条、向後右体如何之始末無之様頭人・主人より稠敷申聞候様被仰付候、此上違背之者も候ハ、其身者勿論頭人迄も可及迷惑候条、右之趣を以通達有之候様向々不洩様可相達候、

寛政二戊  
三月

(喜入久量)  
右衛門

一 色々無形も浮説等申触候儀、分而御禁止之段、安永四未年以來度々申渡之趣茂有之、初而 御入国茂被為 在候付而者専静謐を心頭二掛、猶又諸篇可相慎之処、段々聞得之趣も有之、第一

御上をも不憚不詮立事二、御政事之妨二も相成、他所之聞得も如何敷甚以不届之至、右二付而者屹と糺方をも被仰付置候条、於令露頭者無御用捨切腹死罪等被仰付、親類迄も迷惑二可相成之条、追々申渡通以來猶又取違無之様堅相守、一切浮説等敷儀共不申触様人々相嗜、家来末々迄も右之趣を以嚴重二可被申付候、

寛政二戊  
五月

(島津久昶)  
石見

(島津久金)  
伊賀

(島津久昶)  
求馬

(島津久連)  
登

(二階堂行且)  
主計

(名越恒篤)  
右膳

右膳

一 鹿兒島塩屋村塩浜地之儀、土手通可致通融之処、間二者浜地致往来、馬二而乗通候人も有之、塩取得方別而差障二相成由甚以不可然候条、致往来候儀堅令停止候、若乍此上於罷通者、名前承届無用捨可申出旨申渡候条、聊取違無之様早々支配中江不洩様可致

通達候、

四月

主計

寛政二戊

十二月

右膳

一於他国鉄炮打候儀不相成事候処、去冬於筑前領鉄炮

打候者有之、此御方御家中之由、於江戸彼御方御

留主居より此御方御留主居迄為掛合由候付、以来鉄

炮為持候御役柄迄他領二而鉄炮打候儀、猶又嚴敷

停止被仰付候条、屹と可相守旨被 仰出候、於他領

右通取違之儀者一切無之筈候処、甚以不可然事候条、

以来右体之儀共無之様、江戸往来等之面々屹と可相

慎、此旨向々江不洩様可申渡候、

寛政二戊

九月

求馬

一庖瘡人看病等二付、為食進士踊歌杯猥うたひ候段相

聞得候、當時分而御取締之折柄二も候間、右体之儀

者程合勘弁も可有之事二候、且

御目見又者嫡子誕生祝等二付而者已前より仕来など

に心得違候而者、是又當時之御振合二者不都合候間、

右様之儀とも人々取違無之様向々江可申渡候、

一御領国中之面々日笠用來候得共、狭小路杯二而行当

旁二付差障候条、都而着笠可致着候、併依人体天氣

二様有之、着笠二而難相濟存候節、日笠相用候儀御

免被仰付候付、安永二巳年被仰渡候、其以後晴天之

砌も日笠相用候者間々有之、右様之儀一切無之様被

仰渡置候処、頃日又々晴天之節日笠相用之向も有之

候間、向後仰渡之旨趣最通候様可被相心得候、此旨

致通達候、以上、

申七月三日

御目付

口達之覚

一吉野鹿倉之儀、御狩場二而先年より留山申渡置候処、

間々為新取致聊爾候者有之由相聞得、甚以不可然候、

何方留山由も猥不踏入筈候処、就中吉野鹿倉者御狩

場之見合二も相成候二付、兼而山見廻其外諸締申付

置候間、自然右鹿倉内へ踏入候者主人名前承届、無

用捨可申出旨此節分而申渡候、右二付而ハ若取違差

越候者も有之候ハ、一廉迷惑可相成候条、頭人・

主人より堅申聞置候様寄々可致通達候、

天明八年

九月

### 公義仰渡之事

一 神善四郎名代之者为秤改西三拾三ヶ国相廻候付、伝馬之儀寺社奉行証文相渡遣候間、無滞可被出旨申渡候様可被致候、右国々之儀者寺社奉行江可被承候、

二月

右之通、從 公義被仰渡候条、善四郎名代之者寺社御奉行伝馬証文を以御領内江入来候ハ、人馬無滞差出候様、諸外城・支配中江可被申渡旨可申渡候、

三月

杓

一 上方筋百姓共強訴等いたし相集候趣相聞候間、可成丈取鎮、其上ニ茂難取鎮様子ニ候ハ、召捕可申候、領分限ニ而者難行届儀も可有之候間、御領・私領共

申合、御領・他領之者ニ而も最寄次第人数差出召捕、

其上ニ而御代官又者領主・地頭江引渡候様可致候、

併飛道具等用候儀者可為無用候、

右之通可被相達候、

正月

一 上方筋百姓共強訴等いたし相集候趣ニ相聞候間、可成たけ取鎮、其上ニも難取鎮様子ニ候ハ、召捕可申候、領分限ニ而者難行届儀も可有之候間、御領・私領共申合、御領・他領之者ニ而も最寄次第人数差出召捕、其上ニ而御代官又者領主・地頭江引渡候様可致候、併飛道具等用候儀ハ可為無用旨、先達而於江戸御触有之候処、今以致騷働候場所も有之候趣ニ候間、難取鎮様子飛道具等用候而も不苦候、

右之趣可相達旨老衆より申来候、早々国元江可申

越候、

二月

右之通、於江府被 仰渡、又者大坂御城代より被仰渡候条、此旨承知可仕候、境目外城之儀者御料・

他領共自然右体之聞得於有之者早々可申出候、此

旨与中・支配中・諸外城江不洩様可被申渡者也、

明和六丑  
二月廿一日

御家老座印

一諸国百姓共願之筋有之候ハ、名主・村役人等を以

定法之通可相願儀候処、大勢致徒党候段不届候、自

今弥右之通相心得可申候、若心得違致徒党候ハ、

可取揚為願共理非之不及沙汰被取上、其上急度仕置

可申付候、右之趣、兼而御料、私領百姓共江御代官・

領主・地頭より可相触候、

二月

右之通可被相触候、

右之通、從、公義被仰渡候条、此旨与中・支配中・

諸外城へ不洩様可被申渡者也、

明和六丑  
四月

御家老座印

一神善四郎秤相用候国々江善四郎方役人相廻候秤改候

節、秤数多所持之者も不隱置不残出シ見せ改（御触書玉）請候

様可致候、尤△紛敷秤被取上候筈候、此旨急度可相

守者也、

子二月

右之通、從、公義被仰渡候条、此旨相守候様与中、

諸外城・支配中へ不洩様可被申渡者也、

明和六丑  
三月

御家老座印

一老中・若年寄中对客登

城前其外廻勤等有之候節、門内外込合召連候供廻不

礼不法之儀共有之由相聞候、町奉行・同心共茂差出

為相制候得共相用不申由二候、以来不礼不法之儀無

之様急度可被申付候、此已後右体之儀有之候ハ、何

れ之家来二候共召捕候筈候、其旨家来へも可被申付

置候、

右之趣可被相触候、

九月

大目付

一総而召連候供廻りかさつに無之様度々被仰出候処、

又々近来かさつ成も有之様相聞、先挾箱持候者異

明和六丑  
十二月二日

御家老座印

定

風に取捨、別てかさつ成も有之、△徒之者間遠召連候面々も有之、往来之妨二も相成候、面々急度被申付、重立候家来相制候ハ、左様二者有之間敷候処如何事二候、向後弥かさつに無之先挾箱持候者在所者召遣、徒之者も間遠無之様召連作法能、於途中茂相互二片付、障二不相成様急度可被申付候、以来如何成儀も於有之者家来者不及申、主人之可為越度候条、此旨堅可被相守候、

一 供廻り徒之者風俗不宜、中間共者異風ニ取捨候故別而かさつに成候、向後屹と相止可申候、主人被申付候共請人共より断可申達候、奉公人へも其段可申付置旨、受人共へ町奉行より先年申渡候処、亦々近年右体之儀も有之由相聞不屈候、弥先年申渡之趣急度相守、以来右体之儀於有之者、当人者不及申、請人共迄咎可申付旨、猶又受人共へ町奉行より申渡候条、此旨茂可被相心得候、

九月

右式通之通、從 公義被仰渡候条、以下略、

一 何事によらすよろしからざる事二百姓大勢申合候をととうとなへ、ととうしてしみてねかひ事くハたつるをこうそといひ、あるひハ申合せ村方たちのき候をてうさんと申、前々より御法度二候条、右類之儀これあらハ居村・他村ニかきらす早々そのすじの役所へ申出へし、御ほうひとして、

ととうの訴人 銀百枚

こうその訴人 同断

てうさんの訴人 同断

右之通下され、其品ニより帯刀苗字茂御免可有間、たとへ一旦同類に成ル共、発言いたし候者之名前於申出者、其科をゆるされ御ほうひ可被下、

一 右類訴人いたす者もなく村々騒立候節、村内之者ヲ差押、ととうにくわ、らせす一人もさしいたさ、る村方有之ハ、村役人ニ而も百姓ニ而も重モに取しつめ候者ハ御ほうひ被下、帯刀苗字御免、差つ、きし

つめ候者もこれあらは、それく御ほうひ下しおかるべきもの也、

明和七年四月

奉行

右之通、御料者御代官、私領者領主・地頭より村々江相触、高札相建有之村方は高札ニ認相建可申候、以上、

右之通可被相触候、

右之通、從 公義被 仰渡候条、以下略、

明和七寅  
八月

御家老座印

一角力興行之節、木戸を建札銭取候儀者、角力を渡世ニいたし候者之儀ニ有之候、然処ニ於国々御料者御代官、私領者領主・地頭江願之上素人共寄合角力相催、其外神事等之節茂角力興行致候、殊神事等之砌致興行候者、畢竟先年より致来候嘉例ニ而致興行候ニ付、見物も可致群集故、取占之為メ困等致候迄ニ而、木戸を立札銭等請取候儀、向後無用ニ可致候、尤、勸進角力興行致候ハ、渡世之者共へ対談之上催候儀者格別之事ニ候間、其趣相心得、在方之者共

心得違無之様可致候、

右之趣、向々江寄々可被相触候、

十月

右之通、從 公義被仰渡候条、以下略、

安永二巳  
十二月廿日

御家老座印

一 近年浪人坏と申、村々百姓家へ参り合力を乞、少分之合力銭坏遣候得ハ悪口いたし、或者一宿を乞泊、病气坏と申四五日致滞留候内ニ者品々難題を申掛、合力銭余慶ニねたり取候段粗相聞不届之至候、以来右体之者罷居候ハ、其辺之穢多・非人為召捕、関八州・伊豆国・甲斐国者公事方御勘定奉行へ召連出、其余之国々者御料者御代官、私領者領主・地頭へ召連可出之、勿論何様申候共決而止宿不為致、苗字帯刀致候者へ者一銭之合力致間敷候、  
一 旅僧・修験・警女・座頭之類、物貴之者共、志次第之報謝を受、相对ニ而宿を借り可申処、近年押而宿を取、或者ねたりケ間敷儀申懸候者共有之段粗相聞、是以不届之至候、以来右体不法之者者前ケ条同様為

召捕召連可出之、若於相背者其村可為越度者也、

右之通、御領・私領・寺社領等不洩様相触、村々

二而写取、村々入口高札場或者村役人之宅前など

へ為張置可申候、

安永三年

十月

右之通可被相触候、

右之通、從 公義被仰渡候間、以下略、

安永四年

正月九日

御家老座印

六組

組頭

一道中宿々之者不埒之儀有之候節者、旅人二より其処

之間屋・年寄等二日路三日路茂招呼、又者訴訟之た

めに付添參候儀も有之由相聞候、たとひ宿々之もの

不届之仕形有之候とも、問屋・年寄招呼候而者其宿

人少成、御用茂差支申事候間、向後者年寄共招呼候

儀者不及申、訴訟のために付添參候事茂相止させ、

其趣を八道中奉行へ被申達、奉行所より詮儀之上急

度可申付候条可有其心得事、

右之通度々相触候処、近来猥二相成、宿方二而聊

之不念等有之者其節可相濟儀をも六ヶ敷申懸、或

役人等を招呼候輩も有之趣相聞不埒之至候、以来

道中往来之面々右体之儀無之様急と相心得可申候、

十月

右之通、從 公義度々被仰渡候儀候間、屹相守候

様与中・支配中・諸外城へ不洩様可被申渡者也、

十月廿九日

御家老座印

一 近来在方村々之者共耕作を等閑致、却而困窮等之儀

申立、奉公稼二出候者多、所持之田畑を荒置候類有

之由相聞不埒之至候条、村高人別割合、何人迄ハ奉

公出候、而も残人数二而耕作者勿論、村方之差支無之

候哉否、村役人共相糺、実二無扱子細二而奉公出度

旨相願候者有之候ハ、右割合之人数迄者村役人共

承届、年季を限奉公二出候様可致候、若村方之差支

茂不顧奉公出、持田畑荒置候儀等有之候ハ、当人ハ

勿論、村役人共越度たるへきもの也、

右之通、御料ハ御代官、私領ハ領主・地主より可被

相触候、

安永六西  
五月

右之通可被相触候、

右之通、從 公義被仰渡候条、以下略、

安永六西  
七月

御家老座印

一惣而召連候供廻り風俗異風ニ無之、先挾箱持候者者在所者召連、徒之者茂間遠ニ無之、惣体行列之間大概五六人程ツ、も間を置並せ、且於御曲輪内者手代之者不召連、於御曲輪外茂平代<sup>(手カ)</sup>之者跡ニ召連、手代之者少先へ相立候儀茂可致無用旨、先達而度々相達候処、又候近比猥ニ相成候様相見得候、畢竟申付不行届故と相聞得候間、猶又堅可被申付候、若此已後如何成儀茂相見候間<sup>(ハカ)</sup>性名承札筈候間、其旨可被相心得候、

右之通可被相触候、

六月

写

時疫流行候節、此薬を用て其煩をのかるへし、

一時疫には大つふなる黒大豆をよくいりて壺合、かんそふ壺匆水ニ而せんし出し、時々吞てよし、右、医涯出る、

一時疫ニは茗荷の根と葉をつきくたき、汁をとり多吞てよし、<sup>(右カ)</sup>合肘後備急方出ル、

一時疫には牛房をつきくたき汁しほり、茶碗半分ツ、二度飲て、其上桑之葉を一振ほと火ニ而能あふり、

さいろになりたる時茶碗に水四盃入、式盃にせんして一度飲て汗をかきてよし、若桑の葉なくは枝にて

もよし、右、孫真人食忌に出ル、

一時疫ニ而ねつ殊之外つよく、きうかい<sup>(チカ)</sup>之ことくさわきてくるしむにハ、芭蕉の根をつきくたき汁をしほりて飲てよし、右、肘後備急方ニ出、

一切の食物の毒にあたり、またいろく<sup>(チカ)</sup>の草木・木の子・魚・鳥獸など喰煩に用て其死をのかるへし、

一切の食物の毒にあたりくるしむにハ、いりたる塩をなめ、又者ぬるき湯にてかきたて飲てよし、

但、草木の葉くふて毒にあたりたるにハいよくよし、右、農政全書に出る、

一切の食物の毒にあたりてむねくるしく腹張病にハ、

苦參を水にてせんし飲食を嘔出(吐カ)して、右同断、(よし脱カ)

一切の食物ニあたりてくるしむに、大麦の粉をこふばしくいりてさゆにて度々飲てよし、右、本草綱目に出ル、

一切の食物にあてられて口鼻より血出てもたへくるしむにハ、ねぎをささみて壺合水にて能せんし、ひやし置て幾度も飲へし、血出てやむまで用てよし、右、衛生易簡二出、

一切の食物の毒にあたり煩に、大つぶなる黒大豆を水にてせんし、幾度も用てよし、急にあたりたるにハいよくよし、

一切の食物の毒に当り煩に、赤小豆の黒焼を粉にしてはまくりかひに壺ツ程水にて用へし、獸之毒にあたりたるにハ弥よし、右、千金方に出ル、  
一菌を喰ひあてられたるに、忍冬の莖葉とも生にてかミ、汁をのミてよし、右、夷堅志に出ル、

右之薬方、凶年之節辺土の者雑食之毒に当り、又凶年の後必疫病流行事あり、其為に簡便方を撰む

へき旨被仰付、依て諸書之内より致吟味者也、

享保十八癸丑年十二月 望月三英

丹羽正伯

右者、享保十八癸丑年飢饉の後時疫流行候処、町奉行所より板行被仰付、御料所村々へ被下候写、

右者、当時諸国村々疫病流行いたし、又者輕者共雑食の毒にあたり相煩及難儀候趣相聞候処、前書享保十八年村々江被下置候御薬法書付之儀、年久儀故右村々ニ而致違失候儀も可有之候付、此度為御救右之写村々へ領主・地頭より相触候様可被致候、

右之趣可被相触候、

五月

右之通、從、公義被仰渡候条、此旨末々迄茂不洩様御目付より寄々可致通達旨可申渡候、

天明四辰  
七月  
(島津久健)  
仲

(伊達重村)  
一松平陸奥守領分限り通用之鑄錢、形子撫角、文字ハ仙台通宝といたし、右於領内当辰より五ヶ年之内鑄

錢有之候、

右者、陸奥守領分に限り通用之筈候処、若心得違外々ニ而通用いたし候者有之候ハ、御料者最寄御

代官陣屋、私領之儀者公事方御勘定奉行月番宅へ可

訴出候、隱置外より於相知者吟味之上急度可申付候、

右之趣、御料御代官、私領者領主・地頭より可被

相触候、

十一月

右之通從 公義、以下略、

天明五巳

正月八日

御家老座印

○御用迦之品申請被仰付候儀且商売方之儀并賃錢

定之事

付、諸色直段定并旅人出入之事

一 去年已來諸品高直ニ相成、諸人及難儀之由相聞得候

二 付札方申付候所、諸色之儀、過半在方より持越致

商売事候所、前方ニ相替持出候者共少キ所より自買

入元高直ニ相成候ニ付、右買入之直段さへ引下候者、

町方売出直段之儀者自下直ニ有之候故、田舎より持

越候品茂已前之通売払候而者町方買物代及不足候所

より、自然と高直ニ相成候由申出候、依之売出来候

積を以別紙直付横折帳之通売出、其外之品茂右ニ準

売出候様申付候条、町方江召置候諸物之儀、買入元

直成より壹割利足ニ而売出、夫より高直曾不売出候

様申付候、尤、名方之諸色、此節より直下ニ相成候

而茂、其以前高直ニ買入置候を此節直下之品準売出

候而者可致損亡事候得共、何分其取分者難成筈候間、

右之無差別都而直下ニ而売出候様申付候、尤、縮方

之儀者町横目・乙名頭引受時々行廻り、曾而高利不

取様可申付候、

一 於納屋諸魚売出候直段之儀、主取共相究之由候所、

就中高直ニ相究之由相聞得不可然候条、是又右同斷

可申付候、

一 町方借屋かり賃高直ニ有之、末々之者共及難儀之由

候間、場所相当之宿賃請取、曾而高賃錢不取様可申

付候、

一豆腐并饅頭其外菓子類之品、前方と相替近年小ふり

有之、米・大豆并砂糖類直成依高直同様にも無之筈  
候得共、近年押通小ふり二有之、就中大豆之儀、去  
年以來下直二有之候得共、取分豆腐小ふり有之、別  
而自儘之仕形二候、向後都而以前之通大ふり相調売  
出候様、町役共引受行廻り、緩せ之儀無之様可致下  
知候、

一諸色振売之儀者町方二不限、家来并下人、寺門前其  
外何方之者二而も行廻売買致之由候付、支配頭・主  
人より買元直段二準下直之方二売出候様可申付候、

一御城下士并座付職人屋敷之儀、究置候方限より内江  
名子・下人等差置、窓を明ヶ見せ店を出し候儀者堅  
無用申付、右方限内二而も小路より不見得様内々二  
而輕キ売物致取遣候儀者不苦旨先年申渡置候所其旨  
相守、右体之者江者主人・屋敷主より同断可申付候、  
一大工・木挽・石切・砂官其外諸職人并人足共、何そ  
二付雇入候節高賃を不取様二と之儀者先達而茂申渡  
置趣有之候、猶以其旨相守、若取違内々二而高賃を  
取候者於有之者、右職人共勿論、雇入候人迄も可及

沙汰候、

一商人之内より横井・美尾崎・筋違橋・実方、其外在  
方より諸物持出候中途江差越諸品買取、御当地へ持  
越高利を取候由相聞得候間、右体中途二而買取候儀  
一切差留候、

一右通、近名・近外城江者郡奉行、町方へ者町奉行よ  
り可申渡候、

右之通、鹿兒島二而者直成相究候条、若違背之者  
於有之者可及沙汰候、此旨表方へ致通達、御側方・

御勝手方へ者写を以可相達候、

堅木  
安永西末  
正月

(島津人並)  
左中

(小松清香)  
帶刀

(川田國福)  
伊織

横折

一薪壹駄

代錢六拾四文

但、八束負、壹束長壹尺八九寸、廻り式尺壹式寸、

一雜薪壹駄

代錢四拾八文

但書同断、

一起炭壹俵

代錢百拾六文

- 但、五拾斤入、  
一 鍛冶炭壹俵 代錢七拾貳文  
但書同斷、  
一 雜長木壹本 代錢八文  
一 ねた長木壹本 代錢貳拾八文  
一 七八寸廻り唐竹壹本 代錢四拾八文  
一 五六寸廻り唐竹壹本 代錢拾五文  
一 柳竹壹束 代錢七拾貳文  
但、六七本結、  
一 小唐竹壹束 代錢四拾八文  
但、貳尺廻り、  
一 直竹壹束 代錢四拾八文  
但、貳尺廻り、  
一 いさら竹壹束 代錢貳拾貳文  
但、三尺廻り、  
一 茅壹駄 代錢百文  
但、六抱負、壹抱三尺廻り、  
一 五敷はし壹枚 代錢拾壹文  
一 四敷はし壹枚 代錢八文
- 一 勝藁壹束 代錢拾文  
但、五頭結、  
一 真藁壹抱 代錢七文  
但、三尺廻り、  
一 赤藁壹抱 代錢六文  
但、三尺廻り、  
一 半繩拾房 代錢三拾文  
一 摺繩拾房 代錢三拾八文  
一 角繩拾筋 代錢拾文  
一 小繩拾房 代錢三拾文  
一 藁（勝力）壹枚 代錢拾貳文  
一 藁壹枚 代錢拾貳文  
上代錢貳拾四文 中代錢貳拾文  
下代錢拾五文  
一 茅莖壹枚 上代錢五拾文 中代錢四拾六文  
上代錢三拾八文  
一 苦壹枚 上代錢貳拾文 中代錢拾六文

下代錢拾弍文

下代錢拾八文

一紙草履拾足

代錢三拾八文

一ふり壺荷

代錢貳拾八文

一中拔草履壹足

代錢貳拾四文

一竹をろし壺ツ

代錢六文

一竹皮草履壹足

八竹代錢拾弍文

一柄草器壺ツ

上代錢三拾弍文

から竹代錢拾文

八竹代錢拾弍文

一黒葛壺抱

代錢三文

小さん竹代錢拾四文

但、拾尋計、

一差下駄壺足

小拾壺文

一草器壺ツ

大代錢拾九文

小代錢拾三文

大代錢拾五文

小拾壺文

大代錢拾九文

小代錢拾三文

一木履壹足

小代錢七文

一はら壺ツ

大代錢拾九文

小代錢拾三文

大代錢拾拾文

小代錢七文

大代錢拾九文

代錢七拾弍文

一下駄之緒拾足

代錢七文

一箕壺ツ

代錢七拾弍文

一草履下駄壹足

中代錢四拾八文

一糶通し壺ツ

代錢貳拾八文

地調

中代錢四拾八文

一めこ壺ツ

大代錢拾拾文

小代錢六文

代錢六拾四文

中代錢四拾八文

大代錢拾拾文

代錢貳文

但、足付、

下代錢三拾八文

一竹ほうき壺本

代錢貳文

田舎調

下代錢三拾八文

一竹柄杓壺本

大代錢八文

小代錢四文

上代錢三拾弍文

中代錢貳拾四文

一曲柄杓壺本

大代錢拾五文

小代錢八文

但、足付、

但、足付、

大代錢拾五文

小代錢八文

- 一木のさし壺ツ  
大代錢三拾貳文  
小代錢貳拾貳文
- 一鍬柄平壺ツ  
代錢貳拾貳文
- 一春白壺ツ  
代錢三百文
- 但、四五升入、
- 一右之きね壺ツ  
代錢貳拾四文
- 一なて白壺ツ  
代錢五百文
- 但、壺斗入、
- 一なてきね壺ツ  
代錢四拾八文
- 一丹荷壺荷  
代錢百文
- 一口切桶壺ツ  
大代錢四拾八文  
小代錢三拾貳文
- 一鬢手洗壺ツ  
代錢四拾八文
- 一大手洗壺ツ  
代錢百文
- 一白木食具壺ツ  
大代錢三拾貳文  
中代錢貳拾四文
- 小代錢貳文
- 一雜木真那板壺丁  
大代錢三拾貳文  
小代錢貳拾貳文
- 一抹茶壺升  
上代錢拾貳文  
下代錢六文
- 一灯心式抱  
代錢三文
- 加治末調  
一付木壺抱  
代錢貳文
- 一鍋之蓋壺枚  
上代錢拾五文  
中代錢拾貳文
- 下代錢八文
- 一白木器壺把袋入  
上代錢拾五文  
中八文
- 下六文
- 一木場笠壺ツ  
代錢八文
- 一竹のはち壺ツ  
大代錢拾九文  
小代錢拾貳文
- 一茶いり壺ツ  
代錢貳文
- 但、小ふり、
- 一裏付草履壺束  
代錢貳百六拾四文
- 一地調雪駄壺足  
上代錢七拾貳文  
中六拾四文
- 下四拾八文

一 唐竹之皮拾斤 代錢百文

一 八竹之皮八斤 代錢百文

一 小山竹之皮六斤 代錢百文

一 室ふた拾枚 代錢貳百三拾貳文

一 八尋織木綿壹反

上代錢六百文 中代錢五百四拾八文

下代錢四百六拾四文

一 七尋織木綿壹反

上代錢五百貳拾四文 中四百六拾四文

下四百文

一 大里芋籜壹ツ 代錢五拾文

但、五六升入、

一 里芋壹升 代錢拾貳文

但、ふミ芋、

一 白唐芋籜壹ツ 代錢四拾貳文

但、五六升入、

一 赤唐芋籜壹ツ 代錢三拾貳文

但、五六升入、

一 山芋拾本

上代錢百文 中七拾文  
壹東二付

下六文

一 牛房拾本

上代錢六拾文

一 大根拾五抱

一 漬大根百本

一 生加壹升

一 人參拾本

上代錢貳拾文

下六文

一 干之子壹升

一 おやし菱壹枚 (鷹丸)

大代錢拾貳文

一 生木之子壹升

一 玉子壹ツ

一 桶之輪替賃

一 丹荷壹ツ

一 鬢手洗壹ツ

一 鬢手洗壹ツ

一 大手洗 壹ツ 代錢貳拾四文

一 四斗樽 壹ツ 代錢五拾文

一 居風呂 壹ツ 代錢百貳拾四文

右之通、安永四未正月廿三日赤松新之丞御取次を

以被仰渡、島津李致承知候事、

一か、り大工 壹人

但、壹日賃錢百拾六文ツ、

一下才 壹人

但、右同賃錢百貳拾四文ツ、

一 茅家葺夫 壹人

但、右同賃錢百三拾貳文ツ、

一 日雇人 足 壹人

但、右同賃錢百文ツ、

右之通、脇々雇賃錢相究候条、此旨表方へ致通達、

御側方・御勝手方へ者写を以可相達候、

安永二巳  
六月

（島津久健）  
仲

一 唐物拔商買之儀、前々より御禁止被仰渡置候得共、

間二者拔商買之聞得有之、別而不届二候、依之自今

以後拔商買いたし候者一涯御咎目重ク被仰付、依

訳者可被行斬罪旨被 仰出候間、支配中江不洩様可

被申渡候、

明和七寅  
九月

大御目付

一 唐物拔荷之儀、公義御法度ニ而従前々稠敷被仰渡、

右致拔商買候者者可被行斬罪ニ茂旨去寅年申渡置候、

然共程経候儀ニ而万一取違茂有之候而者不可然候、

猶又其通可相心得候、且致訴人候者御褒美被仰付

候段、同類たりといふとも其咎を可被差免候、

右之趣、支配頭・主人より屹と申聞、諸外城・私

領之儀者其所役々より申聞候様可申渡候、

安永七戌  
六月

（小松道春）  
帶刀

（山岡久澄）  
市正

（二階堂行昌）  
主計

（赤松則正）  
造酒

写

近年打続凶年ニ付米穀高直ニ有之、末々之者甚及難

儀由相聞得候付、御藏米之内御払申付候ハ、下直ニも相成筈候得共、御用米差支御候得者、当分ニ而者其儀も不相調候、先寄疏米相届候ハ、其節之吟味次第申渡儀も可有之候、依之鹿兒島諸郷共米穀余計持合之面々者此涯可売出候、米穀商買之者者白米売升代百文ツ、之直成を以可売出候、尤、赤米・雜穀之儀も可応右直成候、勿論石売又者納米小売等ニ付も右直成を以可致取引候旨、先達而御勝手方より申渡有之通ニ候、右体致売買者者直成之高下見合致売占儀も難計候、当時差支之御候所、其通ニ共有之候而者別而如何之事情間、困方等不致様可相心得候、自然右様聞得も候ハ、屹と沙汰可致候、兎角此節之儀候間、持合之面々不依多少此涯売出候得者、諸人之難儀を救別而之御奉公筋ニも候条、末々迄も此旨汲受売出候様可致候、

右之通表方、云々略、

天明四辰  
五月

(島津久健)  
大進  
(島津久健)  
仲

一大工・木挽其外日用賃取之者共、近年被定置候外高賃を取候聞得有之、去十二月賃錢定被仰渡置候所、間ニ者被定置候外増賃相請取候聞得有之候、畢竟賃取之者共被仰渡候通不相守作事等取掛、雇入来者共も御定通ニ而ハ容易ニ難雇入、及差支候節ハ増錢相掛、就中町家ニ而者急ニ修甫造替ニ相掛候者雇方相調候を幸ニ存、相对次第増錢を以雇入候所より段々余例ニも相成、被定置候通ニ而ハ雇人不相調方ニ成行、被仰渡候詮不相立別而如何之至候、依之横目其外江糺方申渡置候間、向後増錢相受取候者有之候ハ、致糺方候上屹と可及迷惑候条、此旨不洩様可申渡候、

右可申渡候、

天明六年  
三月

大御目付

- 一 多葉粉屋
- 一 小間物類
- 一 一起炭
- 一 芋類
- 一 荒物屋
- 一 茶紙芋類
- 一 綿
- 一 焼物類

一葉種屋 一魚屋

右、買元より壺割掛二而可売出候、

一呉服物

内、木綿物者五部掛、絹物者壺割掛、

一八百屋

内、青物類者式割掛、干物類者壺割五部掛、

右拾貳カ式行、上位店売小売定直二被究置候、卸売又者

位劣之品者右割合より引下ケ可売渡候、自然買元

直段を偽り高直ニ売出候者茂有之候ハ、聞合之

上以來屹咎目可申付候、

一刀研 一鞆師 一金具

右三行、代料高直ニ請取候聞得有之、掛横目・藏

方目付より相糺、相当之方ニ申付置候通、以來無

相違様可相心得候、

一柄巻

大式百四拾八文 小百八拾文

但、小脇差者右割ニ而手間代引下ケ可請取候、

一表具師 一錫細工

右式行、近年手間料高直ニ請取候聞得有之、先達

而引下ケ受取候様申渡置候通、諸職人賃銭定之割  
を以代料下直ニ可請取候、

右者、去々年以來諸式高直ニ付諸人及迷惑候聞得有

之、横目・藏方目付江掛り申付置候所、到頃日賃銭

直段合等相当之方相見得候間、掛り横目・藏方目付

之儀者引取申付、為惣縮横目・藏方目付之内より見

聞申付置候間、以來高賃を取又者不相当売出候者も

有之候ハ、可申出候間、去十二月申渡置候賃銭定直

成定之通無間違売出、右ケ条之儀も売元直段より右

割増之通可売出候、自然定之外高直ニ売出候者も有

之候ハ、屹迷惑相成候様可申付候、

右之通、表方江致通達、奥掛・御勝手方江者写を

以可相達候、

天明六年  
八月

（島津久金）

伊賀

（喜入久福）

安房

（川上久品）

頼母

（島津久健）

仲

（宮之原通直）

主膳

大工

一 壹日無賄 賃錢百文、真米壹升貳合

一 右同 右同百七拾貳文

一 右同昼飯賄 右同百文、真米壹升

一 右同三度賄 右同八拾文

石切・砂官・瓦師・小板屋根葺・木挽

一 壹日賄無 賃錢九拾文、真米壹升

一 右同 右同百六拾六文

一 右同昼飯賄 右同九拾文、真米壹升

一 右同三度賄 右同七拾貳文

茅家葺

一 壹日賄無 賃錢百六拾四文

一 右同昼飯賄 右同百三拾貳文

一 右同三度賄 右同七拾貳文

下業・海大工

一 壹日賄無 賃錢百四拾文

一 右同昼飯賄 右同百貳拾四文

一 右同三度賄 右同七拾貳文

普請日用其外日用

一 壹日賄無 賃錢百貳拾四文

一 右同昼飯賄 右同百文

一 右同三度賄 右同六拾四文

但、右ヶ条早朝より召仕候節者壹日分賃錢割を以

増錢相對次第可相渡候、

右者、先年賃錢定申渡置候所、近年米穀高直之故二

而候哉、定置候外高賃請取候聞得有之候、当分米穀

直段合、此已前二差而不相替候所不都合之至二候、

依之以後右之通賃錢定申付候条、増賃等を以雇入候聞

儀一切致間敷候、就中町家二而ハ高賃を以雇入候聞

得も有之不可然儀二候間、向後取違無之様人々可相

心得候、

右之通表方へ致通達、以下略、

天明五巳  
十二月

諸色近年高直相成諸人及迷惑候段相聞得候、諸職人

高賃を取、売人共諸品高直ニ売出候儀、別而不都合

之至候間、向後別冊之通申付候、尤、諸在郷より持

出致振売候品々又者 別冊ヶ条外諸品トモ、一統賃

(薩摩藩法令史料集より補)

錢△直段等之儀引下候様可致候、掛申付置候間、万

一取違不相当之儀も有之候ハ、屹可致沙汰候、

右之通表方へ致通達、以下略、

一近年諸色高直ニ付横目・藏方目付掛申付、津畑其外

ニ而相当之直段ニ致売買候得共不及其儀候、以来者

町方并町続之場所迄も町奉行支配ニ而、夫々町役等

より時々氣を付諸物不相当之直段ニ為致売買間敷候、

尤、諸職人之儀も諸人鈍物又者売物等高直ニ不売出

様向々支配頭より屹と申渡置、緩せ之聞得も候ハ、

支配頭不行届筋合ニ候、右之趣向々江申渡、上下町

廻り方横目ニも氣を付、万一不相当之売買承付候

ハ、向々支配頭可及沙汰旨去月六月申渡有之候、

然処米穀依高直諸色之儀も右ニ準不相当不売出様に

との趣、此節従 公義も分而被仰渡、別段申渡通候

間得其意、猶又前件申渡趣意無間違不埒之売買不致

様、夫々支配頭又者掛之向より屹と可申渡候、

右之通、向々へ不洩様可申渡候、

寛政二戌  
三月

（島津久邦）  
石見

一駄賃<sup>（馬力）</sup>錢一疋 一駄賃<sup>（荷力）</sup>式拾貳貫目

一乗掛下荷拾貫目

右駄賃銀一里ニ付七分五里

一輕尻馬壹疋

右同断一里ニ付五分六里三毛

一日用壹人持荷五貫目

右賃銀一里ニ付五分

右者、商人荷物往来之節、雇人馬賃銀右之通相定候

条、堅固可相守之、聊大形有之間敷者也、

寛政二年月日 郡奉行

一大工并日雇人足其外右ニ準シ候諸職人近年高賃相請

取、定之通ニ而者色々断ケ間敷儀共申出候聞得之趣

有之不可然事ニ候、大風ニ付而ハ右体之者共專入用

之事ニ候得ハ、自儘賃銀等相請取候儀も可有之候間、

雇入候方定之通相払、右稼之者者主人より屹と可申

付置候、就中町家之者共高料ニ雇入等いたし候聞得

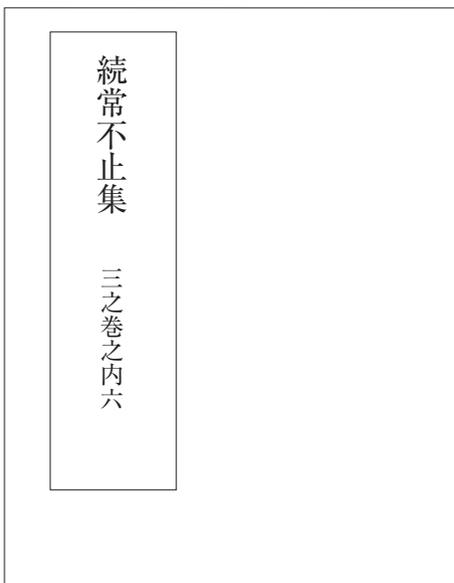
候間、乍此上不都合之儀も候ハ、糺方之上可及沙

汰候条、此旨向々へ不洩様可申渡候、

寛政三亥  
七月

(伊勢貞矩)  
播磨磨

（表紙）



続常不止集 三之卷之内六

弘化四年丁未七月中

目録

- 一 進上物之事
- 一 上使御巡見并御目付様御越之事
- 一 流鏑馬射手并頭殿之儀二付被仰渡候事

一 犬之儀二付被仰渡候事

一 越前家・和泉家相続二付被仰渡候事

一 支度并供廻り之事

一 名替願二付被仰渡候事

進上物之事

一 壹所持より寄合並迄

但、右之嫡子迄御内証より御目録進上有之候得共、向後者御内証より進上不被仰付候、当分進上仕来り候面々迄者此内之通被仰付候、重而者不被仰付候、当分進上仕候者之子より者進上不被仰付候、尤、当分進上仕候者ニ而茂小普請杯江被仰付候ハ、其者者進上無之筈候、

一小役人之内ニも御内証より御目録進上仕候者有之候、向後右役之者より進上不被仰付候、当分上来候者ハ役儀相勤候内者此内之通被仰付候、御内証より御目録進上無之役ニ役替被仰付候節者進上無之筈ニ而候、

小役人之内ニ御包丁人頭・御看経山伏者有来通ニ被仰付候、

一 無役又者御役人之内ニ茂沢有之、御内証より御目録進上仕候者有之候、右面々も其身一代者進上被仰付候、其子之代ニ罷成候ハ、進上不被仰付候、

一 御側江被召仕候者表方江被召出候節、御内証より御目録進上之儀者時々可得差図候、  
一 隅州様御方茂右ニ準シ可申候、以上、

右之趣不洩様可致通達旨将監殿御差図ニ而候、以上、

二月廿九日

取次

中神与五左衛門

一

与頭

右御役、年頭御太刀表立而進上仕候人者御目録御内証より進上無用候、御太刀進上不仕人者年頭計三匁之御目録御内証より進上可仕候、

右之通、進上物又者被召留候儀、此節被相改候条奉得其意、向後右通相心得候様ニ可致通達候、以上、

享保七寅  
八月

(名越恒渡)  
右膳

(島津久兵)

内膳

(島津久半)

将監

一  
御番頭

右御役、年頭御太刀表立而進上仕候人者御目録御内証より進上無用候、御太刀進上不仕人者年頭計三匁之御目録御内証より進上可仕候、

右之通、進上物又者被召留候儀、此節被相改候条奉得其意、向後右通相心得候様可致通達候、以上、

享保七寅  
八月

右膳

内膳

将監

写

一年頭

一八朔

右進上物者有来通御馬代六匁、又者青銅代三匁進上可仕候、

但、御目錄調様之儀ハ有来通、

一初而之 御目見 一家督 一繼目

一嫡子成 一養子成 一分地 一別立

一御役之御礼 一地頭職之御礼

右ニ付御礼申上候節、今迄御太刀・銀馬代又者青

銅・御太刀進上仕来候得共、是又年頭・八朔同前、

御太刀一腰・御馬代六匁、青銅・太刀進上之人ハ

御太刀一腰・青銅代三匁進上可仕候、

但、御目錄調様右同断、

一弓進上之人

右、現弓不及進上、御兵具所江白木弓（被納力）ニ調置候条、

御借物ニ而進上相濟代銀三匁上納可仕候、

一諸寺院入院・官成等ニ付而進上候一束一本自分不及

調、寺社座御拜物を以進上相濟代銀三匁上納可仕候、

一初而之 御目見・家督・繼目等、且又諸者院（寺力・入院脱力）其外吃

と立候御礼之節、進上之中紙束之多少無構、都而壹

匁宛代銀上納可仕候、

一例年諸士 御膳進上二者二種一荷進上、重立候御祝

儀之節者三種二荷進上被仰付候、

但、右外諸士より何ぞニ付御祝儀進上物仕候儀有

之節者、右進上物之格を以其節之吟味次第増減被

仰付候、

一御領内 御通路之節、地頭より青銅・御太刀進上仕

来候得共、御太刀一腰・青銅代三匁・二汁三菜之御

膳可差上候、

但、所より進上物二品差上儀ハ一種、一品差上候

者品を軽く差上、近外城より進上物も可準右候、

一銀何枚ニ而も進上之節者、一枚六匁之割を以進上可

仕候、

一金子百疋進上之節茂青銅同前、銀三匁進上可仕候、

一金壹枚進上之節者、銀拾枚之積候得ハ銀壹枚六匁之

割を以進上可仕候、

一三匁御目錄進上仕候節者青銅拾疋、又者何ぞニ付品

物進上仕来候儀有之人者三部壹二減候而軽く進上可

仕候、

一益（宗信）之助様江進上物仕程之儀者、品物員数共 太守様（雜費）

御同様代銀上納可仕候、

一諸人互之祝物之太刀銀一枚者六匁、青銅者三匁ニ而

相濟候、尤、品物之儀者只今迄致來候三部一二減候而可致贈答候、

右者、御格式之通進上物等被仰付筈候得共、世振

二付而者諸人も不勝手之時節二候故、五六年之間

右之通相減、進上物并互之祝物等も被仰筈候条奉

承知、

御通路之外城より進上物之儀者地頭より其所へ被

申候様、御側方・御勝手方・表方江早晚之通可致

通達候、以上、

享保十六亥  
四月

(島津久家)  
全

写

一銀八匁 一種一荷代

内、六匁 一種代 式匁 一荷代

右之通被相究候間、御規模帳書載置候儀諸事如例

可申渡候、以上、

享保廿卯  
九月

全

一元服・繼目・家督等之屹立候事二付而、進上之三種

二荷・二種一荷・天井折・馬代青銅之儀者有來通、右之外何ぞ二付間二進上之節者、代銀四部一之上納申付候、

一右三種二荷・二種壹荷進上之節、樽・台者御納戸、

三種二種者進物藏より借物を以致進上候得共、此以

後者樽・台之儀も進物藏へ差置借物申付候条、致進

上候人より物奉行江申出致借物、進上相濟候節直二

進物藏へ相納、其首尾物奉行江可申出候、

一何ぞ二付寄合並以上より相中之進上物有之、右人目

此跡之人數割二而相調候得共、以後共大小身之無差

別高之割を以上納申付候、

一何ぞ二付進上之御太刀之儀、已前礼式太刀を致進上

候処、近年中太刀致進上候、当分中太刀有合候分者

其通二而、向後共礼式太刀可致進上候、

一自分事二付而互二取かわし之品随分輕ク可致候、尤、

儉約二事よせ礼儀不取失様可相心得候、

右之通、与中不洩様可致通達候、以上、

享保八卯  
十二月

(伊集院久矩)  
藏人

一天井折進上之節、盛具入念相調候付物入有之由候、

向後者御菓子・肴共、籠相有之候而茂不苦候間、礼式

不相欠、物入無之様ニ調方可致候、左候而、金銀箔

無用水引懸籠相成懸を以可相濟候、

一御城并 御光儀ニおゐて御膳進<sup>上脱カ</sup>之節、御太刀・御道

具其外品物等進上一門中より茂進上物有之、拝領物

茂銘々被仰付事候得共、此以後一門中より之進上物

無用、亭主より御太刀迄を進上可仕候、拝領物茂亭

主迄可被仰付候、大身の面々家督被仰付 御光儀之

節、且又御家老職被仰付初而 御光儀之節、進上物

之儀者有来通軽く可仕候、

但、家督ニ付而 御光儀被遊候所ハ進上物・拝領

物以前之格可被仰付候、御家督一通之 御光儀御

膳進上相濟候以後、本行之通可被仰付候、

一諸士より 御膳進上ニ而御能之節、御中入ニ而折進

上仕事候得共、向後無用可仕候、

右者、公儀献上被下方減少被仰渡候格を以右之

通進上物被下物被相減候間、此旨与中不洩様可致

通達候、以上、

享保九辰

正月

（本文書は前文書の行間にあり）

写

空

一天井折と唱候儀、本不相究事候間、向後者天井之字

を相除折と唱、勿論書留等ニも其通可致候、

一右、殿中勤之諸役人寄々承知仕候様可申渡候、以

上、

八月

空

写

一御太刀進上之節、御太刀一腰・御馬一疋と御目録ニ

書記候茂有之、又者御太刀一腰・青銅百疋と書候茂

有之候、向後御太刀進上仕候程之者者都而御太刀一

腰・御馬一疋と御目録ニ書調、御馬<sup>代脱カ</sup>之儀者御定之通

可相納候、

右之通、表方へ致通達、御側方・御勝手方へ者写

を以可相達候、以上、

（本文書は前文書の行間にあり）

四月

引札ニ而写

（權山久初）  
主計

別紙之通被仰渡候付而者、諸人取代シ之目録青銅ニ

而も馬代と可相記候、以上、

四月

主計

一元服・初而之 御目見・家督・継目・嫡子成・養子成・分地・別立・御役之御礼・地頭職之御礼進上物、去ル亥年より被相減置候得共、已前之通被仰付候、三種二荷・二種一荷等代銀上納之節、亥年已前之通上納可有之候、右二付委細之儀者追而可申渡候、

右之通表方へ、以下略ス、

元文二巳  
四月

(榊山久初)  
主計

写

一 諸人取替之目録、青銅・太刀之節ハ太刀一腰・青銅百疋と認来候得共、向後青銅・太刀二而も銀馬代同断太刀一腰・馬一疋之目録可相認候、

右者、此内進上御目録調様之儀付而被仰渡候節、諸人取遣之目録認様之儀も申達趣有之候得共、右紙面迄二而者難見受儀も可有之候、依之亦々此段申達候条、例之通可有通達候、以上、

元文二巳  
五月

主計

一 諸人江拝領并進上之金銀青銅、去ル亥年より五六年之間割合被仰渡置趣候得共、世振付而者前々より段々為被減置事候故、此節より拝領・進上之品被相改候、亥年被定置候通二而被差置品茂有之、又者減少被仰付品も有之、別紙之通候間不洩様致通達、首尾掛之座々江者帳面紛敷無之様可記置候旨可申渡候、

以上、

元文二巳  
五月

主計

写

一 御役之御礼 一地頭職之御礼 一元服  
一 初而之 御目見 一家督 一 継目  
一 嫡子成 一 養子成 一 別立  
一 分地

右御礼之節、進上之御馬代銀万石以上者家々之仕付之通銀三枚・二枚・一枚、万石以下一所持・一

所持格・寄合寄合敷本末、並者馬代銀者壹枚・青銅百疋、

一元服之人之親より進上之御馬代銀壹枚、

一番・大番之内二種壹荷致進上来候人ハ御馬代銀壹

枚、

一此以後一種一荷進上被仰付家筋候ハ、馬代銀壹枚、

一番・大番之内御太刀迄を進上之人銀馬代上来候得

共、其由緒不慥成候ハ、可為青銅馬代候、

一弓進上已前之通現弓可為進上候、御兵具所御借物二

而進上之儀も勝手次第、右代銀九匁可相納候、

一中紙進上之諸士中紙三束代三匁可相納候、

一歳暮・年頭并何ぞ付御肴代御目録進上之節者青銅可

為拾疋候、依訊御肴代青銅百疋又者五拾疋可差上と

存候者可為勝手次第、

一又三郎様江進上物仕程之儀ハ、品物員数共ニ 太守

様御同様代銀上納可仕候、

一御領内御通路之節、地頭より進上之御馬代青銅百疋、

一元服・家督・継目等屹立候御礼事之内、享保十六年

已前祝物遣来候御役々江者祝物可有之候、玄蕃殿并

御家中江者太刀・馬代青銅百疋ツ、若御年寄・大

御目付へ者銀貳両又者壹両、

一諸人互之祝物依事者割合不及致取遣候儀可為勝手次

第候、尤、不屹立祝物等者諸事輕く可致贈答候、

一銀六拾五匁 三種二荷代

一同四拾三匁 二種一荷代

右、現進上有之筭を代銀二而相納候節、

一同拾六匁 三種二荷代

一同拾壹匁 二種壹荷代

一同八匁 一種壹荷代

右、代銀上納之節、

一同貳枚 折拾貳合代 御樽五荷代

一同壹枚 折六合代 御樽三荷代

一同貳拾二匁 折三合代 御樽二荷代

一同六匁 手樽一荷代

一同三匁壹分 御肴一折代

右、現二而進上有之筭を代銀上納之節、

一同貳拾貳匁 折拾貳合代 御樽五荷代

一同拾壹匁 折六合代 御樽三荷代

一同六匁 折三合代 御樽貳荷代

一同式匁

手樽一荷代  
御肴一折代

右、代銀二而上納之節、

但、折三種二荷・二種壹荷之樽台、鯛・干鯛・

昆布等并中紙受之借物代者有来通、

一年頭 一八朔

右、進上有来通銀六匁・青銅三匁、

一例年諸士御膳進上二而二種一荷進上、重立候御祝儀

之節者三種二荷進上、其外何ぞ付進上之節者右進上

物之格を以時々吟味次第増減可有之候、

一元服之節進上之折・盛具

一かん盛式合

白餅

一菓子類盛式合

まんちう 山いも 唐いも

なし も、 柿

びわ みかん 青梅

九年母

一肴盛式合

しび そうち きす

あち 芝小鯛

一拾式合盛具

右外

鳥色付焼、しび・そうち之内盛留ニきし少々可用

也、

右之通、此節被相定候、以上、

元文二巳  
五月

写

一屹御礼申上候人表方御役人江祝物遣候節、御隠居御

方御家老・若御年寄江祝物遣候儀跡々無之事候得者、

向後表方之人二而も屹御礼等申上、

御隠居様江も進上物仕候節者御隠居御方御家老・若

御年寄茂祝物可遣候、

右之通被仰付候間、屹不及通達、寄々申しらせ可

置候、自然疑敷儀茂可有之節者可得差図候、以上、

六月

元文二巳  
(島津入眞)  
主殿

写

一表方之人ニ而茂屹御礼申上候節、

御隠居様江進上物仕人者 御隠居御方御家老・若御年寄江茂祝物可遣旨寄々申知らせ候様此間申渡置趣

有之候、右体 御隠居様江進上物仕人ニ而も子共屹

御礼等申上候節者、其身ニ付而之儀ニ而者無之、

御隠居様江子共より進上物者不仕事候得共、親より

右両御役江祝物遣ニ不及事候条、右之趣最寄寄々申

知せ候向々江可申聞置候、以上、

元文二巳  
八月

（島津久貫）  
主殿

一元服付而 （宗信） 又三郎様江進上物

（繼忠） 太守様御同様之品代銀上納有来候得共、向後家格之

通御太刀・馬代ニ、三種二荷・二種一荷被定置候代

銀ニ而進上可有之候、

右之通、此節被相定候条表方へ致通達、御側方・

御勝手方へ者写を以相達シ、帳面ニ記置候様ニ可

致通達候、以上、

元文二巳  
十月

（梅山久初）  
主計

新納喜右衛門 比志島仙太夫 諏訪仲右衛門

土持新八 渋谷三四郎 本田信次郎

秩父十郎右衛門 肝付八郎左衛門 川上助太夫

本田孫右衛門 高崎惣右衛門

写

一万石以上者馬代現銀壹枚

一五千石より九千石迄者馬代銀拾貳匁

一五千石已下者馬代銀六匁

右之通、向後年頭・八朔進上被仰付候、其身ニ付

家筋ニ付而御礼等申上候節、進上馬代銀員數之儀

者被定置候通進上可有之候、此旨表方へ致通達、

御側方・御勝手方へも相達候、以上、

元文三年  
正月

（島津久純）  
大藏

一上々様御祝物御取替江戸之儀ハ文金ニ而候得共、御

当地之儀文金御取替しニ被進事茂有之、古金之節茂

有之、拝領物・進上物之儀茂右之通ニ而爰元者未相

並候間、御取替ニ拝領物・進上物之儀も都而文金銀

ニ被仰付候、

右之通、御使番其外可承座々江可申渡候、以上、

元文三年  
十二月

大蔵

一 総州様御方江江戸・御国元共参上、進上物之次第先  
頃被 仰出候得共、此節又々左之通被 仰出候事、

一 兵庫殿・周防殿・玄蕃殿・御城代・御家老・若御年  
寄・大御目付者何ぞ之御祝儀等 太守様御方江申上  
候節者可致参上候、進上物等無用候、

一 右之外分ケ而被遊御差図候者可致参上、進上物之  
儀者参上御免之内ニも分ケ而致進上物茂候様ニと被  
仰付候者計可致候、

一 御隠居御方之者者、表方之儀輕キ事ニ而も人々願候  
事 御隠居御方之御家老・若御年寄不得差図 御家  
督御方之御役人江申事堅固仕間敷候、尤、御家督御  
方之勤之者より願候事有之候得者、御用人・御近習  
役之外者何事も致取次間敷候、内々ニ而申事噂候様  
ニ御家老杯江申事一切致間敷候、御用人・御近習役  
ニ而も 御隠居御方江申上候事者格別 御家督御方  
江係事申者有之候共請付間敷候、

一 地頭有物等差上候儀一切御請被成間敷候、

一 御隠居御方之勤之御家老を初諸御役人江諸進物折目  
之書通勿論、見廻等之儀 御隠居御方江窺御機嫌参  
上御免之御役人并面々・無扱親類之外者音物書通折  
目之見廻一切仕間敷候、

右之通堅可相守旨被 仰出候由江戸より申来候、

此段与中并支配中江不洩様可致通達候、

享保七寅  
三月

(島津久貴)  
内記

写

一 歳暮・年頭・八朔并元服 御目見、御役之御礼ニ付  
而進上物、又者寺社より進上物、其外何ぞニ付進上  
物差上、右代銀御納戸江相納事候処ニ及延引、上納  
之儀御納戸より相触候而漸代即相納候(録之)も有之由候、  
向後者進上物差上候当日右代銀相納候様、御側方・  
御勝手方・表方江早晚之通可致通達候、

八月

空

写

一 御家老其外江戸詰上下之節、土産物不致様ニ已前より被仰渡儀候得共、弥右之趣可相守候、進上物近年者御当地ニも 御女中様被成御座候故、致進上物御方多罷成候、御側廻迄茂御役人之並ニいたし候事無用候、分而人ニより進上物可致事ニ候、御女中様方江致進上候者其身より儀御方御用人・御近習役江可相尋候、以後者其格ニ可相心得候、総州様江右之面々其外外様之者ニも故有之進上物致来候も有之候、此内よりも尚数少キ品輕キ物進上可致候、御女中様方より上下之節拝領物被下物右之通ニ候故、御役一通ニ而ハ被下間敷候、

一 右通儀御方御用人・御近習役江相尋候儀ハ、御当地罷在候節ニ而も又者江戸・京・大坂より尋越ニ而も可致候、

右之通被仰付候条、表方・御勝手方御用人已上之御役々并御側廻之御役人江致通達、且亦御女中様方へ兼而進上物仕来候人も有之候ハ、是又致通達、別紙名書之人江茂可申聞候、

八月

右平太

一 御膳進上、其外何そニ付御祝物進上、且又御法事ニ付御香奠諸士より献納之節、小普請之人迄も相加由候得共、向後小普請之人者可相除候、差杉・弓場普請類之進上物ニ不相係儀者有来通可相加候、

右之通可承座々江茂不洩様可申渡候、

十二月

内膳

一年頭 御在府之節、御家老并家格ニ付御太刀進上之面々又者地頭持之儀、江戸詰合之人者持參太刀被仰付、御国許大御目付以上且家格ニ付御太刀進上之面々者於江戸名代を以納太刀被仰付来候、御在国之年頭江戸詰之内御太刀進上致来候面々者

御參府之節御太刀進上仕候様ニ被仰渡置候得共、向後御留主詰之面々 御在国之年頭於御国元名代を以納太刀被仰付候、且又年頭不在合人何方ニ而も着之節納太刀願出候様申渡有之候得共、御在府・御在国共二年頭被遊御座候方ニ而、是又名代を以納太刀被仰付候、

右之通被仰付候条、此旨不洩様可致通達候、以上、

明和三五  
正月

(小松清香)  
式部

上使御巡見并御目付様御越之事

一芍薬之間

右、太郎左衛門殿詰所

一歎冬間(歌力)当分御番頭詰所

右、上使方御用人座

一菊之間

右、御番頭詰所

一柳之間当分小番所

右、六与筆者座

一虎間

右、小番所

一高奉行所下当分六与筆者座

右、上使方会所

一進物藏北御門脇

右、繰越役人座

右八、先年 上使御巡見二付御用係之御役座右之通  
被召立候、此節

上使御巡見二付、御用係之御役座先例之通可被召立  
哉奉得御差戻候、以上、

正月十二日

木村四郎左衛門

大野清右衛門

一又三郎殿就幼年、今度從

公義御目付被差越候間、連々申付置候通国中之者共  
猶以不亂風俗万端可相嗜之、委細之儀ハ家老共可申  
渡之条、堅固可相守之者也、

子四月

条々

一今度 隅州様 仰出之趣謹而可相守之、從 公義御

目付様被差越候付而者專御国之御仕置万端御見聞有  
之筈候条、兼而被

仰出置候御条目之趣無忘却可相守候事、

一御目付様御方江被懸置候面々、末々迄も鹿抹之体無

之、慇懃可相交候、御領内并鹿兒島中茂時々御巡見  
有之筈候条、途中二而參逢候節者別而慇懃つくはい  
可罷通候事、

典膳  
縫殿

但、御目付様御家来用事二付而者徘徊候条、行当  
等無之様可氣付事、

一喧嘩口論堅令停止候、往来之於小路無謂高雜談惣而  
無作法之体無之様可相嗜事、

一若キ面々夜行・辻立停止之旨兼而申渡置候、惣而無<sup>(不力)</sup>  
行跡無之様親兄弟・親類中より猶又稠敷可申付候事、

一対御役々式対庵抹無之筈候得共、礼儀正敷可有式対  
候、足輕・人家来等者就中其涯相見得候様可申付候  
事、

但、荷付馬并荷を持候者共猥小路不行通、往還障

二不相成様可罷通候事、

一火用心專可入念候事、

右条々堅可相守之、若違背之族於有之者可及沙汰

者也、

子四月

図書

主殿

一今度 上使御領内江御巡行之節、御通先ニ參掛候ハ、  
慇懃二つくばひ居、就中末々之者猶以恐入つくはい  
居可申候、且亦無用事者御宿近辺猥致徘徊間敷候、  
一御止宿近辺并御通筋ニ而高雜談・遊興ケ間敷儀・喧  
嘩口論令停止候、御通筋之諸所馬鹿之者、胡乱成者・  
行脚体之者徘徊為致間敷候、

一御通筋長屋并町并二階窓戸可鎖置候、

一上使鹿兒島江被成御座候内自然出火有之候ハ、相  
図并駈付之儀者有来通いたし、騒敷無之様可相心得  
候、外城之儀茂可為同断候、

一御泊御休之所江者多人数相集候儀候間、上使御荷物

二不限聊爾無之様随分可氣付候、万一輕敷者於有之  
者不事立様可相計候、火用心之儀ニ付而者兼而申渡  
置趣も有之候得共、猶以可入念候、

一於御当地御宿近キ出火二者、御退場南林寺脇寺江被  
定置候条、依火筋御道筋可相替候得共、客屋江被成

御座候御方ハ島津大学前小路地藏堂前通、町御宿之御方者中町呉服町筋御通可被成候間、御通筋江横目・足輕出置、御備并御荷物等不行当様可致候、外城之儀者辻々二役々差置可為致下知候、

右之通可被申渡旨表方江致通達、御側方・御勝手方江者写を以相達、御通筋地頭・領主江茂可申渡候、

五月 太郎右衛門

一先月廿二日御用番本田伯耆守様(本多伯耆守カ、正珍)より、(重要)太守様御若年二付、御国許江為御目付京極兵部様・青山七右衛門様被遣候間、可被得其意旨被仰渡候、此段承知仕候様御側方・御隠居御方・表方・御勝手方御役人限可致通達候、

十月 相馬

一芍薬間縁類、屏風構二而上之方御用人座、次之方御用係御役々詰所

一樋之間、御用係之御役々・筆者詰所

右者、御目付衆被差越候付、御用係御座芍薬之間縁類江被相立候付、今日八星より台子之間二而星合可致候条、此段致通達候、以上、

十二月廿三日 御近習役

与頭

一御目付衆御兩人被為越候付、御用係御役々被仰付しらへ方被仰付候条、随分精を出無滞可相勉候、右二付而者諸座江相糺儀有之筈候間、御用係之面々問合次第無遅滞可申出候、

右之通、御用係之御役々并諸御役々二茂可申渡候、  
十二月 縫殿

写

一御城下者不及申、御領内火事并喧嘩等有之候者可申上旨、御目付様御列座二而被仰渡候間、喧嘩口論・火用心等之儀者兼而被仰渡置趣有之、今度御目付様被為越候付而者猶又 隅州様仰出之旨趣先達而御弘有之通二候、喧嘩之次第御目付衆被聞召届筈候処、

無謂儀共より事起り及暄嘩候而者御外聞別而如何候、畢竟夜行・辻立徒致徘徊所より及口論ニ茂候条、若者共至末々右之旨を存、御滞國中ハ就中万端可相慎候、鹿兒島中之儀者御旅宿近辺辻歌堅令停止候、此段親兄弟・親類より稠敷申付、火用心之儀專可入念候、

右之趣、与中者と頭宅江人体召寄、支配下ニハ其頭人より屹申渡、諸外城江者地頭・領主より可被申渡候、此旨早々表方江致通達、御側方・御隱居御方・御勝手方江者写を以可相達候、

五月

縫殿

一兩御目付様より御城下者不及申、御領内火事并喧嘩等有之候ハ、可申出旨被仰渡候、喧嘩等之儀者時々及披露ニ候得共、一ヶ所火事之儀者地頭・領主方ニ而被承置由候間、御滞在中之儀者壹ヶ所火事ニ而茂時々可被申出候、

右之通、地頭・領主・月番御用人江可申渡候、

五月

縫殿

右之通被仰渡候間、喧嘩披露之儀者支配頭江申出、同案を以御目付様御用係方江茂申出答候、地頭所・私領壹ヶ所火事披露之儀も地頭・領主承、御用係方江申出答由左源太より致承知候間、此段致通達候、以上、

五月

一御目付様御滞在中、鹿兒島中遊興ケ間敷儀も辻歌一切停止申付候条、随分可相嗜候、若相背者茂候ハ、屹可及沙汰候、右ニ付而者御目付・横目江茂申渡置趣有之候条、此旨を堅可相守候、

右之通、表方江致通達、与中者早々分を以小与頭宅江人別召寄屹可申渡候、其外支配有之面々江者支配頭宅江召寄不洩様可申渡候、此旨御側方・御隱居御方・御勝手方江者写を以可相達候、

但、家来・下人等江者主人より稠敷可申付候、

五月廿七日

縫殿

写

一

寺社奉行

御勘定奉行

与頭

御番頭

右者、兩御目付様江節句日又者何そ二付重立候御祝儀事者勿論、朔望・廿八日御祝儀參上可有之候、

但、今日より參上可有之候当番并御用有之面々者其段係之御用人江首尾可被申出候、右之通可申渡候、

五月廿八日

縫殿

大身分

寺社奉行より御番頭迄之

御役々

右者、御目付衆御帰府之御奉書御到来二付、明十一日四ツ時御旅宿江參上御祝儀可被申上候、御一門・大身分之内病氣又者幼少之人者以使者御祝儀可被申上候、尤、被係置候面々も同断御祝儀可申上候、

但、支度麻上下、

右如例可相達候、

十月十日

縫殿

一御目付様御方江与頭・御番頭罷出候節、供廻羽織着

用二不及、平日之通二而可召列候、尤、引添等為牽

候二不及候、乗用之馬者不苦候旨名越左源太御取次二而承知致通達候事、

六月朔日

一御使番

青山(成存)七右衛門様

秋田(季通)大和守様与

花房(正路)兵右衛門様

巨勢(至忠)日向守様与

神保(忠能)帶刀様

右之通、御巡見 上使被差越咎候間、可承面々江可

申渡候、

八月

典膳

右之通被仰渡候間致通達候、以上、

御一門

写

一

八月十三日

取次

堀堀右衛門

一今度御巡見為 上使、青山七右衛門様・神保帶刀様・

花房兵右衛門様御領内御巡行之筈候条、參掛候人者  
懇懃二式対可罷通候、就中末々之者猶又恐入躊躇可  
申候、

一喧嘩口論御禁止之段者兼而被仰渡置事候得共、猶以  
堅可相守候、無用之者徘徊并高雜談・辻歌惣而遊興  
ケ間敷儀令停止候、勿論馬鹿者・胡乱成者・行脚体  
之者共曾而徘徊為致間敷候、

一御通路之節、長屋并町并二階戸可鎖置候、御宿近辺  
町中家職二付音高儀御止宿中可相止候、店棚売物等  
出置致商売候儀ハ可為平日之通候、右二付而者先達  
而申渡置候通可相心得候、

一御宿休之所々江者多人数相集儀候間、上使御荷物不  
限塵抹之儀共無之様随分可氣付候、万一怪敷者於有  
之者不事立様可取計候、尤、火用心猶以可入念候、  
一上使鹿兒島御止宿之節、自然出火有之候ハ、相図并  
駈付候儀者致有来通、騒敷無之様可相心得候、御宿

近出火二候ハ、南林寺塔司・大乘院坊中江御退場定

置候条、依火筋右之内相廻可被成候間、御通筋辻々

江横目・足輕出置、御備并御荷物等

〔薩摩藩法令史料集より補〕

▽行当無之様可

致候△諸所之儀も右準役々罷出可致差引候、

右之通可被申渡旨表方江致通達、御側方・御下屋

敷御方・御勝手方江者写を以相達、御通筋之地頭・

領主江も如何可申渡候、

五月

隼人

典膳

一流鏑馬射手并頭殿之儀二付被仰渡候事

一流鏑馬射手被仰付候面々、近年物入多有之候段相聞  
得候二付、已来亦者当年より先キ五ヶ年減方左之通  
被仰付候、

一乘馬并馬道具等自分難相調人者、御馬・口取人足・  
馬道具迄御借物可被相渡候、尤、従前々御借物之品  
者有来通可被仰付候、

一 射手稽古中用事相頼御馬乗り兩人宛、馬医壱人ツ、見合を以可申渡候、従已前礼物等遣由候得共、此節より不及其儀候、

一 見合を以申渡候外御馬乗・馬医稽古場射手屋江罷越間敷候、且又於稽古場致世話候面々江者つくねめし類を軽く相調可出候、右場所江見物迄差越候儀可為無用候、

一 以前より一七日射手屋江籠来候得共、当年より五ヶ年之内者不及其儀居別火二而罷在、流鏑馬前日より可相籠候、

一 上馬之人江者已前より御物調之射手屋相渡、射手迄之人者大乘院門前之内江相对二而致借宅由候得共、当年より五ヶ年之内者御物調之射手屋江兩人壹所二可相籠候、

一 射手屋江見舞候面々、馳走ケ間敷儀無用之段者従前々申渡置趣も候条、猶又堅相守、酒杯取はやし候儀且亦互二付届一切可為無用候、

一 あやひ笠并矢、其身自分調之品見分を存結構二相調間敷候、

一 供廻之儀、当年より五ヶ年之内ハ若党両三人・中間式人、手籠・挟箱者勝手次第可為持候、尤、依人体供廻増減可有之候、

一 流鏑馬相添候以後伝授之人江遣候品、当年より五ヶ年之内馬代式拾疋・太刀代拾疋たるべく候、

一 流鏑馬勤相添候為祝儀見廻候面々江者、祝迄二吸物・酒一通出候儀者勝手次第第二候、屹致饗応酒など取はやし候儀可為無用候、

右之通致通達、御側方・御勝手方江者写を以可相達候、

三月

主計

一 諏方神事二付頭殿被仰付候付而者、取仕立料其外御渡方二而已前二者相仕廻由候処、近年及不勝手候旨相聞得候、神事之儀候得共旧式者不欠様いたし、見廻之人江馳走ケ間敷儀不致、遊相手之子とも多人数不相集、供廻分限より軽質朴可致候、当年より五ヶ年之内者猶以結構ケ間敷儀無之様相心得、兼而頭奉行江申渡置趣候条、諸事頭奉行江申談、無益之費不

致御渡方を以可相添候、

右之通、頭殿被仰付候時々申渡管候、此段兼而致承  
知候様表方江致通達、御側方・御勝手方江者写を以  
可相達候、

三月

主計

一 稲荷神事ニ付流鏑馬射手等被仰付候面々、当年より  
一 往御心付銀被仰付、別紙を以申渡候条、御厩方牛  
馬口銭年々納銀之内より相渡候様被仰付候間、納方  
無之内者御物方より取替を以可相渡候、其外支度料  
等之儀者先規之通ニ候、此旨御馬方并可承面々江茂  
可申渡候、

六月

式部

一 稲荷御祭礼ニ付流鏑馬被仰付候人、支度料并一往御  
心付御借物等左之通、  
一 銀七枚式拾壹匁  
一 同式拾式匁 上下壹具代  
右、御規模

外

一 銀式拾五枚 御心付  
一 御借馬式疋  
一 口付人足飯料迄  
一 馬道具并杵籠類御借物

右、高九拾九石余以下家督・部屋栖共二、

一 同七枚式拾壹匁

一 同式拾式匁 上下壹具代

右同断、

外

一 銀拾五枚

右同断、

一 御借馬二疋

一 口付人足飯料迄

一 馬道具并杵籠類御借物

右、高百九拾九石余以下迄前条同断、

一 同三枚三拾式匁

右同断、

外二

一 銀拾三枚

右同斷、

一 御借馬壹疋

一口付人足

一 馬道具御借物

右、高式百九拾九石余以下式百石迄、

一同三枚三拾式匁

一同八拾五匁

右同斷、

熨斗目壹ツ代

但、父依勤方熨斗目代被下儀御規模之通、

外

一 銀拾三枚

右同斷、

一 御借馬壹疋

一口付人足

一 馬道具御借物

右、高式百九拾九石余以下式百石迄之嫡子、

一小番之人持高三百石以上之家督且亦五百斛已上者、

部屋栖二而茂被下方二不及、

一 銀拾五枚

右、一所持より寄合並迄高九百九拾九石以下、

一同式拾枚

右、面々同斷之持高有之嫡子、

一同式拾五枚

右、前条同斷二男三男、亦者二弟三弟、

一一所持以下寄合並迄持高千石以上者、家督・部屋栖

二被下方二不及、乍然親兄毎日之勤方有之家内之人

江者、其節之時宜銀拾五枚可被下候、

一支度料射手之半分

一 御借馬二疋

一口付人足

一 馬道具御借物

右、乳人役之儀者、射手より者取立も輕く、差而物

入茂無之筈候間、其人応持高射手之半分可被下候、

一 銀拾五枚

但、支度并諸雜料、

一 御借馬二疋

一 馬道具御借物

一口付人足

一 供廻其外方入用之人足飯米等迄

一 弓箠類定式御借物之儀ハ勿論、其外諸入用之品都而

御借物

右、御馬乘之内不時二流鏑馬射手被仰付候節、右之通可被相渡候、御借物等之品々去未年御馬乘伊東仙兵衛江射手被仰付候節之通可被相渡候、且又御馬乘之内より乳人役被仰付候節者、御借馬之儀者射手同一前支度料・諸雜料者右射手之半分被下、其外御借物・

人足等之儀者応用分可被相渡候、

右者、流鏑馬射手等被仰付候面々及物入致迷惑由候、支度料之儀者已前より被定置候御規模之通被相渡、右外書之通当年より一往御心付銀并御借物之儀者御馬方江申出候上、口付人足御厩定渡之内より相付時々可相渡候、且亦御馬乘之内より射手并乳人役被仰付候節者、口付人足外諸入用之人足ハ御春屋より可相渡候、此旨可承面々江可申渡候、

六月

式部

一 例年十一月稻荷神事ニ付流鏑馬上馬并射手之儀、持

高相応之人江被仰付事候得共、馬相求馬道具調方ニ

付物入有之及迷惑之由候、依之当年より流鏑馬動被

仰付候人依持高員數御借馬・馬道具等御借物ニ而、

口付人足迄茂被相渡、且又支度料御規模之外一往御

心付銀被仰付候旨先達而申渡置候得共、当年迄右之

通被仰付候、此旨如何可申渡候、

十月廿七日

式部

一流鏑馬射手近年別而差支、与頭方ニ而相調申出被仰

付候人ニ茂身弱訊共ニ而御断申出候人多有之、乍病

身如何ニ候、依之向後射手人柄調之節持高ハ勿論、

年生且亦強弱有之訊迄茂承合申出候様ニと式部殿よ

り島津登御取次を以、口達ニ而島津助之丞致承知候

事、

七月十三日

犬之儀ニ付被仰渡候事

一先年以来大疵付候儀二付而者段々被仰渡置趣有之候間、弥其旨可相守候、若人喰候歎敷ニ罷成犬於有之者、支配々江相付其段申出候様可仕候、

右之段、人々為心得寄々可致通達候、以上、

三月

左京

一御預之御犬間々相失候儀有之候、自然田舎之者共牽掃又者聊爾等いたし候而者如何候間、右体之儀無之様地頭所・私領并明所之外城江可申渡旨可相達候、以上、

申閏七月

右平太

一御手飼之犬此跡御門外杯江出入不致様有之候得共、向後御門外杯江茂出入致候而茂不苦筈候、左候而、右御犬札江御之字迄を被記置候間、何方ニ而茂諸人江相障候儀有之候ハ、則御目付江可申出候、何れ茂左様相心得、御番人中江可申渡旨御目付家村奎太郎より肝付彈正致承知、右之趣則日小番・大番小頭江申渡候事、

一頃日札不相掛犬犬相見得候間、御預犬飼置又者無主犬ニ而在付居候も有之候ハ、御目付方江無延引首尾申出候様支配中江可被申渡旨可致通達候、

三月

河野八郎左衛門

一御手飼犬并御預犬頃日疵付候儀有之不可然事候、右二付而者兼而被仰渡置趣有之、屹被仰渡儀ニ而者無之候得共、猶又右体之儀無之様支配中江被申聞置、尤、病犬と相見得喰掛折角相凌候而茂不及手、無是悲切付候儀者其通ニ而茂可有之事候、右体之節者其訳支配江相付可申出候、此旨不洩様寄々可被申聞置、以上、

八月

河野八郎左衛門

越前家・和泉家相統ニ付被仰渡候事

写

一御元祖之御二男周防守忠綱家中絶候故、右家壮之助

(忠久)

(忠紀)

殿江相統被仰付高一万石被下、居屋敷者御用屋敷を被下候、

一家格連名者島津善次郎殿上ニ被仰付候、

一当分之座席 玄蕃殿・壮之助殿・善次郎殿と被仰付候、

一紋所十文字被用筥候、

一名字島津と被名乗筥候、

一右屋敷江被引移候而より家格之通諸事被致筥候、今程者先此内之通之筥候、

右之通被仰付候間、御役人限承知仕候様可致通達候、以上、

三月

主殿

右之通致通達候、以上、

三月十九日

本田信次郎

写

一壮之助殿屋敷江御引越無之内者只今之通ニ而触流等茂無之筥候得共、人別末々迄承候程之儀、又者宗門改等之儀、其外若壮之助殿家来江被仰渡候旨茂有之

節者、郷田安左衛門承候様被仰付候間、向後其通相心得、右体之儀者安左衛門江相触可申候、

嫡子 別府源之助

別府仙左衛門

嫡子 中村助左衛門

中村助五郎

嫡子 肥後運右衛門

肥後正兵衛

一右三人之嫡子者家督被仰付、親共本家を離壯之助殿家来被仰付、二男三男有之者願次第壯之助殿家来被仰付筥候、嫡子之外子共無之者ハ以後致養子壯之助殿家来仕、首尾能相勤候者ハ代々御目見被仰付、御城下士縁与仕候儀者被成御免筥候、

一右三人壮之助殿屋敷へ被引越候節者勤方可相替候、

其内御下屋敷へ罷出壯之助殿方相勤筥候、御下屋

敷へ相勤候内奥大番同前何事も相勤筥候、以後ハ壯

之助殿より知行をも可被下候、当分ハ切米七拾五表

被下置候、名之次第も右之通ニ而、只今之通嫡子罷

居候屋敷へ罷在相勤筥候、右之通於磯御方被仰付候

間、表方御役人限致通達、御側方・御勝手方へハ写を以可相達候、

三月

主殿

一 郷田安左衛門

右者、壯之助殿方諸事之儀、鼓川御屋敷都而之差引、此内平田平六江被仰付置候処、向後右安左衛門江被仰付候間、問合次第諸事相弁候様諸座江可申渡置旨、隼人殿御差図之由鎌田平右衛門より申越候間、如例可申渡旨主殿御差図ニ而候、以上、

五月十一日

木脇賀左衛門

右之通被仰渡候間、可被承置旨致御差図申候、以上、  
五月十一日 本田信次郎

写

一 <sup>(忠郷)</sup>三次郎殿事、和泉家名跡

総州様御三男ニ被立、島津之称号拝領、御一門之列被仰付、家格之儀者

玄蕃殿・周防殿・三次郎殿・兵庫殿之筈候、

一 儀付御高壹万六千石拝領被成筈候、

一一 所之地拝領被成筈候、

一 紋所之儀十文字・桐之丸被付候、

右之通被仰付候間、御役人限承知仕候様致通達、

御側方・御勝手方江者写を以可相達候、

五月

大藏

一 島津壯之助殿

右、越前家相統被仰付候節、一所之地可被下旨 <sup>(被脱力)</sup> 仰出候付、去ル廿七日帖之内・薩州吉田之内被下候旨被仰出候、此旨可致通達候、以上、

八月廿九日

主計

右之通被仰渡候条、支配中江可被申渡旨御差図ニ而候、以上、

八月廿九日

鎌田源左衛門

<sup>(壯之助殿事)</sup>

島津周防殿

一 右者、今月二日元服被仰付、右之通名被相改候条、此旨御役人限可通達候、

三月

左京

右之通被仰渡候間致通達候、以上、

三月十四日

義岡左平太

写

鳥津周防殿留守居

市来万左衛門

右者、此間抱守より御用致承知来候得共、右之留守居被仰付候、

御城方御役座御用筋玄蕃殿・兵庫殿留守居同前被仰付候間、其通相心得候様、可承座々江不洩様可申渡候、

八月

織部

写

一 島津三次郎殿

右、和泉家相統被仰付候節、一所之地可被下旨被

仰出置候間、昨廿一日頼娃・指宿之内被下之、所之

名今和泉卜可唱旨於礖御直二被 仰出候、

右之通、表方江致通達、御側方・御勝手方江者写を

以可相達候、

十二月廿二日

左衛門

右之通被仰渡候間、与中・諸外城支配有之面々者支

配下江可被申渡旨御差図にて候、以上、

十二月廿二日

有川幸右衛門

写

一重富之儀、只今迄者廻文并宿次等二不書載候得共、

向後帖佐之次二可書載候、帖佐役々より重富茂承知

致印形何角受答致答二周防殿方より被頼置候間、此

旨御側方・御勝手方江相達、可承座々江も被承置候

様可申渡候、

四月

左衛門

右之通被仰付候条、此旨致通達候、

四月廿九日

戸田伝五郎

写

(忠温)  
小松安之助殿

右者、於 御下屋敷御直島津(忠郷)因幡殿後嗣被仰付、今

和泉家相統被仰付候、

右之通今日被仰付候条、表方御役人限致通達、御隠居御方・御側方・御勝手方江者写を以可相達候、

二月廿一日

主殿

支度并供廻之事

一江戸詰之御家老、与力三人

一江戸詰之若御年寄・大御目付、与力兩人宛

一江戸詰之御番頭・御用人、与力一人宛

一江戸・京・大坂御留主居、与力・足輕一人宛

但、京都・大坂之御留主居与力者士二而候得共足

輕二被仰付候間、於京・大坂二欠落者捕者有之節

者、京・大坂詰之足輕右与力茂可相加候、

一御納戸奉行・物頭江戸詰之与力不被仰付候、

一十人御賦之人御刀番被仰付候節者足輕一人、此外合

羽籠持・挟箱持被下候、六人御賦之人被 仰付候節

者足輕兩人、此外挟箱持・合羽籠持人足可被下候、

右被召付足輕・与力ト申者二而無之候間時々被召付筈候、道中之儀者不被仰付候、

一公義より被仰渡候通、頃日二茂被仰渡候儀有之候二

付而道中人多無之様被成事候、近年者相替候得共当

年より若御年寄・大目付者道中鍵四本、御番頭者先

例之通道中鍵三本、御用人者鍵式本二被仰付候、

一江戸御供帳御近習之筆者此内之通之所二書、御徒目

付者若御年寄（之腕力）与力之次二書可申候、左候而、片書者

何某支配之何某と書可申候、其次御用人与力書可申

候、

一御近習役江不相付御徒目付者、御近習役支配之御徒

目付と可申候、御近習役江一人宛相付候御徒目付之

儀者、右之通何某支配之何某と可申候、

一諸御奉公被仰付候砌、前以其者之しらへ此間者大御

目付・御近習役江相しらへ候得共、向後者大御目付

計之しらへ二而御近習役しらへ二不及候、

右之通不洩様可致通達旨内膳殿御差函ニて候、以上、

四月朔日

伊地知越石衛門

一与力被召付者之外支配下之者是与力と者不唱、与力

之様ニ召仕、他所江参候節杯召列候儀共有之由相聞

得候、不被召付格之者右体之仕形不宜候間、向後他

所又者御当地ニ而茂左様ニ無之様可相心得候、

右之通不洩様可致通達候、以上、

四月廿六日

一御家中之面々頃日別而難続之由、於旅召置候家来共

も応御賦召置事候得共、向後者心次第勝手宜様可相

減候、致外勤候砌、同役同格之供廻を兼同格ニ不召

列候得者不成合之様存、並候様召列候儀者不入事候、

其人々心次第可召列候、尤、相応ニ不召置候而難成

ものハ、其人々之勝手次第第二候、左様成者迄茂強而

減少被仰付儀ニ而者無之候、

右不洩様惣通達可致候、以上、

但、私領江申渡不及候、

二月

奎

右之通被仰渡候間、地頭并支配有之面々ハ支配中江

不洩様可申渡旨御差図ニ而候、以上、

二月十八日

穎娃長左衛門

一壹万石以上之人并寄合以上其外之面々、年頭又者屹

立候折目供廻り多過候、依之来年頭を初、自今屹立

候折目ニ而も若党召列候儀左之通被相定候、

一壹万石已上先供・馬廻り、都合拾人

一壹万石以下之大身分・大御目付以上之御役人、右同

七人

一独礼之格并大身分之嫡子、右同五六人

一与頭・御番頭以上之御役人、右同四人、先供無用

一御用人以下平日鑓為持候御役人、右同三人或式人

一平日鑓不為持者御役人ニ而茂、右同式人或壹人

一大身分其外者一所持・寄合・寄合並にて無役之者者

千石已下者右同式人或者壹人、千石以上之者三人迄

者不告候、

右之通被相定候、当時之儀者

公義よりも供廻り等之儀惣而御減少之時節候間、此

旨を存、右供定之上若党相重召列候事堅無用候、勿

論右供定之人数より減候而召列候儀者勝手次第候、

御役人之内与力有之者右若党之外二可召列候、

尤、兼而被仰渡置候通年頭之外家来江上下着せ供二

召列候事無用可仕候、此旨不洩様可致通達候、以上、

十二月

藏人

一御関狩二付惣奉行供廻

一大御目付兼而御定之通若党七人

一与頭之内より惣奉行被相勉候節茂御定之通若党四人

但、独礼之人も御定之通、

一馬印壹本

一手鍬壹本

一鉄炮壹挺

一挟箱环持せ候儀心次第

右同与頭供廻り

一兼而御定之通若党四人

但、独礼之人も御定之通、

一馬印壹本

一手鍬壹本

一鉄炮壹挺

一挟箱环為持候儀心次第

一御用以下平日鍬為持候御役人又者平日鍬不為持御役

人其外者先頃被相究置候通若党人数召列可申候、

右之通、向後相心得候様可申渡候、以上、

二月

(伊集院久矩)  
藏人

右之通、御関狩二付与頭供廻之儀、島津小平太よ

り左近允与太夫御取次二而被相伺候候、右之通、

同人御取次を以享保十年巳二月二日被仰渡候事、

一先頃供廻り仲間小者大小差候儀二付而被仰渡置候、

乍此上今日大御目付樺山主計殿より御目付若松次右

衛門を以被仰渡候者、向後一日歸り之所江参候節者

大小為差間敷旨被仰渡候付、島津小平太致承知、中

間中致通達候事、

二月七日

一手鍬壹本 一乘馬壹疋

一中間式人 一供士先供四人  
馬廻式人

一草履取壹人 一雨具壹荷

一 挾箱沓ツ 一 沓籠沓ツ

右者、諸所御馬追ニ付、与頭・御番頭手廻り、此節より御国賦ニ被仰付候、右ニ付而手廻り右通被相定候間、左様被相心得候様可申渡候、

但、出水瀬崎御馬追ニ付被差越候手廻りも右同断

可被相心得候、

四月

久馬

右之通、子四月八日讀良善助御取次ニ而被仰渡、

島津小平太致承知候事、

一手鑓沓本 一 乘馬沓疋

一 中間忝人 一 供之十四人

一 草履取沓人

一 雨具沓荷

一 挾箱沓ツ

一 沓籠沓ツ

但、吉野御馬追惣奉行ニ罷登候節者、右之外ニ馬

印沓本相重為持申候、弓台之儀者持せ候人も有之、

為持不申人も有之候、

右、諸所御馬追ニ付罷越候供、右之通召列候様被

仰渡置候、以上、

正月廿一日

月番  
与頭

一 若党沓人

但、両三人程も召列候者も有之候、

一 草履取沓人

一 挾箱持沓人

一 手道具持沓人

一 乘馬月分

一 中間沓人

但、兩人召列候者も有之候、

一 弁当持沓人

一 沓籠持沓人

一 合羽籠持沓人

但、右式行者不為持者も有之候、

右者、小番人吉野其外諸所御馬追串目下知罷登候供

廻り、太体如斯御座候、以上、

但、於吉野金差相勉候人も串目下知之内より兼役

相勉候、

正月十九日

月番  
与頭

福山御馬追之節

与頭・御番頭之内惣奉行相勉候節者、持せ道具并供  
廻り之事、

一 供廻御定之通若党四人、独礼之人も御定之通、

一 馬印壹本

一 手鐮壹本

一 弓台壹肩

一 乗馬壹疋

一 挟箱杯為持候儀者、心次第、

以上、

三月

写

諸所御馬追之節、串目下知之小番人吉野御馬追二者  
挟箱致無用、外城江ハ挟箱壹ツ持せ候儀、心次第可致  
候、

右之通被申渡候様与頭江可申渡候、以上、

五月

主計

一年頭御役人限十五日迄者麻上下致着用来候得共、年

頭七日迄且又十一日・十五日者有来候通、鬨斗目・麻

上下致着、其外ハ平服可致着候、屹申渡儀二而者無

之候、表方御役人限寄々致通達、御側方・御勝手方

江者写を以可致通達候、以上、

十二月

主殿

右之通、西彦太郎取次二而被仰渡、喜入主膳致承

知中間江致通達候事、

写

一 御当地二而者万石以上乗物御免被成候、玄蕃殿・壮

之助殿・兵庫殿家格ハ部屋栖迄も御免被成、其外者

家督計年生之無構御免被成候、万石以下大身分・大

御目付以上者五拾歳罷成候ハ、乗物御免被成候、大

御目付以下之御役相勉居候而も万石以上者年生二無

構被成御免候、且亦大御目付二而も五拾歳以上二罷

(以下脱力)

成、於江戸乗物御願被下程之者ハ、御当地ニ而も願  
出次第可被成御免候、尤、於江戸被成御免置候者御  
当地ニ而猶以被成御免候、

右之通被仰付候間、承知可仕面々江不洩様可申渡  
候、以上、

但、大御目付以上之御役人江者申渡不及候、

十二月

大藏

右之通可申渡旨御差図ニ而候、以上、

十二月廿六日

戸田平次

一

御近習役

右者、七夕・八朔ニ此跡者白帷子不致着、御用人以  
上之御役者致着候様ニ被仰付置候得共、御近習役之  
儀御用人差支候節者御用人勤場を差寄相勤事候故、  
自今江戸・御国元衆共七夕・八朔ニ白帷子致着候様  
ニ被仰付候、尤、御近習並之儀者着用不及候、  
右之通、御近習役江御側方より被仰渡候間、各方  
江茂致通達置候様ニと大藏殿被仰候、以上、

二月十日

右之通、申二月十日種子島織部殿より御書付を以直  
ニ被仰渡、川上縫殿致承知候事、

写

一自分用頼之人、何ぞニ付而 御城江罷出候節、節句  
日之外月次御礼日ニ而茂向後肩絹着用致間敷候、御  
番之節者着可仕候、且又御馬廻・新御番之人着用頼  
仕候儀も有之節者肩衣着用不苦候、此旨与中江可有  
通達旨、御家老与・六与組頭江可致通達旨將監殿御  
差図ニ而候、以上、

四月

一御名代被相勉候面々、正月七日より内御名代之節者、  
家来共上下着用可為致候、其外之 御名代之節者袴  
計着用候様可被申付候、  
一女中より家来使を以御祝儀申上候節者、跡々之通上  
下着用可為致候、  
一寄合並已上之役人御用ニ付御役座江罷出候節、袴計  
着用可為致候、

一 八朔家二付而者家来を以御太刀進上之節、長上下致

着用来候得共、自今者半上下着用可為致候、

一 八朔馬進上之節、中間上下致着用来候得共、自今者上

下無用可致候、尤、馬宰領之家来相付罷出事候ハ、其者者上下可為致着候、

一 八朔諸地頭より中紙進上之節、家来上下致着候、此儀有来通上下可為着用候、

一 私領役々者諸外城役人同前誓詞申付事候、且亦私領持外之家来共諸御役座江相係、御用相勉候者も誓詞申付事候、其節者上下致着用候得共、自今者平日鑑

為持候役々之家来者致誓詞候砌上下致着用、其外之

家来者袴計着用可為致候、

一 家来共之中役人并取次番其外之者、月並礼日二肩衣

致着候所も有之候間、向後無用可致候、家来共江肩

衣着せ候儀二付而者先年段々被仰渡置趣有之候間、

其旨を堅固可相守候、

一 中間・草履取刀差せ候儀無用可仕候、先年被仰渡置

趣有之候処、何様二相心得候哉、間二者中間・草履

取刀為差候も有之由相聞得不宜候間、此旨を存、中

間何時二而も馬を牽せ候節、且亦草履取供二召列候

砌、刀差せ候儀堅無用可致候、縦足輕二馬牽せ候儀

有之由無用可致候、乍然他国又者江戸往来、御領内

二而も田舎江差越候節、中途之者刀為差於其所々中間・草履取致勉候節者脇差迄を為差可召列候、尤、

余事二召仕候節、刀為差候儀者其通可有之候、

五月十一日

御家老座印

六組  
与頭

写

年頭供廻り

一 若党六人

一 対挟箱

一 長柄

一 手鑑

一 乘馬

一 沓籠

一 合羽籠 応供数見合

但、挟箱之儀者正月三日迄対、四日より片挟箱、

家来以下之儀者七日迄、

五節句

一若党五人

一片挾箱

一長柄

一手鍵

一乘馬

一沓籠

一合羽籠 応供数見合

右者、御家老中供廻、向後右之通ニ而可相濟候、尤、

他国より使者等有之勉有之節者、相応之供廻ニ而相

勤候様ニ被仰付候間、与頭供廻之儀も右準考次第可

被致候、以上、

十月

空

大藏

右者、御家老中年頭・五節句供廻、向後右之通ニ而

被相濟之由、諏訪仲右衛門より承候間、中間中供廻

ニ付而者考ニも可罷成由承候間、此段致通達候、以

上、

十月十九日

北郷四郎

島津又七

入来院主馬殿

肝付典膳殿

島津藤次郎殿

伊勢兵部殿

島津小平太殿

島津仁十郎殿

右之外、上下与頭・番頭不殘致通達候事、

写

加世田野間祭礼ニ付

御代參被相勉候人供廻

一若党四人

一鍵沓本

一乘馬沓疋

一長柄

一挾箱沓ツ

一合羽籠沓ツ

一中間式人

一草履取沓人

右之通、諏訪仲右衛門御取次ニ而被仰渡候間、何れ

も御名代私致承知候、此節所々并御当地御代參被相

勉候人供廻之儀も右之通被相心得候様ニと承候間、

此段申達候、以上、

但、供士之儀、袴計ニ而相勤筈ニ而候、

享保十四年酉九月廿日

写

一江戸詰ニ付而御家老間之道中ニ本道具・弓台一肩相持せ、其外手廻者右ニ準召列筈候、御役々之面々ハ間之道中之節心得ニ茂可罷成候間、可承御役々江此段寄々可相達候、以上、

七月

主計

右之通被仰渡候条、寄々通達可有之候、屹被仰渡儀ニ而者無之候、以上、

七月十日

取次

木脇賀左衛門

右之通、与頭・御番頭江上下忝通ニして致通達候事、

写

一大身分諸所

御名代相勤候者挟箱忝ツ持せ若党末々供廻り少人数ニ可致候、尤、自分勤之節も右之心得ニ而可召列候、年頭格別之折目二者兼而被定置供人之内相減候儀者

勝手次第可致候、其外ニ茂 御名代相勤候者右可準候、

御名代被相勉候面々江可申渡候、以上、

四月

空

右之通、谷山角太夫御取次ニ而被仰渡候間、為御心得此段申達置候、以上、

四月十一日

新納五郎右衛門

北郷四郎

但、上下与頭・御番頭不殘連名ニ而相廻候、

写

松平伊豆守殿御渡之御書付

東海道本坂通り之儀者先年相達候之通無用ニ候、併參掛り風雨又者急病等ニ而渡海難成出来候ハ、其節者格別ニ候、尤、人馬不出筈候間、若不相廻候共手廻計ニ而相廻可申候、左候ハ、其段旅中よりも可被相届候、

右之通可被達候、

右之通、從 公義被仰渡候間、承知仕候様表方江致

通達、御側方・御勝手方江ハ写を以可相達候、以上、

正月十二日

奎

右之通被仰渡候間、与中・支配中江も不洩様可被申

渡旨御差図ニて候、以上、

正月十二日

鎌田源左衛門

一諸士衣類之儀、御供先又者

御目通ニ而茂御側廻外者木綿衣服無遠慮分限相応着

用可致旨先年被仰渡置趣有之候処、連々衣類結構成

立候而者如何敷儀候間、向後 御目通罷出諸御役人、

先年被仰渡置候通木綿衣服致着 御目通罷出候儀不

苦候条分限可致着用候、御側廻之面々茂木綿衣服

着用 御目通罷出候而も不苦候、且亦諸座筆者・小

役人之儀、準右平日匱服致着用候儀猶以不苦事候、

一衣服之儀漸々結構成来候付、去ル辰年御一門を始諸

士妻女并足輕・御小者・御中間・家中者・寺門前・

社家・町・浜之者至百姓等迄紛敷無之様随分限衣

服被定置候処ニ、到頃日衣服紛敷相見得、就中町・

浜人、百姓之妻模様之衣服を致着候者も有之、上下

之差別無之別而不可然事、弥以辰年被定置候通相守、  
家中下々、尤、支配有之面々者其頃より稠敷可申付  
候、

一親子兄弟之外餞別・土産無用可仕旨兼而被仰渡置事  
候、猶以可相守候、嫁取其外身ニ付而之祝事等ニ至  
迄別而物每致輕無益之費無之様可致候、料理菜數等  
之儀も先年被仰渡置候通弥可相守候、

右者、先年已来度々被仰渡事ニ而一旦者相用体候得

共、連々猥成行別而不宜事候、近年御勝手難被統、

到当年者至極之御差廻候故、当分迄有来候儀をも減

少被仰付、御不如意ニ而事を被濟時節候間、此儀を

大切奉存、内外用檢約御厄害ケ間敷儀不申上、往々

御奉公相勉候様心掛、勿論末々之召仕迄も右之趣得

と可申開置候、此旨相守、与中・地頭所・明所之外

城并支配有之面々者、右之趣書写不洩様可被申渡者

也、

十二月七日

御家老座印

六与  
組頭

一 諸士之妻娘、白むく着用之格式去ル辰十月段々被仰渡置、猶又衣服之儀ニ付而者去年十二月申渡置通ニ而、其外之者着用不罷成事候、万一心得違致着用者も有之候而者不可然事候条、被定置者之外者曾而着用不致様先年被定置通可相守候、

一 諸士之妻娘共之儀、へにぬい鹿子入又者地赤之衣類等着用不罷成事候、自然心得違娘共婚礼相調候節、へにぬい鹿子入亦者赤地之衣類等相調持せ候事も候而者、着用不罷成衣類調候儀別而不可然候間、右体之衣類為持候儀曾而不仕様可相心得候、

一 召仕之女衣類之儀付而も去ル辰十月申渡置趣有之候得共、向後之儀者何色ニ而も無地ニ小キ紋所相用又ハ鳥類可致着用候、白帷子ハ可為心次第候、

一 足輕・御小者・御中間・家中者・寺門前・社家・町・浜以下之男女衣類之儀も辰十月被仰渡置候、右衣服此節左之通被相定候条可得其意候、

一 足輕・御小者・御中間・家中男之儀者被定置候通ニ相心得、右之者共之妻娘者布木綿何色ニ而茂無地ニ小キ紋所を付鳥類之衣服可相調候、

一 寺門前・社家・町・浜以下之男之分ハ辰年被定置通ニ相心得、右者共妻娘者布木綿何色ニ而茂無地ニ小キ紋所を付鳥類之衣服可相調候、百姓男之儀茂辰年被仰渡候通相心得、女之儀者紋所なく、何色ニ而も無地鳥類之衣服可相調候、

付、足輕以下之女共、白帷子着用之儀可為心次第候、右之者共召仕之男女者紋所なく、何色ニ而も無地鳥類之衣服可相調候、

右、衣服之儀ニ付而者辰年段々被仰渡置趣有之、其自去年十二月申渡、此節猶又右之通被仰渡事候、早速より衣服相改候様可被仰渡候得共、其通ニ而者別而差支致迷惑者も有之筈候条、当夏之衣服より此節被相改候通之衣服可相改候、其以後之儀者外之衣類曾而着用致間敷候、夏より内ニ而も単物其外染調候衣類之儀者此節被相定候通可相調候、右之通被仰渡候儀畢竟物入之儀無之、末々迄不勝手無之様被仰付儀候間、此旨堅固可相守候、自然御定外之衣類致着用又者為致着用候儀相聞得候ハ、可及沙汰候条、聊緩無之様可相心得旨、与中并地頭所有之面々者地頭

所江茂可被申渡者也、

二月六日

御家老座印

与頭六与

衣服定

御一門を初四人賦之者迄衣服定

一日野絹 一綯 一郡内織之類

一晒地 一加賀絹 一羽二重

一紗綾 一縮緬 一絹緬

一綸子 一茶宇 一縹子

一純子(緞力)

右品、御一門を初四人賦之者迄差免之候、

一日野絹 一綯 一加賀絹

一紗綾 一郡内織之類 一晒地

右、三人賦より以下諸士江差免之候、

一赤帯 一赤裏 一紅色之袖口

一白小袖 一大島 一大形付

一ちらし付

右、衣服男子(男女共力)ハ致着候儀令停止候、

一紅染手拭 一紅染胸当

右、幼少之子共ニ而茂男女共ニ令停止候、乍然持合

候切類ニ而相調候儀者不苦候、向後態と調候儀者致

間敷候、

一紅裏之儀者隠居之老人者可為格別候、其外無御免人

致着候儀令停止候、

一布木綿之衣類大形(敬力)を付候敷、又ハ大かた并大島杯ニ

染調致着候儀不宜候間、染色等不目立様ニ可致候、

寄合並以上之妻女衣類定

一羽二重 一紗綾 一縮緬

一日野絹 一郡内織之類 一加賀絹

一綯 一晒地 一絹縮

但、ちらし・模様染者上方染ニ而勝手宜候ハ、可

相調候、物入之染一切仕間敷候、

右品、寄合並以上之妻女并

御目見ニ罷出候妻女江上着ニ差免之候、雖為寄合以

上御免之衣服内物入之衣服相調間敷候、麁相成を相

用、皆共御免之品不用候而も相濟事候間、小袖之儀

も不着候而も相濟事候、

一 白小袖 一 紙縮緬<sup>(緋力)</sup> 一 紙紗綾

右、御一門を初寄合並妻并

御三殿様江御機嫌伺 御目見被仰付候諸士之妻女江

差免之候、

一 御光儀先 御目見又者何方ニ而も与風 御目見仕候

者、且亦御奉公仕候者御暇被下候以後、御女中様方

江御目見仕候者ニ而茂

御三殿様江御機嫌窺 御目見等ニ不罷出者、御奉公

相勉候内之御免之衣服着用致間敷候、

一 拝領之衣服ニ而茂御法度之品者致着間敷候、 御三

殿様江御目見窺御機嫌等ニ罷出候者相用候儀不苦

候、御女中様方より拝領之品ニ而も同前ニ候、

一 金入之織物 一 すり箔 一 鹿子并しほり

一 縫金糸 一 純子 一 縹子 一 綸子

右品、寄合並以上之妻女并

御目見罷出候妻女、上下着<sup>(裏カ)</sup>ニ茂着用候儀一切令停止

候、 諸士妻女衣服定

一 日野絹 一 紬 一 郡内織之類

一 晒地 一 紗綾 一 加賀絹

但、ちらし・模様染者上方染ニ而勝手宜候ハ、可

相調候、物入之染一切仕間敷候、

右品、諸士妻女之上着差免候、

一 金入之織物 一 すり箔 一 鹿子并しほり

一 縫金糸 一 純子 一 縹子 一 綸子

一 絹縮 一 紙縮緬 一 紙紗綾

一 白小袖 一 羽二重 一 縮緬

右品々、小番より以下諸士妻女之上下共ニ着用候儀

一切令停止候、

一 純子 一 縮緬 一 紗綾 一 羽二重

一 綸子 右品、御一門を初諸士妻女之帯ニ用候儀心次第ニ候、

其外之女者令停止候、

一 御子様方江被付置候女中之儀者、御奥江被召仕候女

中衣服ニ可準候、

一 紅染并紅朽葉染、惣而紅染似寄候染色雖為誰人令停

止候、

足輕・御小者・御中間・家中者・寺門前・社家・

町・浜以下之男女衣服定

- 一 布木綿無地并小紋付、紋所を付候儀ハ心次第二候、ちらし付并模様染一切致間敷候、絹袖之類下着ニも令停止候、百姓者男女共紋所なし、無地小紋付たるへし、尤、右之女共白帷子用候儀可為心次第候、
- 付、右之者共召仕之者衣服男女共ニ無紋、形付ニ而茂紋所なし、
- 一 御一門・大身分・一所持・一所持格・寄合・寄合並諸士召仕之女亦者下女類、衣服之儀も前条同断、
- 一 御供先キ召列候若党色違之衣服不苦候、羽織之儀者紋所又者小紋付無地ニ而も不目立染色可着候、
- 一道具持・草履取以下者何色ニ而も持合者<sup>候力</sup>衣服勝手次第二候、乍然他国より之使者有之候節又ハ他国江召列候節者黒染着用可為致候、
- 一 平家無官之座頭、絹布之衣服并帯類迄一切令停止候、
- 一 平家座頭、一官二階より官位ニ付而之装束者定之通たるへし、
- 一 士盲目、座頭職不勉者可為心次第候、
- 一 地神盲僧、家督之儀も絹布之衣服可為無用候、雖然

衣帶之類者制外二候、其外以下之盲目絹布之衣服并帯類ニ而も用候儀一切可為停止候、

一 士之娘たりといふともこせ職之者ハ、絹衣類又者絹帯ちらし付令停止候、

一 医・絵兩道者可為格別候、

右、御一門を初諸士男女未々迄衣類之儀段々被仰渡置候、此節猶又被相定候間、右之趣致承知置、御定外之衣服致着用間敷候、相背者於有之者可遂披露旨、御当地并外城横目江申渡置候条可申渡候、

丑正月

御家老座印

御家中男女衣服定之儀、別冊申渡候間其旨可相守候、御法度之衣服着致着用候者有之候ハ、横目役見当り次第、士之儀者仮名承届、妻娘者夫又ハ親兄弟之名承届申出候様申渡置候、家来又者召仕之下人・下女、町・浜・在郷・社家・寺門前者并妻娘之儀ハ、何方ニ而茂見当り次第取揚申付候、就中町方之儀者猶以吃と可被申渡置候、相背候者於有之者支配頭越度可相成候、

右之通、表方江致通達、御側方・御勝手(方脱力)二ハ写を以可相達候、

但、外城之儀、地頭・領主・月番御用人より不洩様可申渡候、

正月

(願姓久留)  
内膳

右之通被仰渡候間、此旨致通達候、以上、

丑正月廿二日

御勝手方

右之通、延享二丑正月廿二日島津主水致承知候事、

一 寄合並以上之妾母札之者者、小番以下諸士妻女衣服同前着用可致候、小番以下諸士之妾母札御免之者も右同断被成御免候、

一 御一門を初諸士妻女帯二用候品之儀者先達而申渡置通二候、染色之儀者何色二而茂相用候儀不苦候、一 諸士妻女衣服之儀先達而申渡置通二候、裏絹之儀者もみ二而も不苦候、物入之染相調間敷候、染色二而

茂不苦候、

一 提帯之儀者金入織物相用候儀不苦候、

一 御一門家来之内三家之者共之儀者、四人賦以上諸士衣服同然着用差免候、

一 御一門・大身分家来之内慰斗目御免之者者、有来通着用可致候、

一家来之内小坊主かしき隠居二而剃髪之者迎も絹布相用間敷候、且又家来之者羽織裏二絹布付用候儀一切令停止候、羽織裏二絹布付候を主人よりくれ候を致着用候儀者不苦候、

右者、先達而衣服定之儀申渡置候、猶又右之通可相心得旨不洩様致通達、御側方・御勝手方江者写を以可相達候、

但、外城之儀者地頭・領主・月番御用人より可申渡候、

正月

内膳

右之通被仰渡候間、与中・地頭所・私領・支配有之面々ハ支配下江茂不洩様可被申渡旨御差図二て候、以上、

二月二日

義岡左平太

右之通被仰渡、延享二丑二月二日島津主水致承知

候事、

写

一 御一門方召仕女中衣服之儀、御付女中外者都而諸士召仕下女同前被定置候得共、御一門方年寄女中并頭立候女中之儀ハ、向後諸士妻同前日野・郡内織類・晒地・紗綾・加賀絹之類着用御免被仰付候、右以下之女中者有来通諸士下女同前被仰付置候、

十二月

兵部

右之通被仰渡候間致通達候、左候而、支配有之面々者支配下中江も被申渡、地頭所・私領江も不洩様可被申渡、以上、

十二月廿四日

戸田伝五郎

写

衣服之儀五ヶ年を限左之通被仰付候、  
一年頭熨斗目七日迄、十一日・十五日着用致来候得共、納殿役人以上并寄合並以上三日迄着用、御規式等二付支度之儀其外何ぞ二付熨斗目着用之儀ハ、其節之

吟味次第可被仰付候、

一 御普請奉行以下御側・表諸御役人、年頭熨斗目無用被仰付候、

一 御普請奉行以下御側・表御役人、七日迄、十一日・十五日、其外御祝儀御札日者格別、平日者袴計二而相勉候勝手次第、  
(儀脱カ)

一 筆者・小役人、年頭三ヶ日上下着用、四日より袴計着用被仰付、十一日御祝頂戴仕候者迄上下着用、御祝儀等申上候節ハ有来通二而、年頭之儀ハ三ヶ日上下着用、平日者袴計二而相勉候儀勝手次第、

一 一番人、年頭三ヶ日上下着用、四日より袴計着、御祝儀等申上候節者有来通、

一 御謡初二付御能方人数者有来通、

一 御拝領物等之節、又者他所より御使者等二付熨斗目不致着候而不叶節者其節之吟味次第、

一 何ぞ二付 御名代之勉之人計衣服有来通被仰付、相詰候面々者都而半上下、龜服又者めん服二而も着可仕候、

一家督・継目・初而之 御目見被仰付候人并奏者番、

熨斗目長上下二不及、支度右同断、

一元服被仰付候節元服人支度有来通、理髮其外半上下、  
僮服・めん服二而も着可仕候、

一御当地二而出火之節、御供先其外火羽織不致着候而  
茂不苦候、

一筆者・小役人、已前者勤座二依り中途計袴致着、御  
座二而者中帶二而為勉儀も有之候間、以前之通勝手  
次第、

一張紙二而本文二付御家老座・御勝手方・大御目付座・  
御近習役所・御用人座・奥向之儀者有来通、其外之  
座々八筆者・小役人勤場二而中帶勝手次第被仰付候、  
一奥女中御規式等二付勤有之節二而も僮服又者綿服二  
而茂不苦、

右之通被仰付候條、不洩様可申渡候、

十二月 左衛門

右之通被仰渡候條、此段致通達候、以上、

十二月廿六日 有川幸右衛門

写

一年頭御規式給士御小姓支度不及熨斗目、

一諏訪江司參之人支度不及熨斗目、

一御馬乗初候節、御馬方支度不及熨斗目、

一二日福昌寺江 御入二而、御供御先番御普請奉行以  
下之御役柄并小番之人支度不及熨斗目、

一右二付、御年男素袍・烏帽子致着用來候得共熨斗目・  
半上下、

一三日以後 御仏詣之節、御供御先番不及熨斗目、

一三日之暮御謡初之節、御能方仕手外八都而熨斗目・  
半上下、

一進物番不及熨斗目、

一四日於御座之間御鷹被遊

御覽候節、宮内源左衛門不及熨斗目、

一四日御対面所御書院二而出家其外御目見之節、奏者  
番不及熨斗目、

番不及熨斗目、

一九日於護摩所御膳進上 御名代勤之節、奏者番以下

熨斗目不及、

一十一日御鎧御祝御規式之節、寺社奉行以下不及熨斗

目、

一十五日次御礼罷出候面々不及髪斗目、

右之通、来年頭より五ヶ年を限被仰付、其外支度之儀者都而有来通候条、可承御役々江可申渡候、

十二月

左衛門

右之通被仰渡候間、此段表方御役人限二致通達候、以上、

有川幸右衛門

一御礼日并御祝儀事・自分祝儀事之節、島又者無紋之衣服ニ麻上下致着候儀勝手次第第二候、女中之儀も右二可準候、

右之通、当年より先き五ヶ年之間被仰付候条、与中・

支配中・諸外城江可被申渡旨地頭・領主・与頭・支配頭江申渡、御側方・御勝手方江も可相達候、

正月

左衛門

右之通、有川幸右衛門御取次を以被仰渡候事、

一五月より八月迄之間御法事之節、

御代参又者御寄合之 御名代并詰人数御手長相勉候

人支度白帷子着可致候、兼而七夕・八朔白帷（子脱之）致着候

御役亦者其身二付而致着候人迄着用可致候、

一益御手長相勉候人者已前より白帷子致着用候由候間、

其通可致着用候、御代参之人不及着用、右外御忌日

等之御代参相勤候節、白帷子不及着用候、

一依願相詰候人又者自分拝礼之人者白帷子不及着用候、

右之通、御法事方江申渡、来月朔日より之御法事二

付而相詰候面々江茂不洩様可申渡候、

但、益御手長相勉候儀二付而者亦々別立而可申渡

候、

六月

織部

一呉服物其外御当地ニ而相濟程之品上方調不致、可成程御国物ニ而可相濟候、

右之通、来辰年より五ヶ年之内被仰付候条、只今迄

上方調之品、御国調ニ而可相濟分者致吟味、御国物

を以相調候様可承御役々江可申渡候、

十二月

左衛門

右之通、有川幸右衛門御取次を以被仰渡、祢寝孫左

衛門致承知候事、

年頭

一若党五人 上下三日迄

一片挾箱

一長柄 三日迄

一手鑰

一乘馬

一沓籠 勝手次第

一合羽籠

但、応供人数見合、

五節句并平日

一若党四人

一手鑰

一合羽籠 応供人数

右、御一門・大身分・其身独礼万石以上

年頭

一若党四人 上下三日迄

一片挾箱

一乘馬 勝手次第

一合羽籠 応供人数

五節句并平日

一若党三人

右、御家老供

年頭

一若党三人 上下三日迄

一手鑰

一乘馬 勝手次第

五節句并平日

一若党式人

右、若御年寄・大御目付・御側詰

年頭

一若党式人 上下三日迄

一手鑰

一乘馬 勝手次第

五節句并平日

一若党壹兩人

右、寺社奉行より寄合迄

一沓籠 勝手次第

一手鑰

一片挾箱 勝手次第

一手鑰

一片挾箱 勝手次第

一手鑰 勝手次第

年頭

一若党壺人 袴計

一手鍵 三ケ日

五節句并平日

一若党壺人 勝手次第

右、御用人・寄合並より納殿迄

年頭・五句・平日

一草履取 勝手次第

右、御普請奉行以下・御側・表・兼而一僕召列候者

迄

右之通、来辰年より五ヶ年を限被仰付、右供廻之内

を茂相減候儀勝手次第可致候、妻供之儀も右二可準

候、

右之通致通達、御側方・御勝手次第<sup>(方脱カ)</sup>写を以可相達候、

十二月 左衛門

右之通、有川孝右衛門御取次二而被仰渡、島津主水

致承知候事、

一御番頭壺人

一御側御用人壺人

一御近習役壺人 一御納戸奉行壺人

一御小納戸役壺人 一通御目付式人

一御同朋壺人 一御側御小姓四人

一御包丁人頭壺人 一番五人

一御先払横目壺人 一御包丁人壺人

一御料理役三人 一御行器役式人

一御酒部屋役壺人 一御地物役壺人

一御駕籠付并御挟箱付壺人

一御供走番壺人 一又者抑式人

一御道具持八人 一御草履取式人

一御中間四人 一御先走足輕壺人

一横目付足輕壺人 一仕坊主壺人

一挟箱持六人 一御長柄傘持壺人

一御草履取壺人 一御駕籠之者拾人

一御茶弁当持壺人 一御沓籠持壺人

一御桐油籠持壺人 一飼料桶持壺人

一合羽籠持拾人 一手笠わく持壺人

右者、御一門・大身分・御家老宅江

御家督初而 御光儀之節、御供等右之通被仰付候条、

此旨中通御目付江申渡、首尾係江茂可申渡候、

四月

主殿

写

一御所帯方御不由付、去ル酉年より三ヶ年御儉約御旧

本ノマ、口脱之

式等被差欠、物毎減少被仰付置、当年迄年数筈合候、依之元服供廻之儀二付而者、相馬殿より別紙を以被致通達候、其外之儀者都而只今之通相心得居候様被仰付候、

右之通、表方江致通達、御側方・御隠居御方・御勝手方江茂可相達候、

十二月

縫殿

写

一去辰年御減方已来年頭御規式、其外 御名代御代參、又者元服理髮之人 御目見之節、奏者番支度熨斗目・長袴致着用候分無用、年頭諸御役人熨斗目無用、

御家老直申渡已下之御役人平日上下着用不及、筆者・小役人中途迄袴致着、於御役座中帶勤、且又御一門

を初供廻減少被仰付置候得共、面々差而欠略之詮も

不相見得、大身小身共内証之物人多、表立之勉調兼候人も有之由候、依之来年頭より向後支度已前之通、諸御役人正月七日迄、十一日・十五日熨斗目・麻上下着用、平日上下着用筆者・小役人支度都而辰年以前之通、御一門を初供廻之儀者享保九年被仰渡置候通被仰付候条、人々内証之物入無之、表立而之勤向不差欠様專可心掛候、

但、供廻之儀、依人者右定より可相減と存候人ハ

勝手次第第二候、

右之通被仰付候条、表方江致通達、御側方・御隠居御方・御勝手方江者写を以可相達候、

十二月

相馬

右之通、町田郷九郎・基太村助左衛門御取次二而被仰渡、肝付彈正致承知候事、

写

一男女衣服定之儀二付、先年より段々被仰渡置趣且又女着服之儀付而者、去ル申年分而被仰渡旨趣も有之

候得共、男女着用都而延享二丑年衣服定之通相心得候様被仰付候、右通被仰付候付而者、衣服致結構事之様取違候而者別而間違之事候、畢竟衣服等無益之費無之様二と被仰付事候条、自今猶以驕之体無之様相心得、綿服・麤服勝手次第可致着候、

一 衣服染模様并染代銀之儀、寛保三亥年被定置候通相心得、高賃之染致間敷候、縦令高賃之染頼来候而も紺屋共より不受付様可致候、若大形於有之者可為越度候、

二月

相馬

右之通、子二月廿六日基太村助左衛門御取次二而喜入主馬致承知候事、

一 五ヶ年内長柄・中指用候付而者被仰渡置趣有之候得共、病有之亦者風雨之節差支人等可有之候間、此已後之儀已前より長柄・中指用來候御役格之人者、勝手次第可用候儀御免可被成候、

八月

主殿

一 尾畦<sup>（群力）</sup>奉行・御鷹師野支度之儀、段々此節被相定候条、御鷹師外之者共右似寄候支度相用間敷候、此旨表方江致通達、御側方・御勝手方江者写を以可相達候、

二月

図書

一 三人賦より以下之者者日野紬・郡内類を致着用、紗綾・縮緬・羽二重此外結構成衣類持合たりといふとも下着之外曾而致着間敷旨去々亥年被仰渡趣有之候、然共飛紗綾者右類用強シ有之、於御国元求安き品にて諸人勝手二相成由相聞得候付、飛紗綾之儀者上着二用候儀此節被差免候、此外者亥年被定置候通台以堅可相守候、

右之通、与中・支配中・地頭所・明所之外城江ハ不洩様致通達、御側方・御勝手方江者以写可相達候、以上、

十一月

主計

右之通被仰渡候間、此段致通達候、以上、  
十一月廿一日  
中野駒右衛門

一御召物之儀當時者綿服被相用事候、猶以此節依 思

召御夜着・御蒲団・御蚊<sup>(帳力)</sup>張迄段々、麿相之品被仰付候、

其外右二準品位を被相下被為濟候段々被仰出候、

然者至末々者此節猶一涯用麿服驕之体有之間敷候、

先年一統綿服可相用旨被仰渡其通有之候得共、頃日

女着服木綿地・帷子地染不相応結構過候も有之由相

聞得候、依之此節より木綿又者帷子模様染其外異様

成染無用被仰付候、小形付鳥織類可相用候、足輕・

御小者・御中間妻女、諸家中又者内女紋付無地染鳥

類可相用候、諸士下女、奥女中下女、寺門前・町・

浜・在郷女者都而無地染無紋可相用候、帶之儀右二

準、麿相之品応人体可相用候、

十月

兵部

典膳

一本行諸士下女・奥女中下女・寺門前・町・浜・在郷

都而無地染可相用旨被仰渡置候得共、無地染無紋鳥

類可相用旨追而被仰渡候間、此旨与中・支配中・諸

外城・私領へ不洩様猶又可被致通達旨御差図二而候、

以上、

十月廿三日

樺山左京

一節句二付而者人々心得二而供廻相重候儀も有之候得

共、此節御儉約二付而者御家老衆方二茂平日之供廻

挟箱壺ツ被重筈候間、我々同席中ニも右之段承置候

様、只今波門殿より致承知候間、此段致通達候、尤、

平日之供廻二而可宜旨同席中申談候間、此段申達候、

以上、

五月四日

写

一年頭熨斗目七日迄、十一日・十五日致着用來候得共、

納殿役人已上并寄合並以上三日迄着用、四日より七

日迄麻上下着用、御規式等ニ相勤候人者有來通、御

普請奉行以下不及熨斗目、

一筆者・小役人、年頭三ケ日上下、四日より袴計、十

一日御祝頂戴仕候迄上下着用、其外五節句御祝儀等

申上候節上下可致着用候、大番人も右同断、

一小番人、年頭三ヶ日麻上下、四日より支度有来通、

年頭

一御謡初二付而者御能方人数者有来通、

一若党六七人之間

一御拝領物御到来又者他所より御使者等之節者、支度

上下三日迄

等之儀者時々申渡可有之候、

但、右之内先供三人被列候儀ハ御一列計、右外先

一御名代勤之人者有来通之衣服被仰付、相詰候面々者

供無用、万石以下大身分独礼之儀者若党五六人之

不及熨斗目、

間、

一家督・継目・元服・初而之

一对挟箱 一長柄 一手鍵 一乘馬

御目見又者御役・地頭職之御礼、御太刀進上二而申

一沓籠 一合羽籠

上候人者支度有来通、奏者番之儀者半上下被仰付候、

五節句并平日

一進物番・御供番相勉候者麻上下着用、都而綿服可相

一若党四五人之間

用候、

但、万石以下大身分独礼之外者三四人勝手次第、

一出火之節、御供先其外火事羽織不致着候而も不苦、

一片挟箱 一手鍵 一長柄

先年申渡有之通候、

但、天氣相二付而者勝手次第、

右之通、当年より七ヶ年を限被仰付候条、不洩様

一乘馬 勝手次第 一沓籠 右同断

可申渡候、

〔薩摩藩法令史料集より補〕  
▽一合羽籠△

八月

左京

但、天氣相二付而者勝手次第、

藤馬

右、御一門・大身分其身独礼万石以上

写

年頭

一若党四五人之間 勝手次第

一片挾箱 一長柄

但、天氣相二付而者勝手次第、

一手鍵 一乘馬 勝手次第 一沓籠 右同断

一合羽籠

但、天氣相二付而者勝手次第、

五節句并平日

一若党三四人之間 勝手次第

一片挾箱

但、平日持せ候二不及、五節句計持せ候儀勝手次

第、

一手鍵 一長柄

但、天氣相二付而者勝手次第、

一合羽籠

但、右同断、

右、御家老供廻

年頭

一若党四人 一片挾箱 一長柄

但、天氣相二付而者勝手次第、

一手鍵 一乘馬 勝手次第

一合羽籠 一沓籠 右同断

但、天氣相二付而者勝手次第、

五節句并平日

一若党両三人 勝手次第

一片挾箱

但、平日持せ候二不及、五節句計持せ候儀勝手次

第、

一長柄

(薩摩藩法令史料集より補)  
▽一手鍵△

一雨具 天氣相二付而者勝手次第

右、若御年寄・大御目付

年頭

一若党両三人 勝手次第 一片挾箱 但、勝手次第、

一長柄 但、天氣相二付而者勝手次第、

一手鍵 一乘馬 勝手次第

一雨具 天氣相二付而者勝手次第

五節句并平日

一若党壹兩人 勝手次第 一手鍵

一天氣相二付而者雨具等勝手次第

右、寺社奉行より寄合迄

年頭

一若党壹兩人 勝手次第 一手鑓

一雨具 天氣相二付而者勝手次第

五節句并平日

一若党壹人 一手鑓 一雨具 同断

右、御用人より御近習役・寄合並迄

年頭

一若党壹人 一手鑓

一雨具 天氣相二付而者勝手次第

五節句并平日

一若党壹人 勝手次第 一不及手鑓

但、物頭之儀者当番之節計鑓為仕、又者何ぞ依勉

方屹致候節者有来通、其外御役々平日致無用右体

之節者惣而有来通、

△（薩摩藩法令史料集より補）右、御留守居ヨリ納殿役人迄、小十人頭△

年頭

一若党壹人 勝手次第

右、六人賦已上御役人

但、六人賦已下御役人之儀召列候儀無用、草履取

第、

迄可召列候、平日之儀者草履取召列候儀も勝手次

右之通、当年より七ケ年を限可被仰付候、妻女供之

儀も可右準候、

八月 左京 藤馬

名替願二付被仰渡候事

写

一部屋栖之者名替願、向後者家督之人より願出候様可

致候、家督之者不在合節者親類共より願出候様二可

致候、勤方有之者者有来通、

五月 大藏

右之通、義岡左平太御取次二而新納五郎右衛門致承

知候事、

写

一同役之内同名有之節者、新役より致名替事候得共、

新役ニ而も拜領名ニ而候ハ、古役之者名替可申付候、古役・新役とも拜領名ニ而候ハ、其節者時々相伺可申候、右之通、向後被仰付候間、御役人限可致通達候、以上、

四月

(島津久豪)  
空

右之通、享保十年巳四月八日左近允与太夫御取次ニ而被仰渡候事、

一同役・同名有之、紛敷候ニ付名替之願申出候得共、

寄筆者之儀者名替不被仰付候間、将監殿より畠山数馬致承知候事、

戊閏二月廿六日

寺社奉行

一 与頭江

組ニ被入置候山伏・社人、家督・継目・養子成等之儀ニ付名替之願申出候節者、先年申渡置候通名替之儀与ニ相付願申出候間、被承置候様ニと寺社奉行所江申出、組々差出候書付ニも右之訳相記候様有之可

然候、且亦入峯・住職・官成等ニ付而致名替候節者

法式之儀候故、有来通寺社奉行所江申出、寺社奉行より遂披露候筋ニ可被致候、般若院本田甚次儀者門首之事ニ候故、已前之通寺社奉行所江申出候様可被申渡置候、

右之通可申渡候、

十二月

大藏

一元服願之節名替之儀、元服被仰付候段申渡候以後名

替之願被申出候人も有之不相並候間、向後者元服願被申出候節、已前之通名替之儀も一所ニ被申出候様寄々可致通達候、

十一月

仲

写

一大御目付以上之御役被仰付候節、鹿兒島者勿論、外城迄も同名之者名替致事候、然共以後大御目付御役之儀者同名有之候共名替致不及、支配下之者ハ可及名替候、

右之通被仰付候条、御役人并地頭・領主江不洩様致  
通達、御側・御勝手方江者写を以相達可致候、以上、  
（方脱之）

七月

大藏

右之通被仰渡候間致通達候、以上、

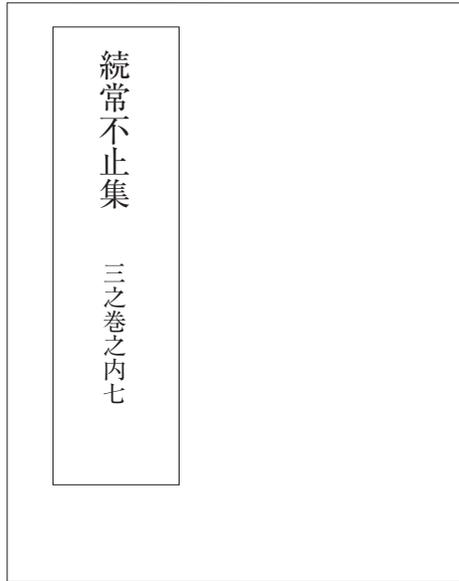
七月廿五日

山田新助

一 親隠居、嫡子家督被仰付、親致名替候節者御月番御  
家老衆江首尾被申出事ニ候得共、右嫡子親名を置相  
願候者若御年寄御方江親名替之儀不相知候、向後右  
式親名相願置候者親致名替候節者、若御年寄御方江  
茂其首尾被申出候様可被致候、無左候得者御用之間  
違も可有之儀ニ候間、与頭時々氣を付可被申出候、  
親名不相願者ハ被申出ニ不及候、此旨与頭江相達候  
様ニ織部殿より致承知候間、此段申達候、以上、

四月十九日

本田作左衛門



写

一 御上下之節、道中・船中共二御供立二出家を召列候者茂有之候、向後無用可仕候、

一 出家計二而茂無之、其外二も奉公人之外召列候儀、無用可仕候、

右之通被 仰出候条、不洩様可致通達候、以上、  
(朱書)「享保三戊」(島津久直) 将監  
五月廿八日

写

一 江戸・御国元共二御家老二而茂罷沙之合羽柄袋仕間敷候、此旨堅可相守候、  
本ノマ、羅紗之

右之通被 仰出候間惣通達申渡候、以上、  
(朱書)「享保三戊」(種子島久基) 弾正  
六月十五日

続常不止集 三之卷七

続常不止集 三之卷之内七

弘化四年丁未七月

諸法度之事

一 江戸江之廻船往来共二錫・鉛積候儀、小キ器二拵候物迄茂 公義御法度候、自然荷物杯二入付、於御番所被改出候得者御難題二罷成事候条奉得其意、錫・鉛小キ器二而茂向後者随分氣を付、曾而積入申間敷候、此旨末々迄堅相守候様、与中・地頭所江可被申

渡者也、

〔朱書〕正徳六申

三月三日

六与

与頭

御家老座印

一常々之行跡衣服・刀・脇差等拵之儀、已前より段々

被仰渡趣有之、不目立様ニと被仰付事ニ候、時々ニ

被仰渡御仕置之儀、茂少間有之候得者、末々之者思召

之程ヲ致大形候事多有之候、其当時々之はやり杯と

申候而色々之風儀をいたし、道具等之拵茂替りたる

事を致候事有之候、弥前々より被仰渡趣を相守可申

候、

右之通、於江戸被 仰出候間、可致通達候、以上、

〔朱書〕享保二酉

正月十二日

一鉄炮打候儀、向後者以前之通

御城下より五里内御禁止被仰渡候段者、先頃委細致

通達置候、依之右道程之場所江此節高札相立候条存

其旨、高札より鹿兒島之方曾而鉄炮打間敷候、勿論

近名狩臈等御免之人茂五里内ニ而鉄炮打候儀無用被

仰付候、御城下鉄炮場ハ格別ニ候、

一五里内ニ而茂完鳥御用被仰渡候御、狩臈等仕候儀者

有来通候、其外狩臈等曾而仕間敷候、併喰狩之儀者

已前之通、時々山奉行江可申出候、吟味次第山奉行

可致差戻候、右道程内之御立狩倉又ハ其外之鹿倉ニ

而も、如先例、初狩仕候儀者有来通候、尤、鉄炮打

候儀、前々より御禁止被仰付置候場所ハ已前より高

札建置候付、右場所ハ五里外之所茂弥其旨を可相守

候、

右之通堅固可相守候、若違背之族於有之者可及沙

汰候、此段不洩様可被申渡旨、与頭・諸地頭・領

主江可申渡候、以上、

二月

将監

右之通可申渡旨被仰渡候間、与中・地頭所・私領

江可申渡候、以上、

〔朱書〕享保五子

二月廿一日

中神与五左衛門

一御奉公ニ付田舎江參候者、鉄炮を持參致、臈等候儀

有之由候、御用ニ付而被差越事ニ候得ハ、御奉公一

筋二仕筈之儀二候間、向後鉄炮持參候儀無用候、此

旨表方之御役人江不洩様申渡、尤、与中江右之段被

致通達候様与頭江可申渡候、已上、

(朱書「享保五子」)  
三月二日

(島津久家)  
李

一御下屋敷西御門前縦橋迄

御城下同前乗物并二駕籠・馬上二而罷通間敷候、尤、

右之通筋鑼立させ間敷候、且亦別而不宜品持通候儀

可致無用候、

右之通、与中江可致通達候、已上、

正月廿二日

李

(朱書「享保九辰」)  
右之通不洩様可被致通達旨御差図二而候、

正月廿二日

中神与五左衛門

御家老与

六与  
与頭

一石塔之文字二箔を込候得共、自今箔込候儀一切無用

申付候条、此旨与中・地頭所・私領・支配中不洩様

二可致通達候、以上、

十二月

(伊集院久矩)  
藏人

右之通被仰渡候故可致通達候、以上、

(朱書「享保八卯」)  
十二月廿一日

(貞伴)  
讚良善助

一於御領内本不慥奇妙等敷致祈禱等候儀、従前々御禁

止為被仰付置事候、向後猶以右体之儀無之様堅可相

守候、

一居屋敷又者下屋敷等二自今以後、雖為輕堂社無故取

建候儀可致無用候、無扱訊を以新規二取立候ハ、

寺社奉行江申出免許之上可致建置候、只今迄取建置

候堂社之儀、御構無之候、

右ハ、此節従 公義被仰渡趣有之、右之通申渡事

候条、違背無之様二堅可相守候、此旨与中并二地

(朱書「享保十三甲」)  
頭所・私領江可被申渡者也、

正月十七日

御家老座印

六与  
与頭

一鉄炮場ニおひて稽古鉄炮打候節、矢先江犬扨通候儀

も可有之候条、随分入念、右体之節ハ鉄炮不打様可

致候、此段与中江不洩様可申渡旨与頭江申渡、鉄炮場見廻之人江茂可申聞置候、

二月

（頭姓久周）  
内膳

右之通、寛保四年子二月廿五日木村四郎右衛門取次ニ而新納四郎致承知候事、

一夜行・辻歌之儀ハ兼而御禁止被仰渡置事候条、弥以可相守候、且又頃日人家来其外末々之者共茂致夜行候由相聞得候、猥致徘徊間敷候、

一追掛ケ馬いたし、又者荷付馬杯を狭小路江繋置、往還之妨ニ成候儀有之由相聞得候、向後右体之儀無之様ニ可相心得候、

右之通相守候様、与中・諸外城・支配中江不洩様可被申渡者也、

（朱書）「延享二丑」

十二月朔日

御家老座印

六与  
与頭

（行間朱書）  
「追掛馬并ニ小路江猥ニ馬を繋キ通路之障ニ成候様、右ニ付而ハ兼而被仰渡置趣も有之候処、至頃日間ニ者大形相聞得候者も是又通融之障ニ成候条、左候本ノマ

而之儀無之様支配中江可被申渡候、尤、小路江馬を繋候儀ハ屋敷主より時々氣を付差留候様可申渡旨大御目付衆被仰候間、此段申達候、以上、

宝曆三酉九月三日 御目付」

写

一死犬を俵ニ入海ニ捨之聞得有之候、死牛馬犬猫海川ニ會而不相捨、向後土中江可埋置候、

右之通、与中・支配中江申渡、内場川筋之諸所江茂不洩様可申渡候、

六月

（北条時守）  
織部

（朱書）「延享三寅」  
右之通被仰渡候間、此段致通達候、以上、  
六月 戸田伝五郎（盛唐）

写

御目付江

一正月之門松、近年大キ成を用候、来年より小キ可被相用候、  
一端午之昇、連々大キ成を相用候、布・木綿・紙昇迄を小キ取捨、小差可為無用候、

一二季之彼岸二餅二団子之類相調、親類・近隣江遣候

儀有之由候、餅二団子仏前二備候儀ハ格別二候、無  
故親類・近隣等遣候儀可為無用候、

右三ヶ条屹と被仰渡儀二而ハ無之候、御役人中江

其心得被致候趣二寺社奉行已下御役人江申達候、

(朱書)「延享四卯」  
八月

(榊山久初)  
主計

右引札、町屋小路狭キ所松飾大キ成ハ往還之障二

茂相成候間、町奉行其心得可有之候ハ、彼岸二

餅・団子類親類・近隣江遣候儀、専末々二有之御

役人寄々支配下江茂内通有之可然候、

一御役人・小役人、諸人願事二付進物受用不致事候処、

間二者無案内二而進物遣候茂有之、又者願之趣不申

聞致進物置、追而願之趣申聞儀も有之候、右体之進

物一切致間敷候、此旨与中・支配中・諸外城江不洩

様可被申渡者也、

(朱書)「延享五辰」  
四月廿二日

御家老座印

与頭  
六与

写

一諸奉公人、御当地并二外城行共二何程輕キ品とても

進物并二馳走ケ間敷儀、惣而所中之造作受用致間敷

旨、先年申渡置趣有之候条、弥其旨可相守候、早朝

より遠所をかけ終日相勉候節ハ輕キ昼飯出候様、是

又申渡置候得共、向後昼飯差留候、

右之通、奉行・頭人得其意、支配中可申渡候ま、

二而ハ程経候へハ緩せ二罷成候条、奉行・頭人代

り合之節ハ同役より申知候半ハ小役人代合之砌又

ハ諸檢使其外役々田舎江差越候節時々可申渡候、

卯八月

右之通、先年申渡置候得共、程経候得者折々緩せ

二茂罷成候間、弥右之旨堅可相守候、若緩せ之儀

も有之候ハ、可及沙汰候、此段御勝手方・支配中

江致通達、表方・御側方江写を以可相達候、

(朱書)「延享三丑」  
四月

(鎌田政直)  
太郎右衛門

一於諸御役座反古二而相調候紙袋類、御諱御名有之候

を不消除相用間敷候、

右之通、表方江致通達、御側方・御勝手方江者写を以可相達候、

〔朱書〕

十二月

主計

右之通被仰渡候間致通達候、以上、

十二月

北郷助太夫

一

与頭江

於境瀬戸御仕置者有之候節、瀬戸内江多人數入込、此跡茂別而無作法有之候、右二付而ハ先年茂猥二無之様ニとの儀段々被仰渡候、御道具例被仰付候節者例不相濟内者瀬戸内江曾而入込間敷候、横目・足輕より例不相濟内者可差留候条、此旨与中江可被申渡候、致違背候者茂候ハ、仮名承届申出候様横目申付置候条、此段茂可被申渡置候、

右之通申渡、其外支配有之面々江茂如例被申渡候

様可申渡候、以上、

〔朱書〕元文三年〔朱書〕

三月二十八日

〔島津久純〕

大藏

一かせ取打、従已前有之候由候得共、向後停止申付候、

右之通、表方江致通達、御勝手方・御側方写を以可相達候、

〔朱書〕

正月廿三日

〔島津久家〕

右之通、肥後平左衛門取次ニ而大野七郎太夫致承

知候事、

一田之浦より三船迄之間、浜辺ニ有之候石取候儀令停

止候、自今以後石取候者於有之者可及沙汰候条、此

旨与中・諸外城・支配中江不洩様ニ可被申渡者也、

〔朱書〕寛保二戊

三月十七日

御家老座印

六与

与頭

写

一御城内供屋辺、其外物陰ニ而家来・下人等たはこ吞

候儀不致様、主人より可被申付候、右之通不洩通達

いたし、御側方・御勝手方可致相達候、

〔朱書〕寛保二戊

七月

大藏

右之通被仰渡候間、此段致通達候、支配下江茂不洩様可被致通達旨御差図ニ而候、

戊七月廿五日

平田次郎兵衛(正輔)

右之通被仰渡、島津平八致承知候事、

件不洩様可被致通達旨、支配頭江可致通達候、以上、

四月十六日

(島津久純)  
大藏

一 礮中御庭同前之事候故、礮江罷居候者共之内礮方御

右之通被仰渡候間、此段致通達候、以上、

用不相勉者ハ此節為被召移事候条、御用之外猥ニ礮

(朱書)享保十八年  
四月十六日 鎌田源左衛門(政昌)

江罷通間敷候、尤、遊又ハ海苔・貝取杯ニ礮江參儀

も一切可致無用候、天神參詣者不苦候、右ニ付而ハ

鳥越・花倉・田之浦・かくみんのはな江制札被建置

筈候、此旨可致通達候、以上、

三月

(伊集院久矩)  
藏人

右之通致通達候、以上、

(朱書)享保九辰  
三月廿九日

土持権兵衛

写

一 礮御屋敷近辺船不乗通様と先年より段々申渡置候、

弥以此旨堅可相守候、且亦間遠致通船候者も声高之

儀無之様可相慎候、

右之通、御側方・御勝手方・表方江早晚之通致通

達、諸外城江者地頭・領主、支配有之面々ハ右之

可及僉儀候、

致忘却様堅可申付候、此跡山伏・みこほさ類、占・

祈禱いたし、一向宗を勧候者も為有之由候、右体行

脚・托鉢なといたし一向宗之山宗なと、申触シ右宗

旨勸入、御法度之妨ニ罷成候段別而不届之至候間、

向後者法元不慥占・祈禱なと、仕候者於有之ハ屹と

〔行間朱書〕  
「本文、巳八月廿九日篠崎八右衛門御取次ニ而被仰渡、

町田宇右衛門致承知候、左候而、本行之趣小与頭中

原茂右衛門江相渡候、御同役中江者与帳調方より通

達有之候処、当座よりハ通達不致、直触江茂通達致

不申候事、」

一末々山伏并二弟子之類

一末々社人神子ほさ之類

一寺院為結縁袈裟を置候者之類

一念仏方

一平家座間

一地神座間

一子安觀音守

右之類、行脚・托鉢ニ罷出候者共、其法式之門首・

支配頭より稠敷遂吟味、無筋祈禱・占等仕、一向宗

之山宗杯と申触シ候儀一切不仕候様ニ堅可申付候、

一他国より入来候六十六部行脚、又者商売として入来

候旅人共江祈念・占等頼候儀堅禁止申付候、

一一向宗自身申候者共、此跡者宗門改方より僉儀取掛

御用触申渡候砌、不遁所より申出候而茂身自之筋取

揚来たる由候得、僉儀取掛候以後申出候而者自身申

候（詮方）僉茂無之、其上一向宗御制禁之儀者毎度被仰渡候

得共、本尊等致所持密々取行候者有之候故、御僉儀

之上急度被処嚴科咎候得共、非分を存自分より本尊

等差出、有体申出候ハ、其科を可被差免旨先年被仰

渡置、畢竟自分申ハ一切宗根切之咎候処ニ其通二茂

無之、却而右之通難遁砌自分より申出、其科を被差

免候様有之候而ハ緩せ候様ニ成行、別而如何候故、

向後者一向宗之聞付而宗門改方より僉儀取掛候而よ

り自身より申出候而茂會而取揚無之咎候、尤、悔先

非宗門改方より不申渡内自身申出候者ハ跡々之通取

揚可罷成候、右ニ付而者不締之儀無之様入念相糺可

申旨宗門方江申渡候間、此段茂末々不洩様可申聞候、

右之通向後稠敷申付、自今以後忘却不仕様与中并ニ

地頭所・私領・明所外城江も不洩様可致通達候、以

上、

八月

（島津久当）  
将監

右之通被仰渡候段、享保十巳年五番与日帳より書

拔置也、

(朱書)寛保二戊  
十二月

(北条時守)  
織部

右之通被仰渡候間致通達候、以上、

十二月十六日 戸田平次

一諸所堂社ニ掛置候鱧口之綱相失儀多々有之候、輕キ品ニ候得者、得用ニ盜取候存念ニ而茂無之、年若キ者共はつし取候而茂不苦事と自然存違致聊爾事茂可有之哉、向後右体手惡敷儀於有之者可及沙汰候条、此旨支配中江不洩様可申渡候、

諸人墓石并葬礼、頃日段々結構ニ相調、分限不相応相見得候処、向後左之通相定候、

一石塔壹通 地上五尺五寸

右之通、表方并御側方・御勝手方江可相達候、

但、右形者望次第、結構模様等者望有之候共彫付

(朱書)寛保元酉  
十月七日  
(權山久初) 主計

申間敷候、

右之通、戸田平次取次ニ而被仰渡、并口達ニ而も

代銀百四匁

年若キ者、其二不限年長ケ者も右式之致仕形事茂

右、寄合並以上

可有之候条、右体之儀無之様可申渡旨被仰渡候間、

一同壹通 地上四尺

銘々小与頭召出、小与中寄々可致通達旨申渡候事、

但書右同

代銀三十拾六匁

一牛馬重荷不付様兼而鹿兒島中申渡趣候処、頃日重荷

一同壹通 地上三尺五寸

を付候茂有之由相聞得候条、向後不相応之重荷曾而

但書右同

不付様可致候、諸外城之儀も同前ニ可相心得候、

代銀五匁(十匁力)

右之通、表方江通達、御側方・御勝手方江写を以

右、諸士

相達、与中・地頭所・私領・明所外城可致通達候、

一同壹通 地上三尺

但書右同

代銀拾貳匁五分

右、諸士以下末々迄

一井垣者壹間ニ付代銀三拾目程ニ而相調事之由候間、  
寄合並以上之人より頼来候ハ、右之直段ニ而可相調  
候、夫より已下石塔ニ致井垣候儀無用ニ申付候間、  
何方より頼来候とも右之段申達、石切共不請付様ニ  
と申渡候、

一四尺五寸 土台棺壹通

但、厨屋四方門垣廻迄、

代銀貳百四拾目

右、寄合並以上

一三尺五寸 土台棺壹通

代銀四拾六匁

代銀貳拾四匁

但、紙ニ而調候所を木綿・芭蕉ニ而相調、又ハ花  
籠等相付候故、直段兩様ニ有之事之由候、  
右、諸士

一三尺五寸 土台棺壹通

代銀拾四匁

一三尺 土台棺壹通

代銀拾匁

右、諸士以下末々迄

右之通此節相定候、右之定より軽く方頼来候ハ、  
格別、定より高直之石塔棺望何方より頼来候共、  
會而不請合様ニ石切共・棺屋共江可申渡置候、若  
致違背候ハ、其沙汰可申付旨申渡置候間、与中  
末々迄此旨承知仕置候様ニ寄々可致通達候、

（朱書）享保十二年

十月

（種子島久基）

彈正

右之通、宮之原甚太夫御取次を以被仰渡、町田宇

右衛門致承知候事、

一頃日つき櫛をいたし商売之者有之由候、右商売一切

令禁止候、

一御下屋敷又者御台所前明地之内罷通候者有之候、往  
還ニ而茂無之所行通候儀不宜候、向後右明地罷通間  
敷候、

右条、享保五年子二月被仰渡候、

一 江月川魚取候儀者御禁止之事候処、若輩之者共其旨を不存、小鮎とも釣候而ハ如何ニ候条、親兄弟右体之儀無之様可申付候、

右之通、表方江通達いたし、御側方・御勝手方江ハ写を以相達可申候、

正月

内膳

一 雛遊之儀、女童共遊候得者蓬餅・輕干菓子類を以相濟、無物入候様ニと申渡候而も差而詮有之間敷候間、跡々仕来候拾部壹程之積を以可仕候、

右之通、御側方・御勝手方江相達、与中・支配中

江茂可致通達候、

二月

(北条時守)  
織部

右之通被仰渡候間致通達候、以上、

(朱書)延享二丑  
二月十日

取次  
義岡左平太

「(行間朱書)本島津主水致承知候事、」

一 雛遊之儀ニ付而者先年茂被仰渡置趣有之候、近年至

末々為差廻由候付、先達而被

仰出旨茂候条、猶以物入不致無益之費無之様可相心

得候、此段与中・支配中・諸外城可被申渡者也、  
(江脱力)

(朱書)延享五辰  
二月廿八日

御家老座印

一 櫛実・生蠟締方之儀ニ付而ハ兼而申付置候得共、聊

爾之者多々有之候付、猶又此節締方段々申渡候、依

之向後聊爾之者ハ御咎目重く被仰付筈候間、此旨屹

末々迄も人別致承知候様、与中江可被申渡者也、

(朱書)延享三寅  
九月廿七日

御家老座印

六与  
与頭

一 御使致着候節鷲之間江状出候砌、状之上を踏越見候

者茂有之候由、人名有之事候間、左様無之様可仕候、

此段屹と被仰渡儀ニ而者無之旨、主殿殿より致承知  
(島津久満)

候、

(朱書)寛延三年  
九月十六日

御目付

右之通、筆者藤島幸右衛門致承知記置也、

写

一 浦賀船積通船之儀、享保五年申渡、通船相止候品共  
も有之候処、向後古来之通武器之外者植類庭石等迄  
茂通候様浦賀奉行江申渡候間、其段向々江寄々可被  
達置候、

右之通、從、公義被仰渡候条、此旨与中支配中、

地頭所・私領・明所之外城・寺社・家中・町中江

可被申渡者也、

（朱書）延享四卯

五月九日

六与

与頭

御家老座印

覚

大目付江

一 旅人之内定を破、無法成儀有之候ハ、触書之趣を以  
相改、若不相用候ハ、其所之領主之役人江達シ、役  
人其段旅人江申聞、其上二而及異儀候ハ、差留置、  
江戸表江訴候様可仕事、

一 御代官所之儀茂右之趣準シ取計可申事、

一 町人江会符を借し渡、武家之荷物ニ致させ候儀有之  
由相聞得候、自今堅無用たるへく事、

一 近年宿々悪党之者有之、飛脚之者共江賃錢ねたり取

候、旅人之泊々江相越、酒手等ねたり取候由、自今  
右体之者於有之者其所ニ捕置、御料者御代官、私領  
主、地頭江早々可申出事、

一人馬賃錢之儀、御朱印并ニ御用之外ハ可相私事之

条、宿々日ノ帳ニ委細記置、宿中者勿論、助郷村々

江茂勘定相立候様、問屋共常々可相心得事、

一 泊休之儀、前広ニ日限極候ハ勿論、差掛り約束いた

し候分、縦輕キ旅人たり共異変無之様、本陣・旅籠

屋急度相心得可申事、

一 此度相触候上者宿々之者共旅人江対し非儀を申懸、

賃銀入用多所候歟、又ハ旅人を滞らせ候儀有之候

ハ、急度可申付事、

以上、

（朱書）延享四卯

三月

右之通可被相触候、

定

大目付江

一 御用にて道中往来之面々、

御朱印人馬之外添人馬多く相立候由相聞得候、前々

茂申達之通無用之添人馬出させ候儀堅ク可為停止候、御朱印員數之外ニ可入人馬之分者、御定之賃錢無相違急度相払ハセ可被申事、

一御用ニ付而往来之面々、或ハ在所或ハ諸大名、惣而道中往還之輩、人馬割之役人可有之事候間、御朱印人馬并賃人馬可入ほと相立させ、賃人馬之分者賃錢無相違払ひ候様、人馬割役之者問屋場ニ相残し委細遂吟味候様可被申付候、其外之家来又ハ雇之者共私二人馬・駕籠出し候様ニ申掛候得共、役人之断無之候ハ、一切差出間敷由、宿々問屋場ニ而相断候之様可被申付候、道中之者共ニ茂右之通可心得旨申渡候事、

一往来之面々其家来并ニ末々雇之通人足、近年者主人之權威を以道中ニ而非分之仕形等有之、或者下々可持道具を茂人足ニ持せ、其者ハ馬・駕籠ニ乗り、或者賃錢を茂不払者共有之由(御融書宛保集成より補)相聞候、向後ハ右之類之不屈無之様ニ、雇人足ハ不及申、其請負之もの迄急度申付、可召連候、自今以後、不法之族も於有之は、道中宿々にて改之、家来并雇之ものたり共、其

所に留置、早速道中奉行え相訴候様に申渡候間、其旨を可被存事、

一往来之面々家来并雇之者に至るまで、駄賃旅籠錢等無相違様払候様に急度可被申付候、旅籠錢等或は不相応に減し候て相渡し、或は無相違請取候由証文仕らせ、相払はざる輩も有之由相聞候、向後右之通之儀共於有之は、是又早速道中奉行え可申訴之由、宿々え申渡候之間、△可有其心得事、

一諸荷物貫目之儀、御定之通無相違様可被申付候、今度荷物貫目相改候場所定り、若御定より重キ荷物於有之者、御用之荷物之由申とも継送るへからさる旨申付、其外宿々江被申渡候旨其心得有之、且又在番之面々、京・大坂・駿府三度飛脚荷物、近年者貫目重くかさ高成荷物<sub>カ</sub>有之、夜通シ茂往来候由相聞候、飛脚請負之もの其外商人之荷物ましへさる様ニ堅ク被申付、尤、在番之面々自分之荷物も御定之通を以、猥ニ貫目重キ荷物差出間敷候、古来より夜通し之飛脚者猥ニ通分(らカ)さる定ニ候間、向後無抛子細ニ而夜通シ之飛脚出シ候ハ、番頭江其旨を達シ、番頭之証文

を以可被差出候、飛脚請負之者共ニ茂是等之趣急度  
可被申付候、道中ニ而茂其心得を以改之、若貫目重  
キ荷物物有之歟、又者証文無之夜通シ相通候ハ、抑置、  
早速道中奉行江可訴之、僉儀之上飛脚宰領之者ハ不  
及申、右請負人迄可為曲事旨申渡候間可有其心得事、  
一江戸・京・大坂其外国々より町人請負ニ而令往來候  
御用之諸荷物、近年貫目茂重く、荷数も多く、道中  
人馬大分相立、其上御用之儀を申立人馬賃錢不足ニ  
相拵、其外不埒之仕形共有之由相聞候、向後御定之  
外貫目重く不仕、其荷数貫目随ひ相立候人馬賃錢無  
相違拵之、少も非分之儀仕間敷旨、其御用達之面々  
より念を入被申付、向後右之類之儀無之様ニ可被申  
渡候、道中ニ而も改之、若貫目重く候歟、又者猥ニ  
荷数多く不審之儀茂候ハ、たとひ御用之荷物之由  
申とも継送らす其処に留置、早速道中奉行江可訴之、  
僉儀之上荷物宰領者不申及、請負人迄可為曲事旨申  
渡候間可有其心得事、

一道中宿々之者共不埒之儀有之候節者、旅人ニより其  
処之間屋・年寄等ニ日路・三日路茂招呼ひ、又者訴

訟之ために付添參候儀も有之由相聞候、たとひ宿々  
之者不届之仕方有之候共、問屋・年寄招呼ひ候而ハ  
其宿人少ニ成、御用茂差支申事ニ候間、向後ハ問屋・  
年寄等招呼ひ候儀ハ不及申、訴訟之ため付添參候事  
茂相止させ、其趣を者道奉行江被申達、奉行所より  
僉儀之上ニ急度可申付候、可有其心得事、

右之条々、近年道中之宿々御定之外二人馬多くか、  
り、其外旅人不法之事共有之、宿々者不申及、助  
郷村々迄茂及困窮候相訴候付、委細穿鑿之上を以  
被

仰出候、向後書面之趣急度可被相守之候、たとひ  
与中・支配并家來之不法有之候者、其番頭・役所・  
主人之越度可罷成候間、其旨を可被心得者也、  
右之通、正徳ニ辰年相触候処、近年猥ニ相成候様  
相聞候、自今右之趣猶又急度相守候様可仕候、若  
此已後相背者於有之ハ吟味之上答目可申付事、  
以上、

延享四年卯三月  
右之通可被相触候、

右式通之通、從 公義被仰渡候条、此旨与中・支配中・地頭所・私領・明所之外城・寺社・家中・

町中江可被申渡者也、

(朱書)延享四卯

五月十七日

六手

与頭 余座略ス、

御家老座印

一 御領内之者商売、又者何そ二付長崎江差越候節、問

屋江不相付相對致脇宿候者有之候付、向後脇宿禁止、

且亦薩州之產物定問屋無問合不取扱様、此節長崎惣

町中江被相触由候間、長崎江差越候者と御屋代江相

断候上五軒之定問屋江相付、持越候產物も問屋江申

達可致商売候、若自儘致脇宿隱商売候ハ、可及沙汰

候条、此旨与中江可申渡者也、

(朱書)延享四卯

六月十九日

六手

与頭

御家老座印

一 御当地・諸外城之者、勘定方又者座々江手形引付等

申請候節數日為滯候儀茂有之由相聞不可然事候間、

右之体之儀無之様可相心得候、就中外城之者數日及

滯在候而ハ致迷惑之由候間、諸事不滯様奉行・頭人より屹之可申付候、若緩せ之儀候ハ、可及御沙汰候、

右之通、表方江致通達、御側方・御勝手方江者写

を以相達、諸外城江も可申渡候、

(朱書)寛延元辰

四月

(島津入府)  
左衛門

右之通被仰渡候間、如何可致通達候、以上、

四月廿三日

(貞利)  
有川幸右衛門

一 諸御奉公人諸外城江差越候節、所役々より進物又者

致馳走、自分付届候様取成、入料百姓江割付之故出

米出錢及過分、其上夫仕多、別而致困窮之由候間、

右体之儀嘗而無之様可相心得候、若緩之儀於有之者

吃御沙汰可被仰付候、諸々江差越候面々茂存其趣、

兼而被仰渡置候通可相嗜候、

右之趣、表方江致通達、御側方・御勝手方江者写

を以相達、諸外城江茂可申渡候、

(朱書)寛延元辰

四月

左衛門

右之通被仰渡候間、如何可致通達候、以上、

四月廿三日

有川幸右衛門

写

一唐・阿蘭陀菓種并荒物類長崎落札荷物、当表唐菓間屋江登候分ハ長崎ニ而相勤候当地糸割符年寄共相改、積登せ候儀候処、近比右問屋之外江紛敷荷物差登せ令商売候趣風聞、唐・阿蘭菓種荒物類不登答事候間、菓種仲買ハ不及申、問屋之外江右荷物買取候儀者一切仕間敷候、若紛敷荷物致売買者於有之者急度可申付候、

寛延元辰年十一月

右之通、從、公義被仰渡候条、此旨相守候様与中、

支配中・諸外城江不洩様可被申渡者也、

十二月三日

御家老座印

六組  
与頭

〔行間朱書〕  
「右之通、大坂町中江被仰渡旨、大坂御留守居より

申越候条、此旨与中・支配中・諸外城江不洩様可

被申渡者也、

右朱書之通売書相立、辰十二月十四日通達有之、」

一鳥吹持行候聞得有之候、

一木口を挽、はまになけ候由、

右之儀者兼而被仰渡置趣茂有之、向後鳥吹又者はまなけ不申様与中ニも可被申渡旨齋宮殿より被仰候、

〔朱書〕寛延二巳  
十二月「十四日」

右之通、月番御目付穎川千左衛門を以穎娃内膳致承知候事、

一切金・疵金・軽目金通用之儀、去丑年相触候処、近

比通用不自由相成候由、畢竟諸国在々諸商人共切疵

金を嫌ひ国々為替金等二茂疵切等撰候故之事相聞候、

前々被

仰出候通小判壹分判共切疵・へけ疵大小無構切はな

れ候迄可致通用候、軽目金之儀者小判者四里迄軽分

可致通用、壹分判茂右分量を以軽分無滞可致通用候、

此旨諸国在々・御領・私領共右之段相心得、両替屋

を初諸商売物代金・為替金等無滞可致通用候、若又

武家方并町方・百姓等不受取者有之ハ、両替屋より

其支配へ江可申出候、此已後彼是申致難渋、歩銀

等取候而替屋有之者、其所之支配江早速可訴出候、吟味之上急度可申付事、

右之趣、江戸・京・大坂者勿論、其外御料者御代官、私領者領主・地頭より急度可申付候、以上、

寛延二巳十二月

右之通、從 公義被仰渡候条、此旨支配中・諸外

城江不洩様可被申渡者也、

(朱書)寛延三年

正月廿六日

御家老座印

六与

与頭 余座略ス、

大目付江

一国々私領之百姓、年貢取筋或夫食種貸等之領筋二付、領主・地頭城下陣屋又者門前江大勢相集り訴訟いたし候儀、近来間々有之由相聞得候、都而強徒党<sup>(訴脱力)</sup>又者逃散候儀者堅停止候処不届至極候、自今以後右体之儀於有之ハ急度逐吟味、頭取并差統事を工二候者夫々急度曲事可被申付候、

右之通、向々江可被相触候、

(朱書)寛延三年

午正月

右之通、從 公義被仰渡候間、此旨与中・支配中・諸外城江不洩様可被申渡者也、

三月十八日

御家老座印

六与  
与頭 余座略ス、

写

大目付江

一切レ金通用相滞候付、小判・壹分判共切疵・へけ疵大小無構切はなれ候迄、軽目金之儀者小判者四里迄輕キ分、壹分判茂右分量を以無滞可致通用旨先達而相触候処、大切れ金多分世上二致流布、右体之切れ金請取候而切はなれ候得ハ請取候者難儀筋二候、依之自今小判者五分迄之切れ金并軽目者四厘迄無滞可致通用候、但、五分以上之切れ金者勿論、五分以下之疵金共二軽目者四里内二而も形かけそこね穴明キ候歟、又者疵数ヶ所有之類者金座江差出、定法之通二而直させ可申候、若五分以下之疵四厘内之軽目二而も形かけそこねざるを武家方并町方・百姓等不請取者有之者、兩替屋より其支配〳〵江可申出候、且亦此類之通用可成金より歩合取之候而替屋有之者、

其所之支配江早速可訴出候、吟味之上急度可申付候、

右之趣、江戸・京・大坂者勿論、其外御料者御代官、私領ハ領主・地頭より急度可申付候、以上、

寛延三午五月

右之通可被相触候、

右之通、從、公義被仰渡候条、此旨与中・支配中・

諸外城江不洩様可被申渡者也、

七月十三日

御家老座印

与頭

写

一惣而供廻り徒之者風俗不宜かさつに候、中間共者異

風取拵候故別而かさつになり候、向後急度相止可申

候、主人く申付候共請人共より断可申達旨、奉公

人江茂其段可申付置候ハ、在所者召仕候面々右体之

儀有之間敷事二候、

右之通、請人共江町奉行より急度申渡候間、主人

く江茂書面之通相心得候様寄々可被達候、

七月

右之通、從、公義被仰渡候間、此旨与中・支配中・

地頭所・明所之外城・寺社・家中江可被申渡者也、

（朱書）寛延三午

九月十三日

御家老座印

与頭

余座略ス、

一伏見往還之面々、伏見旅宿之節家来共他出等いたし

猥成様子二有之、左様之儀者有之趣風聞在之候、旅

中之儀者別而被入念、左様之儀者有之間敷儀二候間、

旅宿之外ハ堅ク他出等不仕、諸事猥ニ無之様急度可

被申付候、

右之趣、伏見往還之面々江寄々可被達候、

十二月

右之通、從、公義被仰渡候条、此旨承知仕様与中・

支配中・諸外城江不洩様可被申渡者也、

正月廿日

御家老座印

与頭

一諸人願事ニ付進物請用不致事候処ニ、間二者無案内

二而進物遣候茂可有之儀故、右之体之進物一切取遣

致間敷候、乍此上願事ニ付進物等致候人有之候ハ、曾而致間敷候、

一諸奉公人諸外城江差越候節、所役々より進物又者致馳走、自分付届之様取成、百姓共江割付候故出来・出銭及過分、其上夫仕多、百姓共致困窮之由候、且亦外城役々何ぞニ付鹿兒島江差越候節、浦人・百姓共江品物納方申渡、鹿兒島ニ而自分付届等ニ茂相用候間得有之不可然候条、右体之儀曾而無之様可相心得候、若緩之儀於有之者可及沙汰候、諸外城江差越候面々茂此旨を存可相嗜候、

右者、先年已来段々申渡置候得共、程経候得者漸々緩せニ相成候付、弥右之旨堅可相守、若緩之儀有之候ハ、可及沙汰候、此段御勝手方・支配中江致通達、表方・御側方江者写を以相達、諸外城之儀者地頭・私領々主・月番御用人江可致通達候、  
宝曆三西  
三月  
(平田正輔)  
靱負

一追懸馬并小路江猥ニ馬を繫通路之障ニ相成候、右付而者兼而被仰渡置趣も有之候処ニ、至頃日間二者大

形ニ相間得候者も有之由候、且亦馬を数疋纏率通候者茂有之、是又ハ通融之障ニ相成候条、左様之儀無之様支配中江可被申渡候、尤、小路江猥ニ馬を繫候儀者屋敷主よりも時々氣を付差留候様ニ可被申渡旨大御目付衆被仰渡候間、此段申達候、以上、

(朱書)「宝曆三」  
西九月三日

御目付

与所

一鳥吹之儀、以前より段々御法度被仰渡置候処、頃日間二者持行候者茂有之由相間得不可然候条、此以後一切不取扱様親兄弟・親類より稠敷可申聞候、此旨表方江致通達、御側方・御隠居御方・御勝手方江茂写ヲ以可相達候、

(朱書)「宝曆三西」  
十月

(伊勢貞起)  
兵部

一惣而掛持屋敷停止之事、

一屋敷替いたし候節者、元屋敷買手無之内者自然持之姿ニ罷成、且又屋敷買取候以後小身者者急居宅引移難成、時節ヲ見合候儀も有之、其内者掛持之姿ニ罷

成積ニ候、右式之者者いづれも無拋儀候条、件之子細御勘定奉行まで届申出、月限を致置候様可致候、乍然屋敷買取候以後十二ヶ月過迄不能移者者御法之通屋敷可取揚候、夫共無拋諷有之、月限之延申出候ハ、吟味次第可差延候、

一 無御免人屋敷式ケ所致所持候ハ、壹ケ所可取揚事、  
一 屋敷相立候以後自身不能移、余人江預置候儀令停止候事、

一 初条相記候通小身者急罷移候儀難成者ハ、其旨御勘定奉行江可申出置候、其内屋敷番ことく移置候儀心次第候、

一 士屋敷を内々ニ而町屋敷成置候事、又者町人江借置候儀令停止候事、

一 屋敷拝領被仰付、十二ヶ月過迄不能移候ハ、可取揚候、依場所急屋敷立候儀難成所者十二ヶ月之内其旨御勘定所江申出、差図次第可致候事、

一 近所之屋敷買添壹ケ所纏置罷居者於有之ハ、壹ケ所者可取揚候事、

一 右之通候得共、親子兄弟屋敷并罷居境ヲ取除候儀者

格別之事候間、右之体之者者御勘定所迄申出置候上ニ而屋敷境を取除、後年境紛敷無之様慥成印をいたし置、表向ハ式ケ所と相見得候様壹ケ所ニ門壹ツツ、明置候様可申付候、

一 屋敷差迫、親子兄弟・家来等差置候余地無之者者、近所之屋敷壹ケ所内々ニ而取添置、屋敷主を可差置候、左候而、内々境を取除候儀者心次第可申付候、

一 壹ケ所之内ニ而境相立候儀、百五拾坪より内屋敷小割いたし、売屋敷出候儀停止之事候故、別而小身者ニ而差迫候者ハ内々居屋敷之内を相払、相柄居罷居候者茂有之、或者加勢を請屋敷之内を少々割候而渡置も有之、或ハ不致介抱候而不叶者を屋敷内差置候儀茂有之、名子類を差置、諸用を相達人茂有之、左

様成者ハ内々ニ而境相立置候由、是者無拋儀にて前々より右之通為致置由、然共右之屋敷者内々之境立迄相改二者及間敷事候条、表向者小路並者壹ケ所之姿

ニ相見候様可致候、勿論、門壹ツ之外別小門迄も明間敷候、乍然門壹ツニ而差支諷有之、依願ハ明置候儀者格別候、

一屋敷之内を近所之人江取添遣候儀有之候、然者百五

御付趣、来月廿日より内御勘定所江可申出候事、

拾坪有之候屋敷之内を近所ニ取添遣置、境相立候而

一鹿兒島中屋敷改之儀、来月末より改有之筈候間、改

ハ跡屋敷別而小屋敷罷成目立筈候間、表向小路並致

人差越候節屋敷主出合請答可申候、当時(他カ)地行之人者

小割候と相見得ヌ様いたし、内々境立相直候儀者可

近所之儘成名代兼而頼置可申候、

為心次第候、右式内々近所江遣候儀者無抛訳付而社

右之通被定置候条得其意、何ぞ訳有之申出儀於有

右之通致筈候間、内々之境立者構無之候、

之者来月廿日より内御勘定所江可申出候、改之節

一諸座付并諸職人御預屋敷江其者不罷居、余人住居い

二いたり申出候共取揚間敷候、御法違之屋敷可被

たし候儀令停止候事、

取揚候、此旨致承知候様与中江被申渡者也、

一諸十二男屋敷被下候人養子罷成候ハ、右屋敷可差

(朱書)宝曆四戊正月十八日

御家老座印

上之、買屋敷之儀者可為格別事、

六与与頭

一三百坪已上之屋敷者高百石以上之者ニ而無之候得者

住居不罷成候、然共御側江相勉候者歟、諸奉行歟、

一鹿兒島中辻歌一切停止申付置、毎度申渡事候処ニ、

又者無役ニ而茂御馬廻相勤候歟、右之通之者者依願

頃日緩せ儀茂有之由相聞得不可然候、兼而御目付・

之訳者御免可罷成候、右之外者百石以下三百坪已上

横目ニ茂申渡置趣有之候条、右体之儀候ハ、被遂詮

之屋敷願取揚間敷候、持来候者者格別之事、

議一涯可及迷惑候条、了簡違無之様堅可相慎候、

一三百坪已上之屋敷(ニテカ)よりも場所悪敷又者屋敷内重々之

一座間・盲女之儀者所々江指南等差越、其余勢を以專

岸又者地(池カ)抔有之屋敷者、依願百石以下ニ而も御免可

致渡世、門ひき等ニ不行廻体之者ハ別而及難儀筈候、

罷成候事、

且亦御能方人数之内笛・鼓・太鼓等稽古被仰付置候

一御預屋敷・御借屋敷被仰付候人者、何様之訳ニ而被

者茂遠方ニ而可致稽古之支(符)ニも申渡置候得共、其通

二而者稽古之支二も相成候条、鼓・笛・太鼓御目付  
衆御旅宿江不聞得所二而者不苦候、三味線の儀茂不  
聞得所二而者不事立様可相心得候、御旅宿近方ハ先  
達茂申渡置候通堅可相慎候、不聞得場所逆も風并又  
者及深更候而者遠相聞得儀候条、右之勘弁可有之候、  
下町之儀者近方之事情条、右之趣を以取違無之様町  
役共より時々稠敷可申付候、

一鹿兒島中御巡見御出之節、御通路筋并近方ハ勿論、

其節最寄随分可相慎候、

右之趣、此涯随分取違無之様表方江致通達、御側

方・御勝手方・御隠居御方江者写を以可相達候、

八月

縫殿

〔行間朱書〕  
〔本文〕八月九日小林中太兵衛御取次を以被仰渡、畠

山数馬致承知候事、

一拔物之儀二付先年度々被仰渡候御条書写壹通、

一右同断二付、此節被仰渡候御条書壹通、

右之通致拔物候者於有之者、其前々領主越度可相  
成旨、今度段々從 公義被仰渡候、拔物締方之儀

二付而者兼而稠敷被仰渡置候事候得共、若右体之  
儀共有之候而者被仰渡付様不相届筋二而如何之儀  
候条、此旨を存、猶以大形之儀共無之様随分相守  
候様、屹と申付旨御側方御役人・与中・支配中・  
諸外城・私領江不洩様申渡、御隠居御方江写を以  
可相達候、御勝手方江者別紙二而相達候、

九月

主鈴

一唐船拔荷之儀二付別紙之通先年度々被

仰出茂有之候処、近年猥相成度々拔荷仕候者茂有之

由、其比度々唐船漂流茂有之、右二付而者紛敷儀も

有之趣相聞得、畢竟申付不行届故之儀と先年度々被

仰出候趣、弥違失無之様自今共嚴敷被申付、拔荷仕

候者於有之者召捕候様可被申付候、此已後拔荷仕候

者外二而召捕、吟味之上先々於相知候者其所之領主

越度可相成候之条、不存其旨無油断可申付候、以上、

（朱書）宝曆異子  
八月

右之通、名越左源太御取次二而被仰渡候事、

正徳四年五月

一長崎往來之唐船私商売之事年々二相長し、其外御国  
法二相背キ候事等有之ニ付而、今度唐船之事ニおゐ  
てハ長崎奉行所并彼近国之領主江被仰候旨有之候、  
然者海上之国々ニ所領有之候面々毎年領内之船数を  
相改、船切手之事等嚴密に沙汰有之、私商売之も  
の、ために船を借しあわせ候事於有之者、去頃被仰  
出候添高札之旨ニまかせ其者を搦捕、早速注進すへ  
き由急度下知せらるへく候、自今以後船頭・水主等  
之事者いふに及はず、何者ニ限らず私商売之事ニお  
ひて犯罪之輩於有之者、其領主越度之可為御沙汰候  
間、よろしく其旨を可被存者也、

五月

享保三戌年六月

一唐船持渡之諸色拔荷仕、売買之者今以不相止不届候、  
向後買取(元カ)不慥疑數品有之候ハ、不可相求、於訴出者  
僉儀之上其荷物可被下之、尤、拔買仕者有之由沙汰  
承り共是(候脱カ)又可訴出、縦同類たりといふとも其科をゆ

るし御褒美被下之、其上あたを被成様(なご、るカ)ニ可申付候、  
若存ながら不申出者有之、於令露頭者急度可行罪科  
事、

一海上ニ而唐船見掛候ハ、縦行違(候脱カ)ニ而共唐船とはる  
かに間を隔可罷通、尤、唐船か、り有之近辺ニ同様  
ニ船掛いたし候ハ、遂詮議可行罪科候間、国々所々  
ニおひて西国・北国往來之船持候者共、江者常々可申(急度脱カ)  
付候、

右之趣堅被申渡、外より不相知已前面々領地・支  
配下より相改出し候様ニ無油断可被申付候、若違  
犯之者有之候時者伺之上仕置可被申付候、以上、  
六月

享保三戌年十一月

一去頃大坂町奉行所ニ而唐物拔商之者召捕候付而、同  
類共国々江申越段々被差出候へ共、面々手前より改  
被出候との儀者いまた届無之候、当六月書付を以相  
達候趣茂候処、如何被相心得候哉、先頃被差出候者  
大坂ニ而相知候分計之儀ニ候、年來之事ニ候得者ぬ

け商之者余多可有之候間、西国・中国筋津々浦々人  
之多集候所平日無油断被致吟味、他領之者二而茂ぬ  
け商二携候者者召捕、大坂町奉行所・長崎奉行両所  
之内江手寄次第可致被相届候、本ノマ、被致歟尤、召捕候者ヲ罷出  
候二者不及候、以上、

十一月

一 唐船海上二見掛候ハ、間を隔可罷通候、并唐船と同  
様二船か、り不可仕趣当夏被 仰出、最早右之御触  
国々廻船之者迄可致承知候間、此已後唐船漂流之節  
番船之者二申付置、若右之品相背候船於有之ハ相改、  
疑敷儀茂候ハ、召捕可申候、但、与風參掛候様子候  
ハ、湊江引入船中荷物委細相改、其上二而通可被申  
候、以上、

十一月

享保四亥年六月

覚

一 先頃渡辺外記於御用先、西国・中国筋之面々唐船拔

商之者於領分吟味之様子家来共相招相尋候処、或領  
内之者共江証文申付、或誓詞血判致させ、又者相触  
候書付を度々読聞せ候所所有之由書付差出候、是等  
之事者無益之儀、改之名聞迄二而書付二預置、畢竟  
吟味之本意者不相建事二候、右之類無益なる改自今  
堅無用可被致候、旧冬茂書付を以相立候処、拔商之  
者共於奉行所ハ遂詮議、其領主江申越候得ハ召捕被  
差出候得共、面々手前より改被差遣者無之候者吟味  
之筋おろそかに候故と相聞候、向後者忝人成共召捕  
候を專一二可被申付候、以上、

六月

享保十一年九月

一 近年唐船漂流之沙汰無之候得共、打払之儀弥以前々  
申達候通別而無油断可被相心得候、

一 唐船漂流之刻、抜買筋之船二相見得申候ハ、打払  
之儀兼而申達候通可被相心得候、併打払候而茂出帆  
不仕候ハ、船具等二而も打損し出帆難成儀茂難計  
（側カ）  
候而、左様之節者二三日茂様子見合、船をハ寄、弥

船具等を損し出帆難成趣二候ハ、長崎江送候様可被仕候、

一打払之刻、出帆仕候ハ、先達而申達候通打払之儀見合、尤、少々者追掛ケ、長く追掛申儀者無用可被致候、

以上、

九月

一金山根帳付山方稼其外旅人江祈禱・占等致承知候事相頼亦者為致宿候聞得茂有之、宗門ニ付而疑敷儀有之候条、向後旅人体之者江祈禱・占等相頼候事、旅人宿外旅人江為致宿候儀、兼而申渡置通堅停止申付候、且又御領國中神子ほさ無故筋を以占・祈禱いたし候儀先年堅停止被仰付、諏方神主より一統者如為取揚置事候得共、程過大形成行候条、右体之儀無之様地頭・領主・支配頭・主人より堅可申付候、

右之通、表方江通達、御側方・御勝手方・御隠居

御方江者写を以相達、諸外城江茂急度可申渡候、

(朱書)「宝曆七丑」  
十月

(穉山久智)  
左京

(行間朱書)  
「本文、丑十月六日町田主計御取次を以島津主水致承知候事、」

一菜種子他国江積出候儀者、御船手并諸所手形・所通手形を以勝手次第他国売買令免許候処、無手形二而拔候儀多々有之由相聞得候、向後無手形二而積出候儀致見聞候ハ、其訳可申出候、相糺候上菜種子所揚直申出候者江不依多少不殘可被下之候、縦令同類たりとも其咎ヲゆるし、取揚候菜種子可被下候条、御当地者町方横目、外城・私領者其所締方横目又者所横目方江手寄次第可申出候、此旨末々迄茂人別致承知候様与中・支配中・諸外城・私領江不洩様可被申渡者也、

(朱書)「宝曆八寅」  
正月十四日

御家老座印

六与  
与頭

写

大目付江

定

一 御用ニ付道中往来之面々、御朱印人馬之外添人馬多く相建候由相聞候、前々茂申達之通無用之添人馬出させ候儀堅可為停止候、

御朱印員數之外ニ可入人馬之分者、御定之賃錢無相違急度相払はせ可被申事、

一 御用ニ付而往来之面々、或者在番或者（御触書玉曆集成より補）諸大名惣て

道中往来之輩、人馬割之△役人有之事ニ候間、御

朱印人馬并賃人馬可入程相立させ、賃人馬之分者賃

錢無相違払候様ニ人馬割役之者問屋場ニ相残し、委

細遂吟味候様ニ可申付候、其外之家来又者雇之者共

私ニ人馬・駕籠出シ候様申掛候共、役人之断無之候

ハ、一切差出間敷由、宿々問屋場ニ而相断候様可被

申付候、道中之者とも二も右之通可心得旨申渡候事、

一 往来之面々、其家来并未々雇之人足共ニ、近年者主

人之權威を以道中ニ而非分之仕方等有之、或者猥ニ

ハ手替り人足を取、其人足之方より錢を出させ候而

指ゆるし、或者自分ニ可持道具をも人足ニ為持、其

者ハ馬・駕籠ニ乗、賃錢をも不払、又者宿々之者に

対し非分之儀も申掛、若宿々之者申旨有之候得共（はカ）

たをなし候由相聞不屈之至り、向後者江戸・京・大坂ニ而雇人足請負之者ニ申渡、人足請負候（御触書玉曆集成より補）度々、人足共ニ急度申付、右之通り之不屈△不仕、若無扱

子細有之、手替り之人足取之、又者馬・駕籠等ニ乗候節者御定之賃錢無相違払之、旅籠錢等之儀茂是二

同く非分之儀仕らず間敷候、自今已後不法之旅（族カ）も於

有之者道中宿々ニ而改之、家来并雇之者たり共其所

留置、早速道中奉行江相訴候様ニ申渡候間、詮儀之

上当人ハ不及申、請負人迄急度可相咎目条、其旨を

可被存事、

一 往来之面々、家来并雇之者ニ至るまで駄賃・旅籠錢

等無相違様ニ払候様ニ急度可被申付候、旅籠錢等あ

るひハ不相応減し候而相渡、或者無相違請取候由証

文仕らせ不相払輩茂有之由相聞候、向後右之通之儀

共於有之者、是又早速道中奉行江可申訴之由宿々江

申渡候間可有其心得事、

一 諸荷物貫目之儀、御定之無相違様ニ可被申付候、尤、

荷物貫目於改所若御定より重き荷物於有之者不可繼

送むね申付、其外宿々江申渡候間其心得可有之、且

亦在番之面々、京・大坂・駿府三度飛脚荷物、近年

者貫目重クかさ高成荷物<sup>有之</sup>、夜通ニ茂往来之由相聞候、飛脚請負之者其外商人之荷物ましへさる様ニ堅可申、尤、在番之面々自分之荷物茂御定之通を以

猥ニ貫目重キ荷物差出聞敷候、古来より夜通之飛脚者猥ニ相通らさる事ニ候間、向後者無抛子細ニ而夜

通之飛脚出候ハ、番頭江其旨を達し、番頭証文を以可被差候、<sup>(由脱カ)</sup>飛脚請負之者共ニ茂此等之趣急度可被申

付候、道中ニ而茂其心得を以改之、若貫目重キ荷物<sup>有之</sup>歟、又者証文無之夜通シ相通候ハ、抑置、早速

道中奉行江可訴之、詮儀之上飛脚宰領之者者不申、右請負人迄可為曲事旨申渡候間可有其心得事、

一江戸・京・大坂其外国々より町<sup>(人脱カ)</sup>受負ニ而令往来候諸荷物、近年貫目茂重荷数茂多く、道中人馬大分相立、

其上御用之儀を申立人馬賃錢不足ニ相払、其外不埒之仕形共在之由相聞候、向後御定外貫目重ク不仕、

其荷数貫目ニ随ひ相立候人馬之賃錢無相違払之、少茂非分之儀仕問敷旨其御用達之面々より入念被申付、

向後右之類之儀無之様可被申渡候、道中ニ而も改之、

若貫目重ク候歟、又者猥ニ荷数多く不審之儀候ハ、

繼送らす其所ニ留置、早速道中奉行江可訴之、詮儀之上怪敷儀茂於有之者荷物宰領不及申、請負人迄可為曲事候、

一道中宿々之者不埒之儀有之候節者、旅人ニより其所問屋・年寄二日路・三日<sup>(御触書玉曆集成より補)</sup>路も招呼、亦は訴訟之為

メニ付添△參候儀茂有之由相聞候、たとひ宿々之者不屈之仕形有之候共、問屋・年寄招呼ひ候而者其宿

人少ニ成、御用茂差支申事候間、向後者問屋・年寄等招呼ひ候儀不及申、訴訟之為ニ付添ひ參候事茂相

止させ、其趣を者道中奉行江被申達、奉行所より詮儀之上急度可申付候条可有其心得事、

一旅人之内定を破り不法成儀有之候ハ、触書之趣を以相改、若不相用候ハ、其所之領主之役人江達し、

役人其段旅人江申聞、其上ニ而及異儀候<sup>(人脱カ)</sup>差留置、道中奉行江可訴旨、御代官所之儀茂右之趣に準し可取

計旨宿々江申渡候間、是又其旨ヲ可被存事、

一町人江会符を渡し武家之荷物ニ為致候儀有之由相聞候、自分堅く可為無用候事、<sup>(今カ)</sup>

一御用ニ而往来之面々亦者在番之衆中、泊り休之儀前

広ニ日限相究置候処、宿方致異変候節者宿場之者不

届之至ニ付、吟味之上嚴科可申付事ニ候得共、川留

又者異変之儀有之、右定之日限ニ至着不致、二三日

茂過着候而も右定之宿ニ休泊り致候節、先達而極置

候本陣・旅籠屋差合候節者相応之旅籠屋江可致休泊

事ニ候処、近来者其儀無之、宿場不届之様ニ取計候

趣茂有之哉ニ候、相見得候条、以来者右休之儀無之

様可被心掛事、

右之通条々可被相守候、尤、先達而も度々相勤候

処、近年宿々御定之外ニ人馬多差出、其外旅人不

法之事共有之、宿々者不及申、助郷村迄も及困窮

候由相聞候付、穿鑿之上被

仰出候条、向後書面之趣急度可被相守之候、たと

ひ与中・支配并家来之不法有之由候共、其番頭・

御役人・主人之越度ニ可罷成候、其旨可被存者也、

宝曆八寅年三月

右之通可被相触候、

右之通、從 公義被仰渡候条、此旨与中・支配中・

地頭・私領・明所之外城・寺社・家中・町中江可  
被申渡者也、

〔朱書〕宝曆八寅  
五月十一日 御家老座印

六与  
与頭 余座略ス、

写

大目付江

一古金引替候儀、先達而茂度々相触候共、今以貯置引

替後有之段、且古金質入等ニ致候趣相聞候、自今不

貯置無滯引替可申候、勿論古金質入ニいたし候儀

堅ク令停止候、若以来質入ニ致し候者△有之ニおひ

てハ双方共急度可申付候、

右之趣可相守者也、

寅三月

右之通可被相触候、

右之通、從 公義被仰渡候条、此旨承知仕候様支

配中・与中・地頭所・私領・明所之外城・寺社・

家中・町中江可被申渡者也、

〔朱書〕宝曆八寅  
五月十一日 御家老座印

与頭

写

一道中往来之面々、東海道人馬先触之儀先達而申渡置候、此節者又々中山道・日光路・奥州路・甲州路・

水戸佐倉路道中之儀茂東海道同断、先触之儀菅沼下(定秀)

野守様より被仰渡候旨申来候、右五ヶ所海道常式不罷通道中茂有之候得共、向後為心得御役人限可有通

達候、

(朱書「宝曆八寅」)  
十二月

(義岡久中)  
相馬

諸人櫛実垂場一手二差免置候得共、差止申付候間、以後垂調候次第之儀者追而可申渡旨先比申渡置候、依之自今左之通申付候、

一自分櫛実垂調候人者、毎年正月月中旬より二月中旬迄之間、表数斤目付之差出を以代官座江申出、新楮蔵江相調候、左候而、桜島・谷山御物垂蠟所二而垂調申付、出来蠟者新楮蔵江取入置、櫛実主江銀五分七厘(二脱力)ツ、新楮蔵江相納生蠟可請取候、三十四斤不及分

者右之割を以垂賃錢可相納候、

一自分櫛実可売上人者、三十四斤入老俵二付代銀八匁五分ツ、御買入可申付候間、代官座江差出を以新楮蔵相納、代銀引替二可申請候、三十四斤不及候ハ、割を以代銀可相渡候、

一右之通、御物垂蠟場二而垂調二而も又者致売上二而茂、櫛実不依多少兩様之内櫛実勝手次第可申付候、尤、御物外油屋并脇々江頼垂調又者櫛実脇売いたし候儀堅令停止候、

一一所一名持切之地并持留地・野屋敷又者寺社領江仕立置候櫛実、自分二垂場取立置候人者代官座江申出置、自分櫛実迄可垂調、無抛親類中之櫛実迎も自分櫛外曾而垂調間敷候、建置候垂場一往二而茂取止候節者其段代官座江可申出候、此已後新規二自分垂場可取建節者勿論、一往取止置候場所二而も重而取立候砌者代官座江相付願出可任差図候、無免許場所取建候ハ、可及沙汰候、

一外城之儀者衆中其外之櫛実迄以前より都而御買入申付置候事候、此儀者有来通候、右之段々之儀者鹿兒

島中諸人櫛実迄之儀候間可得其意候、

右之通申付候間、此旨与中江可被申渡候、御役人

江者別立而不申渡候間、支配有之人者右之趣支配

中江申渡候様可申渡候、

右之通、与頭江可被申渡候、

〔朱書〕享保十五戊  
十二月十二日

〔種子島久基  
彈正〕

一淨光寺・鼓川御屋敷兩所江掛候水道相分り候水口石

鉢鎖卸二而被差置候、右水筋之儀者御茶水二茂相成

儀候間、鎖前其外水筋庵末二無之様淨光明中又者上

之原内之丸辺之者共相心得罷在、若庵末之致方之も

の其段可申出候、

右之通被致通置候様寺社奉行・与頭江申渡、其

段可承者江も可申渡候、

〔朱書〕元文四末  
二月

〔頼妹久圓  
左京〕

一「本文之通被仰渡二付、最寄二罷居候立石喜兵衛・酒

匂幸之丞・永田平左衛門・蒲地八左衛門・木場次兵

衛・梶原新右衛門・新穂善之丞・高城元藤八・鈴木

喜右衛門・岩元六左衛門・永田七左衛門・有田円右

衛門并有田次左衛門名代召寄、御番頭座ニおひて庵

末之儀共無之様可相心得旨、祢寝孫左衛門より申渡

候事、」

一世上金銀不足ニ而通用不自由之相聞得候付而、此度

金銀〔御触書寛保集成下補〕被吹改候事、

一此度吹改候金銀△相渡候儀、慶長銀新金者百兩之代

り二百兩、乾字金者式百兩之代り二百兩、慶長銀新

銀者拾貫目之代り拾貫目引替可相渡候間、右引替之

格を以書面之金銀無差別取交、請取方渡〔方脱力〕兩度共二無

滞通用可致候、尤、上納金銀茂可為同前事、〔替力〕

一吹改候金銀、金座・銀座より増歩差出可引替候、員

数之儀者引替金百兩ニ付増歩金六拾五兩ツ、引替

銀拾貫二付増歩銀五貫目ツ、可相渡候事、

一引替金銀、町人より引替候筈候条、武家其外二茂勝

手次第町人江相對ニ而申付可引替候事、

一引替ニ可差出金銀之儀、員数相知レ候事候間、貯置

不申段々引替可申候、若貯置不引替者相知レ候ハ、

吟味之上急度可申付候事、

付、右引替ニ不出銀者只今迄之通潰銀之積り可相心得候、

右条々、国々所々ニ茂可存此旨者也、

(朱書)「元文辰」  
五月

写

此度金銀引替之儀、来月十五日より金銀(座脱カ)ニ而引替候之旨可得其意候、

一右引替之儀、為替・兩替之者共取集、金銀座江差出引替候間、右之者共方江申付金銀引替可申候、

一右為替之もの共金銀引替候節、為諸入用金壹兩ニ付銀壹部ツ、銀百目ニ付(御触書寛保集成)より補銀壹分五厘宛之積を以、

金銀高二応△金銀主方より請取候筈候、若右之高より多請取候歟、又者無謂引替為滯候ハ、勝手次第、

外町人又者直々成共金銀座江差出引替可申候、

但、金者百両、銀者拾貫目以上可致持參候、為替之者方江引替させ申候員數者勝手次第たるへき事、

一金銀取集候右為替之者

駿河町 泉屋三右衛門 本兩替町 中川清三郎

本兩替町 海保半兵衛 同所 谷勘左衛門

本町式丁目富山与惣兵衛 本町四丁目竹山彦左衛門

長谷川町 荒木伊右衛門 駿河町 三井次郎右衛門

駿河町 三井三之助 駿河町 三井覺之助

以上、

辰五月

一此度銀吹方之儀、引替高応無滯吹立引替候筈、随分無油断引替可申候、新銀古銀割合之儀、暫之内之由

先達而相触候通候間、随分精出引替可申候、割合相

止候節ニ至壹度ニ申込候而者急ニ吹出来不申、諸人

難儀可致候間、此節より日々精出、京・大坂江国々

より集候古銀於京都引替可申事、

右之通、京・大坂ニ而相触候間被得其意、於当地

茂相心得候様可被相触候、

右之通、今度於江戸從 公義被仰渡候条、此旨承知

仕置候様与中・諸外城・支配中江不洩様可被申渡者

也、

十月七日

御家老座印

六手  
与頭

一先達而相触候通御年貢・小物成・諸運上物・諸返納物等之納金銀、此度吹改候文字金銀ニ而茂古金銀ニ而も割合之無差別、金壹兩何れ之金ニ而も壹兩、銀壹貫目ハ何れの銀ニ而も壹貫目之積、其納高二応し可相納候、

右者相知候事候得共、末々百姓共得と吞込不申者茂可有之と猶又相触候間、末々百姓共迄能々吞込、心得違無之様可仕候、尤、村々江早々相廻し、最寄之私領・寺社領村々江茂可申聞候、

辰九月

右之通、今度於江戸従 公義被仰渡候条、此旨承知仕候様与中・諸外城・支配中江不洩様可被申渡者也、

辰十月五日

御家老座印

六組  
与頭

大目付江

一此度金銀吹改ニ付、諸色之直段文字金銀ニて可相立

処、右文字金銀其節ハ吹出来不申候付、諸色代物替

二三ヶ月之内割合を以取遣り可仕由申渡候、此節ハ段々金銀吹出来世上江出候ニ付割合遣候儀可相止処、急行当候者茂可有之候間、先此度者割合遣可相止候儀者不申渡候、来年ニ至り候ハ、割合遣可相止候間、其心得ニ而此節より随分古金銀文字金銀（脱之）可引替事、一在方ニ而者今以古金銀專ニ相用之由不埒候、前条之通随分引替、文字金銀專可相用事、

一銀之儀、遠国ニ而者猶以古銀を用、文字銀通用不致候由、依之銀引替別而少ク不埒之至候、来年者割合遣可相止候儀茂可申渡候付、其節ハ可行当候、尤、只今迄之通銀引替高少ク候ハ、来年より銀百貫目ニ付増歩銀五拾貫目相渡候内を減候様（ゲシ）可申渡候間、此節より随分精出引替可申候事、

一年貢・合力・給金・借金・買掛り・地代・店賃・質物・田地質物等、弥以無割合古金銀文字金銀同様ニ取遣り可仕事、

右条々、国々所々ニ而此旨可致事、

右之趣可被触候、御領者御代官、私領ハ地頭より相

触候様可相達候、

辰十一月

右之通、從 公義被仰渡候条、此旨承知仕候様与中  
江不洩様可被申渡者也、

十二月十四日

御家老座印

六組  
与頭

巳三月

右之通、從 公義被仰渡候条、此旨承知仕候様与中  
江不洩様可被申渡者也、

五月八日

御家老座印

六組  
与頭

一 文字金銀割合を当年を限来午正月より割合遣相止、  
(遣力)

并増歩相減候儀先達而申渡候処、諸事受払極月晦日  
を限致取引、右受取候古金銀正月より割合遣相止、

増歩減候而ハ難儀いたし候由、江戸・京・大坂諸問  
屋とも願候付、来午四月迄割合ニ而通用可致候、金

銀共来午四月迄引替案内申込候分者四月已後引替金  
銀相渡候とも只今迄之増歩相渡、五月朔日より以後

引替案内申込候分ハ、先達而申渡候通増歩可相減候、  
巳八月

右書同断、

十月十七日

御家老座印

六組  
与頭

一金銀引替ニ付増歩之儀、当十二月迄者唯今迄之通相  
渡、来ル午正月より引替金百兩ニ付増歩三拾兩、引  
替銀拾貫目付増歩貳貫宛可相渡候間、此間より随分  
精を出シ金銀共引替可申込事、  
右条々、国々所々ニ而此旨可存候、

一文字銀引替之儀、公義より段々被仰渡候二付而者

御物銀被引替筈候得共、当時之体二而者急二者引替

難調候間、先受私共二此内被仰渡置候御定法之通可

相心得候、

右之通可承座々江例之通可申渡候、以上、

三月

主計

一文字金銀割合遣相止并増歩減候儀、当四月限之積り、

尤、四月迄引替案内申込候分ハ四月以後引替金銀相

渡候共唯今迄之増歩相渡、五月朔日以後引替案内申

込候分者増歩相減候積り、先達而相触候通弥其旨相

心得、古金銀不貯置此節早々可引替候、

右之通、御料ハ御代官、私領者地頭より可被申触

候、

午二月

右之通、從 公義被仰渡候間、無油断引替候様可相

止旨与中・地頭所・私領・明所之外城・寺社・家中・

町中江可被申渡者也、

午三月廿九日

御家老座印

六組  
与頭

一古金銀を以割合通用、当五月朔日より停止之旨相触

候処、今以遠国<sup>〔朱書〕</sup>者勿論、江戸・京・大坂二而茂割

合遣致候者分有之由相聞得候、向後古金銀割合通用

堅致間敷候、尤、古金壹両ハ文字金壹両、古銀百目

ハ文字銀百目二而可致通用候、若此已後古金銀を以

割合通用致候者於有之者、吟味之上急度可申付事、

右之通、御料・私領共滞無之様二可被相触候、

金銀割合通用堅致間敷段、領主より茂急度不洩様可

被申付候、末々江通達薄き様相聞二付、此段茂申達

候、

右之通、從 公義被仰渡候条、此旨承知仕候様与

中・支配中・地頭所・私領・明所之外城・寺社・

家中・町中江可被申渡者也、

九月十二日

御家老座印

六組  
与頭

一錢直成古銀拾五匁被定置候得共、文銀通用二付而者

相場高下も有之候故、此節より錢直成文銀貳拾貳匁

五分被相定候、未文銀御当国江者少候間、錢遣候者

唯今之通可致候、御買入物等茂相場之高下有之筈候

間、御払物直成諸色之手形銀・御札銀・御賦銀・給

銀其外諸納方・御払方何篇共二都而右之格を以て於

座々不洩様文銀定二可相改候、若右之積難準儀茂候

ハ、可得差図候、

右之通、表方支配奉行役人江可申渡候、以上、

九月

(願姓久周)  
左京

右之通被仰渡候間、不洩様可被申渡旨御差図御座

候、以上、

(朱書)「元文三年」  
九月

戸田小平次

一借銀之利合高利致間敷旨、先年より被仰渡置候、弥

其通可相心得候、諸外城之儀者借銀・借米高利取遣

いたし候者茂有之由相聞得不可然事候間、相応之利

合二而不自由無之様取遣可致、若高利取候聞得も有

之候ハ、屹と可及御沙汰候、此旨与中・支配中・諸

外城江可被申渡者也、

(朱書)「延享五辰」  
四月廿五日

御家老座印

覚 大目付江

一借金銀売掛等之出入者人々相對之事故、近年壹ケ年

兩度之裁許ニ申付候へ共、向後三年以前子正月より

之金銀出入者前々之通取上裁許可申付候、四年已前

亥十二月迄之金銀出入、只今迄奉行所ニ而壹ケ年兩

度之裁許ニ日切等申付候分者向後奉行所ニ而不申候

間、相對を以無滯急度可相濟候、

一只今迄金銀出入ニ付奉行所より呼出シ候節、令不參

又者濟方申付候へ共金子不差出輩有之由相聞得不埒ヲ

二候、

右之通此度相改り候上、奉行所より呼出し候節致

不參候歟、又者濟方申付候ニ付而茂不埒之輩在之

者、武士方者奉行所より老中江申達筈ニ候、寺社・

在・町方ハ奉行所ニ而急度咎目可申付候、

寅三月

右書同断、

(朱書)「延享三寅」  
五月十三日

御家老座印

六与  
与頭

一 銀錢・米穀等借付不相応之高利取間敷旨兼而被仰渡置候、弥其旨を相守、式割已下相對次第随分輕き利足二而可致取遣候、自然右以上二而借付候間得於有之者屹可及沙汰候、

五月十三日

御家老座印

六組  
与頭

一 焼酎屋之儀、先年より毎度申渡趣有之二付、締方緩せ之儀者無之筈候得共、鹿兒島中并式拾四ヶ名二掛手広事候間、自然取違、免許之上造入候焼酎屋とも相對二下請之姿二而御札銀等割合を以致上納造入、且又自分仕用之筋にて煮調置致商買候者茂有之候二付而者不可然事候間、右体之儀一切不致様主人亦者支配頭より屹と可被申渡置候、万一家来・下人其外屋敷内江召置候名子類之者右体之筋有之候ハ、主人亦者屋敷主より甕取揚、最寄之横目江申達切符いたし可置候、左候而、其段物奉行所江可申出候、寺

門前・中宿・三町之儀者其支配人方江甕取揚、是又

横目切符申付候間、右同前之首尾二可致候、式拾四ヶ名之儀者郡見廻・庄屋方江甕御取揚、締方横目江申出致切符、其首尾同前可申出候、勿論焼酎屋望之者者先年申渡置候通物奉行所江願出、免許之上造入候様申付候条、右二付而者諸事如例可被申渡者也、

已六月廿六日

御勝手方印

与頭

肥後平左衛門

写 大目付江

一 灰吹銀・潰銀銀座江買入、銀座之外他所二而致売買之儀古来より停止之事二候、右之趣去ル亥年茂相触候処、当時銀座江集り方少相成候由、畢竟内々二而売買致候儀相聞不埒二候、且又江戸并諸国寺院二者檀家より納候銀具類無拗貯置候茂可有之候、檀家江相對し遠慮之品者格別、其外者銀座江差出、通用銀二引替候ハ、修造等之手当二茂可相成事二候、内々二而売払候儀致間敷候、此旨急度可相守也、

巳八月

右之通、從 公義被仰渡候條、此旨与中・支配中・

諸外城江不洩様可被申渡者也、

(朱書「寛延二巳」)

十月四日

御家老座印

与頭

一 灰吹銀・潰銀等銀座之外他所ニ而売買停止之旨前々

相触、銀道具下銀入用之者銀座ニ而可買取旨去ル

亥年茂相触候処、又々猥相成候段相聞候、且町方ニ

而銀櫛・筭其外銀器類專相用候旨相聞不埒ニ候、以

来右体之無益之銀道具拵候儀一切致聞敷候、

右之通堅可相守、若内々ニ而致売買候者於有之者

急度可申付候、

西八月

右書同斷、

九月廿一日

御家老座印

与頭

一 古銀之儀、割合通用可致旨去ル子年相触候処、通用

茂不致、銀座江引替ニ茂不差出貯置候者茂有之由、

別而五畿内・北国・中国・西国筋多分古銀有之由相

聞得候、遠国之儀者引替後候、慶長銀・古銀・灰吹

銀貯置候茂可有之候間、右国之銀座役人相廻り、五

割増之積を以買入候筈候間、慶長銀并古銀并灰吹銀

不貯置、定法之代り銀受取之可引替候、尤、銀座江

差出シ引替候儀者勝手次第たるへく候、但、来々子

五月迄引替候儀、銀座江申込候分者五割増ニ而引替、

同年六月より古銀者潰銀ニ相成、慶長銀・古銀拾貫

目を文銀拾壹貫貳百目買入候間、此旨可相心得候、

右之趣急度可相守者也、

右之通、從 公義被仰渡候、銀座役人相廻候時節之

儀者追而可申渡候、此旨支配中・与中・地頭所・私

領・明所之外城・寺社・家中・町中江可被申渡者也、

十一月廿七日

御家老座印

与頭

一 地酒・黒砂糖締方之儀、兼而申付置事候得共、抜砂

糖多々有之由相聞得不可然候、向後無手形ニ而他国

江積出候歟、又者砂糖改之節檢者改を不請致拔売候

見聞いたし候ハ、其訳可申出候、相糺候上砂糖取揚、

直二申出候者江不依多少不殘可被下候、縦抜物為同

類共申出候ハ、其咎目をゆるし、取揚候砂糖被下候

条、見聞候次第申出候者者、御当地者町方横目、外

城・私領者其所締方横目又者所横目方江手寄次第可

申出候、此旨未々迄も人別致承知候様与中・支配中・

諸外城・私領江不洩様可被申渡者也、

（朱書）宝曆六子

閏十一月十一日

御家老座印

六組

与頭

一総州小金一月寺・武州青梅鈴法寺門弟共相用候深編

笠在々二而商売仕候者共、以来両寺又者国々其取寄

二而右末流之寺院より印鑑受取置、合印持參不致候

ハ、虚無僧并商人たり共堅売不申様可致旨、御料は

御代官、私領ハ領主・地頭より可申渡候、

十月

右之通、従 公義被仰渡候条、右体編笠買取間敷候、

此旨与中・支配中・諸外城江不洩様可被申渡者也、

十二月五日

御家老座印

六組

与頭

一都而道中往来之面々、人馬先触可有之儀候処、先触

無之面々茂有之故、於宿々人馬差支、其上日々為用

意助郷村々江人馬触当候間、余計之人馬相当り助郷

村々及難儀候趣相聞候二付、以来者都而往来共一同

二宿々江人馬先触可被差出候、尤、以来參勤交代之

節者勿論、御家来中道中往来之節茂人馬入用之砌は

宿々江先触被差出、勿論御自分并御家来共先触写道

中奉行江可被差出候、右之趣、此度堀田（正亮）相模守殿江

相窺申達候条、其旨可被相心得候、以上、

十一月

右之通、此節御勘定奉行菅沼（定秀）下野守様より被仰渡候

条、道中往来人数不依多少東海道人馬入用分致先触

罷通、江戸・御当地共着涯早速触書写御用人江可差

出候、左候而、右書付道中御奉行江被差出事候間、

延引有ましく候、式日御使飛脚等ハ夜白罷通候条、

先触之詮無之故不及其沙汰候、此旨与中・支配中・

諸外城江不洩様可被申渡者也、

(朱書)〔宝曆八寅〕

十二月五日

御家老座印

六組  
与頭

一頃日諸所江盜ニ逢候者別而多有之候ニ付、横目・足

輕江申渡、右体盜不審之者者勿論、うろん成体ニ而

徒徘徊いたし候者於有之者相捕筈ニ申渡置候間、用

事外昼夜共徒不致徘徊候様主人より堅申付候様与中

江不洩様早々通達可有之候、以上、

(朱書)〔宝曆九卯〕

六月十三日

(行間朱書)  
「本文、隼人殿より島津直衛致承知候事、」

一出火之節火本江差越致見物者多有之、込合之場江右

通無用之人入交差居候処より水廻等別而不由有之、

第一消方之妨ニ相成不可然候、右ニ付而者先年より

段々被仰渡趣有之候得共今以不相止候条、以来右体

之儀曾而無之様末々迄不洩様稠敷可被申渡旨可致通

達候、

(朱書)〔宝曆十三未〕

九月

左源太

一座売唐人参之儀、唐国ニ而茂扠底之由申立、長崎ニ

而買上候元直段次第ニ而高相成、前々競候而者上人

人参共長崎ニ而償多相懸り候、依之右償たけ上人参

半兩ニ付代銀七匁五分、中人参半兩ニ付八匁増之積、

小人参者は迄之通売渡候筈ニ候、

五月

右書同断、

七月十六日

御家老座印

六組  
与頭

一長崎湊者唐・紅毛通商之地故諸国通船多有之処、湊

川口土砂押出シ、唐・紅毛船繫場者年々手入茂致候

へ共、埋り強湊内遠浅ニ相成、往々諸国之通船之障

ニ茂可相成候ニ付、今度川口堀浚、猶又追々湊内浚

申付候筈ニ付、諸国之廻船并近国近浦より入込候船

之分右浚為人用石錢取立之候積候間、国々より長崎

江廻船之分不依何船取立候石錢之定、別紙之通相心

得、長崎湊江入船之節急度可差出者也、

十二月

左源太

一諸船長崎湊内ニ而荷物積り候ハ、勿論、たとひ沖積仕又者沖ニ而瀬取致候とも、長崎江来候船の出入共荷物之多少ニよらず其船之石高心し壹石ニ付三錢ツ、之積分可差出事、

但、近在近浦小舟・茶舟之類、一枚帆五石之積を以帆数ニ応し壹石ニ付三錢ツ、可差出事、

一積荷物無之、から船ニて出入候節者其断をいたし、改を請石錢差出不及事、

一大坂堺之廻船、唐・紅毛荷物商人より仕立之船者直ニ石錢可差出事、

一御城米并長崎御廻米積候舟、無差別石錢可差出事、但、是は御城米之船請負候者ニ而茂相对次第石錢出之、其石錢は船主より可相納事、

一武家手船ニ而茂諸荷物積候船は石錢可差出事、

右之通可相心得候、石錢取立之ため湊口ニ番人差出候間、出入其改を受、石錢差出候ハ、番所より

切手を受取入津可致候、出船之節右切手被差戻候、切手無之船は石錢可取立之事、

但、荷主より石錢差出候類之船者、荷主より之

断書右番所江差出可申事、

右之趣、御料者御代官、私領者領主・地頭より可触知者也、

十二月

右者、從公義被仰渡候条、此旨与中・支配中・諸外城江不洩様可被申渡者也、

二月三日 御家老座印

六与  
与頭

写

一出火之節、火本江差越致見物居候者多、其場込合水廻等之通融不自由ニて消方之妨ニ成候由相聞得不可

然候、先年茂段々申渡置候通遠方火出之節ハ役目并火消方掛之外猥不差越、走続候者共ハ御目付・横目

下知ニ応し相勉致見物間敷候、若相背候者吃と可及沙汰候、此旨末々之者江者主人并支配頭より稠敷可

申付候、右之通、表方江致通達、御側方・御隠居御方・御

勝手方江者写を以可相達候、

写 大目付江

一金銀掛合候分銅、寛文中改以前之古分銅兩替仲間  
二而遣候由相聞得趣候付、京・大坂・堺近郷之分潰  
等まで外二売買不致、潰直段を以後藤四郎兵衛方江  
買受させ、目輕古分銅内々二而売買致間敷旨度々相  
触候処、今以西国并長崎筋二而者古分銅多く売買致  
用候由相聞候、此已後内々二而売買致候儀者勿論、  
不隱置四郎兵衛方江可相渡候、尤、四郎兵衛方より  
分銅改役人相廻り、紛敷分銅取上候筈二候、其趣急  
度可被相渡者也、  
(守カ)

右之通、寛保年中相触、後藤四郎兵衛役人相廻り  
改候処、今以紛敷分銅相用候由相聞候二付、此度  
四郎兵衛方より分銅改役人相廻、紛敷分銅者取上  
候筈候間、其趣急度可被相守者也、  
右之通、御料ハ御代官、私領ハ領主より地頭より  
可相触候、  
卯三月

右之通、從 公義被仰渡候段申来候、役人差廻候  
時節之儀者未相知候条、其段者追而可申渡候、此  
旨表方御役人・与中・支配中・諸外城・私領江不  
洩様申渡、御側方・御隠居御方・御勝手江者写を  
以可相達候、  
(朱書)「宝曆九卯」  
五月

凶書

写 大目付江

一借金銀返金相滞金高及公訴、奉行所より裁許申渡候  
上者右裁許之通可相守筈候処、近来切金員數甚不足  
二差出、又者武士方掛り合候家来并寺社・町方借り  
方之者江奉行より差越遣候而茂其節之評定所江家来  
不差出儀茂有之由不埒之趣相聞候、只今迄切金員數  
等之儀茂甚寛ク相成申付方二候処、右裁許之通不相  
用、猶不埒之取計有之間敷事二候処、旁不埒之事二  
候得共、先只今迄之儀者不被及沙汰候、向後ハ奉行  
所二而嚴敷取扱、其上二茂不埒之輩有之候ハ、武  
士方ハ奉行より老中江申達候之間、其節可遂吟味候  
条、以来急度可相心得候、尤、寺社・在・町方者奉

行所ニ而急度咎可申付候、

四月

右書同断、

（朱書）宝曆九卯

五月十七日

御家老座印

与頭

六与

大目付江

一 灯油之儀、寛保三亥年ニ茂相触候通油直段高直ニ而諸人難儀相成候故、国々より菜種子作増、大坂表江積廻油直段下直可相成処、近年又候猥ニ相成、大坂表江積廻候菜種無数ニ而油高直ニ候、尤、豊凶ニ茂可依事ニ候得とも、是迄直段格別下直と申儀も無之ニ付、国々より大坂江積登せ候油種、先年之通撰州兵庫・西宮江紀州・中国筋・四国筋ニ而絞候油売払候節者、右之国々之分ハ江戸表江不致直積廻、且菜種子等之儀茂随分作増大坂江積登せ可令売買候、一 綿実之儀茂近年専水油絞出、菜種同様之事候上者、向後大坂綿実問屋相定候間、右問屋之内江積登せ可申候、諸事業種同様相心得可申候、右之趣此度相触

候上者大坂江積登せ菜種（之脱力）・綿実、他所ニて猥道具（買力）或

者睨下買且隠絞り致間敷候、勿論、大坂表問屋共菜種売買込升之紛敷儀向後不為致、尤、是まで取扱候

口銭之懸り物迄茂今般相改引下ケ、大坂問屋ノ二而明細懸札記差置、無謂余慶之懸物無之様取計、聊

疑敷儀致間敷候、若不用族於有之者遂吟味曲事ニ可申付候条、諸国一統急度可相守候、

右之通、御料ハ御代官、私領ハ地頭より可触知者也、

八月

右之通、從 公義被仰渡候条、御領内商売菜種・綿実積入候船々、旅船迄茂諸所津口通手札を以他国江積出候節中途売不致、都而大坂江差上せ御定之問屋江相付候様、与中・支配中江諸外城可被申

渡候、

（朱書）宝曆九卯

十月廿六日

御家老座印

与頭

写

大目付江

一前々より朱墨之儀、朱座より朱同様売出来候処、

近々脇々ニ而候紛敷朱墨拵売出候由相聞不届ニ候、

朱墨商買いたし候者ハ前々之ことく朱座ニ而買受商

買可仕候、自今紛敷朱墨拵出候者於有之者急度可申

付候、右之通享保十九寅年相触候処、右之趣致忘却

候哉、脇々より紛敷朱買請致商買旨相聞不届ニ候、

弥前々之通朱座より売出候朱并朱墨買受可致商買候、

以來脇々より買受候儀於相頭者、吟味之上急度咎目

可申付候、

卯十二月

右書、

二月廿五日

御家老座印

六組  
与頭

〔行間朱書〕  
〔本文〕辰二月廿六日次来、町田源左衛門見届、

一大坂菜種子問屋式拾人、綿実問屋拾人被相究候付、

向後大坂江積廻候菜種子・綿実、右三拾人之者共江

限引受絞屋共江売渡旨従 公義被仰渡候条、先達而

申渡置候通右両品共積上せ候節ハ一旦御国問屋七軒

之内江相付、御奉行所改を受候上直右問屋江相渡候  
様可相心得旨、与中・支配中・諸外城江可被申渡者

也、

〔朱書〕宝曆十辰  
三月廿九日

御家老座印

六組  
与頭

〔行間朱書〕  
〔本文〕辰四月朔日新納五郎右衛門見届候、

一諸外城江被差越候締方横目内々願之人多、去ル子年

与中江申渡置茂有之候処、頃日糺明奉行宅江差越、

又者大御目付・与力其外手寄を以相願候人茂多々有

之、御締方横目之儀者人柄吟味之上申付事候、其上

先年被申渡置旨も有之候処、其儀を茂不弁別而不可

然候条、右体之儀向後一切無之様与中江可被致通達

候、以上、  
〔朱書〕宝曆十辰

六月

〔行間朱書〕  
〔本文〕辰六月十日名越左源太殿より町田源左衛門直

二致承知候事、

一去冬以来金銀吹替可有之由江戸・京・大坂ニ而致風

説、金銀通用茂差障候段、別而大坂表ニ而者種々淨  
説申触候趣相聞得不届之至候、当時金銀吹替候儀者  
決而無之事情条、右体之風説申触候者於有之者召捕、  
其所之奉行所、御料ハ御代官、私領者地頭江可申出  
候、若隱置於訴出者（不脱カ）可為曲事候、

八月

右之通、從 公義被仰渡候条承知仕、金銀吹替之儀  
者一切不申触様末々迄茂堅可相触候、此旨与中・支  
配中・地頭所・私領・明所之外城・寺社・家中・町  
中江可被申渡者也、

（朱書）宝曆十辰

十月十三日

御家老座印

六組  
与頭

一 唐船拔荷之儀者御禁制之事ニ付、急度相改可申儀勿  
論之事ニ候、然処唐・阿蘭陀正荷物調候儀も如何と  
心得違調兼候者も有之様相聞、正荷物売買之儀者差  
支無之事ニ候処、末々者心得違、正荷物売買之儀手  
狭ニ相成候而者如何候、正荷物売買之儀者不苦事ニ  
候間、前々之通手広致売買様、末々之者迄得と吞込

候様其所之奉行所、御料者御代官、私領者領主・地  
頭より可被申渡候、

正月

右書、

（朱書）宝曆十一巳

二月廿八日

御家老座印

六与  
与頭

一 江戸・京・大坂其外諸国共、当時通用之文字金銀并  
古金銀を其向々ニ質物ニ入候者有之由相聞得候、右  
体之儀ハ金銀通用之差障相成候儀ニ付、自今堅停止  
候事候、向後若金銀を質物取引致者有之者、吟味之  
上急度可申付候、

七月

右書、

（朱書）宝曆十一巳

九月四日

御家老座印

六与  
与頭

一 只今迄元来寺地ニ而無之百姓所持之地所を寺院江致  
寄付、又者讓地等ニいたし候も有之、右之地所を他

之寺院或他寺之塔頭等江讓渡し、右場所江引寺等いたし、又ハ本寺離未致し、願主勝手之宗旨ニ仕替引寺いたし、或者當時退転寺号計水帳等ニ有之を取立、引寺号ニいたし候儀并墓所詰り添地寄進境内江囲込候儀、右之類自今可為無用候、百姓ハ勿論、たとへ領主・地頭たりといふとも田畑猥ニ寺院江致寄付候儀容易ニ者難成事ニ候、

二月

右書、

(朱書)「宝曆十二年」

四月十三日

六与

与頭

御家老座印

一 華倉海辺より潮音院下迄之間、(冲力)仲者灘中を限向後魚獵被差留候条、此旨与中江被申渡、支配有之面々者右之趣鹿兒島中支配下迄不洩様申渡、兼而致魚獵候内場浦々江者如例可被申渡者也、

(朱書)「宝曆十三年」

九月二日

六与

与頭

御家老座印

写

一 広東人參商買之儀、向後堅停止候間、此旨急度可相守候、

八月

右書、

(朱書)「宝曆十三年」

九月廿日

六与

与頭

御家老座印

一 吉野橋筋御堀之頭弓場之辺より岩崎江通路有之候様相見得候、右ニ付而者先年茂申渡置趣有之、御堀内之儀候間不致通融管候処、末々之者心得違右体可有之候条、向後猶以堅差留候、右之趣寄々可致通達候、(川田因福)伊織  
(行間朱書)四月八日  
「(行間朱書)本文、小林中太兵衛御取次にて新納五郎右衛門致承知事、」

一 諸人屋敷前無掃除無之様兼而被仰渡置候得共、頃日問ニ者無掃除ニ有之候間、猶又兼而左様無之様可懸心事、

右之通、支配く江不洩様御目付より可致通達旨

可申渡候、

（朱書）明和二酉  
六月

（島津久健）  
仲

写

一 鹿兒島并近名ニ而鳥取候儀者前々より御法度被仰渡、

左様成儀者無之筈候得とも、間二者不存者も有之筈

候、右ニ付御鷹師并御鳥見差廻、其仕方見届候ハ、

可差留候、若不聞入者有之候者不依誰人無用捨申出

可沙汰候間、右体之儀不致候様被仰付候条、此旨表

方江通達いたし、御側方・御勝手方江者写を以可相

達候、

（朱書）明和二酉  
十一月

仲

一 親子兄弟之外、餞別・土産可為無用旨前々より被仰

渡置候得共、今以差而其詮無之様相聞得候、畢竟預

餞別送物等致受用候ニ付、土産も不相止ニ而可有之

候、依之向後不依誰人縦令為餞別相招候而茂堅相断

品物者致返却、土産物遣間敷候、若心得違土産相送

たる者有之候ハ、致受用間敷候、親子兄弟餞別・土

産之儀者有来通別而可致輕候、於江戶茂右同断、且

出府之者江着涯振廻・送物等致儀も有之由候ハ、

此儀茂親子兄弟之外一向致間敷候、乍此上相招もの

於有之者是又相断、音物者可差返候、当御家中茂困

窮之段被 聞召候付、又々被 仰出候間、此旨不致

忘却取違無之様屹と可申渡候、

右之通被 仰出候間、右之趣堅固ニ相守不致忘却

様表方江致通達、御側方・御勝手方江者写を以可

相達候、

（朱書）明和二酉  
十二月

仲

大目付江

一 灯油之儀、寛保三亥年相触候以後、宝曆九卯年猶又

改相触候処、右卯年触書之趣茂不相弁、寛保三亥年

大坂町奉行所ニ而申渡候通、今以一国切絞草買請、

絞油稼いたし候者有之候段相聞得心得違之至候、依

之猶又相触候条、何れ之国々ニ而茂手作之絞草を以

手絞二いたし、其分之油を大坂表出油屋とも江可積

登儀二而、一村之内たりとも他之絞草を買受絞油稼  
いたし候儀者不相成事候間、其旨相心得、諸国一統  
卯年相触候趣弥無違失急度可相守候、

右之通、御料者御代官、私領者領主・地頭より可  
触知者也、

右書、

(朱書)明和三戊

四月廿七日

御家老座印

六手  
与頭

一亡上野新右衛門儀、御領國中合業主取被仰付、夫よ  
り代々引統依願御免被仰付置候訳を以、此節上野道  
伯より以前之通被仰付被下度申出趣有之、願之通合  
葉一手之主取申付候間、先年以來申渡有之通、道伯一  
手之外合葉致間敷候、  
右書、

四月廿三日

御家老座印

六手  
与頭

写

一去年現馬為不時改諸所江檢使被差越候処、無札馬致  
所持候者共段々有之候、無札馬者前々より御禁止之  
事候処、不可然仕形候、依之馬取揚、科銀・科錢等  
御法之通被仰付、牛馬改之儀も氣不相付段々別而大  
形二付、是又相当之御咎目被仰付筈候得共、近年御  
領内一統末々迄至極及困窮居候処、去秋作毛不熟二  
付別而差廻致難儀由相聞得候故、右御取分を以此節  
者馬取揚二不及沙汰、科銀・科錢等都而被成御免、  
役々江茂御咎目被仰付候条難有承知可仕候、右通被  
仰付候二付而者此以後曾而御法違之儀無之筈候得共、  
猶又致末々此旨聊忘却致間敷候、

一毛・年違又者駄駒違之馬致所持、格別相違之馬共過  
分二有之、是又不可然儀二候、右二付而者科銀之御  
法茂有之候得共、前条之通至極困窮之時節候故、此  
節ハ科銀被仰付不及新札相渡、格別相違之馬迄札銀  
六分上納申付候、

一御厩二而相糺候馬并檢使改之無札馬且差出後式歳馬、  
此節新札相渡札銀六分上納申付候、左候而、札帳面  
無札又者差出後之訳可記置候、

一 右無札馬并差出後之馬、去秋勘定之節口錢又ハ重出銀上納無之分、此節上納申付候条、当秋勘定ニ牛馬役差越候節堅固上納可被致候、

一 去秋勘定帳面ニ無札牛相見得候間、都而前条無札馬同断申付候、

一 無札牛馬致所持候面々者、持主より札相調来月限御厩江可差出候、左候而、諸所牛馬役之儀者日積を以差越候様御馬方より可申渡候間、遲滞有之間敷候、

右之通、鹿兒島中并近名・諸外城・私領江不洩様可申渡候、左候而、御馬方より万端無間違致首尾、札銀上納相添候節首尾申出候様可申渡候、

五月

式部

別紙之通被仰渡候間、諸外城・私領江者六廻文を以申渡候、支配有之面々者支配下江不洩様可被申渡候、以上、

六月朔日

相良弥一兵衛

一 近年諸山出銅不進之上一体銅方不取締ニ付、此度大坂表江有之長崎銅会所を改銅座ニ申付、諸国<sub>(後九)</sub>之出銅

一手ニ引受させ候間、大坂表ニ而銅取捌来候間屋・

吹屋中買、惣而正銅取扱之儀者銅座より差配可致候、依之国々銅山稼来分不及申、此上致出精相稼、新山

等間堀致銅出方試、出銅少候共外売不致、不残銅座江差廻、古地銅ニ至迄銅座江可相廻候、尤、已来銅

座江買入候銅代は無口銀ニ而則銀ニ払之筈ニ候事、但、是迄廻来候間屋江相廻勝手宜山元者勝手次第

問屋江相廻、着船之節銅座江相届候上水揚可致候、代銀者銅座より即銀ニ相渡、口錢山元えは不相

懸筈ニ付、銅座より仕書山元江可相渡候之間、若問屋より相違之払方茂於有之者銅座江可申出事、

一 長崎廻銅之分ハ、此後迎茂銅座之取扱迄茂諸事は迄之通りたるへく候、

一 諸国銅山之内長崎江致直廻勝手宜分ハ長崎直廻ニ致、尤、其段銅座江相届、出頭之斤数年々銅座江可相届

事、

一 諸山より銅津出いたし候道筋并津々浦々又ハ海上ニ而銅売買致間敷候、尤、囲銅并質銅停止申付候、若隱候而囲置或は質入いたし候儀於相知者其銅取上可

申付事、

但、是迄開置又ハ取置候分於有之者、高書付早々

銅座江可相届事、

一 国々出銅船積いたし大坂江相廻候節ハ、右銅員数書付廻船之者江相渡、大坂町奉行所江可差出事、

一 東海廻致間敷候、若差支候訳有之者其段銅座江相達、差図之上可相廻事、

一 年々其国々銅出高、凡積を以員数書付銅座江可差廻、斤数前年之冬中銅座江可申出事、

一 右之通、諸国銅大坂銅座江一手ニ買請、銅座より諸国江売出、大坂吹屋・中買へ茂相渡候間、銅買取候者者大坂銅座并吹屋・中買之内より可買取候、尤、相場之儀者銅座江張紙出置候間、右直段より高直ニ売立候儀岐と致間敷事、

右条々、国々所々ニ而急度可相守候、諸国出銅銅座之外致売買候儀於相知者急度可申付者也、

六月

右書、

(朱書)明和三戊  
七月八日

御家老座印

六与  
与頭

写

一金銀掛合候分銅、寛文中改已前之古分銅両替中間ニ而遣候由相聞候二付、京・大坂・堺・近江之分潰等迄外ニ而売買可致、(不九)潰直段を以後藤四郎兵衛方江買受させ、目軽キ古分銅内々ニ而売買致間敷候旨度々相触候処、今以西国并長崎筋ニ而者古分銅多致売買相用候由相聞得候、(以後力)是旨内々ニ而売買いたし候儀者勿論、不隱置四郎兵衛方江可相渡候、尤、四郎兵衛方より分銅改役人相廻、紛敷分銅者取揚候筈候、其趣急度可相守者也、

右之通寛保年中相触、後藤四郎兵衛方より分銅改役人相廻り改候処、今以紛敷分銅ハ取揚筈候間、其趣屹可相守者也、

卯三月

右之通、從 公義去卯年被仰渡置候処、分銅改役人先月中旬比大坂致出立、当秋 御領内江入来筈候由申来候間、当分相用之分銅持合候もの有之候

ハ、一紙名書を以来月七日限可申出候、持合無  
之者是其誤首尾申出候様表方御役人・与中・

支配中・諸外城・私領江不洩様申渡、御側方・御

勝手方江者写を以可相達候、

(朱書)明和三五

七月

(島津久金)

左中

〔(行間朱書)本文〕 戊七月廿五日川上矢五太夫御取次、北郷主膳

致承知事、

一分銅壺流ツ、 島津主殿 北郷主膳 種子島

左内 伊勢兵部

右者、分銅改之儀被仰渡、与中江申渡候処、右人数

分銅持合候旨申出候、右外二者与中江持合候者無御

座段申出候間此段首尾申出候、以上、

戊八月七日 六与 与頭

右朱書之通、戊八月七日川上弥五太夫・小松仙十郎

より申出置候事、

一欠落者并無宿者方々うろたへ、或は名元を偽宿を借

り、或日雇二而罷居、似せ証文杯取扱日雇を取居於

方々致盜候儀多々有之候、右体無慥成者之儀二付而

者従前々段々稠敷被仰渡置趣有之候付、右体之者日

雇又ハ宿等借シ候儀者一切無之筈候処、就中末々之

者共大形相心得候処より今以仰渡不相届方二而不宜

候条、右体之者入来候ハ、早速支配又ハ横目江相付

可申出候、

一質屋縮方之儀二付而者前々より別紙之通被仰渡置候

処、近年者借主名前等相偽、質屋使之者江頼致質借、

又者質屋使江相頼す直二致質借候者茂有之、適々盜

物見当り候而茂致盜候者不相知候儀多々有之不宜候

条、向後兼而質屋使置候者之外品物持来候とも一切

致質借間敷候、尤、定置候質使之者共持来候品物連

も時々借り主、慥成(置カ)質質使之者江承届之上可致質借

候、若疑敷廉於有之者差留置、早速支配又者横目江

相付可申出候、糺方之上自然借りヌスミ主盜等之不審於有

之者可申出、尤、不審難遁相見得候者ハ番人付置、

諸外城・私領之儀者宰領相付御当地江列越、其首尾

可申出候、

一御当地并外城・私領共二被定置候質屋外二内々質屋

ことく二致質借候聞得有之、不宜仕形候、蜜々之致

方付而者縦盜之品々為心付儀も可隱置候而、專御詮儀之ふさかり二相成不屈之致候条、右体之仕形不致一切様可申付候、乍此上若相背者於有之者、其身者勿論、親類・与中到役々屹と可及沙汰候、

右者、頃日盜多、畢竟不慥成者共方々うろたへ居候処より右体之儀も有之、且又盜物之品過半致質借(マ)いたし方二候故、以前より質屋并質屋使締方之儀二付而者別紙之通為被仰渡置事候故、漸々緩せ成行仰渡之趣不相守方相見得別而不宜候条、別紙此以前仰渡并此旨屹と相守候様、質屋共江者申渡候間、右之趣与中ハ与頭、寺門前ハ寺社奉行、町方ハ町奉行、諸外城・私領者地頭・領主、右外支配有之座々之儀者支配々々より屹と可被申渡候、

戌八月

大御目付

右別紙

仰渡書

質屋共質二取候諸物之内、武具・馬具類者以前より証拠相立受取置由候間、弥其通可仕候、其外之品物

者兼而質屋(使脱力)いたし来候者ハ勿論、何方之者共不相知

者二而も持来候を幸二いたし、持主之不及沙汰受取置由候付盜人有之、質屋改申渡候節、何者より質二入置候も不相知事而已有之候条、向後者何方之者共不相知者持来候品、不依何色慥証拠相立候上可致質借候、且又質屋使致来よく存たる者二而も、其身所持之外頼物二而候ハ、持主又者居所迄茂承届可受取置候、自然者持主難頭など申儀も候ハ、持来候者より証拠相立、以来紛敷無之筋候ハ、可質借候、此上大形二請取置、質二入置候者究不相知儀於有之者可為曲事、

享保二年西六月

享保二年西十二月

一質屋使いたし候者共、此内致取次質入置候品之内盜物有之、段々遂詮儀候得共、何方之者致盜持来候品物とも不相知候、依之先頃質屋共江段々申渡置趣茂有之候得とも、偶証人など立候も名代迄二而其詮不相立候、畢竟致使候者とも大形故盜人不相知候条、

向後質屋使いたし候者とも随分入念、不依何色質二入候品持来候ハ、居所等相知、紛敷儀無之者其上ニて証拠人之詮相立候様仕置可致取次候、万一此以後盜物を質屋使いたし、御詮儀之節致盜候者不相知候ハ、其品致取次候質屋使之者江屹と其科可申付候、尤、質屋江者先頃委曲申渡置候間、乍此上大形之儀於有之者是又可及沙汰候、

右之趣、与中へ者と頭、寺門前ハ社奉行、町方者町奉行、質屋江者御勝手方、諸外城・私領者地頭・領主より屹と可被申渡旨可申渡候、

一御紋付之衣類上下等質屋江入付候儀、又者売買いたし候儀無用可仕候、若此上違背之者於有之者屹と可及沙汰候条、此段質屋江不洩様可申渡旨樺山権左衛門御取次ニ而被仰渡候、

写

一諸外城・私領馬尾上納ニ付而者所横目并牛馬役立合、無親疎切調候様被仰候ニ付、跡々納不足無之筈候処、野尻・坊泊り両所之儀者無滞納来り、其外諸所共ニ

過分ニ納不足有之、不可然事候ニ付、向後左之通申付候、

一三年ニ壹度馬壹疋ニ付尾五匁ツ、上納有之事候得共、此以後者三歳以上之馬壹年一疋ニ付壹匁五分程ツ、上納申付候条、年々牛馬勘定内改之節前条役々立合切調可有之候、

一右上納方之儀、有来ル通り毎秋牛馬勘定之節可相納候、左候而、勘定相濟次第諸所応馬数御馬方より引付を以上納可申渡旨、其内者出入高納置、引付之通堅固ニ相納、若不足有之候ハ、御厩御払直成を以代銀上納可致候、

一当年之儀、前条之通応馬数候上納分不持越諸品茂可有之候間、御勘定以後引付相渡次第当年納前之分当年中又來春迄之間無相違上納申付候、

一当分迄納不足之分未進不及差引、当年より応馬数上納申付、未進之分茂御厩御払直成之通当年より來亥年迄之間代銀上納申付候条、諸所納不足之分銘々相しらへ上納可申渡候、

一髮根之儀茂三歳以上之馬一年一疋ニ付三匁程ツ、上

納申付候条、尾相切候節一所無親疎可切調候、切髪

二而差置候馬者御厩直成を以代銀上納可致候、

一鹿兎島七組并馬差与又者近名仕馬之儀茂、此節より

尾・髪根共二諸外城同然上納申付候条、応馬數無親

疎切調、納不足之分者代銀上納申付候、

一七組并馬差与仕馬者於御厩尾・髪根切調、近名之儀

者郡見廻・庄屋立合、牛馬内改之節其所々二而役々

立会切調、無滯上納可有之候、

右、七組江者御用人より申渡、外城・私領其外鹿兎

島馬差与并近名江不洩様御馬方より可被申渡旨可申

渡候、

(朱書)明和三戊  
九月

(小松清香)  
式部

戊八月

右書、

(朱書)明和三戊

九月廿六日

与頭

御家老座印

一諸職人受領蒙 勅許候者共、繼目之受領不相願父或

祖父蒙 勅許候受領を其子孫名乗候者共有之趣二相

聞得候、若右体之者共有之候ハ、向後国名并官名

共自分と相名乗候儀者可為無用候、尤、繼目之受領

相願候儀者可為勝手次第候、

右之通、御料者御代官、私領は領主・地頭より可相

觸者也、

(朱書)明和四亥

正月廿一日

与頭

御家老座印

一諸国寺社修復為助成相對勸化巡行之節、自今者寺社  
奉行一判之印状持參、御領・私領・寺社領・在・町  
可致巡行候、

公義御免之勸化二者無之、相對次第之事候間、御免

勸化と不紛様可致旨、御領者御代官、私領者領主・

地頭より兼而可申聞置候、

一陰陽道

一兵道

一神子門長

一子安觀音守

一 浄光明寺支配本願之者

右者、人家来・寺門前又者百姓之軽き者共、兵道方・陰陽道・神道方軽き作法なと少々致稽古候由二而為差師匠茂不相知、本式之伝法茂不致候、夫々一通之（道力）誤茂不相知、色々取交祈禱等敷呪等いたし候者有之由、正法之筋茂不相知、別而不相応不宜候間、噯・役人・横目其外宗門方役係之面々氣を付、不限僧俗右体之者於有之者可差留候、乍其上右体致執行候者有之候ハ、相糺当座江可申出候、尤、神子門長之儀者先年御禁止被仰渡置候付而者致執行者無之筈候得共、程過候得者自然者神子門長之業取行候者有之候ハ、堅可差留候、且子安観音寺之儀茂右同断相心得可差留候、浄光明寺支配之本願鐘打房と称シ諸所差廻由候、右本願江者浄光明寺并一宗之寺院より証書相渡相廻事候間、自然右書付不致所持相廻候者有之候ハ、是又可差留候、前文之通申渡候上右体致執行候者於有之者、所役々越度可相成候、一向宗締方二付紛敷候間、緩せ之儀無之様可致旨被仰渡候付申渡候、

（朱書）明和四亥  
二月

寺社奉行

一向宗締方二付別紙之通諸外城江申渡候、御当地之儀者支配頭又ハ主人より別紙之趣を以被申渡候様当

座江可申達旨被仰渡候、

（朱書）明和四亥  
二月

寺社奉行

（行間朱書）  
一 本行、亥二月十二日寺社奉行所より六与所筆者御用

二 而野村貞右衛門罷出候処、本行之趣通達被仰渡、

書写与頭承届候事、」

一 頃日とき又者疱瘡踊と名付、屋敷内或門前二而火を

焚候儀有之、且又異様之体二而致徘徊候儀共有之由

相聞得、別而火用心惡敷候、右体之儀二付而者去ル

已年已来段々申渡候趣有之、屋敷内又者門前二而火

を焚候儀二付而者享保九辰年被仰渡置候趣も有之、

不可然事候間、一切無用可致候、此旨可被申渡候、

（朱書）明和四亥  
三月

（桂久中）  
織部

一 於長崎人參一手買入方、鹿兒島上町中原治兵衛弟次

右衛門江去戌年より年数五ヶ年令免許、兼而人參致

売買候者共持合候人參上町会所ニ而次右衛門相改致目印置たる由候処、其以後致目印無之人參段々致売買者有之由相聞得候、依之向後目印無之人參者善悪共見当次第請人より町奉行所江申出都而可取揚候条、兼而人參致売買候者共江稠敷可申付置候、

(朱書)「明和四亥」

五月二日

与頭

御家老座印

一 灰吹銀・潰銀等銀座之外他所ニ而売買停止之旨前々相触、銀道具下銀入用之節ハ銀座ニ而可買受旨去ル亥年相触候処、又々猥相成候段相聞得候、且町方ニ而銀櫛・筭其外銀器類專相用候旨相聞不埒候、已来右体之無益之銀道具拵候儀一切致間敷候、右之趣宝曆三酉年相触候処、又々近来猥ニ成候由相聞得不埒候間、堅可相守候、若内々ニ而致売買候者於有之者急度可申付候、

亥五月

六月晦日

与頭

御家老座印

一 頃日於諸所華火いたし候聞得有之候、以前より被差

留置候儀、第一火用心惡敷候条、右体之儀向後致間敷候、若訊有之華火不致候而不叶節者大御目付方江届申出、免許之上人家迦之処ニ而可致候、此旨表方江致通達、御側方・御勝手方江者写を以可相達候、

(朱書)「明和四亥」

九月

与頭

此面  
(高橋種寿)

一 博奕三笠付・取退無尽者勿論、富突杯と名付博奕ケ間敷儀致間敷段前々相触候処、致忘却候者其所々ニ有之、中国筋ニ而者第一と唱へ、三笠付杯ニ紛敷会合いたし候趣杯相聞得候、御料所村々之儀者御代官、御預り所役人心掛相糺召捕、嚴敷致吟味候間、私領ニ而茂村役人江急度申付置、勿論捕違者不苦候間、其筋之役人疑敷者者召捕、吟味之上一領一地頭限之儀者 公義御仕置ニ準シ自分仕置申付、他所之引合有之候者可被相窺候、

八月

(朱書)「明和四亥」  
九月廿六日

与頭

御家老座印

一首尾不宜御役御免被成并小普請被仰付候者共之内、  
遠慮之心茂無之方々行廻り、不入儀を申御仕置之取  
沙汰仕、口を利申候者共茂有之由候、右通之者共者  
御咎目可被仰付候得共、此節迄者其通り二而被差置  
候、以後之儀右通之者有之候ハ、御目付杯氣を付可  
申候、右通之者共御側廻之者杯江致参会候者茂間々  
有之由不宜儀共候、

右之通 御先代被 仰出申渡置候処、程久敷相成  
候得者取違茂可有之候、自然自分の非を飾、心安  
人参会いたし内々二而方々色々申散候様有之候而  
者御仕置之障二相成、別而不宜候間、猶又  
仰出之趣を守可相慎候、就御側廻勉之面々者、表  
方之人江参会等致無用候様為被 仰出置趣茂有之  
候得者、不相交様可致事候、万一聞得之趣於有之  
者可沙汰候、此旨御役人限申渡、其外可承面々江  
者支配頭より可申渡候、  
（朱書）明和四亥  
十月  
此面  
「一本文、亥十月十四日川田彦七御取次を以被仰渡、比  
志島要人致承知候事、」

一唐和明礬売買之儀、江戸・京・大坂・堺四ヶ所於会  
所可売買旨、宝曆八寅年・同十辰年右四ヶ所町中相  
触候処、今以諸国明礬於国々致売買、会所江不差出  
（出脱之）  
趣二相聞候、自今以後諸国出明礬之分、右四ヶ所之  
内最寄之会所江差出売渡可申候、四ヶ所之外二而諸  
国出明礬之分売買致間敷候、尤、只今迄商人共貯置  
候明礬於有之者右会所江可売渡候、若心得違於有之  
者咎目可申付者也、

閏九月

右書、

（朱書）明和四亥

十一月廿三日

御家老座印

与頭

一国々百姓強訴・徒党又者逃散候儀者堅停止二候上、  
猶又寛延三年右体之儀於有之者急度逐吟味、頭取  
并差統事を工候者夫々急度曲事可被申付旨相達候処、  
西国筋百姓共之儀者我意強、今以御代官并御預所役  
人・領主・地頭より之申付を拒、間々逃散いたし他  
領江願出儀茂有之由不屈至極候、然処領主・地頭二

寄心得違仕置等二も不申付候者、婦村可為致由難渋候儀粗有之趣相聞不埒之事二候、以来右体之儀於有之者其所より早速婦村いたし候様取計、暫茂其所江差置候儀有之間敷候、尤、其元々江婦村之上先達而相達候通遂吟味、急度曲事可被申付候、

閏九月

右之通、從 公義被仰渡候間、以来右体之者御領内江入来候儀、何様二相断候而茂曾而入付間敷候、万一境内忍通入来候共暫茂其所江不差置、早々可為致婦村候、若婦郷之儀申聞候而茂不致得心無難之取扱難成候ハ、囚人之取扱二いたし引渡候様被仰渡候間、右之趣を以委曲申聞、是非可差返候、乍其上不致得心候ハ、其段早々可申出、此旨組中・支配中・

諸外城へ不洩様可被申渡者也、

(朱書)明和四冬

十二月廿四日

御家老座印

六与

与頭

大目付江

一百姓共大勢子共有之候得共、出生之子を産所二而直

殺候国柄茂有之段相聞不仁之至候、以来右体之儀無之様村役人者勿論、百姓共茂相互二心を付可申候、常陸・下総辺二而者別而右之取沙汰有之由、若外より於相顕者可為曲事者也、

十月

(朱書)明和五子

正月廿三日

六与

与頭

御家老座印

一頃日諸外城江火災繁別而如何二候、火之本改之儀者兼而申渡事候得共、役目之者共猶又氣を付緩せ無之様入念、疑敷者も候ハ、宰領相付差越候様申渡、御当地之儀も右同断相心得、不審成者有之候ハ、早速可申出候、此旨与中・支配中・諸外城江不洩様可申

渡候、

(朱書)明和五子

二月廿五日

(高橋種寿) 此面

(行間朱書)

「本文、相良弥一兵衛御取次を以被仰渡、小松仙十郎・

新納五郎右衛門より中間通達致候事、」

覚

一火を付類者召捕、町奉行所江可来事、

一火を付類者之在所をしらば早速可訴出事、

右之品々有之者御ほうひとして此銀子三拾枚下さ

るへし、たとひ同類たりといふとも其料をゆるし、

此御ほうひ下さるへし、あやしき者者不慥二候と

も召連来るへし、若火を付者を見のがし聞のがし

二仕、追而相知候ハ、其咎おもかるへきもの也、

寅十一月 奉行

右之通、此節日本橋江札建候間、武士方召仕下々

江茂此趣申含、あやしき者も候ハ、召捕差出候様可

被相触候、

右之趣享保七年相触候、武士方・寺社方等召仕

下々迄右之趣得と申聞候様猶又可被相触候、

十二月

右之通、万石以上并老中支配江可被相触候、

(朱書)明和五子

二月五日

御家老座印

与頭

一江戸詰等二而罷立候付而者、軽き跡祝等者可致事候

得共、間二者異様之為体二而女とも致徘徊候由相聞

得不可然候間、向後右体之儀無之様寄々可被申渡候、

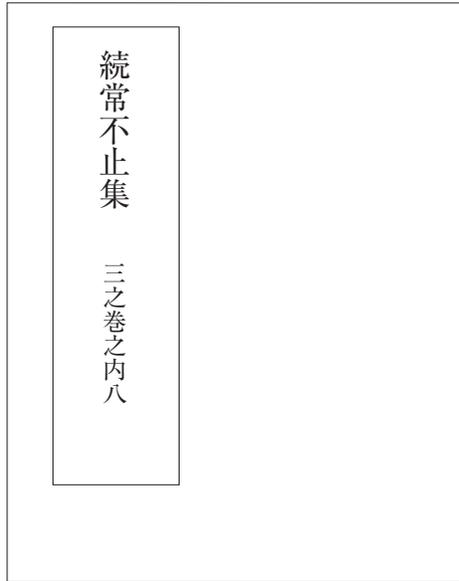
二月七日

(行間朱書) 本文、大進殿より寄々可申渡旨口達を以被仰渡、新

納五郎右衛門致承知、同日寄合方二而寄々通達申渡

候事、

(表紙)



付、其身二付而御礼廻之事并諸御礼等之儀二付被仰

渡候事

(朱書)<sup>三</sup>一 隱居・家督・繼目・養子并嫡子成之事

付、養子違変并外城養子成等願、与頭次書先例不書

記差出事、男上之事

(朱書)<sup>三</sup>一 跡職并別立等之事

付、跡職御断等之事

(朱書)<sup>二</sup> 元服并御目見等之事

付り、其身二付而御礼廻り之事

一 初而之 御目見不仕者御奉公可願出旨存候者ハ、

御目見願書物差出候筋ニ申渡、御目見願書与頭方

江請取置、忝ケ月限二人數帳面相記与頭より差出可

申候、其節進上物可仕旨可申渡候、其旨申渡、進上

物相濟首尾申出候ハ、御奉公相願候様可申渡候、以

上、

(朱書)<sup>一</sup> 正徳六甲

十一月廿一日

続常不止集 三之卷之内八

続常不止集 三之卷之内八

弘化四年丁未七月

(朱書)<sup>二</sup> 元服并御目見等之事

一 諸人初而 御目見之儀相願候節ハ願名を茂申出事二

候得共、初而 御目見之節ハ願名申出候二者不及候、

面々可致名替と存候名を直書出可申候、初而之 御

目見不致内者何様名相付候共御構無之事二候、尤、

初而之

御目見相濟候以後之儀者願名申出可相付候、此段与

頭二通達可致候、以上、

（朱書）「正徳六申」

十二月廿八日

写

一 座付士

右者、御目見之願申出候節与頭より当人江問付、何

方座付之訳又者何方江相勤候段相調支配相分ケ願書

物押札を以相記被差出事候処二、当人より分明二不

申出者も有之候二而於与所紛敷儀も為有之由候、然

者与帳二座付之訳記付有之由候間、於与所向後者

御目見願出候書物ニ銘々与帳ニ引合候上相調、紛敷

儀無之様相糺候上可被差出候、此段六与与頭江可相

達候、以上、

（朱書）「享保三戊」  
三月十八日

（伊集院久矩）  
藏人

一 一代座付士 御目見之節ハ、永々座付士之格式二者

不被仰付、御廻掛二名披露二而 御目見被仰付筈候

条、一代座付士 御目見之願申出候節、一代座付士

之分ケ承届、願書物ニ張紙を以其分相記可被差出、

此旨帳面ニ茂記置、向後無間違様可被仰候、此段可

申渡候、

（朱書）「享保三戊」

五月

（島津久当）  
将監

一家督・継目・養子成杯二付 御目見願之儀者、明年

御下国前より延引無之様与中之面々願をも申出候様

可被致、

一 初而之 御目見不仕者御奉公願可申出と存候者、先

頃申渡候通 御目見願書物差出候筋与中江申渡、

御目見願書与頭方江請込、一ヶ月限二人数帳面二相

記可被差出候、其節進上物可仕旨可申渡候、左候而、

進上物相濟候首尾申出候ハ、御奉公方相願候様と

是又可申渡候、此段為心得申渡候間、組頭江可申渡

候、以上、

(朱書)「享保三戊」

七月十九日

(伊集院久矩)

藏人

与頭

御番頭

一 継目・家督并養子嫡子成等被仰付候節、九才より以

上之者ハ早速御礼之願無延引可申出候、八才より以

下之者ハ名代を以家筋之進上物仕、御礼申上度旨一

類共より願申上候様ニと被仰付置候、同格之者差支

候儀も可有之候旨、(間力)八才以下之者ハ同格之名代ニ而

無之候而も名代を以家筋之進上物仕、御礼申上度旨

一類共より願申出候ハ、右進上物相納候筋ニ可被

仰付候、左候而、名代之者御礼席ニ罷出者不及候、尤

右之通御礼申上相濟候得共、致盛長重而御礼之願申

上ニ者不及事候、此旨表方支配中江致通達候様与頭

江も可申渡候、

五月

(島津久豪)  
左

右之通、与中江不洩様可被致通達旨奎殿御差図ニ

而候、以上、

(朱書)「享保五子」

五月九日

(種彦)  
高橋七郎右衛門

六組

右之通、子五月九日高橋七郎右衛門御取次ニ而被

仰渡、新納伊織致承知候事、

(行間本書)  
一 継目・家督并養子嫡子成等被仰付候節、九才より以

上之者ハ早速御礼之願無延引可申出候、八才より以

下之者ハ名代を以家筋之進上物仕、御礼申上度旨願

可申出候、右通名代ニ而御礼申上候人致盛長重而御

礼願申出不及候、且又若輩者共者一類共より右通願

可申出候、此旨与中・支配中江不洩様可致通達候、

以上、

四月

内記」

写

与頭

一 御兵具所付士之子共、若年之内者諸座走番、其外方々

足輕之勤場を申付、物馴候節御目見奉願、相濟候以

後より士之勤被仰付事候処、直子無之者当所士之子

共又ハ外城衆中之子共養子之願申出、願之通御免被

成候得共、則

御目見奉願候故直子と相替、早速より士之勤場を相勤候付物馴候儀無之候、依之向後ハ養子ニ而も直子同前

御目見之願先差控、一往足輕勤場申付、諸事物馴候以後 御目見之願可申出旨今度物頭江申渡、右之通候故、御兵具所付士養子之儀者 御目見願致延引答候間、其通可被相心得候、

右之通可申渡候、以上、  
（朱書）享保十一年  
二月廿七日 （島津久当） 将監

右之通、伊集院十藏御取次を以町田郷九郎致承知候事、

一外城衆中鹿兒島之養子ニ被仰付候者之子共、其家内ニ被召入度旨申出家内入申渡候而も、初而之 御目見不相濟内者鹿兒島士子共同前之事候旨、  
御目見相濟候節与帳ニ可被書載候、且又初而之 御目見願出候節名替之儀申出ニ不及、常式鹿兒島士之子共初而 御目見相願候節之通可致候、

一外城衆中并諸座付其外之者共鹿兒島士ニ被召出候節、

其子共家内入茂右同前之事候旨、  
御目見相濟候節与帳ニ可被書載候、

右之通被召出候者之子共之儀者外城養子之子共と者 沢茂相替候間、初而之 御目見相濟候節願名有之候者ハ、名替之儀時々可被得差図候、

右之通、組頭中兼而相心得候様申渡、其外可承座々江可申渡置候、以上、  
（朱書）享保十一年  
三月 空

右之通、左近允与太夫御取次を以午三月七日被仰渡、島津市太夫致承知候事、

一初而之 御目見之願申出候節、小与頭次書ニ近所衆と御案文ニ有之候、右衆之字相除候筋ニ茂可有之哉之旨鎌田太郎右衛門より鎌田源左衛門御取次ニ而得御内意候処、小与頭次書之内ニ有之候衆之字ハ向後可相除候、同人御取次ニ而丑八月廿日同人致承知候、御案文之衆之字此節より相除候事、  
但、当人より之願書物ニ者衆之字相用可然と口達

二而是又承候事、  
(朱書)享保十八丑  
八月廿日

写

一御名代元服被仰付候人より 御名代之人・理髮之奏  
者番江祝物之儀、向後  
御名代之人二者被究置候三匁之青銅・太刀遣、理髮  
之方二者着一折可遣候、

右之通被仰付候間、此旨致通達、御側方・御勝手

方江ハ写を以可相達候、以上、

(朱書)享保十八丑  
十一月

(島津久實)  
中務

右之通被仰渡候間致通達候、以上、

十一月晦日

小林中太兵衛

写

一元服被仰付候人、素袍致着罷出候節末広持候儀も有  
之候得共、無官之者ハ持不申筈之儀候故、向後無用  
可致候、屹被仰渡儀二而茂無之、 御前外常々扇子  
持候儀者不苦候、此旨承知仕置候様二可承御役々江

可申聞置候、以上、  
(朱書)元文二巳  
十月

(島津久實)  
主殿

右之通、巳十月本田信次郎御取次二而喜入主膳致

承知、左之人数御番頭座江召出銘々申渡候事、

一新納喜右衛門 比志島仙太夫 諏訪仲右衛門

土持新八 洪谷三四郎 本田信次郎

秩父十郎右衛門 肝付八郎左衛門 川上助太夫

本田六左衛門 高崎惣右衛門

写

一初而之 御目見奉願候者之内極貧故 御目通二罷出

程之衣類等不致所持候付、進上物迄を相納、 御目

見仕候格二願申出、其通被仰付候者共茂有之候得共、

一世

御目見不仕罷在候儀如何之事候条、右体之者ハ親類

又者心安者之内ニ衣類致借用可相濟候、右者共より

も衣類等借シ候間 御目見為致候様可仕候、尤、初

而之

御目見ニ而も、繼日被仰付候節之

御目見ニ而茂一度者 御目見仕候様可願出事候、一

日之儀候得者借物ニ而も可相調候間、向後右心得を

以 御目見願申出候様与中江寄々通達可有之候、

右之通、組頭江可申渡候、以上、

（朱書）元文四末  
二月 （島津久春）  
大藏

写

一初而之御目見願出置候者多人数有之筈候、長々 御

目見不被仰付候得ハ、末々ニ而ハ差支候儀茂有之筈

候故、当分

御不快内ニ而候得共、来ル六日・七日・九日

御簾越ニ而右人数御礼可被仰付候、

右之通被仰付候間、与頭・奏者番江可申渡候、以

上、

（朱書）元文元辰  
十二月三日

（島津久春）  
左

一初而之 御目見願出候者、縦者親医師ニ而子茂医を

致相伝存念ニ而、幼少より稽古致させ候者ハ申出不

及剃髮致、初而 御目見之節右之訳可申出候、右医

師ニ準シ有之候ハ、同前可相心得候、且又親俗体ニ

而子共之内剃髮ハ有来通候、右之通、与中・支配中

江致通達、御側方・御勝手方・御厩支配方江被致通

達候様各写を以可相達候、以上、

十月

主計

右之通被仰渡候間、此段致通達候、以上、

（朱書）享保十八丑  
十月十七日

（政息）  
鎌田源左衛門

一其身ニ付而御礼御家老中江參候程之事有之候節ハ、

御家老より直ニ申渡候格式之御役人計、比志島隼人<sup>（範房）</sup>

所歟今老人被仰付筈候間其所歟兩人之内一所江御礼

可申上候、右以下之役人其外諸士參不及候、且又独

礼格以上一所持ニ而も無役者者不及其儀候、

（朱書）享保六丑  
七月

（伊集院久矩）  
藏人

取次  
（経武）  
村田九郎左衛門

一其身ニ付御礼御家老中江參候程之事有之節者、御家

老より直申渡候格式之御役人計、比志島隼人所歟義岡

（久守）  
右京所歟兩人之内壹所ニ參御礼可申上候、右以下之

役人其外諸士參二不及候、且又独礼格以上一所持二  
而も無役之者者不及其儀旨先頃申渡置候処、今以此  
内二不相替常式繼目・家督杯被仰渡候類右兩人所江  
御礼參候者有之、最前申渡置候通御家老直申渡格式  
之御役人計其身二而御礼二御家老中江參候節隼人殿・

右京兩人内壺所二參御礼可申上候、左候而、御礼之

儀書付二而可致持參候、此旨可致惣通達候、以上、

(朱書)享保六

八月廿六日

(伊集院久矩)  
藏人

取次

村田九郎左衛門

一御直元服并 御名代(元服脱力)繼目家督・初而之 御目見、出

家・山伏御礼等迄

太守様御在府中者、

隅州様御下向被遊候ハ、御名代を御下屋敷 御覽

之筈候間、右願之人ハ可申出候、此間組中・支配中

江通達可有之旨藏人殿御差図二而候、以上、

取次

榊山権左衛門

十一月

右之通御書付を以被仰渡、平山新左衛門致承知、

此間留置本書直二相返候事、

一大身分二而江戸江御供をも相勤候格式之面々、其身

独礼之面々ハ年頭其外御礼事二 御城代・御家老・

若御年寄・大目付江自身見廻、其外御礼等申儀有之

候ハ、其身勤二不及以使可申候、自身之付届ハ勝手

次第二候、

一寺社奉行より以下月次御礼二罷出候御役人、年頭・

御役替其外御礼御城代・御家老・若年寄・大目付二

可參候、

一右役之面々より 太守様御方江御祝儀申上候程之儀

者、

又三郎様御方江茂可申上候、御番頭以上者御家老中

迄二披露状、輕キ御内々之御機嫌何ハ御近習役、

又三郎様御方者御守役、組頭以下之役人御用人迄披

露状、御側廻り勤之人ハ御近習役、

又三郎様御方御守役迄、

一加役被 仰付歟其外二茂輕キ御礼事等之節者右御役

之面々、月番御家老迄參候処、又ハ支配之頭迄參候

處、其程疑敷節者其支配頭江得差図可相勤候、表立

而之儀二而も無之、御内々二而御礼申上候儀者島津

豊前殿・比志島隼人・名越右膳三人之内江依其所可（品力）  
参候、

承知候事、  
七月廿日

一御側廻り中通者依（品力）所島津豊前殿・比志島隼人迄二参候而も相

写

候儀茂可有之候、御小姓者名越右膳迄二参候而も相

濟儀も可有之候、其程疑敷候ハ、頭々江可得差図候、

一御役人帳無之小役人ハ役替、何ぞ之御礼事ハ其頭又

者其取次之小頭江可参候、何れ茂江参二不及候、年

頭杯二御家老其外参候儀ハ勝手次第、

一小番・大番之内役人二而無之當時勤二付而申渡事共

有之、其付届致儀有之候ハ、組頭江可相勤候、

右之通、表方江致通達、御側方・御勝手方江も写  
を以可相達候、  
二月 空

十月十四日

写

御目見願不出候而相濟事

一新納平左衛門跡継目聶養子新納安右衛門無役之内継

目御礼願与二相付可申出候哉之旨申出、御内意二而

島津弥市郎御取次二而四郎より申出候処、無役之内

申出置候二付御小姓又ハ御側廻御奉公被仰付候而も

願書申下ケ御側二相付申出不及之由被仰渡、四郎致

一御役又ハ地頭職并家二付年頭御太刀進上仕来候人、  
御役・地頭職之御礼、継目・家督等之御礼、正月十  
五日迄之内不相濟人年頭御太刀致進上候儀、時々可  
得差図候、右之通二候間、年頭御太刀進上仕来候人  
継目・家督之御礼願申出候ハ、時々無延引可遂披  
露旨与頭江も可申渡置候、

正月

兵部

右之通、寛保四年子正月十七日三崎平太取次二而  
(久遠)  
新納五郎右衛門致承知候事、

(朱書)延享三丑  
五月十六日

木村四郎左衛門

右之通、丑五月十八日右四郎左衛門取次二鳥津主  
水致承知候事、

写 与頭

御側表御用人江

写

一分地御礼之儀、向後御番頭・与頭并右列以上之家より致分地、御家老直触格罷成候人体迄御礼御請可被成候、尤、進上物之儀、茂其者之御役又者家風次第、家筋無御構候条、進上物之儀ハ人々心格相しらへ可申出候、其下之者ハ御礼御受被成間敷候、

一年頭御礼着座之御規式并諸節旬日月次御礼  
一御直元服并 御前元服且又元服之御礼  
一初而之 御目見・継目・家督并分地・別立・養子成等之御礼  
一出家入院・山伏官成等之御礼、右之外御礼事

右之通、宝永五年子二月被 仰出置候間帳面記置、向後寄合並以上進地別立被仰付候人ハ有来通御礼願可申出候、代々小番以下別立被仰付候者御礼申上不及候間、願書差出候ハ、可相返候、何ぞ外二誤有之、其通之御礼願二而無之候ハ、願書可差出候、

右之通、 太守様御名代  
薩州様被遊御勤候条、此旨表方江致通達、御側方・御勝手方江者写を以可相達候、  
(朱書)延享三丑  
八月 (鳥津久甫) 左衛門  
右之通、北郷助太夫取次二而被仰渡、丑八月七日  
比志島彦五郎致承知候事、

右之趣を以、向後可被致首尾候、

五月 兵部

一御在府二而 御目見不相濟者、

右之通被仰渡候間致通達候、以上、

御下国之節迄御奉公願之儀難成候間、進上物納置御

奉公願可申出候、重而

御下国之節御目見可被仰付候旨先年被定置候、弥其

通可相心得候、

閏十二月

兵部

一 御留守中

御目見願之儀、以前より享保五年迄者六与老帳相調

月末差出候筋相見得、同六年頃より元文二已四月頃

迄願次第銘々差出、同六月頃より六与一帳相調月末

差出来筋帳留相見得申候、右六月頃より一帳相調月

末差出候様被仰渡之儀者見当不申候、以上、  
（朱書）延享四卯

八月十九日

組頭

〔行間朱書〕  
一 御目見願書差出候様之次第相札可申出旨被仰渡候付、

本文之通相札、卯八月十八日三崎平太取次ニ而北郷

権八より差出候事、

写

組頭江

一 御側表方共御目見願出候書物毎月末差出被来候得共、

御在国之節者願出次第時々被差出候、

御在府之節者此内之通可被相心得候、

右之通申渡、御側方江も可相達候、

八月  
（朱書）延享四卯

大藏  
（島津久正）

一二年比より六組一帳相調月末差出来候得共、以前之  
（朱書）此前行切捨り

通時々差出候筋被仰付渡儀者我々申談候、

右之通無之候得共、末々ニ而此段御内ニ而得御差図

申候、以上、

八月十九日

組頭  
六与

一 御番頭被仰付候節御礼申上相濟候人与頭役被仰付

又々御礼申上不及候条、左様相心得候様可申渡候、

正月  
（朱書）享保十九寅

市太夫

一 極貧之者衣類ニ差支、初而之

御目見奉願候儀不罷成候故、角入・前髪取之願も不

申上候得共、中紙進上之願申出、

御目見被仰付候格ニ被仰付、右進上相濟候以後角

入・前髮取之願申出筈ニ而、尤、重而

御目見奉願ニ不及候、

享保廿年七月九日

写

一私亡養父岡元千右衛門繼目私江被仰付難有仕合奉存候、依之御序之節御礼申上度奉願候、私事中紙進上仕養子成之御礼申上候処、其後千右衛門事、地頭職之御礼申上候、且亦私嫡子岡元千太夫御目見被仰付候間、私進上物之儀者御見合を以被仰付被下度奉願候、此等之趣被仰上可被下儀奉願候、以上、

寅六月廿九日

岡元千兵衛

二番組所

六字  
組頭江

一組中極貧者之子共角入・前髮取之儀ニ而去年正月縫殿より口達ニ而被申渡置趣有之候得共、極貧者之子

共衣類等差支初而之

御目見奉願候儀も不相調、角入等願申出候儀差控、

無是非勢長ケ相応相成迄丸額ニ而罷居候儀別而迷惑

存筈候、右体之者別紙之通先年被仰出置候間、右

仰出之通此節より相心得、進上物仕

御目見相濟候筋ニ而角入又者直前髮取願申出候ハ、

吟味之上何分ニも可仰付候、以後初而之

御目見奉願候ニ不及候、右二付而ハ元文四年未

御目見ニ罷出程之衣類等無之、進上物相納

御目見不仕罷在候而者如何候間、親類又心安者之内

より衣類致借用可相濟旨被仰渡置趣有之候、右之

旨趣者縦初而之

御目見進上物差上 御目見相濟候筋被仰付候而茂、

家督・繼目之

御目見も被仰付儀ニ候得者、一世之内一度者

御目通罷出候様可心掛と之儀ニ候、一世

御目通ニ不罷出候儀も別而歎ケ敷儀候条、向後右之

趣を以人々心掛候様可致候事、

右之通寄々可被致通達旨可申渡候、

(朱書)宝曆七世  
十月

(烏津久宛)  
図書

一番与国生次郎八事、宝曆十二年午正月廿七日繼目

被仰付候処、幼少ニ而御目通罷出体無之候ニ付、名代を以進上物御礼并初而之 御目見相濟候筋被仰付

被下度旨同午二月奉願置候、然処翌年次郎八親類より又々願出候者、当年九歳罷成 御目通罷出体罷成候間、直ニ御礼并ニ初而之

御目見仕度旨宝曆十三年未七月廿六日書物差出候付、

同廿七日式部殿江島津助之丞より進披露之所、右通

跡達而願申替筋間違相成儀も可有之候旨、御目付方

江御向条書差出候節

御目見罷出年生ニ罷成候訳願人より可申出旨申渡書

物可相下旨式部殿より助之丞致承知候事、

(朱書)宝曆十三未  
七月廿七日

一与中之諸士家督・繼目・養子成等之御礼、

御太刀・弓又者中紙進上ニ而

御目見被仰付候人、幼少其外無扱訳ニ付而依願進上

物相納、御礼相濟候筋ニ被仰付儀ニ候、然共元服并

初而之 御目見相濟、右体御礼願之人進上物納之筋

相願度茂有之候ハ、勝手次第可被仰付候、

一御在府之節、御一門より諸士ニ至り家督・繼目・養子成等之御礼願申出面々ハ

御下国之節 御目見被仰付儀ニ候得共、

御在府中ニ願出候面々ハ其節々進上物相納、御礼相

濟候筋被仰付候、

右之通被仰付候条、可承面々江可申渡候、

(朱書)明和十四  
十二月

(久福)  
式部

右之通、川上弥五太夫御取次を以被仰渡、種子島

左内致承知候事、

六与  
与頭江

一太守様御下国未間も有之御事候者、初而之 御目見、

元服・繼目・家督之御礼

隅州様御家督中御滞府之節之通、御礼相濟候様被仰

付候旨被仰出之条可申出旨、存候面々者申出候様寄々

承知候様可致、

(朱書)宝曆五亥  
九月廿八日

(義明久中)  
相馬

取次  
町田郷九郎

御記録奉行江

一 組中極貧者 御目見罷出程之衣類等無之者、一世一度

御目通罷出候様可心掛旨先年申渡有之候ニ付、猶以其通可心掛事候得共、借物逆茂不相調 御目見被仰付候儀致迷惑者も有之、且依家筋者差支儀有之筈候旨、右体之者初而之 御目見并家督・繼目等之御礼願申出候ハ、吟味之上進上物相調、 御目見相濟候筋可被仰付候条、此旨承置候様可申渡候、

(朱書)宝曆十四申

(小松清香)式部

三月

(久藤)

右之通、申三月十日新納次郎四郎御取次ニ而島津甲太致承知候事、

(朱書) 〔二〕隱居・家督・繼目・養子并ニ嫡子成之事

付、養子違變之事

写

一 養子ニ罷成致家督候者不縁ニ而違變之儀、今迄者養

父方家断絶ニ無構違變致来候得共、向後者違變不致

ニ而不叶諷有之候節者、跡相統之者を見立其跡ニ仕居置、其身者隱居之願可申出候、其以後依申分本家

ニ立婦候様ニも可被仰付候旨被仰出候旨被奉承知、

与中江可被申渡候、地頭所有之面々地頭所・明所之

外城江茂可被申渡者也、

(朱書)正徳元卯

十月十三日

七組  
当番御用人

一 御直土嫡子死去、又者何そニ而二男を嫡子ニ被仰付

候節者、末々之子共迄右ニ相付申出、御免之上帳面

迄被召直筈候間、与中可被得其意旨御家老衆御差図

ニ而候、以上、

(朱書)正徳二辰

三月二日

諏訪市右衛門

(行間朱書)

〔一〕組中嫡子成之儀者以前之通願出御免被成事候、二男

三男之儀者右ニ準シ候筈ニ候間、帳内与所ニおゐて

相直、高所へ時々此旨可致問合旨帶刀殿より市来次

郎左衛門御取次ニ而被仰渡候、以上、

六月十三日

平田新左衛門

〔行間本書〕

一 養子家督違変不致候而不叶諷有之候節ハ、跡相統之者を見立其跡江仕居置、其者ハ隱居之願可申出候、

一 養子ニ罷成致家督候者不縁ニ而違変之儀、養父方家

断絶無構致違変来候得共、向後者違変不致候而不叶

諷有之候ハ、跡相統之者を見立其跡ニ仕居置、其

身者隱居之願可申出候、其以後依申分本家ニ立婦候

様ニも可被仰付候旨去年被仰出、其節右之趣申渡置

候、弥其通相心得可被申出候、且又養子取組之儀者

互ニ納得之上親子取詰事候処ニ、為差儀茂無之不致

違変候而相濟程之儀ニも及違変、又者養子罷成候者

諸事之慎無之致違変儀も有之由候、右体之儀ニ而致

違変候儀者不義理之事候間、無抛諷有之兎角不致違

変候而不叶諷有之候と親類中へも得と申談内意候ハ、

熟談之上申出儀候ハ、取揚可申候、内々ハ不義之筋

ニ而、表向者不縁有之致違変抔と申出儀とも有之候

而者不宜事候、違変ニ付而者其子細申出儀も有之

候条、委細之儀を被聞届二者不及候得共、右之心得

を以与頭中氣を付可被申出候、以上、

〔朱書〕正徳二辰  
三月四日

以後依申諷者本家へ立婦候様ニも可被仰付旨正徳二  
年被仰渡置候得共、向後養子難遂者於有之ハ、双方  
親類熟談之上致異見、何れ之筋ニも違変不致候而不  
叶諷有之節ハ其身隱居之願不及、違変於御免之跡養  
子之儀者親類見合、追而可願出之書物を以可申出候、  
右之通、表方へ致通達、御側方・御勝手方へハ写を  
以可申達候、

〔マ〕  
享保五辰五月

大藏

与頭へ申渡候覚

一 依願養子被仰付候者無抛諷有之養子難遂旨有之候

ハ、双方親類共申談、内意之上違変之願御法様之

通双方より書物を以可申出候、右養父方之願書ニ養

父方之親類連名ニ而可願出候、

一 養子ニ被仰付置候者家督以後相統難成諷有之候者ハ、

双方親類へ申談、同意之上養子之養子ニ可仕者見立

置、自分事者家督相統難仕諷有之候間、隱居被仰付、

何某を養子被仰付被下度旨可奉願候、右願書ニも双方親類連名ニ而双方より願可出候、

一 依御免縁与仕居候者無摺訳有之縁与難遂者ハ、双方親類共申談、内意之上前条之趣ニ願書を以双方より可願出候、

右、養子又者縁与之儀者、傍輩之子を内約相究置、願之通ニ屹被仰付縁を結罷在事候処、御当地之儀諸国之格式相替、養子違変又者女房離別之願申出候者多々有之候、屹奉願為被仰付置事候処、軽々敷其恐をも不存、又者互ニ不義之至ニ相聞得旁以風俗不宜候、依之先頃為被 仰出旨も有之候間、猶奉得其意、違変離別之願申出候者可有之時者右件を以相改候上可被遂披露候、右之旨趣不相達候哉、此間毎々間違之儀有之候付、此節又々申渡事候、以上、

(朱書)正徳三巳  
七月廿六日

右、正徳三年巳七月

一 智養子ニ罷成候者無摺訳ニ而養子於難遂者、御法條

之通書物を以申出、跡相統之養子者養父方より見合可申出候、養父死後ニ而候ハ、其家之親類共より見立可申出候、願之通違変被仰付候ハ、本家ニ立帰候様被仰付度旨可申出候、

一 願之通被仰付候ハ、於本家最前之通ニ男三男之訳帳面ニ記置、何某先養子と肩書可致置候、

一 初而之 御目見不致候者養子ニ罷成、於養父方養子成之 御目見濟候者違変之儀(後力)於本家初而之 御目見奉願度旨於申出者、本家之家督より与頭江可願出候、左候而、与頭中委遂吟味候上、右之者兼而之行跡等宜有之被召仕候而茂相応ニ相勤器量又者何そ芸能等茂有之候段無別条候旨承届候ハ、其訳を以与頭より 御目見願可申出候、尤、所行悪敷何れ之芸能茂無之不相応之者候ハ、 御目見願与頭より申出間敷候、

付り、本家立帰候以後 御目見不被仰付内者、尤何れ之御奉公も申付間敷候、

一 於本家初而之 御目見相濟候者智養子違変後本家ニ立帰候節、又々於本家 御目見被仰付ニ不及候条、

右相達候通何某先養子と帳面ニ可記置候、右之者兼而之行跡等茂宜、被召仕候而茂相応ニ相勤器量又者芸能等茂有之段無別条旨承届候ハ、以時節其訳与頭より可申出候、其後吟味之上御奉公方可申付候、尤、与頭より申出無之内者何御奉公茂申付間敷候、一養父并養子よりハ可及違変子細茂無之候得共、智養子之妻氣任之仕形有之、何様ニ異見を加候而茂不致承引、夫故夫婦之縁難遂、養子違変之筋罷成候者も可有之候、乍其上氣任之申分差通候ハ、縦血筋断絶候共右女隠居致させ、養子之儀者致相統候様ニ可有之候、

右之通格式被相定候、以上、

八月十八日

右之御格式、正徳三年巳九月廿一日与中江通達有之候、

此御格式より以後養子并智養子違変之儀ニ付而被仰渡候御格式無御座候、

〔行間朱書〕  
一写

一智養子罷成候者無抛ニ而養子違変御免被仰付本家立

婦候節、養父方ニ而御目見致候而も本家ニ而初而之御目見不相濟者者、与頭しらへ之上御目見願申出候様ニ正徳三年巳八月御格被定置候得共、本家并養父方ニ而も一度初而之御目見願申出不及候、此外之儀ハ先格相替儀無之候、

右之通、此節御格被定候条表方へ致通達、御側方御勝手方江も可相達候、

十月

左京

一月次迄ニ罷出候者致隠居剃髮之願申出候節者申出不及候間、差免其首尾迄を可申出旨北郷助太夫御取次ニ而被仰渡候事、

正徳六申 月日不知、

一御咎目被仰付置候内相果候者之子共、不案内ニ而統目之願申出候者茂可有之候間、与頭并小与頭より氣を付其沙汰可致候、尤、右体之子共繼目申上様之儀、御内意可申出候、御吟味次第御差図可有之候間、右之通可相心得候、以上、

〔朱書〕享保二酉  
十二月五日

一男子無之相果幼少之娘有之候者、繼目・養子之願申出於御免者、幼少之娘有之候間往々取合繼目・養子仕度、此跡より願申出来候処、六番与安田助右衛門相果、男子無之幼少之娘有之候間、右之通繼目・養子之願申出候処、大野多宮口達御取次を以続目・養子と願申出候様被仰渡候付、其通願出御免被仰付候、然処四番組鎌田曾右衛門相果、男子無之幼少之娘有之候二付、繼目・賀養子之願申出置候処、外記殿より口達を以幼少之者取合候年生二而無之候得者、繼目・賀養子と願出候儀者首尾悪敷候間、繼目・養子於御免者往々取合度旨願出筋可然候、安田助左衛門繼目・賀養子被願出候様申渡候儀者首尾違二而有之候旨、明和四年亥十一月十六日小松仙十郎致承知候、

外城養子人柄之儀申出候節糺様之次第

一芸能之儀、諸人致師匠候程之者多く無之積二候、別

而不至芸能二而も太抵御用二相達候程を具二承届、尤、筆算之儀相達候哉、手跡之儀見届程二仕候而御格式相当之者ハ可相伺候、筆算又ハ何之芸能も無之者養子被仰付間敷候間、向後右之通相心得、一涯入念調可申旨被仰出候、以上、

〔朱書〕享保三戊  
五月

〔行間朱書〕

一「本行戊六月十五日樺山権左衛門御取次二而被仰渡候、向後外城養子之願人柄見合申出候節、此内御格式其上右之趣を以相糺、相応之者二候ハ、願書取上有来通次書致答二而候、本行被仰渡趣与頭次書二書加候事二而ハ無之候、其身之芸能之儀ハ内々相糺候処二、筆并其外之芸能之内何芸相応可仕者二而御用二も可相立候由承届候上次書致候通御返答申上答二候、本行之御書付ハ与頭中承知仕置候二而候由権左衛門より口達二而種子島平馬承申候間、向後外城養子人柄見合申出候節、右之趣を以相糺次書有之答候、」

与頭中江申渡候覚

一御当地士外城より養子仕候儀者、差立候家柄名跡を

被立置候迄之儀其外血筋二付而無拋申立、又者紛茂

無之逼迫之者ハ御当地中より養子罷成者茂無之、一

門中之儀も当分之飢寒者補候（瘦力）而茂養子ニ相応之者無

之、且又及老年候迄無妻之者ハ跡目断絶ニ可罷成候

間、右体之者ハ外城より養子御免ニ而跡目相統可被

仰付候、依之委曲左ニ相達候、

一其身之儀別立候者より外城養子御免之願申出候共被

取上間敷候事、

但、別立付而子細茂有之者ハ依其訳御取分可有之

候、

一士ニ不似合所行其外ニ付而御勘氣を蒙候敷、又ハ御

詮儀之旨有之、籠舎・遠流（感力）・逼塞等被仰付置、未何

様共不相究内ニ相果候者ハ、外城養子追而願出候共

被取上間敷候事、

但、御詮儀埒明、遠流・寺入・逼塞・遠慮等之御

科目被仰付、未被召直迄之内相果候者之跡目願出

候ハ、時々可被得内意候、

一外城養子ニ罷成候者、外城より致養子跡目相統為仕

度由申出候者、願出候者之家筋等相糺可被得内意候

事、

一士ニ御赦免被仰付候者、其身代ニ外城より養子御免

之願申出候共被取揚間敷候事、

一數十年前ニ禿候而名書与帳無之者之名跡、外城より

養子願出候とも被取上間敷候、与帳名相殘罷在候人

之名跡ニ候ハ、右格式を以相糺候上取次可被申出

候事、

一養子ニ願出候者、芸能之儀諸人致師匠候程之者多者

無之積ニ候、別而不至芸能ニ而も太底御用ニ相達候

程を具承届、尤、筆算之儀相達候哉、手跡之儀見届

候程ニ仕候而御格式相当之者可被申出候、乍然右

通之者ニ而も人体不宜、又者何之芸能茂無之者ハ養

子被仰付間敷候、向後右之通相心得、一涯入念相調

可被申出候、

一往外城養子御免之願申出候者、其節御免無之候所、

多年を経候而初而申出候体ニ願出候者、別而不宜事

候間、右式之有無可被問届候、後家并娘共よとして

願出候節、表方無案内之者ニ頼合候得者筋違之儀

も有之事候間、此段可被念入候事、

一表向ハ無高二而難統由申立候者之内茂内々者渡世相達者茂有之由候間、此段可被念入候事、

一家筋ニ付而者無拋親類中ニ相統可仕者偶乍有之、外城より致養子候得者合力をも致由ニ付而、類中ニも相応之者無之体ニ申出者も有之由候間、此段時々入念可被相改候事、

一外城養子御免被成候先例を以願申出候者有之候節、書面迄ニ而ハ同前ニ相心得、其者之实儀相替事も可有之候間、可被入念候事、

一座付士之者を表方士之養子願申出候ハ、右外城養子之格を以相調可被申出候、

右之通被相心得入念相調候上可遂披露候、初而地頭職被仰付候人者委細之儀不存、所役人共申口ニまかせ証文出儀も可有之候間、是又可被入念候、少茂疑敷儀於有之者時々可被得内意候、尤、此趣帳面ニ書留置候迄ニ而ハ後年吟味之不足も可有之候間、同役被仰付候節ハ時々此旨可被申伝候、若大形之儀於有之者と頭中可為越度候条、緩せ無之様ニ可被相心得候、諸地頭へ申渡置候書付為見合

相渡置候、以上、

(朱書)享保三戊  
七月

御家老座

諸地頭へ申渡候覚

一鹿兒島士、外城より養子願申出候儀ニ付而ハ被定置候旨も有之候、委細之段者と頭中江申渡置候、依之外城之者養子ニ願出候節、人柄左之趣を以相調候上証文出可申候、

一外城衆中養子取組候者、於外城衆中無別条者可差免候、家内札之内ニ者紛敷者可有之候間、委曲相糺不正之者ハ一切差免間敷候事、

一御城下士ニ罷成候而武芸・筆算其外芸能等相応ニ有之者ニ候ハ、可差免候、当分何之芸能も無之、衆並之御奉公も不得仕者者差免間敷候、乍然養子願候者ハ芸能之儀諸人師匠致候程之者多者無之積ニ候、別而不到芸能ニ而も太抵御用ニ相立候程を具承届、尤、筆算之儀被相達候哉、手跡之儀者見届、御格式相当之者ニ而候ハ、証文可出候、右之通之者ニ而も人体不宜又者素性不宜者ハ差免間敷候、

一兼々行跡不宜者者差免間敷候、

一最初 御城下江中宿仕候而下劣之家職仕居候者、鹿  
兒鳥養子ニ罷成企為致者茂為有之由候、此仕形別而  
不宜事候間、右体之者ハ差免間敷候、

一幼年より於鹿兒鳥生立、田舎之仕業難成候付、外城  
之儀者隱居之体罷成又者末子ニ成居候者、鹿兒鳥之  
御奉公ハ相応可相勤者、又者諸芸も相応ニ有之候而  
も右体之者ハ差免間敷候、乍然無抛類中ニ而血筋を  
以相統不致候而不叶子細茂有之候ハ、御沙汰次第可  
（被脱力）  
仰出候間、其訳を以可申出候、

一幼年より鹿兒鳥へ乍致中宿其外城之勤茂致、於鹿兒  
鳥も相応之御奉公者可相勤者、又者芸能茂有之諸人  
も存候程之者、田舎江立帰り候而ハ渡世之當難成者  
願出候ハ、可差免候、

一最前家来ニ成居候而も重役之人若党之格式ニ召仕候  
者、又者由緒有之者へ為見馴相付罷居候者ハ格別ニ  
候、身上致逼迫為稼致奉公、刀をも不差程之下劣之  
業ニ而致奉公候者、由緒申立、外城衆中ニ立帰付衆  
中等罷成候而も於御当地衆並之御奉公不相応ニ候間、

其身又者子とも迄も差免間敷候、

一外城衆中ニ御赦免被仰付候者を養子願出候共差免間  
敷候、三四代相過養子ニ願出候者、吟味之上於無紛  
者可差免候、

一前方養子之取組致候者子細有之、其節養子ニ不被仰  
付者多年を経候而初而養子ニ取組候趣ニ申出候者茂  
可有之候、右式之儀無之様可被入念候、

一向後養子ニ見合候者、何方衆中何某直子無別儀段其  
処五人組・嚶可為致証文、何某伯父・従弟類之者を  
養子願候時者、仮令高帳ニ載有之者ニ而茂其家より  
別れ衆中之職分無断絶為勤来者ニ候哉、外より養子  
坏成来候者ニ而者無之候哉之訳迄も証文可為書出候、  
右式之者二者紛敷者茂有之候間右証文を以猶相糺、  
無相違候ハ、証文可被出候、左候而、所役人証文茂  
取添、養父方江可被相渡候、所近所役人証文案紙左  
ニ相記候、

証文

何方衆中何某何男  
何某

右者、鹿兒鳥衆何某殿養子被成度由被申候故、以別

紙御暇之願申上候、

一右何某事、先祖代々何方衆中ニ而何某直子別条無御座

候、外城脱カより養子成来候者ニ而無御座候、鹿兒島衆之

養子被仰付候ハ、相応之御奉公者相勤申者ニ而候、

兼而行跡茂宜者御座候、

一右之者最初 御城下へ致中宿、下劣之家職為仕儀無

御座候、當時何方へも中宿不仕候、何方江中宿仕居

候、

一最前家来ニ成居、至而下輩之仕業有之、其身之由緒

を以外城衆中婦參為被仰付者ニ而無御座候、尤、其

身之代ニ御赦免被仰付者ニ而無之候、且又前方鹿兒

島衆之養子ニ取組御沙汰之上不相濟者ニ而無御座候、

右之通少も別条無御座候段、私共慥ニ存罷居候、

若相違之儀御座候ハ、私共ニ何様ニも曲事可被仰

付候、為其如此御座候、以上、

月日

近所

何某

右同

何某

与中

何某

右同

何某

何某

何某

右之趣を以惣而紛敷無之様入念相調可差免候、此

段所曖中へも申聞、役替之節時々次渡、後年猥ニ

無之様ニ堅可被申渡置候、若大形之儀於有之者地

頭并曖役可為越度候、以上、

(朱書)「享保三戊」  
七月

与頭中へ申渡覚

一外城より被召出候者、又者外城衆中を鹿兒島士之養

子被仰付、又ハ士ニ御赦免等被仰付候者、嫡子并未

子迄其親へ被相付度旨願出被差免事候、右者之儀者

高奉行座系図帳又者与所帳面ニも記付有之事候、

一右、嫡子并未子初而 御目見願書物ニ元名又ハ改度

と存候名を記差出事候、然共初而之 御目見不相濟

者者心次第名替可致旨御格式被定置候間、名替願出

不及候、右之通候間可致名替と存候者ハ願書物ニ可

改名を相記可申候、

一右之次第候得ハ最前申出置候名と引合候時不致府合

候間、右願書物ニ於与所本名を張紙ニ記為見合可被

差出候、右張紙之趣を以致首尾候御用人より可承座々

江不洩様ニ可被申渡候、

右之通、向後可被相心得候、此旨可申渡候、以上、

但、此趣御用人江も申渡置候、

（朱書）享保四亥  
三月

一外城養子之儀者養父格式之通ニ者不被仰付、一段被

相下御格式之处ニ、考違ニ而鎌田嘉左衛門ハ御太刀

進上為仕、吉田喜兵衛・山鹿越右衛門ハ小番ニ召入

候、此段不吟味故ニ候間、嘉左衛門事者向後御太刀

進上之願仕間敷候、喜兵衛・越右衛門事者小番相除

候而大番可相勤候、不吟味故右之件候間、右三人江

可被申聞置候、以上、

（朱書）享保六丑  
九月廿五日

一座付士を表方士之養子ニ願出候節者、外城養子之格

を以相調可申出旨先年被仰渡置候、右御格式を以相

調候得者申出様ニ付而難致事も有之候故、此節左之

通被相定候、

一座付士を表方士之養子願出候節者養子ニ罷成候者之

行跡又者何方之座付ニ何頃御赦免被仰付候訳、且又

筆算等茂相応ニ有之、其外一往ニ而も下輩之仕業不

仕儀共外城養子之格ニ相札、以其趣近所并其座支配

之肝煎証文ニ奉行承届無別条旨之添書証文養子方江

相渡、其節外城養子願申出候格式ニ致、組ニ相付可

申出候、

一養子ニ成候者之実父方より、私<sup>二</sup>男何左衛門事、表

方士何左衛門養子内々申談候ニ付而、其座御暇之願

申上候处ニ何某御取次ニ而願之通御暇被下候条、御

法之通願可申出旨支配頭より被仰渡候、依之御法之

通証文取揃、何左衛門方江遣候間、願之通被仰付度

旨組ニ可申出候、

（朱書）享保九辰  
二月 右之通、与頭其外可承座々江可申渡候、以上、

（伊集院久矩  
藏人）

一 木原戸右衛門

右、座付士橋口渡兵衛ニ男橋口仁左衛門養子ニ願出

候、座付士養子ニ願出候節ハ外城養子之格を以調候

様被仰渡置候、然者戸右衛門事、其身代別立為申者

候得者、右之願難取揚候、然共右之訳難決候旨段々

内意を以被申出候、座付士養子願出候儀、外城養子

願之格被仰付事候条、戸右衛門事、其身代別立候者

候得者、座付士之者養子ニ者御免不被成筈ニ候間、

左様可被相心得候、此段可申渡候、以上、

(朱書)享保九辰  
十月

(鳥津久春)  
大藏

一家督之者存生ニ而罷在、家相統之直子無之、御当地

士之内ニも養子罷成者無之、家相禿候様ニ者難申出、

外城養子願出候者御免之段、承知仕候日より月数三

ヶ月より内ニ養子之人柄難申出訳も候ハ、其趣を

以三ヶ月より内月延願可申出候、左候ハ、訳ニより

月延可差免候、

右之通、此節被相定候間承知仕、聊大形致間敷候、

此旨組中江可被申渡者也、

(朱書)享保十巳

五月廿三日

御家老座印

六与

与頭

(行間朱書)

「本文之通被仰渡置、月数を以跡職延之願申出来候得

共、月数ニ而ハ紛敷有之候条、向後日数を以願申出

候様享保十七子十二月中務殿(鳥津久春)より被仰渡候、委細ハ

跡職之部ニ有之、」

一御家中大身小身共、御奉公茂勤病身又者老体ニ而隱

居之願も不申出罷居候者も多有之、頃日為御知之上

願申出候者共多候、御奉公茂不仕老人罷成、右之願

不申出儀ハ不氣付と相見得候、致隠居候而茂其分限

ニより輕ク可致処、小身之者ニも家督之厄害ニ成、

隠居料多取候者茂有之候、(吉野) 総州様御隠居被遊候御

様子を輕キ者迄も了簡仕、諸事致輕候様ニ御沙汰も

有之候、

右屹不及申渡ニ者与中江寄々可致通達候、已上、

(朱書)享保十  
九月十日

(伊集院久矩)  
藏人

一継目跡職願書物高・屋敷有無之儀書物之内ニ書出候、

与頭次書ニも高・屋敷有無之儀承届候由、継書書加

候様ニ今日大藏殿(鳥津久春)より樺山権左衛門御取次ニ而被仰

渡候、以上、

（朱書）正徳六年申九月十二日  
右之通、与頭島津市太夫致承知候事、

（四〇三頁文書）「一川上長右衛門より」に同じ、本文略

（朱書）享保十六年

一亥十一月廿二日与頭御用之旨申来、縫殿罷出候処ニ

（島津久家）

（純房）

本殿より谷山角太夫御取次を以被仰聞候ハ、此頃御

番入延引、又ハ家督之御礼延引、御暇年月筈合首尾

可申出候処ニ無其儀延引、右体之儀多々有之候、此

儀御番方之儀ハ御番頭ニも時々氣を付、御番入又者

御暇筈合之儀諸御礼等可申出儀共如何罷在候哉之旨

御尋有之、依之与頭中申談御答申上候者、御番入之

儀ハ、大番ハ当分勤方有之人ハ継目・家督仕御番入

願出候而も取揚申出不及之旨与帳前書ニも有之候間、

御礼事延引之儀ハ与頭方ニも人別ニ御暇之筈合又ハ

家督・継目等之儀存不申候付、時々氣を付可申様差

当り無御座候年々小普請銀改之節勤方有無之訳又ハ

御暇等之儀迄相知申事候、別ニ時々氣を付候筋分而

難仕候通角太夫御取次を以申出候、同廿九日角太夫

を以被仰渡候者、右申出之次第二候得ハ何れ御暇・

御番入等之勤方ハ、小普請銀改之節可相知事候旨

被聞召、達通此段与頭方へも申聞置候様ニとて御沙

汰ニ而候、右次第縫殿致承知、与頭中江茂申達置候、

一 中馬音泰院此節継目被仰付候ニ付、継目之御礼願与

所江申出、養仙院と名替之願寺社方江相付申出候故、

本殿江遂披露候所、右願之儀ハ継目之御礼願同前ニ

申出筈ニ而者無之哉之旨御糺有之候ニ付、寺社方帳

内見合候得共継目之御礼願申出候節名替迄申出候儀

不相知候段申出、左候而、右名替願之儀者 御目見

願と一所ニ与力江相付願出候ハ、何様可有之哉由申

出候処ニ弥其通可有之候、左候而、右之通与所へ願

出候段寺社方へも可被聞召置旨申出、被聞召置候段

願書之内ニ書加申出可然由被仰聞、一学殿へも可申

達置由被仰候ニ付、一学殿へも申達候得者、右通願

之儀ハ与頭中へも可申達置旨被仰聞、与頭中へも申

達候、

（朱書）享保十一年

五月十三日

一外城養子申出候節、家筋二付而ハ無摺親類中ニ相統可仕者偶乍有之、外城より致養子候得ハ合力をもいたす由ニ付而、類中ニも相応之者無之体申出者茂有之由候間、此段時々入念可相改旨先年被仰渡置候、右之通候得者、以後親類有之候者外城養子申出節ハ、取揚可申事候哉吟味仕可申出旨被仰渡承知仕候、与頭中申談候者右之通被仰渡置候得者、親類有之候者外城養子願申出候節ハ取揚不申筈と相見得申候、然共極貧者ニ而養父介抱仕、往々家相統仕候儀難成ニ付而養子取組候相談相調不申、無是非外城養子之願申出候者者と頭致吟味候上、別儀無之候得ハ遂披露申事ニ御座候、且又自分勝手迄を存外城養子之願申出候者ハ取揚不申筋ニ此内仕来申候、右之通無之候得ハ、極貧者共ハ家相統難成筈ニ御座候間、跡々之通被仰付置度儀と私共申談候、乍此上何分ニも御差

（朱書）享保十七子  
三月十五日

六字  
与頭

一児玉四郎兵衛より三原藤七事、賀養子御免被仰付被

下度旨願申出、六番与頭元文元辰八月十六日鎌田源左衛門御取次を以御内意ニ而得御差図候者、藤七事者三原九兵衛弟ニ而其身代ニ別立罷居候、四郎兵衛事者小番ニ而候得ハ、大番之家より小番之家ニ他家より別立居候者養子ニ罷成候儀先例見合候所、川上長右衛門事ハ小番、坂元彦右衛門事ハ大番、血筋之訳を以養子之願申出趣有之、享保十二未十一月四日一番与頭より御内意ニ而得御差図候処、血筋と乍申宜方ニ者不被仰付御格之由被仰渡置候、然共四郎兵衛事、親類中ニも養子ニ罷成者茂無御座段申出候、藤七事ハ九兵衛弟ニ而其身代別立居候得者、長右衛門願とハ訳も相替為申儀ニ而、右之御取分も可有之哉、我々共より四郎兵衛願書差返候儀難致段得御差

図候所、玄蕃殿被聞召、藤七事ハ其身代ニ別立罷居候得ハ、右之御取分ニ而御吟味も可有之候間、致次書差出候様被仰渡、六番与頭北郷四郎致承知候、尤、御内意申出候趣者元文元辰八月廿二日六番与日帳留

置候事、

（朱書）元文元辰  
八月廿二日

〔行間朱書〕  
「本文ニ付川上長右衛門例書左ニ相記、

一川上長右衛門より坂元彦右衛門養子ニ仕度旨願申出候ニ付而、一番与頭より御内意ニ而得御差図候処、

月番御家老（鳥津久純）大藏殿より讚良善助御取次ニ而被仰渡候者、川上長右衛門養子願之儀ニ付内意申出候得共、

此儀ハ御取揚難被成候間、右之趣可申聞由ニ而内意書付被相返候、左候而、御取揚難被成訳ハ彦右衛門

事、長右衛門家筋之者之儀候得者願之通ニも可被仰付事候得共、長右衛門事ハ小番家格、彦右衛門江者

大番家格ニ而候得共、血筋と者乍申他家之事ニ候得者、宜方ニ者不被仰付候御格ニ候間不被取揚候、此

段ハ已後与頭中心得ニ可相成候間、取次より為申聞可置旨善助より鎌田（政直）太郎右衛門承候事、

享保十二年未十一月十九日」

写

一鹿兒島士養子ニ罷成候者無之候ニ付外城養子願申出者、先祖代差立候勤方仕候者者勿論、輕キ勤方ニ而も代々御奉公勤来候者、又者勤方ハ無之候得共代々家相統

致来候者外城養子願出候ハ、可被取揚候、

一差而故も無之別立候者、外城養子之願四代目より被取揚、三代迄ハ不被取揚候、右体之者願申出不被取

揚者江外城養子者不被仰付候間、何分ニも片付申出候様可被申渡候、

一近代別立候者ニ而も外城衆中又者家中者之内無抛由緒有之者ハ、其訳を以養子被願出候儀ハ格（別カ）式候間、

有来候通可有之候、  
右之通被仰付候条与頭へ申出、御記録奉行へも可

申渡置候、

（朱書）元文二巳  
三月

（鳥津久貞）  
主殿

写

一外城より鹿兒島士養子罷成者、向後之儀外城ニ而持高致所持、直ニ其高持出候者迄を御免可被仰付候、

無高二而も無抛血筋又者為差立訳有之、願之依趣者被仰付儀も可有之候、

右之通、向後被仰付候条表方へ致通達、御側方・御勝手方へハ写を以可相達候、以上、

(朱書)「元文二巳」  
五月

(島津久眞)  
主殿

写

組頭江

一外城養子願申出候者、先外城養子之儀願出蒙御免、  
其後人柄願申出御法候得共、向後兩度ニ不及申出ニ、  
内々養子罷成者承立候上ニ而願之趣、御当地士之内  
養子ニ罷成候者無御座付、外城養子被仰付度候、於  
御免者何方外城何某願ニ存候、高何ほと持来候訳一  
紙書記願書可差出候、外城より高不持来者者養子御  
免不被成候、乍然無抛由緒有之者ハ被仰付者も可有  
之旨此内被仰渡置候、右体之者願出候節も是又由緒  
之訳委細同前可書出候、

右之通、此節被相定候間、此旨与中へ被申渡候様  
可申渡候、以上、

(朱書)「元文二巳」  
十一月

(梅山久初)  
主計

一与中之士嫡子相果候節者、二男嫡子成之願申上被仰  
付事候、二男三男之儀右ニ準届、此跡より差免来候、

且又二男相果又者養子ニ候者別立候者有之候節者、  
其跡ニ二男成三男成願申出次第是又差免来候、然共  
別立候者ハ本家之ニ男之儀ハ不相通事候得者、相果  
候者養子ニ参候者と同前ニ男上リ不差免筈と申談候、  
此跡より別立候者之儀相果候者他家ニ養子ニ参候者  
と同様ニ相考差免来候段ハ今更存当リ無調法之至候、  
依之別立候者之儀ハ此節我々申談候通被仰付度候、  
且又右同断之者此跡より二男成三男成差免置候者之  
儀者其分ニ而召置可申哉、又々本々之通ニも可申渡  
候哉、何分ニも得御差図申候、以上、

(朱書)「元文三年」  
五月廿三日

六字  
与頭

(行間朱書)  
「一」本文吟味之通可有之候、此跡ニ男別立候者有之、其  
跡ニ男上リ被申付置候者ハ本々之通可被申付置候、  
以後共左様ニ心得可有之候、此旨可申渡候、以上、

五月

大藏」

(行間朱書)  
「一」志岐藤左衛門差次之弟他家へ養子ニ遣、其次之弟藤

右衛門より男上リ之願申出候付、当座見合候得共先  
例も無之故、御記録奉行安藤左平次申談、嫡子相果  
二男嫡子成之願申上御免有之候得ハ、二男三男男上

り之儀願申出候得ハ与頭承届差免事候故、右二準シ  
藤右衛門弟男上り願之通差免候、尤、与帳調方高奉  
行方へハ早晚之通致問合候、後年為見合記置也、

亥八月十三日 義岡佐平太」

写

組頭江

一 小番家格之者へ血筋ニ而茂大番之者他家より養子ニ  
参り候願者取揚間敷旨、先年申渡置候得共、向後左  
之通可被相心得候、

一 小番筋之者養子且又聳養子願之儀、親類之内ニ無之、  
他家大番二男三男家内ニ罷居候者を願出候者、

一 右同断養子願、養父を致介抱候養子ニ而無之候得共  
難成者、親類之内ニ相応之者有之候得共致介抱貯無  
之者ニ候ハ、他家之者ニ而も致介抱者を養子ニ願  
出候儀、大番・小番無差別候、

一 其身代別立居候者、依願養子ニ参候者、養父方江持  
高等も持越、自分跡目ハ不被召立様願出候者、又者  
養子ニ参り自分跡目ハ致養子度旨申出候者、

右之通、願ハ致継書被差出候様可申渡候、  
（朱書）元文四未  
十月  
（島津久家）  
空

一 二番組有馬休右衛門より小根占衆中大迫正藏高老石  
持越候付、外城養子取組度旨元文五申七月願申出、  
組頭継書を以申出候処、同八月織部殿より肥後平左  
衛門取次ニ而被仰渡候者、高老石ニ而ハ縦令迄之様  
有之願難取揚候由ニ而書物被相返、二番与頭島津八  
郎左衛門致承知候事、

六与  
与頭江

一 家督・継目・養子成・別立又者初而高持成・高上り  
等之願申出候者有之候節、其当人何その役儀相勤候  
儀有之願も無之役儀被差免候儀ハ無之哉之旨与頭被  
承届、若右体之者有之候ハ、以前何役相勤候御  
免之願も不申上候得共被差免候段、別紙ニ書付可被  
差出候、右体之儀無之者茂其段書付可差出候、此儀  
吃申渡儀ニ而ハ無之、右ニ付而者追而何分ニも被仰  
渡儀も可有之候、先当分与頭右之心得被致候様有之

可然と申談、内意申達候、以上、

(朱書)享保四亥

五月

(島津久当)  
将監

(行間朱書)  
「一本行二付而将監殿より高橋七郎右衛門御取次二而口

達二而承候者、本行之通相願候節、首尾不宜役儀被

召免人ハ相調有之儀二候故、右人名書御家老座名越

(恒渡)  
右膳方・大御目付座へハ相知有之候得とも、与頭方

へハ不相知事候二付、調無之願書被差出候、然者右

名書被相渡、於与所も可相調筋二有之度被思召候付、

名書可被渡置候得共、秘密之事候故不達 貴聞候得

ハ難被成候付、御下向之砌石之訳被達 貴聞何分二

も可相究、然とも其内右調落申事二候間、何分と相

究内仮二本行之通内々被仰達置事候条、此段屹被仰

渡筋不取違様可相心得旨、月番与頭祿寝仙十郎・新

納左京・島津又七致承知候事、」

(三二九頁文書「一親隠居」に同じ、本文略)

何野何左衛門親隠居  
本名何左衛門事

何某

右者、隠居被仰付候付有髮剃髪気分次第為仕度旨願

申出、願之通申渡、且又名替之儀茂申出候付右之通

申渡候、何某事、御役為相勤者候故、此段首尾申出

候、以上、

月日

月番  
与頭

一四番組伊地知新右衛門外城養子之願申出候節、先例

等継書二相記願人江相渡候処、(島津久純)大藏殿より右体之訴

訟申出候節ハ先例等書記願人江相渡方不宜候、以後

一通之書二而右通所二而之持高何程持出外城養子之

願申出候付、何そ支無之候間御吟味次第被仰付度旨

致継書願人江可相渡旨、三崎平太取次二而義岡佐平

太致承知、其外之願も一通之継書二而先例之御尋有

之候節者組頭より直二申出答候事、

寛保三年亥十一月十日

丸田平左衛門跡本田弥右衛門

親類

智養(子脱力)、違変之願左之通被定置候

一 養子罷成致家督候者不縁二付違変之儀、養父方家断絶無構致違変来候得共、向後者不致違変候而不叶

有之候ハ、跡相統之者を見立其跡仕居置、其身ハ

隠居之願可申出候、其後依申分本家ニ立帰候様ニも

可被仰付候旨被仰出、其節右之旨申渡置候、弥其通

ニ相心得可被申出候、養子取組之儀者互ニ納得之上

親子取結事候処ニ為差儀も無之、違変不致候而相濟

程之儀ニも及違変、又者養子相成候者諸事之憤無之

違変致儀ニも有之由候、右体之事ニ而致違変候儀ハ

不義理之事候間、無拗諷有之兎角不致違変候而不叶

諷有之候ハ、親類中へも得と申談、内意候ハ、熟談

之上申出儀候ハ、取揚可申候、内々ハ不義理之筋ニ

而、表向ハ不縁ニ有之致違変杯と申出儀共有之候而

ハ不叶事、

右之通被仰渡置候ニ付而ハ、此節之願不相心之儀

ニ候条、願難取揚候間書物相返候、以上、

五月三日

与頭 六与

一 丸田弥右衛門事、本田利右衛門二男ニ而丸田平左衛

門跡躰養子被仰付置、不縁ニ付違変之願申出候趣御

内意ニ而申出候訳、元文三年午九月五日六番組日帳ニ委細留置也、

一 御城下士直子無之由緒之訳を以外城衆中并座付士を

養子願出候者、向後父方從弟之続迄を養子御免可被

仰付候、且又所高直ニ持出候者有来通可被成御免、

銀子等持越養父方借銀相弁養子取組度由願出候而も

被取揚間敷候、

一 与中之諸士跡職願、直子無之養子承立候内延之願申

出候節、高・屋敷所持之者又者無高・無屋敷之者段々

月限被究置三度迄ハ被召延、其上月延申出候而も何

そ詮無之者者願不被取揚、然其家之功又者其身之依

訳者吟味次第被召延儀も候処、近年ハ及四度延之願

申出候者多々有之被定置候、詮無之候間近代別立候

類輕キ手筋之者者四度目月延之願者向後一切被取揚

間敷候、乍然格別之訳有之者者御見合を以可被延置

候、

右之通、此節被相究候条、可承御役々江申渡、与

中へも被申渡候様与頭へ可申渡候、

(朱書)宝曆十三本  
八月

(烏津八金)  
左中

写

一御城下土直子無之者外城養子之願、外城二而高致所持直二其高持出候者迄を被成御免儀候、然共右高永損地又ハ持留等二而無納之高持越候而も仮令迄二而詮無之候間、右体之高持出者向後御免被成間敷候、

右之通被仰付候条、諸外城地頭、明所之外城八月

番者月番御用人江可被申渡旨可申渡候、

(朱書)宝曆十三未)

八月

(島津久金)

左中

写

一御城下土末子之内より依願座付士養子被仰付置候者者格式相下候付養子難遂訊有之、致違変候者者向後御城下土婦參不被仰付、本家之家内二被入置、本何方座付士何某先養子之帳面等記置、以後座付士同前之御奉公仕候儀又ハ座付士願出候儀ハ勝手次第可有之候、

右之通被相定候条、此旨組中并支配有之面々者支

配中へ可被申渡旨御勘定奉行へ可申渡候、

(朱書)明和二酉

十月

(島津久金)

仲

一三番組田上柰左衛門七拾余才罷成候付隠居、嫡孫田

上柰太郎へ家督被仰付被下度旨願申出候処、嫡子相果候儀不相知候付願書物嫡子相果候訳相記可申出旨被仰渡候、尤、向後右体之願申出候節者前条之通被

相心得候様明和四年亥三月廿三日帶刀殿より小林中

(小松清彦)

太兵衛御取次を以被仰渡、比志鳥要人致承知候事、

一一番組伊東固右衛門相果、繼目嫡子伊東金右衛門被仰付度旨親類共より申出候、然処金右衛門事、片輪

者二而初而之 御目見仕候節ハ進上物迄差上、名代を以相濟候筋被仰付候旨親類共次書二有之候二付先

例見合候処、右通片輪者之訳書かへ願出候先例不相

見得候、片輪長病二而繼目被仰付御礼申上候節ハ、

名代を以相濟候儀ハ多々先例有之候、依之与頭次書

常式之通二而願人より月番御用人江差出候処二、式

部殿より金右衛門片輪之次第相札可申出候、島津助

之丞より委ク書付を以申出候処、又々式部殿より与

(小松清彦)

頭吟味書を以可差出由書物被相下、助之丞致承知似

寄候先例を以致吟味書、助之丞より月番御用人江差

出候所、式部殿より以後右体片輪者繼目・家督等之

儀願申出候節者、此節之通可致首尾旨致承知候、委細者宝曆六年子十二月廿日壹番与訴訟留二有之、

写

与頭江

一 養子違變願又ハ縁与離別願申出候節、今一往致異見難遂段承届候上二而願申出筈候条、向後一度願出候

節之書物取揚差出候様二被仰付候、

(朱書)延享五辰  
二月

(島津久甫)  
左衛門

(平田正輔)  
掃部

一 石原碩斎・野崎乗助事、其身代別立直子無之、右両

人共妻之甥座付士之内養子之願申出候処御免被仰付

右願之儀ハ御格式相当不致候得共、訳有之為被仰付

儀候間、余例二者不相成候間、以後右同様之願申出

候而も先例等二書載候儀致間敷旨、宝曆二年申七月

十日(島津久起)將監殿より口達を以六番与頭新納四郎致承知候、

(朱書)宝曆二申)  
八月十日

二 一番組宮里小兵衛、嫡家宮里甚平繼目養子願出、小

兵衛家跡之儀者嫡子残置相続為仕度旨一紙二申出、

早晚之通与頭輿書を以差出候所、帶刀殿より取次口

達相良弥一兵衛を以、向後右体願ハ養子成御免之後

嫡子江相続之儀願出候様被仰渡、比志島要人致承知

候、委細ハ二番之訴訟留二有之、

(朱書)明和四亥  
六月廿日

一 組中之諸士養子又ハ繼目養子家跡罷成と存候者、又

者子共之内何男二而も跡二召残養子可罷成と存候者、

右子共初而之 御目見相濟候子共之儀ハ両条之旨趣

養子願之内二相込願可申出候、右子共初而之 御目

見不相濟者之儀者願之内相込不及候、養子願之儀二

付

御目見相濟候子共有之候者、其身迄之養子願迄申出

候而ハ首尾違二候間、於与所氣を付首尾違無之様可

致旨、式部殿より島津小平太致承知、為見合記置也、

(朱書)宝曆八寅)  
六月

(行間朱書)  
一 本行法元次郎右衛門事、嫡家法元七右衛門繼目養子

願申出候節、弟法元正七儀成行之儀不申出置候付、本行之旨趣を以遂披露候哉、正七事、養子方江列越儀候ハ、御断可及候得共、次郎右衛門家跡養子願申出候ニ付而ハ御断不及旨致承知候、以後朱書を以首尾いたし候様被仰渡候、委細四番与日帳ニ有之、

一亡鮫島源右衛門賀養子倉野直右衛門、此節致違変候ニ付、源右衛門弟鮫島寿悦事、右源右衛門繼目養子御免被仰付被下度旨被仰付置候得ハ、致違変候而も寿悦事直右衛門後嗣ニ願可申出事ニ而ハ無之候哉、致吟味可申出旨被仰渡、左之通御座候、

写

養子家督之者違変不致候而不叶諷有之候節ハ、跡相続之者を見立其跡江仕立置、其者ハ隱居之願可申出候、以後依申分本家へ立帰候様ニも可被仰付旨、正徳三年被仰渡置候得共、向後養子難遂者於有之ハ、双方親類熟談之上致異見、何れ之筋ニも違変不致候而不叶諷有之節ハ其身隱居之願ニ不及、違変於御免者跡養子之儀ハ親類見合、追而可願出趣之書物を以

可申出候、

余ヶ条略、

右之通、表方へ致通達、御側方・御勝手方へハ写を以可相達候、

延享五年辰四月

(島津久正)  
大藏

右之通被仰渡置候、然ニ延享五年以来養子違変之願御格式被相改候、右ニ付而者直右衛門事、賀養子違変御免被仰付候、

一往家督仕居候而も達 貴聞違変御免被仰付、其家立去候付家督者被相除筈ニ候、たとへハ系図致所持者ハ家督之圈消除申外無御座候、左候而、又々繼目養子ニ罷成候者之伝記之内ニ其諷書記可申筈ニ御座候、右次第を以ハ直右衛門家跡養子ニハ難願出、直ニ寿悦願申出筈ニ御座候、尤、延享五年以後右体願之先例多々御座候間、寿悦事、願之通繼目養子御免可被仰付儀と吟味仕候、且又依願嫡子相続或本家へ立帰候者ハ、先例之通其者之家跡養子と願申出事御座候、以上、

申聞十二月三日

御記録方権古貞良  
郡山主右衛門

川上（親敷）大六

御記録方添役（遜志）  
郡山次郎左衛門

御記録奉行（有雄）  
山田喜三右衛門

（清純）  
吉田用右衛門

右之通、御記録奉行申出之通以後致首尾候様、式

部殿より島津十太右衛門致承知記置也、

（朱書）明和元  
申閏十二月十三日

（朱書）  
二三 跡職并別立等之事

付り、跡職御断等之事

一 智養子ニ而も外城養子ニ而も継目之願申出候者ハ、

養父相果候年月書出候様可被申渡候、継目養子被仰

付候者ハ養父相果候依年月段々服忌を請ル事候故、

養子被仰付候段申渡候節、服忌を請候日数迄申渡筈

ニ候、依之養父相果候年月を書出候様ニ申渡置事候

間、時々氣を付養父相果候年月書出不落様ニ可仕候、

右之通、与頭中へ可申渡置候、已上、

（朱書）正徳六申  
正月十九日

一 諸士ニ男三男家ニ而も三代茂別立罷在候者、嫡家又

者ニ男家跡職無之節、自分之家を禿致相統候儀有之

候、此儀家相統之為ニ者尤之儀候得共、代々別立罷

在候儀を禿候儀ハ如何之事候条、向後右体之者ハ被

仰付間敷候、其身之代別立候者、又者子孫之内ニ男

三男有之者、又ハ一類之内より致相統者有之候ハ、

其者を跡職願可申候、若右類之者茂無之、家及断絶

事候ハ、代々別立罷在候者ニ而も跡相統不致候而

不叶訳も有之候ハ、其身之跡を仕居可申候間、相

統御免被下度旨願可申出候、尤、外城養子ニ而も願

可申と存候者ハ是又願可申出候、依其趣御沙汰次第

可被仰付候、

一 組中之者死人有之節ハ早速申出、与頭可承置候、家

督之者相果候時者忌明次第法様之書付を以継目之願

可申出候、何そ子細も無之致延引候ハ、名跡被相立

間敷候条、時々可致沙汰候、急ニ跡職之儀願難申出

訳相立候儀有之者ハ、向後月数十二ヶ月を限りニ可

申出候、若無扱子細も有之、右月数之内跡職之儀難

申出者有之、延引仕候訳候ハ、其趣無油断可申出候、

勿論以御見合跡職被仰付候者者格別ニ候、

一直子無之、親類中ニも跡相統之者無之、外城養子之

願をも申出答之者も右同断ニ可相心得候、急ニ相究

難申出訳も候ハ、依其趣御沙汰之上御取分も可有

之候、乍此上致大形、御断をも不申延引いたし候者

於有之ハ、名跡被相立間敷候、

右之通、此節被相定候条得其意、与中へも可被申

渡者也、

(朱書「享保三戊」)  
三月二日

御家老座印

六与  
与頭

(行間朱書)

「一与中之諸士家督之者相果跡相統之者無之、組帳ニ何

某跡と記置いまた跡職之願をも不申出者多々有之候、

右之者とも跡職願申出事候ハ、来ル五月限ニ相究

可申出候、勿論跡相禿候而も不苦者有之候ハ、其

訳右月限ニ可申出候、

一右之通親類中ニも跡相統之者無之、外城養子をも可

致旨存候者、又ハ蒙御免人柄等見合ニ付而不致延引

候而不叶訳も有之候者、何月限ニ相究願可申出候通、  
是又五月限ニ可申出候、

右之通、与帳跡付ニ而有之候者共之親類中へ可申

渡候、

一以後共跡職願申出候者之儀、十二ヶ月限ニ申出候様

御触流を以此節被仰渡候、此跡付之面々ニハ無御構

向後之事候間、左様可被相心得將監殿被仰候、」

一不別立候而相果候者之子別立願出候節、高并屋敷ニ

而も壹ヶ所致付属、別立御奉公為仕度由願出候者者

願之通可被仰付候、無高・無屋敷ニ而別立迄を願出

候者ハ御免被成間敷候、

一親類共より養子罷成者無之候間、跡相禿可申由申出

候者ハ願之通可被仰付候、

一不別立罷居候者訳有之一世御奉公不被仰付者、至子

孫候而も御奉公不被仰付候、尤、別立願出候而も御

奉公被仰付間敷候、乍然子孫之依器量者御吟味之上

別立并御奉公可被仰付候、

右之通被 仰出候間被得其意、入念相調可被遂披

露候、少も疑敷儀有之候ハ、時々可被得内意候、

以上、

（朱書）「享保三戊」  
七月

（種子島久基）  
彈正

一家督之者相果、繼目之願別而及延引申出候事有之候、

公義之御法、二而者時刻致延引候得者不相立事候処、

いつ願申出候而も相濟候と存延引仕候、且又繼目之

儀者其子共可被仰付哉、又者他之者へ相統可被仰付

哉 思召次第之儀候所、嫡子之儀者おのつから家相

続仕筈と存罷居候儀是又心得違候、依之左之通被相

定候、

〔行間朱書〕一与中之面々家督之人相果、嫡子ニ遺言書親類宛書仕

置候付、親類より五日中ニ跡職願之儀、右遺言書ニ

次書を以申出筈候付、右親類忌掛ニ而も本人さへ乍

忌中被仰付被下度由願出候儀御免之事候条、親類忌

中ニ而も次書仕候儀ハ被差免候条、次書仕候而差出

候節ハ、忌中ニ候得者名代ニ而可差出候由与頭中江

将監殿より被仰渡候付、北郷宗次郎・平田新左衛門

へ申渡候事、

但、右親類忌中ニ致次書候ニ付而ハ不成合之儀候

故、善助より御尋事申上趣、就夫与頭よりも被申

出訊有之、将監殿・隼人殿御相談之上右通被仰渡

候事、

子二月五日

讀良善助

一与中之者死人有之候節ハ与所へ早速申出事候間可承

置候、家督之者相果、直子へ繼目遺言書（薩摩藩法令史料集より補）仕置候

ハ、相果候段与所へ申出候節、遺言書△追付差上

可申旨をも可申出置候、左候而、宛書之親類共より

五日中ニ無延引与所江法様之通遺言書可差出候、直

子（薩摩藩法令史料集より補）共ノ内、繼目願ノ遺言書差出候儀ハ忌中△之考

可仕候得共、当人忌中ニ而も遺言書ハ親類共より申

出事候故御構無之候、何そ子細も無之繼目之願致延

引候ハ、名跡被相立間敷候、尤、御見合を以被仰付、

繼目之儀ハ格別候事、

〔行間朱書〕一組頭高津市太夫殿より御尋被申出候ハ、組中家督之

者相果、跡職願五日中ニ可申出旨被仰渡置候処、何

分訳も無之五日過候而も願書差出候も有之候ニ付、

其訳相糺候得ハ又二三日相滞申儀候、然者向後右体

之節ハ先次書ハ仕、右延引之段ハ跡達而相札、申出筋二も可仕哉之由披露李殿被聞召、内記殿へも御相談之上右体之節被相札候而被致次書候得ハ猶以相滞咎候条、次書之儀早束被致右延引候儀ハ別立而相札、其訳可被申出候由被仰渡候二付、市太夫殿へ申達候事、

二月六日

取次  
讚良善助

一 幼少又者不時相果候者遺言書無之咎候間、相果候段組所へ申出候節、遺言書無之候継目之儀者相究、追而可申出旨をも与所へ親類共より其節可申出置候、左候而、直子又ハ親類共之内相応之者相究、継目之儀親類共より可申出候事、

一 遺言書又ハ遺言書無之跡職願之儀、五日中難申出儀二而候ハ、何様之訳二而差出候儀支有之候段有筋与頭江無延引可申出候、其趣次第二御取分も可有之候、

一 直子無之、親類中又者鹿兒島士二も継目願可申出相応之者無之、家相禿候様二ハ難申出候ハ、勿論御格式之通外城養子之願可申出候、左候而、御免之後

急二人柄相究候事難成訳も候ハ、何ヶ月程被差延度旨於申出ハ、依其訳何分二も可被仰渡候事、

一 長々病氣有之候者相果、遺言書をも不致置、死後二親類共より継目之願申出候而も其身油断之儀候条、御取揚有之間敷候、勿論御見合を以可被仰付儀者格別候事、

一家相統之儀者第一之事候処二、願申出候儀致延引、縁与之儀者若年之者二早ク取組不急儀を折角申出候も有之候、縁与之儀屹申出人又ハ願申出不及人、幼(稚カ)雅之内より内々二而致契約置候者有之候、縁与はやく取組候儀不入事候、且又妻致離別候者多々有之不宜候間、向後左様二無之様二と寄々可申通旨先年被仰渡候、猶以右之趣相守可申候、家二付訳有之候敷、又ハ無拋間柄二而仮内々之事申合ハ仕候共願相立候儀者無用可仕候、尤、致縁与婚札をも相整家相統可仕程之者縁与之儀者御法様之通願可相立候、勿論右式訳も無之、若年之者江縁与之願申出間敷候事、

右之通、御格式被相定候間、無緩疎相守候様与中之面々江堅被申渡置、尤、右之願申出候節ハ於与

所も猶無間違様可被致沙汰者也、

正月廿三日

御家老座印

〔右之通御格式被相定候間、無緩疎相守候様支配中

へ堅可被申渡置候者也、

子三月廿四日

〔行間朱書〕右二付而左殿より今日被仰渡候ハ、繼目并繼目養

子願等之御格式被相定候趣、先頃申渡置候書付之内相直候所書改相渡候間得其意、又々与中へ不洩様可被申渡候、

右之通、与頭へ可申渡候由被仰渡候二付、与頭島

津小平太江相渡候事、

但、大御目付へハ朱書之通、

一直子無之、親類又ハ鹿兒島士ニも養子可成相応之者無之、家相禿候儀ハ難成候ハ、御格式之通外城養子之願可申出候、右願御免之後急二人柄難相究訊も有之候ハ、月延之願可申出、忝其謂何分ニも可被仰渡候事、

右之通、与帳前書ニ被仰渡置候処二月延之願申出

候者も有之、又ハ不申出者も有之候、就夫右書付

之趣与中ニ被仰渡置候儀可有之哉と段々帳内見合

候得共見当不申候、然者と帳前書有之候迄ニ而触

流者無之故、月延之儀不申出と相見得候、且又右

月延之儀早速申出者も有之候訊ハ、先年御格式

段々被仰渡候御触流之内ニ、繼目・外城養子御免

被成急二人柄難相究候ハ、月延之願申出候様ニ

と相見得申候処、右御書付之趣を老違申出事ニも

候哉、又ハ与帳前書ニ有之候を承合候而申出事ニ

も候哉と相考申候、右通之儀ニ而此跡相並不申候

間、此節右与帳前書之趣与中触流ニ仕置度存申候、

尤、此跡外城養子御免之上于今月延之願不申出者

急二人柄難相究候ハ、其訊を以早速月延之願申

出候様ニ是又可申渡候、此旨得御差図申候、以上、

〔朱書〕享保九辰  
八月七日

与頭

右之通、土持十右衛門御取次を以得御差図候伊集院藏

久延人殿より同人御取次を以伊十院十藏致承知候者、

屹と触流を以申渡ニハ及間敷候、小与頭より寄々

致通達候様ニ可申通旨被仰渡、同八月十日六与小

与頭中へ申渡候事、

写

与頭江

一 継目願又ハ継目養子之願遺言書を以親類共より願出

候節者、子并養子ニ相成者表方支配ニ而も親御側支

配之内ニ遺言書致置相果候ハ、右継目并継目養子

願遺言書を以親類共より申出候節ハ御側方へ相付可

願出候、尤、親表方支配之者之節も右同断ニ可被相

心得候、

(朱書)享保十二末

十二月

(榑山久初)

主計

写

与頭江

一家督之者相果、跡職延之願申出候節、月数を以願出

来候得共紛敷候条、右体延之願申出候者有之候節、

日数を以申出候様時々可被致差戻候、

右之通可申渡候、以上、

(朱書)享保十七子

十二月

(島津久貫)

中務

「一二番組河野太郎右衛門相果、直子無之、外城養子御

免ニ而急ニ人柄不承立候付、三ヶ月延之願申出御免

被仰付置候処、三ヶ月を九拾日と相心得月限致延引、

太郎右衛門跡親類共より御断申出候節、本文之通被

仰渡候付、与中へ致通達候、委細ハ二番日帳享保十

七子十二月十五日之座ニ留置也、」

写

一 跡職願ニ付而者御格式本文被定置候趣を以、弥向後

共無間違様可被致沙汰候、右ニ付而者享保十三申七

月染川恕庵跡職願遺言書之儀ニ付申渡趣有之候得共、

本文之通御格式為被相定置事候故、右申渡置候訳ハ

無用相成候条、書留等可被消除旨与頭江可申渡候、

以上、

(朱書)享保廿卯

五月

(島津久純)

大藏

「(行間朱書)一 染川恕庵跡職延之儀、委細ハ一番之享保十三申七月

十六日日帳之座ニ書留有之候、然共無用ニ被仰渡

候、」

一直子無之者、親類共見合を以跡職願申上候様遺言致

置、五月中相統之者難相究日數延之願申上候節、遺

組頭江

言書致置候段申上置、重而人柄見合跡職申出候節遺  
言書差出候筋ニ享保十三申七月被仰渡趣有之其通致

一家督之者二男三男類別立等之願申出候節、部屋栖之  
嫡子被処遠流候者有之、右者之子共有之候とても遠

来候処、享保二十卯五月大藏殿より中野駒右衛門御  
取次を以右通申七月被仰渡候趣者無用相成候筋被仰  
渡候付、享保五子正月廿三日<sup>（島津久家）</sup>本殿より被仰渡置候趣

流御赦免以後嫡子又者嫡孫二家督不被仰付儀も可有  
之候、然時ハ家内ニ罷在候二男三男之内家相統可致  
事候得者、右休之者別立等之願申出候節ハ氣を付遂  
吟味、其件委被申出候様可被相心得候、此段可申渡

を以左之通相伺候、

候、以上、

一 本文被仰渡置候趣を以申談候者、跡職相統之者無之

<sup>（朱書）</sup>元文元辰

六月

<sup>（島津久家）</sup>  
主殿

親類共見合を以申上候様ニ遺言致置、早速難相究候  
ハ、日數延御免之願五月中申出候砌、遺言書差出候

筋ニ被仰渡置候、左候而、右遺言書ハ被返下候様ニ

一家督之者存生ニ而罷在家統之直子無之、御当地土之<sup>（相脱カ）</sup>

有之度候、重而人柄見合遺言書を以跡職之儀奉願候

内ニも養子罷成者無之、家相禿候様ニハ難申出外城

付、無左候得ハ願書物等差出候御格式ニ相替候付、

養子願出候者御免之段、承知仕候日より月數三ヶ月

此通被仰付度候、以上、

より内ニ養子之人柄相究可申出候、万一右月限人柄

<sup>（朱書）</sup>享保廿卯  
六月六日

<sup>六手</sup>  
与頭

右之通、中野駒右衛門を以差出候処ニ被仰渡置候

難申出候も候ハ、其趣を以三ヶ月より内月延願可

御格式ニ相当候ニ付、向後其通可有之旨大藏殿よ

右之通、此節被相定候間承知仕、聊大形致間敷候、

り駒右衛門御取次ニ而伊勢兵部致承知候、尤、兵

<sup>（朱書）</sup>享保十巳  
此旨組中へ可被申渡者也、

部首尾、

五月廿三日

御家老座印

写

一 野田へ中宿鹿兒島士知覽六右衛門相果、嫡子知覽周  
八江跡職被仰付被下度旨、鹿兒島へ親類無之付而野  
田衆中親類兩人江六右衛門より致遺言書置候付、右  
遺言書ニ親類継書を以跡職之願別紙之通申出、地頭  
所へ嘸共より差出候付而於御当地周八小与頭へ右別  
紙地頭より被遺、小与頭次書を以与所へ差出候付被  
得内意候ニ付左之通可相達候、

一 右、六右衛門遺言書ニ野田衆中親類兩人継書いたし  
嘸へ可差出候、

一 嘸よりハ右書付添書致別紙ニ地頭所へ可差出候、  
一 地頭よりハ嘸添書ニ致次書周八小与頭当書ニ而遣可  
被申候、

一 小与頭より六右衛門遺言書ニ周八親類兩人致次書差  
出候書付ニ次書を以与所へ可差出候、

右者、常式遺言書親類次書を以申出候時ハ、与頭  
より其親類当書ニ而相調被相渡事之由候得共、此

節申出候知覽六右衛門遺言書之儀ハ鹿兒島へ親類  
無之、外城衆中親類より申出事候得共、外城衆中  
当書ニ而与頭継書者難成筈候間、右ケ条之通ニ書  
付相調、与所へ差出候節与頭より直月番御用人江  
可被差出候、尤、嘸添書者地頭より之次書を以小  
与頭江当書ニ而可被差遣候、紙面之儀共ハ申談、  
吟味之上宜様被相調可然候、此段内々ニ而可相達  
候、以上、

但、願書物ハ相返候、

七月

藏人

一 組中之面々家督之人相果、嫡子ニ遺言書親類宛書仕  
置候付、親類より五日中跡職願之儀、右遺言書ニ次  
書を以申出筈ニ付、右親類忌掛ニ而も本人さへ乍忌  
中跡職被仰付被下度由願出候儀御免之事候条、親類  
忌中ニ而も次書仕候儀者被差免候条、次書仕候而差  
出候節ハ、忌中ニ而候得ハ、名代ニ而可差出候由組  
頭中江將監殿より被仰渡候付、北郷宗次郎・平田新  
左衛門へ申渡候事、

但、右親類忌中ニ而致次書候ニ付而ハ不成合之事候故、將監殿江善助御尋申出候、尤、与頭より被申出訊有之、右之通被仰渡候事、

子二月五日

讚良善助

右之通被仰渡置候処、五日過候而願書差出候者有之、其訊組頭方ニ而相糺候得ハ又ハ二三日茂相滯申儀ニ候、然者向後右体之節ハ先次書仕差出、右延引之訊者跡達而相糺候而申出筋ニも可仕哉之由御尋申出候処、空殿被聞召、内記殿御相談之上右体之節者被相糺候而被致次書候而ハ猶以相滯咎候条、次書之儀者早速被致延引候儀ハ別達候而相糺、其訊可被申出由被仰渡候ニ付、島津市太夫殿へ申達候事、

取次

讚良善助

一 依願家跡不被相立候者、家被召禿と唯今迄者大形相唱、書付等ニも其通相調候得共、依科家被召禿者依願家不被相立者も家被相禿と唱、書付茂其通有之、同様相聞得如何ニ候、向後之儀者依願家跡不被立者

ハ願之通家跡不被召立と唱、書付ニも其通相調、依科家被召禿候者家被召禿と唱、書付も其通相調可申候、且又御役料米等差上度と願之者、願之通被召揚と唱、書付ニも其通相調候得共、是又依科被取揚候者同様候間、依願御役料差上候間、唱・書付等ニも其通相調候様可有之候、

（朱書）享保十八年  
六月

（島津久眞）  
中務

右之通、御役人限致承知候様寄々可申達候、以上、

一 山元八藏

山路新藏

福崎五郎左衛門

入田次郎兵衛

平田藤兵衛

田中喜阿弥

丸田為碩

二階堂与右衛門

児玉十郎太

大脇平右衛門

右之者共相果、直子無之、繼目養子ニ罷成者不承立候ニ付而跡職延之願親類共申出置候、右付而此節拾式ヶ月延置候条、其内随分無油断跡養子相究可申出候、右月数ニも不相究、何之詮ニ不相立儀ニ而又々跡職延之願申出候而も願取揚間敷候、

一 川島藤左衛門

高崎正右衛門

木尾筑右衛門

右之者相果、前条同断跡職延之願親類共申出置候、右二付而此節廿四ヶ月延置候条、其内随分無油断跡養子相究可申出候、右月数二も不相究、何ぞ詮二不相立儀二而又々跡職延之願申出候而も願取揚間敷候、右之通申渡、右月数之内随分無油断跡職相究候様

時々被申付、何ぞ詮不相立儀二而又々延之願申出候而も願取揚間敷候、乍然家二付而功も有之候ものハ可及吟味事候間可被申出候、右通之功茂無之、何ぞ詮二不相立儀二而延之願申出候ものハ願不取

揚事候得とも、内意二而可被得差<sub>内膳</sub>旨可申渡候、

(朱書)寛保三亥  
十月

(願姓久固)  
内膳

「一本文仰渡之儀、本文人数二限候而為被仰渡事二候故、

此已後跡職月数十二ヶ月・式拾四ヶ月延被仰付置、

右月数筈合候得共養子不承立候ハ、其趣を以何様可仕候旨得御内意候様大藏殿より被仰候由二而、延享四年卯二月五日新納次郎兵衛御取次口達を以被仰渡、島津主水致承知候付以後為見合記置候事、」

右人数相果、直子無之跡職延之願申出置候二付、

高・屋敷書記可被差出旨義岡左平太取次二而種子島彈正致承知、相糺差出候処二、寛保三年亥十月十四日蒲生<sup>(清高)</sup>十郎左衛門取次二而右之通被仰渡、新納五郎左衛門致承知、同日同人取次二而、已後右体之者跡職延之願申出候節ハ、何様首尾可仕哉之旨御尋申上候処、得御差<sub>内膳</sub>候ハ、十二ヶ月・式拾四ヶ月延御見合を以可被仰旨被仰渡候付、此内之通親類書物二遺言書相添、高・屋敷有無之訳為書記差出筋二申談候、高・屋敷有之ものハ十二ヶ月、無高・無屋敷之ものハ式拾四ヶ月被召延置御格二相見得候付、以後為見合記置候、尤、遺言書之儀八月延被仰付候節被召下、養子見合申出候節此内之通首尾致筈也、

一福崎長右衛門事、福崎孫次右衛門継目聳養子被仰付置候処二、直兄大脇平右衛門相果、直子無之跡相統仕者双方親類申談、本家へ帰參之願大脇家親類共より申出候処、義岡佐平太取次二而左衛門殿より相良八郎次本家へ帰參之願申出候節之通可申出させ旨北

郷作左衛門致承知候、右八郎次婦參之節とハ養子違  
變之通双方親類書物ニ互二兩人ツ、乗候而差出筈ニ  
候事、

写

組頭江

一 渡辺作左衛門儀、本渡辺名字権右衛門叔父ニ而権右  
衛門家内ニ罷居候処、権右衛門事、依科名跡被召禿、  
作左衛門儀ハ無御構段被仰渡置候間、此間別立之願  
申出候得共、別立不被仰付候段先達而申渡置候、右  
体之者向後別立不被仰付候条、右体之願申出候節ハ  
右之心得を以被致吟味候様ニ可申渡候、

(朱書)延享二丑  
五月

(北条時守)  
織部

写

一 跡職延引御断書物之儀、若御年寄方ニ而ハ首尾難致  
訳有之候間、御家老衆御方へ可被逐披露旨去ル丑九  
月申渡有之候得共、向後右体御断申出候節ハ、頭御  
家老衆へ被申上候而若御年寄方へ書物可被差出候、

右之通帳面被記置、無間違様可被致首尾旨組頭へ  
可申渡候、  
(朱書)明和元年  
七月

(小松清春)  
式部

一 別立居候弟之儀養子杯ニ遣候節、実弟と可申出旨明  
和元年申十一月式部殿より町田郷九郎致承知候事、

写

一 其身代別立、家跡者不被召立筋願申出、養子并繼目  
養子ニ罷成居候者違變願親類書物ニ実方何某二男三  
男弟等之訳不書記差出候茂有之候間、向後右之趣不  
相記差出候人も候ハ、右件書入させ候様可被致旨  
六与組頭へ申渡、御用人中ニも承置候様可申渡候、

(朱書)明和三戊  
八月

(權山久智)  
左京

本渡辺名字之権右衛門家内叔父  
渡辺作左衛門

右、権右衛門事、依科名跡被召禿候、右作左衛門家  
内ニ而罷居、親族御咎目無之者ニ候得共、右体之者  
ハ別立并養子成・御奉公方向後不被仰付候、已後士

名跡被召禿候者、家内ニ罷居候者ハ親族御咎目有無不依組帳高帳可被相除候、右次第ニ候得ハ親類家内ニ入置家来同然之者ニ候、名字名乗候儀ハ無御構旨被仰渡候条、諸事如例可被申渡旨（鳥津久恵）左衛門殿御差図

二而候、以上、

（朱書）延享二丑

六月廿四日

（久中）  
義岡左平太

（四一七頁文書）「家督之者二男三男」に同じ、本文略

一 其身代別立居跡被召禿候筋申出候節ハ、向後不被召立筋と可申出候、禿之字相用間敷旨將監殿より新納四郎致承知候、為見合記置候事、

未閏六月廿一日

一 田尻嘉兵衛家内叔父田尻四郎左衛門事、別立之願右嘉兵衛幼少故親類北郷喜三次より申出候付、例之通致次書願人江相渡、願人より差出置候処願之通御免被仰付候、然処嘉兵衛儀、亡父繼目迄者被仰付置候得共、未繼目之御礼不相濟候故、家内叔父別立御免

不被仰付事候由二而、四郎左衛門別立御取返ニ相成候、以後家部之者繼目家督之御礼不相濟内ハ右体之願取揚間敷旨、空殿より口達ニ而肝付彈正致承知候事、

（朱書）宝曆四戊

四月

（行間朱書）

「一本行ニ付頼娃内膳より將監殿江御尋申上候ハ、家部之者御礼不相濟内ハ家内別立願出間敷と被仰渡置候儀ハ無之候、右願者七八才計ニ罷成候比よりも願可申出哉と申上候処、家部之者繼目・家督等之御礼相濟居候ハ、十五六才より以上ニ罷成候節、高・屋敷ニ而も致分地只度旨了簡も出候程ニ成候砌願可申出候、且又年長ケ候者ニ而も分地いたし只度と不存人も有之筈候得共、先ツ右通之了簡ニも及候比ニ罷成候節、以後ハ願書可差出旨此節被相究候旨宝曆四戊四月十四日致承知候事、」

一 四番与矢野助五郎家内大叔父矢野次郎太別立願ニ付幼少故親類共より申出趣有之、式部殿江鳥津小平太より書付を以得御内意候処別立忝通親類共より本式

之通可願出由二而書物被相下候、

（行間朱書）

「一本行二付、前条朱之旨趣旨已後致無用可消除候、尤、

繼目・家督等之御礼さへ相濟候ハ、家督之者幼少二

而も親類共より願出候筋ニ可致旨、宝曆六年子五月

十七日式部殿より小平太致承知候、委細之儀者四番

与日帳留有之候得共為見合記置也、」

一江戸詰之人何様之訳も不相知、不凶切腹又者致自害

相果、於江戸跡職之儀者何様可仕哉之旨同宿之者又

者親類共より申上、於御国元願申出候様ニと被仰渡、

左候而、国元親類共より願出候者先程頭より変死之

訳得御差図何分と被仰渡候節願申出筋可然旨、有川

（貞利）

幸右衛門御取次ニ而延享四卯十二月二日祢寝孫左衛

門致承知記置也、

（行間朱書）

「一本文之通於江戸致変死候者首尾方致咎候処、此節三

番与永山彦太郎事、於江戸致自害相果候付、御国元

親類共より跡職延之願書差出候付、本文之通首尾方

致候処ニ、変死者之儀ニ付而ハ於御国許致変死候者

同様之致首尾、可然旨同役中申談、相馬殿江喜入安

次郎得御差図候処、其通二而可然旨致承知候間、右

体之書物差出候節者於御国元致変死候者願書同様致

首尾咎也、

宝曆二年申五月廿四日」

一三番与家督有川藏右衛門、渡辺仲兵衛致喧嘩相果候

付、親類共遂置、翌月跡職之儀得御差図候付、御用

番兵部殿へ喜入安次郎より遂披露候所、ケ様成儀ハ

最初御首尾之方へ申出方共二而ハ無之哉と致承知候

得共、有少事故同席中申談候処、最前披露不被聞召

御方ニ而ハ難被成御差図咎候故、典膳殿江申出方可

（鎌田致目）

然旨申談其訳申上候所、典膳殿書物被受取置候、然

者已後共右式一事ニ付月を隔申出候儀ハ最前御首尾

之方ニ申出方ニ祢寝孫左衛門・鳥津助之丞・喜入安

次郎申談候間、以後共右通致首尾咎候、為見合記置

候事、

（朱書）宝曆二申

十二月

一三番与永吉惣兵衛遺言書相調置致変死、跡職之願申

出候節、遺言書ニ親類共致次書差出候付、早晚之通  
与頭奥書ニ而願人江相渡、月番御用人江差出置候処  
ニ、將監殿より右次第願出候付而者宜有之候哉、又  
者変死之儀ニ候得共、遺言書有之候而も親類共前ニ  
差控置、親類とも願書物迄ニ而差出筋可然哉、此段  
屹致沙汰儀ニ而ハ無之候得共、何分致吟味可申出旨  
御用人相良弥一兵衛御取次口達ニ而喜入主馬致承知  
候、組頭中寄合申談候者向後致変死候者、遺言書調  
置候而も右ニ無構親類とも願書物迄ニ而可然と弥一  
兵衛へ主馬より口達ニ而申出置候、左候而、惣兵衛

跡職願者申下ケ、遺言書差控親類共願書物迄ニ而差  
出候付、与頭奥書ニ而願人江相渡候、以後為見合記

置候事、

(朱書)宝曆四戊

七月

一

二番組 (マ)

細田武左衛門跡

右者相果、直子無之付跡職延之願及四度申出候ニ付  
致首尾書差出候処、式部殿より二番組頭町田郷九郎  
致承知候者、跡職延及四度申出候ハ、組頭より致吟

味書被差出答ニ而ハ有之間敷哉之旨致承知相糺候処  
ニ、一番組河俣五郎右衛門・山路太次右衛門跡職延  
之願及四度申出候処、組頭より不致吟味書差出相濟  
居候付、右通先例御座候間其通ニ而差出候旨郷九郎  
より申出候処、又々式部殿より被仰候者、先例ニ吟  
味書不致被差出候儀別而首尾悪敷候間、向後右通之  
願申出候節者組頭より致添書可被差出候、此節細田  
武右衛門跡職願より致吟味書可差出旨郷九郎致承知  
候、以後右体之願申出候ハ、其節之吟味之趣書付  
を以申出答候、

(朱書)宝曆六子

七月

写

一家督之者ニ而も依願妻子召列嫡家本家継目養子ニ相  
成、其身家跡ハ二男三男之内江願申出候節、跡々願  
書之認様不相並候条、向後者家跡相続と願出候様可  
被相心得候、

右之通、与頭へ申渡、帳面等も其通可相調旨可承  
面々江可申渡候、

〔朱書〕明和六丑〔朱書〕  
三月「十日」

〔島津入金〕  
左中

写

一実子を他家へ養子等二遣置、実父相果本家帰、且叔父より甥之跡職願申出候節、跡々繼目養子（申出脱カ）と候得共、向後者跡相統と願出候様可被相心得候、

右之通、与頭へ申渡、帳面等も其通可相調旨可承

面々江可申渡候、

〔朱書〕明和八卯〔朱書〕  
五月「廿三日」

〔小松清香〕  
帯刀

一座付士之者を表方士之養子願申出候ハ、右外城養子之格を以相調可被申出候、

（以下の文章に見消あり）  
右之通被相心得入念相調候上可遂披露候、初而地

頭職被仰付候人者委細之儀不存、所役人共申口二

まかせ証文出儀も可有之候間、是又可被入念候、

少も疑敷儀於有之者時々可被得内意候、尤、此趣

帳面二書留置候迄二而者後年吟味之不足も可有之

候間、同役被仰付候節ハ（以下欠）



